

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第 56 集

くろ ざ さ ごう こ よう せ き
黒笹40・89号古窯跡

くろ ざ さ ごう こ よう せ き
黒笹 G 2 号古窯跡

た ち く す こ よ う せ き
立 楠 古 窯 跡

1994

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

序

日本人にとって日常生活に欠かすことのできない食器としての陶器生産が、ここ愛知県では古来より盛んでした。現在も瀬戸市を中心として陶磁器生産が盛んで、全国的にも「せともの」として親しまれています。また、高浜市を中心とした瓦生産、常滑市を中心とした土管生産も有名で、現在は、タイル生産の本拠地として、常滑の伝統は生かされています。

このたび、本センターでは県内の三古窯跡を発掘調査する機会を得ました。事業者は異なりますが、時代と地域の異なる古窯跡を一つ一つ克明に記録していく作業は、本県のやきもの生産の源郷をたどって行くことでもあります。

黒笹40号古窯跡・黒笹89号古窯跡は、愛知県土木部による県道豊田・知立バイパス建設に伴う事前調査として、また、黒笹G2号古窯跡は、愛知県企業庁による内陸用地造成に伴う事前調査として、愛知県より委託を受けて実施したものであり、そして立楠古窯跡については、愛知県道路公社による知多中央道拡幅工事に伴う事前調査として実施したものであります。

これらの調査の記録をより有効に活用させて行くことが、文化財保護の一翼を担っている私たちに課せられた責務であると考え、ここにその調査成果をまとめ、報告書を刊行することになりました。本書が広く歴史研究に活用されると共に埋蔵文化財に対するご理解の一助ともなれば幸いです。

最後に、調査の実施に当たりまして、地元の方々を初め、関係者及び関係機関からご協力のご指導をいただきましたことに深く感謝申し上げます次第であります。

平成6年3月

財団法人愛知県埋蔵文化財センター
理事長 高木 鐘三

くろ ざさ 40 号 89 号 古 窯 跡
黒笹40号・89号古窯跡

1994

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

巻頭図版1 遺跡遠景（上段 南より；下段 西より）



卷頭図版2 窯体全景（上段・黒笹40号窯跡：下段・黒笹89号窯跡）



例 言

1. 本書は愛知県西加茂郡三好町大字黒笹字根浦に所在する黒笹40号・89号窯跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は県道豊田知立バイパス建設に伴う事前調査として実施し、愛知県土木部からの愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成4年10月から平成5年1月まで財団法人愛知県埋蔵文化財センターが行った。調査面積は2100㎡である。
3. 調査は、野本欽也（主査）、杉浦 茂（調査研究員）、小澤一弘（調査研究員）が担当し、岡 裕子氏の協力を得た。
4. 調査にあたっては次の各関係機関の御協力を得た。

愛知県教育委員会文化財課、愛知県埋蔵文化財調査センター、愛知県陶磁資料館、
愛知県土木部、三好町教育委員会、三好町立歴史民俗資料館、
財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
5. 調査、報告書の作成にあたっては次の方々の御教示、御協力があった。

浅野晴樹、赤羽一郎、伊藤 稔、伊藤嘉章、井上喜久男、遠藤才文、荻野繁春、尾野善裕、
梶山 勝、後藤建一、斎藤孝正、斎藤 理、酒井清治、柴垣勇夫、城ヶ谷和広、住田誠行、
仲野泰裕、檜崎彰一、高橋照彦、服部敬史、福田健司、藤澤良祐、前川 要、松井孝宗、
松原隆治、安田幸市、渡辺博人 (五十音順、敬称略)
6. 黒笹89号窯跡出土遺物の中で第37図1～3、6～14、第38図については斎藤孝正氏より、第37図4・5、第62図については井上喜久男氏より、各原図の提供を受けた。
7. 黒笹40号・89号窯の窯体実測図と窯体断面実測図のうちアミフセで囲んだ図は、黒笹40号窯跡については昭和32年3月刊行の『愛知県猿投山西南麓古窯址群』より、黒笹89号窯跡については昭和33年3月刊行の『愛知県猿投山西南麓古窯址群』よりの転載トレースである。
8. 報告書作成に関わる整理作業は平成5年度に実施し、次の方々の協力を得た。

岩崎繁子、大谷ひとみ、河合明美、加賀良子、木全淑子、小井節子、小島洋子、後藤美子、
杉山美智子、須田カツミ、日栄智子、洞地恭子、水野里美、光岡香代子、山川和子、山本磨美、
吉田恒美 (五十音順、敬称略)
9. 出土遺物の写真撮影については深川 進氏の手を煩わせた。
10. 本書の執筆は、第1章については野本欽也、第2章第1節から第3節、第3章については小澤一弘が担当し、第2章第4節の熱残留磁気による考古地磁気測定については富山大学理学部地球科学教室の広岡公夫教授、田中彰子氏、堀田暁子氏によるものである。なお編集は小澤一弘が担当した。
11. 出土遺物の登録番号は挿図の通し番号をこれに当てた。
12. 調査記録の座標は、国土座標第VII系に準拠する。
13. 調査記録及び出土品は愛知県埋蔵文化財調査センターに保管している。

目次

第1章 立地と調査経過

第1節 位置・立地・歴史的環境

1. 位置……………1
2. 立地……………1
3. 歴史的環境……………2

第2節 調査の経緯と経過

1. 調査史……………3
2. 調査経緯……………3
3. 調査経過……………4

第2章 遺構と出土遺物

第1節 概要……………5

第2節 黒笹40号窯跡

1. 灰原……………8
2. 窯体……………9
3. 出土遺物……………12

第3節 黒笹89号窯跡

1. 灰原……………40
2. 窯体……………40
3. 出土遺物……………43

第4節 熱残留磁気による考古地磁気測定……………80

第3章 まとめ

第1節 分析の方法……………85

第2節 黒笹40号窯跡……………85

第3節 黒笹89号窯跡……………90

図版目次

図版 1	調査区全景	100
図版 2	調査区全景	101
図版 3	黒笹40号窯跡窯体全景	102
図版 4	黒笹89号窯跡窯体全景	103
図版 5	黒笹40号窯跡出土遺物 (1) 杯蓋・杯A・杯B・椀A	104
図版 6	黒笹40号窯跡出土遺物 (2) 椀A・椀B・椀C・盤・高盤・鉢・浄瓶・水瓶	105
図版 7	黒笹40号窯跡出土遺物 (3) 長頸壺・双耳瓶蓋・双耳瓶・甕	106
図版 8	黒笹40号窯跡出土遺物 (4) 環状耳付長頸壺・短頸壺・獸足・形象硯蓋・硯・小形品・ へら状道具	107
図版 9	黒笹89号窯跡出土遺物 (1) 椀	108
図版10	黒笹89号窯跡出土遺物 (2) 椀・皿・段皿・瓶・長頸瓶・環状耳付長頸瓶・短頸壺	109
図版11	黒笹89号窯跡出土遺物 (3) 素地：椀・稜椀・稜皿・段皿	110
図版12	黒笹89号窯跡出土遺物 (4) 素地：段皿・輪花皿・陰刻花文椀	111
図版13	黒笹89号窯跡出土遺物 (5) 素地：陰刻花文手付瓶・香炉・香炉蓋・唾壺・陰刻花文椀・ 陰刻花文皿	112
図版14	黒笹89号窯跡出土遺物 (6) 素地：陰刻花文稜椀・陰刻花文稜皿・陰刻花文皿	113

挿図目次

第1図	三好町位置図	1
第2図	周辺の窯跡分布図	1
第3図	黒笹40号・89号窯跡の位置図	2
第4図	地形測量図	3
第5図	調査区配置図	5
第6図	黒笹89号窯跡地形測量図	6
第7図	黒笹40号窯跡地形測量図	7
第8図	黒笹40号窯跡灰原土層断面図	8
第9図	黒笹40号窯跡窯体実測図	10
第10図	黒笹40号窯跡窯体断面実測図	11
第11図	黒笹40号窯跡出土主要器種分類図(1)	12
第12図	黒笹40号窯跡出土主要器種分類図(2)	13
第13図	黒笹40号窯跡出土遺物実測図(1) 杯蓋	16
第14図	黒笹40号窯跡出土遺物実測図(2) 杯蓋・杯A・杯B	17
第15図	黒笹40号窯跡出土遺物実測図(3) 杯B	18
第16図	黒笹40号窯跡出土遺物実測図(4) 杯B	19
第17図	黒笹40号窯跡出土遺物実測図(5) 椀A	20
第18図	黒笹40号窯跡出土遺物実測図(6) 椀B	21
第19図	黒笹40号窯跡出土遺物実測図(7) 盤B	23
第20図	黒笹40号窯跡出土遺物実測図(8) 高盤	24
第21図	黒笹40号窯跡出土遺物実測図(9) 鉢A・鉢B	25
第22図	黒笹40号窯跡出土遺物実測図(10) 鉢C・大形浅鉢	26
第23図	黒笹40号窯跡出土遺物実測図(11) 浄瓶・水瓶・長頸瓶	28
第24図	黒笹40号窯跡出土遺物実測図(12) 長頸瓶	29
第25図	黒笹40号窯跡出土遺物実測図(13) 長頸瓶	30
第26図	黒笹40号窯跡出土遺物実測図(14) 長頸瓶・平瓶	31
第27図	黒笹40号窯跡出土遺物実測図(15) 双耳瓶蓋・双耳瓶	32
第28図	黒笹40号窯跡出土遺物実測図(16) 環状耳付長頸瓶・短頸壺	33
第29図	黒笹40号窯跡出土遺物実測図(17) 短頸壺蓋・獸足・形象硯蓋・硯	34
第30図	黒笹40号窯跡出土遺物実測図(18) 小形製品各種	35
第31図	黒笹40号窯跡出土遺物実測図(19) 甕	36
第32図	黒笹40号窯跡出土遺物実測図(20) 各種窯道具	37
第33図	黒笹40号窯跡出土遺物実測図(21) 近世陶磁器	39
第34図	黒笹89号窯跡灰原土層断面図	40

第35图	黑笹89号窯跡窯体実測図	42
第36图	黑笹89号窯体断面実測図	43
第37图	黑笹89号窯跡前回調査出土遺物実測図 (1) 鉢・播鉢・風字硯・陶鎮・甕・甌・火舎・ 双耳壺・蓋・小瓶・香炉蓋・香炉	46
第38图	黑笹89号窯跡前回調査出土遺物実測図 (2) 窯体内：椀・皿	47
第39图	黑笹89号窯跡出土遺物実測図 (1) 椀	48
第40图	黑笹89号窯跡出土遺物実測図 (2) 椀	49
第41图	黑笹89号窯跡出土遺物実測図 (3) 椀	50
第42图	黑笹89号窯跡出土遺物実測図 (4) 椀・皿・耳皿・輪花皿	51
第43图	黑笹89号窯跡出土遺物実測図 (5) 皿	52
第44图	黑笹89号窯跡出土遺物実測図 (6) 段皿・手付瓶	53
第45图	黑笹89号窯跡出土遺物実測図 (7) 長頸瓶・環状耳付長頸瓶・浄瓶・小瓶・双耳壺・ 大椀・短頸壺・播鉢	54
第46图	黑笹89号窯跡出土遺物実測図 (8) 甕・須恵器椀・各種窯道具	55
第47图	黑笹89号窯跡出土遺物実測図 (9) 窯道具	56
第48图	黑笹89号窯跡出土遺物実測図 (10) 窯道具	57
第49图	黑笹89号窯跡出土遺物実測図 (11) 素地：椀	60
第50图	黑笹89号窯跡出土遺物実測図 (12) 素地：椀	61
第51图	黑笹89号窯跡出土遺物実測図 (13) 素地：椀	62
第52图	黑笹89号窯跡出土遺物実測図 (14) 素地：稜椀	63
第53图	黑笹89号窯跡出土遺物実測図 (15) 素地：稜皿・皿	64
第54图	黑笹89号窯跡出土遺物実測図 (16) 素地：段皿・輪花段皿	65
第55图	黑笹89号窯跡出土遺物実測図 (17) 素地：輪花椀・香炉	66
第56图	黑笹89号窯跡出土遺物実測図 (18) 素地：托・唾壺・手付小瓶・手付瓶	67
第57图	黑笹89号窯跡出土遺物実測図 (19) 灰釉：蓮弁文椀・凸帯文瓶、素地：椀・段皿・托	69
第58图	黑笹89号窯跡出土遺物実測図 (20) 素地：陰刻花文椀	70
第59图	黑笹89号窯跡出土遺物実測図 (21) 素地：陰刻花文椀	71
第60图	黑笹89号窯跡出土遺物実測図 (22) 素地：陰刻花文椀	72
第61图	黑笹89号窯跡出土遺物実測図 (23) 素地：陰刻花文稜椀	73
第62图	黑笹89号窯跡出土遺物実測図 (24) 素地：陰刻花文稜皿・皿・輪花皿・輪花椀・ 陰刻花文手付瓶・香炉蓋	74
第63图	黑笹89号窯跡前回調査出土遺物実測図 (3) 素地：稜椀・五輪花椀・陰刻花文五輪花・椀・ 香炉・皿・五輪花段皿・陰刻花文稜皿・ 陰刻花文手付瓶	75
第64图	黑笹89号窯跡出土遺物陰刻花文拓影 (1)	76
第65图	黑笹89号窯跡出土遺物陰刻花文拓影 (2)	77
第66图	黑笹89号窯跡出土遺物陰刻花文拓影 (3)	78

第67図	黒笹89号窯跡出土遺物陰刻花文拓影（4）	79
第68図	試料採取地点図	80
第69図	西南日本の考古地磁気永年変化と黒笹40号・89号窯跡の考古地磁気測定結果図	81
第70図	黒笹40号窯跡出土遺物器種組成図	87
第71図	黒笹40号窯跡出土杯蓋の法量図	88
第72図	黒笹40号窯跡出土杯類の法量図	88
第73図	黒笹40号窯跡出土椀類の法量図	88
第74図	黒笹40号窯跡出土盤の法量図	88
第75図	猿投窯における時期別生産比較図（1）	89
第76図	黒笹89号窯跡出土遺物器種組成図	92
第77図	黒笹89号窯跡窯内出土灰釉椀・皿の法量図	93
第78図	黒笹89号窯跡出土灰釉椀、素地椀の法量図	93
第79図	黒笹89号窯跡出土灰釉皿の法量図	93
第80図	黒笹89号窯跡出土素地稜皿・皿の法量図	93
第81図	黒笹89号窯跡出土素地稜椀の法量図	94
第82図	黒笹89号窯跡出土須恵器、灰釉陶器、緑釉素地における器種割合図	94
第83図	熊ノ前古窯址群第1地区出土灰釉椀・素地椀・花文椀の法量図	95
第84図	熊ノ前古窯址群第1地区出土素地稜椀・花文稜椀の法量図	95
第85図	熊ノ前古窯址群第1地区出土灰釉皿・花文皿の法量図	95
第86図	熊ノ前古窯址群第1地区出土素地稜皿・花文稜皿の法量図	95
第87図	猿投窯における時期別生産比較図（2）	96
第88図	花文割付図	96
第89図	黒笹89号窯跡出土陰刻花文集成図	97

付表目次

第1表	黒笹40号窯跡のNRMの磁化測定結果	82
第2表	黒笹40号窯跡の50Oe消磁後の磁化測定結果	82
第3表	黒笹40号窯跡付属焼土のNRMの磁化測定結果	82
第4表	黒笹40号窯跡付属焼土の50Oe消磁後の磁化測定結果	82
第5表	黒笹89号窯跡下層床のNRMの磁化測定結果	83
第6表	黒笹89号窯跡下層床の50Oe消磁後の磁化測定結果	83
第7表	黒笹89号窯跡上層床のNRMの磁化測定結果	83
第8表	黒笹89号窯跡上層床の50Oe消磁後の磁化測定結果	83
第9表	黒笹40・89号窯跡の考古磁気測定結果	83
第10表	黒笹40号窯跡出土遺物集計表	86
第11表	黒笹89号窯跡出土遺物集計表	91

第1章 立地と調査経過

第1節 位置・立地と歴史的環境

1. 位置

黒笹40号・89号窯跡は、西加茂郡三好町大字黒笹字根浦に所在し、遺跡は北緯35°6・31・、東経137°5・25・にあり、名古屋鉄道豊田新線黒笹駅の南西2kmの所に位置する。

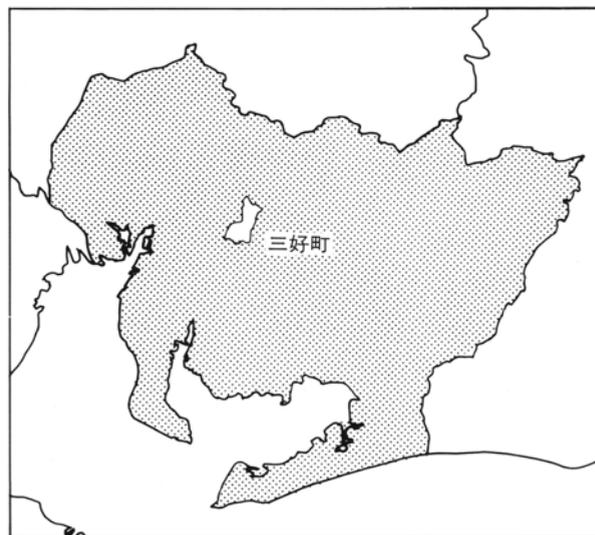
三好町は、愛知県のほぼ中央、名古屋市と豊田市の間に位置する総面積32km²、人口33,000人の豊かな自然に囲まれた町である。

昭和33年の町制施行以来、積極的な工業誘致施策と住宅建設を進め、純農村から内陸工業地域の一翼を担うまでに発展してきた。昭和54年に開通した名古屋鉄道豊田新線は、三好ヶ丘ニュータウンの造成、愛知大学の誘致をも可能にした。また、平成2年には国道153号豊田西バイパスが開通し、さらに平成5年3月には東名三好インターチェンジが開通して、道路交通網の整備も着実に進んでいる。

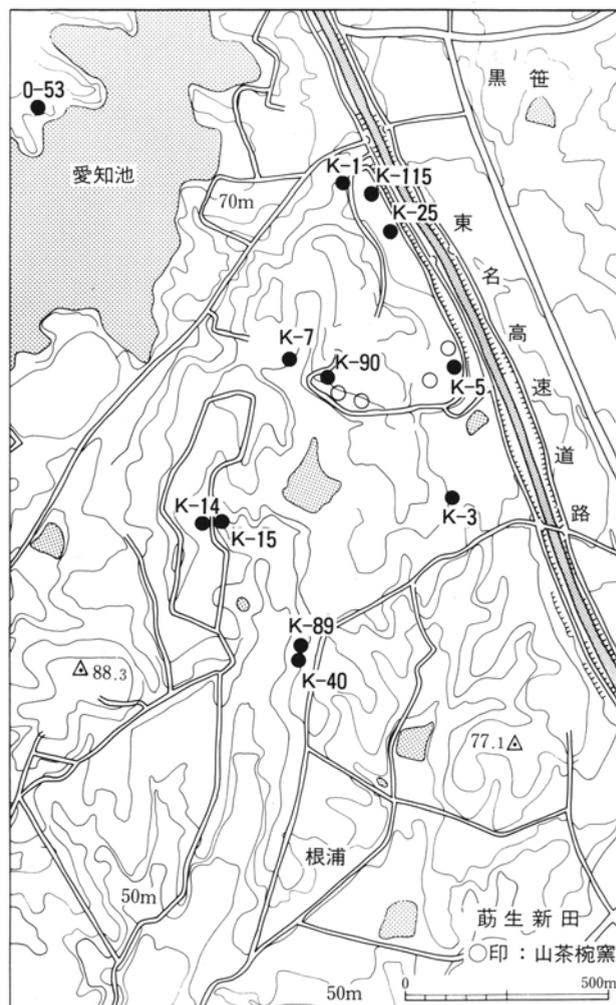
このような開発によって、町域各所に広がっていた丘陵地形は急速に消失しつつある。本遺跡の周辺には旧来の地形が残されているが、今次の道路建設により、一帯の開発が進展していくものと推測される。

2. 立地

黒笹40号窯跡と黒笹89号窯跡は、大山と呼ばれる標高117.5mの丘陵から派生する4つの支丘上の一つの米ヶ廻間谷の東斜面の中腹に位置している。黒笹40号窯跡は米ヶ廻間谷の中央やや北寄りの東側、標高76m前後の西斜面中腹に位置している。全体が雑木林に被われており、比較的良好、往時の景観が保たれていた。斜面下の谷部は現在水田として耕



第1図 三好町位置図



第2図 周辺の窯跡分布図

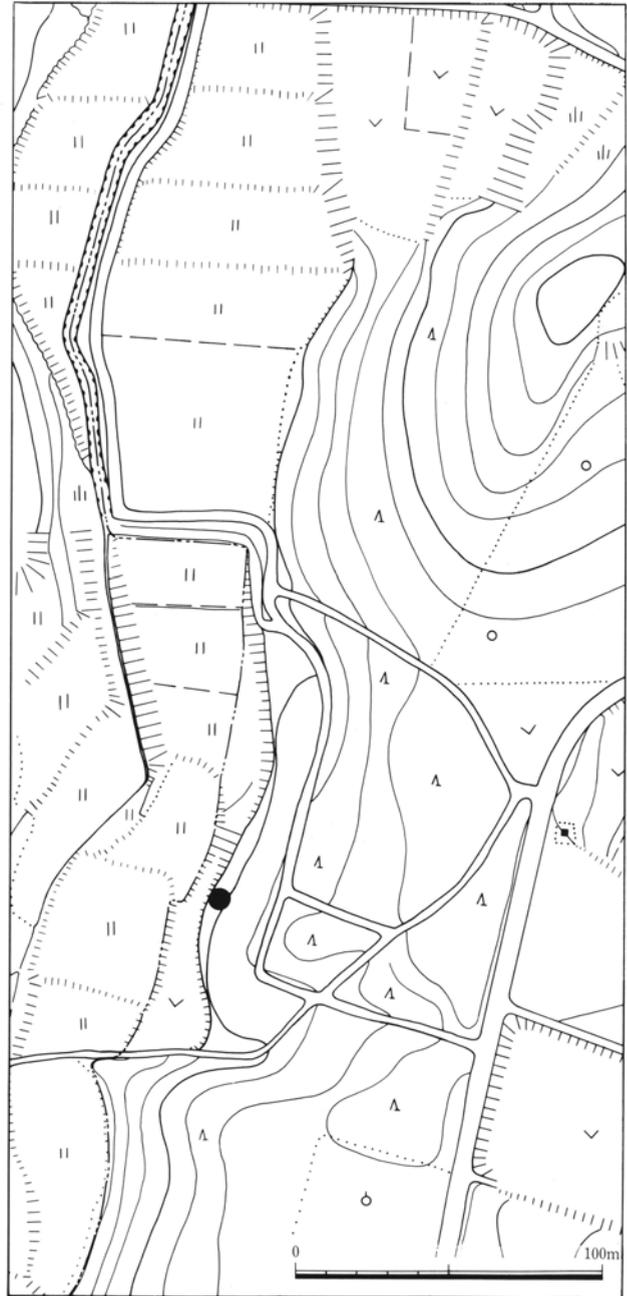
作されている。斜面の末端部に斜面に沿って南北に幅50cm位の用水溝が近年設置され、灰原の一部が掘り返されていた。黒笹89号窯跡は黒笹40号窯跡の北20mの所に位置している。すなわち谷の上方20mの位置に当たる。さらに黒笹89号窯跡の北側には小さな谷が入り込んでいるため、窯体の主軸は黒笹40号窯跡と異なって、北北西に向いている。

3. 歴史的環境

三好町は町域のほぼ全域が猿投山西南麓古窯跡群の黒笹地区に含まれている。町域では、これまでに140基ほどの古窯の存在が確認されており、それらは、古代の須恵器・灰釉陶器窯約80基、中世の山茶碗窯約60基に分類される。

黒笹地区において継続的な窯業生産が始まったのは8世紀代に入ってからである。最も古い段階に位置付けられているのが黒笹91号窯で、黒笹40号窯はそれに続く古窯である。そして、9世紀に入ると本格的な灰釉生産が開始され、米ヶ廻の谷に面する黒笹89・90号窯跡は猿投窯編年のタイプ・サイトとなっている。

本遺跡は既述の通り、米ヶ廻間谷の西向斜面上に位置しているが、幅約80mの谷を挟んだ反対側の丘陵東向きには山茶碗窯である黒笹G-28号窯跡が所在する。また、谷を北にさかのぼった地点には黒笹89号窯跡と同時期で灰釉陶器生産最盛期の黒笹90号窯跡が位置する。黒笹90号窯跡は愛知大学敷地内にあり、昭和62年の新キャンパス造成に当たって、保全域に含めるよう取り扱われ、現在盛土保存されている。さらに、本遺跡の北北西の方向800mには窯体の露出展示保存が図られている黒笹7号窯跡（東郷町）がある。黒笹7号窯跡は9世紀前後に位置付けられるもので、県史跡に指定され、県における古窯の窯体露出展示保存のモデルケースともなっている。



第3図 黒笹40号・89号窯跡の位置図 (●印)

第2節 調査の経緯・経過

1. 調査史

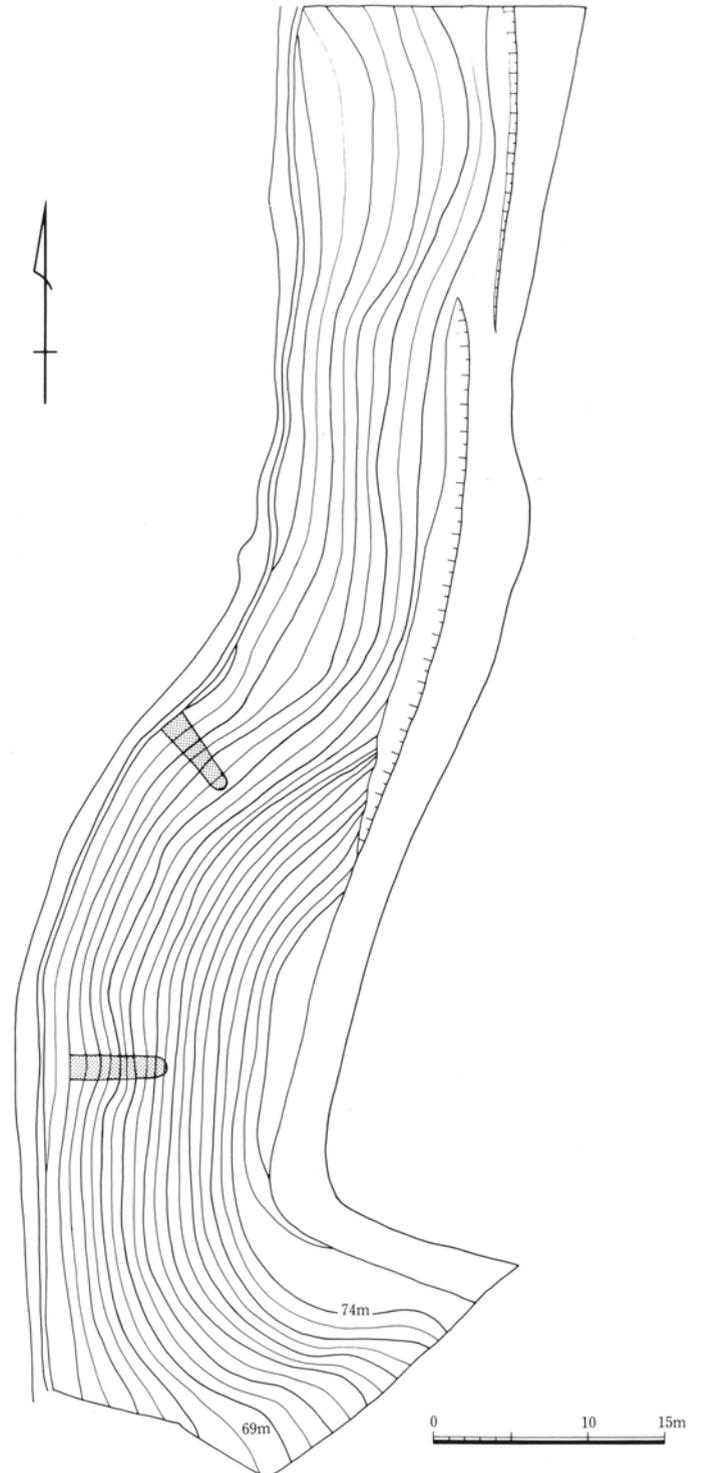
黒笹40・89号窯跡の調査は、愛知用水工事に関連して昭和30年11月から着手された猿投山西南麓古窯跡群調査の一環として行われた。調査概要報告書は、昭和32・33年に『愛知県猿投山西南麓古窯址群』として愛知県教育委員会から刊行されている。この調査は県教委から委託を受けた名古屋大学考古学研究室が行ったものであるが、窯業生産史研究の先駆となったばかりでなく、考古学の対象領域を歴史時代にまで広げていく上で、大きな意味を持った。

昭和30・31年度調査の時点では、調査対象が専ら窯体部分に限定されており、灰原部分全域にまで及んでいなかった。今次の調査では、道路造成区域が両古窯の全体に及んだため、周辺の関連施設の存在も含めた全容解明が必要になったのである。

2. 調査に至る経緯

平成3年5月愛知県土木部から県教育委員会に事業実施に伴う遺跡有無の紹介があり、県教育委員会は平成3年7月に町教委と共に分布調査を実施した。その結果黒笹40号窯跡と黒笹89号窯跡が道路建設予定地にあることが判明し、協議の結果、道路線形を変えて現状保存を図ることは全く困難であると判断され、記録保存やむ無しとされるに至った。これにより平成4年度本センターは、県教育委員会を通じた県土木部からの委託事業として発掘調査を実施した。

今回の調査は県道豊田知立バイパス建設に伴う事前調査として実施したものである。両古窯跡はすでに昭和31・32年に発掘調査が行われていたため、窯体については再調査となった。しかし、今回は窯に付属する施設・灰原の確認をも併せて調査する必要があるため、2100㎡を調査対象とした。調査期間は平成4



第4図 地形測量図

年10月から5年1月であった。

3. 調査方法と経過

灰原及び関連施設を把握するため、2100㎡の調査区を設定した。まず、発掘調査に先立ち丘陵斜面全体を対象に縮尺100分の1の現況地形測量図作成（第4図）を行った。

遺構検出に当たっては、調査区内に平面直角座標第Ⅶ系に基づいて5mグリッドを設定し、このグリッドに従って発掘調査を進めることとした。

調査は平成4年10月14日より開始した。立木伐採を10月21日に終え、10月29日より地形測量を開始し、11月2日に終了した。11月4日より重機を用いて、表土の掘削を行った。11月6日より基準杭設置及びグリッドの設定を開始した。黒笹40号・89号窯跡とも窯体の位置は確認ができたために作業員を投入して、11月18日より本格的に黒笹40号窯跡の検出に取りかかった。11月24日より黒笹89号窯跡の調査にも着手し、12月14日より灰原確認の調査のためのトレンチを水田面に入れる。この結果、黒笹40号窯跡の場合は、灰原の一部が良好な状態で残っていることが確認でき、さらに灰原の広がりもほぼ確定できた。この灰原部分から多くの遺物が出土した。平成5年1月12日に航空測量を実施した。1月18日に富山大学広岡公夫教授による熱残留磁気測定資料の採取を実施した。1月22日に調査すべてを終了し、遺物・道具等の撤去を行った。

発掘調査に参加された方々

青木和子、石田昌浩、石田琴巳、大島登志子、織田小百合、加藤トヨ子、門田美奈子、加納ときわ、河合久美子、国枝花子、近藤つや子、近藤裕子、酒林裕子、嶋原博美、下條彰則、鈴木いつ、鈴木輝子、鈴木六三、鈴木久美子、太刀川美和子、津田牧恵、新美三枝子、西村香緒里、西村浩二、キャロライン・パシーバーカー、服部高治、原田蔦枝、古田和子、山瀬小枝子

一次整理に参加された方々

石川あけみ、小野田道代、柏原節子、久保田咲子、近藤日昇美、近藤幸子、田代ゆかり、水谷美佐江、守道直子



調査開始時の作業風景

第2章 遺構と出土遺物

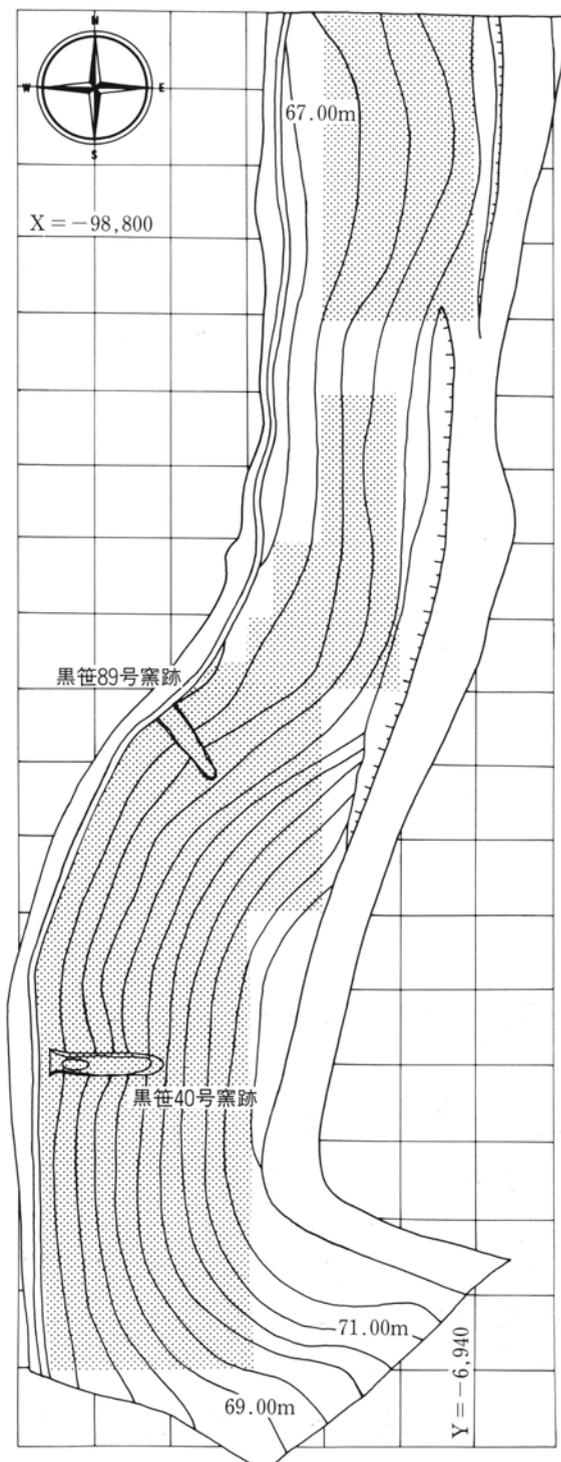
第1節 概要

黒笹40号・89号窯跡ともに米ヶ廻間谷の東斜面の中腹に位置している。昭和31.32年に愛知用水工事に伴う古窯跡の調査として発掘調査が実施された。今回は窯体の再調査を行うとともに谷の東斜面の調査を行った。

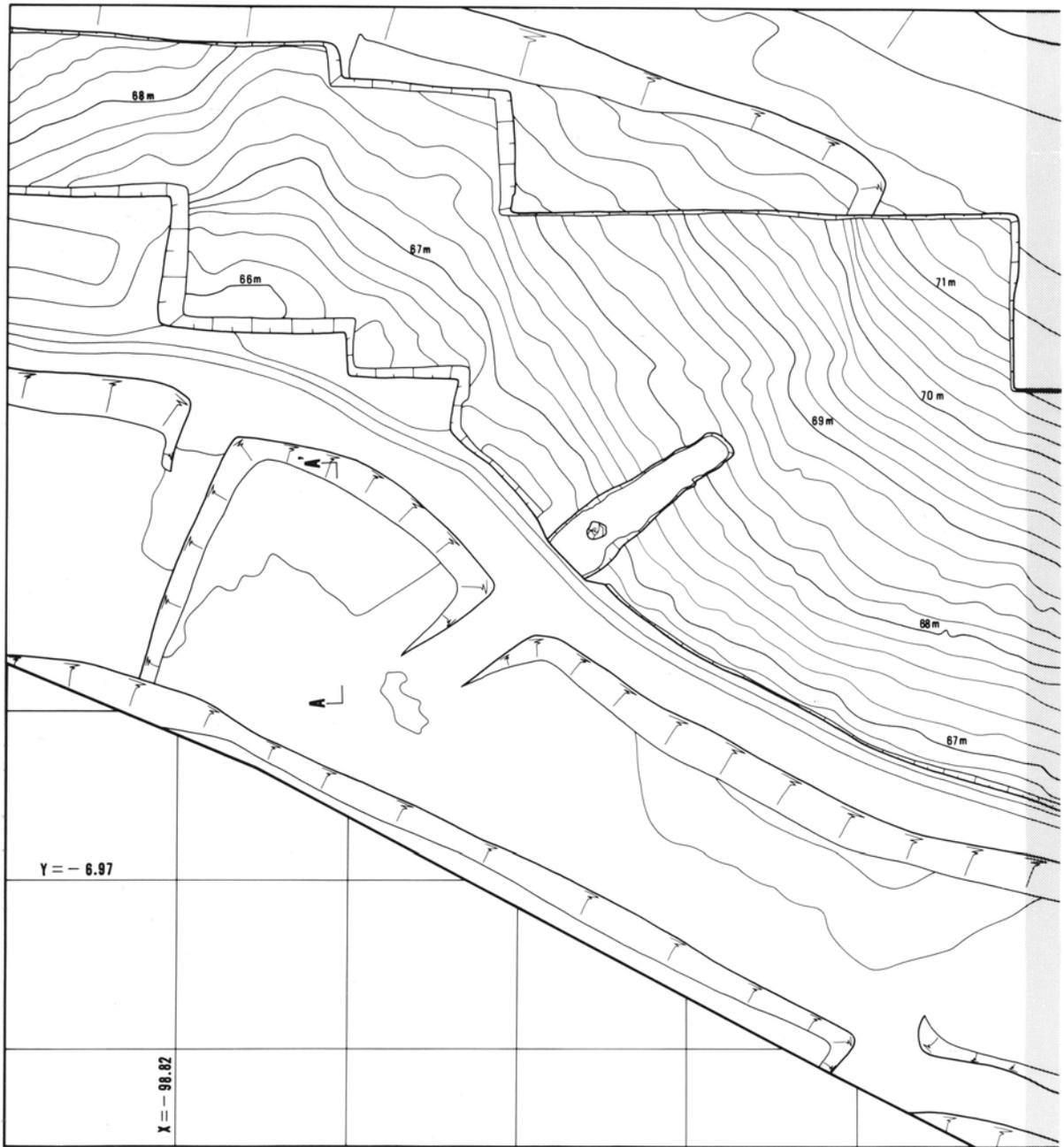
黒笹40号窯跡は現存長6m40cm、最大幅1m60cmを測り、現存長1m80cm、幅82cm、深さ37cmの舟底ピットをもつ窰窯で、折戸10号窯式の時期である。前回の調査後埋め戻されて、保存状態は良好であった。遺物は窰前の水田下の灰原部分から出土し、須恵器の製品が大部分を占める。

黒笹40号窯跡の南側上部に平坦な面があり、北側上部では焼土跡2ヶ所を確認したが、遺物は出土しなかった。北側上部の焼土は径70cmの円形に近い形を呈し、検出面から12cm程の厚さでレンズ状に赤褐色に焼けていた。北側下部の焼土の範囲は長径60cm、短径50cmを測る隅丸方形形状を呈し、10cmの厚さでレンズ状に赤褐色に焼けていた。

黒笹89号窯跡は現存長さ5m70cm、最大幅1m74cmを測り、焚口には長径60cm、短径50cmの分焰柱が付設された窰窯で、黒笹90号窯式の時期である。前回の調査後埋め戻されて、保存状態は良好であった。窰体の断ち割りによって3面の床面を確認した。遺物は窰前の水田下から出土した。灰釉陶器が大部分を占め、須恵器と緑釉陶器の素地（陰刻花文）も出土した。緑釉陶器の素地が出土しているにもかかわらず緑釉陶器は1片も出土していない。



第5図 調査区配置図（アミは調査区）



第6図 黒笹89号窯跡地形測量図



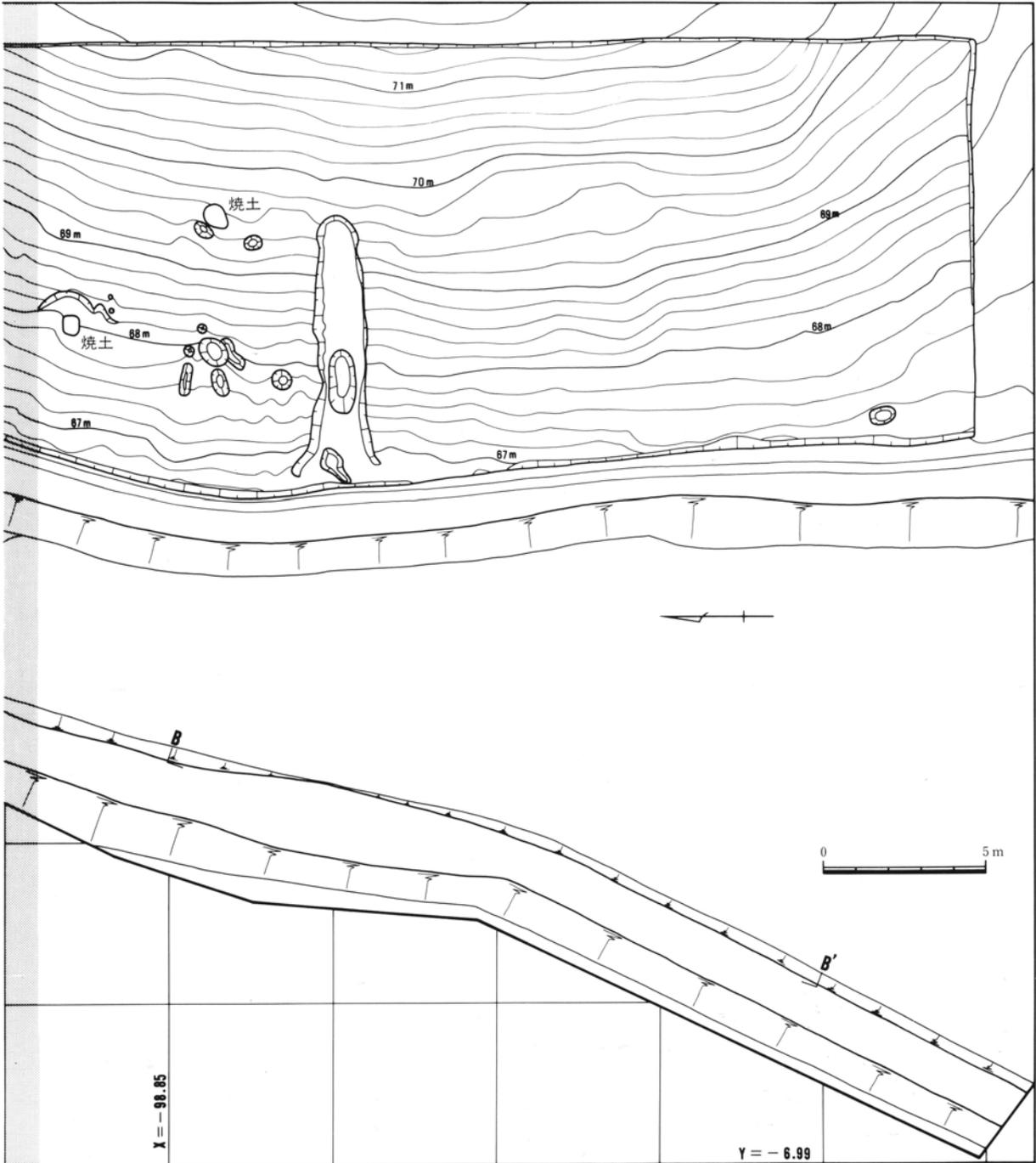
米ヶ廻間谷 調査区より南方向



米ヶ廻間谷 調査区より北方向



調査区遠景 西より



第7図 黒笹40号窯跡地形測量図

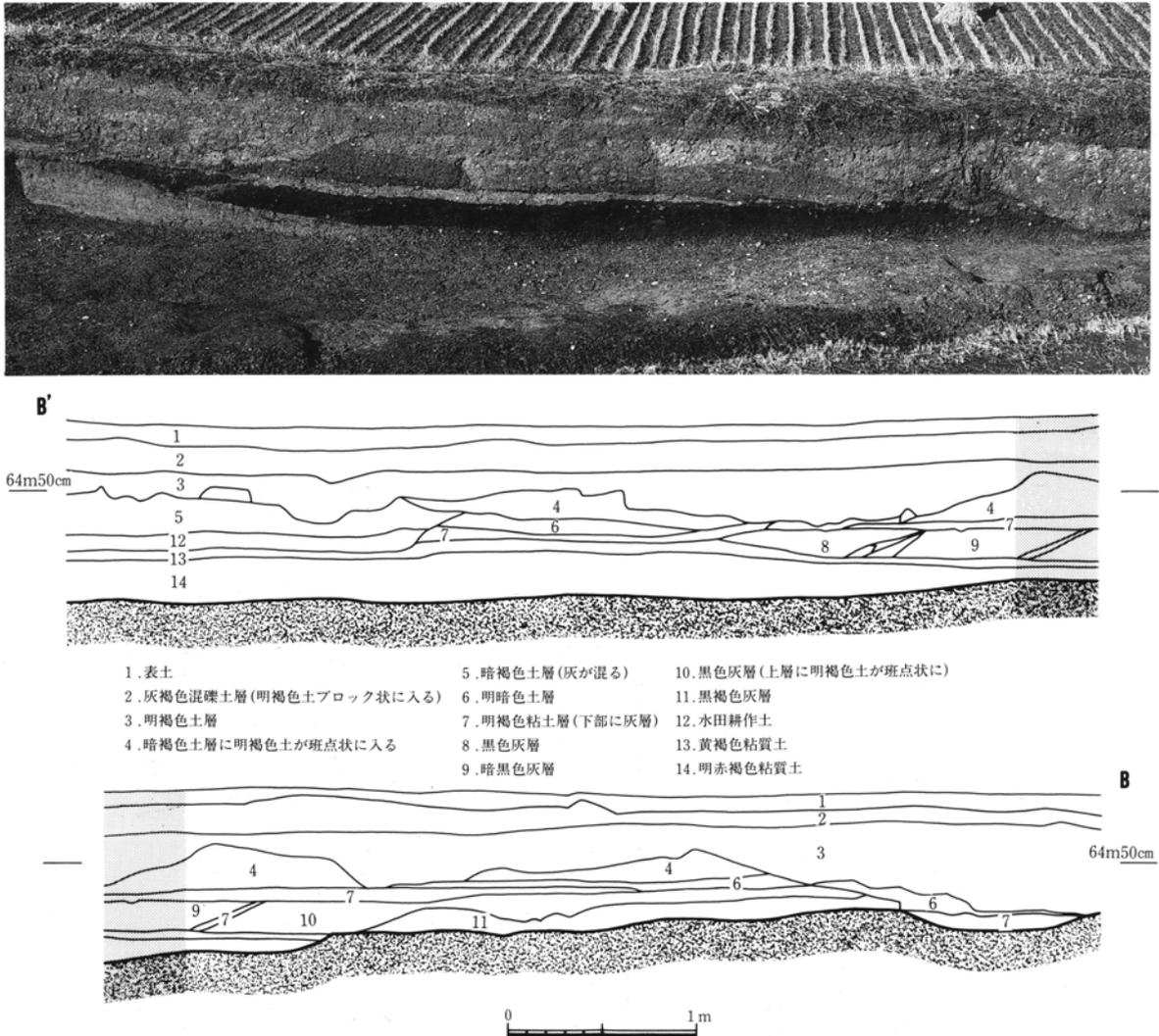
第2節 黒笹40号窯跡

1. 灰原 (第8図)

現況からして灰原は水田開墾時と昭和31・32年の調査時の2度にわたって掘り返されて滅失したものとされていたが、窯前の水田面にトレンチを入れてみたところ、水田の西側に灰原の一部が良好な状態で残っているのを発見した。

灰層の分布について、窯体を中心に距離を測ると、前庭部北側は4m50cmから5m、南側は15mとなり、約160㎡の範囲と推定できる。窯体の中軸線を灰原まで延長してみると中軸線の南側のほうが灰層の分布範囲は広い。

灰層は遺物、木炭、焼土を多量に含む黒色灰層(8.10)、暗黒色灰層(9)、黒褐色灰層(11)などからなるが、黒色灰層より江戸時代の呉須絵の鉢・鉄釉落し蓋(第33図、452・453)が、暗黒色灰層より明治時代の刷絵磁器碗(第33図、454)が須恵器に混じって出土した。このため地山直上の黒褐色灰層のみが後世の掘削による攪乱を受けていない本来の灰層であることが確認された。



第8図 黒笹40号窯跡灰原土層断面図

2. 窯体（第9図、第10図）

窯体は舟底状ピットを有する窖窯で、焚口、燃烧室、烧成室が良好な状態で残っていた。現存長6m40cm、最大幅1m60cm、傾斜角度は中央で29度を測る。

焚口・燃烧室

焚口から奥へ、烧成室に向かって左側の北壁では1m20cm、右側の南壁では70cmの部分に、内側に絞り込んだ左右不均等のくびれが認められる。北壁・南壁ともにくびれたところから「八」の字に開き、燃烧室と烧成室の境には、「舟底状ピット」がある。舟底状ピットから手前1m範囲の燃烧室内の床面幅は1m10cmから1m20cmで、床面傾斜はなく平坦である。

舟底状ピット

燃烧室と烧成室の境にある舟底ピットは全長2m、最大幅82cm、深さ37cmで、平面形は不整楕円形を呈し、底は赤く焼けていた。

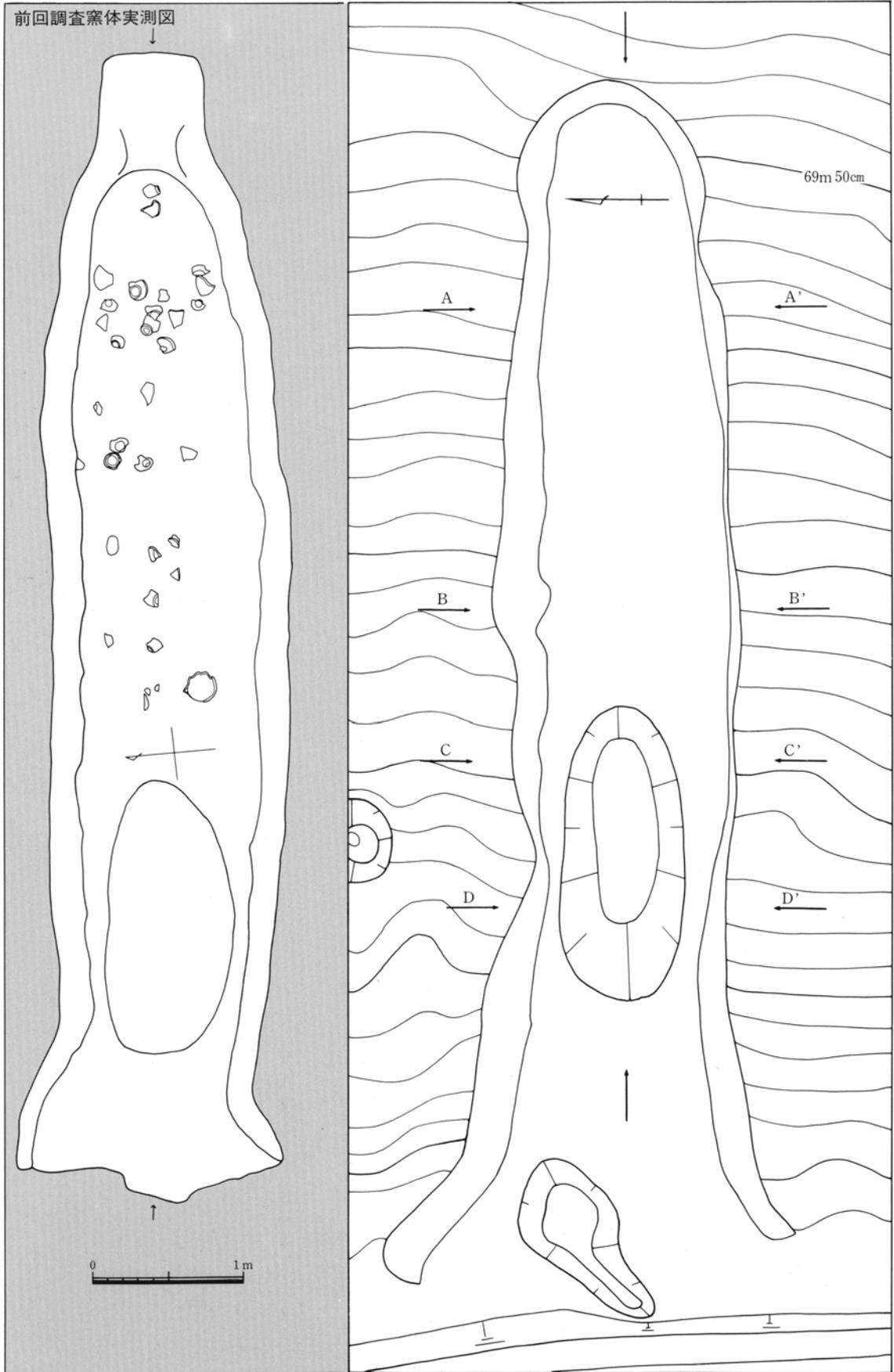
烧成室

現存長4m20cm、床面幅は舟底ピットの上部で最大幅1m20cmを測り、奥へ進むにしたがって次第に狭くなっている。前回の調査で確認された上端が一段高くなって赤く焼けて煙出し部分は確認されなかった。鼠色を呈する壁面は北壁部分で良好な状態で残っており、窯の中央付近では長さ50cm前後、くぼみ5cm前後のひだがあり、蛇腹の形態を呈している。床面傾斜角は最上部で35度、中央部で29度であり、上部ほど勾配が急になっている。

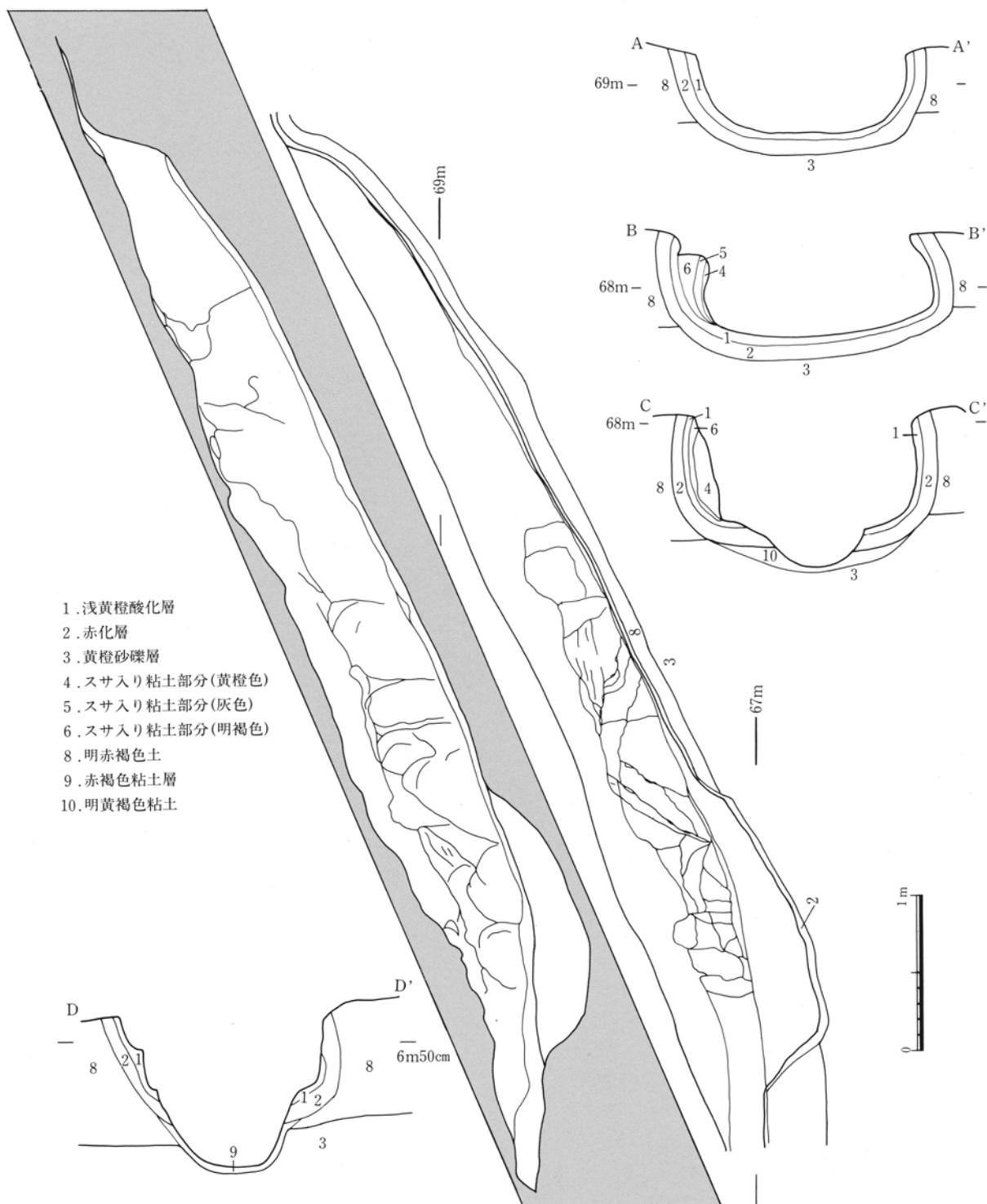
床面と壁面を断ち割ったが、床面・壁面ともに1面を確認しえたのみであった。

なお同様な所見が、昭和30年31年調査の調査報告書においても述べられている。





第9図 黒笹40号窯跡窯体実測図



第10図 黒笹40号竈跡竈体断面実測図

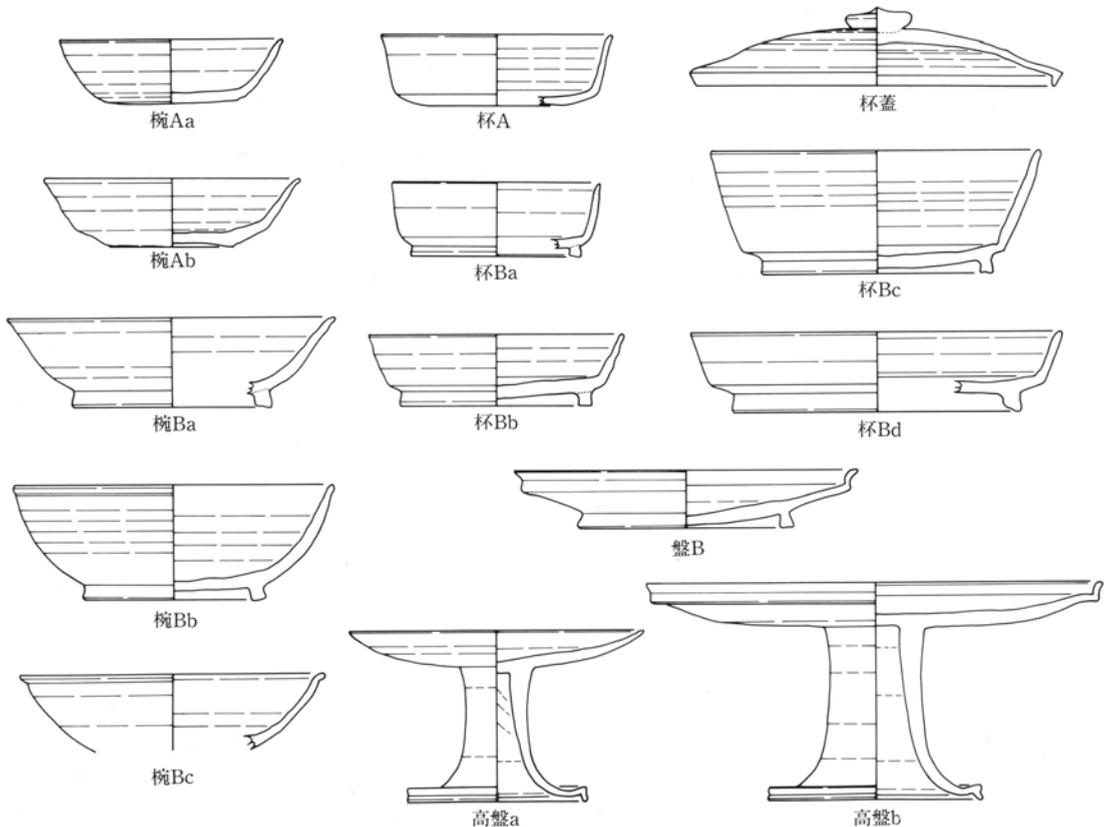
3. 出土遺物（第13図～第33図）

出土遺物の大部分は窯前の水田下の灰原からの出土である。灰原も既に江戸時代には掘削されていたようで、前述の黒色灰層より呉須絵の鉢（第33図、452）が、また黒色層より刷絵の磁器碗（第33図、454）が出土している。このため灰原については全面が操業当時の灰原とはいいがたく、混在している可能性を否定できない。唯一ベース直上の黒褐色灰層のみが当時のままの状態であった。総破片数15219点のうち口縁や高台などによって器種の形態が判断できたのは7243点、器種不明の口縁細片328点、胴部細片7536点、窯道具112点であった。出土遺物のほとんどは須恵器の製品であるが、いわゆる原始灰釉の製品といわれている長頸瓶、浄瓶、水瓶、双耳瓶、平瓶、短頸壺、蓋が出土している。

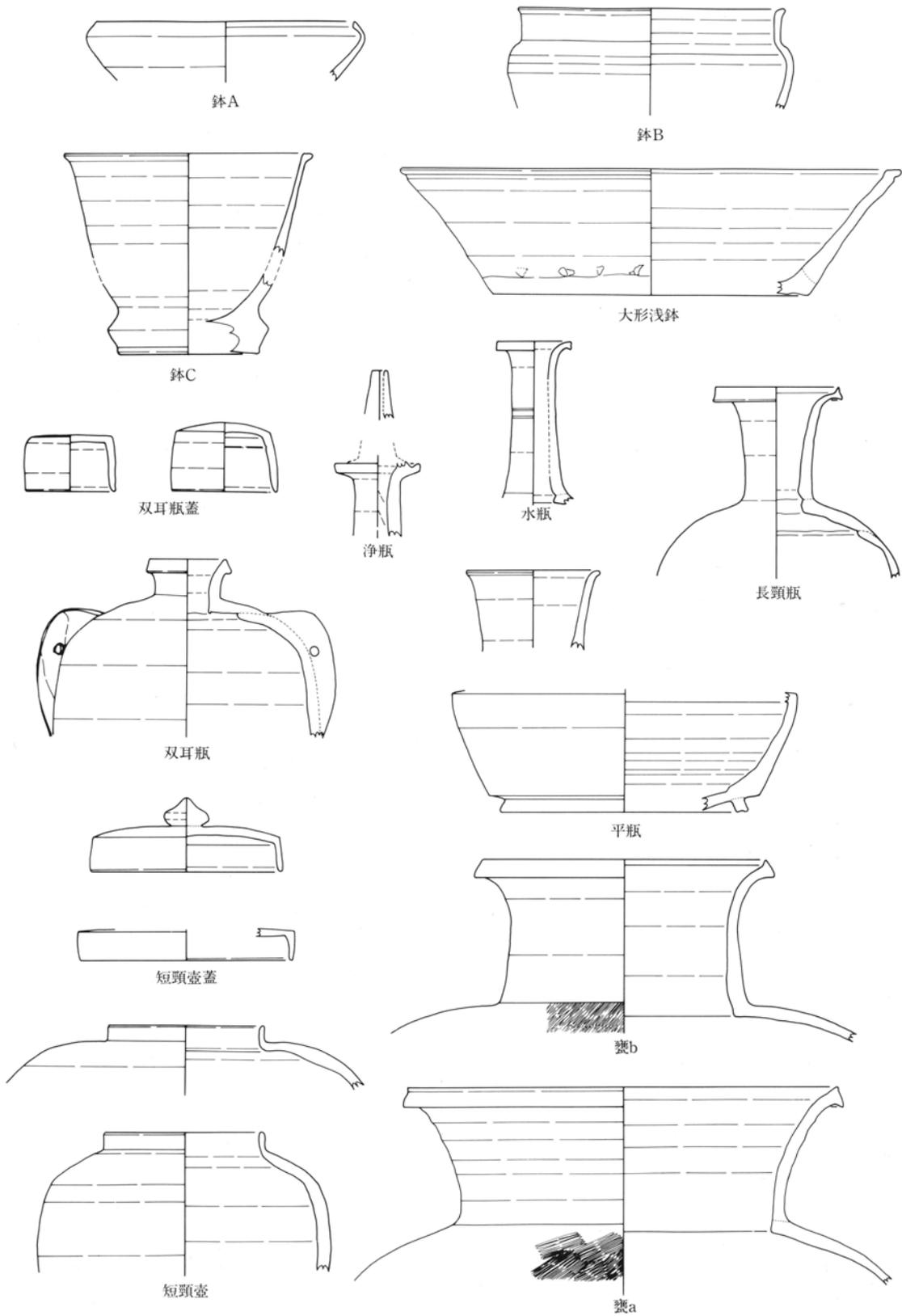
遺物の形態分類

各器種の形態分類は以下のとおりである。

- 杯 蓋 外面頂部に擬宝珠鈕を有し、口縁端部が「く」の字状に折れる
- 杯 A 無高台の杯身。腰部に稜を持ちほぼ直線的に斜め上方へのびて体部を形成し、底部から腰にかけて回転ヘラ削り調整が施される。
- 杯 B 高台を有する杯身。杯Aに高台を付けたもので、口径・器高によってa b c dに分類できる。
- 碗 A 無高台。底部から体部が丸みを帯びて斜めに立ち上がった形状で、腰部に稜



第11図 黒笹40号窯跡出土主要器種分類図（1）



第12図 黒笹40号窯跡出土主要器種分類図(2)

はなく平底のもの。底部外面の痕跡によってa bに分類できる。aはヘラ切り痕、bは糸切り痕である。

- 椀 B** 高台を有し、体部の形状や口縁形態によってa b cに分類できるが、腰部に稜はない。aは高台よりほぼ斜めに立ち上がった形状、bは高台より丸みを帯びて斜めに立ち上がった形状、cはbと形状は似ているが口縁端部を折り返した端反になったもの。
- 盤 B** 浅い皿状の体部に杯Bと同様な高台が付き、口縁端部が「く」の字状に折り返しひき上げられている。
- 高盤** 浅い皿状の体部に高杯と同様な細くて高い脚が付くもので、口縁端部の形態によってa bに分類できる。aは盤Bと同様な「く」の字状に折り返されたもの、bは端部を折り返さずそのまま口縁としたもの。
- 鉢 A** 金属器の鉄鉢を模したもので口縁部が内彎している。
- 鉢 B** 底径に対し口径が大きく、口頸部が外反するもので、小型のものでは底部に糸切り痕がそのまま残る。
- 鉢 C** 播鉢。口縁端部が内傾し、外面は外反した縁帯となり、体部は直線的に開く。底部は厚い。
- 大型浅鉢** 口縁上端部の中央がややくぼんだ縁帯状の口縁をなし、平底の底部からほぼ直線的に開いて立ち上がったもので、胴部中ほどには手づくねの把手が付いている。
- 浄瓶** 口頸部は胴部よりほぼ直立して立ち上がり、口縁である注口部の下に縁帯が突起している。肩の部分には注口があり、底部には高く外に開く高台が付けられている。
- 水瓶** 口縁端部が水平に外反して口縁帯をつくりだし、浄瓶と同様に底部には高く外に開く高台が付けられている。
- 長頸瓶** 口縁端部が外反しやや幅広い口縁帯をつくりだし、底部から直線的に斜めに立ち上がる。胴部の肩に張りが見られる。底部には外に開く高台が付く。
- 平瓶** 口頸部はゆるやかに外に開いて立ち上がり口縁端部が外反している。底部に高台が付く。
- 双耳瓶蓋** 円筒状を呈し頂部が丸みを帯びたものと平らなものがある。
- 双耳瓶** 口頸部は短く外反して口縁帯をつくりだし、胴部の肩に耳が二つ付く。耳は丸みを有し中ほどに円孔が一つ穿けられ、底部は平底である。
- 短頸壺** 口頸部が短く直立し、胴部の肩がやや張ったものとなだらかに丸みをもつものがある。底部には外に開く高台が付けられているが、三足がつくものもある。
- 短頸壺蓋** 蓋の頂部に宝珠の鈕がつけられ、天井部が平坦なものと丸みを帯びたものがある。

- 甕** 口頸部の形態でa bにわかる。aは大きく開いたもので、bは胴部からほぼ垂直に立ち上がった円筒状の頸である。
- 硯** 円面硯と宝珠硯がある。
- 小形品** 各器種の小形模造仮器で、浅鉢、短頸壺、長頸瓶、双耳瓶蓋、宝珠付短頸壺蓋、杯蓋、宝珠付杯蓋がある。

出土遺物

実測図の縮尺は、第30図が1：2、第33図が1：3で、それ以外は1：4である。

杯蓋 (第13図、第14図、第30図：1～41・391～394)

口縁端部は「く」の字状に折れ、擬宝鈕が高いもの(1～3・8～10・21)と偏平で中央がやや突出するもの(4・7・11・12・15～18・22～24)と偏平で中央がくぼむもの(5・6)があり、天井部には中ほどまで回転ヘラ削り調整が施されている。小形の杯蓋(391～394)もある。内面にヘラ記号のあるものが5点あり、「×」(21～24)と「一」(7)の2種類である。

杯A (第14図：42～48)

底部に高台を有しない無台の杯身で、腰部に稜を持ち、ほぼ直線的に斜めに開いて立ち上がり、底部から腰にかけて回転ヘラ削り調整が施されている。

杯B (第14図～第16図：49～99)

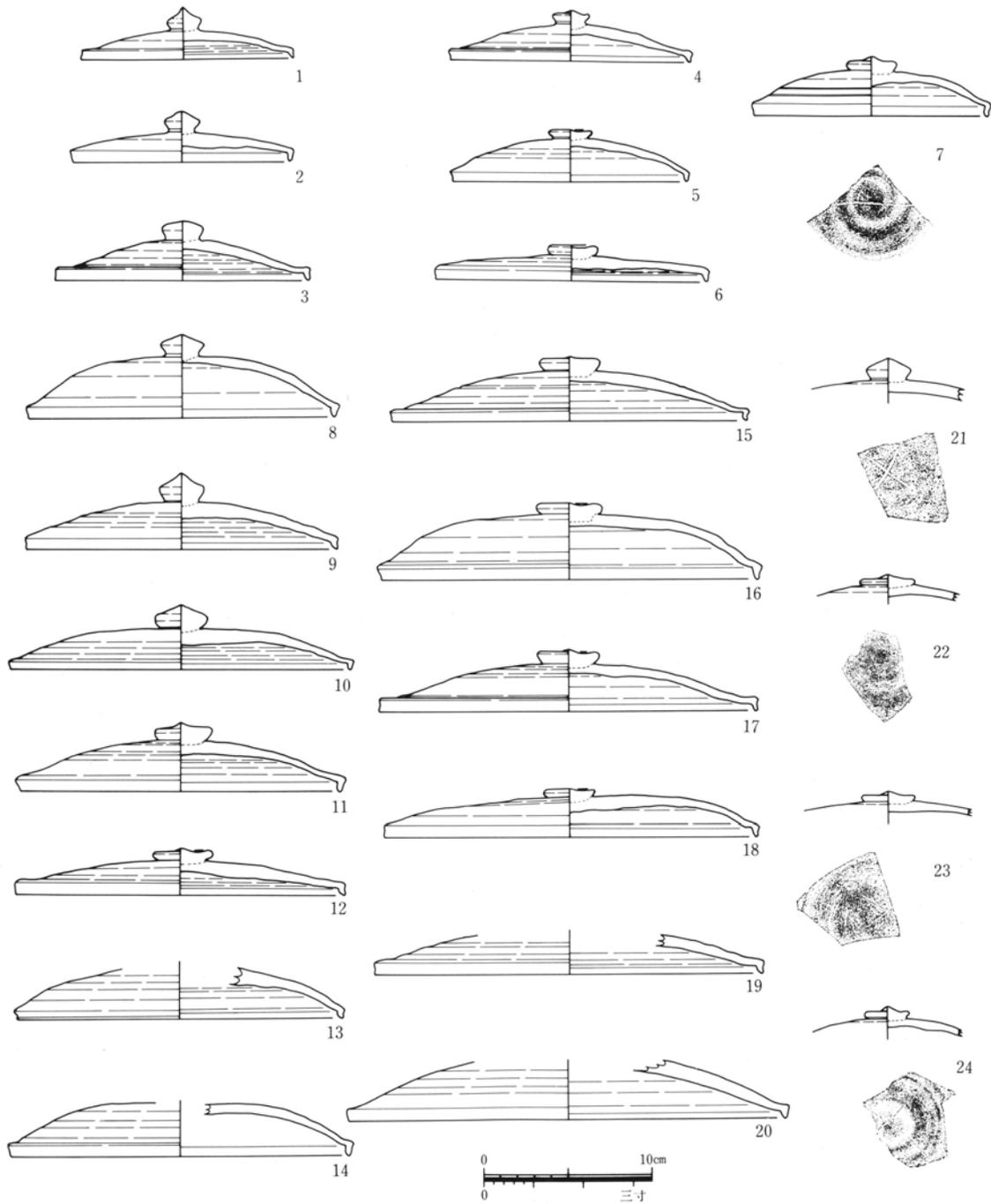
腰部に稜を持ち、ほぼ直線的に斜めに開いて立ち上がり、高台は底部端より少し内側に付けられている。外面底部から腰にかけて回転ヘラ削り調整が施される。法量よりBa類(49～51)、Bb類(52～76)、Bc類(79～86)、Bd類(87～99)に分類できる。耳を付けた双耳杯(60)と底部にヘラ記号のあるものが2点2種類、「一」(75)と「×」(76)がある。

椀A (第17図：100～133)

底部に高台を有しない無台の椀。底部外面の痕跡によって分類され、Aa類はヘラ切り痕(100～115) Ab類は糸切り痕(116～133)である。Aa類は腰部からほぼ直線的に立ち上がり、口縁端部が外反するものは110の1例のみである。112には手持ちヘラ削り、115にはヘラナテ調整が施されている。Ab類には腰部よりほぼ直線的に立ち上がったもの(116・117・120・122・125)と、口縁端部が外反するもの(118・119・123・124)があり、Aa類に比べて腰部に丸みが認められる。底部にヘラ記号のあるものが2点2種類、「×」(132)と「一」(133)がある。

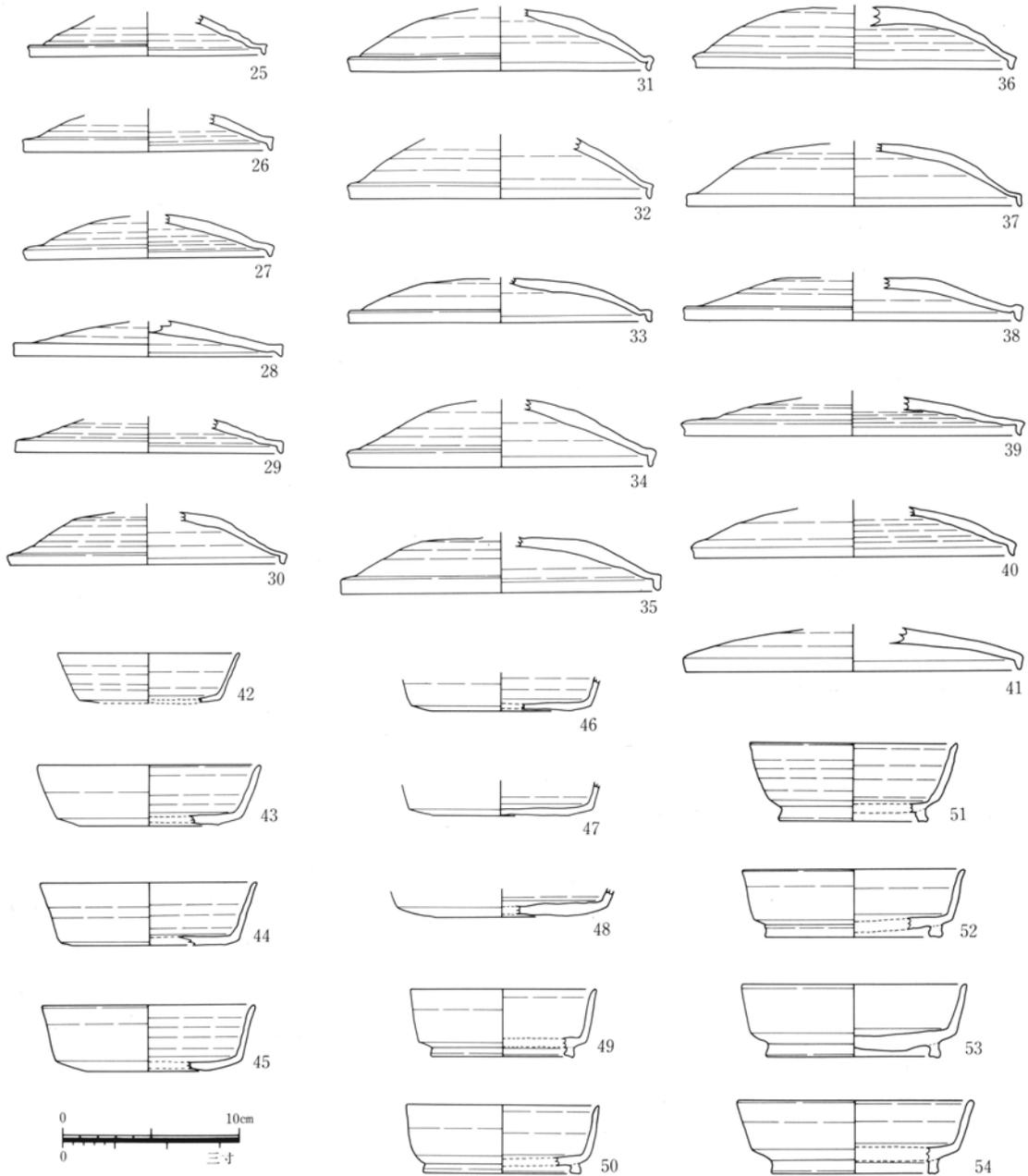
椀B (第18図：134～159)

体部の形状や口縁形態により分類され、Ba類は高台より斜めに開いた状態で立ち上がっ



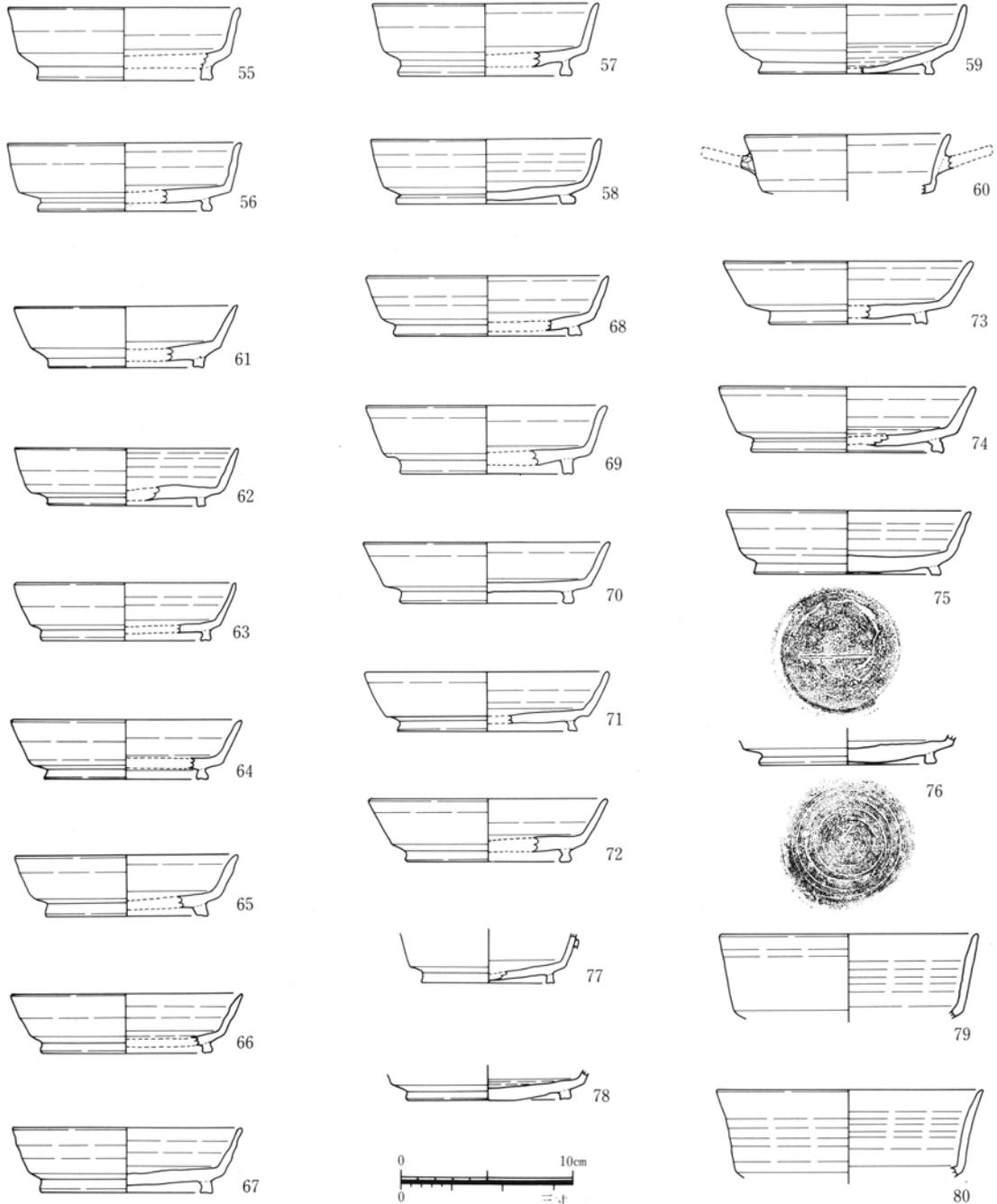
番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版	番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版
1	杯蓋	12.6	肩12.5	3.1	1/12	法量図, 径指25		13	杯蓋	19.2	肩19.4	(3.0)	1/12		
2	杯蓋	12.8	肩13.2	3.1	3/12	法量図, 径指24	5	14	杯蓋	20.0	肩20.4	(3.2)	2/12		
3	杯蓋	15.0	肩15.0	3.6	2/12	法量図, 径指24		15	杯蓋	21.0	肩21.4	3.9	0/12	法量図, 径指19	
4	杯蓋	14.2	肩14.4	3.1	3/12	法量図, 径指22	5	16	杯蓋	22.2	肩22.8	4.6	0/12	法量図, 径指21	
5	杯蓋	14.0	肩14.2	3.1	1/12	法量図, 径指22		17	杯蓋	11.3	肩22.4	3.7	1/12	法量図, 径指17	
6	杯蓋	16.1	肩16.4	2.1	6/12	法量図, 径指13	5	18	杯蓋	22.0	肩22.1	2.9	6/12	法量図, 径指13	
7	杯蓋	14.0	肩14.2	3.6	0/12	へら記号(内面), 法量図, 径指26		19	杯蓋	23.0	肩23.2	(2.3)	1/12		
8	杯蓋	18.0	肩18.4	5.0	2/12	法量図, 径指28		20	杯蓋	26.0	肩26.2	(3.5)	4/12		
9	杯蓋	18.3	肩18.4	4.6	1/12	法量図, 径指25		21	杯蓋					へら記号(内面)	
10	杯蓋	20.2	肩20.4	3.9	1/12	法量図, 径指19		22	杯蓋					へら記号(内面)	
11	杯蓋	16.1	肩16.4	2.1	6/12	法量図, 径指13		23	杯蓋					へら記号(内面)	
12	杯蓋	19.4	肩19.4	2.8	6/12	法量図, 径指14	5	24	杯蓋					へら記号(内面)	

第13図 黒笹40号窯跡出土遺物実測図(1)



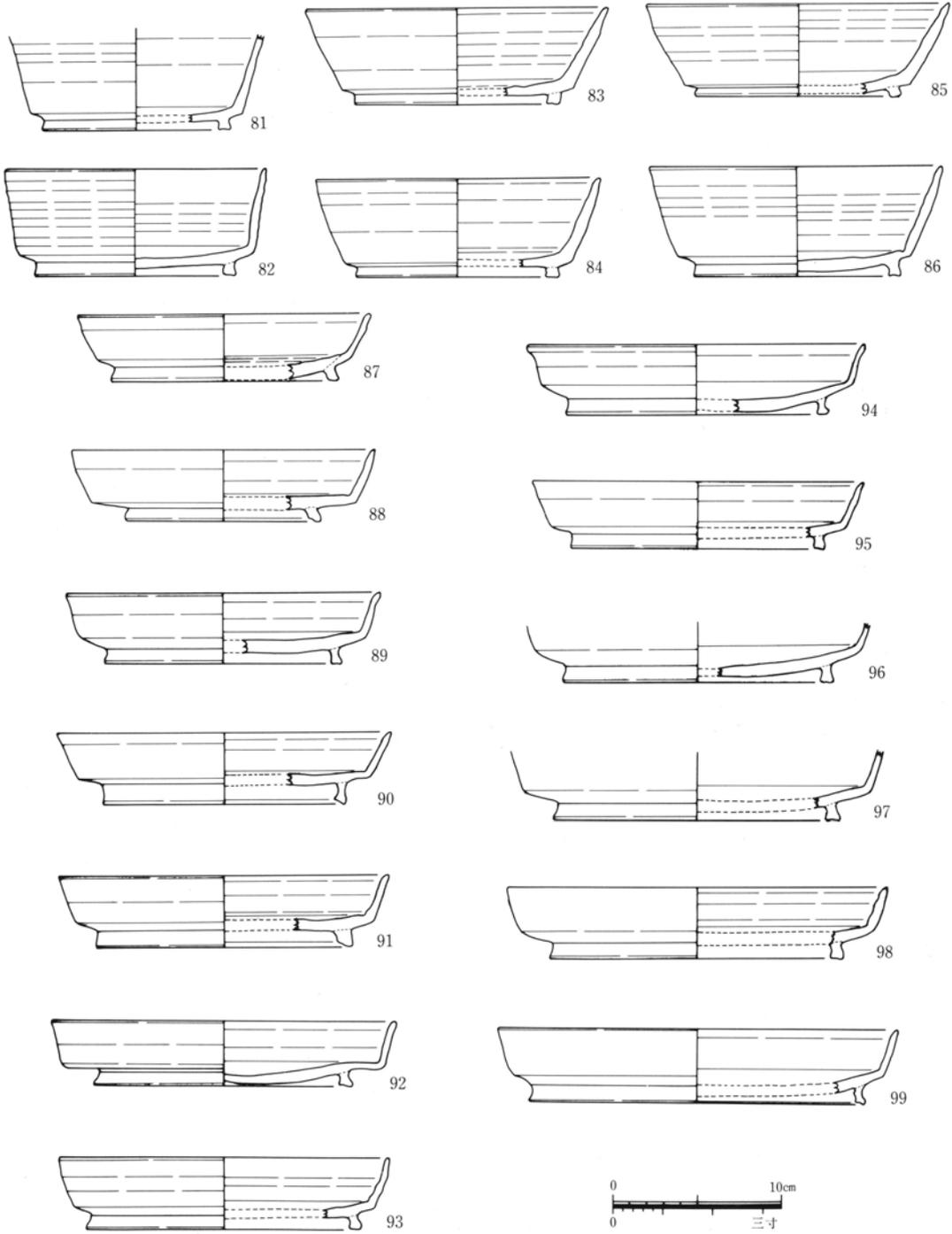
番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版	番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版
25	杯蓋	13.4	肩13.6	(2.3)	2/12			40	杯蓋	18.0	肩18.4	(2.8)	2/12		
26	杯蓋	14.0	肩14.2	(2.1)	2/12			41	杯蓋	19.0	肩19.2	(2.5)	1/12		
27	杯蓋	13.8	肩14.2	(2.4)	4/12			42	杯A	10.3	8.0	2.6	0/12, 1/12	法量図, 径指25	
28	杯蓋	15.0	肩15.2	(2.0)	5/12			43	杯A	12.6	7.9	3.5	3/12, 6/12	法量図, 径指28	5
29	杯蓋	12.2	肩15.2	(1.9)	2/12			44	杯A	12.4	8.6	3.6	0/12, 2/12	法量図, 径指29	
30	杯蓋	15.6	肩15.8	(3.0)	2/12			45	杯A	12.0	7.0	3.8	0/12, 5/12	法量図, 径指32	
31	杯蓋	17.0	肩17.4	(3.6)	1/12			46	杯A		8.0	(2.0)	1/12		5
32	杯蓋	17.0	肩17.4	(3.4)	2/12			47	杯A		7.8	(2.0)	3/12		
33	杯蓋	17.2	肩17.0	(2.5)	2/12			48	杯A		7.5	(1.5)	2/12		
34	杯蓋	17.0	肩17.6	(3.7)	3/12			49	杯Ba	11.6	8.8	3.9	1/12, 2/12	法量図, 径指34	
35	杯蓋	18.0	肩18.8	(3.1)	5/12			50	杯Ba	11.0	8.8	3.9	1/12, 1/12	法量図, 径指35	
36	杯蓋	18.0	肩18.4	(3.5)	2/12			51	杯Ba	11.8	8.4	4.9	1/12, 1/12	法量図, 径指42	
37	杯蓋	19.0	肩19.0	(3.6)	0/12			52	杯Bb	12.6	10.0	3.9	0/12, 1/12	再利用, 法量図, 径指31	
38	杯蓋	19.1	肩19.3	(2.4)	2/12			53	杯Bb	12.6	9.8	4.2	1/12, 3/12	法量図, 径指33	
39	杯蓋	19.0	肩19.5	(2.2)	1/12			54	杯Bb	13.4	9.2	4.2	0/12, 3/12	法量図, 径指31	

第14図 黒笹40号窯跡出土遺物実測図(2)



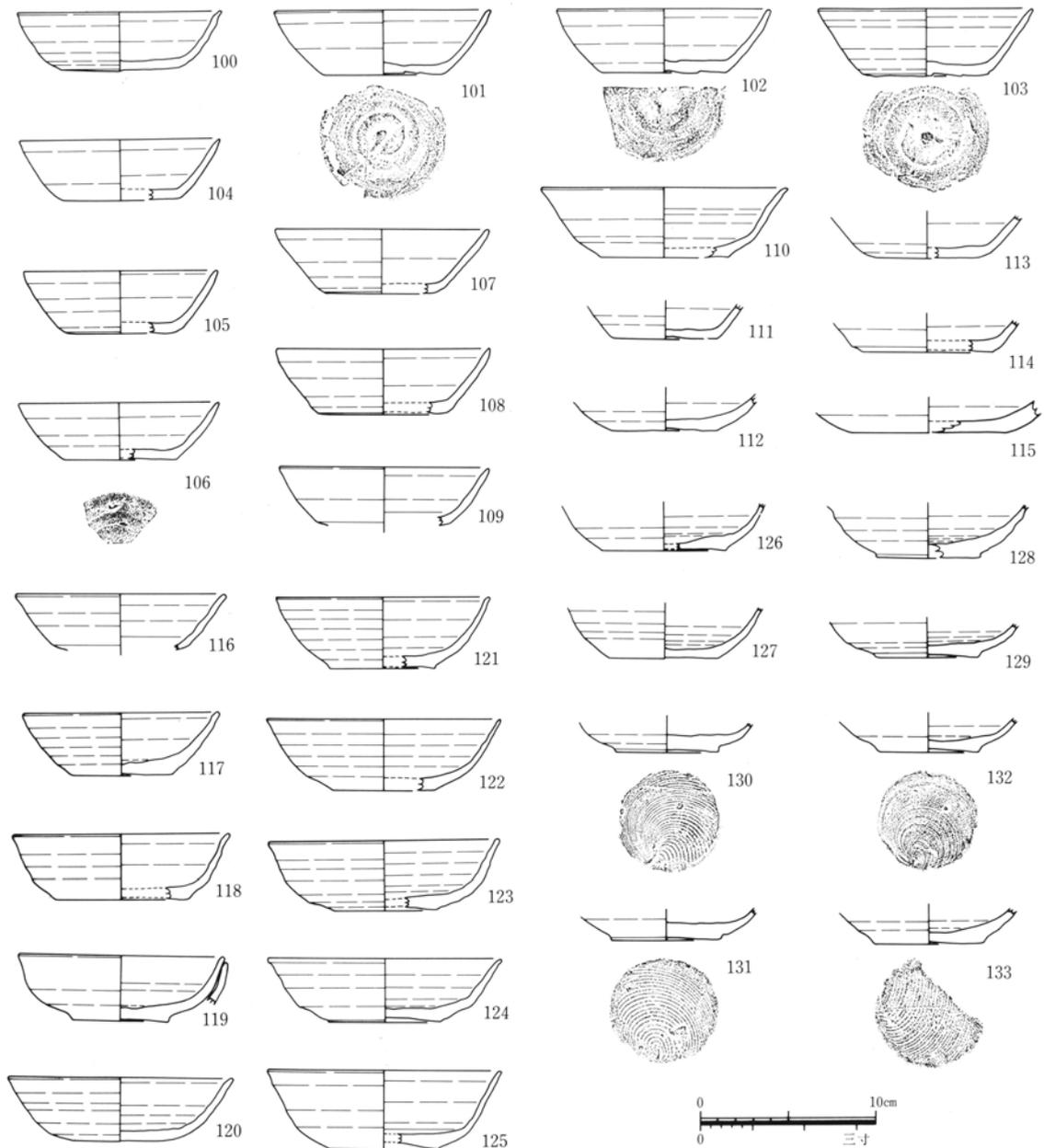
番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版	番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版
55	杯Bb	13.4	10.0	4.3	1/12, 3/12	法量図, 径指32		68	杯Bb	14.1	10.7	3.5	0/12, 1/12	法量図, 径指25	
56	杯Bb	13.5	10.0	4.0	0/12, 2/12	法量図, 径指30		69	杯Bb	14.0	10.0	4.0	1/12, 1/12	法量図, 径指29	
57	杯Bb	13.1	10.0	4.3	2/12, 4/12	法量図, 径指33		70	杯Bb	14.2	10.0	3.6	1/12, 4/12	再利用, 法量図, 径指25	5
58	杯Bb	13.3	10.2	3.8	2/12, 5/12	法量図, 径指29	5	71	杯Bb	14.1	10.4	3.4	0/12, 4/12	法量図, 径指24	
59	杯Bb	14.0	10.0	4.1	0/12, 2/12	法量図, 径指29		72	杯Bb	14.0	9.5	3.7	1/12, 1/12	再利用, 法量図, 径指26	
60	杯Bb	12.0		(3.5)	1/12	双耳付		73	杯Bb	14.6	9.0	3.7	0/12, 4/12	再利用, 法量図, 径指25	
61	杯Bb	13.3	9.0	3.6	2/12, 2/12	法量図, 径指27		74	杯Bb	15.0	9.8	3.5	1/12, 3/12	法量図, 径指23	
62	杯Bb	14.1	10.7	3.5	1/12, 1/12	法量図, 径指25		75	杯Bb	14.2	10.8	3.7	2/12, 7/12	へら記号(外面) 法量図, 径指26	
63	杯Bb	13.8	9.8	3.4	1/12, 1/12	法量図, 径指25		76	杯Bb		10.2	(1.6)	12/12	へら記号(外面)	
64	杯Bb	13.4	10.4	3.5	1/12, 2/12	法量図, 径指26		77	杯B		7.8	(3.0)	2/12		
65	杯Bb	12.8	9.3	3.6	2/12, 3/12	再利用, 法量図, 径指28		78	杯B		9.6	(1.6)	5/12		
66	杯Bb	13.4	9.8	3.5	1/12, 3/12	法量図, 径指26		79	杯Bc	15.0		(5.0)	1/12		
67	杯Bb	13.3	10.0	3.8	1/12, 4/12	法量図, 径指29		80	杯Bc	14.4		(5.1)	4/12		

第15図 黒笹40号窯跡出土遺物実測図(3)



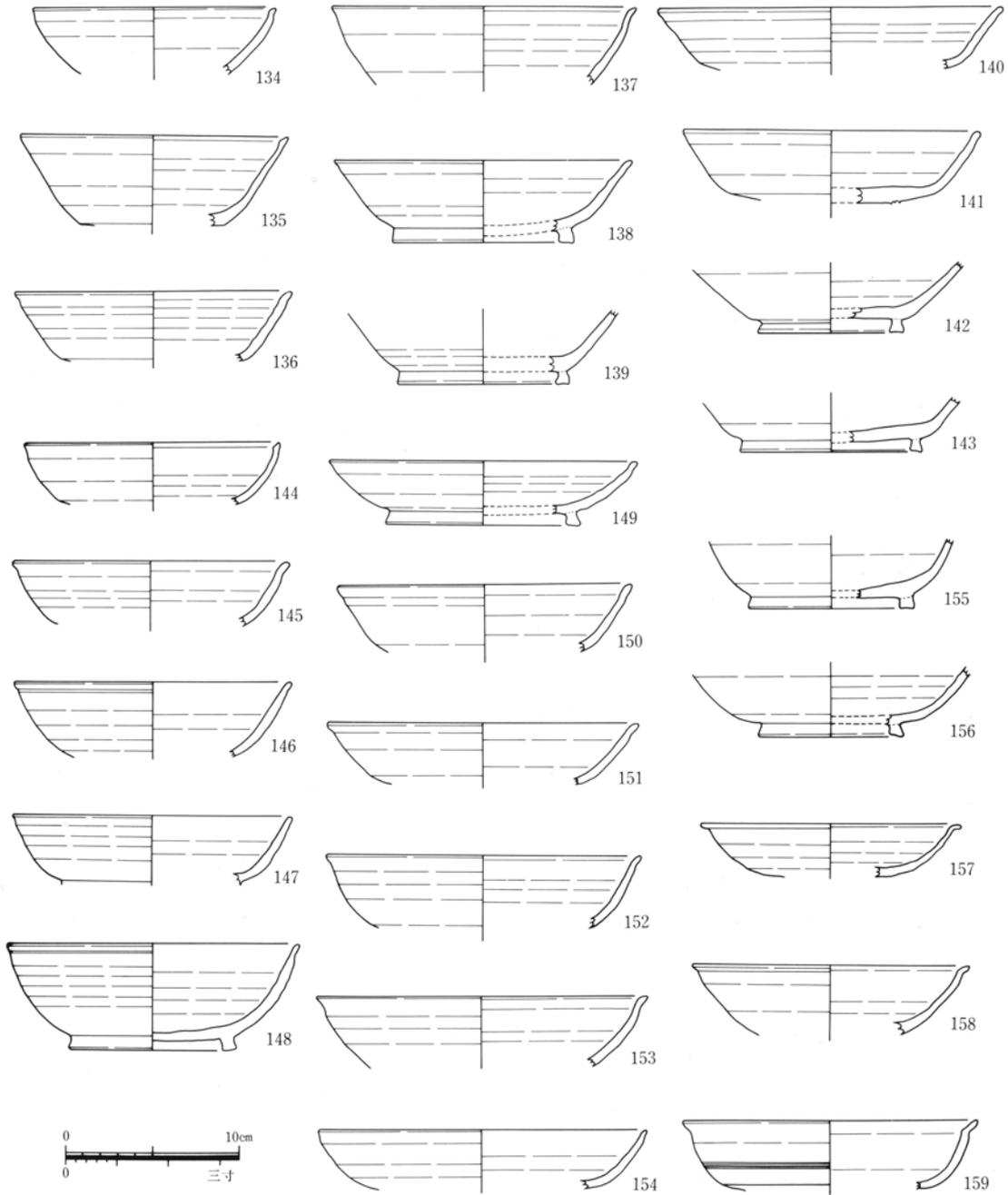
番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版	番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版
81	杯Bc		11.0	(5.7)	2/12	再利用		91	杯Bd	19.6	15.0	4.3	0/12, 2/12	再利用, 法量図, 径指22	
82	杯Bc	15.3	11.7	6.4	0/12	法量図, 径指42		92	杯Bd	20.3	15.2	3.9	0/12, 3/12	再利用, 法量図, 径指19	
83	杯Bc	17.8	12.0	5.8	0/12, 2/12	再利用, 法量図, 径指33		93	杯Bd	19.4	16.2	4.3	1/12, 2/12	法量図, 径指22	5
84	杯Bc	16.8	12.0	5.9	4/12, 3/12	法量図, 径指35	5	94	杯Bd	20.0	15.4	4.3	1/12, 2/12	法量図, 径指22	5
85	杯Bc	18.0	12.2	5.6	1/12, 0/12	法量図, 径指31		95	杯Bd	19.6	15.0	4.0	2/12, 2/12	再利用, 法量図, 径指20	
86	杯Bc	17.2	12.1	6.5	11/12, 12/12	法量図, 径指38	5	96	杯Bd		16.0	(3.5)	2/12		
87	杯Bd	17.3	13.2	4.0	1/12, 1/12	法量図, 径指23		97	杯Bd		17.0	(4.1)	1/12		
88	杯Bd	18.0	11.3	4.3	1/12, 1/12	法量図, 径指24		98	杯Bd	22.4	17.2	4.3	1/12, 1/12	法量図, 径指19	
89	杯Bd	18.5	14.0	4.2	1/12, 0/12	再利用, 法量図, 径指23		99	杯Bd	23.6	19.6	4.5	0/12, 0/12	法量図, 径指19	
90	杯Bd	19.8	14.2	4.3	0/12, 0/12	法量図, 径指22	5								

第16図 黒笹40号竪跡出土遺物実測図(4)



番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版	番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版
100	碗Aa	11.6	6.8	3.4	2/12, 12/12	へら切り, 法量図, 径指29	5	117	碗Ab	11.2	5.8	3.5	2/12, 3/12	回転糸切り, 法量図, 径指31	
101	碗Aa	12.4	6.0	3.8	4/12, 7/12	へら切り, 法量図, 径指31	5	118	碗Ab	12.4	7.6	3.8	2/12, 1/12	回転糸切り, 法量図, 径指31	
102	碗Aa	12.2	7.0	3.7	0/12, 5/12	へら切り, 法量図, 径指30		119	碗Ab	11.8	5.4	3.8	2/12, 9/12	再利用, 回転糸切り, 法量図, 径指32	
103	碗Aa	12.2	7.2	4.9	2/12, 5/12	へら切り, 法量図, 径指40		120	碗Ab	12.8	5.4	3.7	0/12, 3/12	回転糸切り, 法量図, 径指29	
104	碗Aa	11.4	6.6	3.5	0/12, 4/12	再利用, 法量図, 径指31		121	碗Ab	12.2	6.0	4.2	1/12, 1/12	回転糸切り, 法量図, 径指33	
105	碗Aa	11.0	6.3	3.6	1/12, 3/12	へらなで, 法量図, 径指33		122	碗Ab	13.4	5.8	4.1	1/12, 2/12	回転糸切り, 法量図, 径指31	
106	碗Aa	11.4	6.4	3.3	1/12, 2/12	へら切り, 法量図, 径指29		123	碗Ab	13.2	6.0	4.0	0/12, 5/12	回転糸切り, 法量図, 径指30	
107	碗Aa	12.2	6.6	3.7	0/12, 3/12	へらなで, 法量図, 径指30		124	碗Ab	13.4	6.4	3.7	2/12, 6/12	回転糸切り, 法量図, 径指28	6
108	碗Aa	12.2	7.4	3.7	1/12, 1/12	へらなで, 法量図, 径指30		125	碗Ab	13.2	6.2	4.5	2/12, 5/12	回転糸切り, 法量図, 径指34	
109	碗Aa	12.0	7.6	(3.4)	2/12, 2/12	再利用		126	碗Ab		7.0	(2.7)	5/12	回転糸切り	
110	碗Aa	14.0	7.2	4.0	0/12, 1/12	再利用, 法量図, 径指29		127	碗Ab		6.2	(3.1)	4/12	回転糸切り	
111	碗Aa		6.0	(2.2)	3/12	へら切り		128	碗Ab		6.0	(3.2)	6/12	回転糸切り	
112	碗Aa		11.0	(1.9)	1/12	へら削り	6	129	碗Ab		5.8	(2.3)	12/12	回転糸切り	
113	碗Aa		6.2	(2.6)	3/12	へら切り		130	碗Ab		5.8	(2.0)	12/12	回転糸切り	
114	碗Aa		7.6	(1.8)	3/12	へら切り		131	碗Ab		6.1	(1.8)	12/12	回転糸切り	
115	碗Aa		8.8	(1.8)	1/12	へらなで		132	碗Ab		5.8	(1.9)	12/12	へら記号(外面)回転糸切り	
116	碗Ab	12.0		3.2	1/12, 1/12	回転糸切り		133	碗Ab		6.2	(2.0)	8/12	へら記号(内面)回転糸切り	

第17図 黒笹40号窯跡出土遺物実測図(5)



番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版	番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版
134	碗Ba	14.0		(3.9)	1/12			147	碗Bb	16.0		(4.0)	1/12		
135	碗Ba	15.4		(5.5)	2/12			148	碗Bb	16.8	9.6	6.1	1/12, 8/12	法量図, 径指36	6
136	碗Ba	16.0		(4.3)	1/12			149	碗Bb	17.8		(3.8)	2/12		6
137	碗Ba	17.6		(5.0)	1/12			150	碗Bb	16.8		(4.0)	1/12		
138	碗Ba	17.2	10.3	4.8	0/12, 2/12	法量図, 径指28		151	碗Bb	18.0		(3.7)	1/12		
139	碗Ba			9.9 (4.4)	1/12			152	碗Bb	17.1		(4.2)	2/12		
140	碗Ba	20.0		(3.6)	1/12			153	碗Bb	19.0		(4.2)	1/12		
141	碗Ba	17.1		(4.4)	2/12			154	碗Bb	19.0		(3.6)	0/12		
142	碗Ba		8.4	(4.0)	1/12			155	碗Bb		9.6	(4.3)	4/12		
143	碗Ba		10.4	(3.1)	3/12			156	碗Bb		8.2	(4.3)	1/12		
144	碗Bb	14.8		(3.6)	1/12			157	碗Bc	15.0		(3.1)	0/12		6
145	碗Bb	15.8		(3.8)	1/12			158	碗Bc	16.0		(4.0)	1/12		
146	碗Bb	15.8		(4.5)	0/12			159	碗Bc	17.0		(4.2)	0/12		6

第18図 黒笹40号窯跡出土遺物実測図(6)

たもの(134~143)で、口縁端部が外反するもの(134・137)もある。Bb類は高台より腰部が丸みを持って斜めに立ち上がったもの(144~156)で、口縁端部が外反するもの(145・146・148・152・153)もある。Bc類は腰部より丸みを持って斜めに立ち上がり口縁端部が折り返し気味の端反になったもの(157~159)で、体部に3本の沈線が巡っているもの(159)もある。

盤B (第19図：160~181)

杯蓋の口縁端部とつくりが同じである。外面に回転ヘラ削り調整が施される。内面に径2cmの円が2列に巡るもの(173)がある。円の痕以外は降灰がかかっており、小形製品双耳瓶の蓋が置かれていたものとみられる。底部に「×」のヘラ記号のあるもの(181)が1点ある。

高盤 (第20図：182~197)

口縁端部の形態により分類した。a類(182~187)は基部径が細くて高い脚を有し、浅い皿状の口縁端部が折り返されずに引き上げられて、先端部が丸い形態のもの(182)と角状のもの(183~185)とがある。b類(188~197)は盤Bと同様な口縁端部が「く」の字状に折り返されたもので、脚部の径がa類より大きい。

鉢A (第21図：198)

口縁部が内彎した金属器の鉄鉢を模したもので1点のみ出土した。

鉢B (第21図：199~217)

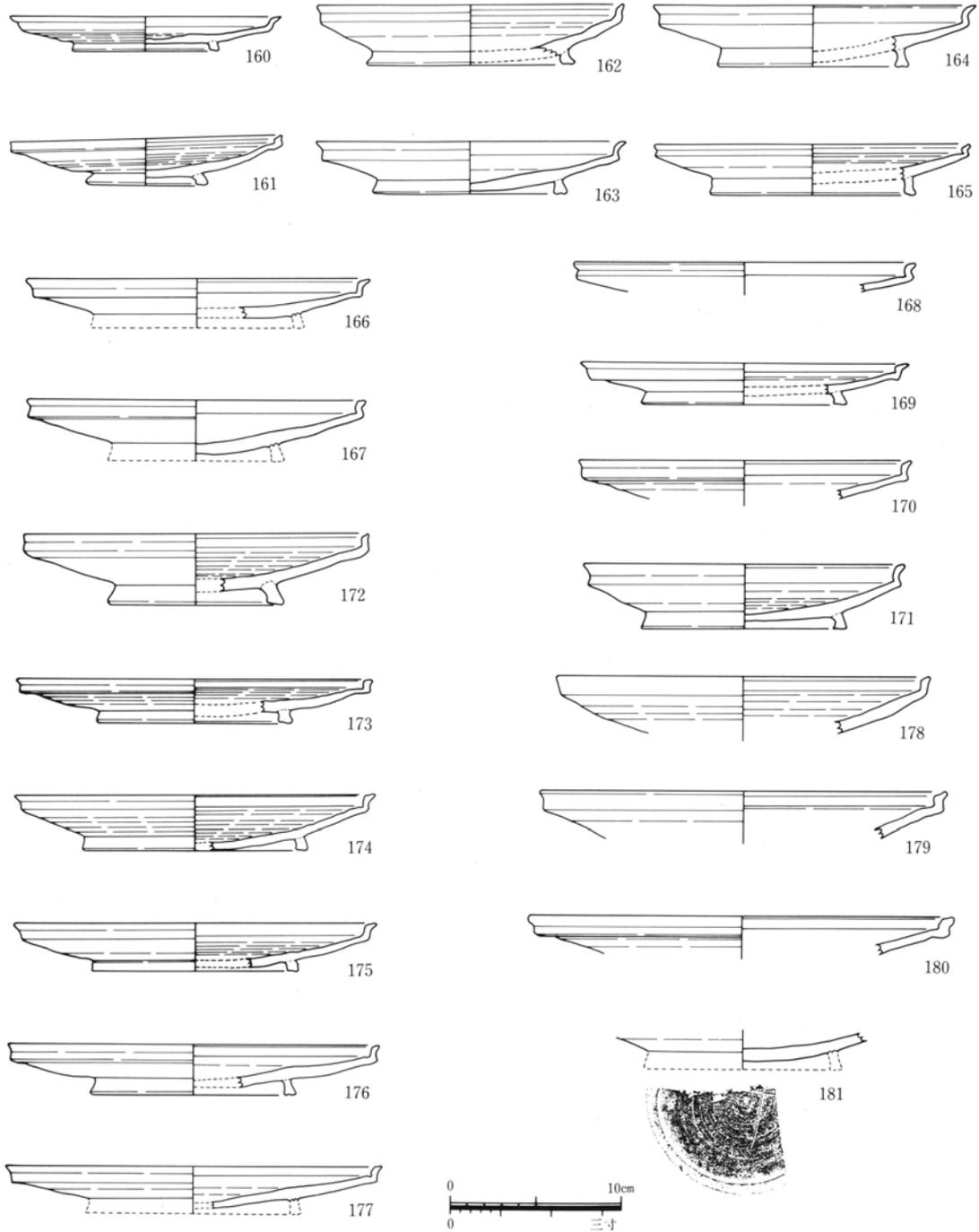
平底の底部から丸みを持って内彎気味に立ち上がり、口頸部は外反する。短頸壺に近似する。胴部の形態には丸みが強く球形を呈するもの(202・205・214・217)と直線的に開くもの(199・200・203・207)とがある。底部には糸切り痕がそのまま残る。回転ヘラ削り調整が施されたもの(209)もあるが、別の器種の可能性もある。

鉢C (第22図：218~224)

厚く平らな底部からほぼ直線的に斜め上方にのびて体部を形成する。口縁はやや外反した器形で、「播鉢」とよばれているものである。底部には糸切り痕がのこり、多くの小孔を開いたもの(222)もある。片口が付くもの(223)もある。

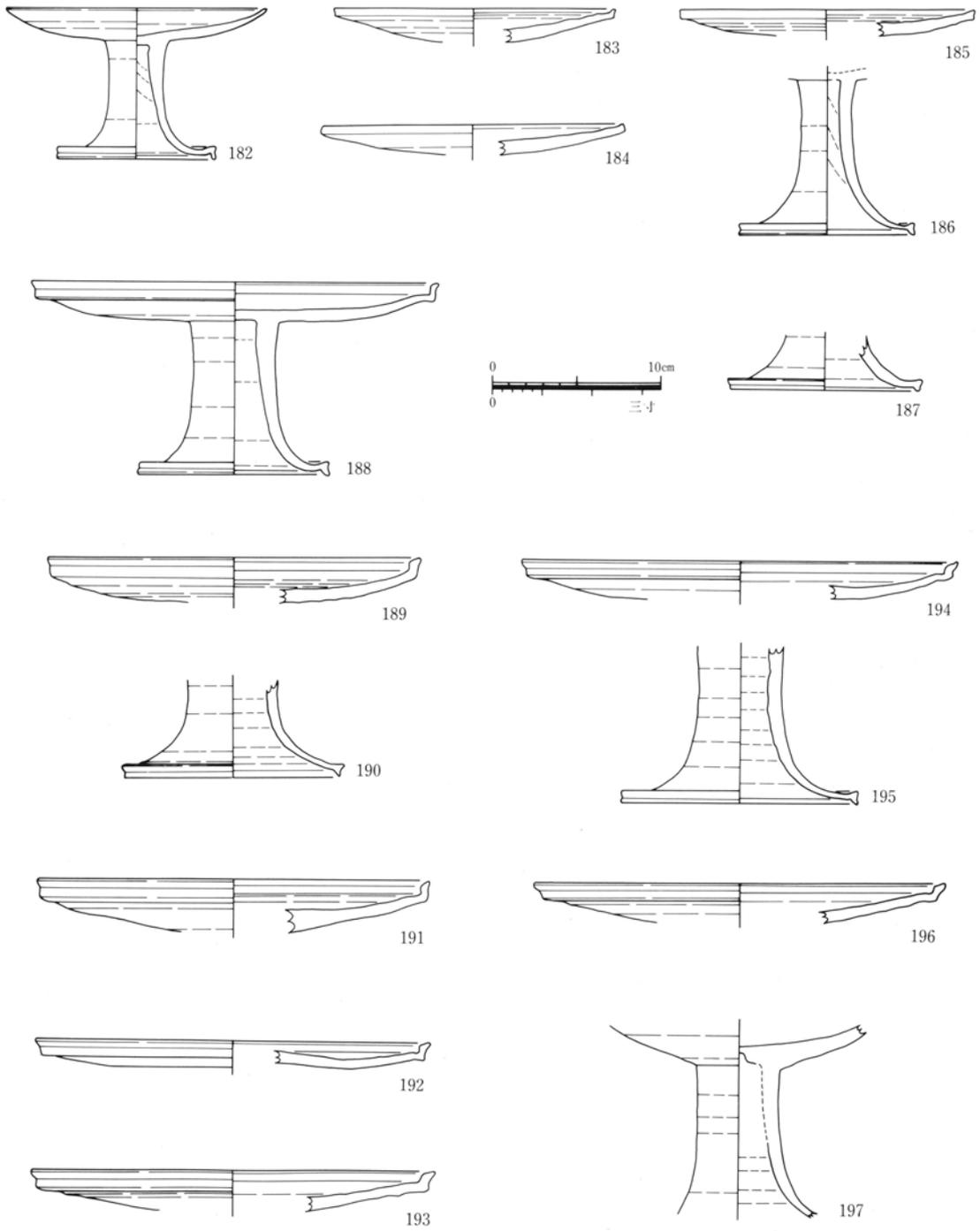
大形浅鉢 (第22図：225~229)

平な底部から斜め上方に開いて立ち上がり、胴部のなかほどには半環状把手が相対して2ヶ所に付いており、口縁端部の中央がややくぼんで縁帯状を呈する。底部縁には製作時にしいた板痕?が残るもの(228・229)がある。



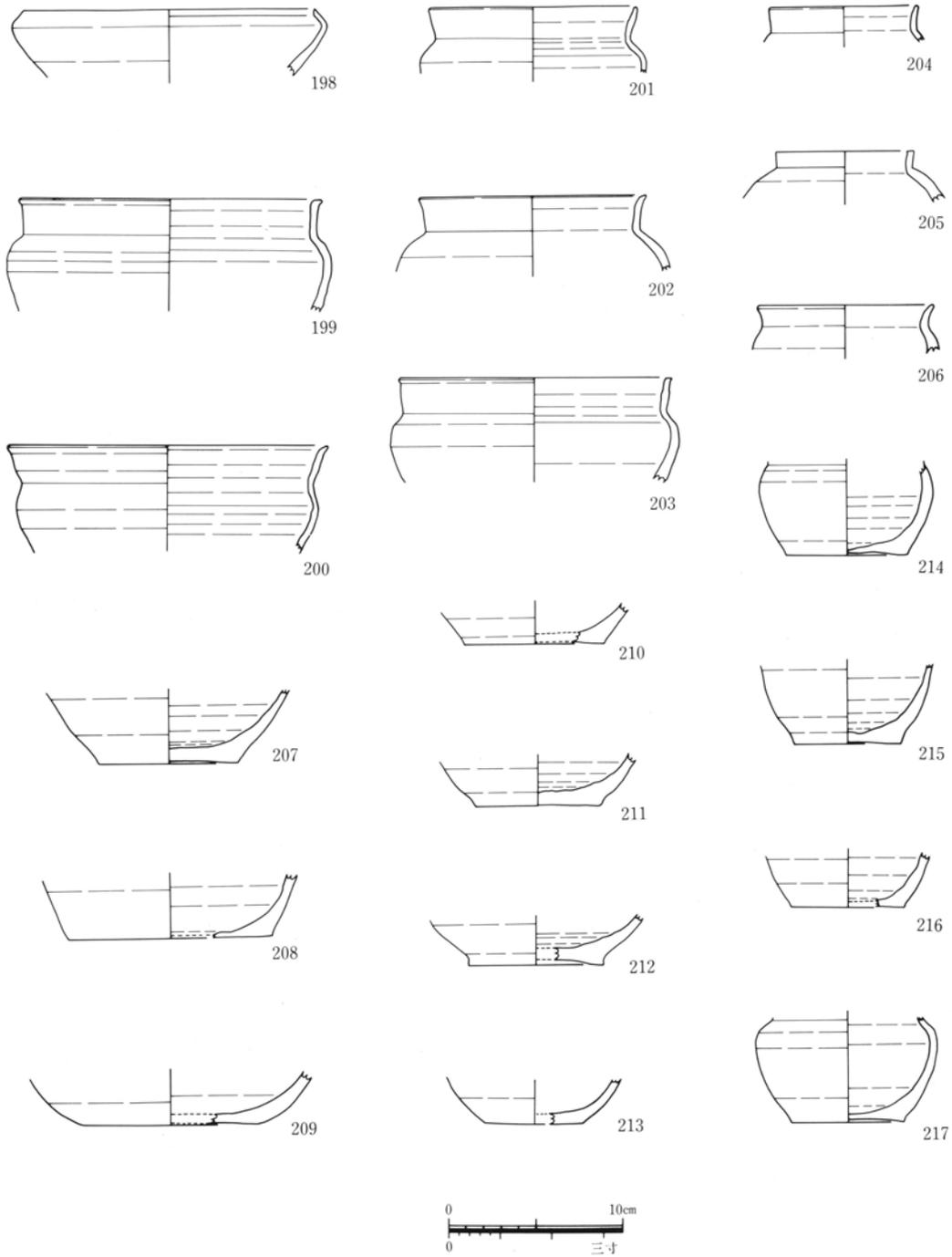
番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版	番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版
160	盤B	18.2	11.8	3.0	0/12, 1/12	法量図, 径指16		171	盤B	18.8	11.8	3.8	0/12, 6/12	法量図, 径指20	
161	盤B	15.8	6.8	2.7	10/12, 11/12	法量図, 径指17	6	172	盤B	20.1	9.9	4.2	1/12, 3/12	法量図, 径指21	
162	盤B	17.8	11.8	3.6	1/12, 1/12	法量図, 径指20		173	盤B	20.5	11.1	2.6	1/12, 2/12	法量図, 径指13, 内面 径2cm版, 2列で通る	
163	盤B	18.0	11.2	3.1	3/12, 3/12	法量図, 径指17	6	174	盤B	21.0	12.8	3.2	1/12, 2/12	法量図, 径指15	
164	盤B	18.8	10.8	3.6	0/12, 1/12	法量図, 径指19		175	盤B	21.0	12.0	3.0	0/12, 1/12	法量図, 径指13	
165	盤B	18.2	11.8	3.6	0/12, 1/12	法量図, 径指20		176	盤B	21.7	11.8	3.0	1/12, 5/12	法量図, 径指14	
166	盤B	20.0		(2.5)	0/12			177	盤B	22.0		(2.6)	3/12		
167	盤B	19.7		(3.2)	0/12			178	盤B	21.8		(3.4)	3/12		
168	盤B	10.2		(2.6)	12/12			179	盤B	23.6		(2.8)			
169	盤B	19.0	11.9	2.4	1/12, 1/12	法量図, 径指13		180	盤B	24.4		(2.3)	1/12		
170	盤B	19.3		(2.4)	2/12			181	盤B			(1.8)			

第19図 黒笹40号窯跡出土遺物実測図(7)



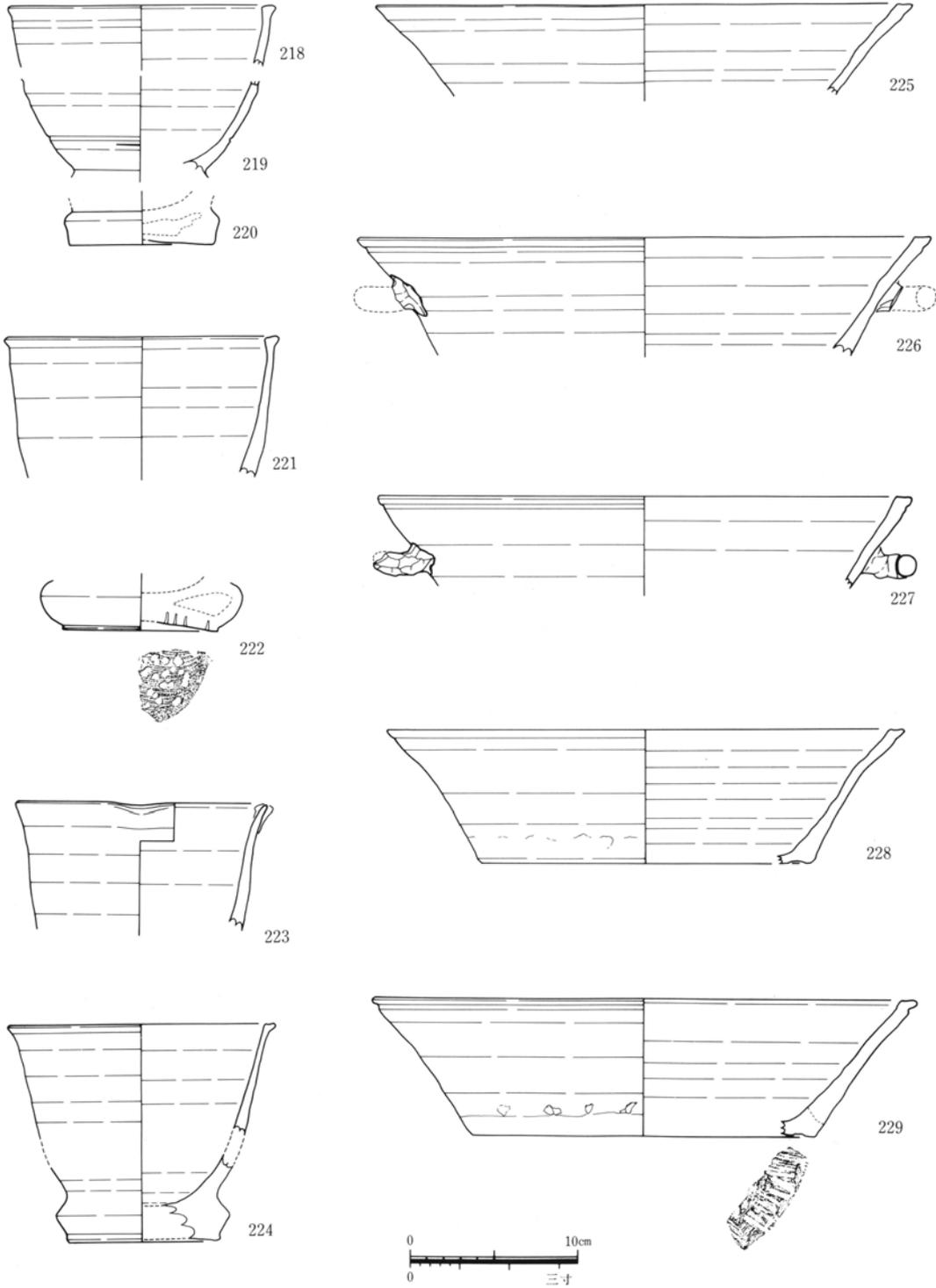
番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版	番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版
182	高盤a	15.4	9.4	9.0	1/12, 9/12		6	190	高盤b		12.8	(5.9)	0/12		
183	高盤a	16.6		(2.1)	1/12			191	高盤b	23.2		(3.2)	1/12		
184	高盤a	17.8		(2.0)	1/12			192	高盤b	23.4		(1.8)	3/12		
185	高盤a	17.4		(1.6)	2/12			193	高盤b	24.0		(2.5)	0/12		
186	高盤a		10.4	(9.8)	11/12			194	高盤b	25.6		(2.3)	1/12		
187	高盤a	11.0		(3.5)	4/12			195	高盤b		14.0	(9.5)	3/12		
188	高盤b	24.0	11.4	11.5	6/12, 2/12		6	196	高盤b	24.6		(2.5)	0/12		
189	高盤b	22.0		(2.8)	3/12			197	高盤b			(12.0)	0/12, 0/12		

第20図 黒笹40号窯跡出土遺物実測図(8)



番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版	番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版
198	鉢A	16.7		(4.0)	1/12		6	208	鉢B			(3.6)			
199	鉢B	17.4		(5.5)	2/12			209	鉢B		10.0	(3.1)	0/12		
200	鉢B	18.4		(6.4)	2/12			210	鉢B		8.0	(2.4)	2/12		
201	鉢B	12.1		(3.9)	1/12			211	鉢B		7.2	(3.0)	5/12		
202	鉢B	13.0		(4.5)	2/12			212	鉢B		7.7	(3.0)	3/12		
203	鉢B	15.6		(6.1)	3/12			213	鉢B		5.6	(2.7)	2/12		
204	鉢B	8.6		(2.1)	1/12			214	鉢B		6.9	(5.5)	12/12		
205	鉢B	8.0		(3.0)	1/12	再利用		215	鉢B			(4.5)		再利用	
206	鉢B	10.2		(2.8)	1/12			216	鉢B		6.6	(3.2)	2/12		
207	鉢B		8.0	(4.4)	3/12			217	鉢B		6.4	(6.0)	7/12		

第21図 黒笹40号窯跡出土遺物実測図(9)



番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版	番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版
218	鉢C	16.0		(3.6)	1/12			224	鉢C	16.0	8.6	(13.2)	4/12, 4/12		6
219	鉢C			(5.5)				225	大型浅鉢	32.0		(6.0)	1/12		
220	鉢C		8.6	(2.5)	5/12			226	大型浅鉢	34.2		(5.8)	1/12		
221	鉢C	16.4		(8.5)	3/12			227	大型浅鉢	31.8		(5.6)	1/12		
222	鉢C		9.1	(3.0)	2/12			228	大型浅鉢	30.8	19.6	8.1	2/12, 1/12		
223	鉢C	15.0		(7.7)	1/12			229	大型浅鉢	32.4	20.4	8.4	0/12, 1/12		

第22図 黒笹40号窯跡出土遺物実測図 (10)

浄瓶 (第23図：230～239)

頸部中央に二重沈線が施されているもの (235) がある。

水瓶 (第23図：240)

頸部には二重沈線が施されている。

浄瓶・水瓶の底部 (第23図：241～250)

長頸瓶の高台より高く、外に開く高台で、底部のみでは浄瓶・水瓶の区別ができない。

長頸瓶 (第23図～第26図、第28図、第30図：251～314・340～343・389・390)

口縁端部が外反してやや幅広い口縁帯をつくりだし、外に開く高台の付いた底部から直線的に斜めに立ち上がり肩に張りが見られる。口頸部は口径に比して基部径が小さい。口頸部と胴部の接合は三段構成で接合され、二段構成の接合はない。口縁端部には上端をひき出したもの (251～253・257・259・260・262～266・268～270・275)、上下端をひきだしたもの (254～256・258・261・267・271～274) とがみられ、口縁端部内面に段、外側に口縁帯をつくりだしている。大形の長頸瓶 (340) と小形の長頸瓶 (389・390)、環状把手付長頸瓶 (341～343) がある。

平瓶 (第26図：315～323)

口頸部が接合される胴部上面は平坦である。図示しなかったが断面が長方形の扁平な把手が胴部上面の平坦な面に付く。

双耳瓶蓋 (第27図：324～328)

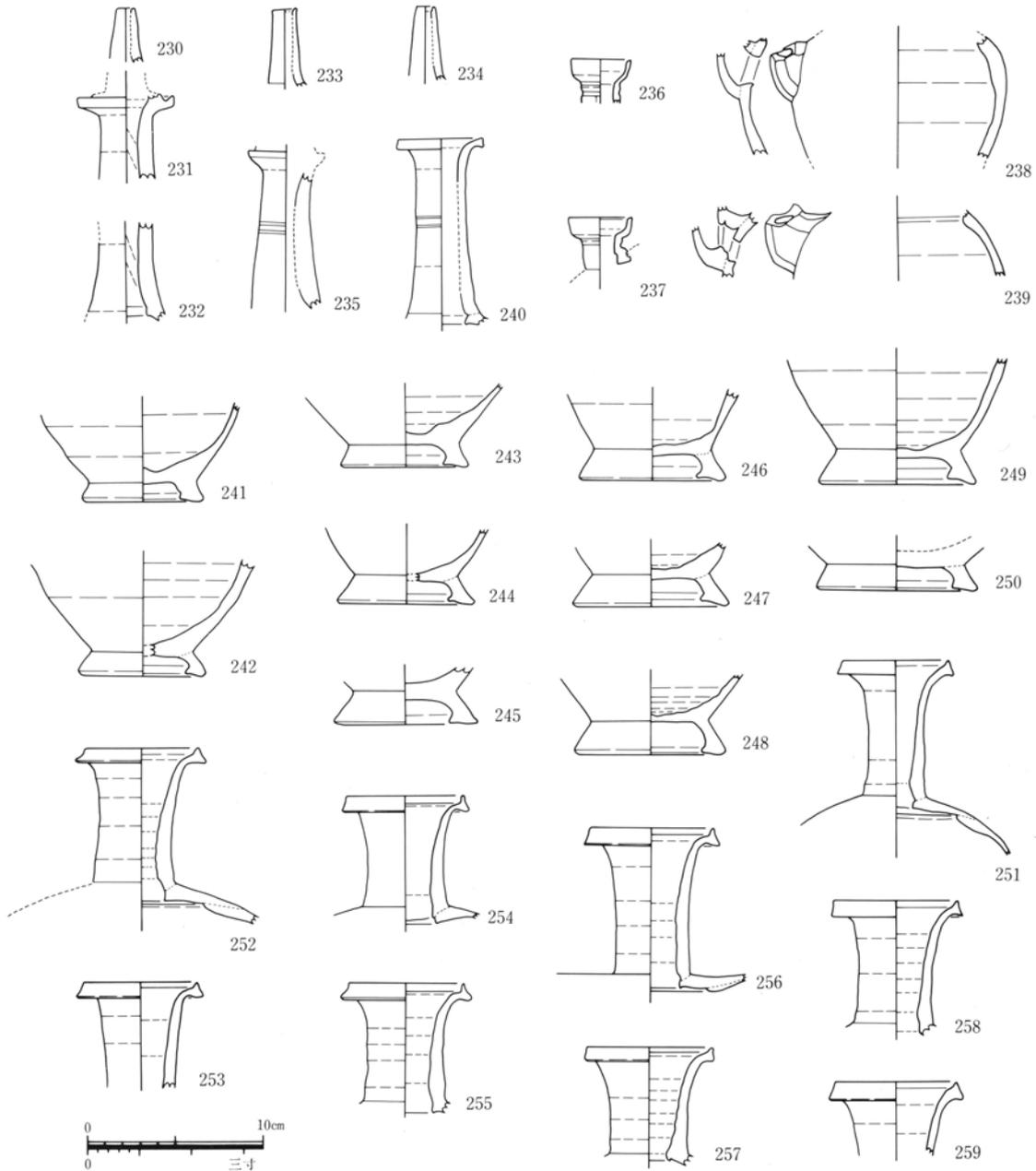
円筒状を呈し頂部が丸みを帯びたもの (324・326) と平なもの (325・328・327) がある。

双耳瓶 (第27図：329～339)

口頸部は短く外反して口縁帯をつくりだし、胴部はやや肩が張る。肩には板状の耳が付き、耳には円孔が一つ穿けられている。底部は平底である。双耳の耳も肩の張ったもの (329) となだらかで丸みのあるもの (330・332～335) とがある。

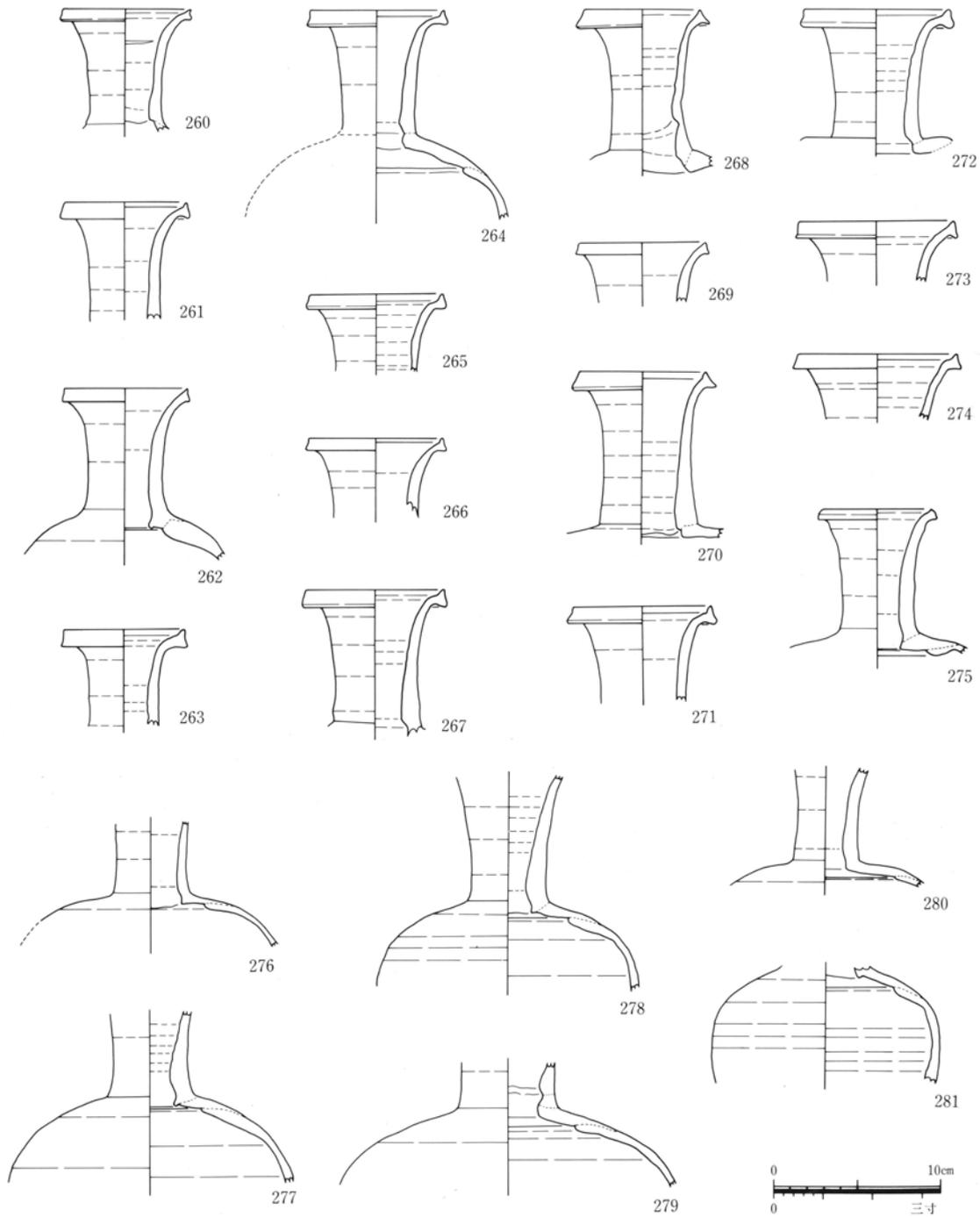
短頸壺 (第28図：344～353)

口頸部が短く直立し、胴部の肩が張ったもの (348・349) となだらかな丸みをもつもの (350・351) とがある。口縁端部にも丸く仕上げたもの (347・349・350)、内傾気味に仕上げたもの (348)、平坦に仕上げたもの (351) がある。底部は底径が大きく、長頸瓶と同様な高台が付けられる。底部に丁寧なつくりの獣足 (369) が付くものがある。



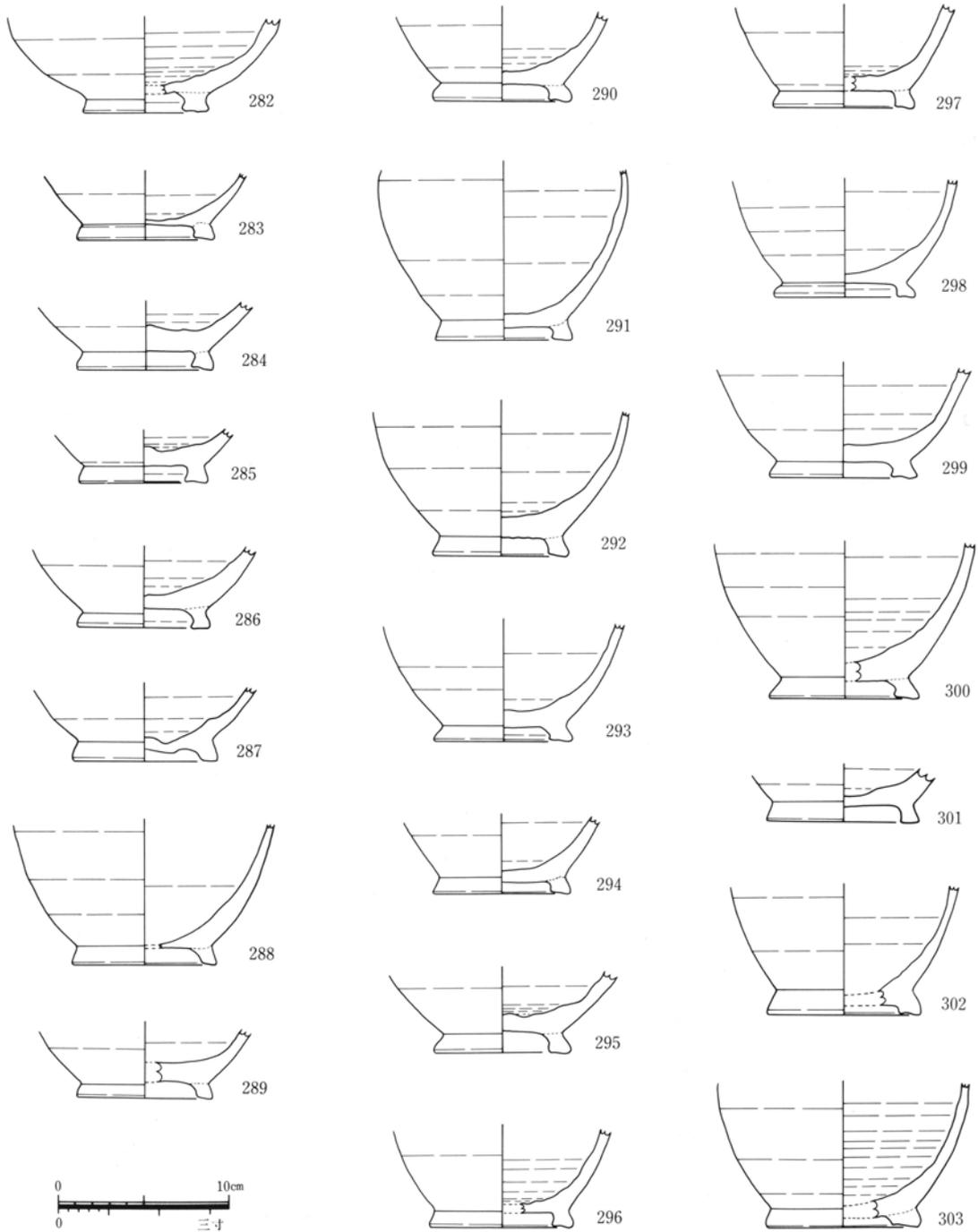
番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版	番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版
230	浄瓶	1.1		(3.4)	12/12			6	245	浄瓶・水瓶		7.4 (3.5)	10/12		
231	浄瓶			(4.7)				6	246	浄瓶・水瓶		8.0 (5.1)	5/12		6
232	浄瓶			(5.8)				6	247	浄瓶・水瓶		8.4 (3.6)	5/12		
233	浄瓶	1.3		(4.5)	10/12			6	248	浄瓶・水瓶		8.1 (4.6)	12/12		6
234	浄瓶	1.0		(4.4)	12/12			6	249	浄瓶・水瓶		8.6 (7.4)	12/12	再利用	
235	浄瓶			(7.8)				6	250	浄瓶・水瓶		8.6 (2.5)	11/12		
236	浄瓶			(2.5)				6	251	長頸瓶	6.0	(11.2)	11/12		7
237	浄瓶	3.6		(2.8)	8/12			6	252	長頸瓶	6.4	(10.1)	12/12		
238	浄瓶			(7.0)				6	253	長頸瓶	6.4	(6.1)	12/12		
239	浄瓶			(3.8)				6	254	長頸瓶	6.6	(7.3)	2/12		
240	水瓶	4.8		(10.8)	7/12			6	255	長頸瓶	6.5	(7.4)	6/12		
241	浄瓶・水瓶		7.4	(5.5)	11/12				256	長頸瓶	7.0	(9.4)	6/12		
242	浄瓶・水瓶		6.8	(6.8)	5/12				257	長頸瓶	7.1	(6.8)	3/12		
243	浄瓶・水瓶		7.0	(4.7)	10/12	再利用			258	長頸瓶	7.0	(7.6)	7/12		7
244	浄瓶・水瓶		7.6	(4.5)	7/12				259	長頸瓶	6.8	(4.3)	10/12		

第23図 黒笹40号窯跡出土遺物実測図 (11)



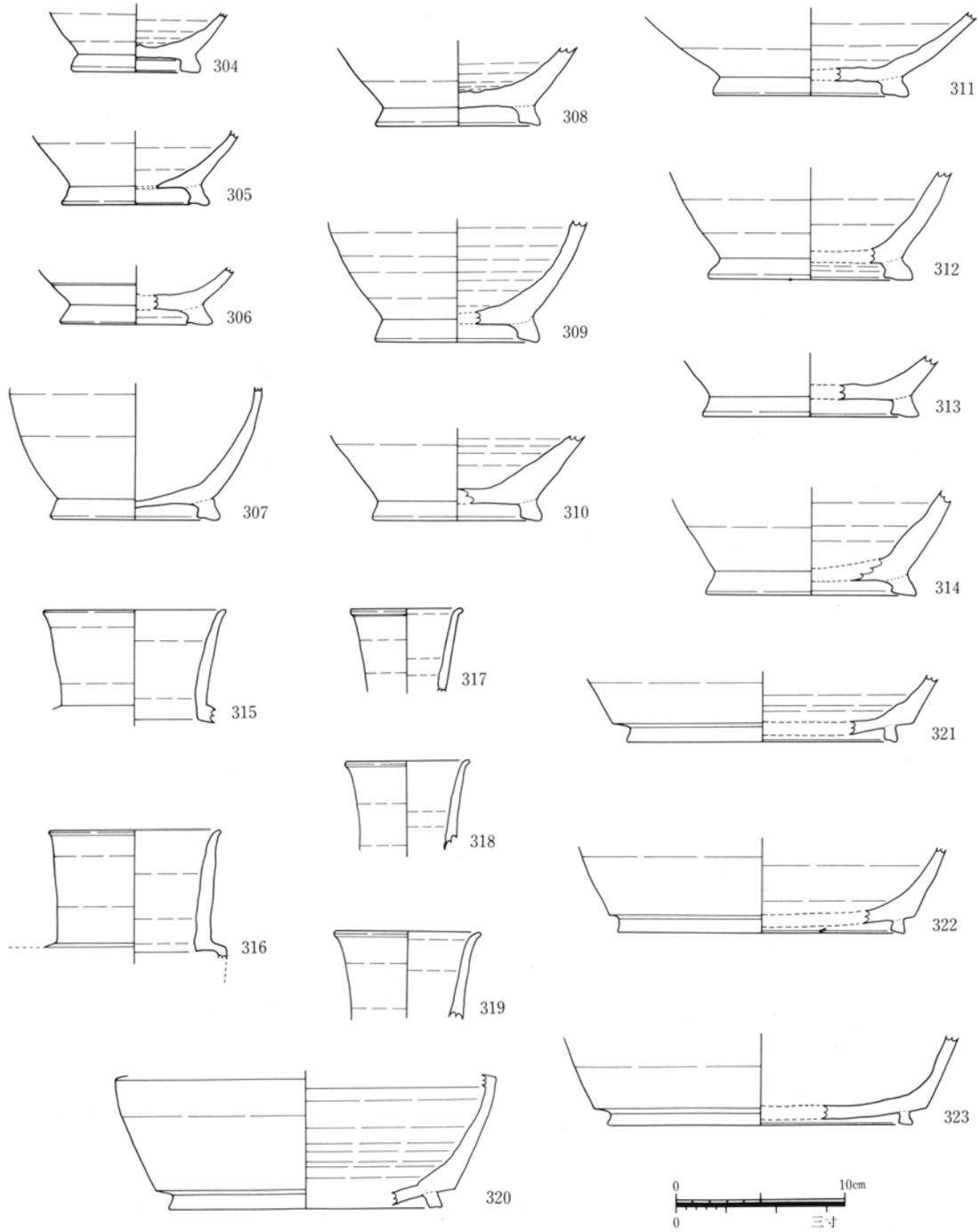
番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版	番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版
260	長頸瓶	7.6		(7.4)	12/12			271	長頸瓶	8.0		(5.7)	4/12		7
261	長頸瓶	7.4		(7.1)	11/12			272	長頸瓶	8.7		(8.7)	4/12		
262	長頸瓶	7.3		(10.4)	6/12			273	長頸瓶	9.2		(3.6)	5/12		
263	長頸瓶	7.2		(5.8)	9/12			274	長頸瓶	9.4		(3.9)	3/12		
264	長頸瓶	8.0		(12.4)	8/12		7	275	長頸瓶	6.4		(8.9)	8/12		
265	長頸瓶	8.0		(4.6)	5/12			276	長頸瓶			(7.8)			7
266	長頸瓶	8.0		(4.8)	2/12			277	長頸瓶			(10.4)			
267	長頸瓶	8.2		(8.6)	12/12		7	278	長頸瓶			(13.0)			
268	長頸瓶	6.9		(9.9)	8/12			279	長頸瓶			(7.5)			
269	長頸瓶	7.6		(3.6)	8/12			280	長頸瓶			(7.3)			
270	長頸瓶	7.5		(10.1)	12/12			281	長頸瓶			(7.1)			

第24図 黒笹40号窯跡出土遺物実測図(12)



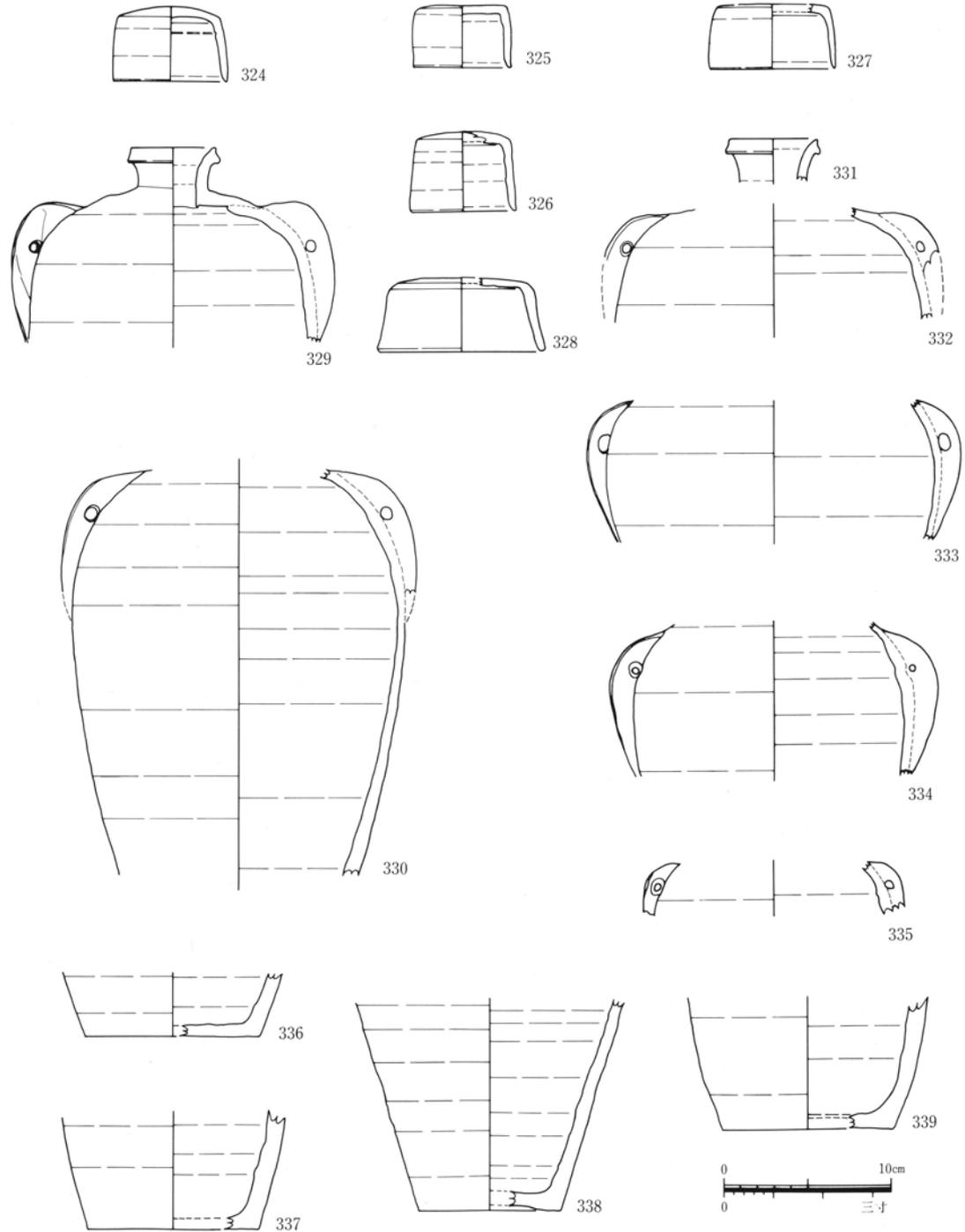
番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版	番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版
282	長頸瓶		7.2	(5.5)	4/12			293	長頸瓶		8.0	(6.8)	5/12		7
283	長頸瓶		8.0	(3.7)	5/12			294	長頸瓶		8.0	(4.5)	5/12		
284	長頸瓶		7.8	(4.0)	12/12			295	長頸瓶		8.0	(4.8)	3/12		
285	長頸瓶		7.4	(3.3)	11/12			296	長頸瓶		8.4	(5.7)	2/12	再利用	
286	長頸瓶		7.6	(4.6)	6/12			297	長頸瓶		8.2	(6.0)	5/12	再利用	
287	長頸瓶		8.4	(4.4)	12/12		7	298	長頸瓶		8.0	(6.8)	6/12		
288	長頸瓶		8.3	(8.4)	6/12			299	長頸瓶		8.6	(6.3)	12/12		
289	長頸瓶		7.8	(4.3)	2/12	再利用		300	長頸瓶		8.8	(9.2)	4/12		7
290	長頸瓶		8.0	(5.4)	3/12			301	長頸瓶		8.9	(3.2)	12/12		
291	長頸瓶		8.0	(10.3)	6/12	再利用		302	長頸瓶		9.0	(7.4)	1/12	再利用	
292	長頸瓶		8.0	(8.6)	3/12			303	長頸瓶		8.8	(8.5)	2/12		

第25図 黒笹40号窯跡出土遺物実測図 (13)



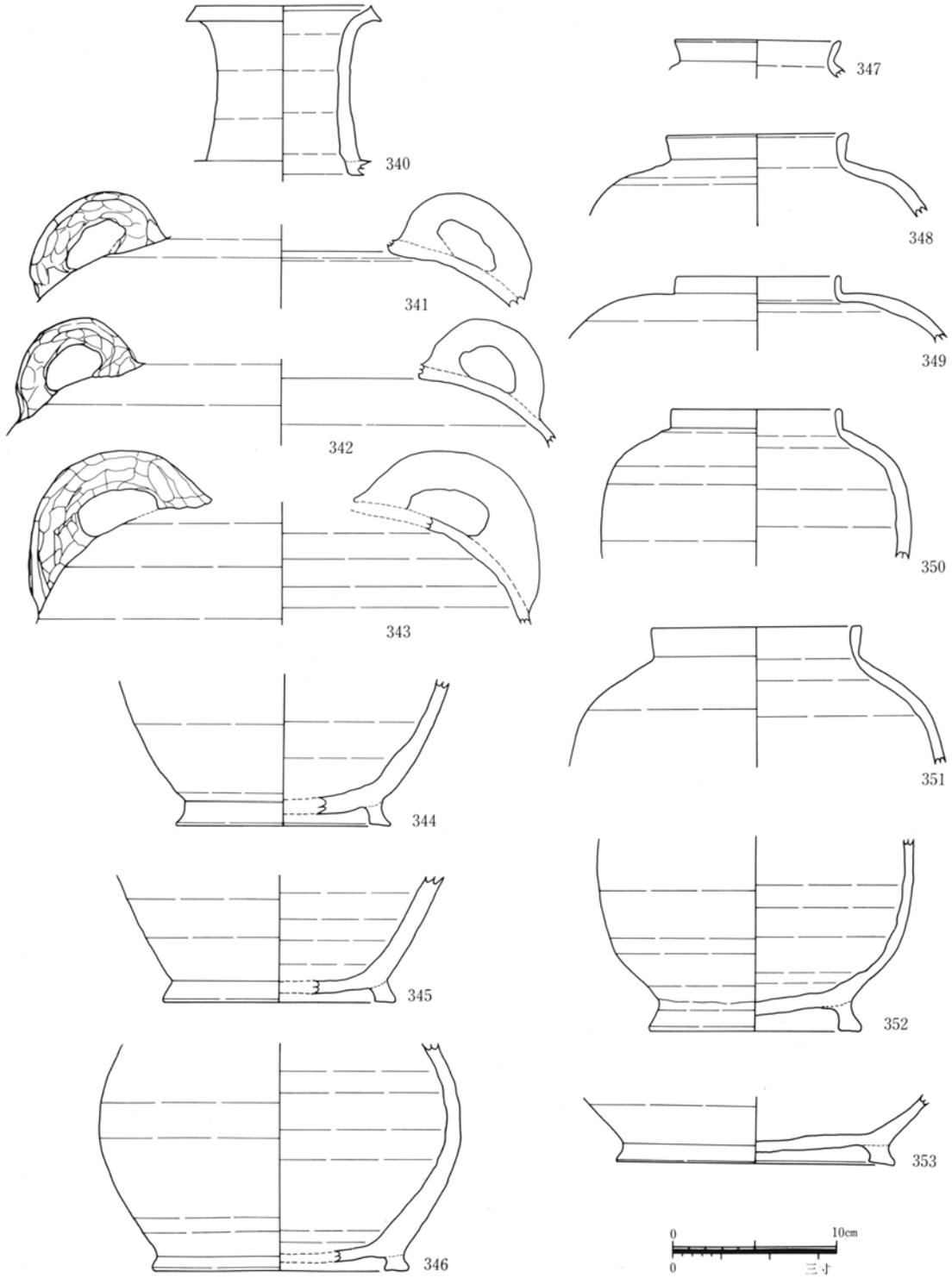
番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版	番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版
304	長頸瓶		7.3	(3.6)	12/12			314	長頸瓶		12.4	(6.6)	4/12		
305	長頸瓶		8.4	(4.5)	12/12			315	平瓶	10.6		(6.5)	0/12		
306	長頸瓶		8.6	(3.5)	5/12			316	平瓶	10.0		(7.6)	2/12		
307	長頸瓶		9.5	(8.0)	2/12	再利用		317	平瓶	6.6		(5.0)	3/12		
308	長頸瓶		9.6	(4.5)	6/12	再利用		318	平瓶	7.2		(5.3)	12/12		
309	長頸瓶		9.6	(7.3)	5/12	再利用		319	平瓶	8.4		(5.4)	3/12		
310	長頸瓶		10.0	(5.0)	2/12			320	平瓶		16.0	(7.8)	1/12		
311	長頸瓶		11.4	(5.1)	5/12	再利用		321	平瓶		16.0	(4.0)	2/12		
312	長頸瓶		12.0	(6.5)	2/12			322	平瓶		17.0	(5.1)	2/12	再利用	
313	長頸瓶		12.6	(3.6)	3/12			323	平瓶		18.0	(5.2)	1/12	再利用	

第26図 黒笹40号窯跡出土遺物実測図(14)



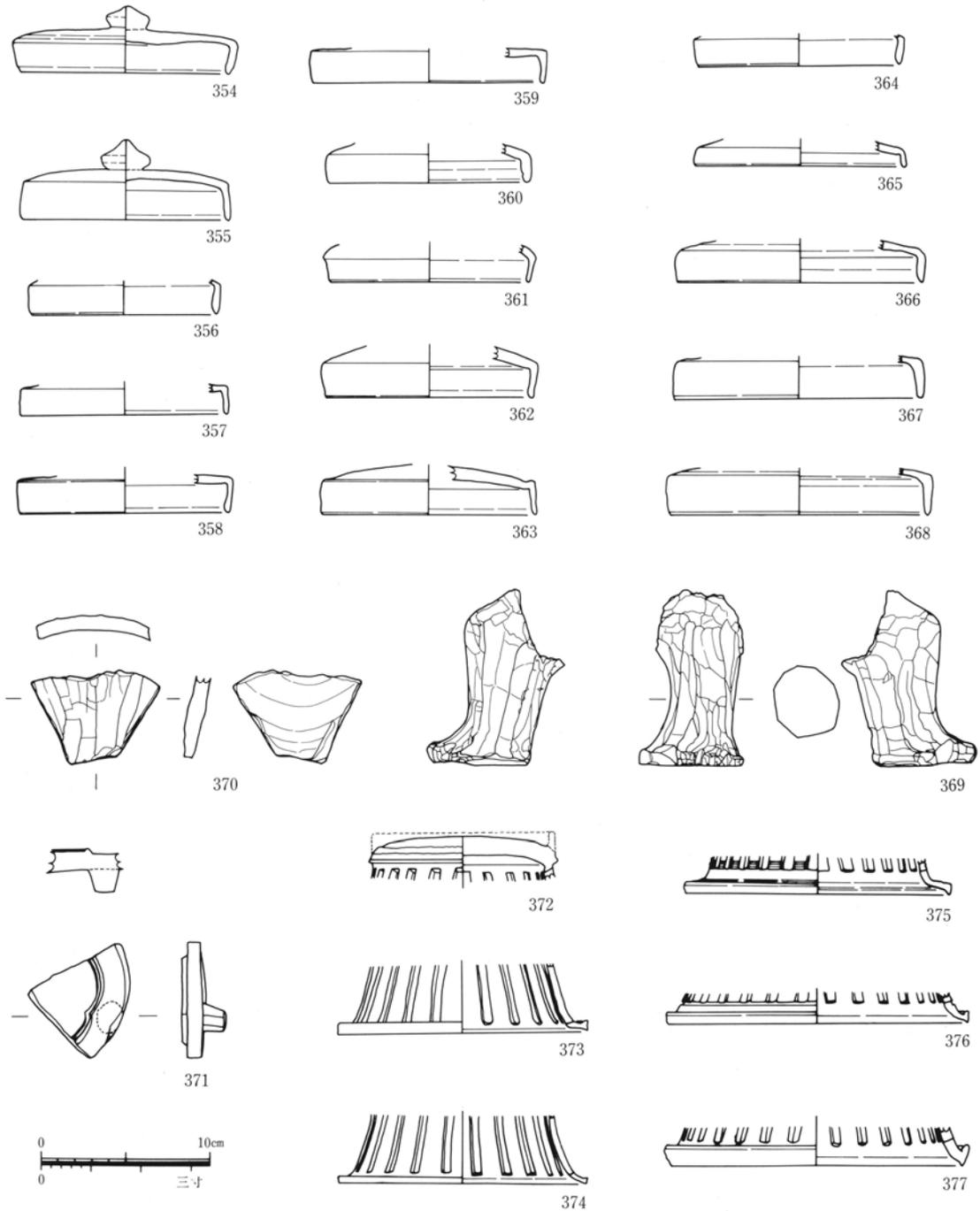
番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版	番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版
324	双耳瓶蓋	6.8	肩 6.1	4.5	10/12, 12/12		7	332	双耳瓶			(7.0)			
325	双耳瓶蓋	5.8	肩 5.2	3.7	7/12, 12/12		7	333	双耳瓶			(8.0)		再利用か	
326	双耳瓶蓋	6.2	肩 5.6	4.8	1/12, 3/12			334	双耳瓶			(9.0)			
327	双耳瓶蓋	7.3	肩 6.6	(4.0)	1/12, 3/12			335	双耳瓶			(2.8)			
328	双耳瓶蓋	9.5	肩 8.6	4.4	0/12, 2/12			336	双耳瓶		10.4	(3.7)	3/12	再利用か	
329	双耳瓶	5.0		(11.6)	12/12		7	337	双耳瓶		10.2	(6.5)	2/12	再利用	
330	双耳瓶			(24.0)				338	双耳瓶		8.4	(12.8)	3/12	再利用か	
331	双耳瓶	5.2		(2.6)	6/12			339	双耳瓶		10.2	(8.0)	4/12		

第27図 黒笹40号窯跡出土遺物実測図 (15)



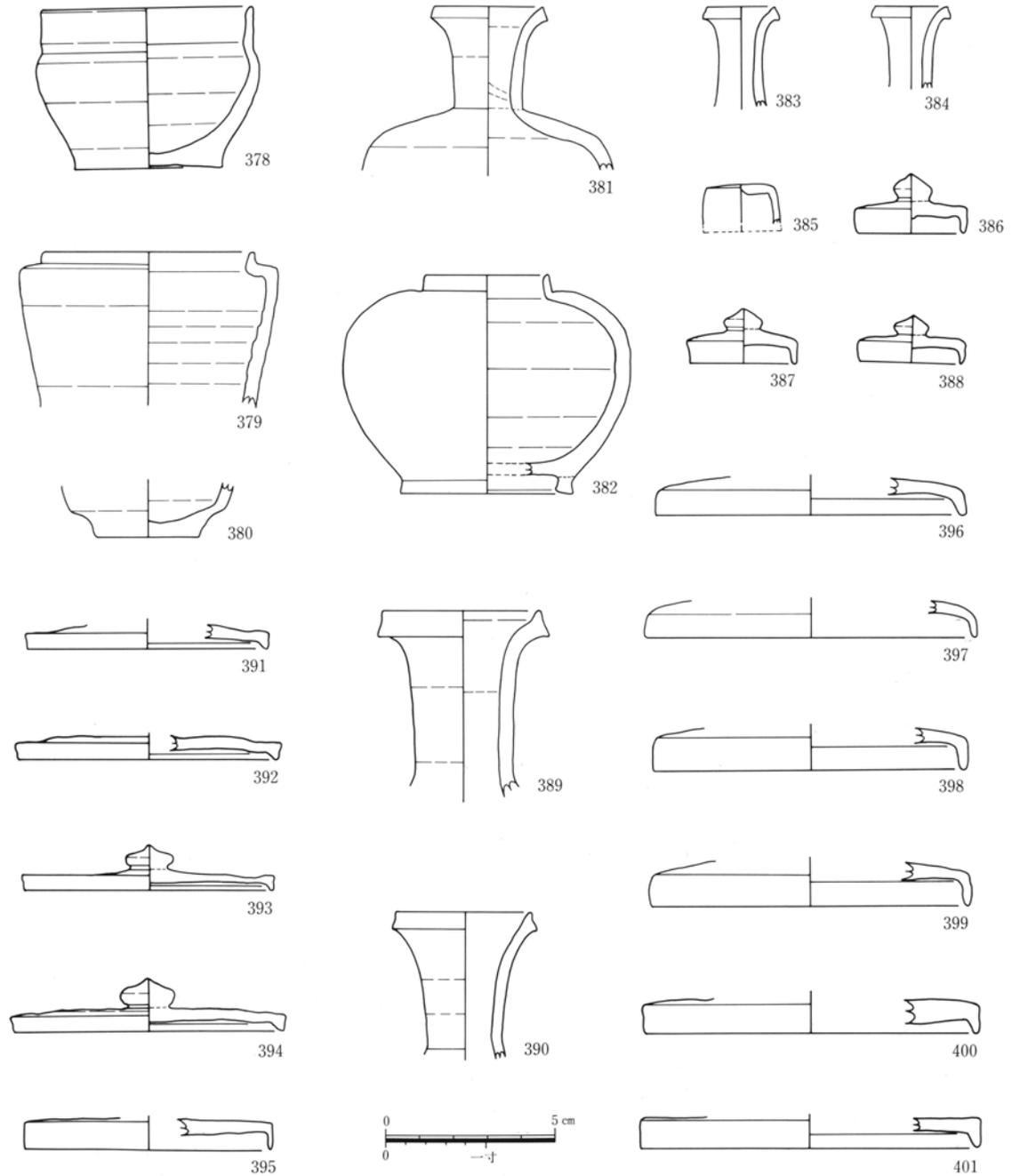
番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版	番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版
340	長頸瓶	10.6		(10.5)			7	347	短頸壺	10.0		(2.1)	1/12		
341	環状耳付長頸瓶			(4.4)				348	短頸壺	11.0		(5.0)	2/12		
342	環状耳付長頸瓶			(5.0)			8	349	短頸壺	10.0		(4.1)	1/12		
343	環状耳付長頸瓶			(7.0)	2/12			350	短頸壺	10.2		(9.3)	1/12		8
344	短頸壺		13.0	(9.0)	0/12			351	短頸壺	12.8		(8.5)	2/12		
345	短頸壺		14.0	(7.6)	2/12	再利用		352	短頸壺		12.8	(11.6)	6/12		8
346	短頸壺		15.4	(14.1)	2/12	再利用	8	353	短頸壺		16.8	(4.0)	12/12		

第28図 黒笹40号窯跡出土遺物実測図(16)



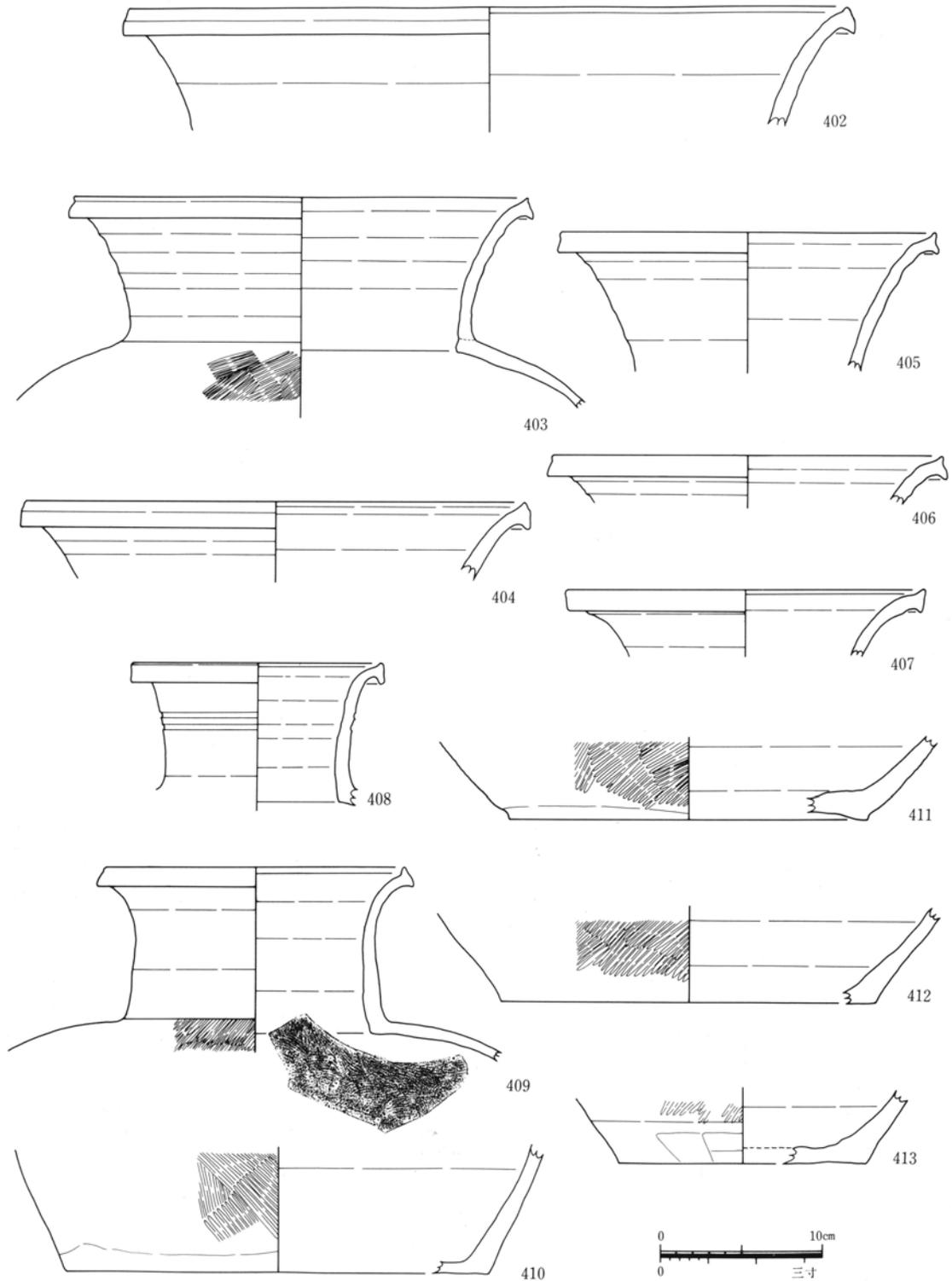
番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版	番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版
354	短頸壺蓋	12.2	肩13.3	4.1	12/8, 9/12		8	366	短頸壺蓋	21.8	肩21.0	(2.5)	1/12, 1/12		8
355	短頸壺蓋	12.2	肩12.2	4.8	12/5, 6/12		8	367	短頸壺蓋	21.0	肩20.0	(2.6)	0/12, 1/12		
356	短頸壺蓋	12.2	肩12.2	(2.1)	0/12, 1/12			368	短頸壺蓋	24.0	肩21.9	(3.0)	1/12, 1/12		
357	短頸壺蓋	12.3	肩12.8	(1.8)	1/12, 2/12			369	獸足						8
358	短頸壺蓋	13.7	肩14.0	(2.4)	0/12, 1/12			370	形象硯蓋						8
359	短頸壺蓋	11.7	肩12.8	(2.1)	1/12, 1/12			371	宝珠硯						8
360	短頸壺蓋	11.7	肩12.5	(2.3)	1/12, 1/12			372	円面硯		肩11.2	(3.1)	6/12		
361	短頸壺蓋	12.1	肩12.7	(2.2)	2/12, 0/12			373	円面硯		14.8	(4.0)	1/12		
362	短頸壺蓋	12.6	肩12.6	(3.0)	1/12, 1/12			374	円面硯		14.2	(4.1)	1/12		
363	短頸壺蓋	12.4	肩12.2	(3.0)	1/12, 1/12			375	円面硯		15.6	(2.0)	2/12		
364	短頸壺蓋	14.6	肩14.8	(1.9)	3/12, 4/12			376	円面硯		17.8	(1.7)	1/12		
365	短頸壺蓋	15.2	肩15.5	(1.5)	1/12, 1/12			377	円面硯		17.2	(2.2)	2/12		

第29図 黒笹40号窯跡出土遺物実測図 (17)



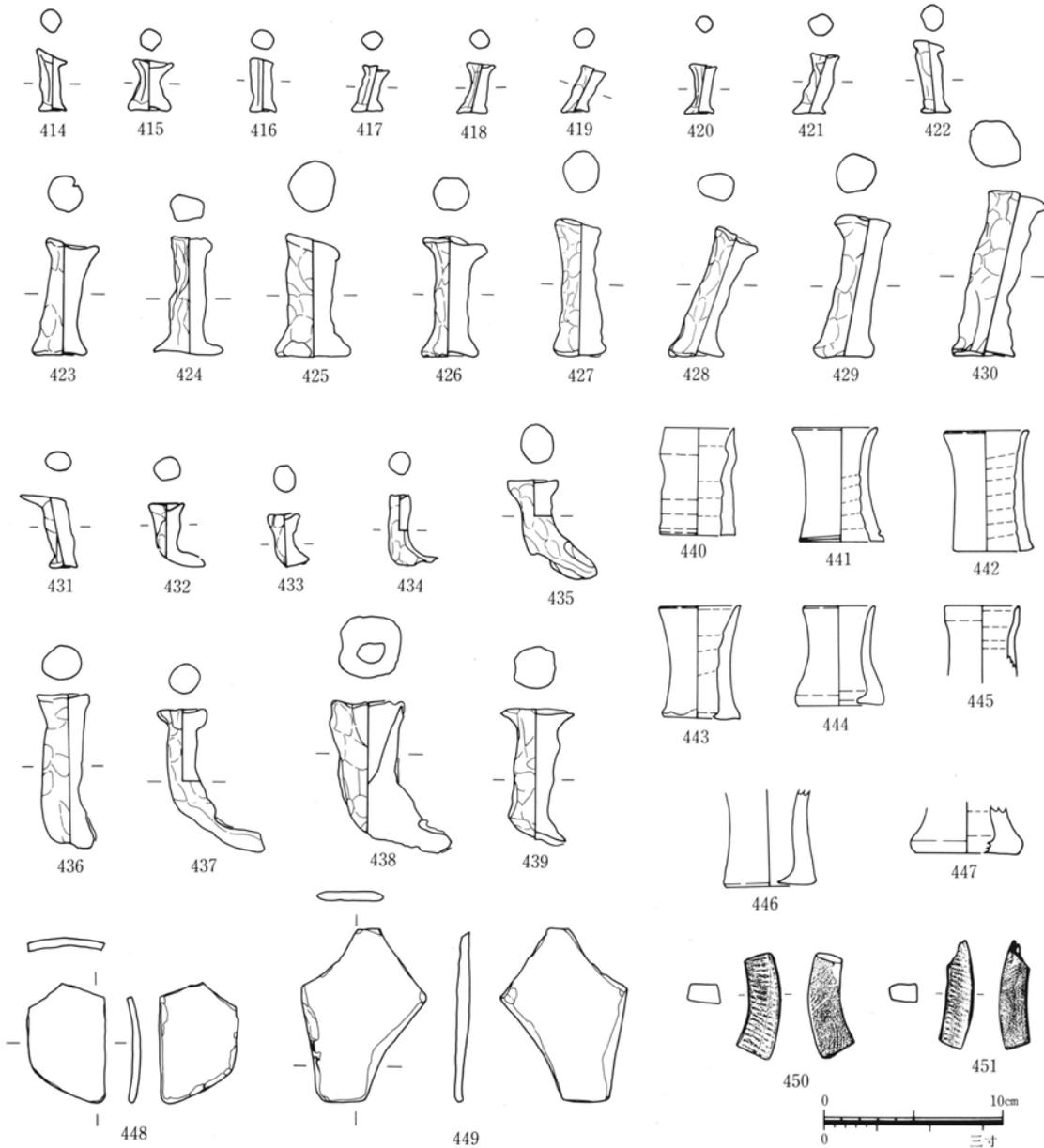
番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口径(肩)	その他	図版	番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口径(肩)	その他	図版
378	小形浅鉢	6.0	4.3	4.8	3/12, 6/12			390	長頸壺	4.0		(4.4)	3/12		
379	小形短頸壺	6.2		(4.6)	2/12			391	小形杯蓋	7.0		(肩0.8)	肩7.2		
380	小形短頸壺	2.8		(1.7)	12/12			392	小形杯蓋	7.5		(0.7)	肩7.7		
381	小形長頸壺	3.1		(5.0)			8	393	小形杯蓋	7.2		1.8	肩7.4		8
382	小形短頸壺	3.6	5.0	6.5	0/12, 4/12			394	小形杯蓋	7.9		2.0	肩8.0		8
383	小形長頸壺	2.0		(3.0)	12/12		8	395	小形蓋	7.2		(肩0.9)	2/12		
384	小形長頸壺	2.1		(2.4)	10/12		8	396	小形蓋	9.0		(肩1.1)	1/12		
385	小形双耳瓶蓋			(肩2.0)	肩2.0, 8/12		8	397	小形蓋	9.8		(肩1.1)	1/12		
386	小形短頸壺蓋	3.1		1.8	口6/12, 肩3.1, 12/12		8	398	小形蓋	9.2		(肩1.2)			
387	小形短頸壺蓋	3.1		1.6	肩3.2, 12/12		8	399	小形蓋	9.4		(肩1.3)	0/12		
388	小形短頸壺蓋	3.0		1.4	口12/12, 肩3.1, 12/12		8	400	小形蓋	9.6		(肩1.0)	1/12		
389	長頸壺	4.6		(5.5)	12/12			401	小形蓋	10.0		(肩0.9)	1/12		

第30図 黒笹40号窯跡出土遺物実測図(18)



番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版
402	甕	44.0		(7.4)	0/12	再利用	
403	甕	27.9		(12.6)	0/12		7
404	甕	30.6		(4.8)	1/12		
405	甕	23.0		(8.5)	1/12		
406	甕	24.0		(3.0)	0/12		
407	甕	22.0		(4.1)	0/12		
408	甕	15.4		(8.8)	3/12		7
409	甕	18.3		(11.5)	0/12		
410	甕		26.0	(8.0)	1/12	再利用	
411	甕		22.0	(5.4)	2/12		
412	甕		23.0	(6.0)	1/12		
413	甕		15.0	(4.4)	2/12		

第31図 黒笹40号窯跡出土遺物実測図 (19)



番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版	番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版
414	窯道具		胴1.1	3.5				433	窯道具		胴1.1	(3.0)			
415	窯道具		胴1.1	2.9				434	窯道具		胴1.1	4.0			
416	窯道具		胴1.1	3.0				435	窯道具		胴1.7	5.6			
417	窯道具		胴1.1	2.6				436	窯道具		胴2.1	8.7			
418	窯道具		胴1.0	2.8				437	窯道具		胴1.7	8.0			
419	窯道具		胴1.1	2.6				438	窯道具		胴3.2	8.6			
420	窯道具		胴0.9	2.8				439	窯道具		胴3.2	7.7			
421	窯道具		胴1.3	3.4				440	窯道具	3.8	底4.2	6.0	1/12, 12/12		
422	窯道具		胴1.1	4.0				441	窯道具	4.7	底4.6	6.4	3/12, 12/12		
423	窯道具		胴1.9	6.6				442	窯道具	4.2	底4.5	6.8	11/12, 12/12		
424	窯道具		胴1.9	6.5				443	窯道具	4.5	底4.2	6.3	12/12, 12/12		
425	窯道具		胴2.5	6.9				444	窯道具	4.0	底4.8	5.6	3/12, 6/12		
426	窯道具		胴1.9	6.8				445	窯道具		底4.9	(5.4)	0/12		
427	窯道具		胴1.8	7.7				446	窯道具		底2.4	(2.6)			
428	窯道具		胴1.9	7.3				447	窯道具		底2.8	(1.2)			
429	窯道具		胴2.2	8.0				448	整形具						8
430	窯道具		胴2.7	9.3				449	整形具						8
431	窯道具		胴1.4	4.1				450	窯道具						
432	窯道具		胴1.5	(3.7)				451	窯道具						

第32図 黒笹40号窯跡出土遺物実測図(20)

短頸壺蓋 (第29図：354～368)

蓋の頂部に宝珠の付くもの (354・355)、天井部が平坦なもの (357～359)、丸みを帯びたもの (356・360～368) がある。

硯 (第29図：370～377)

宝珠硯の一部で面取りした短い脚が付くもの (371) と円面硯の一部で長方形の透かし孔のある裾広がりの台脚が付くもの (372～377) がある。杯蓋か盤を利用した、鳥の尾の部分 (370) があり、形象硯の蓋とおもわれる。

小形品 (第30図：378～388・391～401)

小形模造仮器で、浅鉢 (378)、短頸壺 (379・382)、長頸瓶 (381・383・384)、双耳瓶蓋 (385)、宝珠の付いた短頸壺蓋 (386～388)、蓋 (395～401)、杯蓋 (391・392)、宝珠鈕の付く杯蓋 (393・394) がある。

甕 (第31図：402～413)

口頸部の形態により、口頸部が大きく外に開くA類 (402～407) では、口縁部は端部を上下にひきだして幅の広い口縁帯をつくり出している。口頸部が直線的に立ち上がったB類 (408・409) のうち、口頸部中央に二条の沈線が施されたもの (408) は広口壺の可能性もある。胴部外面には平行叩き痕、内面には当て具痕がある。胴部下端はヘラナデ調整によって整形され平底となる。

窯道具 (第32図：414～447・450・451)

焼成時に使用された窯道具として、棒ツク、ツク、代用ツクがある。

棒ツク (414～439)

手握ねでつくられた棒状のもので、両端がくぼんだもの (414～430) と片側がくぼんだもの (431～439) があり、壺・瓶類の高台を受けて床面上に固定し支持するものである。

ツク (440～447)

筒状のもので、底部には糸切り痕が残り、椀・皿・瓶類などを口縁で受けて床面上に固定し支持するためのものである。

代用ツク (450・451)

甕の製作段階で胴部と口頸部を接合する際に頸部の接合面を整えるために余分なところをヘラで切り落とすが、この時生じる板状の輪をそのままツクとして利用したもので、外面には甕の胴部と同様な平行叩き文とヘラ先の圧痕 (沈線) が残されている。

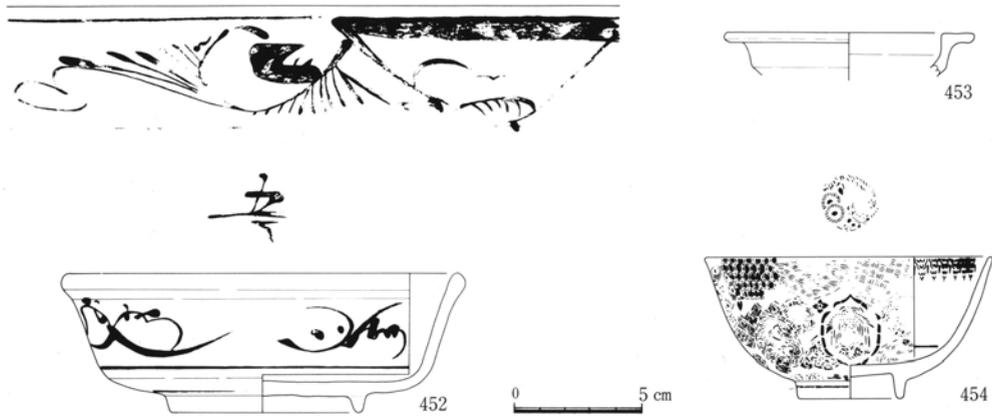
整形具 (第32図：448・449)

器面の調整に使用した工具で、長頸瓶の胴部を利用し先端が摩耗しているもの(448)と高盤の皿の部分を利用した細長い変形六角形状を呈したもの(449)がある。449の下方端部は摩耗して丸くなり、下方両辺の端部は薄くなり刃がついたようになっている。

その他の遺物

近世陶磁器 (第33図：452～454)

灰原より須恵器とともに出土した。黒色灰層より江戸時代の呉須絵の皿(452)、鉄釉の落とし蓋(453)が、暗黒色灰層より明治時代の刷絵の磁器碗(454)が出土した。



番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版
452	皿	15.4	7.3	5.5	7/12, 12/12	陶器	
453	落とし蓋	(9.7)			2/12	陶器、鉄釉	
454	碗	11.2	4.0	5.6	6/12, 12/12	磁器	

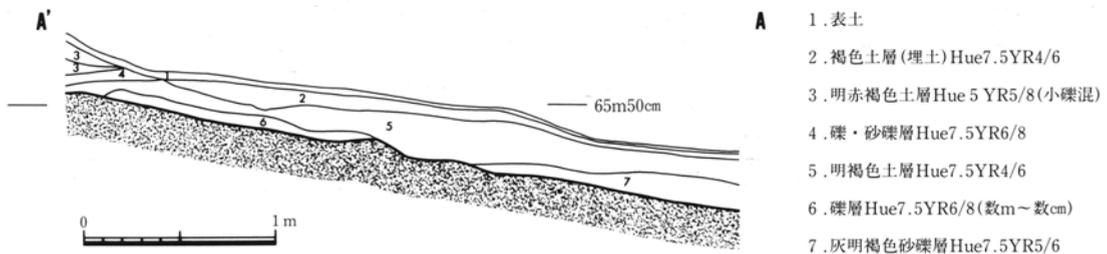
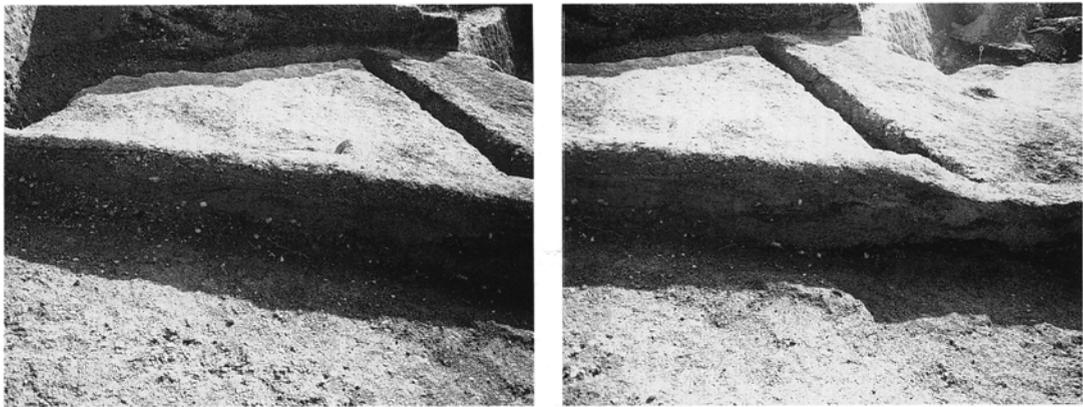
第33図 黒笹40号窯跡出土遺物実測図 (21)

第3節 黒笹89号窯跡

1. 灰原（第34図）

調査開始前に、窯前のコンクリート製U字溝から一段下がった水田面に昭和31・32年の調査後に埋め戻したと思われる灰層を確認していた。前回の調査以後に窯体の北側から西の水田に向かって道がつくられていたようで、表土下の褐色砂礫層と同様な土が埋土となっていた。

1 m 50 cm 低い窯前の水田にトレンチをいれたところ地山ベース直上の明褐色層から多量の遺物が出土した。灰層は確認できなかったが、遺物の出土状況からみて窯体を中心に北側10 m、南側4 mの範囲に灰層が広がっていたものと思われる。



第34図 黒笹89号窯跡灰原土層断面図

2. 窯体（第35図、第36図）

本窯は分焰柱を有する窖窯で、焚口、燃烧室、烧成室が良好な状態に残っていた。現存長5 m 70 cm、最大幅1 m 74 cm、床面傾斜角度は中央で24度を測る。

焚口・燃烧室

焚口の一部がU字溝によって壊されていたが、烧成室に向かって右側の南壁では内側に絞りこんだくびれが認められ、くびれた部分の南壁の一部が二重(右頁、写真参照)になっている。中央には長径60 cm、短径50 cmの分焰柱があり、燃烧室は分焰柱まで現存長さ94 cm、最大幅1 m 60 cmである。

分焰柱

現存長径60cm、短径50cm、高さ18cmを測る楕円形の分焰柱で、2面目の床面の時に付設され最終操業時まで使用されていたことが、断ち割り調査により確認できた。

焼成室

現存長4m38cm、床面最大幅1m38cmを測り、上方に進むにしたがって狭くなり、上部で幅90cmを測る。側壁の遺存状態は悪く、ほとんどの窯壁が剥落して裏側が残っているのみの状態であった。床面はよく被熱し青灰色を呈していた。

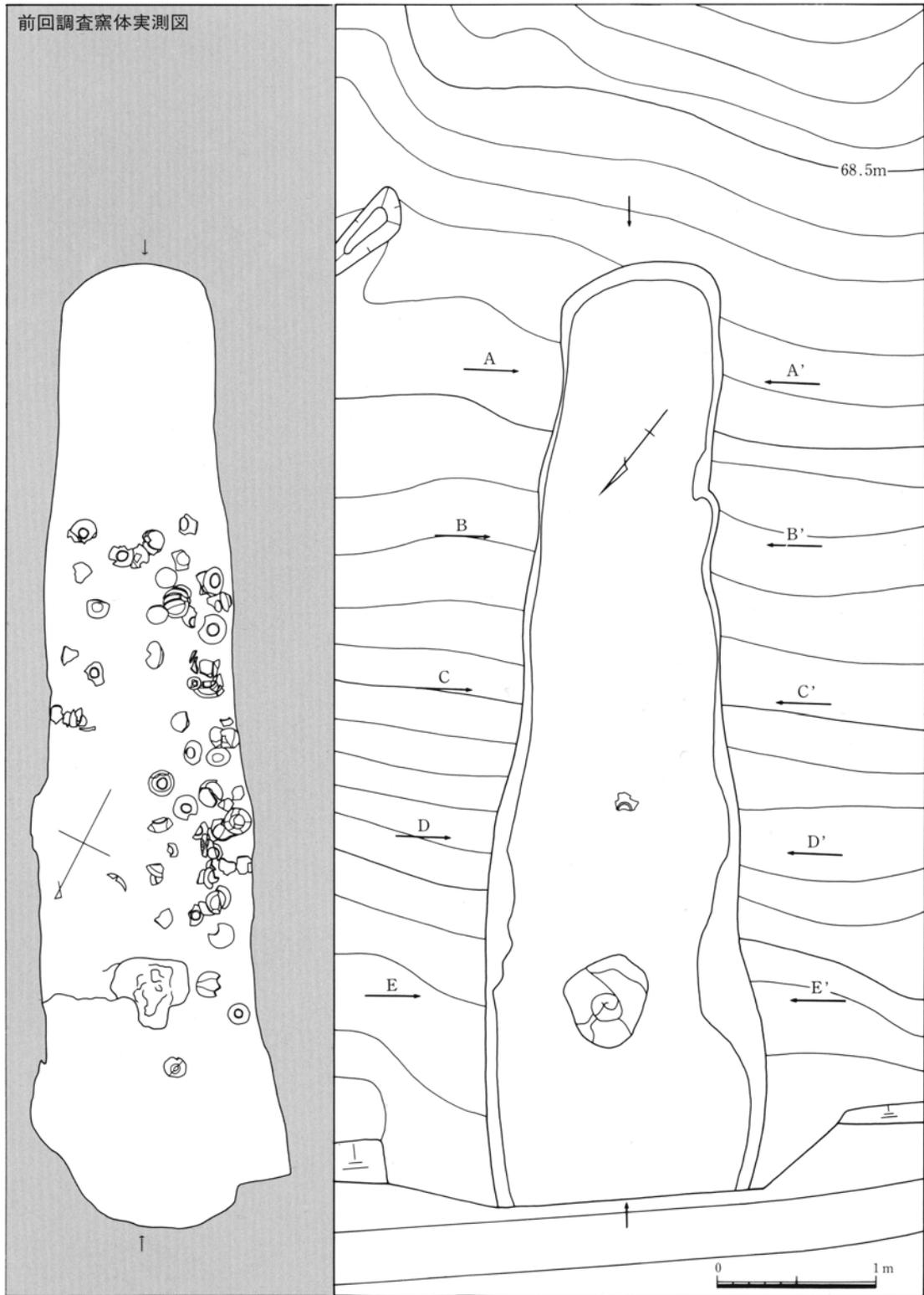
床面の断ち割りより、3面の床面（1、5、7の暗青灰色層）を確認した。

なお同様な所見が、昭和32年調査の調査報告書においても述べられている。

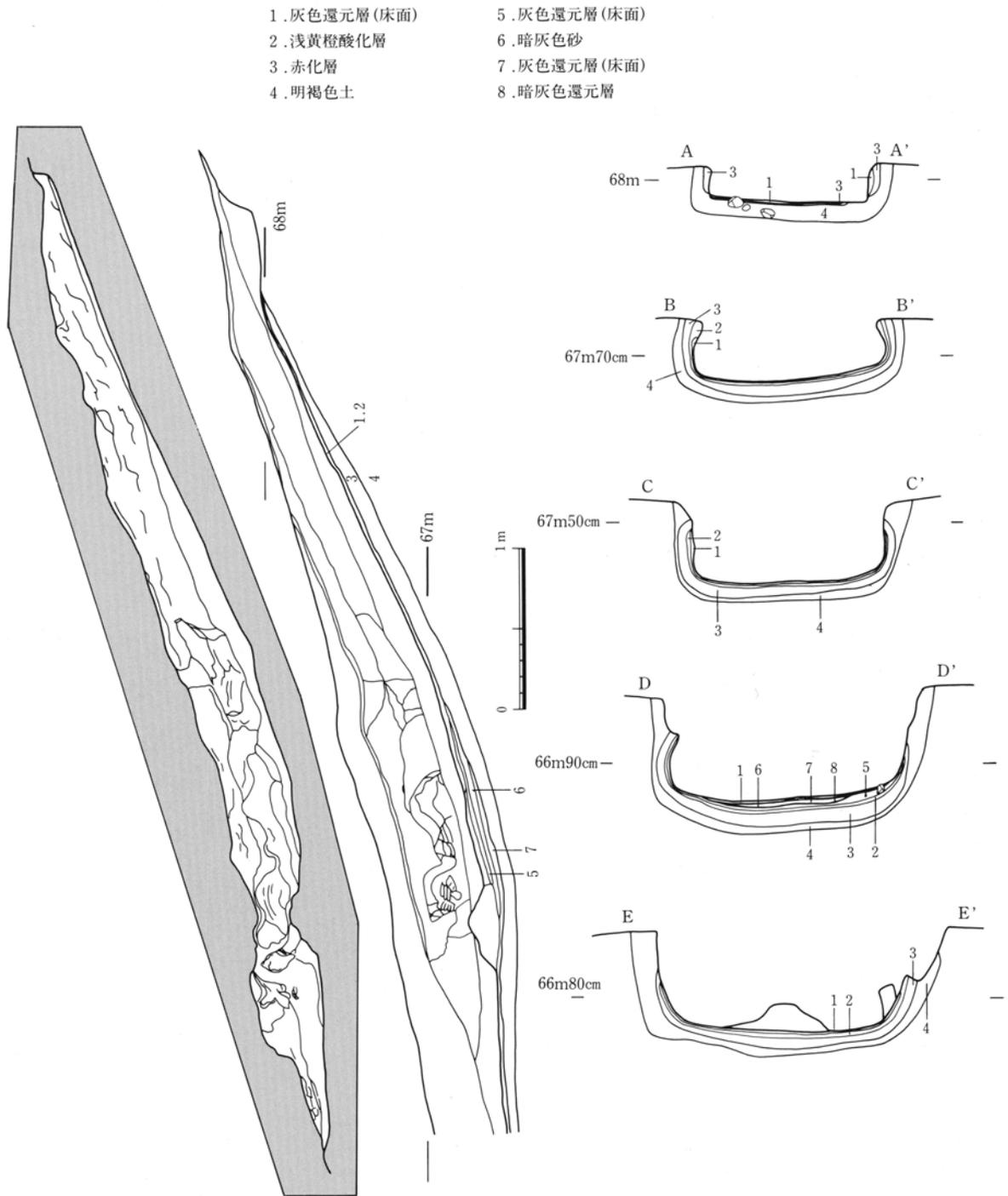


分焰柱周辺
上 遠景
下 近景





第35図 黒笹89号窯跡窯体実測図



第36図 黒笹89号窠体断面実測図

3. 出土遺物（第39図～第62図）

出土遺物のほとんどが窯前の水田下から出土した。灰原部分は開墾によって地山まで掘り起こされており、遺物の層位による取り上げは不可能であった。総破片数13882点、その内訳は須恵器2041点、灰釉陶器9006点、緑釉陶器の素地2537点、窯道具298点である。出土遺物は須恵器の椀・鉢・すり鉢・甕・短頸壺・甌・図示できなかつたが陶鎮、灰釉陶器の椀（小椀・大椀・稜椀）・皿（貼付輪花皿・段皿・輪花段皿・稜皿・耳皿）浄瓶・長頸瓶・手付瓶・小瓶・環状把手付瓶・鉢・合子形双耳壺・短頸壺と、そして緑釉陶器の素地である椀（輪花椀・貼付輪花椀・稜椀・輪花鉢）・皿（輪花皿・稜皿・段皿・輪花段皿・耳皿）・手付瓶・手付小瓶・香炉・托・唾壺と陰刻花文の施された椀・花文輪花椀・花文稜椀・花文鉢・花文皿・花文稜皿・花文段皿・花文瓶・花文透彫香炉蓋がある。その他に窯道具として三叉トチン・王冠状ツク・蓋状ツク・サヤ蓋・サヤが出土している。

前回出土遺物で窯体内より出土の椀・皿と今回の調査で出土しなかつた器種については第37図、第38図、第63図にそれぞれ掲載した。なお実測図の縮尺は緑釉陶器素地と第57図は1：3でそれ以外は1：4である。また陰刻花文拓影の縮尺は2：3である。

灰釉陶器

椀（第39図～第42図：1～87）

全体の器形を観察できるものが少ない。体部の腰の張りが弱く斜めに立ち上がって口縁端部が僅かに外反し、くずれた断面三角の三日月高台で器壁が薄いもの（12・20）と、体部の腰に少し張りがあり口縁端部が顕著に外反し、高台下端が内彎して外面下端に明瞭な稜が認められる定型化した三日月高台のもの（9・11・18・21）、口縁端部が顕著に外反し三日月高台がハの字形に外に開いたもの（10・19）がある。なお12は窯体断ち割りの際の最終床面を剥いだ時にII次床面下より伏せて埋め込んだ状態で出土した。

灰釉は刷毛塗りにより内面体部（9・21）と内外面体部（10～20）に施釉され、一部に底部中央に施されたもの（53・63・65・71・73・85）があるが、高台接地面には施されていない。

耳皿（第42図：103・104）

側縁を両端から折り曲げひだをつけたもので、内外面に灰釉を施釉。104は高台端が欠損。

皿（第42図、第43図：88～102・106～136）

高台より斜めに立ち上がり、口縁端部が僅かに外反したものである。椀と同様に高台下端が内彎し外面下端に明瞭な稜が認められる定型化した三日月高台のもの（110・113～116・121～123・125～132）、三日月高台がハの字形に外に開いたもの（117～120・133～136）がある。灰釉は刷毛塗りにより内面体部と一部底部中央（96・98・129）にも施釉されるが、高台接地面には施されていない。なお96の底部高台内側には糸切り痕が残る。

段皿（第44図：137～157）

内外面に段を有する皿で、内面のみに段を有する広縁のもの（137～178）と内外面に段を有する狭縁のもの（149～157）がある。広縁のものは高台より直線的に斜めに立ち上がっている。高台も三日月高台（141・146・148）と、三日月高台がハの字形に外に開いたもの（145・147）や角高台（142・151）がある。

輪花段皿（第42図：105）

口縁外面をへら状のもので押え輪花とした広縁の段皿で内面には灰釉が刷毛塗りされる。

手付瓶（第44図：158～166）

肩から緩やかにすぼまり頸部となる徳利形をしたもので、図示できなかったが面取り整形の施された板状の把手が肩から口頸部に付けられている。底部は胴部径より小さく、底部脇を僅かに削り込んだ平底である。灰釉は肩から胴部に刷毛塗りにより施されている。

小瓶（第45図：174・175）

手付瓶の小型のもので、底部は平底で糸切り痕がそのまま残る。

長頸瓶（第45図：167～171・173）

口頸部はややたく緩やかに外反して口縁部となり、比較的幅が広い口縁帯を持つ。胴部は長胴のもの（171）と丸みをもったもの（170）に分かれ、蛇の目高台となっている。肩に環状耳を一個付けた長頸瓶（173）もある。

浄瓶（第45図：172）

肩の注口部分のみが出土し、灰釉が施されている。

鉢（第45図：176・177）

高台部のみで、形態的には碗と同様のものであり、大型の碗とすべきかもしれない。

合子型双耳壺（第45図：178・179）

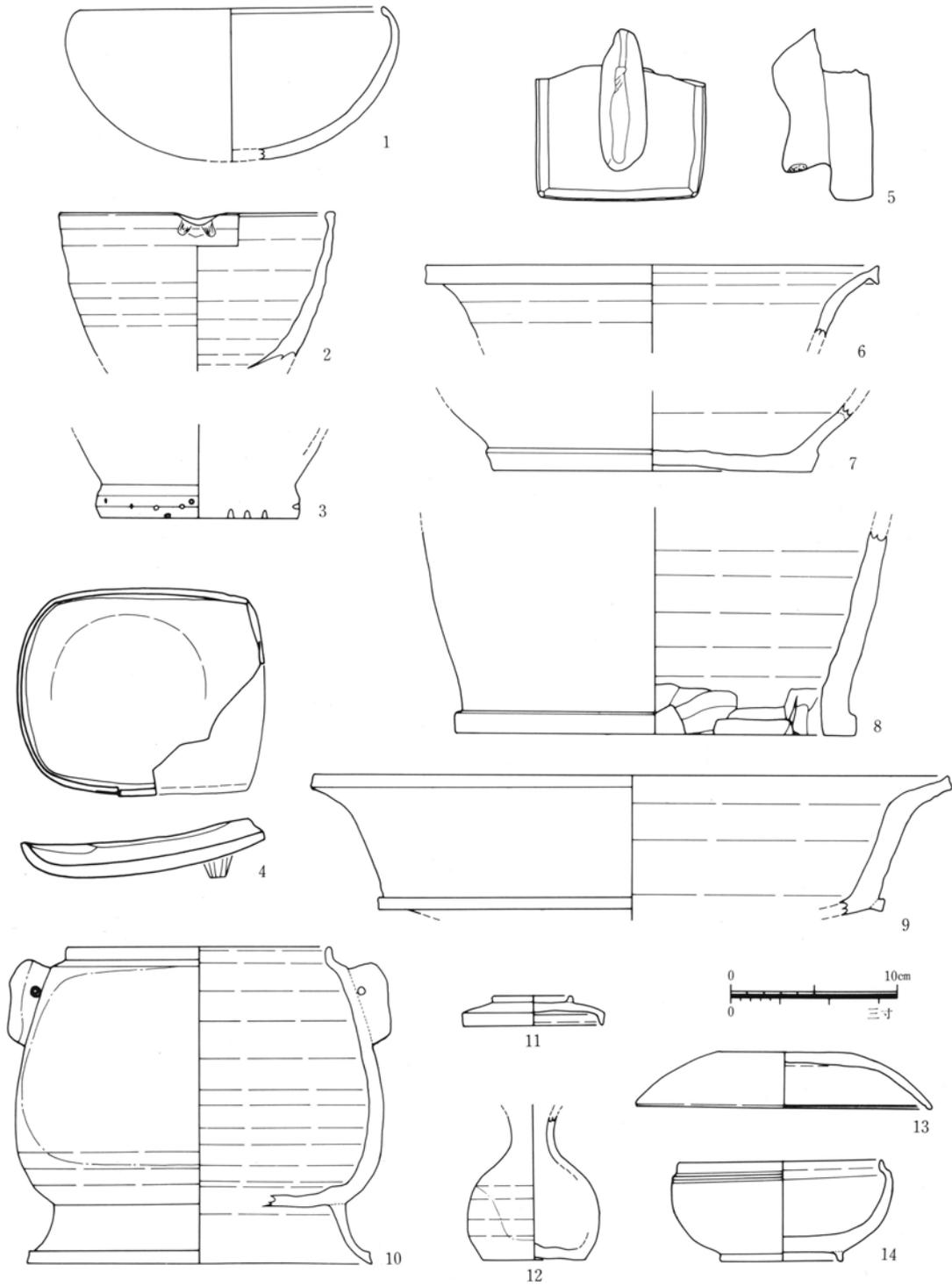
肩に耳が付き、裾張りの強い高台が付いた合子を縦に引き伸ばしたような壺の高台部。

播鉢（第45図：180～182）

直線的に開く胴部。口縁端部が平坦面を持ち、高台も下端部が平坦になっている。

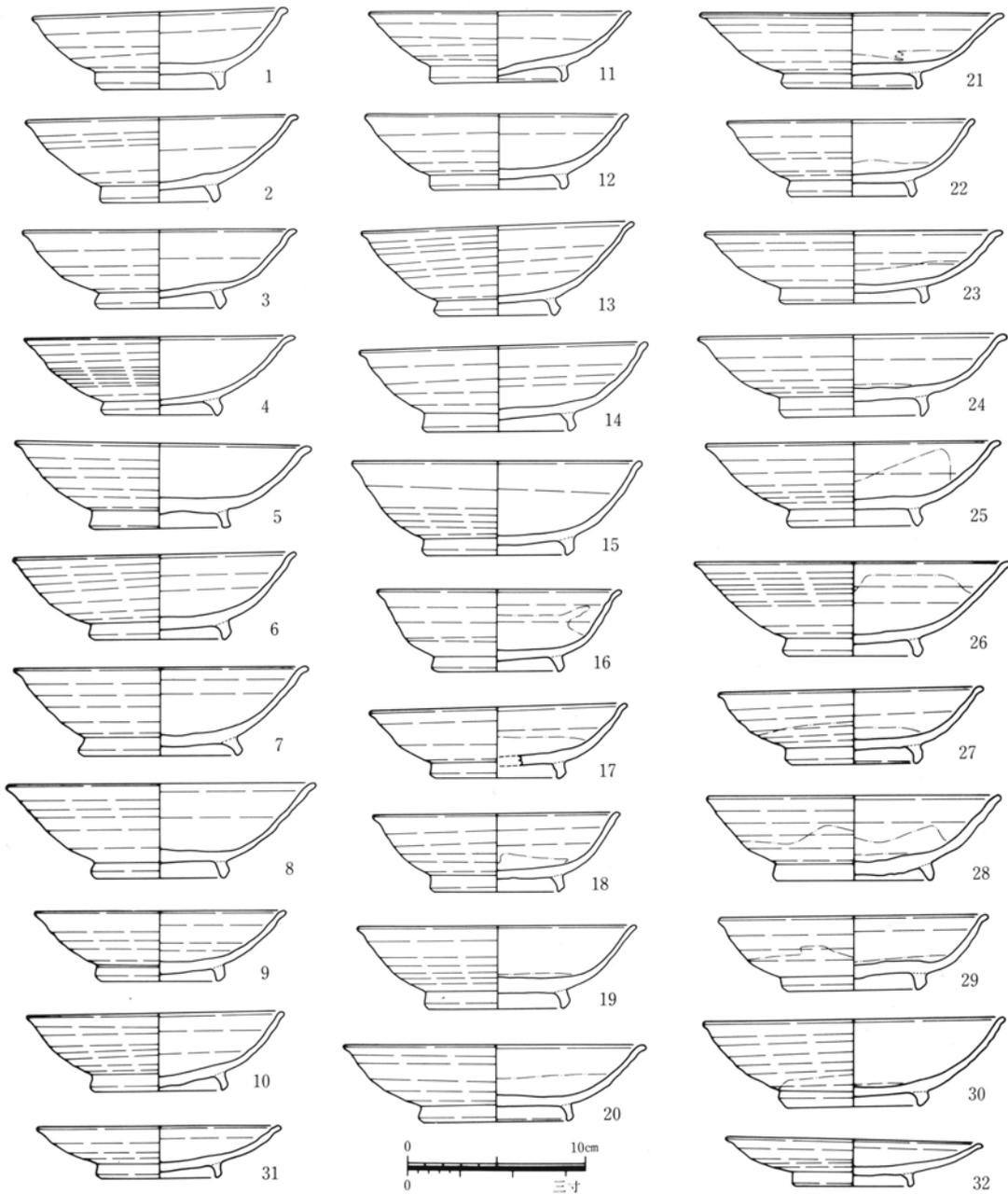
短頸壺（第45図：183・184）

口頸部が短く、口頸部から肩の全面に灰釉がかかっている。やや内傾した口頸部で球形の胴部もの（183）と直立した口頸部で撫肩の胴の長いもの（184）がある。



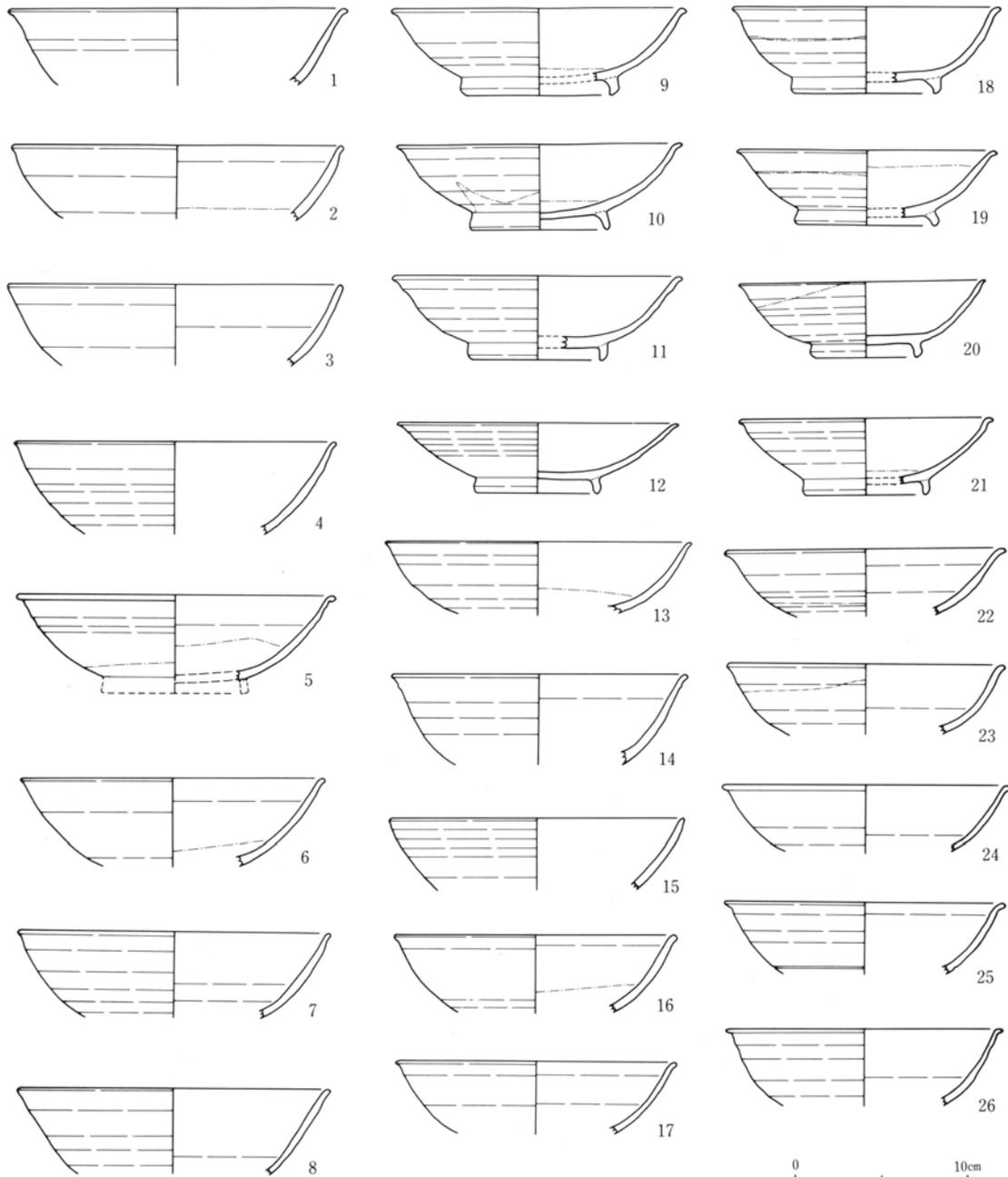
番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	その他	番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	その他
1	鉄鉢	18.2			須恵器	8	甌			23.6	須恵器
2	すり鉢	16.8			須恵器	9	火舎	36.0			素地
3	すり鉢		11.8		須恵器	10	双耳壺	16.0		19.2	灰釉陶器
4	風字碗	14.5×12.55		(3.6)	須恵器	11	蓋	8.4		1.8	灰釉陶器
5	陶鎖				須恵器	12	小瓶		6.2		灰釉陶器
6	甕	26.8			須恵器	13	香炉蓋	17.4		3.4	素地
7	甕		19.0		須恵器	14	香炉	12.6	6.4	6.0	素地

第37図 黒笹89号窯跡前回調査出土遺物実測図(1)



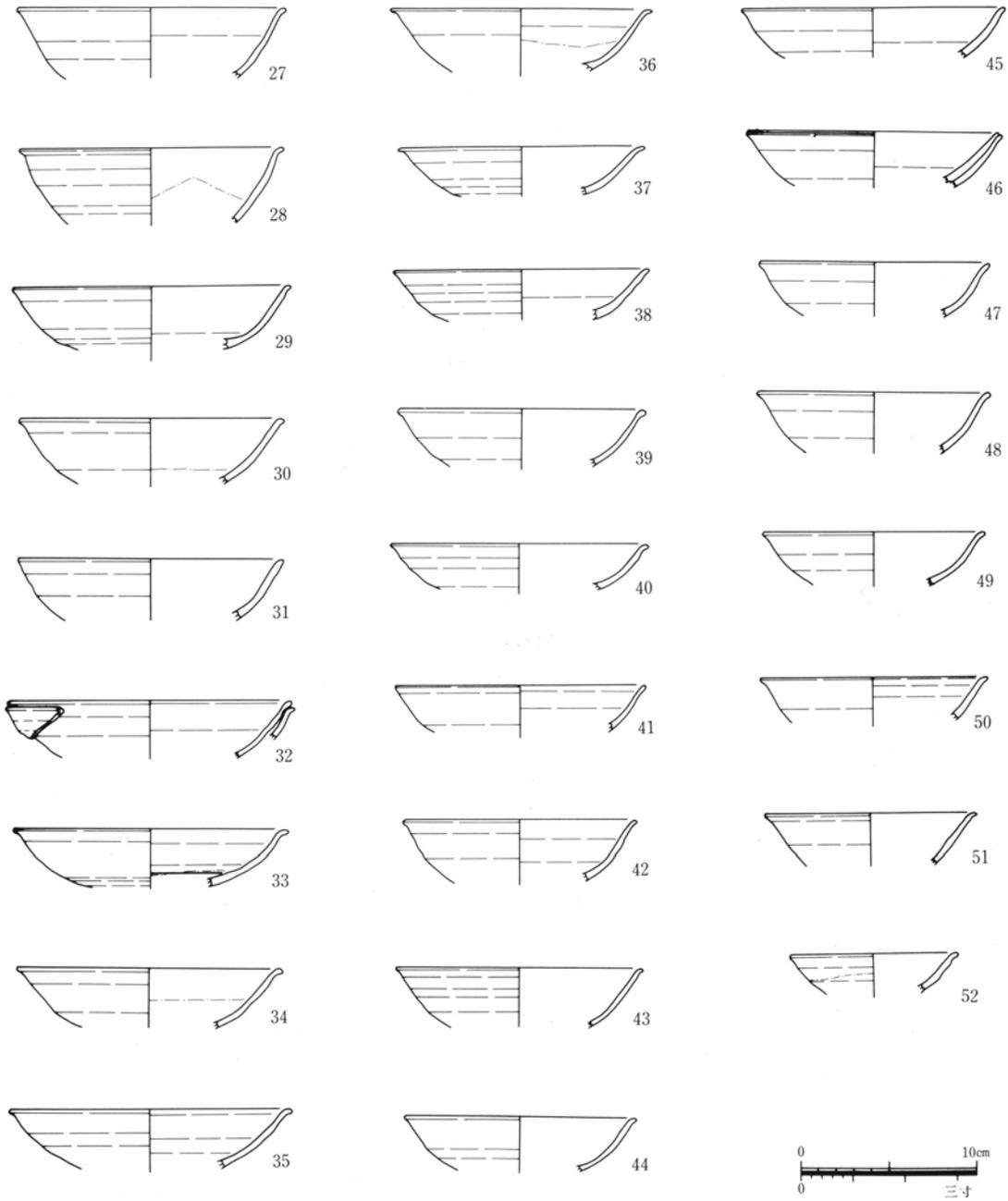
番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	径高指数	番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	径高指数
1	碗	14.7	6.5	4.4	30	17	碗	14.4	6.8	3.1	22
2	碗	15	6.4	4.8	32	18	碗	13.7	7	4.5	33
3	碗	15.2	6.8	4.5	30	19	碗	15.5	7.6	4.7	30
4	碗	15	5.5	4.5	30	20	碗	16.7	8.2	4.4	26
5	碗	15.4	7.4	4.8	31	21	碗	17	7.3	4.4	26
6	碗	15.7	7.4	4.8	31	22	碗	15.8	6.7	4.4	28
7	碗	16.3	8.8	5	31	23	碗	16.5	7.7	5.1	31
8	碗	17	7.3	5.4	32	24	碗	17.2	7.7	4.7	27
9	碗	13.8	6.5	4	29	25	碗	16.4	7	4.8	29
10	碗	14.5	7.2	4.4	30	26	碗	17.5	7.3	5.4	31
11	碗	14.5	7.5	4	28	27	碗	14.8	7	4.3	29
12	碗	14.6	7.3	4.3	29	28	碗	16.4	8.7	4.9	30
13	碗	15.2	6.4	5	33	29	碗	15	7.3	4.3	29
14	碗	16	8.2	4.8	30	30	碗	16.8	7.5	5	30
15	碗	16	7.8	5.3	33	31	碗	13.6	6.6	3.1	23
16	碗	13.6	7	4.8	35	32	皿	14.3	6.5	2.8	20

第38図 黒笹89号窯跡前回調査出土遺物実測図(2)窯体内



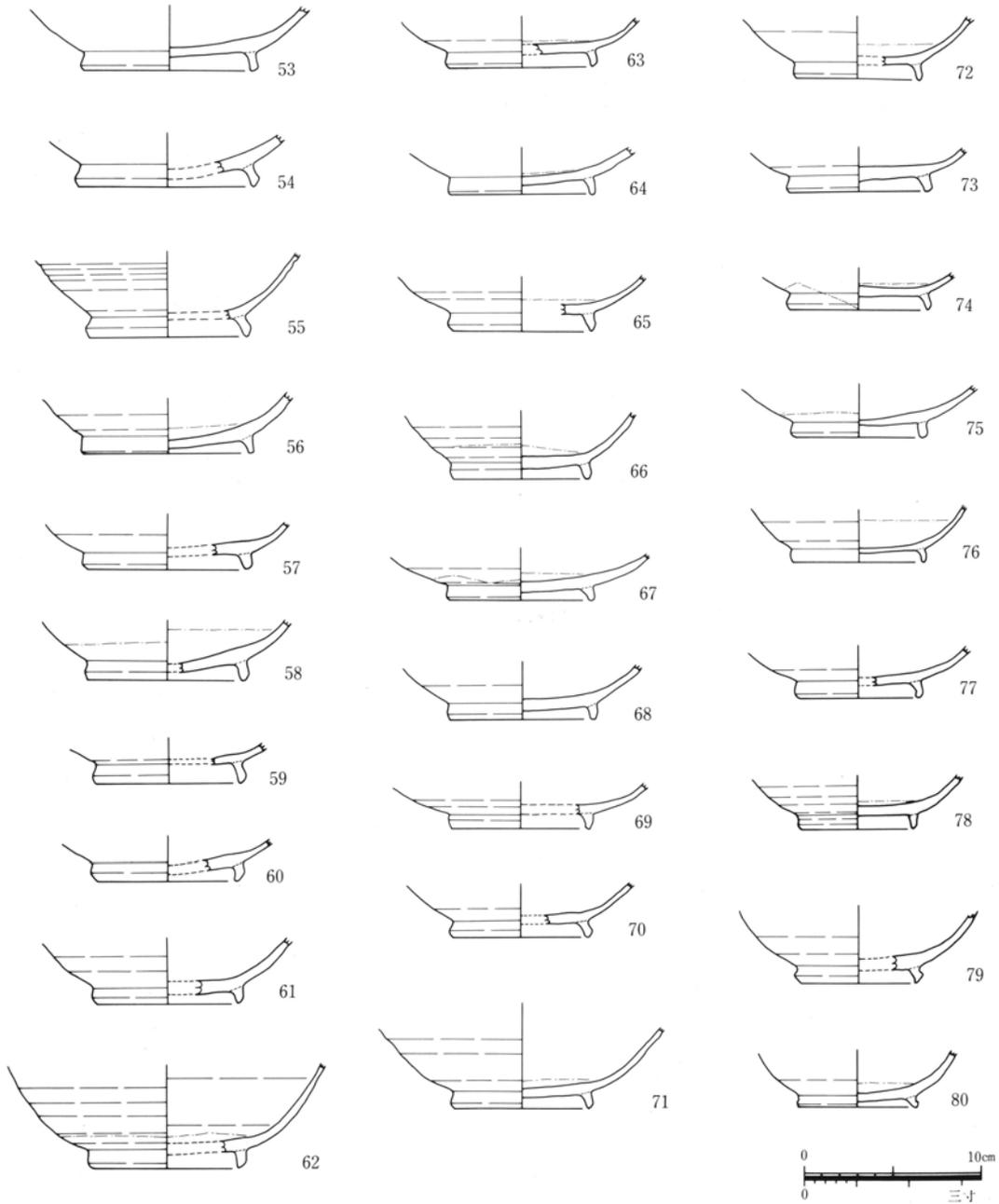
番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版	番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版
1	碗	19.6		(4.6)	0/12			14	碗	16.8		(5.2)	0/12		
2	碗	19.0		(4.4)	1/12			15	碗	16.8		(4.2)	1/12		
3	碗	19.0		(4.8)	1/12	胎赤褐色		16	碗	15.8		(4.5)	1/12	胎赤褐色	
4	碗	18.6	8.3	(5.4)	0/12			17	碗	15.8		(4.2)	1/12	胎赤褐色	
5	碗	18.2		(5.0)	2/12			18	碗	15.2	8.2	5.0	0/12, 3/12	重(3mm), 法量図	9
6	碗	17.4		(5.2)	1/12			19	碗	15.0	8.0	4.3	0/12, 3/12	重, 法量図	
7	碗	18.0		(5.0)	0/12			20	碗	14.2	5.8	4.5	12/12, 12/12	重(5mm), 法量図	9
8	碗	18.0		(5.0)	2/12			21	碗	14.2	7.0	4.5	0/12, 2/12	法量図	
9	碗	16.2	8.3	5.1	1/12, 1/12	胎赤褐色, 法量図		22	碗	15.8		(4.0)	1/12		
10	碗	16.4	7.8	5.0	4/12, 6/12	重, 法量図	9	23	碗	15.6		(4.1)	2/12	胎赤褐色	
11	碗	16.4	7.5	5.0	0/12, 5/12	法量図		24	碗	16.2		(3.9)	2/12		
12	碗	16.0	7.0	3.1	1/12, 6/12	法量図	9	25	碗	15.8		(4.2)	1/12		
13	碗	17.4		(4.3)	1/12	内ハケ 胎赤褐色		26	碗	15.6		(4.5)	1/12	内窯ゴミ	

第39図 黒笹89号窯跡出土遺物実測図(1)



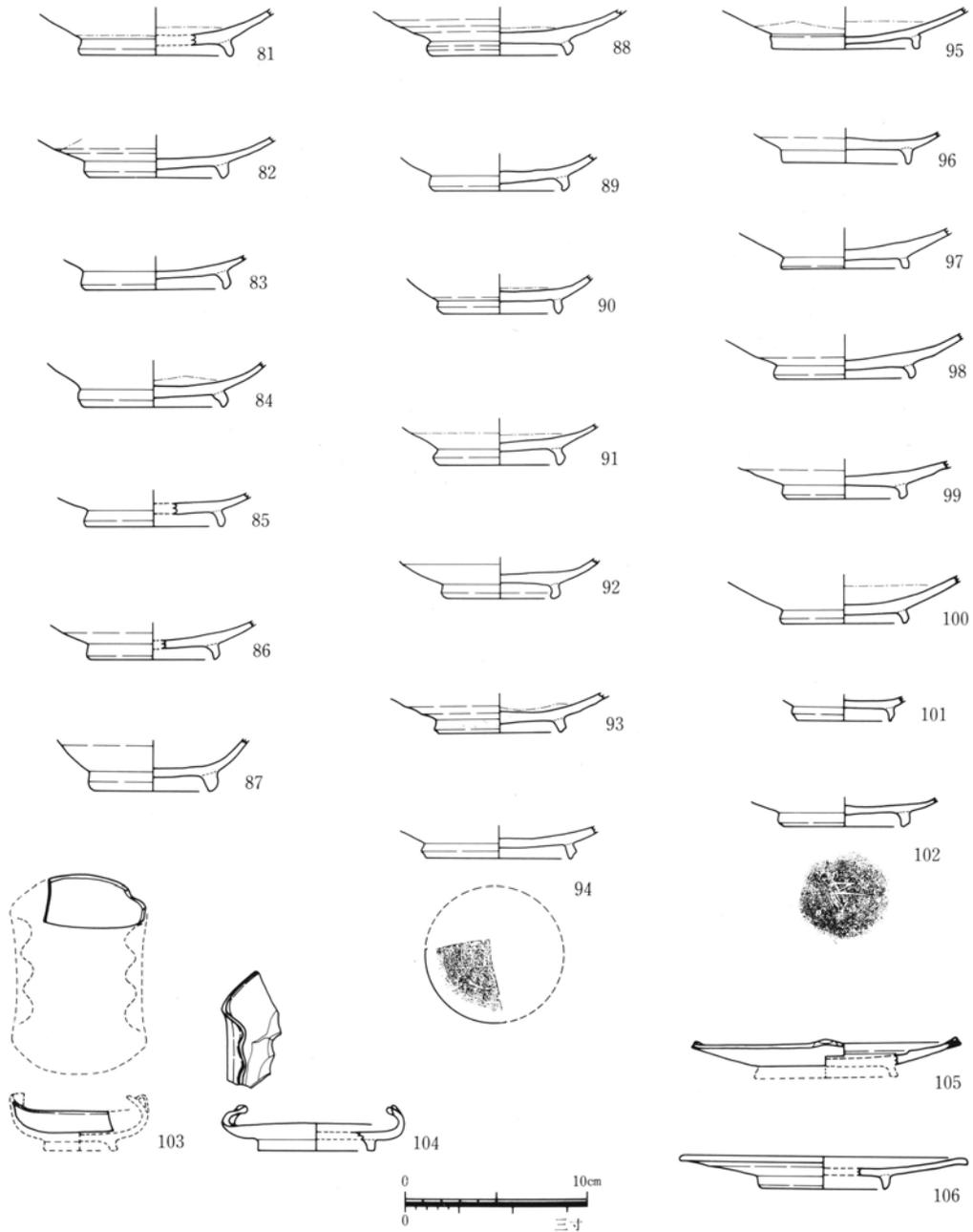
番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版	番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版
27	碗	15.0		(3.1)	1/12	内灰釉		40	碗	14.6		(3.6)	1/12		
28	碗	15.0		(4.4)	1/12			41	碗	13.8		(2.6)	1/12		
29	碗	15.6		(3.7)	0/12	内外火ぶくれ		42	碗	12.8		(3.6)	1/12		
30	碗	14.8		(3.8)	1/12			43	碗	13.8		(3.5)	1/12		
31	碗	14.8		(3.5)	1/12		9	44	碗	13.0		(3.4)	1/12		
32	碗	16.1		(3.4)	1/12	重(1mm)		45	碗	14.8		(2.6)	3/12		
33	碗	15.4		(3.3)	0/12	外火ぶくれ		46	碗	14.2		(3.1)	3/12		
34	碗	14.8		(3.5)	1/12			47	碗	12.8		(3.1)	2/12		
35	碗	15.7		(3.5)	1/12			48	碗	13.0		(3.5)	1/12		
36	碗	14.8		(3.6)	1/12	重		49	碗	12.2		(3.1)	2/12	内窯ゴミ	
37	碗	14.0		(2.8)	1/12	重		50	碗	12.8		(2.6)	1/12		
38	碗	14.4		(3.0)	1/12			51	碗	11.8		(2.9)	1/12		
39	碗	13.6		(3.4)	1/12			52	碗	9.4		(2.3)	2/12		

第40図 黒笹89号窯跡出土遺物実測図(2)



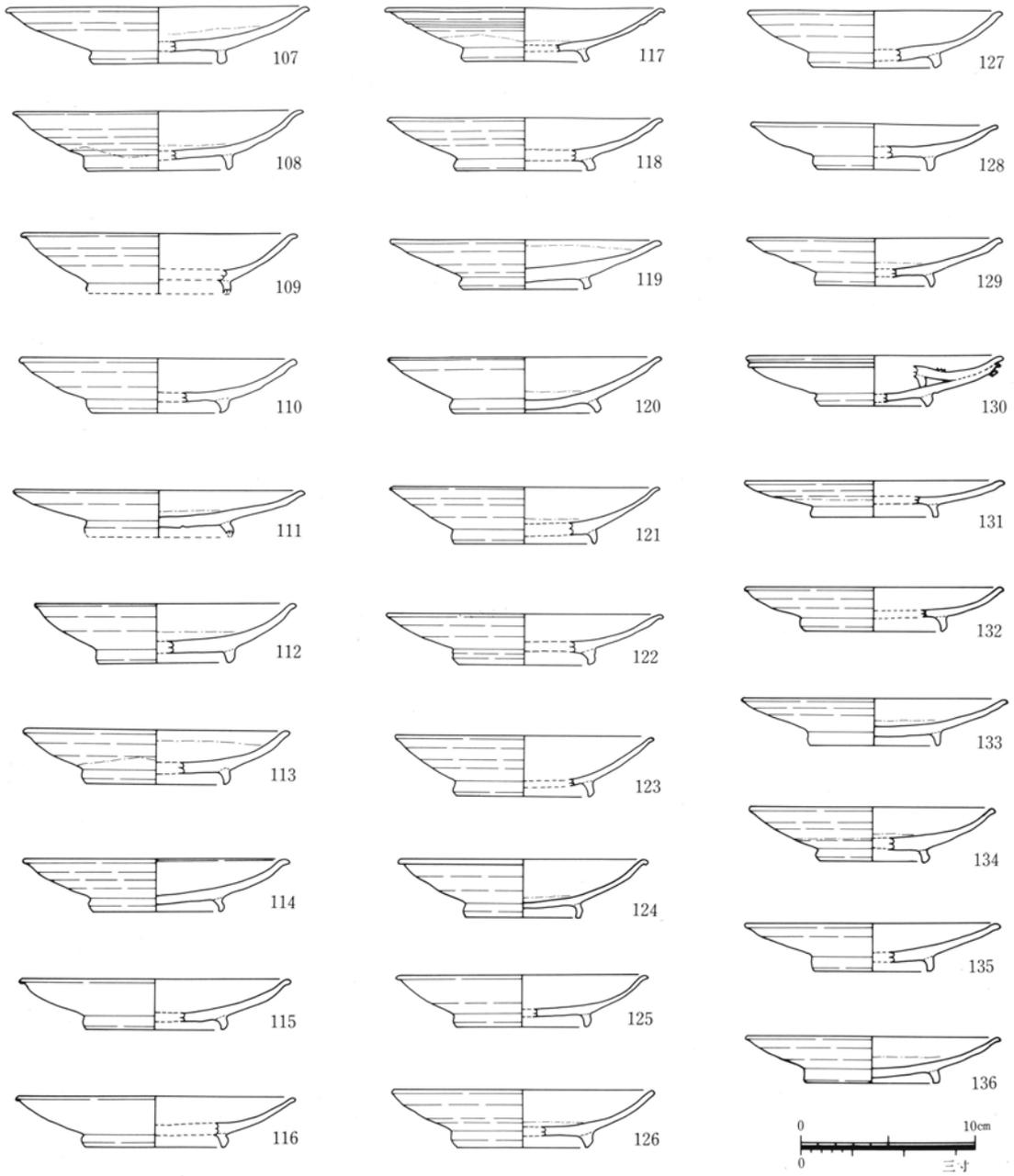
番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版	番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版
53	椀		9.5	(3.6)	5/12			67	椀		8.0	(1.4)	3/12	重(1mm)	
54	椀		10.0	(2.8)	3/12	重(1mm)		68	椀		8.2	(1.5)	5/12		
55	椀		9.0	(4.7)	4/12			69	椀		7.8	(1.3)	0/12		
56	椀		9.4	(3.2)	2/12			70	椀		7.7	(1.5)	4/12	重(3mm)	
57	椀		9.0	(2.6)	3/12			71	椀		7.6	(2.3)	3/12		
58	椀		8.8	(1.7)	3/12	胎赤褐色		72	椀		7.0	(1.8)	4/12	重(1mm)	
59	椀		8.2	(1.1)	2/12	胎赤褐色		73	椀		7.8	(1.2)	5/12	重(2mm)	
60	椀		7.8	(1.2)	4/12			74	椀		7.9	(1.0)	6/12		
61	椀		8.0	(1.3)	3/12	内窯ゴミ		75	椀		7.4	(1.4)	12/12	重(5mm)	
62	椀		8.2	(3.0)	3/12	重(2mm)		76	椀		7.4	(1.6)	5/12	窯ゴミ	
63	椀		8.1	(1.4)	3/12	重(1mm)		77	椀		6.6	(1.4)	4/12	重(1.5mm)	
64	椀		8.0	(1.3)	4/12	内ゴミ		78	椀		6.4	(1.5)	3/12		
65	椀		7.8	(1.5)	4/12			79	椀		6.4	(2.0)	4/12		
66	椀		7.7	(1.8)	12/12	重(1mm)		80	椀		6.7	(1.6)	6/12	重(2mm)	

第41図 黒笹89号窯跡出土遺物実測図(3)



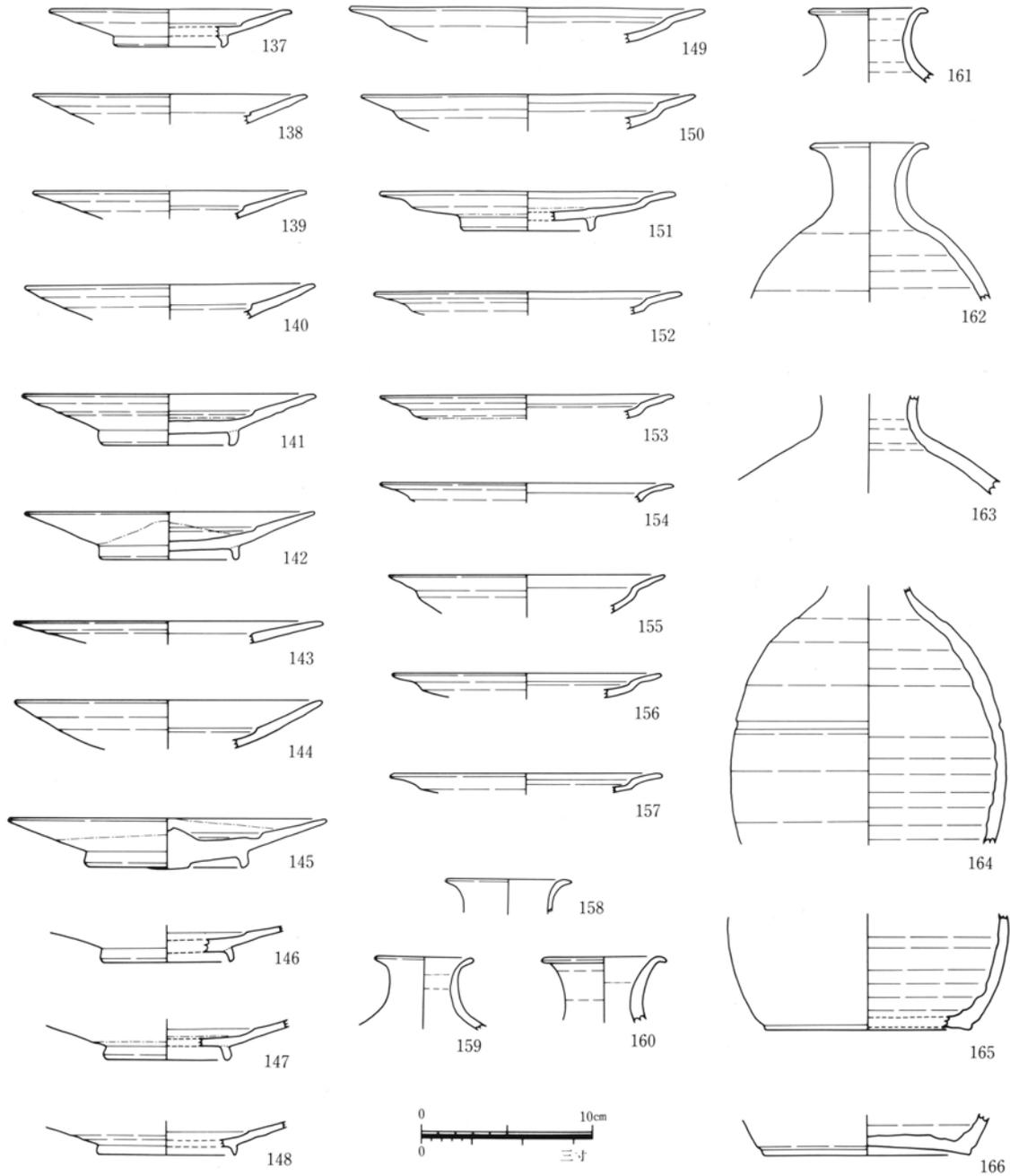
番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版	番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版
81	碗.皿		8.2	(2.5)	3/12	重		94	碗.皿		8.0	(1.7)	2/12	重(2mm)×2ヶ所	
82	碗.皿		7.4	(2.3)	7/12	重		95	碗.皿		8.1	(2.3)	7/12		
83	碗.皿		7.8	(1.8)	6/12			96	碗.皿		7.0	(1.7)	4/12		
84	碗.皿		7.8	(2.5)	12/12	重(3mm)		97	碗.皿		7.0	(2.2)	6/12	再?	
85	碗.皿		7.6	(1.8)	3/12	重(2mm)		98	碗.皿		7.4	(2.4)	6/12		
86	碗.皿		6.8	(2.0)	6/12			99	碗.皿		6.4	(2.0)	6/12	重(1mm)	
87	碗.皿		6.0	(3.0)	8/12			100	碗.皿		6.8	(2.5)	4/12	重(1mm)	
88	碗.皿		7.5	(2.6)	6/12	重(2mm)		101	碗.皿		5.2	(1.4)	8/12	重(1mm)	
89	碗.皿		7.0	(2.0)	6/12	重(1.5mm)ヘラ記号		102	碗.皿		6.5	(1.6)	8/12	重(3mm)内底ハケ	
90	碗.皿		6.3	(2.0)	6/12	重(2mm)		103	耳皿				1/12		
91	碗.皿		6.6	(2.2)	10/12	重(2mm)		104	耳皿		6.3	2.6	2/12, 0/12	高台欠損	
92	碗.皿		5.9	(2.2)	7/12	重		105	輪花段皿		(7.8)	(2.0)	2/12		
93	碗.皿		6.8	(2.1)	12/12	重(2mm)		106	皿	15.4	6.8	1.8	0/12, 2/12		

第42図 黒笹89号窯跡出土遺物実測図(4)



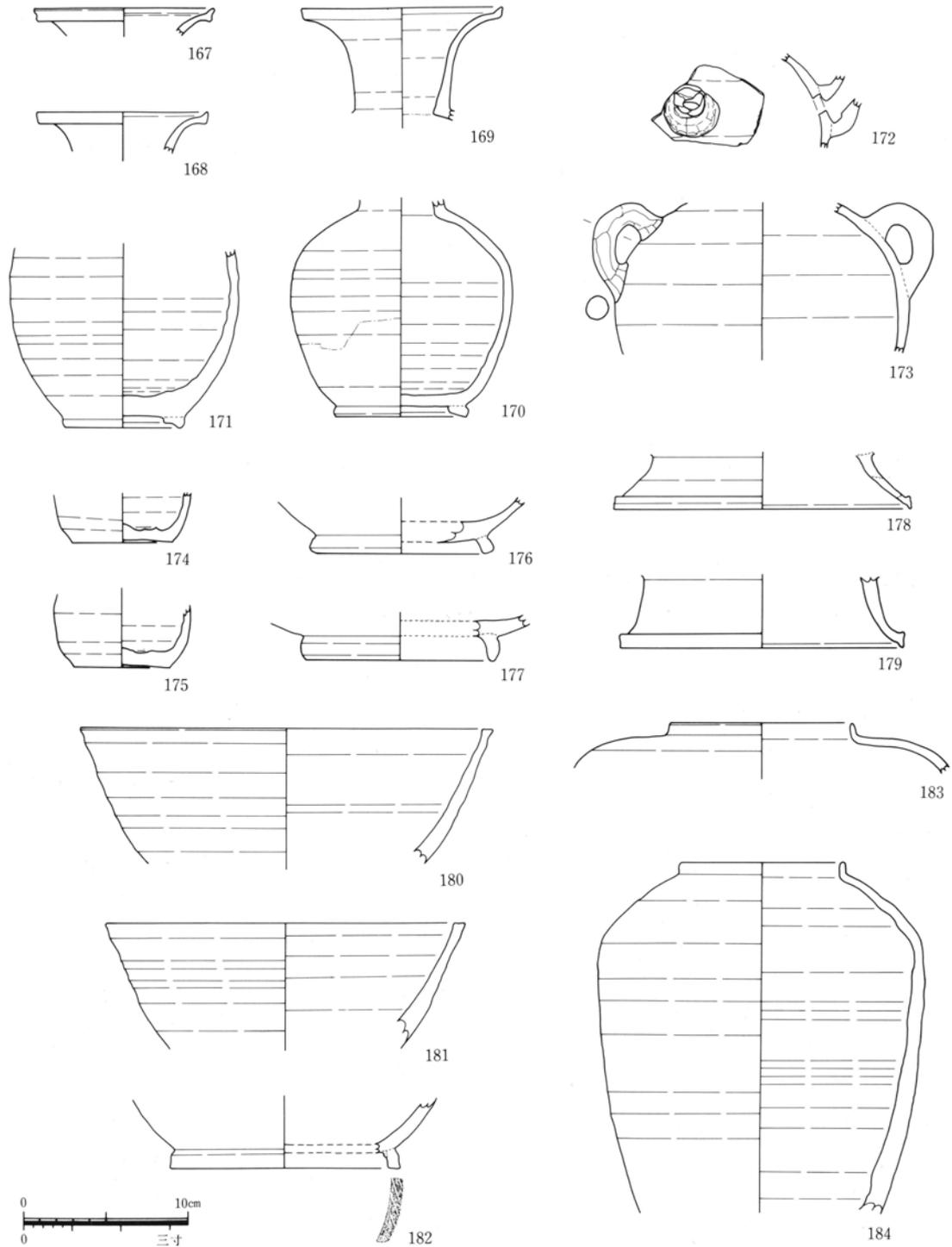
番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版	番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版
107	皿	17.0	7.3	3.2	1/12, 2/12	法量図		122	皿	15.6	7.6	2.9	1/12, 2/12		
108	皿	16.6	8.2	3.4	3/12, 4/12	重, 法量図	10	123	皿	14.8	7.6	3.5	2/12, 2/12		
109	皿	15.8	8.2	3.5	2/12			124	皿	14.0	6.5	3.4	2/12, 5/12		
110	皿	15.4	7.5	3.2	2/12, 3/12			125	皿	13.8	7.4	3.0	0/12, 5/12	内-窯ゴミ 外-窯壁	
111	皿	16.6	8.3	2.7	3/12	重(2~5mm), 法量図	10	126	皿	14.7	7.4	3.4	1/12, 3/12	法量図	
112	皿	14.0	6.8	3.5	0/12, 5/12	重(4mm), 法量図		127	皿	14.2	7.0	3.3	1/12, 6/12	法量図	10
113	皿	15.2	8.0	3.1	1/12, 3/12	窯ゴミ, 法量図		128	皿	14.0	6.4	2.6	1/12, 1/12	法量図	
114	皿	15.0	7.2	3.1	2/12, 5/12	法量図	10	129	皿	14.4	6.6	2.8	1/12, 5/12	重(2mm)	
115	皿	15.5	7.8	2.9	1/12, 2/12	粘土塊2.5×2cm		130	皿	14.4	6.2	2.9	1/12, 2/12	重, 法量図	10
116	皿	8.0	8.0	2.9	1/12, 1/12			131	皿	14.6	7.2	2.1	2/12, 1/12	重(2mm), 高台欠損	
117	皿	15.6	6.8	3.1	0/12			132	皿	14.8	7.8	2.5	2/12, 2/12		
118	皿	15.4	7.8	3.0	1/12, 2/12			133	皿	14.8	7.3	2.7	2/12, 2/12	法量図	
119	皿	15.4	7.0	2.9	2/12, 6/12	内窯ゴミ, 法量図		134	皿	13.8	6.0	3.1	1/12, 2/12		
120	皿	15.4	8.2	3.2	2/12, 3/12	重, 法量図		135	皿	14.6	6.8	2.8	2/12, 3/12	重(2mm)	
121	皿	15.4	8.0	3.3	1/12, 3/12	重(1mm)		136	皿	14.2	7.7	2.7	0/12, 6/12	法量図	

第43図 黒笹89号窯跡出土遺物実測図(5)



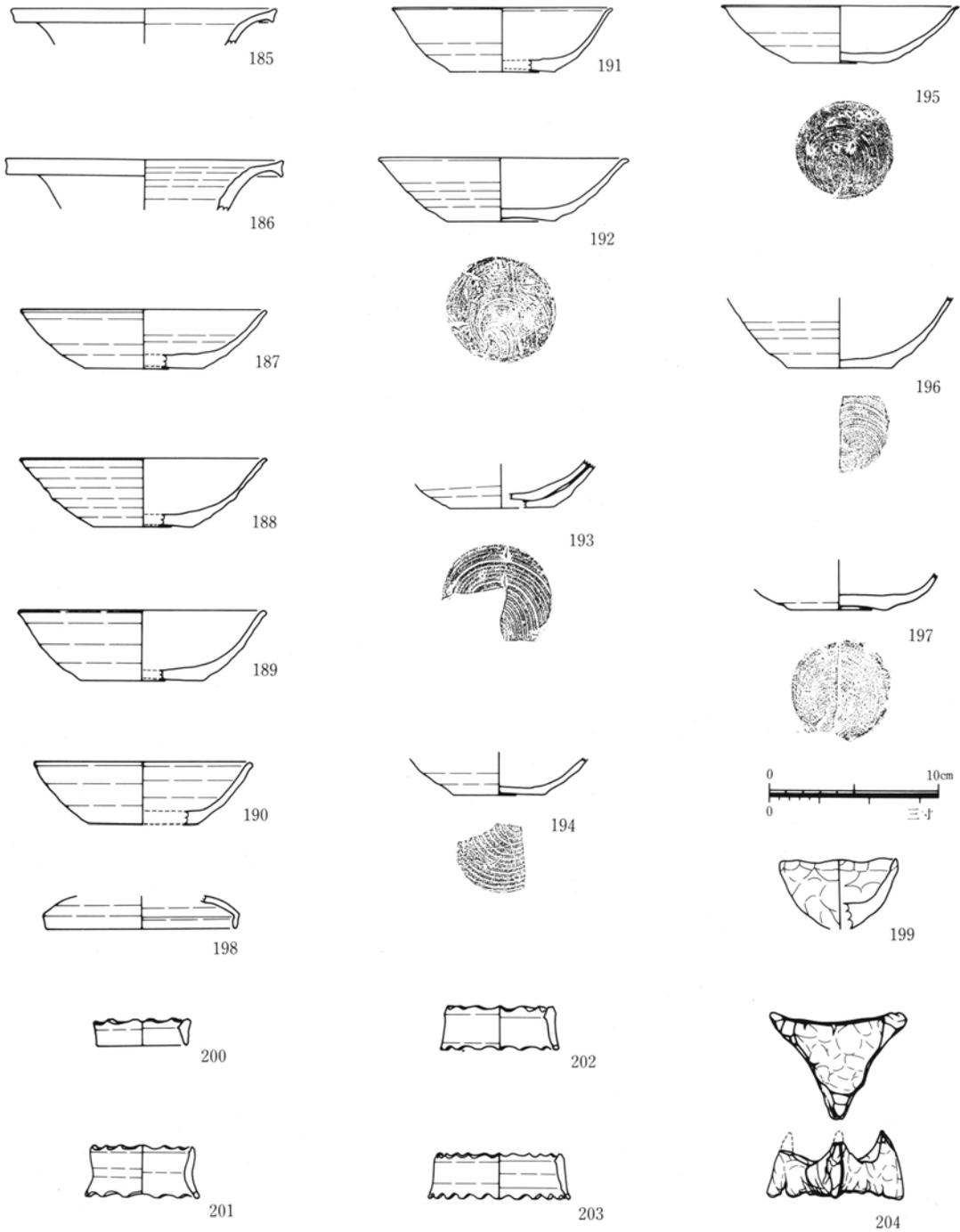
番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版	番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版
137	段皿	14.2	6.2	2.2	1/12, 1/12	重(1mm)		152	段皿	17.8		(1.4)	0/12		
138	段皿	15.8		(1.8)	2/12			153	段皿	17.0		(1.5)	0/12		
139	段皿	15.8		(1.7)	2/12			154	段皿	17.0		(1.1)	1/12		
140	段皿	16.8		(2.1)	5/12	胎赤褐色		155	段皿	15.8		(2.3)	0/12		
141	段皿	17.0	7.6	3.1	6/12	重(3mm)		156	段皿	15.4		(1.5)	1/12		
142	段皿	16.6	8.0	2.9	2/12, 2/12			157	段皿	15.5		(1.2)	1/12		
143	段皿	17.8		(1.4)	0/12			158	手付瓶	6.8		(2.1)	2/12		
144	段皿	15.8		(2.9)	2/12	内降灰		159	手付瓶	5.4		(4.3)	0/12		
145	段皿	18.6	9.0	2.9	10/12, 2/12		10	160	手付瓶	7.4		(3.9)	2/12		
146	段皿		7.4	(2.0)	3/12			161	手付瓶	6.4		(4.4)	1/12		
147	段皿		7.0	(2.4)	3/12			162	手付瓶	6.2		(9.6)	0/12		10
148	段皿		8.0	(1.8)	1/12	重(3mm)		163	手付瓶			(5.8)			
149	段皿	20.8		(2.0)	1/12			164	手付瓶			(15.0)			
150	段皿	19.2		(2.1)	1/12	内火ぶくれ		165	手付瓶		12.0	(7.0)	3/12		
151	段皿	17.2	7.4	2.3	3/12, 5/12	重(2mm)	10	166	手付瓶		12.0	(2.4)	9/12		

第44図 黒笹89号窯跡出土遺物実測図(6)



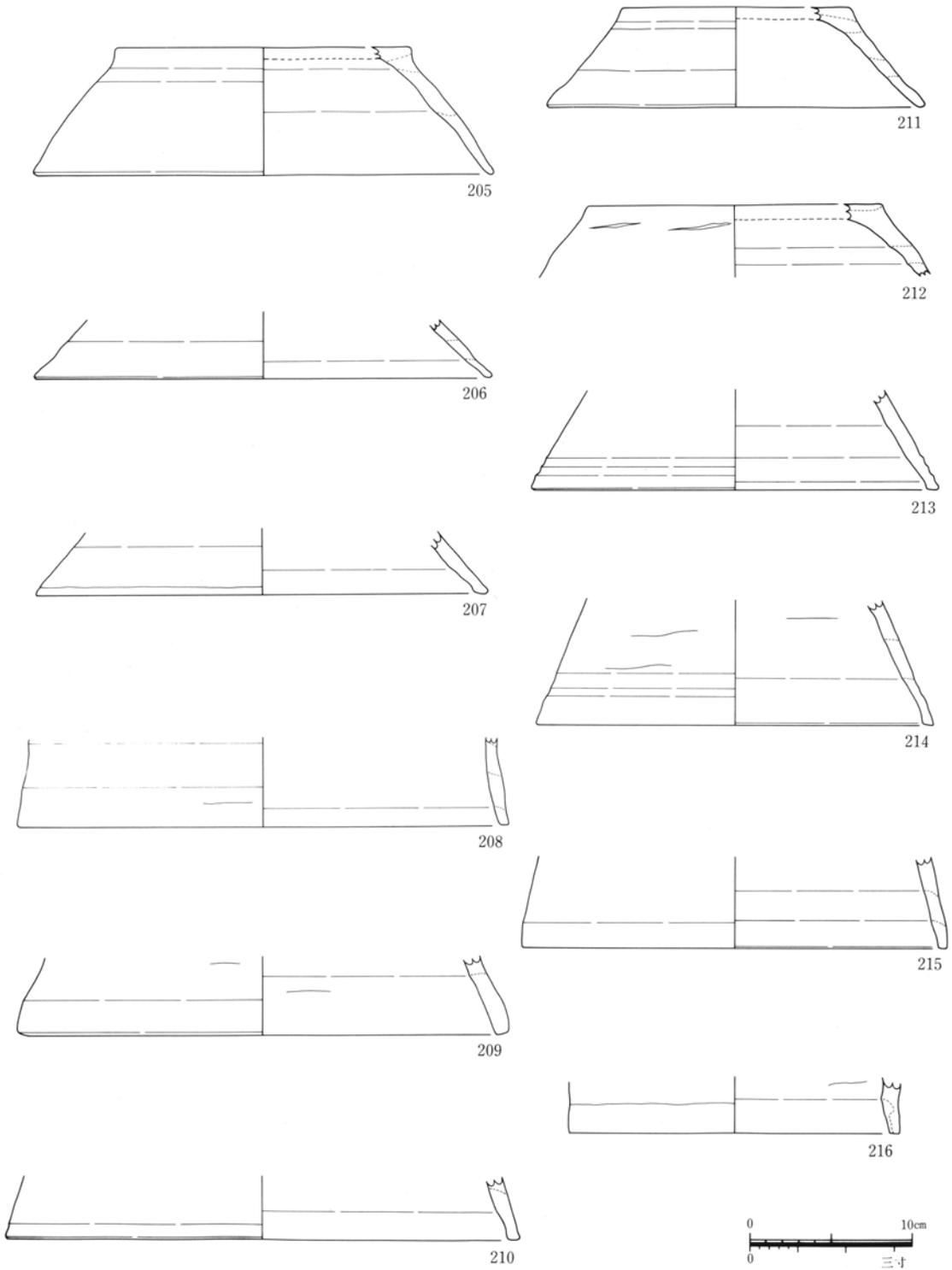
番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版	番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版
167	長頸壺	10.8		(1.7)	2/12			176	大椀		10	(3.5)	5/12	窯ゴミ	
168	長頸壺	10.4		(2.5)	3/12			177	大椀		11.4	(3.0)	2/12	重(3mm)	
169	長頸壺	12.2		(6.8)	3/12			178	双耳壺	18.0		(3.5)	1/12		
170	長頸壺		8.0	(13.4)	0/12, 4/12	内底窯ゴミ	10	179	双耳壺	16.4		(3.1)	1/12		
171	長頸壺		7.2	(10.8)	0/12, 12/12	内底降灰 K-14的高台	10	180	搦鉢	25.0		(8.4)	1/12		
172	浄瓶			(6.2)				181	搦鉢	21.8		(7.7)	1/12	火ぶくれ	
173	長頸壺			(8.2)		環状把手付長頸壺	10	182	搦鉢			14.0	(4.3)		
174	小瓶		6.1	(3.1)	9/12	生		183	短頸壺	11.0		(3.0)	3/12		
175	小瓶		5.8	(3.9)	12/12			184	短頸壺	10.0		(21.7)	2/12		10

第45図 黒笹89号窯跡出土遺物実測図(7)



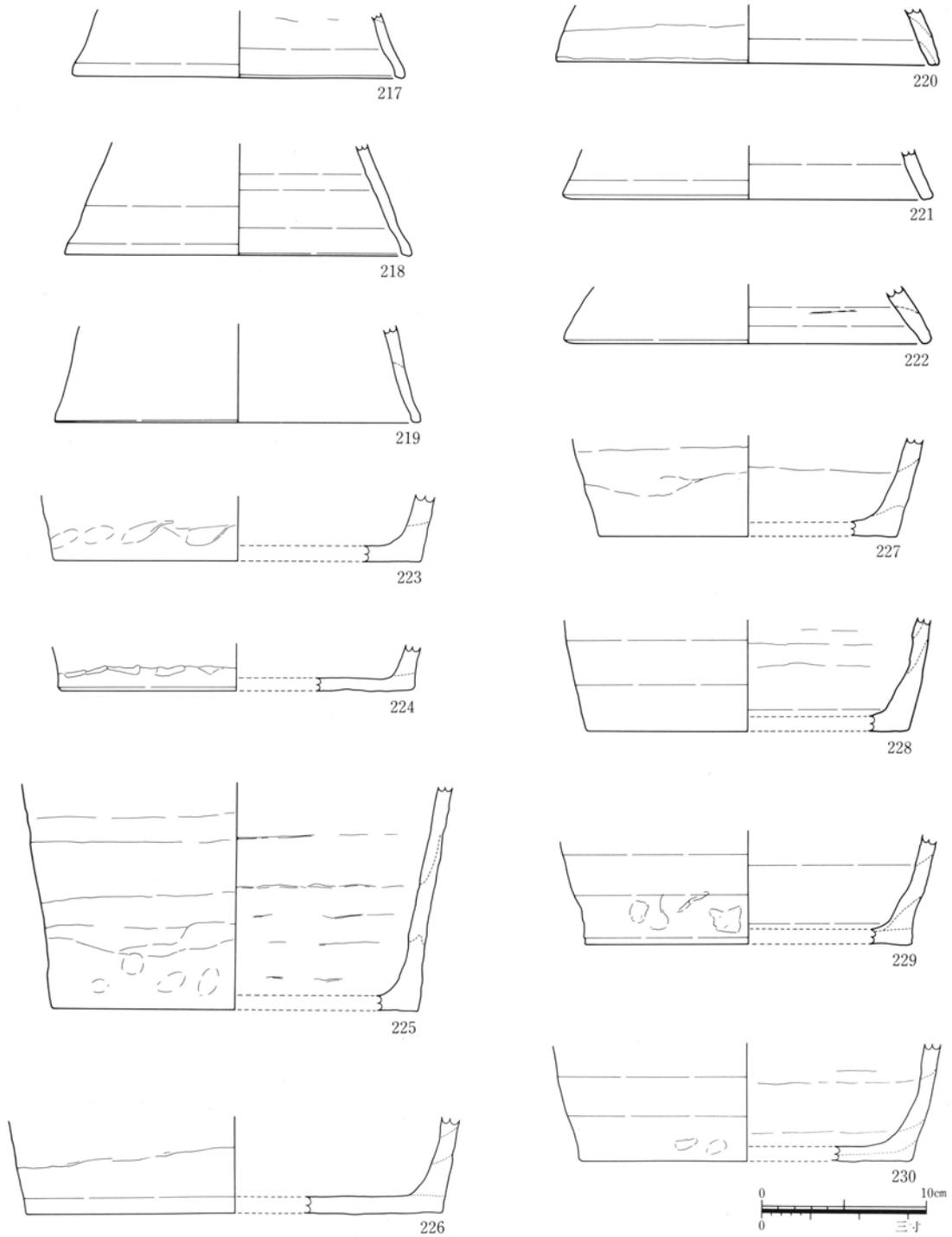
番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版	番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版
185	甕	15.4		(2.2)	1/12			195	無台杯	14.0	6.0	3.4	2/12, 12/12	須恵 内面火ぶくれ	
186	甕	16.0		(3.0)	2/12			196	無台杯		6.2	(4.2)	4/12	須恵	
187	無台杯	14.2	7.0	3.5	4/12, 4/12	須恵		197	無台杯		5.8	(2.2)	11/12	須恵	
188	無台杯	14.3	6.0	4.1	1/12, 5/12	須恵		198	蓋状ツク	11.2		(2.0)	3/12	須恵	
189	無台杯	14.2	7.2	4.1	0/12, 2/12	須恵	11	199	皿?	6.8		(4.0)	3/12	手づくね	
190	無台杯	12.8	6.4	3.7	2/12, 2/12	須恵		200	王冠ツク	5.3	5.7	1.6	3/12, 3/12		
191	無台杯	12.8	6.2	3.8	1/12, 4/12	須恵		201	王冠ツク	6.0	6.8	3.1	3/12, 3/12		
192	無台杯	14.7	5.8	3.4	1/12, 12/12	須恵		202	王冠ツク	6.3	6.8	2.1	3/12, 3/12		
193	無台杯		6.3	(2.6)	7/12	須恵		203	王冠ツク	7.4	8.4	2.7	1/12, 1/12		
194	無台杯		5.4	(2.2)	3/12	須恵		204	三又トチン			4.0			

第46図 黒笹89号窯跡出土遺物実測図(8)



番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版	番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版
205	サヤ蓋	28.2	18.0	7.9	1/12, 2/12			211	サヤ蓋	23.2	14.0	6.3	0/12, 2/12		
206	サヤ蓋	28.0		(3.6)	1/12			212	サヤ蓋		18.0	(4.4)			
207	サヤ蓋	27.6		(4.0)	1/12			213	サヤ蓋	24.9		(6.1)	0/12		
208	サヤ蓋	30.0		(5.5)	1/12			214	サヤ蓋	24.2		(7.6)	1/12		
209	サヤ蓋	30.0		(5.1)	0/12			215	サヤ蓋	26.0		(5.6)	0/12		
210	サヤ蓋	31.6		(4.0)	0/12			216	サヤ蓋	20.2		(3.2)	1/12		

第47図 黒笹89号窯跡出土遺物実測図(9)



番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版	番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版
217	サヤ蓋	20.0		(3.2)	1/12			224	サヤ	21.2	(2.6)	2/12			
218	サヤ蓋	11.0		(6.8)	1/12			225	サヤ	22.0	(14.8)	1/12		内底窯ゴミ	
219	サヤ蓋	22.0		(5.8)	1/12			226	サヤ	25.0	(5.7)	1/12		内底窯ゴミ	
220	サヤ蓋	23.2		(3.5)	1/12			227	サヤ	18.0	(6.0)	1/12			
221	サヤ蓋	22.4		(2.9)	1/12			228	サヤ	19.6	(6.9)	1/12			
222	サヤ蓋	22.2		(3.3)	0/12			229	サヤ	19.8	(6.9)	1/12			
223	サヤ		22.0	(4.0)	2/12			230	サヤ	20.2	(7.1)	1/12		内底窯ゴミ	

第48図 黒笹89号窯跡出土遺物実測図(10)

甕 (第46図：185・186)

口頸部が大きく外反し下端を引き出して口縁帯をつくりだしている。灰白色の良質の胎土である。

須恵器**椀B** (第46図：187～197)

底部に高台を有しないもので、回転糸切り痕がそのまま残る。内外面に火だすき痕を有するものが多い。底部より直線的に開いて口縁にいたるもの(187・188・192・195)と底部より丸みを帯びて緩やかに外に開いて口縁にいたるもの(189～191)とがある。

窯道具

窯道具には、蓋状ツク(第46図198)・王冠状ツク(第46図200～203)・三叉トチン(第204)と降灰を防ぐためのサヤ、蓋(第47図、第48図・205～219)、筒状サヤ(第48図223～230)がある。蓋には窯壁や降灰が付着している。

緑釉陶器(素地)

緑釉を施す前に一次焼成したもので、内外面に丁寧なへら磨きが施されている。水簸された灰白色の胎土で、灰釉陶器に比べて軟質のものもある。遺物観察表には1989年度版『新版標準土色帖』を用いて色調表示し、また生焼けのような軟質のものを「生」、焼台として再利用されたものを「再」、重ね焼きの痕のあるものを「重」として記述した。なお実測図の縮尺は1：3である。

椀 (第49図～第51図：231～256・258～292、第75図：467・468)

全体の器形を観察できるものが少ない。大形(231～243、258～262、288)・中形(244～256、263～268、467・468)・小形(254)の3種類あり、口縁端部は顕著に外反するものが多い。いずれも内外面には2～4mm幅のへら磨き痕が残り、胎土は水簸されて灰白色を呈する。高台は断面長方形の角高台でやや開いた丁寧なつくりのものが大部分であるが、蛇の目高台のもの(263～268、467・468)も8点ある。底部に窯印のある椀(251)は、焼台として再利用されており、内面に粘土塊を置きその上に灰釉椀をのせている。その他に4点窯印のあるもの(289～292)がある。

稜椀 (第52図：293～310)

腰に稜のある椀で、椀と同様に大形(295～297)・中形(293・298・299)・小形(294・300～303)の3種類あり、口縁端部がやや外反したもの(298・302)もある。高台はやや開いた角高台であり内外面にはへら磨きが施されている。窯印のあるもの(307)が1点ある。

稜皿（第53図：311～323）

腰に稜のある皿で、稜のある腰から斜めに立ち上がり口縁となるもの（312・315～323）と口縁端部がやや外反したもの（311・313・314）がある。高台はやや開いた角高台で、内外面にはへら磨きが施される。

皿（第53図：324～336）

角高台より斜めに立ち上がり口縁端部が僅かに外反する。内外面にはへら磨きが施される。

段皿（第54図：337～354、第57図：470）

内外面に段を有する皿で、内面のみに段のある広縁のもの（337～343・351・352・354）と内外面に段のある狭縁のもの（344～350・353・470）とがある。広縁のものは高台より直線的に斜めに立ち上がっており、狭縁のものは腰部に丸みを帯びている。高台もやや開いた角高台である。内外面にはへら磨きが施される。

輪花段皿（第54図：355）

口縁端部外側をへら状のもので押え輪花とした段皿で、内外面にはへら磨きが施される。

輪花皿（第54図：356～358）

口縁端部に切込みがはいり、切込み部分の胴部の外面には沈線、内面には短い粘土紐を貼り付けて長さ2.6cmの隆帯としている。角高台である。内外面にはへら磨きが施される。

輪花椀（第55図：359～366）

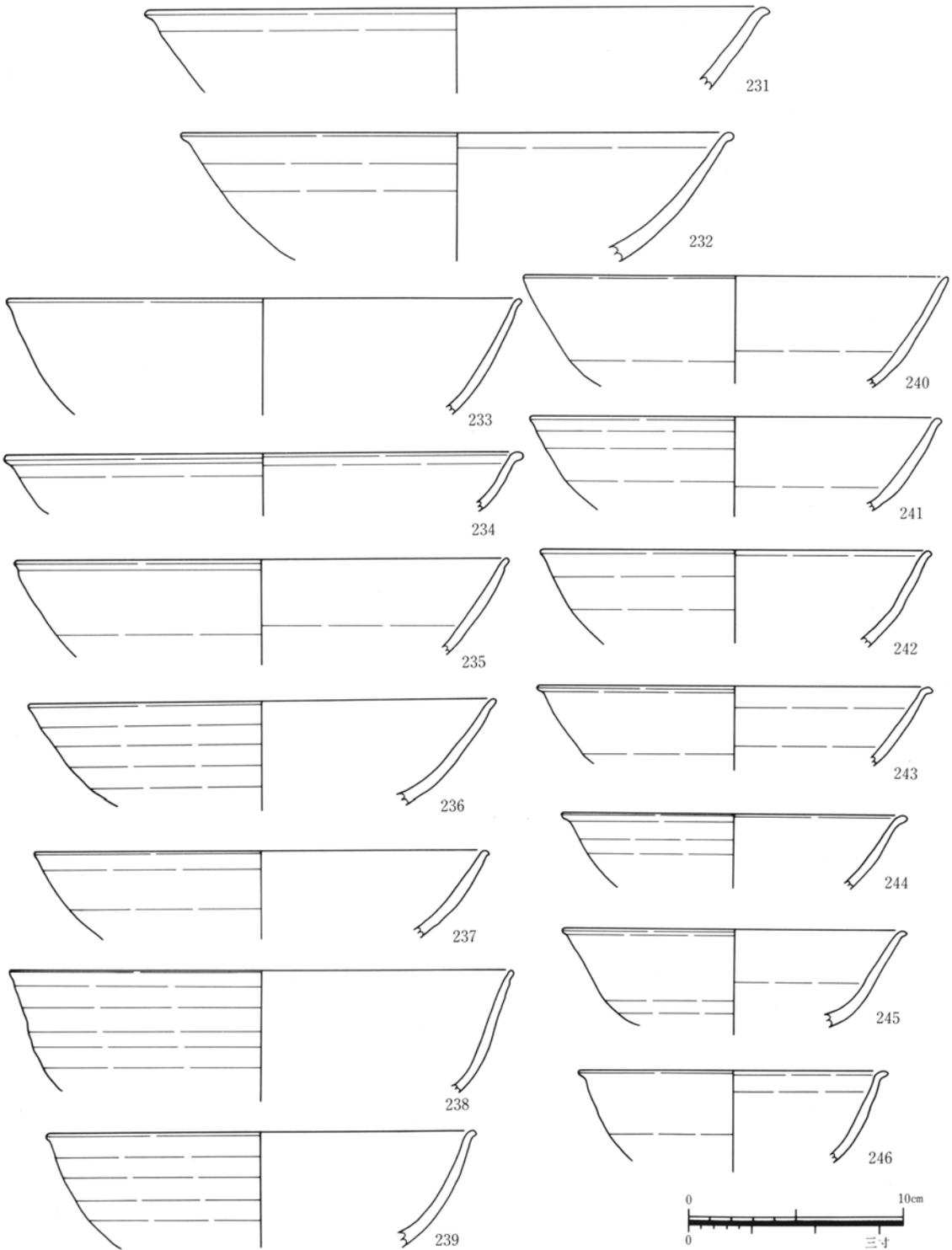
口縁端部外側をへら状のもので押え、内面に突起部分長さ3.5cmを張り付けたように調整したもの（359・360）と口縁端部に切込みがはいり、切込み部分の胴部の外面には沈線、内面には短い粘土紐を貼り付けて2.2～2.8cmの長さの隆帯としたもの（361～366）がある。内外面にはへら磨きが施される。

輪花小椀（第50図：257）

口縁端部に切込みと胴部に短い沈線を入れた輪花小椀で内外面にはへら磨きが施される。

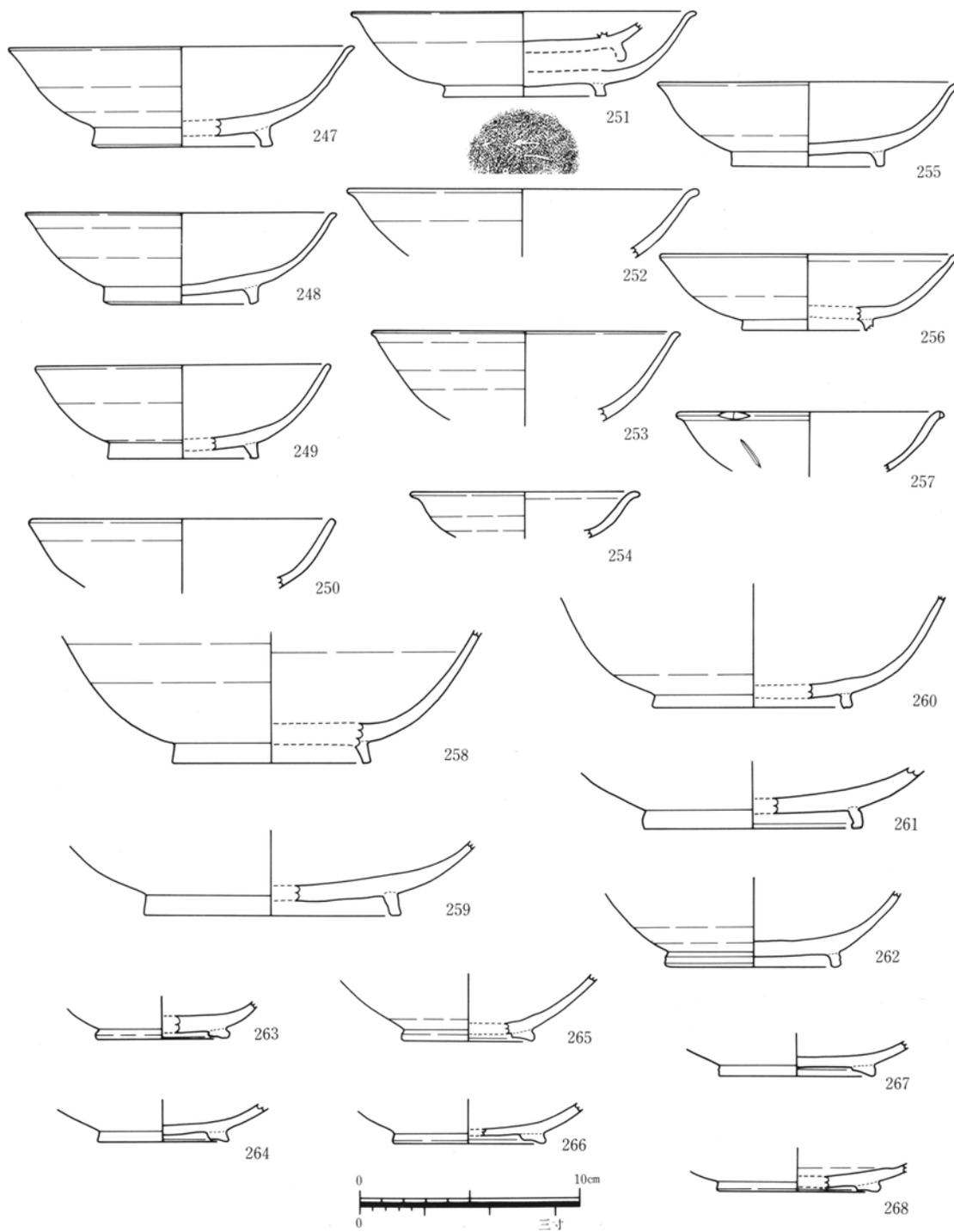
香炉（第55図：367～374）

裾張りの強い高台を持ち、底部は丸底。胴部上端には一条の沈線が巡り、外面にはへら磨きが施されている。



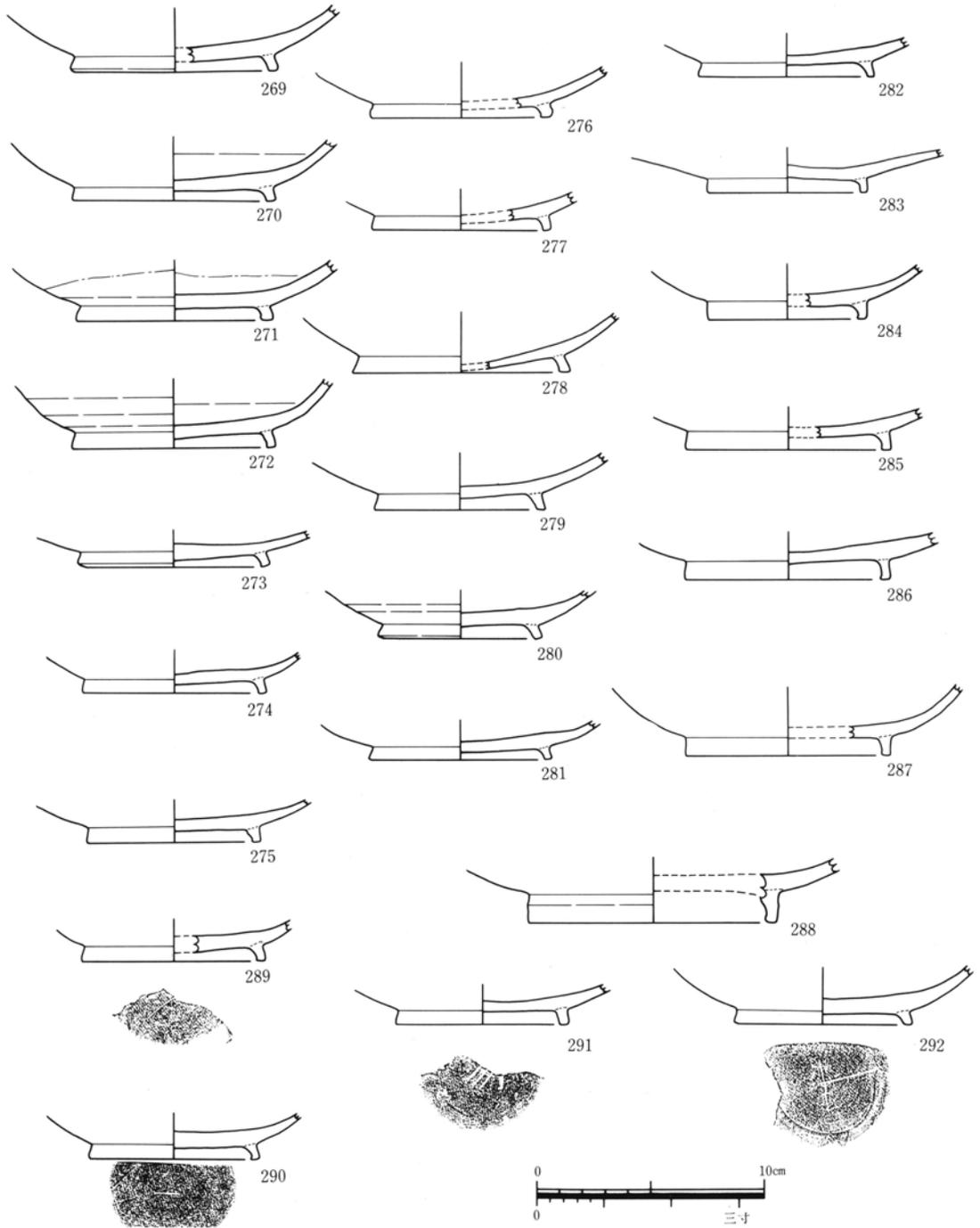
番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・底径(肩)	その他	図版	番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・底径(肩)	その他	図版
231	碗	29.0		(3.8)	1/12			239	碗	20.0		(5.7)	0/12	N8/0	
232	碗	25.4		(11.6)	0/12	N7/0生		240	碗	19.7		(5.1)	0/12	10Y8/1生	
233	碗	24.0		(5.6)	0/12	N7/0		241	碗	18.8		(4.4)	0/12	N7/0	
234	碗	23.8		(2.8)	1/12	N7/0		242	碗	17.8		(4.5)	1/12	10Y7/1	
235	碗	23.0		(4.5)	1/12	10Y8/1		243	碗	18.4		(3.7)	1/12	N7/0	
236	碗	21.6		(4.9)	0/12	7.5Y8/1生		244	碗	15.8		(3.6)	1/12	N6/0	
237	碗	21.0		(3.9)	1/12			245	碗	16.0		(4.7)	0/12	N6/0	
238	碗	22.4		(5.7)	0/12	N8/0		246	碗	14.4		(4.2)	1/12	N8/0	

第49図 黒笹89号窯跡出土遺物実測図(11) 素地



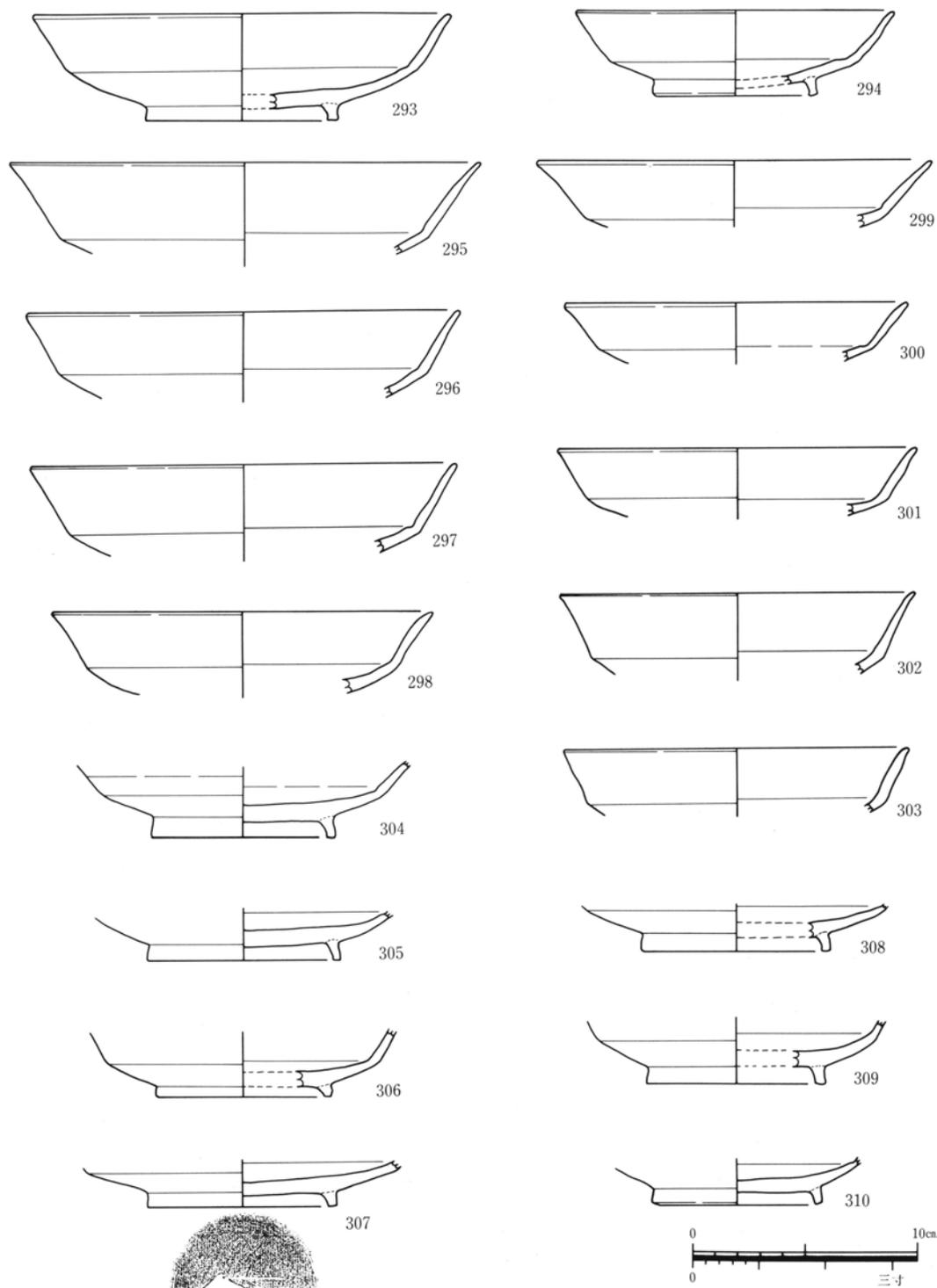
番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・底径(肩)	その他	図版	番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・底径(肩)	その他	図版
247	碗	15.6	7.8	4.6	0/12, 5/12	7.5Y7/0生, 法量図	11	258	碗	9.0	(5.9)		2/12	N7/0	
248	碗	13.8	6.4	4.2	1/12, 9/12	N7/0生, 法量図	11	259	碗	11.6	(3.4)		2/12	N7/0	
249	碗	13.2	6.9	4.3	1/12, 1/12	7.5Y6/0, 法量図		260	碗	9.0	(5.1)		0/12	N6/0	
250	碗	14.4		(3.5)	1/12	N7/0		261	碗	10.0	(2.6)		2/12	7.5Y7/1生	
251	碗	15.6	7.3	3.9	0/12, 12/12	N7/0再, 法量図	11	262	碗	8.0	(3.5)		4/12	N7/0	
252	碗	15.8		(3.0)	1/12	N6/0		263	碗	6.0	(1.6)		3/12	高台7.5Y8/1 他7/0生	
253	碗	13.8		(4.1)	1/12	N6/0		264	碗	6.0	(1.5)		2/12	7.5Y8/1生	
254	碗	14.0		(3.1)	0/12	N7/0		265	碗	6.0	(3.0)		1/12	N7/0	
255	碗	13.8	7.0	3.8	0/12, 8/12	N7/0再, 法量図	11	266	碗	7.0	(1.8)		12/12	N7/0	11
256	碗	13.8	(5.6)	(3.5)	1/12	N7/0, 法量図		267	碗	8.0	(1.5)		4/12		
257	輪花小碗	11.8		(2.3)	2/12	N7/0		268	碗	7.2	(1.1)		2/12		

第50図 黒笹89号窯跡出土遺物実測図(12) 素地



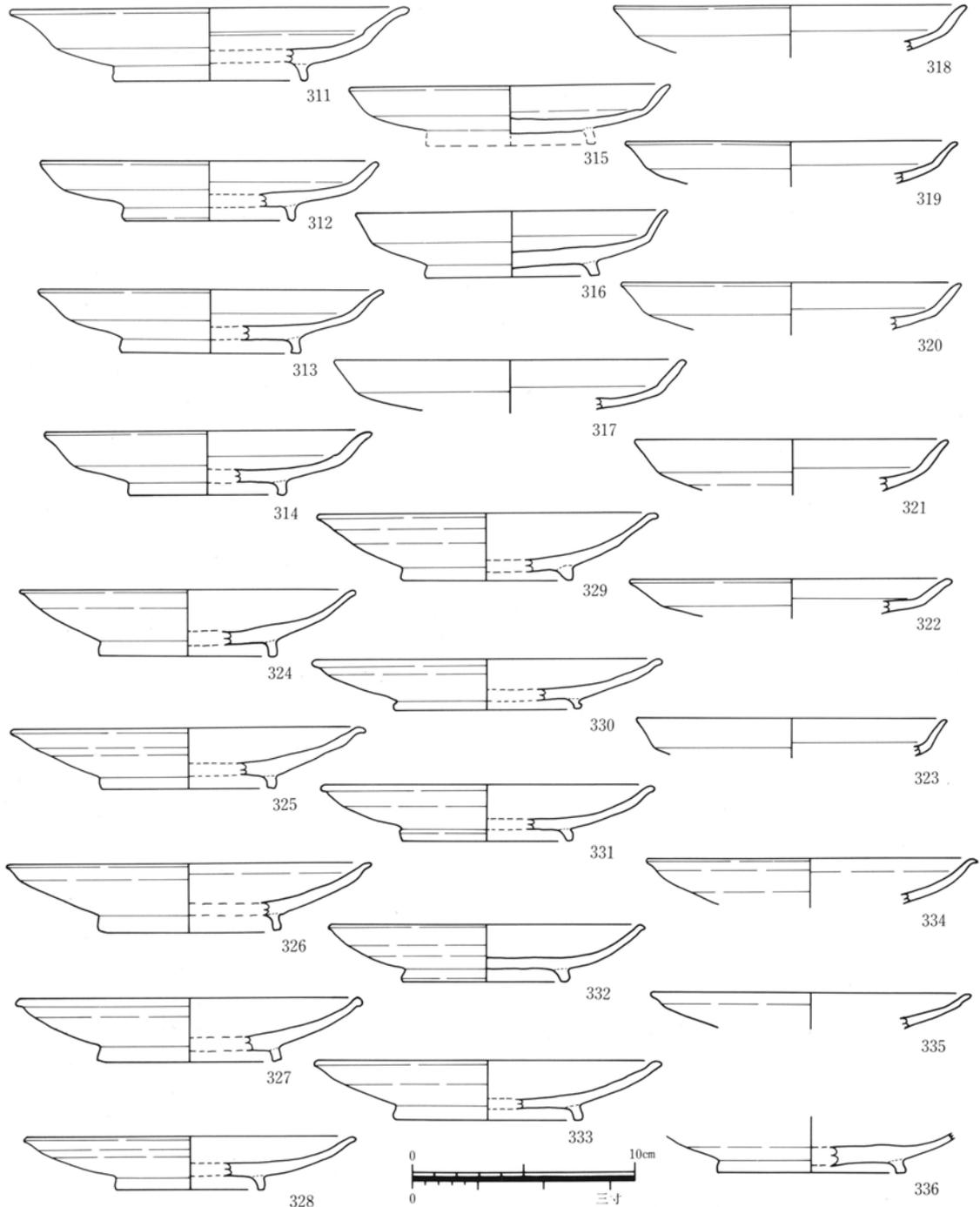
番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・底径(肩)	その他	図版	番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・底径(肩)	その他	図版
269	椀		9.0	(3.0)	2/12	N7/0		281	椀		8	(1.7)	6/12	N7/0	
270	椀		9.0	(2.7)	3/12	10Y8/1生		282	椀		7.6	(1.7)	4/12	N7/0	
271	椀		8.6	(2.5)	4/12	N7/0再		283	椀		7.0	(1.6)	4/12	10Y7/1再	
272	椀		9.0	(3.0)	1/12	N6/0		284	椀		6.9	(2.2)	1/12	N7/0生	
273	椀		7.8	(1.8)	12/12	N7/0重		285	椀		9.0	(1.8)	3/12	7.5Y7/1生	
274	椀		8.1	(1.7)	3/12	7.5Y7/1重生		286	椀		9.0	(2.1)	2/12	N7/0	
275	椀		7.6	(1.7)	6/12	N7/0重生		287	椀		9.0	(3.0)	1/12	N6/0	
276	椀		7.8	(2.2)	3/12	高台7.5Y8/1 他7/0重生		288	椀		10.8	(2.6)	1/12	10Y8/1生	
277	椀		7.8	(1.6)	4/12	N7/0		289	椀		8.0	(1.7)	3/12	N7/0	
278	椀		9.6	(2.5)	2/12	N7/0		290	椀		7.9	(2.0)	5/12	7.5Y8/1生	
279	椀		7.4	(2.4)	5/12	N7/0再		291	椀		7.5	(1.7)	5/12	7.5Y7/1	
280	椀		6.6	(2.1)	5/12	5Y6/1重		292	椀		7.9	(2.5)	5/12	7.5Y8/1生	

第51図 黒笹89号窯跡出土遺物実測図 (13) 素地



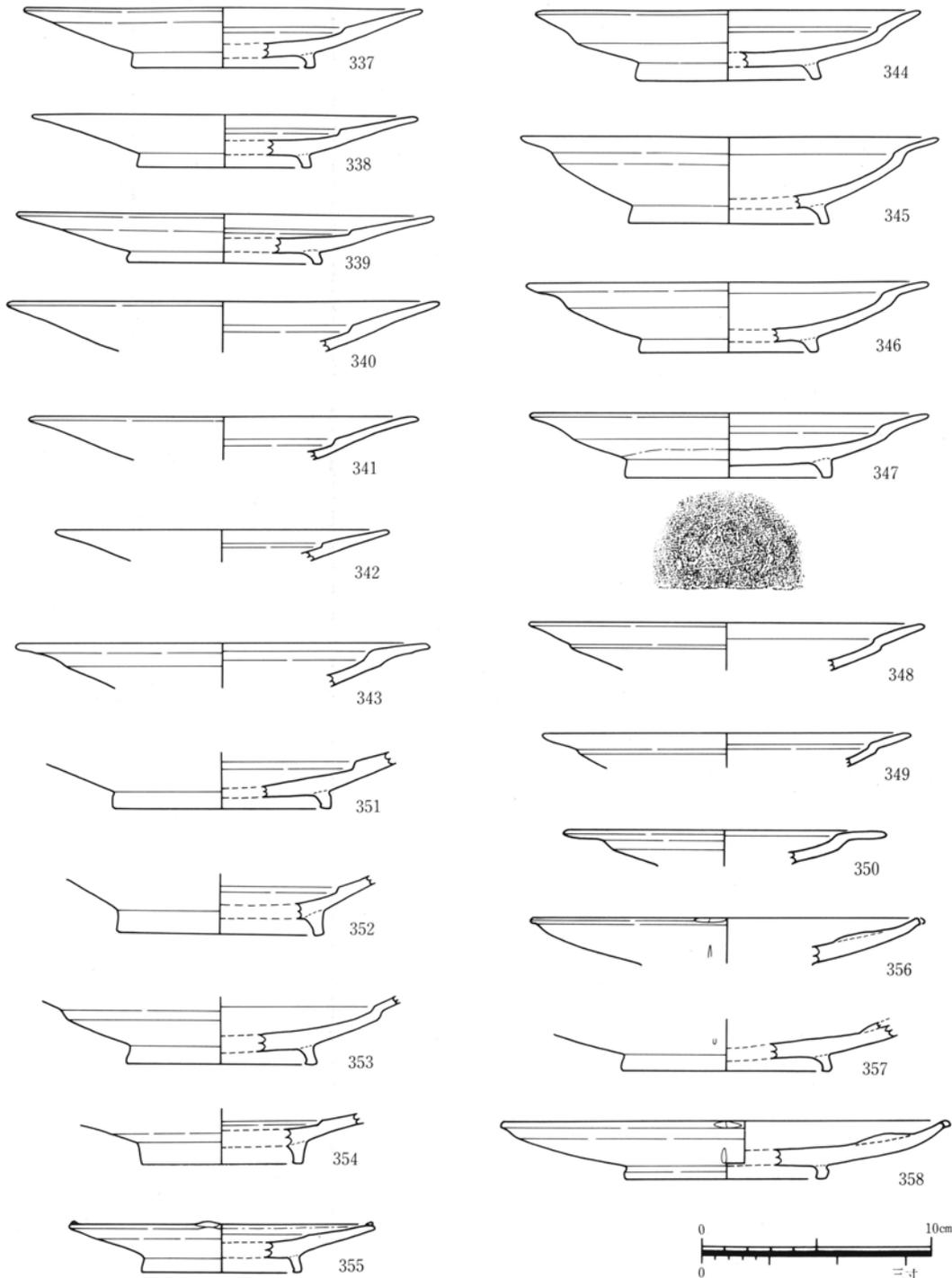
番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・底径(肩)	その他	図版	番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・底径(肩)	その他	図版
293	稜椀	18.4	8.6	4.8	2/12, 2/12	10Y8/1	11	302	稜椀	15.8		(3.6)	2/12	N7/0	
294	稜椀	14.2	7.3	3.8	1/12, 2/12	N7/0		303	稜椀	15.4		(3.0)	1/12	N8/0	
295	稜椀	21.0		(4.1)	0/12	N7/0		304	稜椀	14.8	8.2	3.9	0/12, 5/12	N7/0生	
296	稜椀	19.4		(3.8)	1/12	N7/0		305	稜椀		8.6	(2.1)	3/12	N7/0生	
297	稜椀	19.0		(3.9)	0/12	N6/0		306	稜椀		7.8	(3.1)	1/12	N7/0	
298	稜椀	17.0		(3.6)	0/12	N7/0		307	稜椀		8.5	(2.0)	8/12	N7/0	
299	稜椀	17.4		(3.0)	0/12	7.5Y8/1		308	稜椀		8.4	(2.0)	2/12	N7/0重	
300	稜椀	15.2		(2.6)	1/12	N7/0生		309	稜椀		8.0	(2.8)	1/12	N7/0生	
301	稜椀	16.0		(3.2)	1/12	N8/0		310	稜椀		7.5	(2.1)	12/12	N7/0生	

第52図 黒笹89号窯跡出土遺物実測図(14) 素地



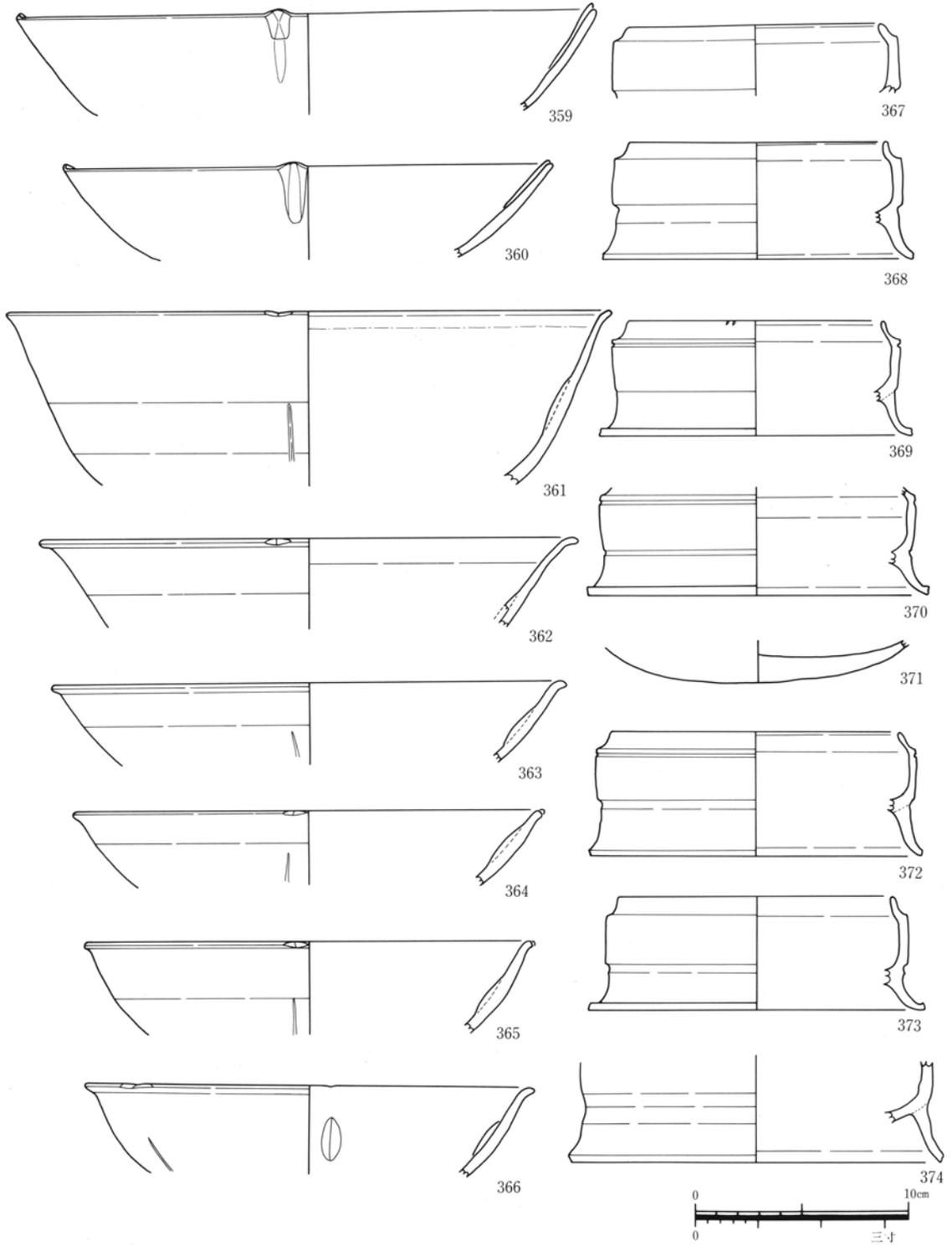
番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・底径(肩)	その他	図版	番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・底径(肩)	その他	図版
311	椀	18.0	8.6	3.3	2/12, 2/12	N7/1重, 法量図		324	皿	15.0	8.0	3.0	1/12, 3/12	5Y8/1生, 法量図	
312	椀	15.0	7.6	2.7	5/12, 4/12	10Y8/1, 法量図	11	325	皿	15.6	7.8	2.75	0/12, 2/12	2.5GY7/1生, 法量図	
313	椀	15.5	8.0	2.9	1/12, 1/12	N6/0, 法量図		326	皿	16.4	7.6	3.1	2/12, 1/12	10Y8/1生, 法量図	
314	椀	14.8	7.0	2.9	1/12, 5/12	N6/0, 法量図		327	皿	15.2	8.3	2.9	1/12	N7/0, 法量図	
315	椀	14.4	(7.6)	(2.7)	2/12	高台内-7.5Y8/1 N6/0生		328	皿	14.6	6.6	2.4	2/12, 2/12	N7/0, 法量図	
316	椀	14.0	7.8	3.0	4/12, 4/12	N6/0, 法量図	11	329	皿	15.2	7.6	3.1	0/12, 3/12	N7/0, 法量図	
317	椀	15.8		(2.3)	1/12	10Y7/1		330	皿	15.4	8.2	2.3	2/12, 2/12	N7/0, 法量図	
318	椀	15.9		(2.2)	2/12	N6/0		331	皿	15.0	7.6	2.5	2/12, 3/12	N7/0, 法量図	
319	椀	15.0		(2.0)	1/12	N6/0		332	皿	14.0	7.5	2.6	0/12, 6/12	N6/0再重, 法量図	
320	椀	15.2		(2.3)	1/12	N7/0		333	皿	15.6	8.3	2.7	1/12, 2/12	N6/0重, 法量図	
321	椀	14.0		(2.4)	1/12	N7/0		334	皿	14.6		(2.2)	1/12	5Y8/2生	
322	椀	14.4		(1.6)	2/12	N7/0		335	皿	14.2		(1.7)	2/12	N5/0再	
323	椀	14.0		(1.8)	1/12	10Y8/1生		336	皿		8.4	(2.0)	2/12	N5/0	

第53図 黒笹89号窯跡出土遺物実測図 (15) 素地



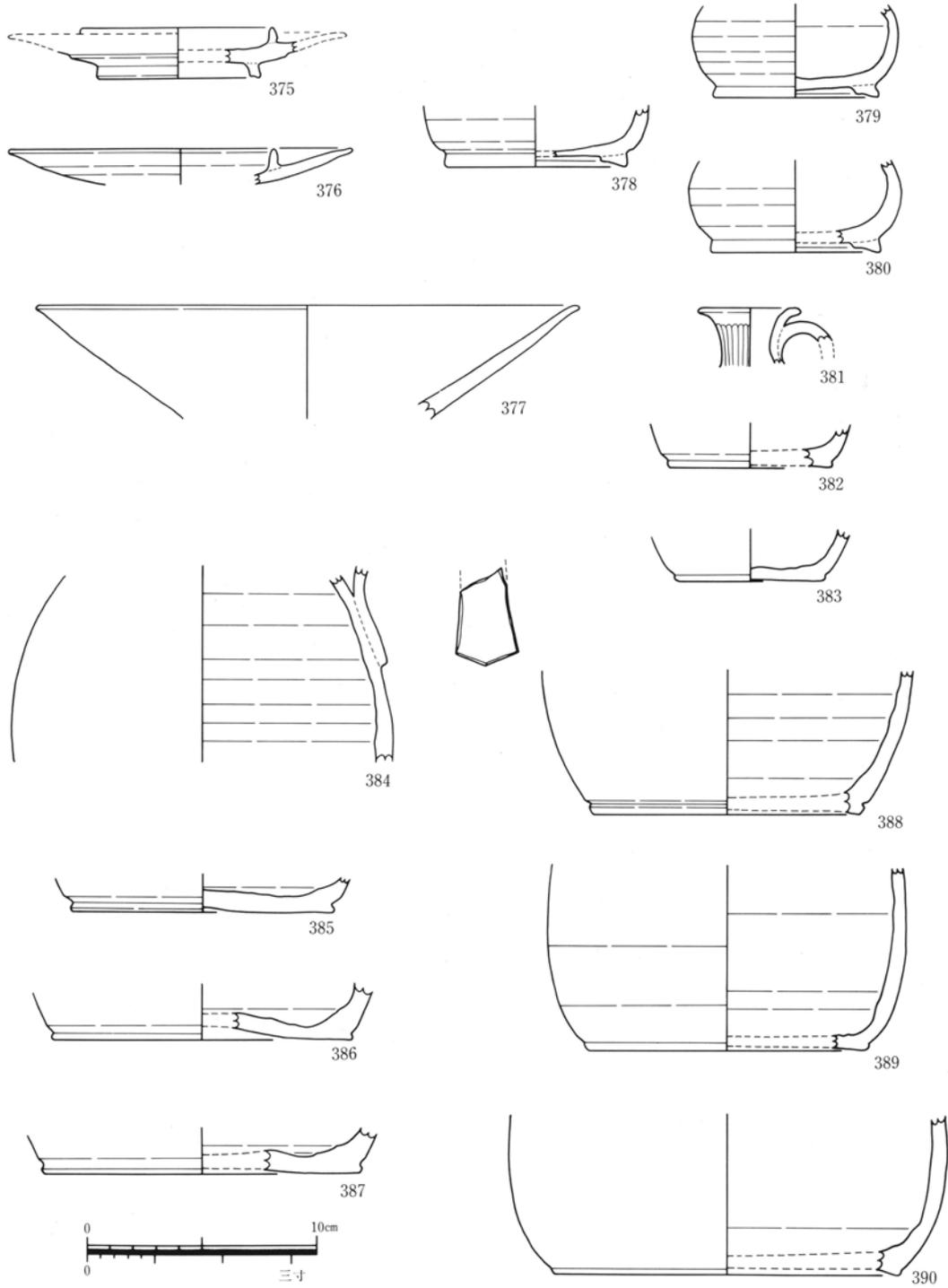
番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・底径(肩)	その他	図版	番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・底径(肩)	その他	図版
337	段皿	17.2	8.0	2.6	1/12, 3/12	N7/0		348	段皿	17.2		(2.0)	1/12	N7/0	11
338	段皿	16.8	7.6	2.3	0/12, 4, 12	N7/0		349	段皿	16.0		(1.6)	1/12	N7/0	
339	段皿	18.2	8.4	2.1	1/12, 2/12	N7/0		350	段皿	13.4		(1.6)	0/12	N7/0	
340	段皿	18.8		(2.2)	2/12	7.5Y8/1生		351	段皿		9.4	(2.5)	3/12	N7/0	
341	段皿	17.0		(2.0)	1/12	N7/0		352	段皿		9.0	(2.5)	2/12	N7/0	
342	段皿	14.5		(1.5)	2/12	N7/0		353	段皿		8.2	(3.0)	3/12	N7/0重	
343	段皿	17.8		(2.0)	0/12	N7/0		354	段皿		7.0	(2.0)	1/12	N7/0生	
344	段皿	16.4	8.0	2.9	2/12, 6/12	N6/0		355	輪花段皿	13.2	7.0	2.3	4/12, 4/12	N7/0再	
345	段皿	18.2	8.7	3.8	0/12, 1/12	10Y8/1	12	356	輪花皿	17.0		(1.9)	0/12	N8/0	
346	段皿	17.4	7.8	3.8	3/12, 2/12	N6/0重		357	輪花皿		9.0	(1.9)	2/12	N8/0重	
347	段皿	17.4	8.8	2.8	2/12, 7/12	7.5Y8/1	11	358	輪花皿	19.2	8.8	2.5	3/12, 3/12	重再?	12

第54図 黒笹89号窯跡出土遺物実測図 (16) 素地



番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・底径(肩)	その他	図版	番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・底径(肩)	その他	図版
359	輪花椀	27.2		(4.9)	0/12	N7/0生		367	香炉 ³	11.8		(3.2)	1/12	N7/0	
360	輪花椀	23.0		(4.3)	1/12	7.5Y8/1		368	香炉 ³	12.0	14.6	5.6	1/12, 0/12	N7/0	
361	輪花椀	28.0		(8.2)	0/12	N7/0		369	香炉 ³	12.0	14.6	5.4	0/12, 1/12	10Y7/1	
362	輪花椀	25.2		(4.2)	1/12	N6/0再		370	香炉 ³			(5.3)	0/12	N7/0	
363	輪花椀	24.0		(3.9)	1/12	N8/0		371	香炉 ³			(1.9)	7/12	7.5Y8/1生	
364	輪花椀	22.0		(3.7)	0/12	N8/0		372	香炉 ³	13.5	15.4	5.9	0/12, 0/12	10Y7/1	
365	輪花椀	21.0		(4.4)	1/12	N8/0		373	香炉 ³	12.8	15.8	5.3	2/12, 2/12	N7/0	13
366	輪花椀	15.5		(3.0)	2/12	N7/0		374	香炉 ³			(4.8)	1/12	10Y7/1	

第55図 黒笹89号窯跡出土遺物実測図 (17) 素地



番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・底径(肩)	その他	図版	番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・底径(肩)	その他	図版
375	托	内8.4	7.0	2.3	2/12	N7/0		383	手付小瓶		6.2	(2.5)	6/12	7.5Y8/1生	
376	托	15.1		(1.6)	1/12	7.5Y8/1生		384	手付瓶			(8.7)			
377	唾壺	23.8		(5.2)	0/12	N7/0		385	手付瓶		11.4	(1.7)	3/12	N7/0	
378	唾壺		8.0	(2.6)	1/12	5Y7/2		386	手付瓶		13.0	(2.5)	3/12	N6/0	
379	唾壺		7.2	(4.0)	12/12	N7/0	13	387	手付瓶		13.8	(2.1)	2/12	N6/0	
380	唾壺		7.4	(4.0)	5/12	7.5Y8/1生		388	手付瓶		11.6	(6.5)	0/12	10Y8/1生	
381	手付小瓶	4.5		(2.5)	4/12	10Y8/1生	11	389	手付瓶		12.0	(8.4)	4/12		
382	手付小瓶		7.0	(2.0)	2/12	7.5Y8/1生		390	手付瓶		15.0	(7.0)	1/12	N7/0	

第56図 黒笹89号窯跡出土遺物実測図 (18) 素地

托（第56図：375・376、第57図：471）

高台より斜めに直線的に立ち上がった皿の内面に高さ4mmの三日月高台状の隆帯をもつ。高台にはやや開いた角高台（375）と蛇の目高台（471）があり、内外面にはへら磨きが施される。

唾壺（第56図：377～380）

丸みを帯びた胴部と大きく直線的に開く口縁となった口頸部をもち、底部は蛇の目高台となっている。外面にはへら磨きが施される。

手付小瓶（第56図：381～383）

肩から緩やかにすぼまり頸部となる徳利形をした小型のもので、肩から口頸部には把手が付けられている。外面にはへら磨きが施され、口頸部は縦方向のへら磨きとなっている。

手付瓶（第56図：384～390）

肩から緩やかにすぼまり頸部となる徳利形をしたもので、面取り整形された板状の把手が肩から口頸部に付けられている。底部脇が僅かに削り込まれた平底で、外面にはへら磨きが施されている。

陰刻花文椀（第58図、第59図：391～418）

椀の内底面に細い篋描きの四弁花文が、口縁部内外面には四方向に細い篋描きで半截四弁花文が描かれている。1例のみではあるが細い篋描き飛雲文が口縁外面に描かれたもの（408）がある。内外面ともに全面にへら磨きが施されている。

陰刻花文稜椀（第61図：437～447）

腰に稜のある椀で、陰刻花文は椀と同様に、細い篋描きにより内底面に四弁花文、口縁部内外面には半截四弁花文が描かれている。内外面ともに全面へら磨きが施されている。

陰刻花文・椀底部（第60図：419～436）

椀と稜椀と輪花椀の底部の判別が不能なためこれをまとめたもの。内底面の細い篋描きによる四弁花文も、四弁花文のみ、太い圏線の回りに四弁花文を配したもの（433～435）、太い圏線だけのもの（436）の3種類ある。内外面ともにへら磨きが施されている。

陰刻花文稜皿（第62図：448～452）

腰に稜のある椀で、細い篋描きによる半截四弁花文が口縁の内外面に描かれている。口縁外面に花文ではなく細い篋描きによる縦の沈線が5～6条描かれているもの（448）がある。内外面ともにへら磨きが施されている。

陰刻花文皿（第62図：453～458）

口縁の内面に細い篋描きによる半截四弁花文が描かれ、内外面ともにへら磨きが施されている。

陰刻花文輪花段皿（第62図：459・460）

内面に段を有する広縁のもので、口縁端部を外側から押え、抑えられた内側には細い粘土紐を段まで貼り付けて隆帯としている。細い篋描きによる半截四弁花文が口縁内面に、内底面には四弁花文が描かれている。内外面にはへら磨きが施される。

陰刻花文輪花椀（第62図：461・462）

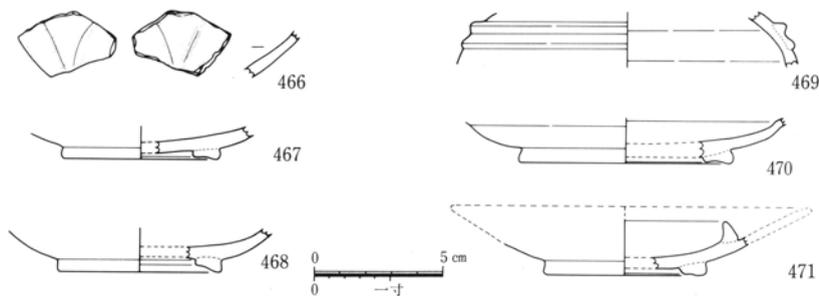
口縁端部を外側から押え、押えられた内側には細い粘土紐が貼り付けられて隆帯としている。口縁内面には細い篋描きによる半截四弁花文が描かれ、内底面にはへら磨きが施されている。

陰刻花文手付瓶（第62図：463）

面取り整形された板状の把手が肩から口頸部に付けられており、把手には細い篋描きによる沈線で紋様が描かれ、把手の付いた胴部には細い篋描きによる花文が描かれている。

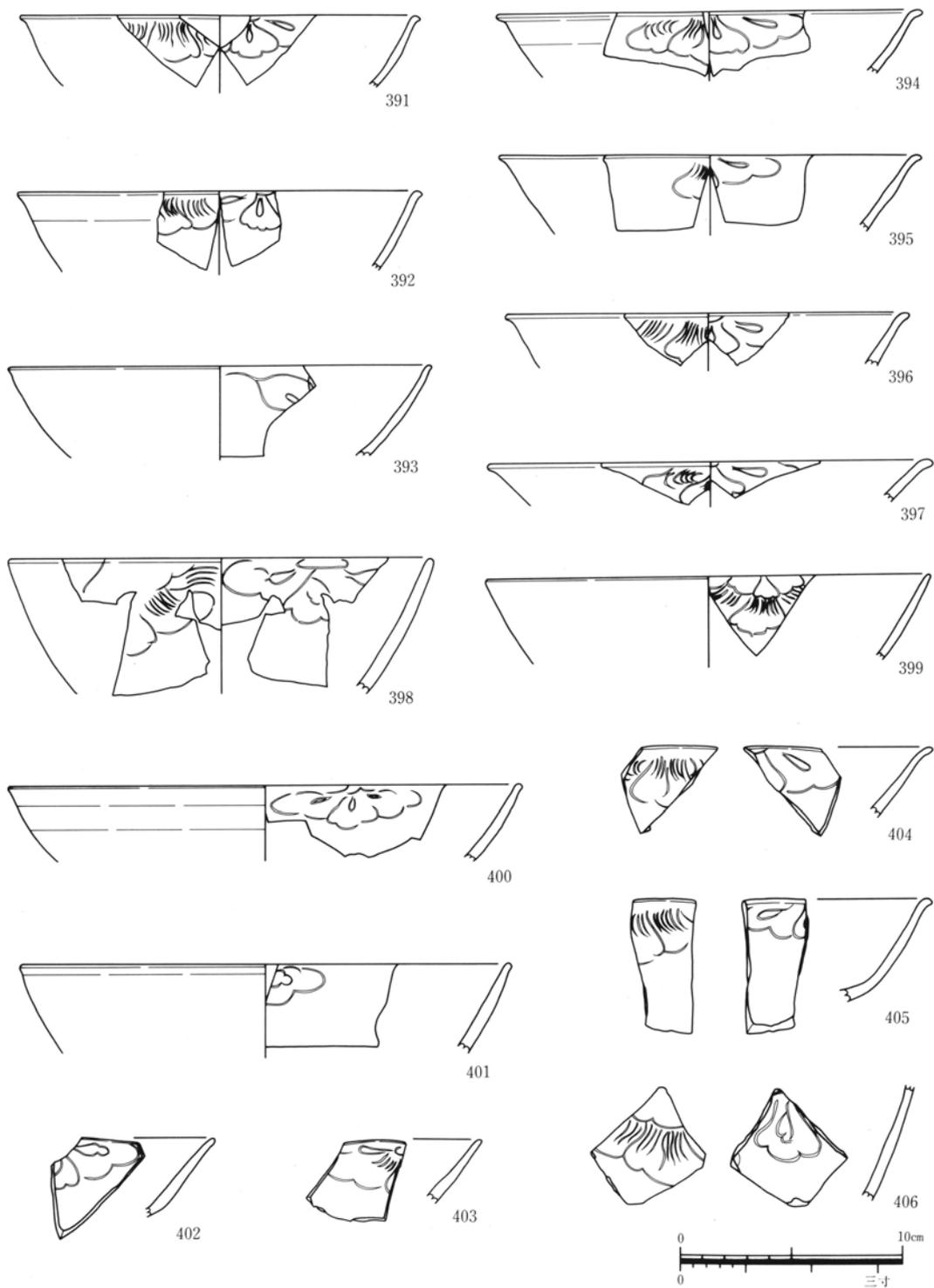
陰刻花文透彫香炉蓋（第62図：464・465）

陰刻花文の透彫りを施している蓋の一部で、内外面ともにへら磨きが施されている。



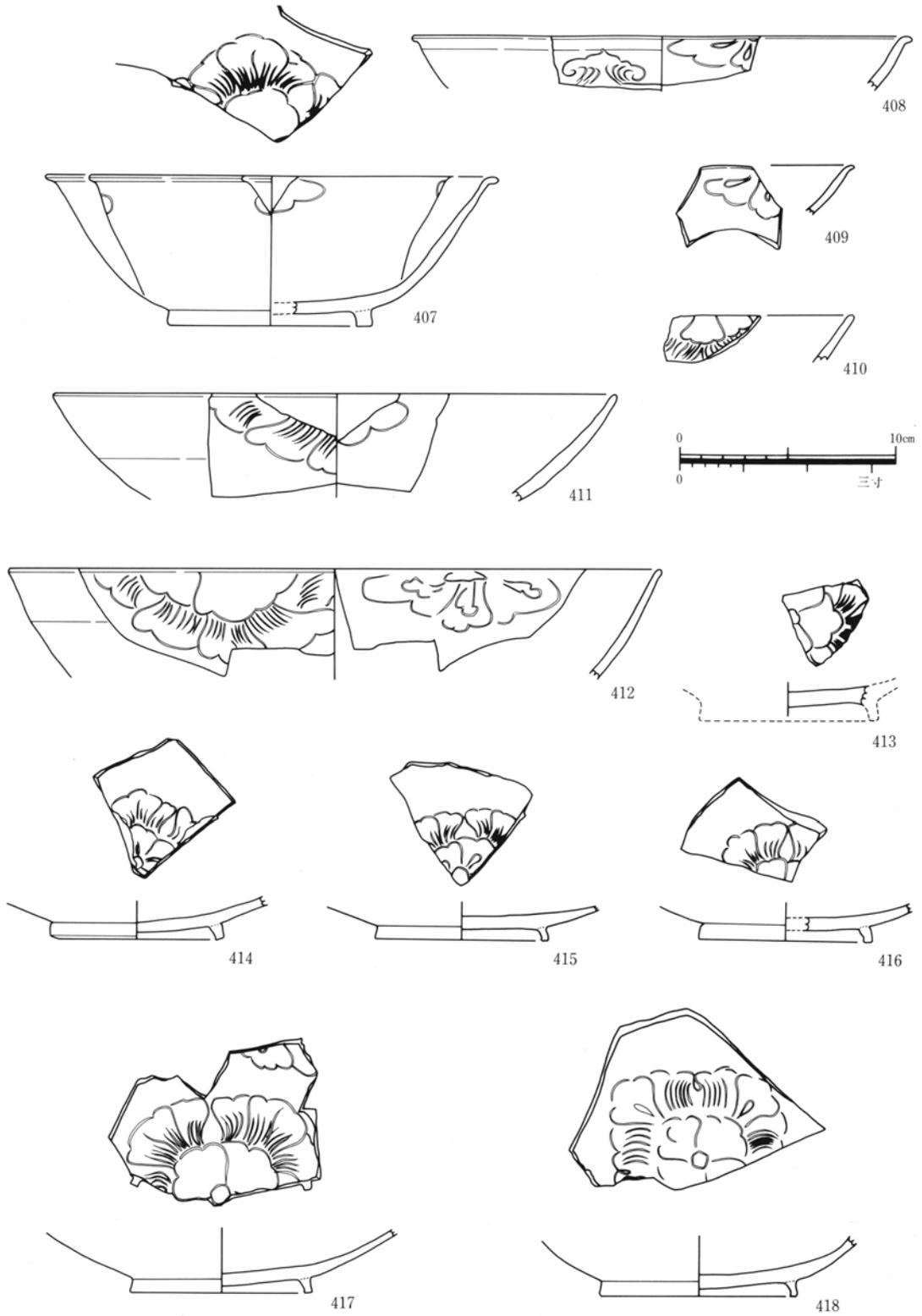
番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版	番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・口底(肩)	その他	図版
466	蓮弁文椀				0/12	灰釉		469	凸帯付瓶				0/12	灰釉	
467	椀		(6)		3/12	素地N7/0		470	段皿		(8.2)		0/12	素地7.5Y6/0	
468	椀		(6.4)		2/12	素地N7/0		471	托		(6.2)		2/12	素地7.5Y8/1	

第57図 黒笹89号窯跡出土遺物実測図(19)



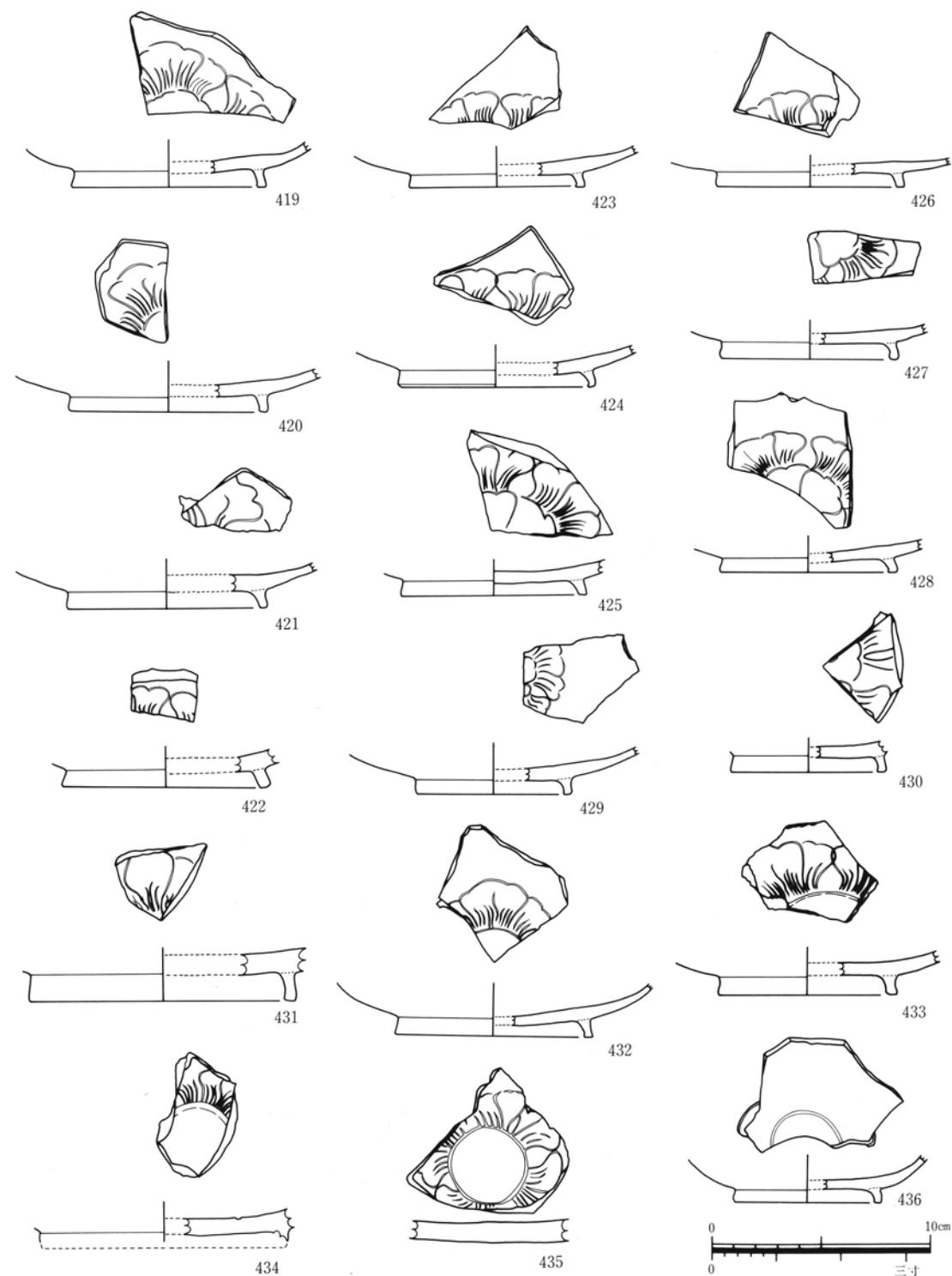
番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・底径(肩)	その他	図版	番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・底径(肩)	その他	図版
391	椀	17.4		(3.4)	0/12	N7/0		399	椀	20.0		(3.9)	1/12	2.5Y8/2	
392	椀	18.2		(3.6)	0/12	N7/0		400	椀	23.0		(3.5)	1/12	N7/0	
393	椀	19.0		(3.2)	0/12	N6/0		401	椀	22.0		(4.0)	1/12	N7/0	14
394	椀	19.2		(2.9)	0/12	N7/0		402	椀			(3.7)		N7/0	
395	椀	19.0		(3.5)	1/12	N6/0		403	椀			(3.0)		N7/0	
396	椀	18.0		(2.4)	0/12	N7/0		404	椀			(3.2)		N7/0	13
397	椀	20.0		(1.8)	1/12	N7/0		405	椀			(4.6)		N6/0	
398	椀	19.0		(6.2)	2/12	N7/0		406	椀			(4.8)		N7/0	

第58図 黒笹89号窯跡出土遺物実測図(20) 素地・陰刻花文



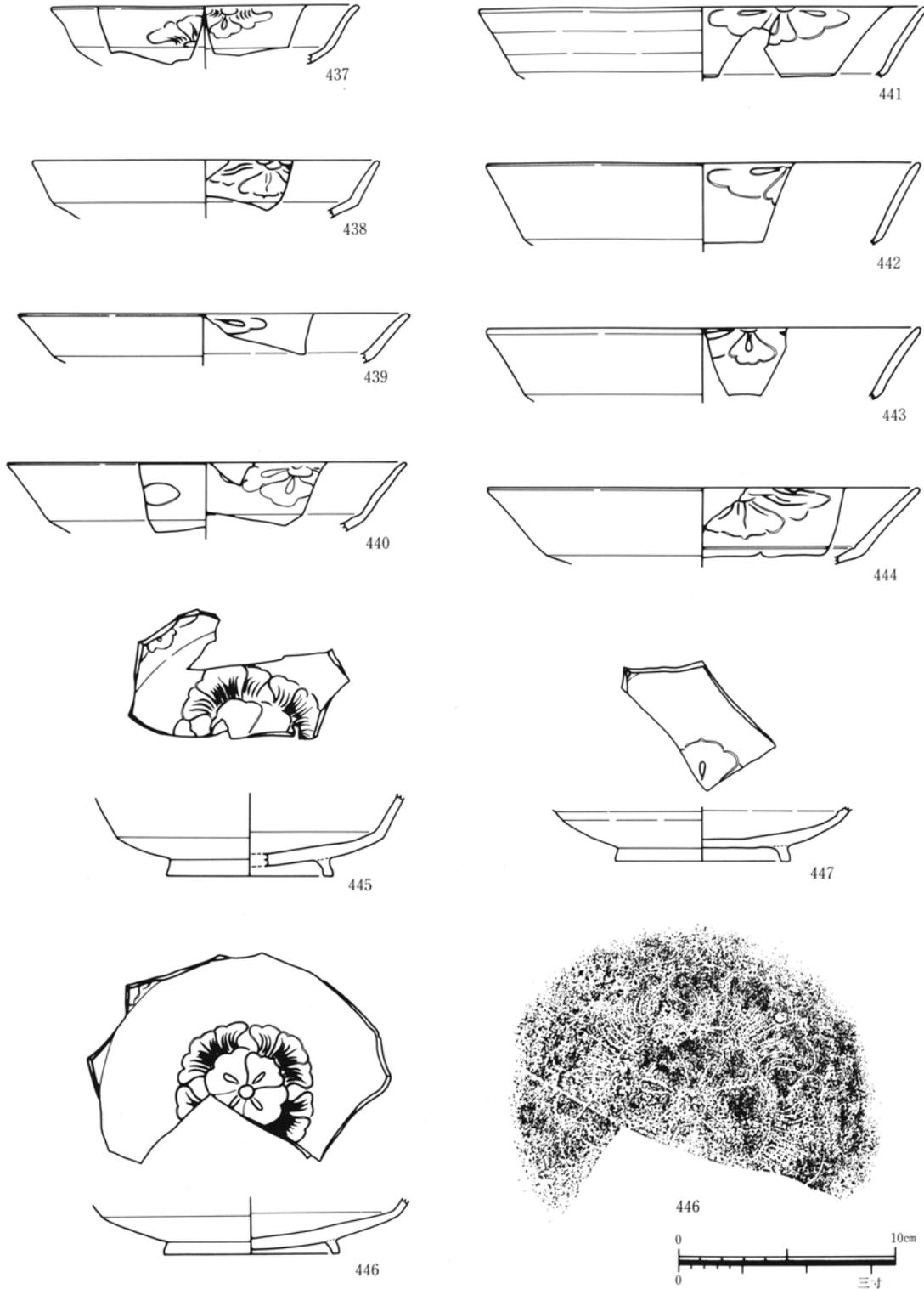
番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・底径(肩)	その他	図版	番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・底径(肩)	その他	図版
407	椀	21.0	9.4	7.0	1/12	N7/0	12	413	椀			(1.0)		N7/0	
408	椀	23.2		(2.5)	1/12	N6/0	13	414	椀		7.2	(1.8)	2/12	N6/0重	13
409	椀			(2.3)		N7/0		415	椀		8.0	(1.8)	2/12	N7/0重	13
410	椀	18.0		(2.1)	0/12	2.5Y8/2		416	椀		8.0	(1.7)	3/12	N7/0	13
411	椀	26.0		(5.0)	0/12	N7/0		417	椀		8.4	(2.9)	5/12	N7/0	12
412	椀	30.0		(5.1)	1/12	10Y8/1生		418	椀		9.0	(2.6)	3/12	7.5Y8/1生	12

第59図 黒笹89号窯跡出土遺物実測図 (21) 素地・陰刻花文



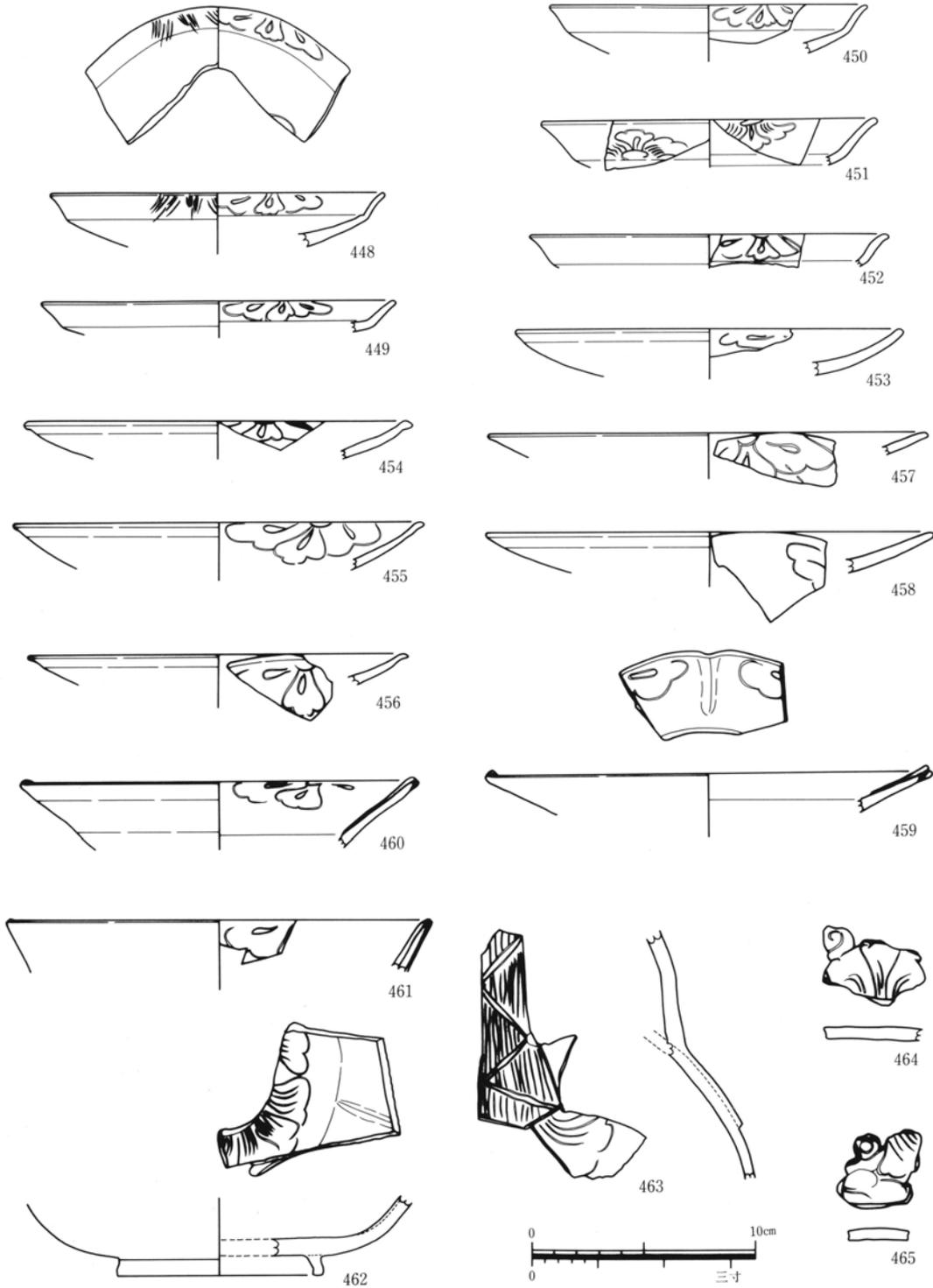
番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・底径(肩)	その他	図版	番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・底径(肩)	その他	図版
419	碗・稜碗		8.8 (1.9)		3/12	N7/0	13	428	碗・稜碗		8.0 (1.5)		2/12	10Y8/1生	13
420	碗・稜碗		9.0 (1.9)		1/12	7.5Y8/1生		429	碗・稜碗		7.0 (2.3)		1/12	10Y7/1	14
421	碗・稜碗		9.0 (2.0)		1/12	N6/0		430	碗・稜碗		7.0 (1.4)		3/12	N7/0	
422	碗・稜碗		9.2 (1.8)		1/12	7.5Y7/1		431	碗・稜碗		12.0 (2.5)		0/12	7.5Y7/1生	
423	碗・稜碗		8.0 (1.8)		2/12	N7/0		432	碗・稜碗		9.0 (2.6)		2/12	N6/0	14
424	碗・稜碗		9.0 (1.9)		2/12	N7/0		433	碗・稜碗		8.0 (2.1)		1/12	2.5Y7/4	13
425	碗・稜碗		8.4 (1.6)		3/12	N7/0	13	434	碗・稜碗		11.2		0/12	7.5Y7/1生	
426	碗・稜碗		8.5 (1.5)		2/12	N6/0	13	435	碗・稜碗					7.5Y7/4	13
427	碗・稜碗		8.0 (1.7)		0/12	7.5Y5/1		436	碗・稜碗		6.8 (2.1)		5/12	N7/0生	13

第60図 黒笹89号窯跡出土遺物実測図(22) 素地・陰刻花文



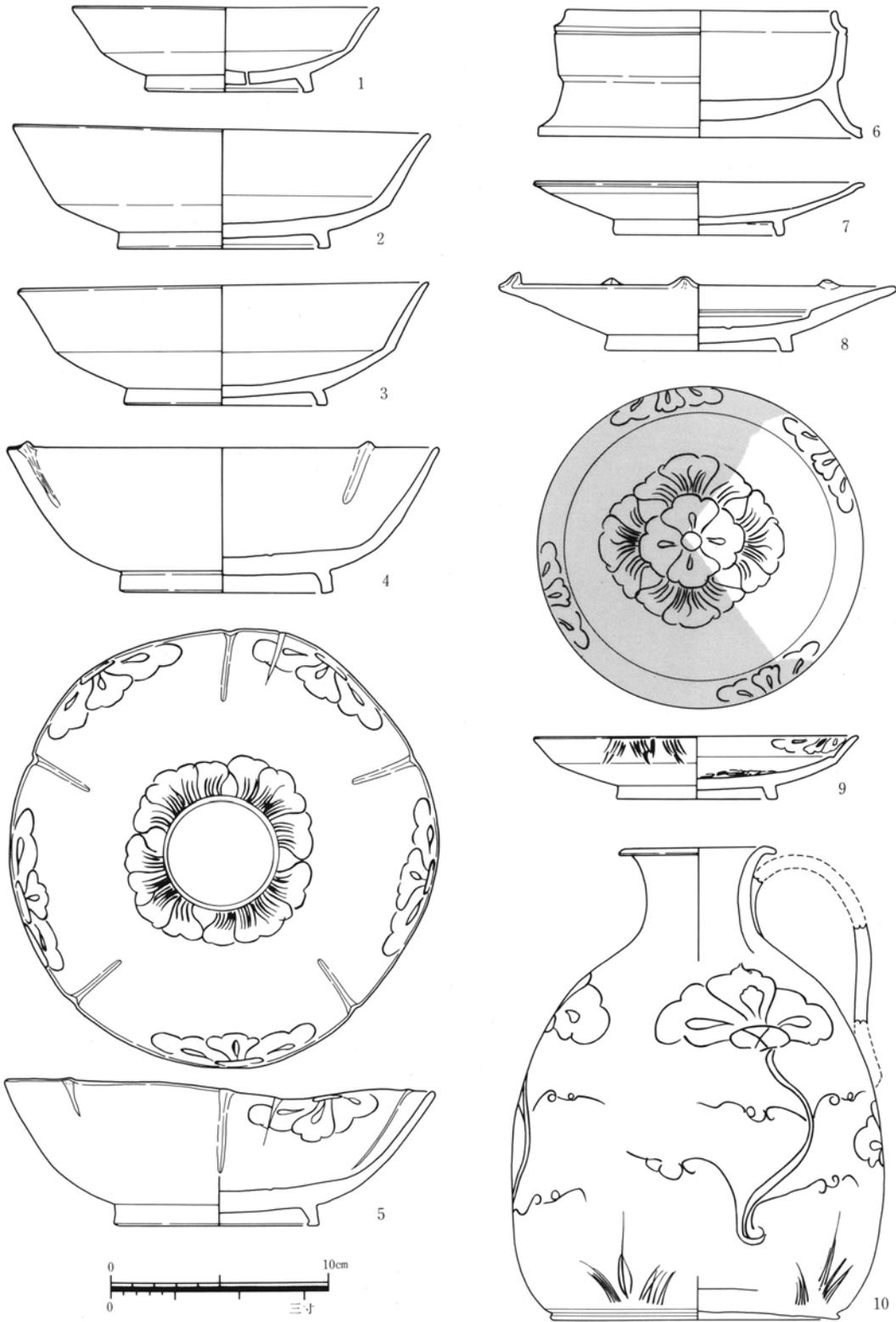
番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・底径(肩)	その他	図版	番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・底径(肩)	その他	図版
437	稜椀	14.2		(2.7)	1/12	N7/0		443	稜椀	20.0		(3.5)	0/12	N7/0	14
438	稜椀	16.0		(2.6)	0/12	N7/0	14	444	稜椀	20.0		(3.1)	0/12	7.5Y7/1生	14
439	稜椀	19.0		(2.2)	1/12	N7/0		445	稜椀		7.6	(3.9)	2/12	N6/0	12
440	稜椀	18.4		(3.2)	2/12	N7/0	14	446	稜椀		8.0	(2.6)	8/12	N7/0, 拓影は2/1	12
441	稜椀	20.6		(3.4)	2/12	N7/0	14	447	稜椀		8.0		3/12	N6/0	
442	稜椀	20.0		(3.4)	0/12	N7/0	14								

第61図 黒笹89号窯跡出土遺物実測図 (23) 素地・陰刻花文



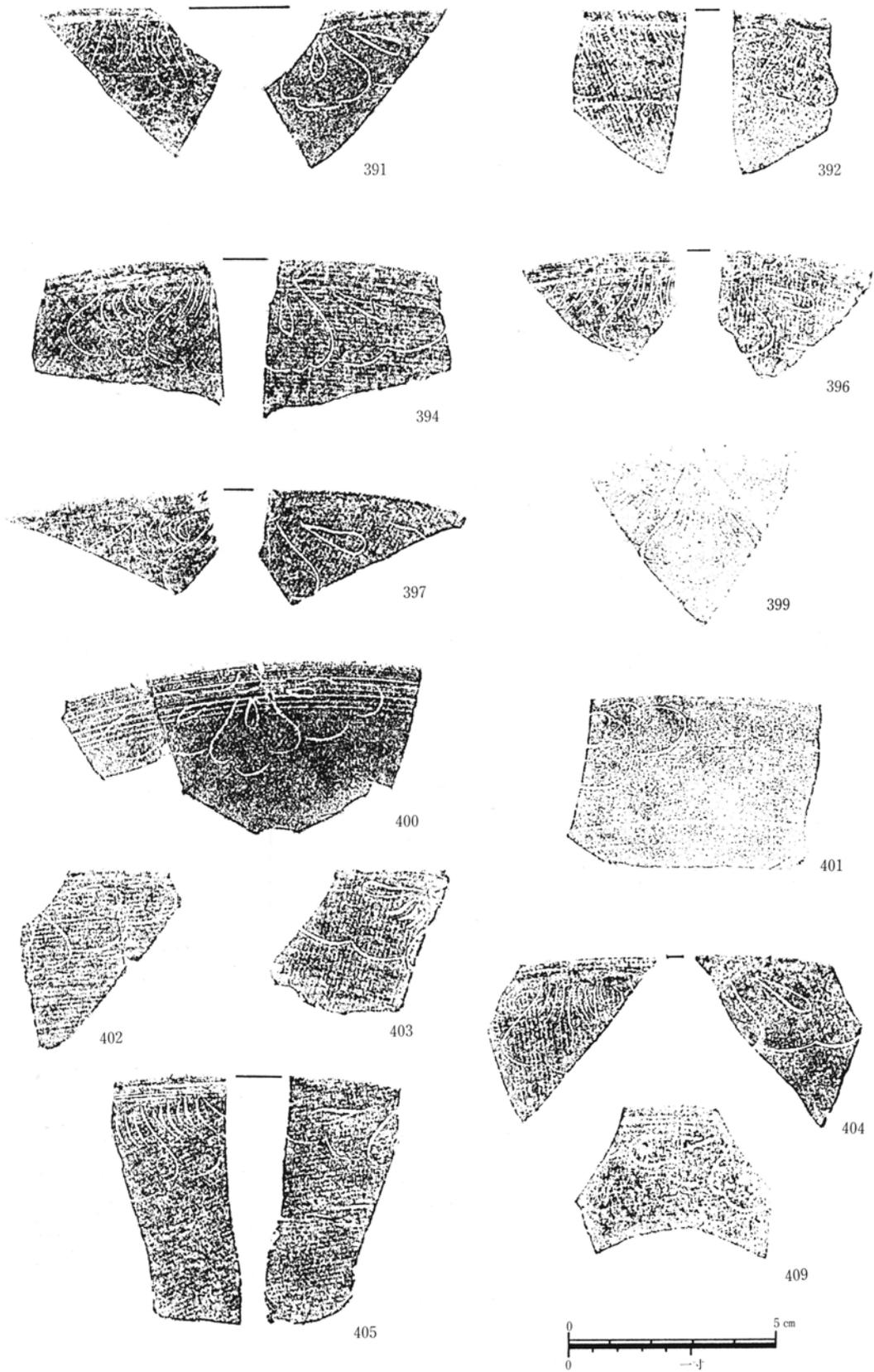
番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・底径(肩)	その他	図版	番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率・底径(肩)	その他	図版
448	稜皿	15.0		(2.6)	1/12	N6/0	14	457	皿	19.8		(1.0)	1/12	10Y7/1	14
449	稜皿	16.8		(1.5)	1/12	N7/0		458	皿	20.0		(1.8)	1/12	7/5Y8/0生	
450	稜皿	14.2		(2.2)	1/12	N7/1		459	輪花皿	20.0		(1.7)	2/12	N6/0	
451	稜皿	15.0		(2.3)	1/12	N7/0	14	460	輪花皿	17.8		(3.1)	1/12	2.5GY8/1	14
452	稜皿	15.8		(1.5)	1/12	N7/0		461	輪花椀	19.0		(2.4)	1/12	N7/0	14
453	皿	17.4		(2.2)	1/12	N7/0		462	輪花椀		9.2	(3.5)		N7/0	12
454	皿	16.8		(1.8)	1/12	N6/0	14	463	手付瓶						13
455	皿	18.0		(2.3)	2/12	N7/0	14	464	香炉蓋					5Y8/1生	13
456	皿	17.0		(1.2)	0/12	N7/0	14	465	香炉蓋					5Y8/1生	

第62図 黒笹89号窯跡出土遺物実測図 (24) 素地・陰刻花文

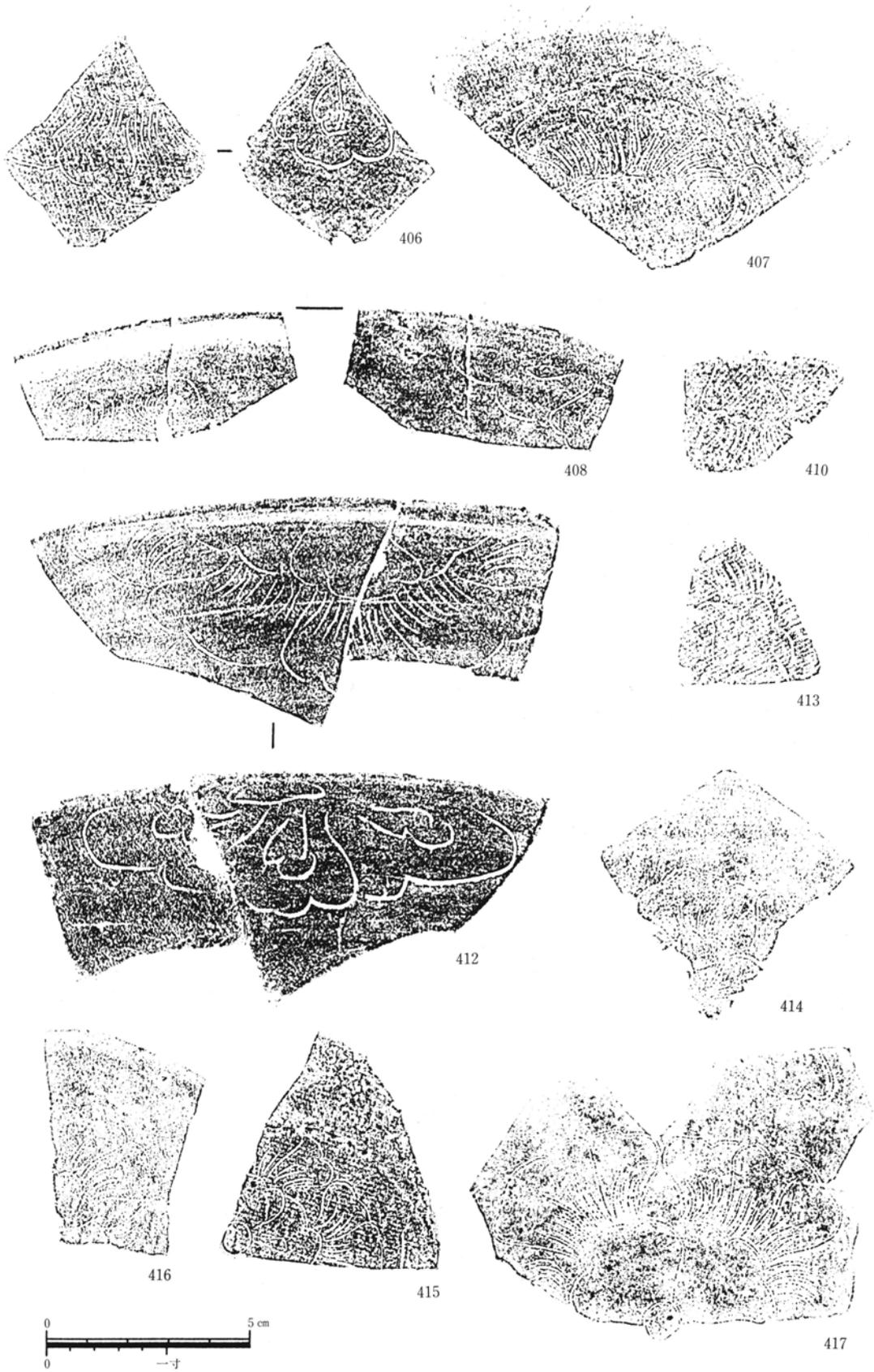


番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	その他	番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	その他
1	稜椀	14.0	7.5~7.7	3.95		6	香炉	12.5	17.8	5.85	
2	稜椀	19.0	9.6	5.7		7	皿	15.3	7.9	2.4	
3	稜椀	18.8	9.2	5.7		8	五輪花段皿	18.3	8.6~8.8	3.5	内面凹圏線
4	五輪花椀	19.8	9.7	7.0	内面凹圏線	9	陰刻花文椀	15.0	7.5	2.9	
5	陰刻花文五輪花椀	19.7~20.1	9.2	6.7	内面細長突帯	10	陰刻花文手付瓶	7.4	13.4	21.7	

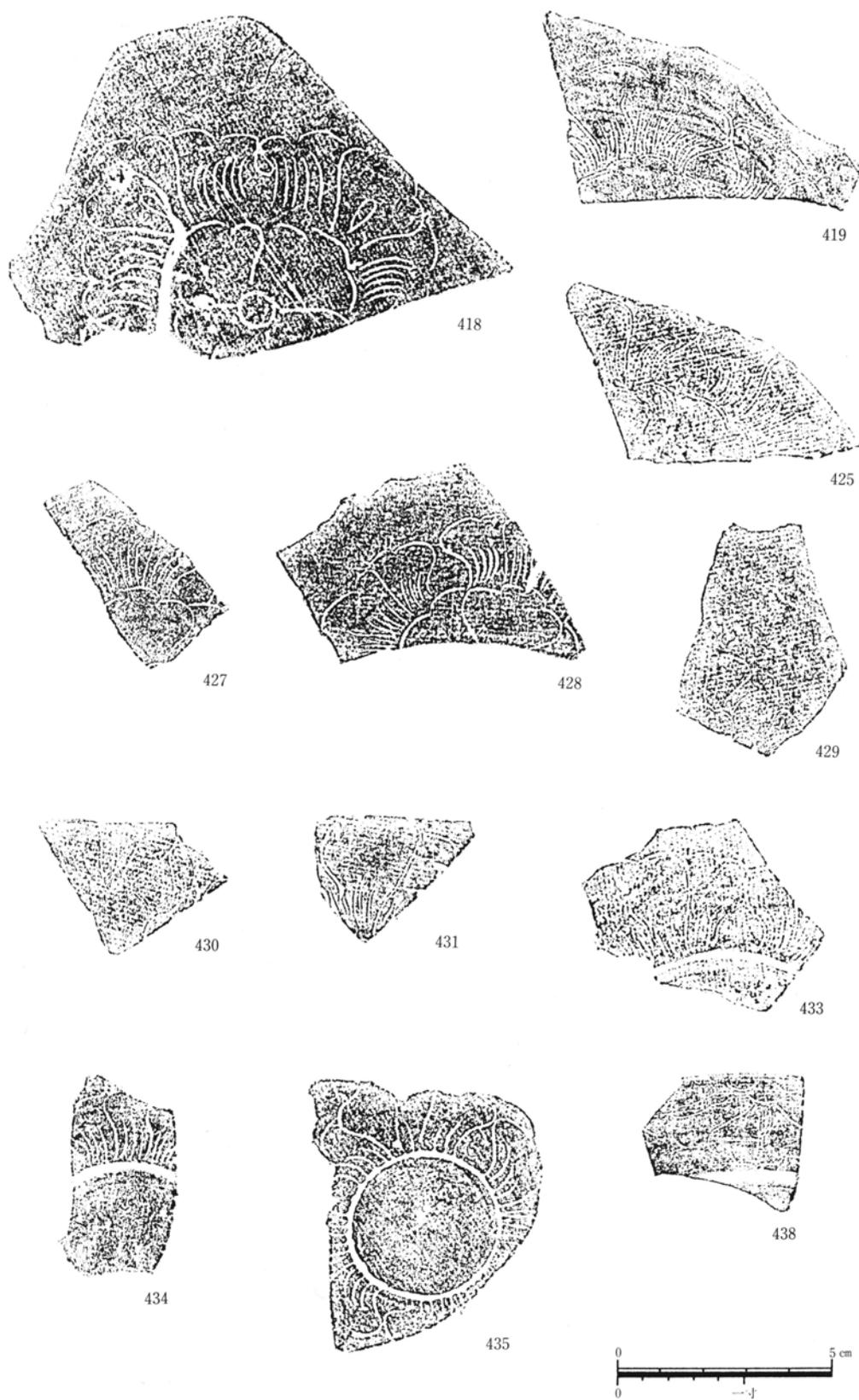
第63図 黒笹89号窯跡前回調査出土遺物実測図(3) 素地 ※アミは復元部分



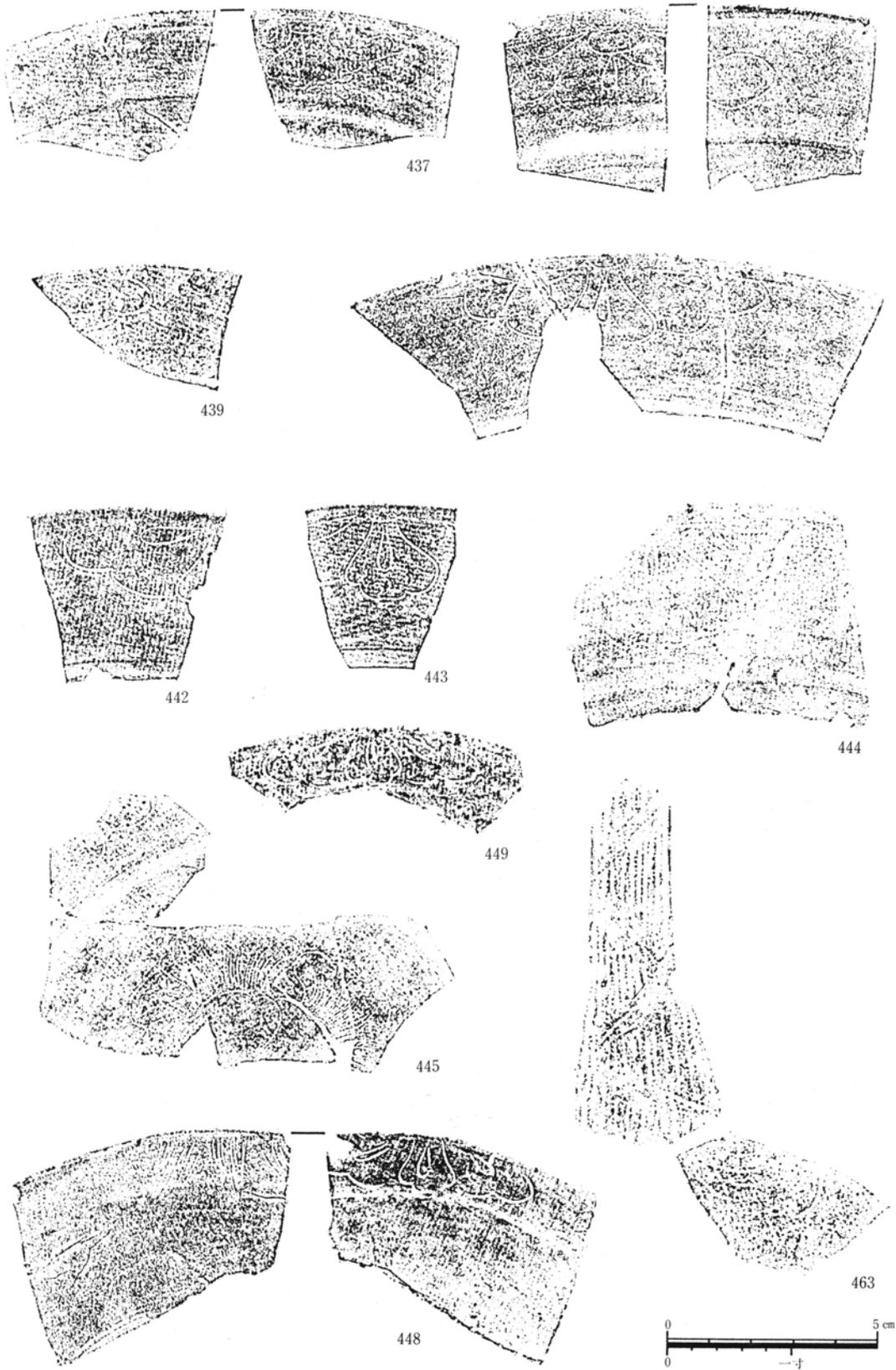
第64図 黒笹89号窯跡出土遺物陰刻花文拓影（1）



第65図 黒笹89号窯跡出土遺物陰刻花文拓影(2)



第66図 黒笹89号窯跡出土遺物陰刻花文拓影 (3)



第67図 黒笹89号窯跡出土遺物陰刻花文拓影(4)

第4節 熱残留磁気による考古地磁気測定

富山大学理学部地球科学教室

広岡公夫、田中彰子、堀田暁子

はじめに

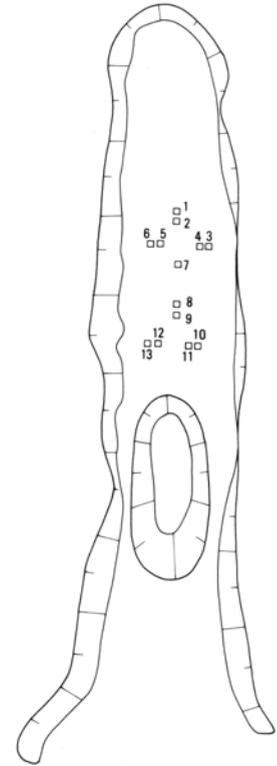
古窯跡の窯体を造っている土の中に含まれている磁性鉱物は、焼成中に、その時に作用している地球磁場(地磁気)によって磁化され、地磁気の方角と一致した向きの熱残留磁化を獲得する。この磁化は非常に安定で、再び加熱されることがなければ、何万年経ってもその磁化方向と強度を保ち続ける。地球磁場は三次元ベクトルであるため、その方向は、水平面に投影した水平分力の真北からの振れの角・偏角(Declination)と、水平面に対する傾斜角・伏角(Inclination)とで表わされる。地球磁場の方向は、毎年ほんの少しずつ変わっており、数十年、百年という年数が経つと相当大きな変化となる。これを地磁気永年変化という。窯の使用された年代が異なれば、地球磁場の方向は違っているから、異なる方向の残留磁化を獲得する。即ち、窯跡は使用された年代に特有の磁化方向を持っており、その方向の違いから窯跡の年代を推定することが出来る。このような方法を考古地磁気年代推定法という。

日本では、弥生時代中期中頃以降の西南日本各地の遺跡に残る焼土の考古地磁気測定によって、過去2000年間にわたる考古地磁気永年変化が明らかにされており(Hirooka, 1971; 広岡, 1977)、測定によって得た窯跡の磁化方向をこの考古地磁気永年変化曲線と照合することによって、古窯跡など焼土遺構の年代推定が可能となっている。

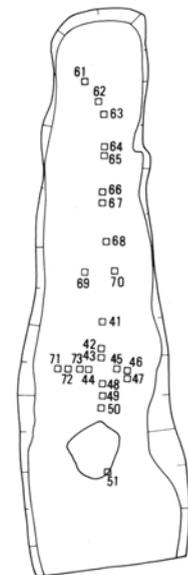
地球磁場の変動の様子や残留磁化獲得の機構、試料の採取・測定法、測定結果の統計処理などの詳細については、広岡他(印刷中)の報告に詳しく述べてあるので、それを参照頂ければ幸いである。

試料の採取と磁化測定の結果

再発掘の調査が行われた黒笹40号窯、40号窯附属焼土および89号窯から考古地磁気測定試料を採取した。それぞれの床から石膏で固めた定方位試料として試料を得た。採取試料数は、40号窯では13個(試料番号S A 1~13)、40号附属焼土では12個(S A 21~32)を得、窯の床面が上下2枚あった89号窯では、下層床面から11個(S A 41~51)、上層床面から13個(S A 61~73)の試料を採取した。下層床の試料は分炎柱の後ろ、焼成室の前半部から採取し、上層床の試料は中央部および後半部から得たもの

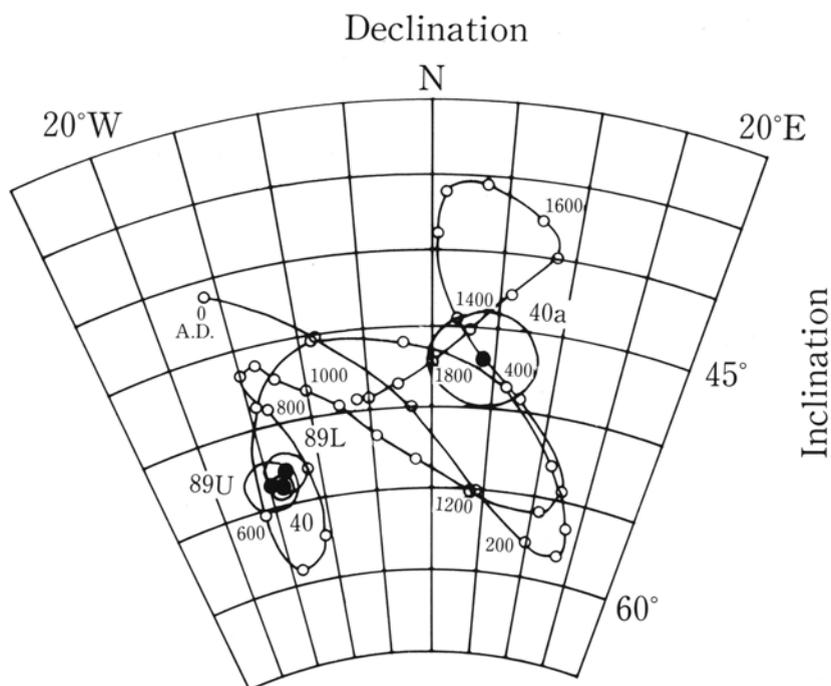


黒笹40号窯跡



黒笹89号窯跡

第68図 試料採取地点図



第69図 西南日本の考古地磁気永年変化と黒笹40号・89号窯跡の考古地磁気測定結果図

である。

今回の黒笹古窯の残留磁化測定は次のような手順で行なった。

- 1) 最初に、全ての試料の自然残留磁化(Natural Remanent Magnetization、略してNRM)を測定して、磁化方向のまとまり具合や磁化強度を知る。
- 2) この結果を見て、不安定な磁化成分を除去するための交流消磁実験の磁場の強さを決める。今回は消磁磁場強度を50Oeとした。
- 3) 50Oeで交流消磁を行い、再度、磁化測定を行う。

このようにして得たNRMの測定結果は、第1、3、5、7表に、50Oe消磁後の結果は第2、4、6、8表に示されている。3、4表にあるとおり、40号窯附属焼土の結果は、磁化方向のばらつきが非常に大きいことを示しており、一部の試料を除くと磁化強度が40号窯や89号窯のものに比べて1桁小さいことが分かる。このような磁化の弱い試料は、温度があまり上がらず、十分な熱残留磁化を獲得していないためであると考えられ、正しい過去の地磁気の記録とはいえないものである。したがって、次に述べる平均磁化方向を求める統計計算の際には除外した。このような試料には*印が付してある。

40号窯および89号窯下層床、同上層床の結果にも、NRMおよび50Oe消磁後ともに、磁化方向が他の試料から外れた試料が若干個みられるので、附属焼土同様、計算の際に除外した。これらの磁化方向のデータから、フィッシャーの統計法(Fisher, 1953)を用いて計算した平均磁化方向(平均偏角および、平均伏角)およびフィッシャーの信頼角、フィッシャーの精度係数は第9表のようになる。40号窯附属焼土以外は、交流消磁を行った後の方が、磁化方向のまとまりは若干よくなる。しかし、消磁に

よっても、平均偏角、平均伏角の変化は殆ど認められない。磁化方向のまとまりがよい50Oe消磁後の結果を、考古地磁気データとして採用した。

黒笹40号窯は、かつて、渡辺(Watanabe、1959)によって測定されており、その結果は、

$N = 9$ 、 $D = -20.8^\circ$ 、 $I = 52.4^\circ$ 、 $\alpha_{95} = 1.2^\circ$ 、 $K = 1950.0$ となっており、偏角に 7.0° 、伏角に 1.5° の違いがみられる。

考古地磁気推定年代

第9表の考古地磁気データのうち、消磁後の結果を、西南日本の考古地磁気永年変化曲線(広岡、1977)に記入したのが第69図である。白丸が50年毎の地磁気の方角を表している。古窯の平均磁化方向は黒丸印で表わされており、黒笹40号窯、40号窯附属焼土、89号窯下層床、89号窯上層床の結果は、それぞれ、40、40a、89L、89Uの符号がつけてある。黒丸を囲む円が α_{95} の範囲を示している。永年変化曲線の、黒丸に最も近い部分の年代が、考古地磁気学的に推定される年代である。推定年代値の年代幅は、 α_{95} の円が覆う永年変化曲線の線分の長さで与えられる。

第1表 黒笹40号窯のNRMの磁化測定結果

試料番号	偏角 (°E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
SA 1	-13.2	53.6	5.29
2	-14.2	55.2	5.20
* 3	-13.0	50.0	3.24
4	-15.7	53.9	7.11
5	-14.3	56.1	4.14
* 6	-13.9	58.3	4.15
7	-13.5	54.6	6.54
* 8	-20.0	52.3	17.7
9	-15.3	53.6	9.95
10	-13.9	55.9	3.79
11	-13.6	54.5	2.29
12	-14.7	56.7	4.64
13	-13.3	55.5	3.46

*：統計計算の際に除外したもの

第2表 黒笹40号窯の50Oe消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (°E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
SA 1	-12.7	52.8	5.21
2	-14.2	54.9	5.16
* 3	-13.1	49.6	3.22
4	-14.7	52.7	7.06
5	-13.9	54.2	4.10
* 6	-13.8	57.7	4.10
7	-13.1	54.0	6.46
* 8	-18.8	52.2	17.7
9	-15.4	52.7	9.93
10	-14.2	55.0	3.73
11	-13.2	52.9	2.25
12	-14.0	55.3	4.58
13	-12.6	54.4	3.40

*：統計計算の際に除外したもの

第3表 黒笹40号附属焼土のNRMの磁化測定結果

試料番号	偏角 (°E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
* SA 21	-143.2	82.9	1.12
22	4.1	48.2	1.52
* 23	101.2	60.2	0.948
* 24	10.7	11.8	0.21
* 25	20.0	34.7	0.494
26	2.8	47.4	16.8
27	1.0	44.8	6.08
28	4.7	48.9	5.25
* 29	130.5	55.9	1.47
* 30	28.4	54.8	0.136
* 31	7.9	57.2	0.246
* 32	44.0	30.9	0.0528

*：統計計算の際に除外したもの

第4表 黒笹40号附属焼土の50Oe消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (°E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
* SA 21	-151.0	82.2	1.05
22	6.4	47.9	1.36
* 23	99.2	59.6	0.876
* 24	10.8	8.0	0.19
* 25	20.8	31.6	0.438
26	4.6	47.0	16.1
27	0.3	44.4	5.85
28	6.0	48.3	5.07
* 29	130.2	53.8	1.40
* 30	17.3	46.3	0.101
* 31	9.9	53.3	0.198
* 32	60.9	1.8	0.0729

*：統計計算の際に除外したもの

第5表 黒笹89号下層床のNRMの磁化測定結果

試料番号	偏角 (°E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
SA 41	-15.6	53.8	5.85
42	-11.6	52.0	22.1
43	-10.4	51.8	6.61
44	-11.8	53.9	9.78
45	-16.0	54.1	5.72
* 46	-16.4	48.7	5.69
47	-16.3	52.5	5.15
* 48	-15.4	50.2	2.51
* 49	-17.3	55.9	1.65
50	-12.2	53.6	1.18
* 51	-19.2	55.5	5.91

*：統計計算の際に除外したもの

第6表 黒笹89号下層床の50Oe消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (°E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
SA 41	-14.6	53.6	5.77
42	-10.9	51.7	21.9
43	-10.7	51.6	6.51
44	-11.5	53.9	9.82
45	-15.7	53.7	5.66
* 46	-15.8	48.2	5.64
47	-15.7	52.8	5.06
* 48	-13.9	49.9	2.46
* 49	-17.3	56.2	1.62
50	-12.5	53.5	1.17
* 51	-19.0	54.5	5.94

*：統計計算の際に除外したもの

第7表 黒笹89号上層床のNRMの磁化測定結果

試料番号	偏角 (°E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
*SA 61	7.7	59.5	1.97
* 62	-10.9	49.6	1.75
* 63	-0.4	47.7	5.59
64	-17.2	51.5	6.12
65	-16.4	51.9	6.23
66	-16.4	53.7	4.54
67	-17.8	54.3	4.00
68	-15.7	54.4	2.83
* 69	-19.1	43.3	4.21
70	-14.7	56.6	3.96
* 71	-9.5	59.6	3.16
72	-11.2	55.8	6.06
73	-10.9	53.9	6.07

*：統計計算の際に除外したもの

第8表 黒笹89号上層床の50Oe消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (°E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
*SA 61	9.6	59.1	1.92
* 62	-11.0	48.7	1.67
* 63	-0.7	47.2	5.55
64	-15.9	51.0	6.06
65	-16.3	51.7	6.16
66	-15.4	53.1	4.46
67	-17.8	54.3	3.95
68	-16.1	54.4	2.81
* 69	-18.5	43.0	4.16
70	-13.8	56.1	3.89
* 71	-7.9	58.6	3.05
72	-11.1	55.0	5.96
73	-11.4	54.1	6.02

*：統計計算の際に除外したもの

第9表 黒笹40・89号窯の考古地磁気測定結果

遺構名	N	D (°E)	I (°)	α_{95} (°)	K	平均磁化強度 ($\times 10^4$ emu/g)	
(黒笹40号窯	(NRM)	10	-14.2	55.0	0.71	4583.4	5.24)
黒笹40号窯	(50Oe)	10	-13.8	53.9	0.69	4857.0	5.19)
(黒笹40号附属焼土	(NRM)	4	3.1	47.3	2.40	1471.9	7.41)
黒笹40号附属焼土	(50Oe)	4	4.2	46.9	2.96	965.6	7.10)
(黒笹89号下層床	(NRM)	7	-13.4	53.1	1.32	2099.6	8.06)
黒笹89号下層床	(50Oe)	7	-13.1	53.0	1.23	2422.1	7.98)
(黒笹89号上層床	(NRM)	8	-15.1	54.0	1.59	1221.9	4.98)
黒笹89号上層床	(50Oe)	8	-14.8	53.7	1.51	1344.7	4.91)

N：試料個数、D：平均偏角、I：平均伏角、 α_{95} ：フィッシャーの信頼角、K：フィッシャーの精度パラメータ。

()は年代推定のための考古地磁気データとして採用しなかったものを示す。

第69図の考古地磁気永年変化曲線が正しく過去の地磁気の変化を表しているという前提で、この図から古窯跡の考古地磁気年代を推定すると、

黒笹40号窯	A.D. 590年±10年	または、A.D. 745年±10年
黒笹89号窯下層床	A.D. 580年±15年	または、A.D. 755年±15年
黒笹89号窯上層床	A.D. 585年±20年	または、A.D. 750年±20年
黒笹40号窯附属焼土	A.D. 470年±25年	または、A.D. 1375年±25年

となろう。

いずれの窯跡も複数個の推定年代値が得られているが、これは時代が異なっても地磁気の方向が似ていることがあるため、考古地磁気学的には先に挙げた年代値の方が確率が高いことを意味するが、誤差(α_{95})の大きさと永年変化曲線の不確かさを考えれば、どちらの値でもよいことになる。また、地磁気には地域差があり、古代では北陸地方と畿内で伏角が 5° 近く違っているという事実が指摘されている(広岡、1989)。もしこれが東海地方にもあるとしたら、40号窯、89号窯下層、上層の年代は数十年若い方にずれるかもしれない。今後の検討課題である。

引用文献

- Fisher, R. A. (1953) Dispersion on a sphere, Proc. Roy. Soc. London, A, vol. 217, 295-305.
- Hirooka, K. (1971) Archaeomagnetic study for the past 2,000 years in southwest Japan, Mem. Fac. Sci., Kyoto Univ., Ser. Geol. Mineral., vol. 38, 167-207.
- 広岡公夫(1977) 考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向、第四紀研究、vol. 15, 200-203.
- 広岡公夫(1979) 熱残留磁気による古窯の年代、「世界陶磁全集」、第2巻(日本古代)、榎崎彰一編、小学館、293-295.
- 広岡公夫(1989) 古代手工業生産遺跡の自然科学的考察、—考古地磁気学、古地磁気学の立場から—、「北陸の古代手工業生産」、北陸古代手工業生産史研究会編、真陽社、225-284.
- 広岡公夫、黒原秀夫、田中彰子(印刷中) 室遺跡火葬施設の考古地磁気、「室遺跡火葬施設発掘調査報告書」、愛知県埋蔵文化財センター。
- Watanabe, N. (1959) The direction of remanent magnetism of baked earth and its application to chronology for anthropology and archaeology in Japan, Jour. Fac. Sci., Univ. Tokyo, Sec. V, vol. 2, 1-188.

第3章 まとめ

前章において遺構と遺物について説明を行ってきた。再調査ではあったが、資料から得られる情報は膨大である。ここでは、両窯について主として遺物分析の観点から以下のように簡単なまとめをおきたい。

第1節 分析の方法

出土した遺物についてはすべて個体数カウントを行った。接合できるものについては接合し1点として集計した。

統計方法は破片数、口縁部計測法、底部計測法を用いた。口縁部・底部計測法ともに、残存する口縁・底部を接合の後12分の1の単位でおこない、12分の0と12分の1を1とし、12分の2を2、以下順次3、4、5、・・・としてカウントした。この集計が口縁・底部残存率で、個体数はこれを12で割って求めたものである。

破片がほとんどであって個体数をだすのが困難なためにこの方法を採用したが、ここで得た個体数はあくまでも組成をみるための統計上の数値であって、個体識別に基づく数値ではない。

また器種の組成をみる上で、蓋は身となる器種と一体のものであると考え、統計上ダブルカウントすることになるため、黒笹40号窯跡では蓋をはずした器種組成の図（第70図右）も作成した。

第2節 黒笹40号窯跡

出土遺物のほとんどは須恵器の製品であるが、原始灰釉の器種と言われている長頸瓶、浄瓶、水瓶、双耳瓶、平瓶、短頸壺、短頸蓋が出土している。総破片数は15219点である。このうち口縁や高台によって器種の判別ができたのは7243点で、総個体数では624個体、口縁部計測法では374個体、底部計測法では250個体である。

これらの器種構成比率については第70図と第10表に示したが、器種の比率は、杯Bが一番多く、杯蓋が杯Bに対応して次に多く、以下長頸瓶・碗A・甕・盤となる。これ以外の器種は1%にも満たないが、多い順にならべると浅鉢・高盤・平瓶・双耳瓶・小形製品・浄瓶・短頸壺・短頸壺蓋・播鉢・大形浅鉢・硯となる。

生産の主体は供膳具の杯蓋・杯A（無台杯）・杯B（有台杯）・碗A（無台碗）・碗B（有台碗）・盤・高盤であり、総破片数の68%を占める。供膳具の中では杯Bの有台杯が28%と一番多く、杯蓋が杯Bに対応し次に多い。

器種	合計	合計%	小計%	部位	点数	%	個体数	口縁個体数	%	底部個体数	%
杯蓋	1589	22.0	22.0	口縁 胴部	1197 392	16.6 5.4	107	107	28.6		
杯A	53	0.7	0.7	口縁 底部	5 48	0.1 0.7	1 8	1	0.3	8	3.2
杯Ba	10		0.1	口縁 底部	10 0	0.1 0.0	1				
b	91		1.3	口縁 底部	88 3	1.2 0.0	8				
c	47		0.7	口縁 底部	46 1	0.6 0.0	4				
d	22		0.3	口縁 底部	9 13	0.1 0.2	1 1				
分類不能 (杯B)	798 26 1036	28.1	11.0 0.4 14.3	口縁 胴部 底部	798 26 1036	11.0 0.4 14.3	84	98	26.2	87	34.8
碗Aa	33		0.5	口縁 底部	18 15	0.2 0.2	2 2				
b	233		3.2	口縁 底部	77 156	1.1 2.2	7 17				
分類不能 (碗A)	382 98 21	10.6	5.3 1.4 0.3	口縁 胴部 底部	382 98 21	5.3 1.4 0.3	35	44	11.8	31	12.4
碗Ba	102		1.4	口縁 底部	97 5	1.3 0.1	10 1				
b	67		0.9	口縁 底部	65 2	0.9 0.0	6				
c	39	2.9	0.5	口縁	39	0.5	3	19	5.1	1	0.4
盤	442	6.1	6.1	口縁 底部	375 67	5.2 0.9	34 10	34	9.1	10	4.0
高盤	59	0.8	0.8	口縁 底部	33 26	0.5 0.4	4 2	4	1.1	2	0.8
鉢A(鉄鉢)	1	0.0	0.0		1	0.0					
鉢B(浅鉢)	9 57	0.9	0.1 0.8	口縁 胴部 底部	29 9 19	0.4 0.1 0.3	3 5	3	0.8	5	2.0
鉢C(搦鉢)	23	0.3	0.3	口縁 底部	14 9	0.2 0.1	2 1	2	0.5	1	0.4
大型浅鉢	20	0.3	0.3	口縁 底部	14 6	0.2 0.1	1 1	1	0.3	1	0.4
浄瓶	26	0.4	0.4	口縁 受付口 胴部	8 2 16	0.1 0.0 0.2	4	4	1.1		
水瓶	2	0.0	0.0	口縁	2	0.0	1	1	0.3		
浄・水瓶	15	0.2	0.2	底部	15	0.2	9			9	3.6
長頸瓶	1206	16.7	16.7	口縁 胴部 底部	192 697 317	2.7 9.6 4.4	36	36	9.6	82	32.8
環状取手	2	0.0	0.0		2	0.0					
平瓶	60	0.8	0.8	口縁 胴部 底部	11 35 14	0.2 0.5 0.2	3 2	3	0.8	2	0.8
双耳瓶蓋	18	0.2	0.2	口縁	18	0.2	3	3	0.8		
双耳瓶	50	0.7	0.7	口縁 底部	14 36	0.2 0.5	3 6	3	0.8	6	2.4
短頸壺	30	0.4	0.4	口縁 胴部 底部	9 3 18	0.1 0.0 0.2	1 4	1	0.3	4	1.6
短頸蓋	28	0.4	0.4	口縁	28	0.4	3	3	0.8		
小型製品	44	0.6	0.6		44	0.6	4	4	1.1		
甗	499	6.9	6.9	口縁 胴部 底部	34 457 8	0.5 6.3 0.1	3 1	3	0.8	1	0.4
硯	13	0.2	0.2	凹面 宝珠 不明	11 1 1	0.2 0.0 0.0					
硯蓋	1	0.0	0.0		1	0.0					
合計	7243	100	100		7243	100	624	374	100	250	100

第10表 黒笹40号窯跡出土遺物集計表

各器種の特徴は次のとおりである。

杯A（無台杯） 破片数53点で総破片の0.7%、口縁計測法では1個体、底部計測法では8個体となる。底部個体数に比べ口縁個体数が少ないのは杯Bの口縁との明確な識別が困難である。杯Bの口縁数の中に混じった可能性もあり、ここでは底部計測法のほうが実体に近いと思われる。底部から腰にかけては回転ヘラ削り調整が施されている。法量は口径12.5cmに中心があり、径高指数は30前後となる。

杯B（有台杯） 口径・器高によってBa、Bb、Bc、Bdに分類したが、分類不能とした破片が多く、総点数は2030点にもなった。総破片の28%を占める。口縁計測法で98個体、底部計測法で87個体となった。杯Bの中ではBb類が一番多く、Bc類、Bd類、Ba類の順となる。法量は口径13.5cm、14cm、19.5cmに中心があり、径高指数も25と30前後が多い。数点ではあるが、高台と腰部の間の幅が広いもの（88、92）も残っている。

杯蓋 破片数1589点で総破片の22%、口縁計測法では107個体であるが、全体の法量を測れるものが少なく16点のみであったため、口径、径高指数ともにそのバラツキが大きい。鈕も擬宝珠で天井部中ほどまで回転ヘラ削り調整が施されている。

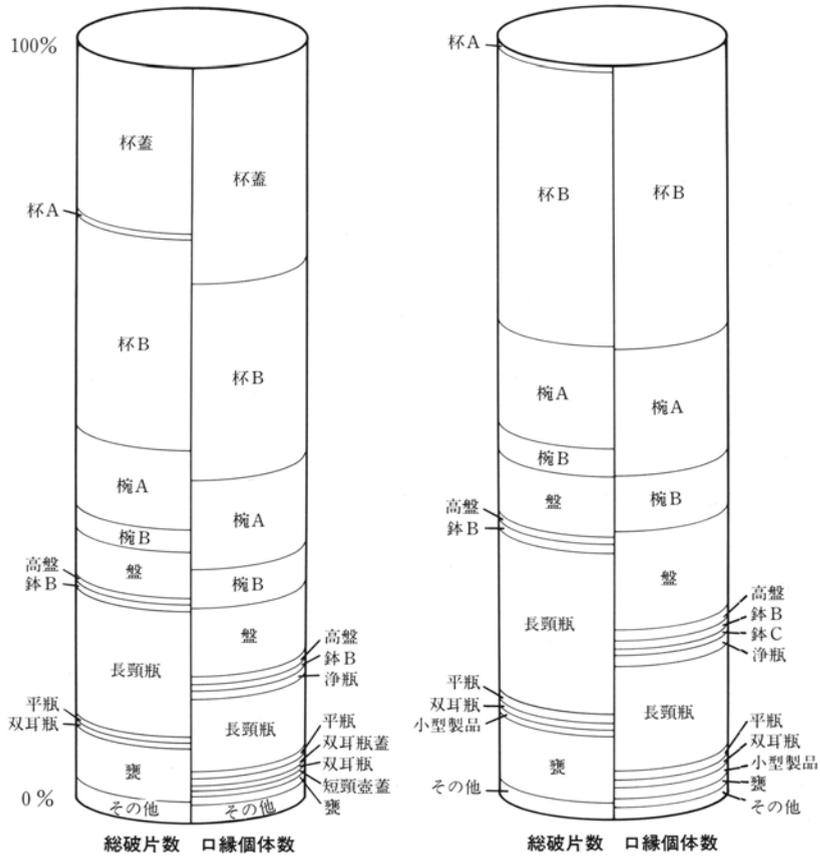
碗A（無台碗） 底部外面の痕跡によってAa類はヘラ切り痕、Ab類は糸切り痕のあるものとした。Aa類は破片数23点で総破片の0.3%、口縁計測法では2個体、底部計測法では個体となる。底部ヘラ削りのもの（112）が1

点、ヘラ削りのものが14点ある。法量は口径11.5cmと12.5cmに中心があり、径高指数は30前後である。

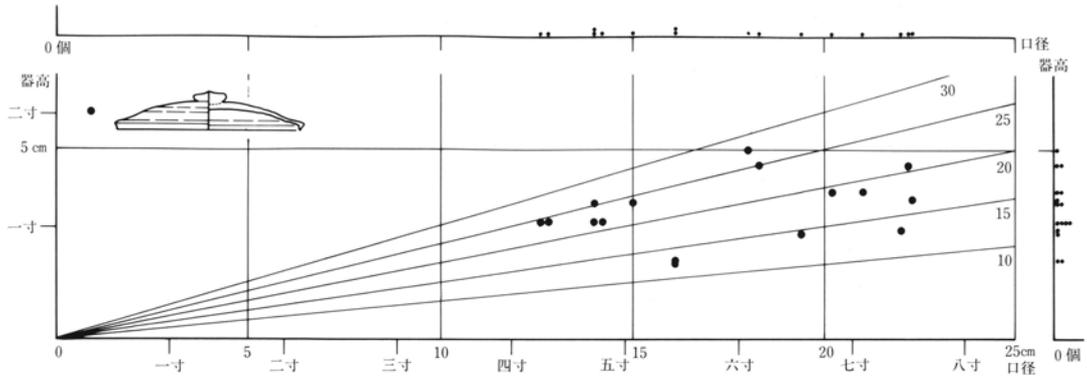
碗B（有台碗）

法量の計測できるものが少なく全体の傾向を表しているとはいえないが、口径は17cm、径高指数は27、36で、佐波理写しの碗がある。

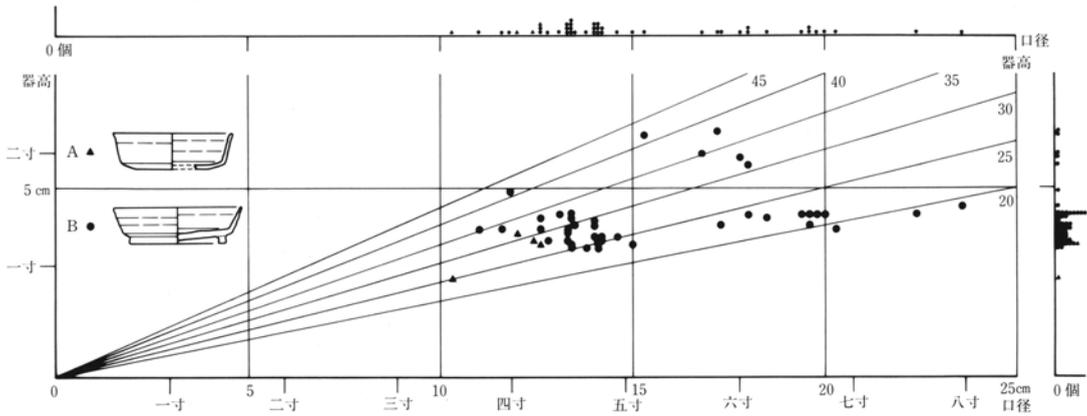
盤 破片数442点で総破片の6.1%、口縁計測法では34個体、底部計測法では10個体となる。法量も口径18cmと21cmに中心があり、径高指数も14と20となる。



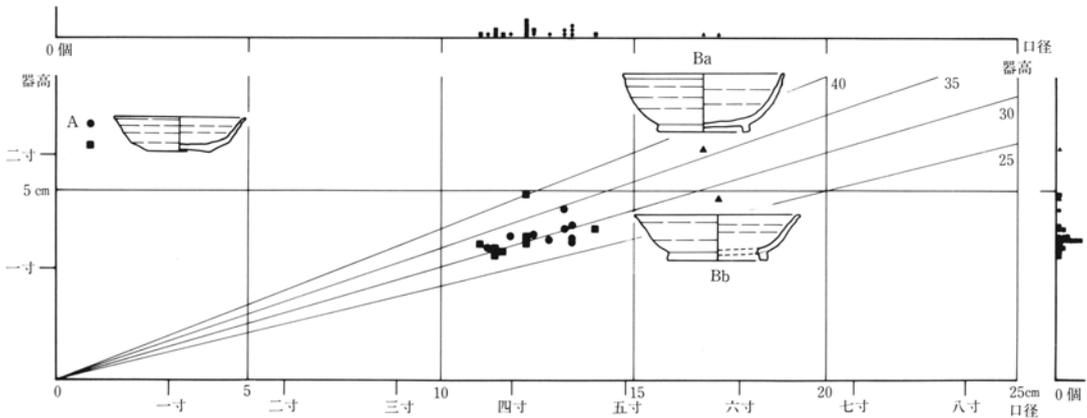
第70図 黒笹40号窯跡出土遺物器種組成図



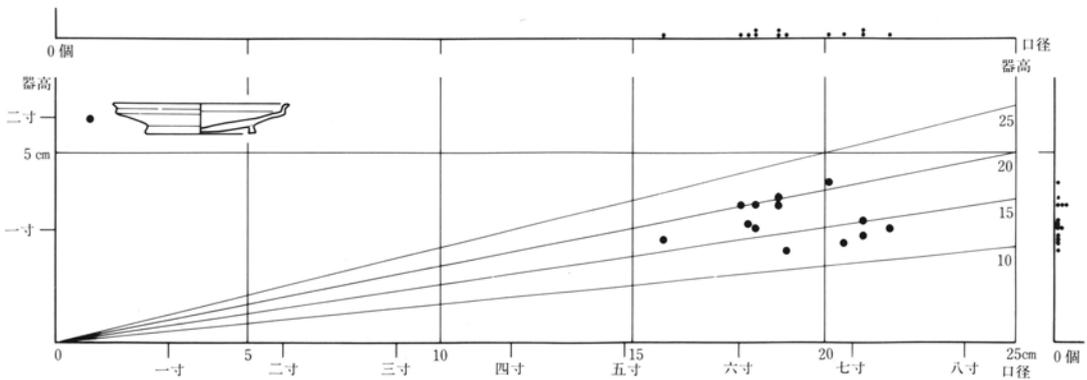
第71図 黒笹40号窯跡出土杯蓋の法量図



第72図 黒笹40号窯跡出土杯A・Bの法量図



第73図 黒笹40号窯跡出土椀A・Bの法量図



第74図 黒笹40号窯跡出土盤の法量図

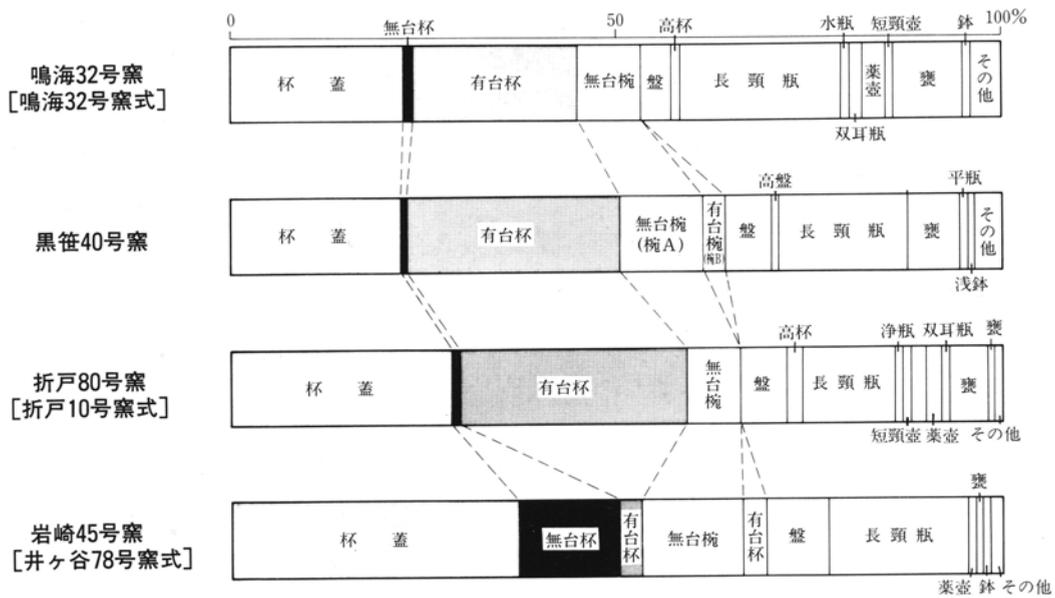
瓶類 長頸壺、平瓶、双耳瓶、浄瓶、水瓶がある。長頸瓶がその主体を占める。破片数1206点で総破片の16.7%、口縁計測法で36個体、底部計測法で82個体となる。頸の付け方も三段成形のみで、口縁部が大きく外反し口縁部の縁帯が上方に引き上げられ、内面に段をもつものが多い。浄瓶、水瓶の頸部の中位には2本の沈線がある。

硯には宝珠硯と円面硯があり、円面硯の脚部の透かしは細かい透かしとなっている。

小形製品 長頸瓶、短頸壺、双耳瓶蓋、蓋等が出土している。

猿投窯における編年研究は昭和31年からの愛知用水工事に伴う調査から始まり、須恵器・灰釉陶器の編年は大きく6時期に区分され、黒笹40号窯は第IV期の折戸10号窯式に位置づけられている。第IV期は8世紀中葉から9世紀前葉にかけての年代が考えられ、岩崎25号窯式、鳴海32号窯式、折戸10号窯式、井ヶ谷78号窯式の4時期に区分されている。

鳴海32号窯式は愛知県愛知郡東郷町の鳴海32号窯跡を標識遺跡としている。器種のなかには原始灰釉がかかっているといわれている長頸瓶、短頸壺、双耳瓶、水瓶がある。出現器種として有台碗、双耳碗、双耳瓶、三足壺、陶塔、ミニアチュア品がある。丸い天井部に宝珠形・擬宝珠形の鈕が付き口縁端部が「く」の字に折り返され、器高がやや高くなって扁平な蓋がなくなった杯蓋。杯には有台杯と無台杯がある。有台杯は腰部の平坦面が明瞭になり稜から少し内に入った所に高台が付く。無台杯は平な底部から立ち上がり口縁となって、法量分化がほとんどなくなり箱形の形態になってくる。無台碗では手持ちへら削り・へら撫で調整をするものが多くなる。長頸瓶は頸部が細長く口縁部の縁帯が上方に引き上げられたもので、二重沈線が頸部に施されるものが多い。胴部の肩には丸みがあり、頸部と胴部の接合が三段構成である。



第75図 猿投窯における時期別生産比較図(1) 註2

折戸10号窯跡は愛知県愛知郡日進町の折戸10号窯跡を標識遺跡としている。器種には須恵器と原始灰釉があり、無台杯は箱形の形態で底部に回転ヘラ削り調整が施される。無台碗の底部には回転糸切り痕が残る。無台碗法量分化が不明瞭である。長頸瓶の二重沈線はほとんど施されなくなる。器種では琿、大形の無台平瓶、透かしのある高盤がなくなり、新たに浄瓶、宝珠硯が出現する。原始灰釉の製品としては長頸瓶、双耳瓶、短頸壺、水瓶、浄瓶、平瓶があり、原始灰釉陶器の確立期とされている。

今回の出土遺物についてみると、杯Bの有台杯の高台部下端外側の角が接地するものがある。碗Aの無台碗の底部には1%にも満たないがヘラ削りとヘラ切りのあるものが数点あり、碗Bのなかには佐波理碗の模倣がある。長頸瓶も口頸部がやや細く口縁端部が外反し、内面に段を持ち肩は丸く撫で肩が多い。頸部と胴部の接合が三段構成。それぞれが頸部や底部のみで全体の形態をみるものはないが、水瓶と浄瓶が出土している。硯には宝珠硯と円面硯があり、後者では脚部の透かしが細かい。小形製品が出土している。三足壺の脚部の獣足は面取り調整が丁寧で、指までである。以上の点などから、本窯は折戸10号窯式のなかでは一番古い様相を示している。そして器種構成をみると折戸10号窯式より鳴海32号窯式の新しい様相を示しているようでもある。

第3節 黒笹89号窯跡

出土遺物は須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器素地の各製品が出土している。総破片数は13584点あり、内訳は須恵器2041点で総破片の15%、灰釉陶器9006点で総破片の66%、緑釉陶器素地2537点で総破片の19%となっている。総個体数は1290個体。口縁部計測法では須恵器130個体、灰釉陶器608個体、緑釉陶器素地229個体となる。底部計測法では須恵器99個体、灰釉陶器223個体、緑釉陶器素地81個体となる。

これらの器種構成については第76図、第82図と第11表に示したが器種の比率は灰釉皿が一番多く、以下多い順にならべると灰釉碗、須恵器碗A、素地碗、素地皿、素地稜碗、灰釉手付瓶、灰釉段皿、素地段皿、灰釉長頸瓶、素地稜皿、素地手付瓶となる。1%に満たない器種として、灰釉小碗、素地香炉、素地花文稜碗、須恵器甕、素地唾壺、素地花文皿、須恵器陶鎮・セン、素地花文碗、素地貼付輪花碗、灰釉耳皿、素地花文段皿他がある。

生産の主体は灰釉陶器で、緑釉陶器素地も須恵器より多く焼かれている。須恵器では碗Bの無台碗が須恵器のなかで95%を占める。灰釉陶器のなかでは皿が50%近くを占めている。緑釉陶器素地のなかでは碗が26%を占め、次いで皿、稜碗、段皿、稜皿、手付瓶、香炉他となる。陰刻花文が施された製品としては稜碗が一番多く、以下碗、皿、段皿、稜皿、瓶となり、それぞれ0.2~1%を占めている。灰釉陶器も緑釉陶器の素地も供膳具の碗・皿類がその主体を占めている。

窯道具についてみれば、三又トチンは僅か1点の出土であり、碗などに三又トチンの痕跡がまったくなかったことをみれば、三又トチンを用いなくて直接重ね焼きが行われていたことが窺える。また降灰を防ぐためのサヤがあり、蓋と筒状サヤなどを用いて緑釉陶器の素地を焼いていたと思われる。しかし、これらの窯道具には緑釉のついたものは1点もなく、緑釉製品が焼かれていた亀ヶ洞窯や熊ノ前窯出土の窯道具には緑釉がかかっており対照的ともいえる。

須恵器	器種	合計	合計%	部位	点数	%	個体数	口縁個体数	%	底部個体数	%		
須恵器	碗A	1949	14.35	口縁	1517	11.17	129.25						
				底部	432	3.18	98	129.25	14.58	98	13.51		
	すり鉢	8	0.06	底部	8	0.06	1.08			1.08	0.15		
	短頸壺	2	0.01	口縁	2	0.01	0.41	0.41	0.05				
	甕	40	0.29	口縁	2	0.01	0.25						
				胸部	36	0.27	0.25	0.25	0.03	0.25	0.03		
				底部	2	0.01	0.25			0.25	0.03		
	甕	3	0.02	口縁	2	0.01	0.16						
			底部	1	0.01	0.08	0.16	0.02	0.08	0.01			
	鉢	6	0.04	口縁	5	0.04	0.91						
			底部	1	0.01	0.08	0.91	0.10	0.08	0.01			
	陶鎖、セン	33	0.24	胸部	33	0.24							
須恵器合計		2041	15.03		2041	15.03	230.47	130.98	14.78	99.49	13.71		
灰釉陶器	碗	碗	3529	25.98	口縁	2877	21.18	259.33					
					胸部	85	0.63						
					底部	567	4.17	122.25	259.33	29.26	122.25	16.85	
		小碗	130	0.96	底部	130	0.96	16.16			16.16	2.23	
		大碗	2	0.01	口縁	2	0.01	0.58	0.58	0.07			
		稜碗	8	0.06	口縁	8	0.06	0.83	0.83	0.09			
	皿	皿	4302	31.67	口縁	3749	27.60	314.5					
					胸部	1	0.01						
					底部	552	4.06	75.83	314.5	35.49	75.83	10.45	
			貼付輪花皿	1	0.01	口縁	1	0.01	0.08	0.08	0.01		
			段皿	302	2.22	口縁	220	1.62	20.83				
					胸部	72	0.53						
					底部	10	0.07	2.5	20.83	2.35	2.5	0.34	
		輪花段皿	3	0.02	口縁	3	0.02	0.33	0.33	0.04			
		稜皿	1	0.01	口縁	1	0.01	0.08	0.08	0.01			
		耳皿	19	0.14	口縁	18	0.13	1.75					
				底部	1	0.01	0.08	1.75	0.20	0.08	0.01		
	瓶	長頸瓶	248	1.83	口縁	33	0.24	3.16					
					胸部	204	1.50						
					底部	11	0.08	2.66	3.16	0.36	2.66	0.37	
			手付瓶	441	3.25	口縁	27	0.20	2.5				
					胸部	358	2.64						
					底部	27	0.20	2.83					
				把手	29	0.21		2.5	0.28	2.83	0.39		
	小瓶	3	0.02	口縁	3	0.02	1.83	1.83	0.21				
	浄瓶	1	0.01	胸部	1	0.01							
壺	双耳壺	7	0.05	口縁	2	0.01	0.16						
				胸部	1	0.01							
				底部	4	0.03	0.33	0.16	0.02	0.33	0.05		
		短頸壺	5	0.04	口縁	5	0.04	0.66	0.66	0.07			
		壺	2	0.01	口縁	2	0.01	1	1	0.11			
	唾壺	2	0.01	口縁	1	0.01							
			胸部	1	0.01	0.08				0.08	0.01		
			底部	1	0.01								
灰釉陶器合計		9006	66.30		9006	66.30	830.34	607.62	68.56	222.72	30.70		
素地	碗	碗	667	4.91	口縁	456	3.36	46.66					
					胸部	7	0.05						
					底部	204	1.50	34.16	46.66	5.26	34.16	4.71	
			花文碗	26	0.19	口縁	16	0.12	1.33				
					底部	10	0.07	1.41	1.33	0.15	1.41	0.19	
			輪花碗	8	0.06	口縁	8	0.06	0.41	0.41	0.05		
			花文輪花碗	2	0.01	口縁	2	0.01	0.16	0.16	0.02		
			貼付輪花碗	24	0.18	口縁	11	0.08	0.91				
					胸部	13	0.10		0.91	0.10			
			貼付細長輪花碗	6	0.04	口縁	6	0.04	0.5	0.5	0.06		
			花文深碗	1	0.01	底部	1	0.01	0.08			0.08	0.01
			輪花深碗	8	0.06	口縁	8	0.06	0.75	0.75	0.08		
			稜碗	450	3.31	口縁	226	1.66	22.16				
				胸部	205	1.51							
				底部	19	0.14	4.25	22.16	2.50	4.25	0.59		
		花文稜碗	39	0.29	口縁	39	0.29	3.25	3.25	0.37			
	皿	皿	512	3.77	口縁	318	2.34	27					
					底部	194	1.43	27.25	27	3.05	27.25	3.76	
			花文皿	30	0.22	口縁	30	0.22	2.5	2.5	0.28		
			輪花皿	7	0.05	口縁	5	0.04	0.66				
					胸部	1	0.01						
					底部	1	0.01	0.25	0.66	0.07	0.25	0.03	
			稜皿	161	1.19	口縁	143	1.05	12.91				
					胸部	11	0.08						
					底部	7	0.05	1.5	12.91	1.46	1.5	0.21	
			花文稜皿	17	0.13	口縁	17	0.13	1.41	1.41	0.16		
		段皿	253	1.86	口縁	198	1.46	17.58					
				胸部	40	0.29							
				底部	15	0.11	3.25	17.58	1.98	3.25	0.45		
		花文段皿	15	0.11	口縁	15	0.11	1.25	1.25	0.14			
		輪花段皿	6	0.04	口縁	5	0.04	0.66					
				底部	1	0.01	0.33	0.66	0.07	0.33	0.05		
		耳皿	2	0.01	口縁	2	0.01	0.16	0.16	0.02			
	瓶	手付瓶	164	1.21	口縁	12	0.09	1.66					
					胸部	117	0.86						
					底部	28	0.21	2.75					
					把手	7	0.05		1.66	0.19	2.75	0.38	
			花文瓶	5	0.04	胸部	5	0.04					
			手付小瓶	6	0.04	口縁	3	0.02	1	1	0.11	0.83	
					底部	3	0.02	0.83			0.83	0.11	
		花文香が蓋	4	0.03	口縁	2	0.01	0.16					
				胸部	2	0.01		0.16	0.02				
		香が	84	0.62	口縁	23	0.17	2.5					
			胸部	22	0.16								
			底部	39	0.29	3.41	2.5	0.28	3.41	0.47			
	托	3	0.02	口縁	2	0.01	0.25						
			底部	1	0.01	0.16	0.25	0.03	0.16	0.02			
	唾壺	37	0.27	口縁	7	0.05	1.83						
			胸部	27	0.20		1.83	0.21		1.5			
			底部	3	0.02	1.5				0.21			
素地合計		2537	18.68		2537	18.68	228.79	147.66	16.66	81.13	11.18		
総合計		13584	100.00		135.84	100.00	1289.6	896.26	100.00	725.55	100.00		
竈道具	三又トチン	1	0.34		1	0.34							
	王冠ツク	8	2.68		8	2.68							
	サヤ蓋	21	7.05	口縁	18	6.04	1.5	1.5	14.40				
				底部	3	1.01	0.25			0.25	6.13		
	サヤ	266	89.26	口縁	107	35.91	8.92	8.92	85.60				
				胸部	113	37.92							
			底部	46	15.44	3.83			3.83	93.87			
	手づくね	1	0.34		1	0.34							
	蓋状	1	0.34		1	0.34							
竈道具合計		298	100.00		298	100.00	14.5	10.42	100.00	4.08	100.00		

第11表 黒笹89号窯跡出土遺物集計表

各器種の特徴は次のとおりである。

碗 直接重ね焼きされ、定型化した三日月高台と三日月高台がハの字形に外に開いたものがあり、外面底部から体部中ほどにかけて回転ヘラ削り調整が施される。灰釉は刷毛塗りにより内面体部と内外面体部に施釉され、数は少ないが内面底部中央にも施釉される。口径14.5cmから15.5cm、16cmから16.5cmで、口径指数も30前後が中心となる。蓮弁文（466）の破片が1点出土。

皿 碗と同様に直接重ね焼きされ、定型化した三日月高台と三日月高台がハの字形に開いたものがあり、灰釉は刷毛塗りにより内面体部と内外面体部、一部に底部中央にも施釉されたものがある。口径14.5cmから15.5cmで口径指数は20前後が中心となる。

段皿 広縁と狭縁のものがあり、高台、施釉方法も碗、皿と同様である。

素地碗 口径が13.7cmと15.5cmで径高指数も25から30にその中心がある。

素地稜碗 口径が18.5cm、小形のものは口径が14cmで、ともに径高指数は30である。

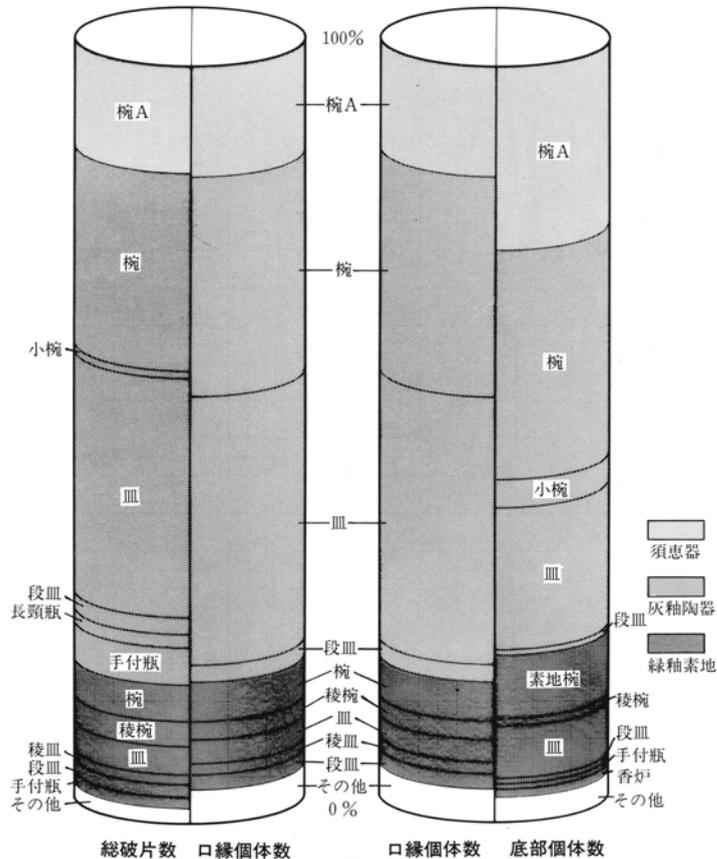
素地皿 口径が15cmから15.5cm、径高指数も17前後が中心である。

素地稜皿 口径は15cm前後で、径高指数も17前後が中心となる。

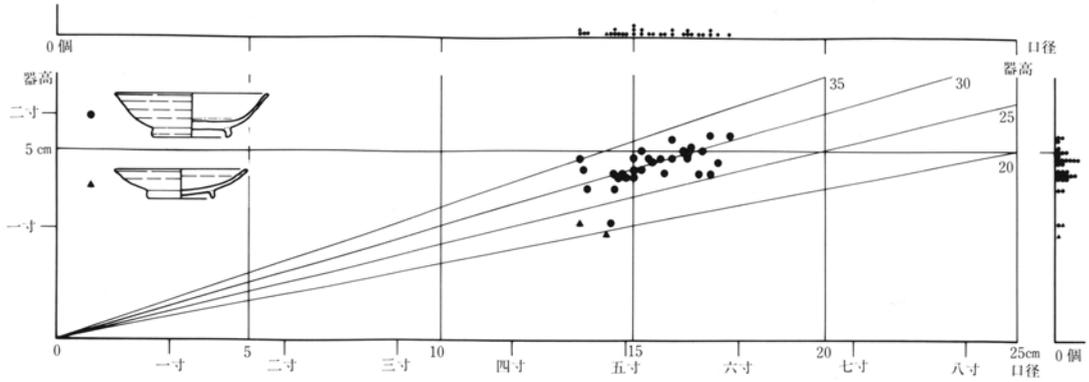
緑釉素地のなかで陰刻花文が施された碗、稜碗、皿、段皿、稜皿、手付瓶が出土し、内面や側面に四弁花文の文様が描かれている。文様は碗、皿の内面中央に四弁花を、その周囲に半截四弁花文を垂下させている。内面中

央に描かれた四弁花の内側の花卉を内側に、内面中央に描かれた四弁花の外側の花卉を外側にそれぞれ4ヶ所描くのが基本のようである。花文の他に1例のみであるが飛雲文が出土している。陰刻花文は黒笹14号窯式から黒笹90号窯式に盛行している。

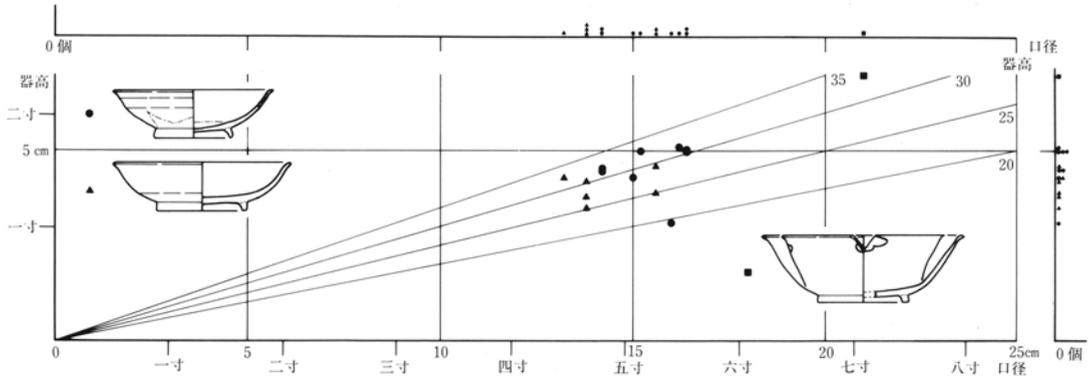
黒笹89号窯は第V期の黒笹90号窯式に位置づけられており、9世紀後葉から10世紀前半とされている。しかし消費遺跡出土資料から



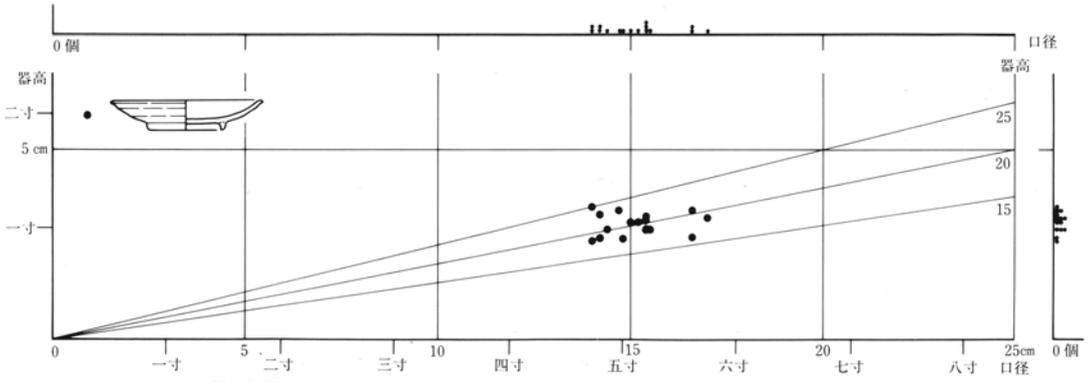
第76図 黒笹89号窯跡出土遺物器種組成図



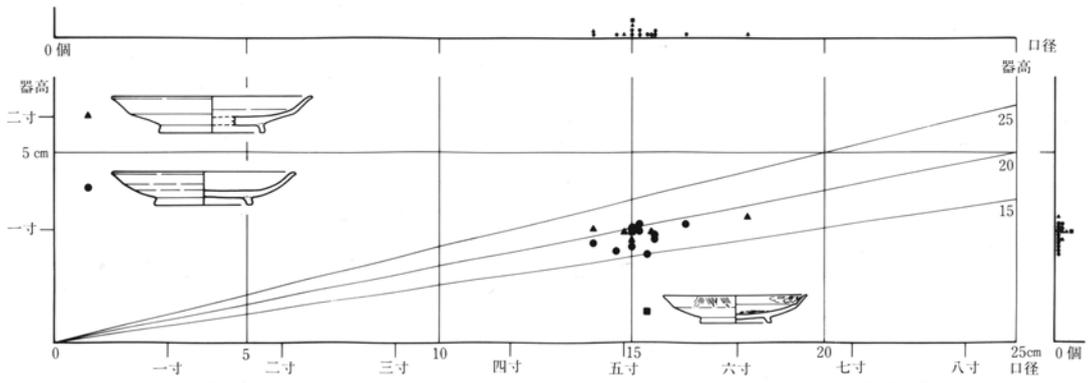
第77図 黒笹89号窯跡窯体内出土灰釉碗・灰釉皿の法量図



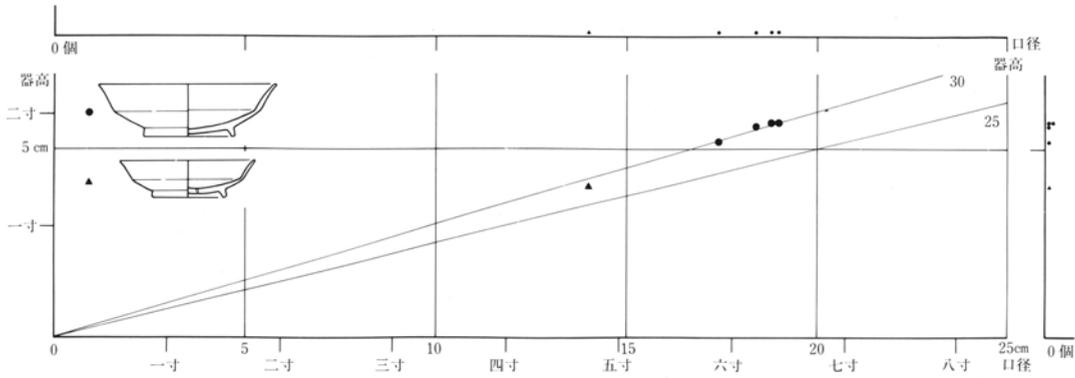
第78図 黒笹89号窯跡出土灰釉碗、素地碗・花文碗の法量図



第79図 黒笹89号窯跡出土灰釉皿の法量図



第80図 黒笹89号窯跡出土素地稜皿・素地皿・花文稜皿の法量図

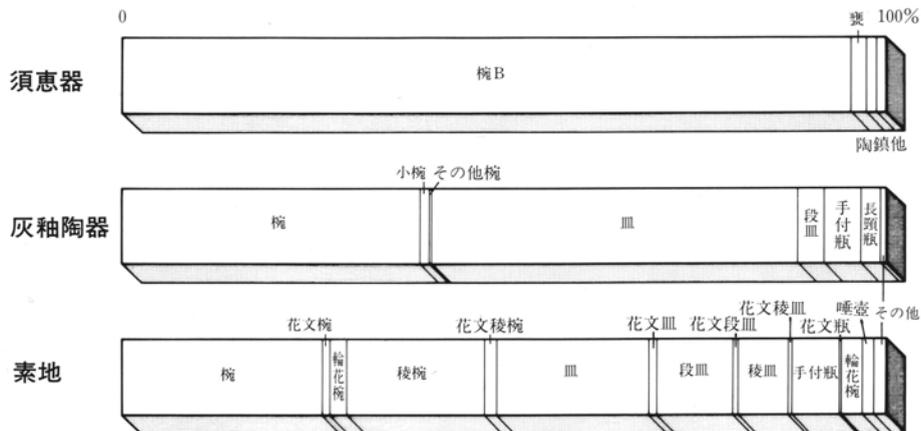


第81図 黒笹89号窯跡出土素地稜碗の法量図

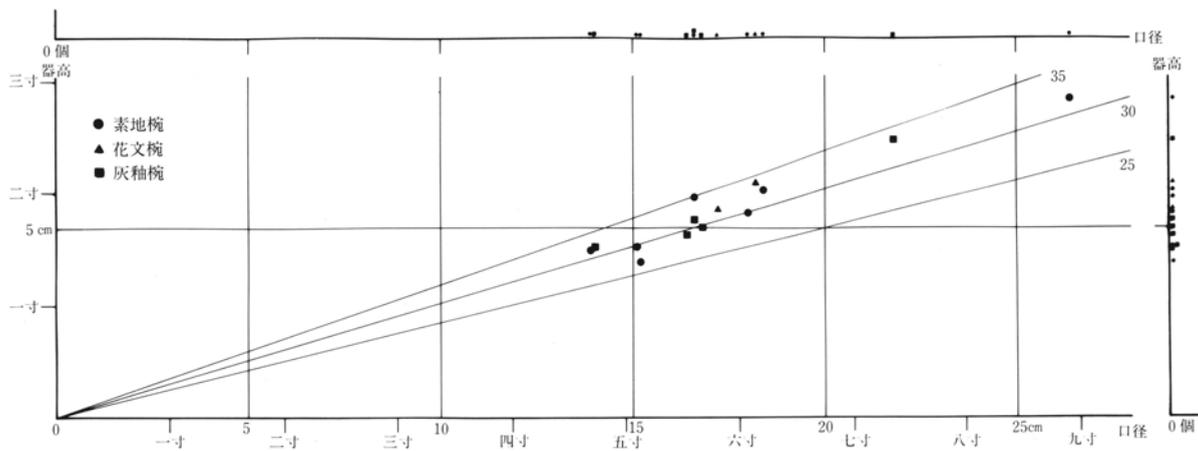
黒笹90号窯式の年代観は9世紀後半に引き上げられて考えられている状況もある。今後資料の増加によっては9世紀代の窯式の実年代観も変更があろう。第V期は黒笹14号窯式、黒笹90号窯式に区別されている。

黒笹14号窯式は愛知県愛知郡東郷町の黒笹14号窯跡を標識遺跡としている。須恵器生産から灰釉陶器生産への転換期を示し、須恵器も焼かれているが中国陶磁の器形を模倣した碗や皿類に代表される灰釉陶器や緑釉陶器（陰刻花文）生産が盛行する。新たに出現する灰釉陶器として、碗、稜碗、皿、稜皿、段皿、耳皿、手付瓶、手付小瓶、合子形双耳壺、三足盤、であるが生産の主体は碗・皿類である。施釉は灰釉が刷毛塗りされ、碗・皿類は内面のみである。三又トチンを使用して重ね焼きを行っている。

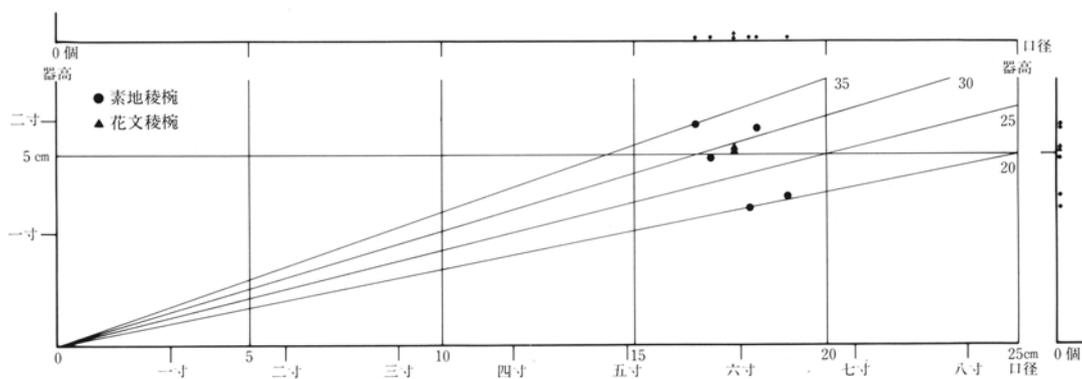
黒笹90号窯式は愛知県西加茂郡三好町の黒笹90号窯跡を標識遺跡としている。灰釉陶器、緑釉陶器は器種が豊富になり、長頸瓶、浄瓶、水瓶、短頸壺、平瓶等の原始灰釉の製品といわれていた器種にまで灰釉が施され、新たに出現する灰釉陶器は香炉、唾壺、四足壺、合子、托、花瓶、水注であるが、生産の主体は碗・皿類である。施釉は灰釉が刷毛塗りされ、碗・皿類は内面や内外面体部に施釉されるが、高台が接地する内面には施釉されない。三又トチン等を使用しないで直接重ね焼きを行う。



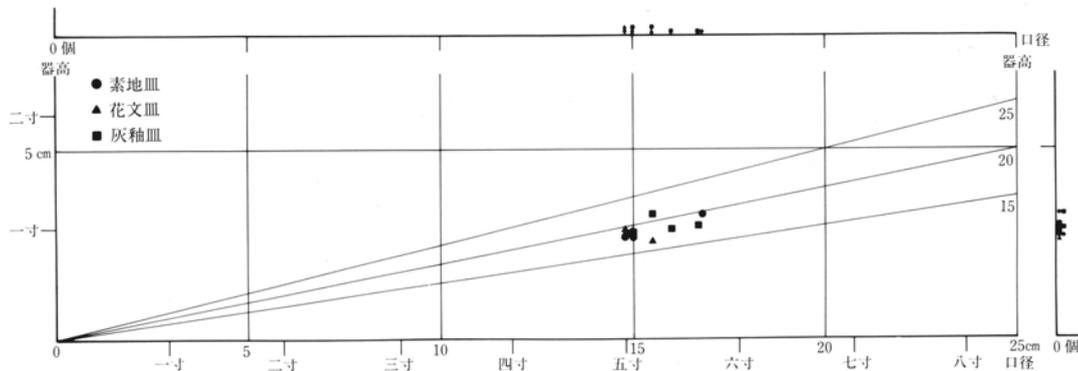
第82図 黒笹89号窯跡出土須恵器、灰釉陶器、緑釉素地における器種割合図



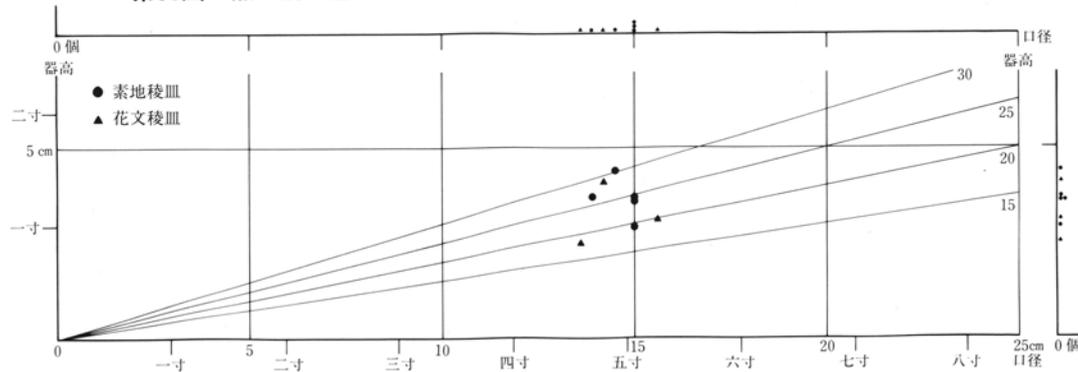
第83図 熊ノ前古窯址群第1地区出土灰釉碗・素地碗・花文碗の法量図 註3



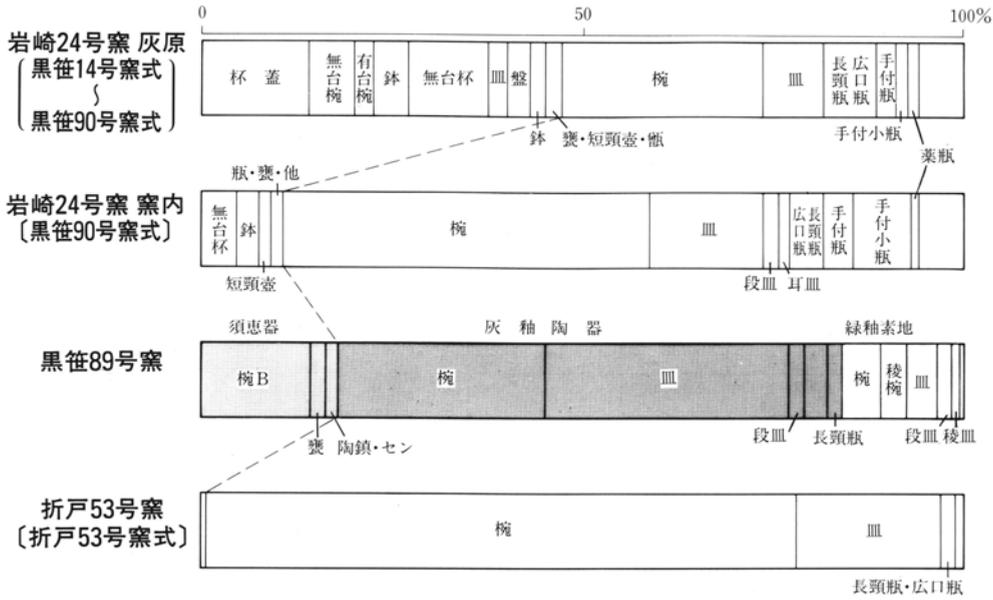
第84図 熊ノ前古窯址群第1地区出土素地稜碗・花文稜碗の法量図 註3



第85図 熊ノ前古窯址群第1地区出土灰釉皿・素地皿・花文皿の法量図 註3



第86図 熊ノ前古窯址群第1地区出土素地稜皿・花文稜皿の法量図 註3



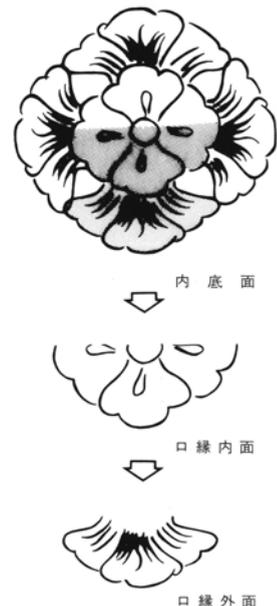
第87図 猿投窯における時期別生産比較図 (2) 註2

今回調査の出土遺物から、黒笹89号窯跡が各器種の特徴や器種構成などから黒笹90号窯式の中に位置づけられることを追認できた。緑釉陶器の素地は総破片数のなかで19%と多く出土したにもかかわらず、窯道具をふくめて緑釉の破片は一片も出土してはいない。

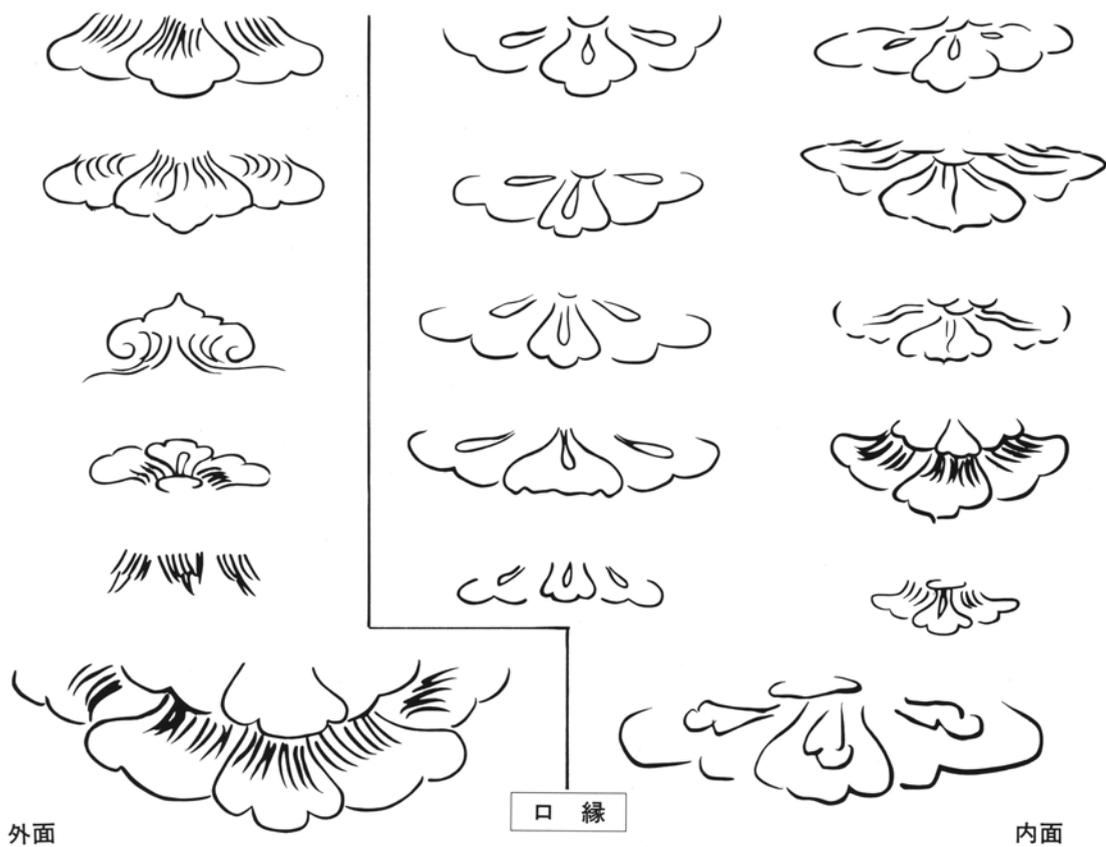
猿投窯においては緑釉陶器の焼成は原則的には灰釉陶器との併焼窯であるが、鳴海地区において畿内と同様な小形平窯の緑釉陶器専門窯が存在する可能性も指摘されている。緑釉陶器の窯からの出土は鳴海地区に集中しており、一方黒笹地区ではこれまで緑釉の窯は発見されておらず、緑釉陶器素地が黒笹89号・90号窯跡等から多く出土しているのみである。

今回の調査範囲の中から緑釉の窯の検出を期待したが、その痕跡は今回の調査区では皆無であった。緑釉陶器の生産については、窯跡からの出土例より緑釉陶器より素地のほうが圧倒的に多い点などからみて、一次焼成をおこない(素地)、他の地点で緑釉を施釉し焼かれたと考えられており、黒笹89号窯跡より出土した緑釉陶器素地についても同様なことが言えるのである。いずれにしても黒笹地区で緑釉陶器の生産があったのか、黒笹地区と鳴海地区との関連等、当初の課題は残ったままである。

なお熱残留磁気による考古地磁気測定をおこなったが、黒笹89号窯は、上層床A.D 750±20年、下層床A.D 755±15年と第2章第4節で指摘されている。しかし、この測定結果と考古学の推定年代との間に開きがある。



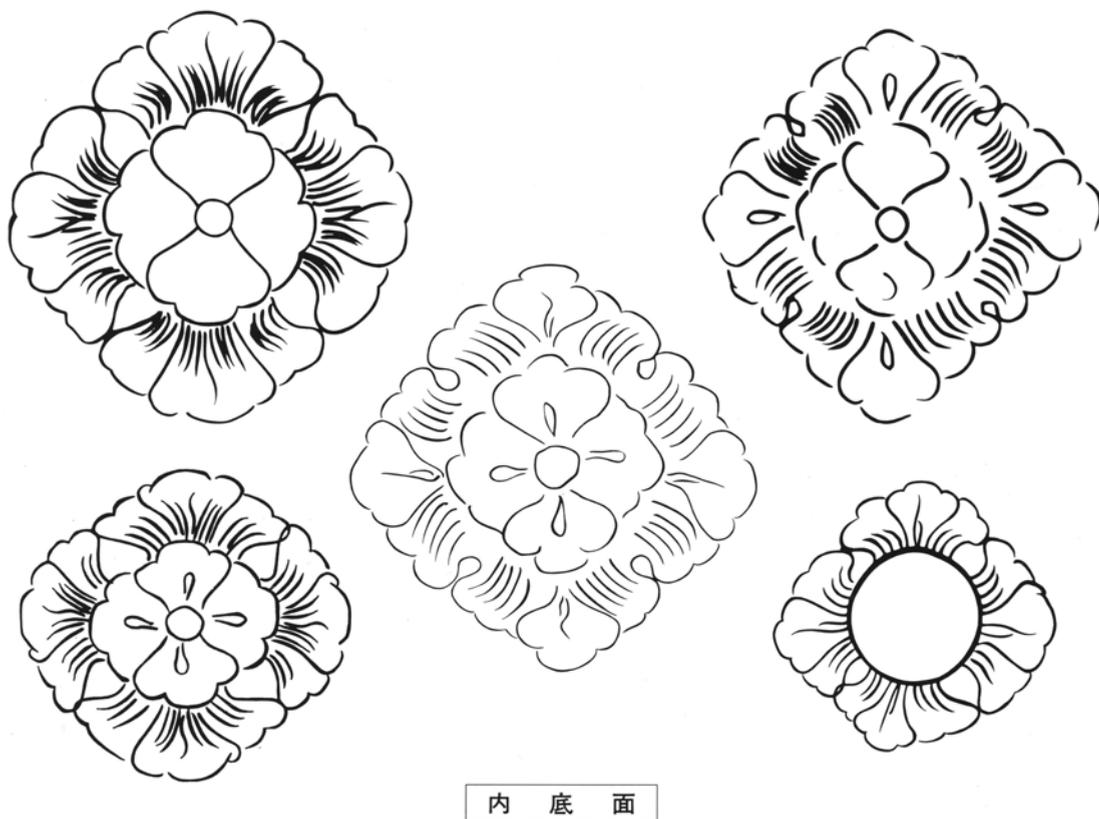
第88図 花文割付図



外面

口縁

内面



内底面

第89図 黒笹89号窯跡出土 陰刻花文集成図

註

- 1、 各時期の1尺が現在の何cmに相当するのか問題であるが、今回スケールに使用した尺度は、奈良時代の猿投窯の須恵器の尺度には唐大尺（1尺=29.6cm）が使用されていたことが城ヶ谷和広氏の研究1984により明らかにされており、平安時代の灰釉陶器にも同様に唐大尺が使用されていたと考えた場合の尺度として使用した。
- 2、 第74図、第87図の猿投窯における時期別生産比較図（1・2）は斎藤孝正氏1986論文の第10図（152頁）に黒笹40号窯跡、第12図（160頁）に黒笹89号窯跡を加え改変したものである。
- 3、 熊ノ前古窯跡群出土遺物の法量図は『名古屋市熊ノ前古窯跡群』1984より作成した。

第82図は前掲報告書 第6図（19頁）の3・11・14	第7図（21頁）の1・7
第8図（23頁）の1・2	第15図（37頁）の3・5・6・8・9
第83図は前掲報告書 第8図（23頁）の3・4	第9図（25頁）の3・4・7・11・19
第84図は前掲報告書 第8図（23頁）の5・7・8	第9図（25頁）の9・10・14・16・17
第85図は前掲報告書 第10図（27頁）の1・2・3・5・6	第11図（29頁）の1・2・17・18
第15図（37頁）の10・11・12・13	

引用・参考文献

- 井上喜久男、1992：尾張陶磁。
- 尾野善裕、1993：NN288号窯・NN289号窯発掘調査報告書。
- 斎藤孝正、他、1980：愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告Ⅰ。
1980：猿投窯とその周辺。日本やきもの集成3。
他、1981：愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告Ⅱ。
1981：猿投窯編年の再検討について。シンポジウム平安時代の土器・陶器。
1982：猿投窯における灰釉陶の展開。考古学ジャーナル211号。
1986：灰釉陶器の研究Ⅰ。名古屋大学文学部研究論集（史学32）。
1987：施釉陶器年代論。論争・学説日本の考古学6。
他、1988：愛知大学用地内埋蔵文化財発掘調査報告書。
1989：灰釉陶器の研究Ⅱ—猿投窯第Ⅴ期椀・皿類の型式編年—。名古屋大学文学部研究論集（史学35）。
1989：灰釉陶器生産の一樣相。美濃の古陶・美濃古窯研究会会報No.3。
1990：尾張・美濃における緑釉陶器生産。第9回三重県埋蔵文化財展「緑釉陶器の流れ」。
- 城ヶ谷和広、1984：七・八世紀における須恵器生産の展開に関する一考察、一法量の問題を中心に一。考古学雑誌70巻2号
- 柴垣勇夫、1978：古代窯業の発展—須恵器生産の展開と中世陶器の成立—。古代の地方史4、東海・東山・北陸編。
1983：東海地方の灰釉陶器。愛知県陶磁資料館研究紀要2。
- 橋崎彰一、1956：愛知県猿投山西南麓古窯址群。1957：愛知県猿投山西南麓古窯址群。
1958：愛知県猿投山西南麓古窯址群。1959：愛知県猿投山西南麓古窯址群。
1976：白瓷。日本陶磁全集6。1977：中世の社会と陶器生産。世界陶磁全集3。
他、1978：愛知県日進町折戸80号発掘調査報告書。
1979：平安時代の施釉陶—青瓷と白瓷—。世界陶磁全集2。
1983：猿投窯における編年について。愛知県古窯跡群分布調査報告書Ⅲ。
他、1984：愛知県日進町株山地区埋蔵文化財発掘調査報告書。
- 藤澤良祐、1982：瀬戸古窯跡群Ⅰ。瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅰ。
- 前川 要、1984：猿投窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相。瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅲ
1989：平安時代における緑釉陶器の編年研究。古代文化第41巻5号。
1989：平安時代における施釉陶磁器の様式論的研究（上）—様式の形成とその歴史的背景—。古代文化第41巻8号。
1989：平安時代における施釉陶磁器の様式論的研究（下）—様式の形成とその歴史的背景—。古代文化第41巻10号。
- 森田 稔、1984：猿投窯灰釉陶器編年再考。古代文化第36巻8号。

図 版

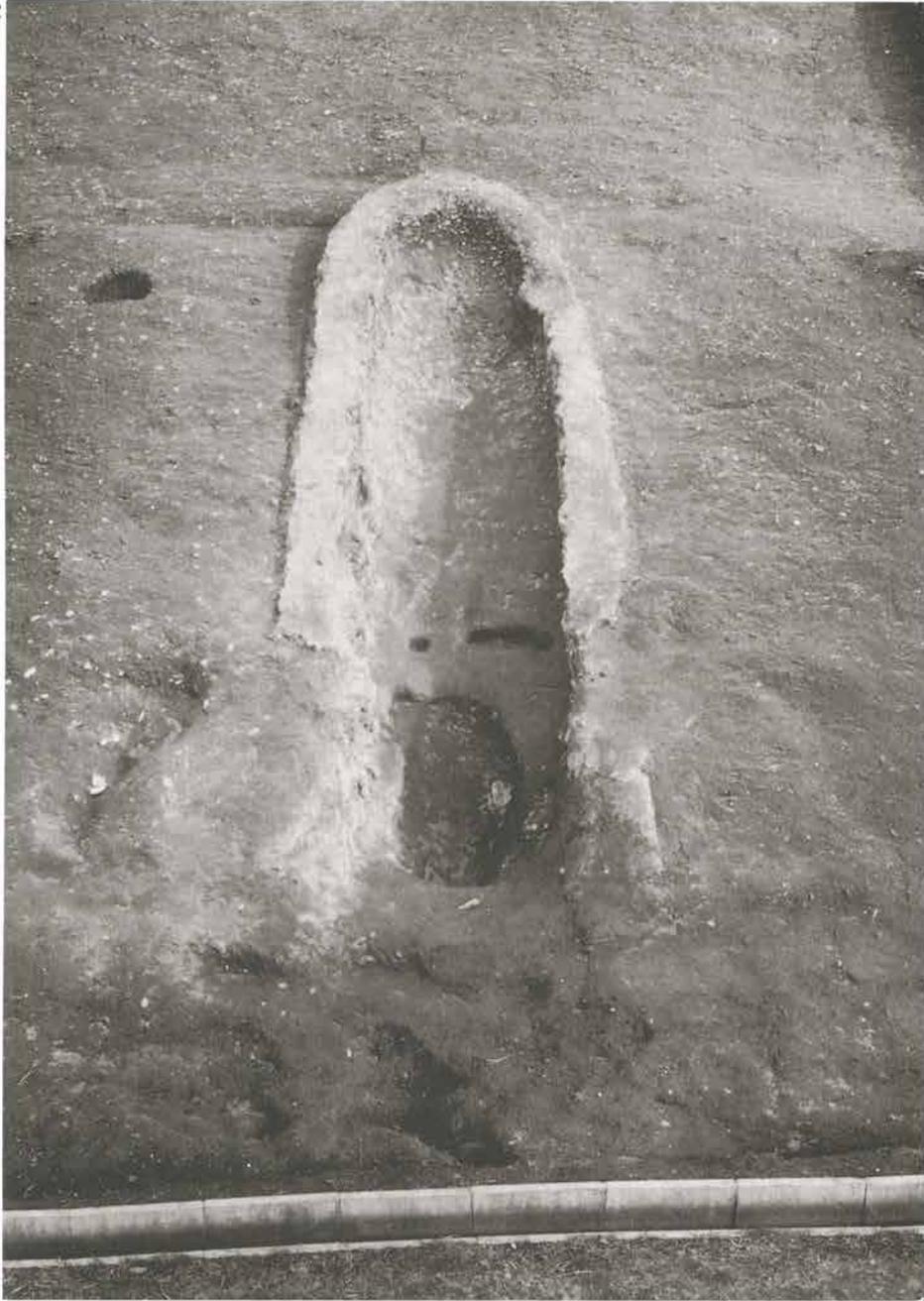




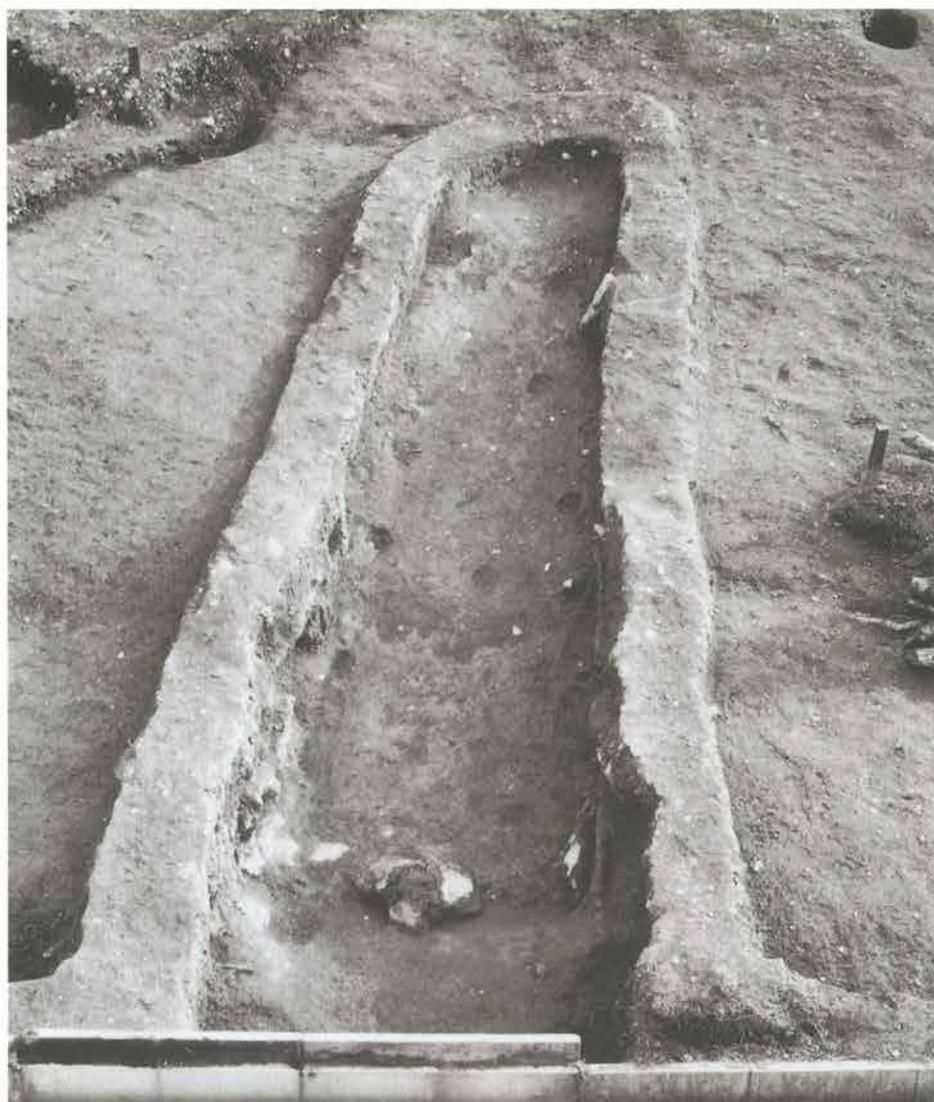
図版 1 調査区全景



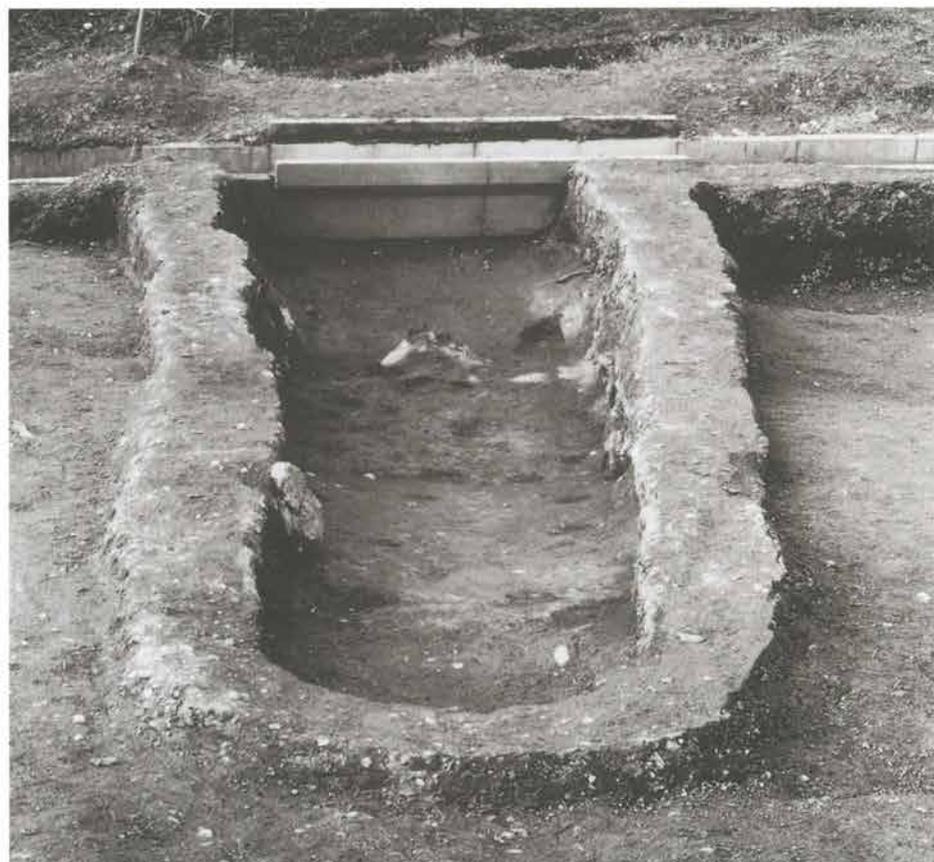
図版2 調査区全景



図版3 上 黒笹40号窯跡：窯体全景
下 黒笹40号窯跡：窯体北壁（蛇腹の様子）



西より



東より

図版4 黒笹89号窯跡：窯体全景



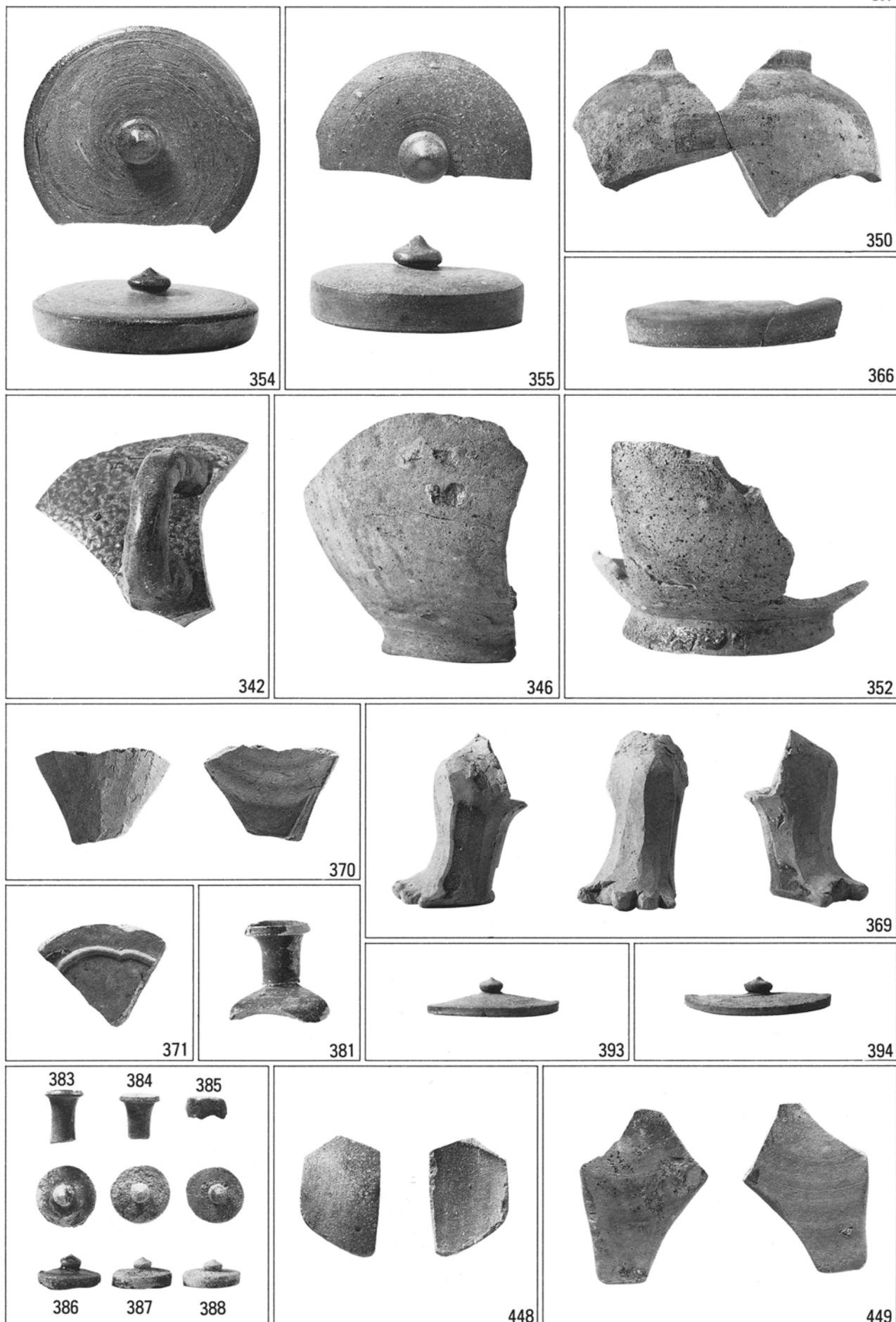
图版5 黑笹40号窯跡出土遺物（1）
杯蓋・杯A・杯B・碗A



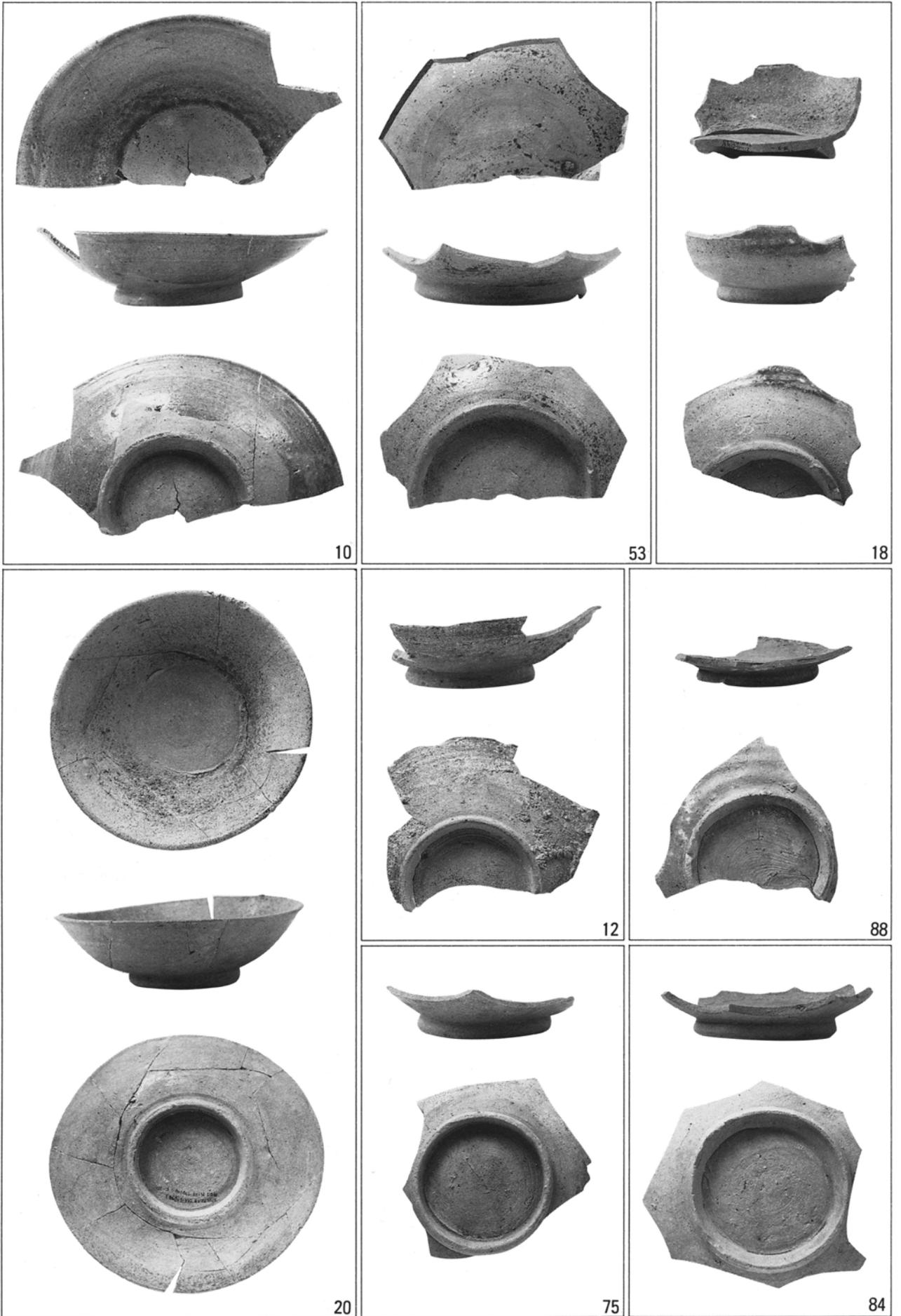
図版6 黒笹40号窯跡出土遺物 (2)
 碗A・碗B・碗C・盤
 高盤・鉢・浄瓶・水瓶



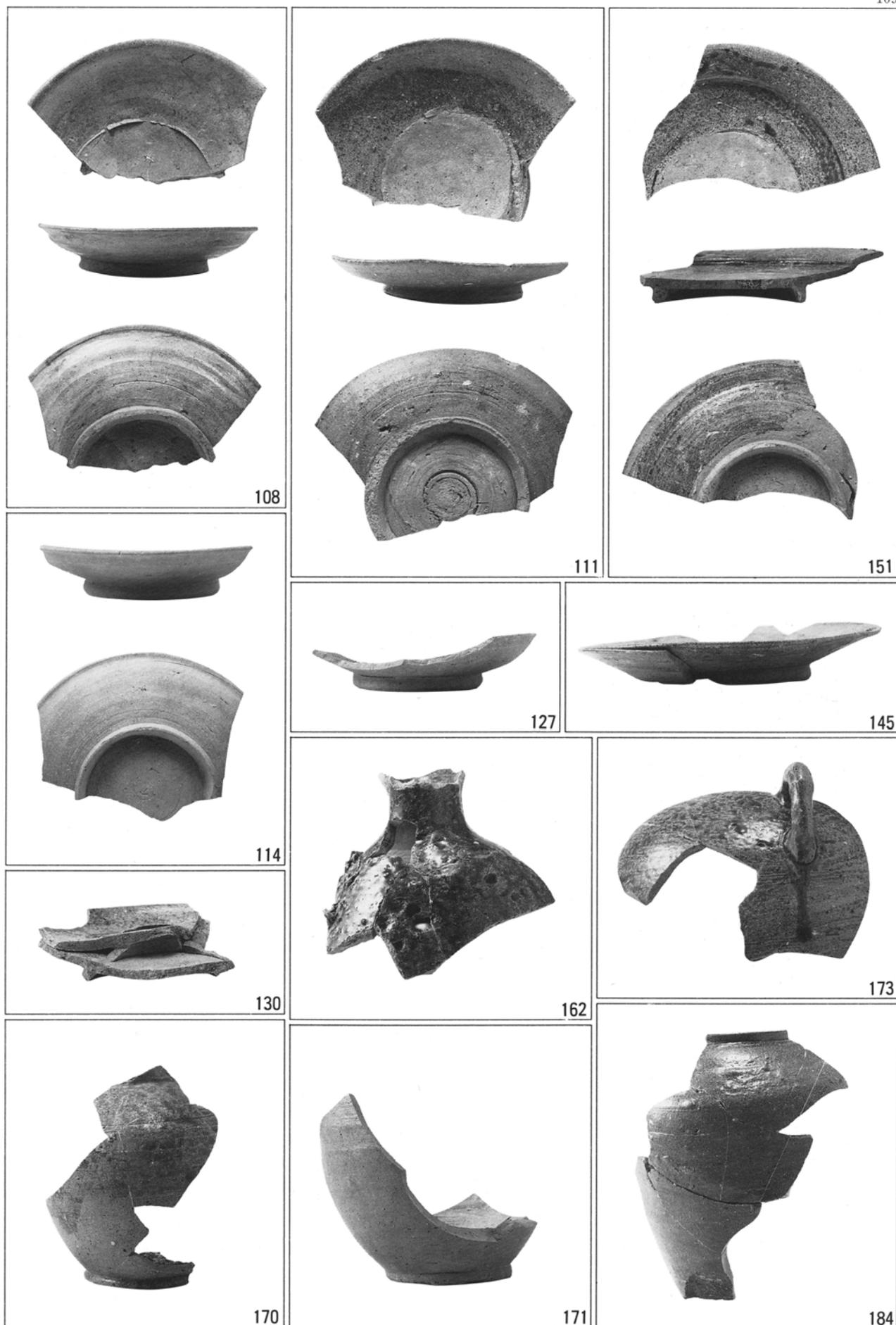
图版7 黑奩40号窟迹出土遗物(3)
 长颈壶·双耳瓶盖·
 双耳瓶·甕



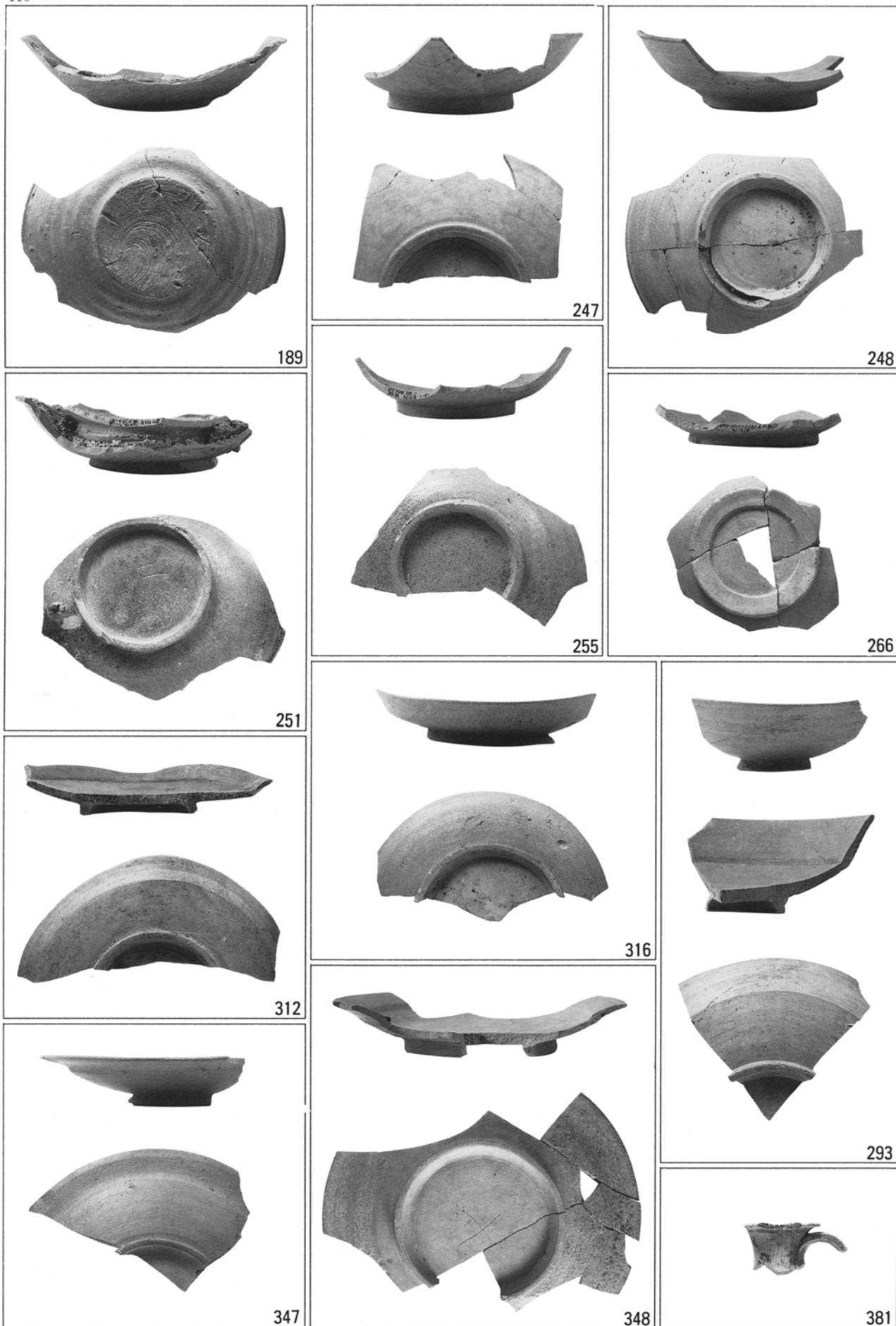
図版8 黒笹40号窯跡出土遺物(4)
 環状耳付長頸壺・短頸壺・
 獸足・形象硯蓋・
 硯・小形品・へら状道具



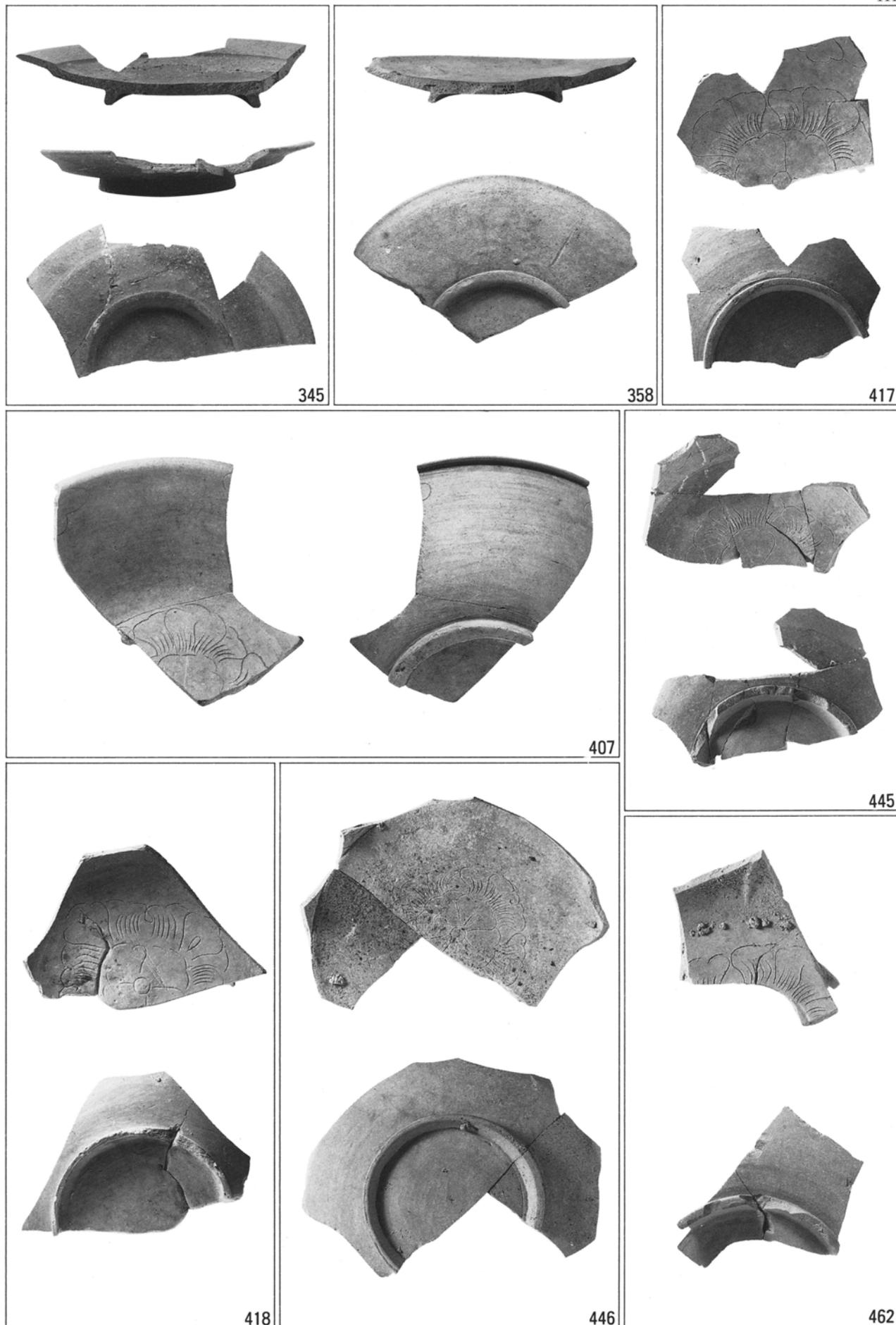
图版9 黑笹89号窯跡出土遺物（1）
椀



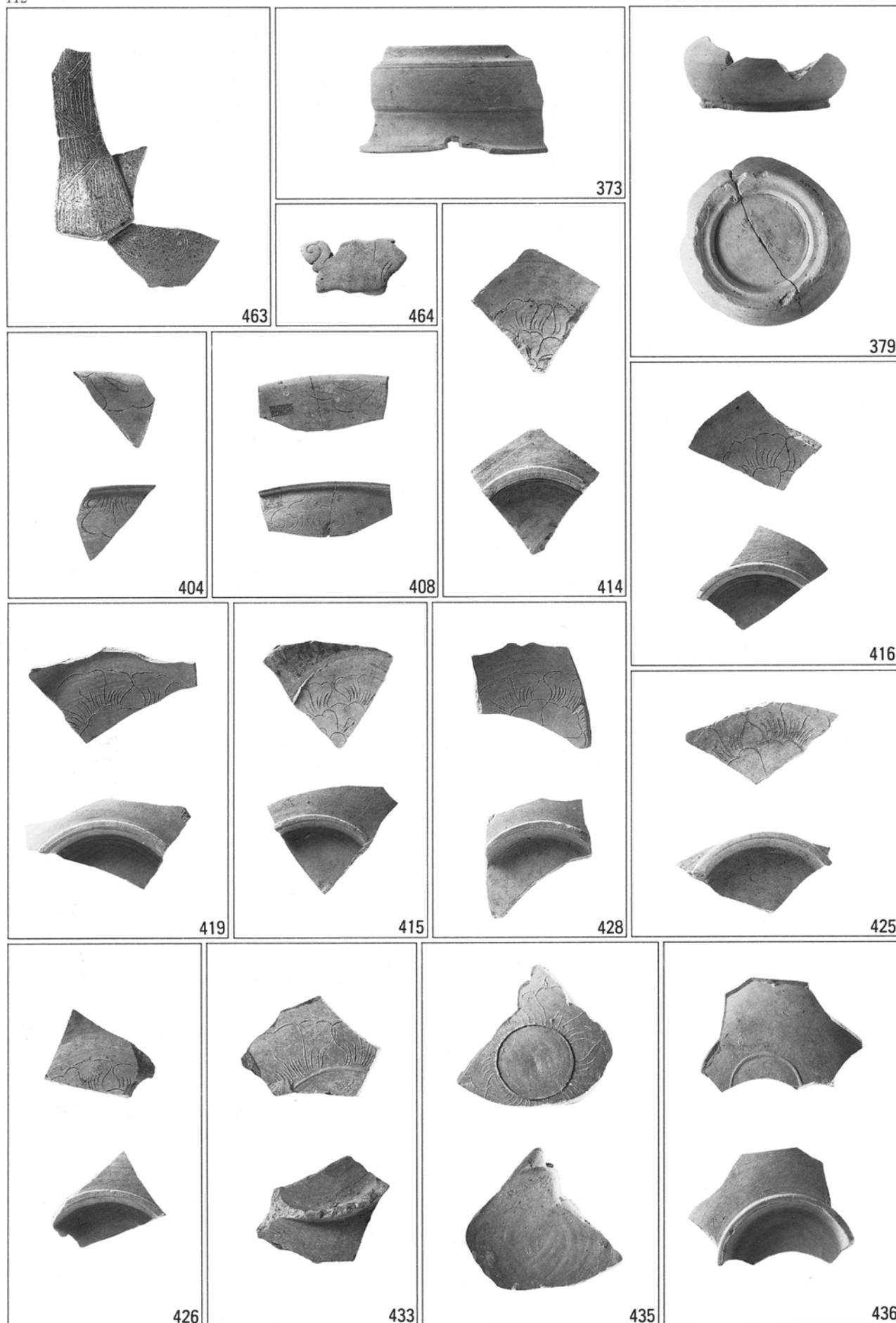
図版10 黒笹89号窯跡出土遺物(2)
 椀・皿・段皿・瓶・長頸瓶
 環状耳付長頸瓶・短頸壺



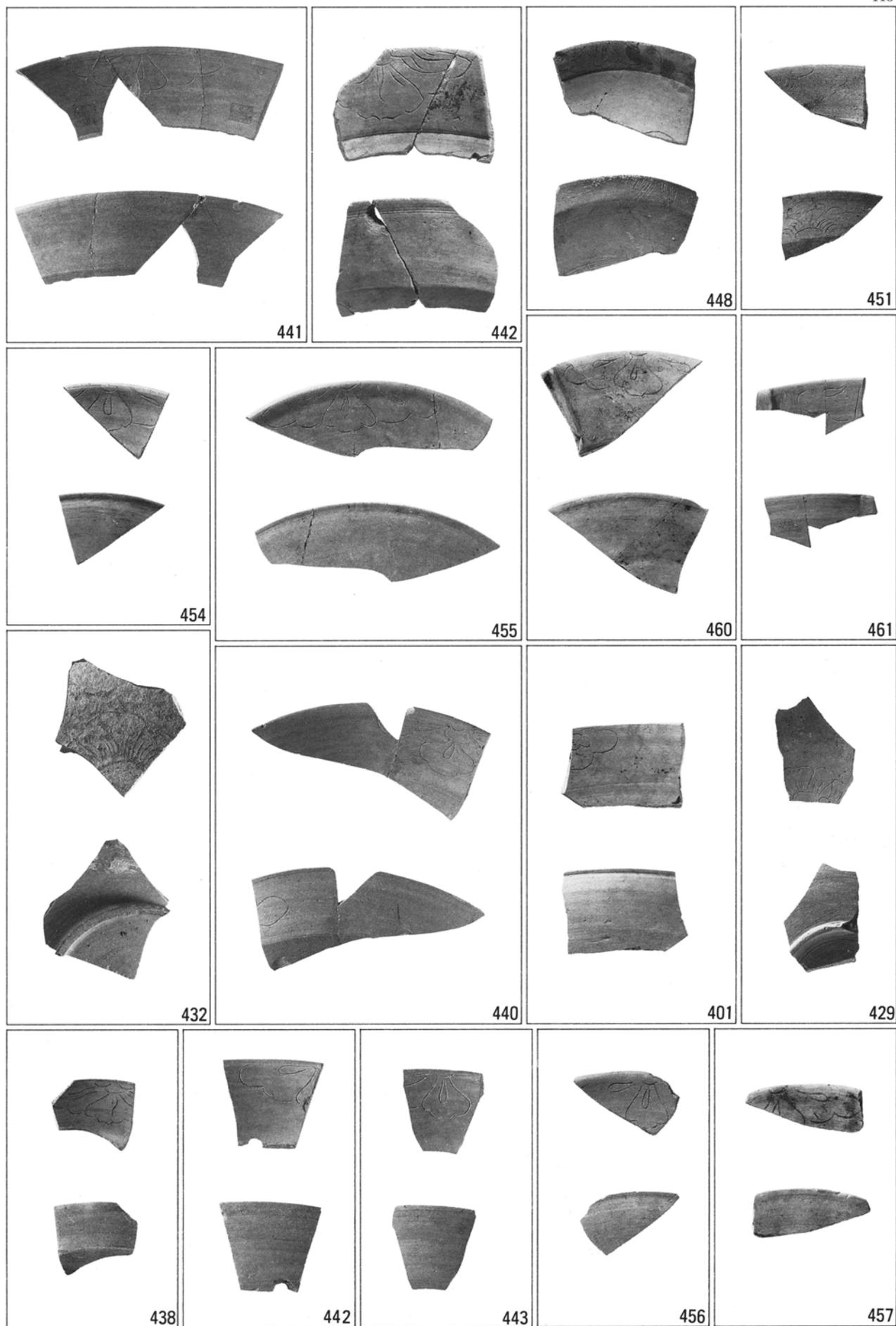
図版11 黒笹89号窯跡出土遺物 (3)
 素地：椀・稜椀・稜皿・
 段皿



图版12 黑笹89号窯跡出土遺物 (4)
 素地：段皿・輪花皿・
 陰刻花文椀



図版13 黒笹89号窯跡出土遺物 (5)
 素地：陰刻花文手付瓶・香炉・
 香炉蓋・唾壺・陰刻花文椀・
 陰刻花文皿



图版14 黑笹89号窯跡出土遺物（6）

素地：陰刻花文稜碗・陰刻花文稜皿・

陰刻花文皿

くろ ざき
黒笹 G 2 号 古窯跡
ごう こ よう せき

1994

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

例 言

1. 本書は愛知県西加茂郡三好町大字黒笹字丸根に所在する黒笹G2号（以下K-G-2と称す）古窯跡（県遺跡番号64085）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は愛知県企業庁が進めている内陸用地造成に伴うもので、愛知県教育委員会を通じて委託を受けた（財）愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間は平成4年6月から10月であり、発掘調査に引き続き平成5年3月まで一次整理作業を行った。また、平成5年度に報告書作成のための整理作業を実施した。
4. 発掘調査は主査野本欽也・調査研究員小澤一弘・調査研究員杉浦茂が担当し、調査研究補助員岡裕子の協力を得た。
5. 調査に当たっては、愛知県教育委員会文化財課、愛知県埋蔵文化財調査センターの指導、及び三好町教育委員会、（財）瀬戸市埋蔵文化財センターの協力を得た。
6. 調査記録及び出土品の整理等については、図版トレース等で調査研究補助員の奥村勝信、整理補助員の柵木えみ子・中島由美子・河野実佳子の協力を得たほか、現地調査においては以下の方々の参加を得た。
石川あけみ・小野田道代・柏原節子・久保田咲子・近藤日昇美・近藤幸子・田代ゆかり・水谷美佐江・守道直子・石田昌浩・大島登志子・加藤トヨ子・加納ときわ・国枝花子・鈴木いつ・鈴木輝子・鈴木六三・原田薫枝・門田美奈子・津田牧恵・下條彰則・服部高治・石田琴巳・田中隆史・加納崇・南里高範・西村浩二
7. 本書の執筆及び編集は調査課長加藤安信の指導のもと野本欽也（現課長補佐兼主査）が担当したが、第1章第2節2を調査研究員の鬼頭剛、第3章及び第5章第2節を調査研究補助員の奥村勝信が分担執筆をした。第4章科学分析は、熱残留磁気測定を富山大学広岡公夫教授にお願いをし、玉稿を頂いた。
8. 本書をまとめるに当たり、次の各氏よりご指導、ご協力を得た。
荒井信貴・赤羽一郎・伊藤 稔・遠藤才文・岡本茂史・尾野善裕・金子健一・城ヶ谷和広・檜崎彰一・服部 郁・藤澤良祐・安田幸市・山下峰司（五十音順、敬称略）
9. 本書に示した座標は建設省告示に定められた平面直角座標第VII系に、また標高は東京湾の平均海面（T. P.）に準拠する。
10. 調査記録及び出土品は愛知県埋蔵文化財調査センターにて保管している。

目 次

第1章 調査概要	
1節 遺跡の位置と調査に至る経緯	1
1. 位置	1
2. 調査に至る経緯	1
2節 立地と歴史的環境	2
1. 立地	2
2. 地質	4
3. 周辺の遺跡	5
3節 調査の経過	7
1. 調査方法	7
2. 調査経緯	7
3. 成果の概要	7
4. 調査日誌抄	8
第2章 遺構	
1節 窯体	9
1. 概要	9
2. 窯体及び灰原	9
2節 窯前施設	14
1. 概要	14
2. 窯前施設	14
第3章 遺物	
1節 概要	16
2節 出土遺物	18
1. 窯体内出土遺物	18
2. 前庭部出土遺物	18
3. 灰原出土遺物	19
第4章 科学分析	
黒笹G2号古窯の考古地磁気測定	22
第5章 考察	
1節 食器としての山茶碗	26
2節 容積からみた山茶碗	30
3節 木地碗製作に関する民俗学的分析	35
4節 小結	37
第6章 まとめと今後の課題	38
付表	41
図版	53

図版・挿図・表目次

図版 1	遺構実測図(1) (窯体含)	第 1 図	遺跡の位置…………… 1
図版 2	遺構実測図(2)	第 2 図	調査地点位置図…………… 2
図版 3	遺物実測図(1) SY	第 3 図	調査前地形図…………… 3
図版 4	遺物実測図(2) SY	第 4 図	地質図…………… 4
図版 5	遺物実測図(3) SY・焼台	第 5 図	周辺遺跡位置図…………… 6
図版 6	遺物実測図(4) SY・焼台	第 6 図	作業風景…………… 8
図版 7	遺物実測図(5) SY・前庭部	第 7 図	遺構配置図……………10
図版 8	遺物実測図(6)前庭部	第 8 図	窯体見通し及び床面下埋土セクション図 ……11
図版 9	遺物実測図(7)前庭部	第 9 図	窯体実測図……………12
図版10	遺物実測図(8)前庭部	第10図	窯体断面図……………13
図版11	遺物実測図(9) SK01	第11図	谷部分土層セクション図……………14
図版12	遺物実測図(10) SK01・02・03 SD01・02・灰原	第12図	SX01・SX03・SK03平面図及び断面図 ……15
図版13	遺物実測図(11)灰原	第13図	器種分類……………17
図版14	遺物実測図(12)灰原	第14図	碗の遺構別器高-口径法量分布図 ……20
図版15	遺構写真(1)調査区全景	第15図	SY・SK01主要遺物出土状況 ……21
図版16	遺構写真(2) SY(窯体)	第16図	過去2000年の西南日本の考古地磁気 永年変化(広岡、1977)と黒笹G 2号 古窯の考古地磁気測定結果……………25
図版17	遺構写真(3) SK・SD・SX	第17図	手轆轤……………27
図版18	遺物写真(1)遺物(碗 1)	第18図	焼台配置想定図……………28
図版19	遺物写真(2)遺物(碗 2)	第19図	床面傾斜角度及び重ね焼想定図…………29
図版20	遺物写真(3)遺物(碗 3)	第20図	積分計算による容積……………31
図版21	遺物写真(4)遺物(碗 4)	第21図	奥三河の木地屋関係地図……………36
図版22	遺物写真(5)遺物(碗 5)		
図版23	遺物写真(6)遺物(重ね焼)		
図版24	遺物写真(7)遺物(皿)		
図版25	遺物写真(8)遺物(焼台)		
図版26	遺物写真(9)遺物(特殊遺物)		
第 1 表	碗・皿分類集計表……………16	第 7 表	猿投古窯跡群出土碗容積の変化…………32
第 2 表	黒笹G 2号古窯のNRMの磁化測定結果 25	第 8 表	瀬戸古窯跡群出土碗容積の変化…………33
第 3 表	黒笹G 2号古窯の500e消磁後の磁化測定結果 ……25	第 9 表	陶器・漆器碗容積の比較……………34
第 4 表	黒笹G 2号古窯の考古地磁気測定結果…25	付表	遺構一覧表……………42
第 5 表	遺構別出土碗容積……………30		遺物観察表……………43
第 6 表	計算値と計測値との誤差……………31		

第1章 調査概要

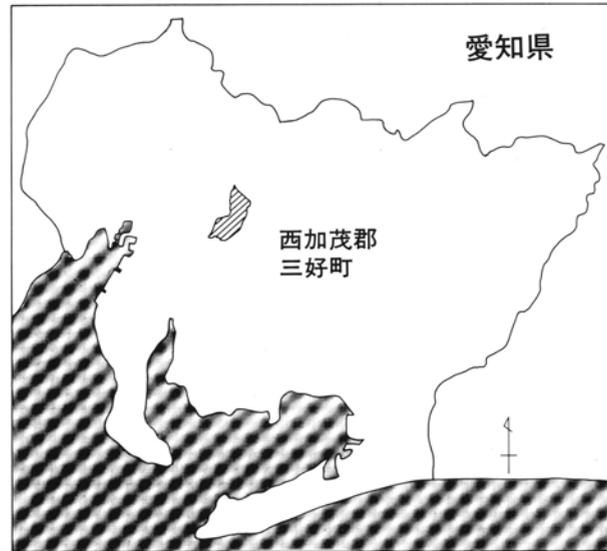
第1節 遺跡の位置と調査に至る経緯

1. 位置

黒笹G 2号古窯跡（以下K-G-2号古窯跡と称す）は、西加茂郡三好町大字黒笹字丸根124-1に所在する。古窯跡は猿投窯黒笹地区の中世陶器窯のうちの1基に当たる。

三好町は、愛知県のほぼ中央、名古屋市と豊田市の間に位置する総面積32.11km²、人口33,000人の豊かな自然に囲まれた町である。

昭和33年の町制施行以来、積極的な工業誘致施策と住宅建設などを進め、純農村から内陸工業地域



第1図 遺跡の位置

の一翼を担うまでに発展してきた。昭和54年に開通した名古屋鉄道豊田新線は、三好ヶ丘ニュータウンの造成、愛知大学の誘致を可能にした。また、平成2年には国道153号豊田西バイパスが開通し、さらに、平成5年3月には東名三好インターチェンジも開設して、交通網の整備も着実に進んでいる。

2. 調査に至る経緯

愛知県企業庁は、工場敷地確保の為の内陸用地造成に伴って、三好町大字黒笹字丸根124-1に所在するK-G-2号古窯跡、K-G-3号古窯跡及び用地内埋蔵文化財所在の有無を平成3年2月13日付けで、三好町教育委員会を通じ愛知県教育委員会あてに照会を行った。照会を受けた愛知県教育委員会は、平成3年9月7日に現地を踏査し、計画範囲に古窯跡及び遺物の散布地が所在することを確認して、記録保存が必要であると判断した。

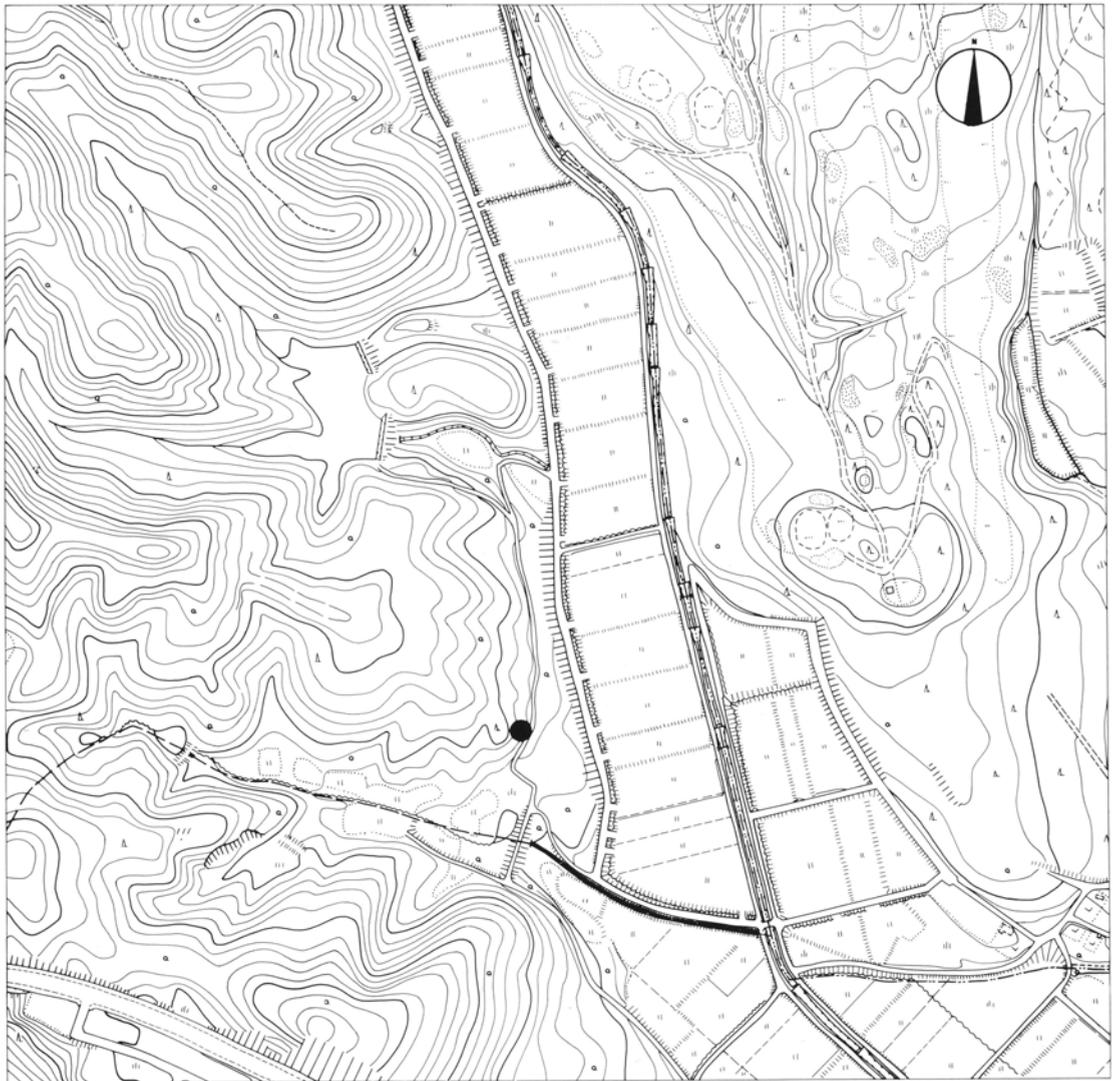
愛知県企業庁から愛知県教育委員会を通じて委託を受けた（財）愛知県埋蔵文化財センターでは平成4年度事業として発掘調査を実施することとなり、平成4年6月より調査に着手した。調査面積は1,300m²で、10月まで現地調査を行った。調査後は平成5年3月まで出土資料の一次整理を行い、平成5年度に報告書のための資料整理を行った。

発掘調査工程としては、平成4年6月1日立木伐採、7月1日より発掘調査に取りかかり、9月8日に航空測量を実施した。それ以後、谷部分に粘土溜遺構などを検出したために1カ月程工程が伸びてしまったが、10月30日にはすべてを完了した。

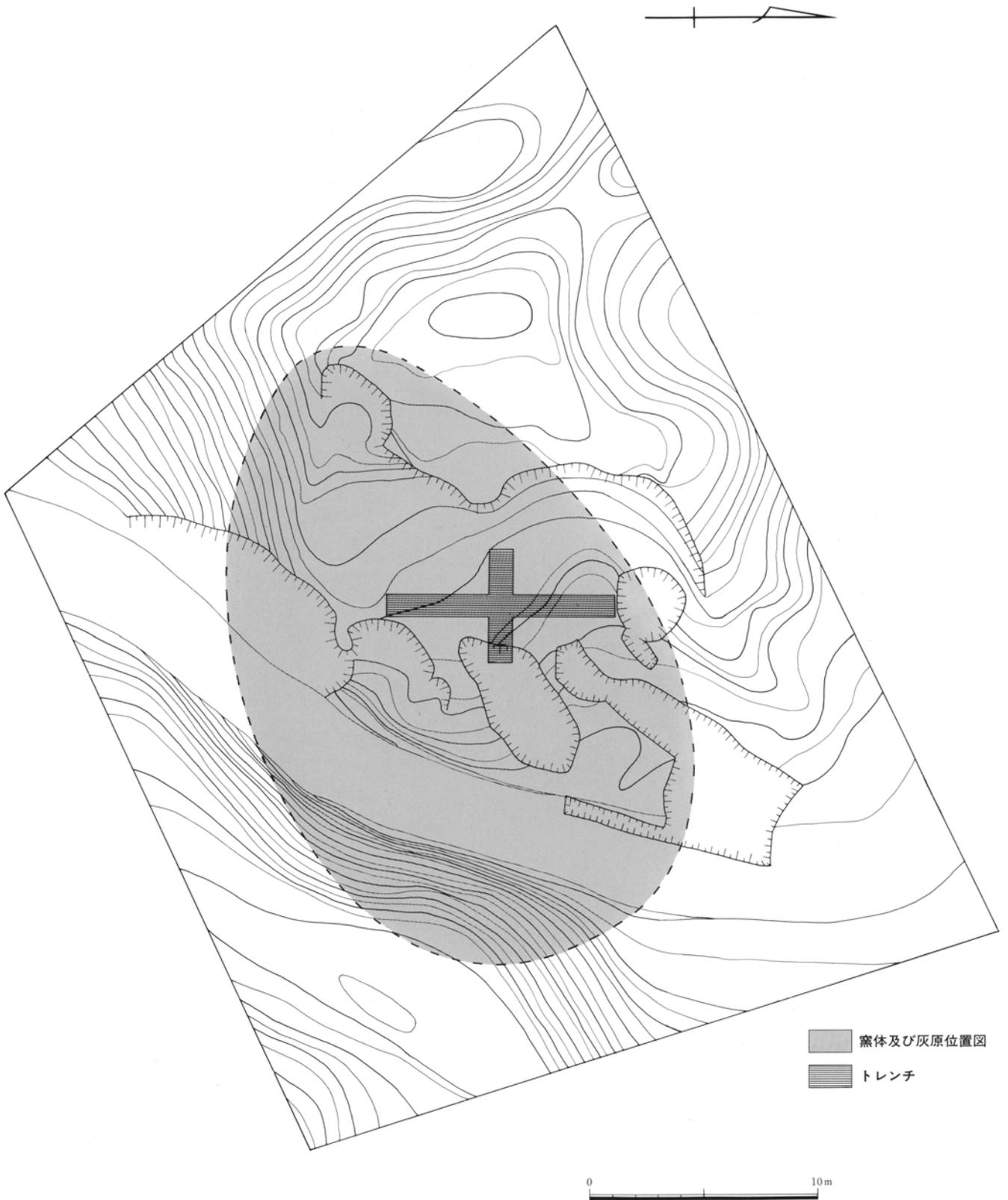
第2節 立地と歴史的環境

1. 立地

K-G-2号古窯跡が立地する地点は、豊田市田靱町に端を発し、三好町北部域を南南西へと流れる境川の上流域にあたり、古窯跡は南東に開口した開析谷に面する丘陵の東側斜面、標高100m前後の位置に立地している。前面には幅100m程にわたる谷地形が入り込んでおり、水田として開発されている。調査に入る前は、古窯跡周辺は灌木の生い茂る雑木林であった。戦後の復興に際し土取り及び林道開設などによる地形の改変を一部受けている。また、古窯跡周辺一帯は、砂防指定地及び保安林の指定を受けており、このため、調査実施に当たっては地形改変に伴う沈砂池の設置を必要としたほどである。立地点の微高地を見ると、起伏の著しいことが窺われ、長期にわたる浸食作用の結果、地形は相当変わっているものと判断された。



第2図 調査地点位置図 (1:5,000)



第3図 調査前地形図 (1 : 250)

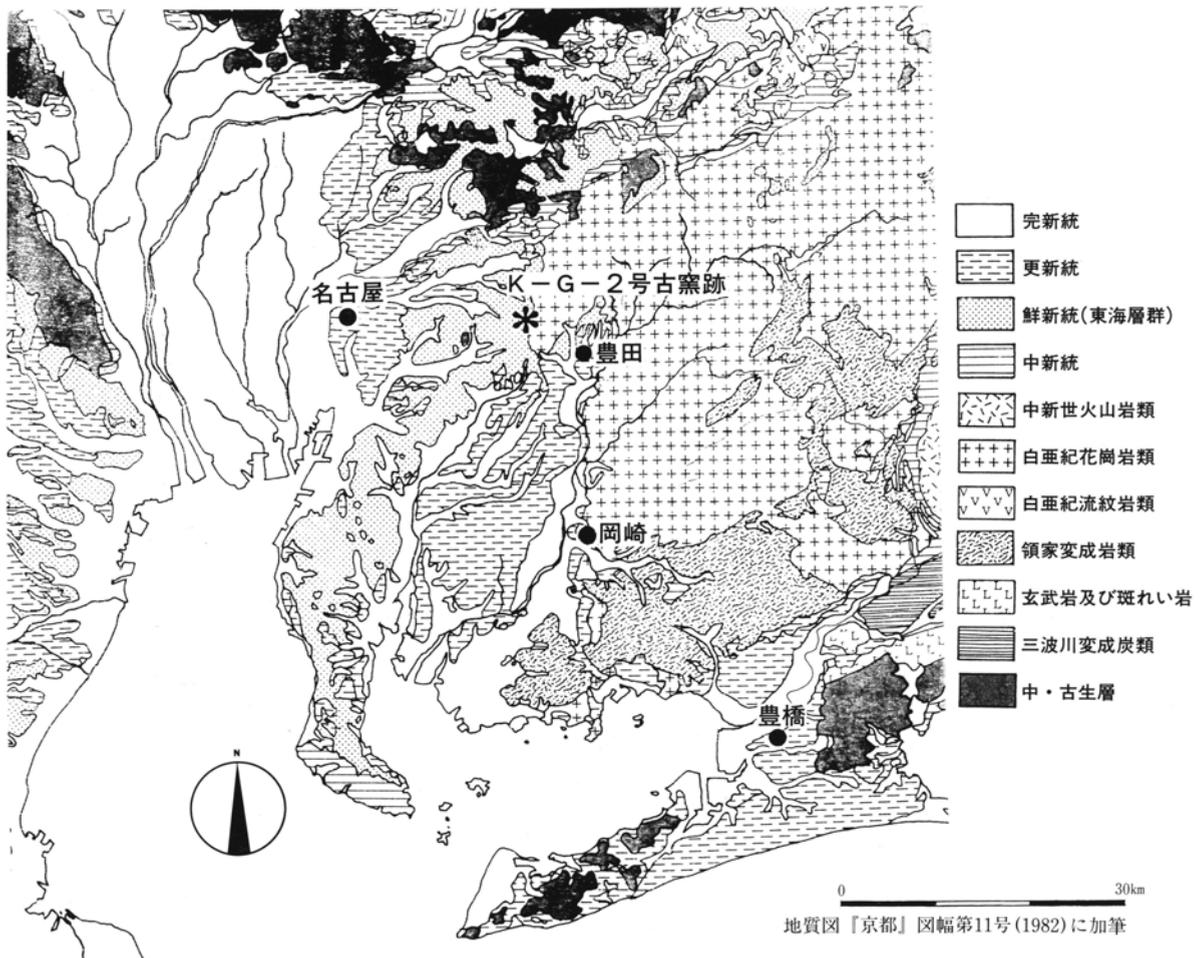
2. 地質

前述のとおりK-G-2号古窯跡は、西加茂郡三好町大字黒笹字丸根に所在する。本古窯跡の所在地は境川の源流部にあたり、南東に開口した開析谷の東側斜面、標高100m前後に立地する。

本遺跡を含めた周辺部は、新第三紀鮮新統東海層群からなる。東海層群はおよそ600万年から80万年前の東海湖と呼ばれる堆積盆地の堆積物である。この地域の東海層群を古くは瀬戸層群と呼ばれ、さらに下位より瀬戸陶土層と矢田川累層に2分される。窯業原料となる粘土が多く含まれることが、古くから知られている。森（1971）は、矢田川累層を下位より水野部層、高針部層、猪高部層に区分した。本遺跡周辺には、このうちの水野部層の最上部層が露出する。岩相は、主として砂・砂礫と粘土の互層からなり、褐炭層をはさむ。本遺跡所在地の丸根からは、約400万年前の年代を示す丸根火山灰層が知られている。また、遺跡の位置する丘陵地上部には三好層と呼ばれる第四紀更新統が分布する。三好層は砂礫混じりの層で、赤褐色を呈している。調査当時、窯跡周辺は灌木の茂る雑木林であった。戦後の復興に際し土取り及び林道開設などによる改変を著しく受けていた。

参考文献

森 忍、1971：名古屋市東部の瀬戸層群矢田川累層、地質雑、77、635-644



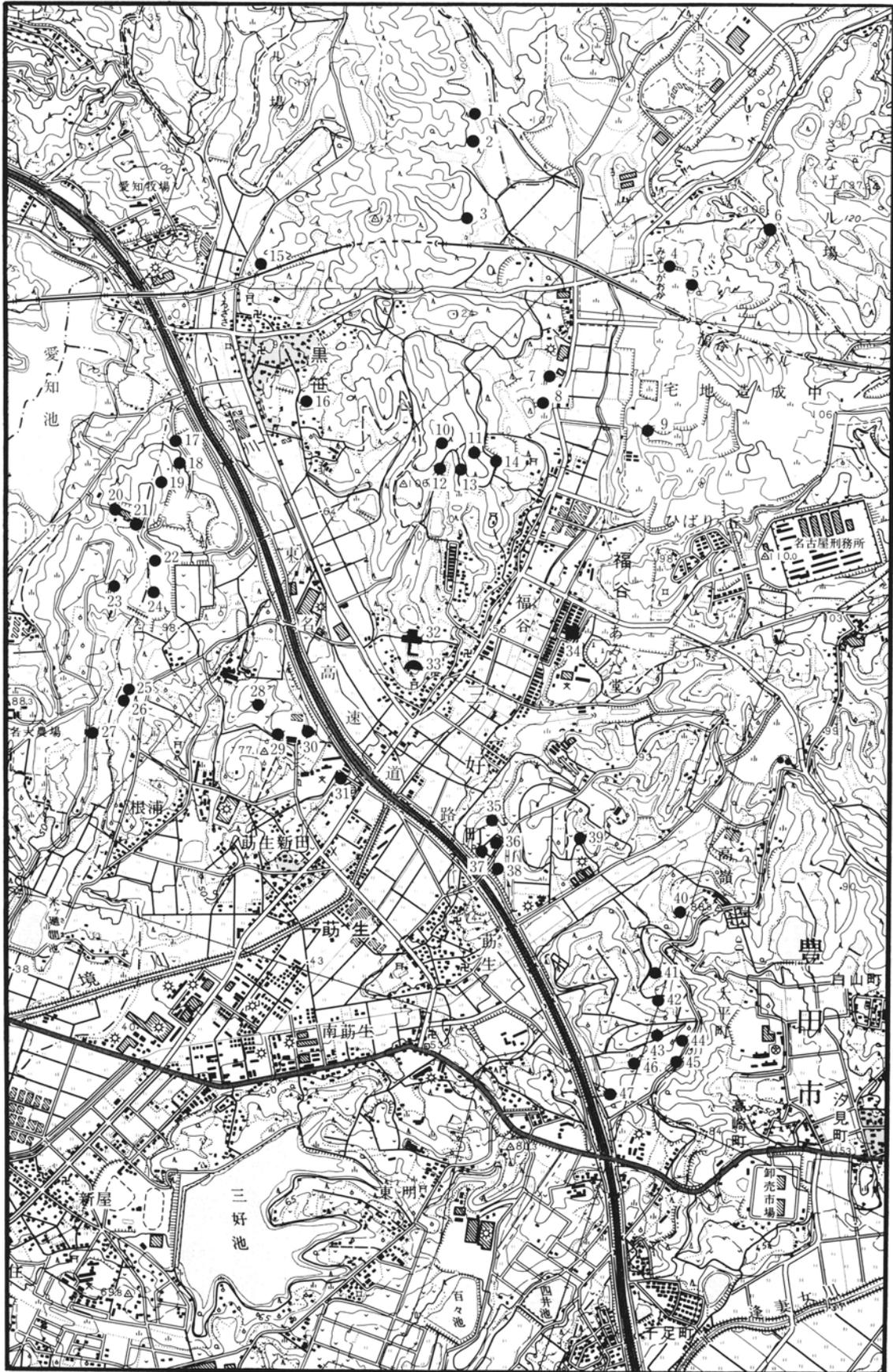
第4図 地質図 (1:800,000)

3. 周辺の遺跡

K-G-2号古窯跡の所在する三好町は、町域のほぼ全域が猿投山西南麓古窯跡群の黒笹地区に含まれており、これまでに140基ほどの古窯の存在が確認されている。内訳は、古代の須恵器・灰釉陶器窯約80基、中世の山茶椀窯約60基であり、古代から中世にかけて活発な窯業生産活動が展開されていたことが窺われる。三好町黒笹地区における築窯は、豊田市亀首町に所在する6世紀の上向イ田古窯跡群が最も古く、7世紀後半に位置づけられる三好町大字福谷字下り松所在のK-91号古窯跡（下り松瓦窯）がこれに続く。8世紀に入ると黒笹地区においても継続的な窯業生産が始まり、当センターが平成4年度に調査を実施した黒笹40号古窯跡、黒笹89号古窯跡がこれに続くものとして位置づけられている。そして、9世紀に入ると本格的な灰釉生産が開始され、黒笹の谷に面する黒笹89・90号古窯跡は、猿投窯編年のタイプ・サイトとなっている。さらに13世紀後葉に位置づけられるK-G-13号古窯跡（三好町大字福谷字下り松所在）まで、約600年間の長きに亘って生産が続いた。K-G-2号古窯跡も、こうした古代から中世へと続く猿投窯の中に位置づけられる。

遺跡一覧

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	K-G-3号古窯	17	K-90号古窯	33	市場古墳
2	K-G-2号古窯	18	K-115号古窯	34	伝阿弥陀堂遺跡
3	K-5号古窯	19	K-8号古窯	35	K-31号古窯
4	K-G-13号古窯	20	K-G-30号古窯	36	K-32号古窯
5	K-G-15号古窯	21	黒笹7号古窯	37	K-G-69号古窯
6	K-91号古窯	22	K-G-24号古窯	38	K-30号古窯
7	K-113号古窯	23	K-G-27号古窯	39	K-53号古窯
8	K-58号古窯	24	K-G-25号古窯	40	K-33号古窯
9	K-G-74号古窯	25	K-89号古窯	41	K-16号古窯
10	K-27号古窯	26	K-40号古窯	42	K-19号古窯
11	K-G-73号古窯	27	K-9号古窯	43	K-G-70号古窯
12	K-20号古窯	28	K-12号古窯	44	K-37号古窯
13	K-64号古窯	29	K-108号古窯	45	K-36号古窯
14	K-41号古窯	30	K-68号古窯	46	K-35号古窯
15	寺山古窯	31	坂上古窯	47	K-38号古窯
16	K-26号古窯	32	福谷城跡		



第5図 周辺遺跡位置図 (1 : 25,000)



第3節 調査の経過

1. 調査方法

調査に入る前、用地造成予定地内には2基以上の古窯跡があるという予測が立てられていたため、伐採範囲を5,000㎡とし、調査区を1,300㎡の範囲に設定した(遺跡地図によればK-G-2・K-G-3号古窯跡が存在するとされている)。分布調査の段階では、窯体1基(K-G-2号)は南東斜面に焼土の一部分が露呈していたために容易に確認ができたが、K-G-3号古窯跡については完全に滅失又は埋没していると考えられ、窯体の位置は全く不明であった。まず発掘調査に先立ち、調査区内の丘陵全体(1,300㎡)を対象に縮尺100分の1の現況地形測量図作成を行うこととした(第3図)。遺構検出については、調査区内に平面直角座標第Ⅶ系に基づいて5mグリッドを設定し、このグリッドに従って発掘調査を進めることとした。

2. 調査経過

調査は平成4年6月1日より開始した。樹木の伐採を6月12日に終了し、その後、砂防法に基づく沈砂池を2基設置するための工事に取りかかった。6月28日より地形測量を開始し、7月1日より重機を用いて、表土の除去を行った。7月6日より5m×5mのグリッドを設定し、いくつかのグリッドにトレンチを設定し、窯体の存在及び灰原の拡がり方の把握に努めた。その結果、窯1基は確認できたが、他の1基(K-G-3号古窯跡と考えられる)は浸食されて滅失していた。7月30日から窯体の検出に取りかかり、これと同時並行して前庭部の掘削を進めた。窯体部分の掘削は、土層確認用ベルトを残しながら掘削を行った。土層図作成後、ベルトをはずし完掘した。窯体の他に工房跡等の付属施設が検出されることが予想されたため、平坦部分を中心にトレンチを設定し、手掘りで掘削を行った。9月8日に航空測量を実施してから、窯体の細部実測に取りかかった。窯体については縮尺20分の1の平面図・横断図・縦断図を作成し、写真撮影終了後、床面確認のため断ち割り調査を実施した。その後、確認のために谷地形部分にトレンチを入れたところ、灰層が谷部分まで拡がっていることが判明した。さらに、その末端を追跡調査をしたところ、末端部分から谷底のり面が垂直に掘り下げられており、ほぼ5m×5mの方形土坑を検出できた。平坦な床面の西側部分には赤褐色粘土が2～3cmの厚さで塗られていた。この遺構を検出したことによって、終了予定が1ヶ月程伸びた。10月21日実測終了後、富山大学広岡公夫教授らによる熱残留磁気測定資料の採取を実施した。10月30日、調査すべてを終了し、遺物・道具等の撤去を行った。

3. 成果の概要

窯体1基を良好な状態で検出することができた。窯内遺物については、焼成室内において崩落した天井部に押しつぶされた格好で、焚き口右手方向から山茶碗や焼台が数多く出土した。窯体断ち割り調査の結果、2度操業された痕跡が見られた。前庭部では2基の窯前ピットを検出した。粘土溜めピット1基も検出できた。さらに、特筆すべき成果として、粘土を水に浸して貯蔵・精製した施設と思われるSX01を検出したことを挙げるができる。今後、生産遺跡を考える上での重要な資料を提供できたと思われる。

4. 調査日誌抄

- 6月1日(月) 立木伐採開始 (5,000m²)
- 6月8日(月) 抜根開始
- 6月16日(火) 沈砂池 (1号沈砂池・2号沈砂池) 設置開始
- 6月23日(火) 基準杭設置
- 6月25日(木) 現況地形測量図作成開始 (30日まで)
- 7月1日(水) 発掘調査開始
- 8月5日(水) 窯体調査開始
- 9月8日(火) 航空測量
- 9月22日(火) 谷地形部分に灰層の一部を確認
- 9月25日(金) 谷地形部分に人為的な掘り込みを確認
- 10月1日(木) 富山大学広岡教授らによる熱残留磁気調査
- 10月9日(金) 補足調査開始
- 10月14日(水) 粘土溜め土坑など測図開始
- 10月21日(水) 埋め戻し開始
- 10月28日(水) 埋め戻し完了
- 10月29日(木) 道具等撤去
- 10月30日(金) 埋め戻し完了の写真を撮る

参考・引用文献

- 『三本松古窯跡群発掘調査報告書』1985 三好町立歴史民俗資料館文化財調査報告No.2
- 『黒笹第11号窯発掘調査報告書』1992 三好町立歴史民俗資料館文化財調査報告No.5
- 『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告』1980 愛知県教育委員会



第6図 作業風景

第2章 遺構

第1節 窯体

1. 概要

「K-G-2」、「K-G-3」と2基存在しているように記録（『猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告（I）』愛知県教育委員会 1980）されているが、今回の調査では1基しか確認できなかった。確認できたものは、「K-G-2号窯跡」と断定できる遺構である。窯体、灰原、土坑、粘土溜、ピット、溝などを検出した。以下、各遺構について概要を記す。

2. 窯体及び灰原

(1) 窯体（窯体は標高97.5m～100.5mの位置に築かれている）

・煙道部

煙道部は地形の自然浸食により全て削平されている状態であった。

・焼成部

焼成部は、中軸上で残存長4.5mを測る。床面での平面形は、焼成部から幅を拡げ始め、分焰柱上端から0.5m上方で最大幅となり、そこから徐々に幅を狭めて煙道部へと至る。各部の幅は、分焰柱付近で2.2m、最大幅は3.1mを測る。床面の傾斜は、分焰柱上端から1m上方までが約15°、それ以上の部分では、約23°を測る。窯体主軸はS-74°-Wを示す。床面は、よく焼け締まった青灰色を呈する。天井部はすべて崩落していた。窯壁の遺存状態は悪く、南壁部分は比較的良好な状態で残存していたが、北壁はほとんど剥落していた。窯壁の補修は、床から45°の角度で内湾して立ち上がり、そのまま天井部へと緩やかにつながっていく。窯体完掘後の断ち割り調査により、第一次床面と第二次床面を確認できた。

・分焰柱

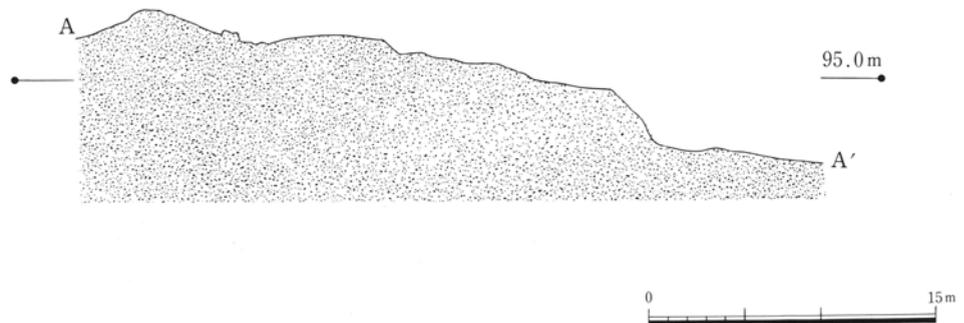
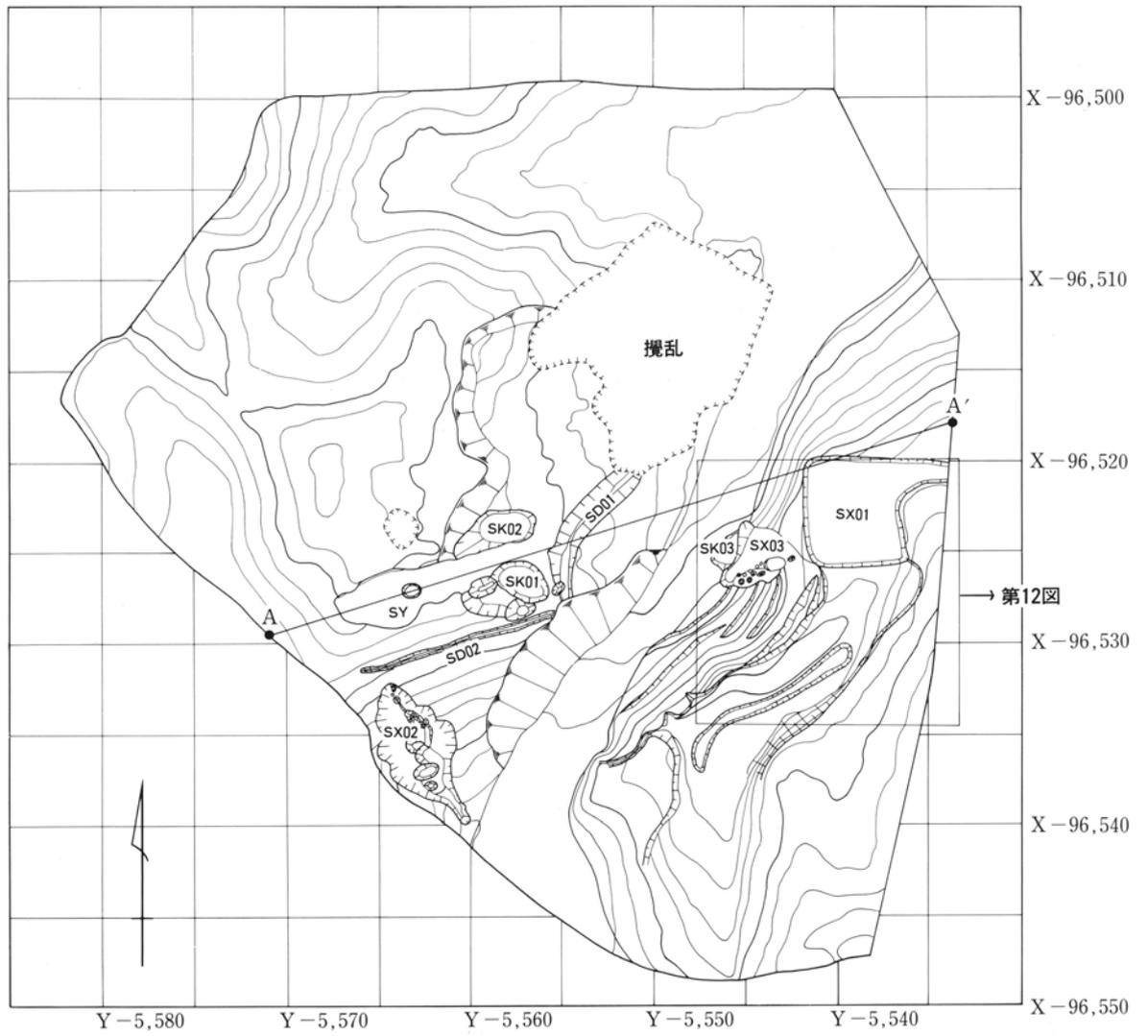
分焰柱の平面形は、基底部で長軸0.9m、短軸0.75mの不整形円形を呈する。残存高は0.54mのみであった。分焰柱は補修されており、最初は、南と北に径0.05mの杭を土止めとして利用し、その周りに灰白色の砂礫混じりの粘質土を貼って造っている。2度目は、最初の分焰柱の周りに重ね焼きした山茶碗を伏せた状態で柱状に並べ、粘質土を貼って補強している。

・燃焼部

燃焼部は、主軸上での長さ2mを測る。天井部分は残存していない。分焰柱部分での床面の幅は2.2mであるが、そこからやや幅を狭めながら焚き口付近に至る。焚き口では、幅1mを測る。焚き口付近では、床面の傾斜はほぼ水平となる。床面の一部には、炭化物が厚さ0.09m程度堆積していた。床は、地山面を直接利用しており、粘土の貼りつけは認められなかった。

・前庭部

焚き口の前方を平坦に削平して前庭部としている。前庭部の規模は、東西4.9m、南北5.4mで、等高線に沿って横長に拡がっている。窯体に向かって右側の方が広い形状を呈している。



第7図 遺構配置図 (1:400)

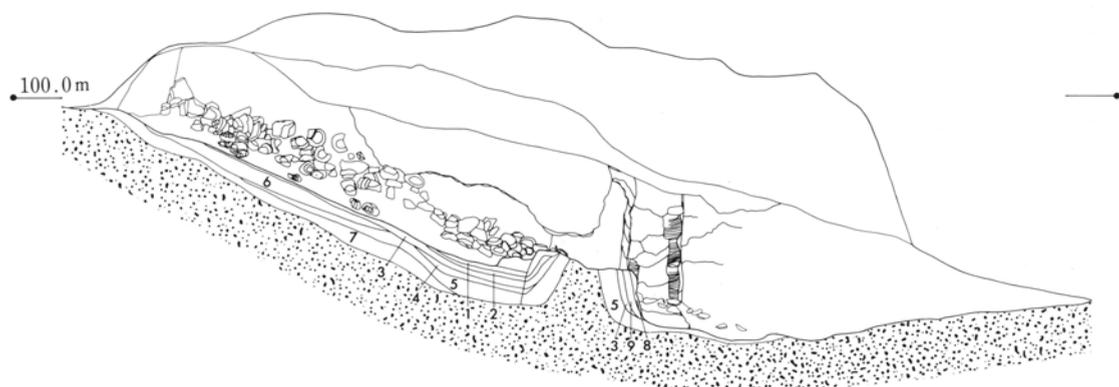
床はほぼ水平で、焚き口の左右2カ所に土坑が見られた。また、前庭部南側より北東の攪乱部分に向かって走る溝が1条検出された。さらに、窯体と平行して走る溝も1条検出された。それぞれ、焚き口南側の土坑をSK01、前庭部北側の土坑をSK02とした。溝は、前庭部南側より出る溝をSD01、窯体と平行する溝をSD02とした。

SK01は、長軸3.3m、短軸2.1mのやや長方形に近い形を呈する。床面からの深さは0.4m程度である。埋土中には、炭化物や山茶碗等の遺物がかなりの量含まれていた。出土状況から見て、最終焼成時の不良品が一括廃棄されたものと見られる。SK02は、長軸4.9m、短軸2.2mの不整楕円形を呈する。床面からの深さは0.48m程度で、埋土中には炭化物や山茶碗等が多量に含まれていた。SK01と同様に最終焼成時の不良品が一括廃棄されたものと思われる。

SD01は、残存長9m、幅0.3m、深さ0.15mを測る。排水溝と見られるが、両端とも消失して全形は窺えない。SD02は、全長11m、幅0.2m、深さ0.1mを測る。98.0mの等高線にほぼ沿う形で掘られている。この溝の南側から、平行して径0.15m程のピットが0.8m間隔で16基掘られているのが検出された。時期不明であるが、土留用のピット列と排水溝と考えられる。

(2) 灰原

灰原は、前庭部を上限とし、下限はSX01の谷部分まで広がっていた。また、左右の拡がりにはSK01とSK02まであり、従ってその拡がりには上下16m×左右8mを測る。また、標高98.0m～89.75mの範囲に及んでいる。灰原の堆積は、最も厚い所で0.8m程度であった。



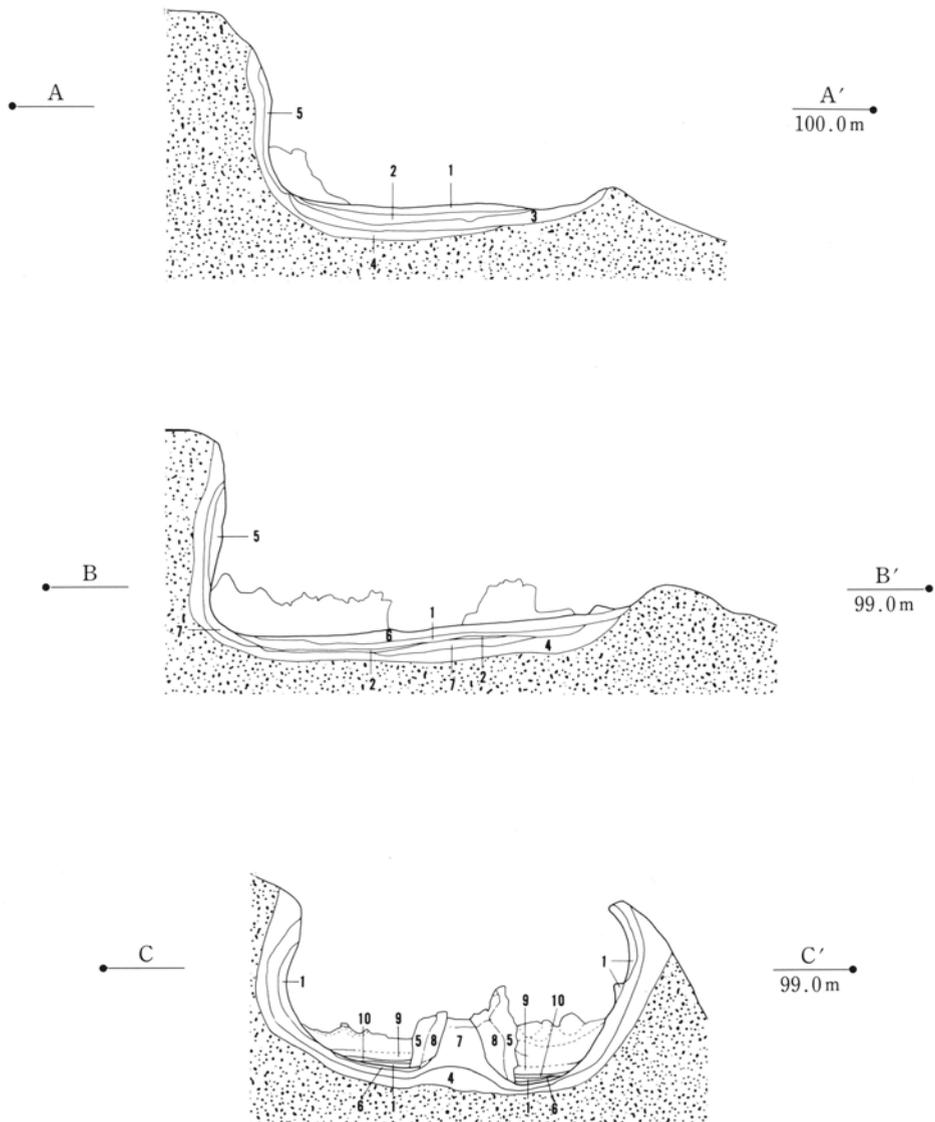
1	青灰色砂	4	明黄色砂	7	灰色砂
2	黄褐色砂	5	赤褐色砂	8	青灰色粘土
3	黒色炭化物	6	灰褐色砂	9	灰白色粘土



第8図 窯体見通し及び床面下埋土セクション図 (1:60)



第9図 窯体実測図 (1:60)



1	黑色炭化物	4	赤褐色砂	7	明黄色砂	10	青灰色粘土
2	灰褐色砂	5	青灰色粘土(窯壁)	8	青灰黑色粘土		
3	灰色砂	6	青灰色砂	9	炭		



第10図 窯体断面図 (1:60)

第2節 窯前施設

1. 概要

窯前施設として、粘土溜土坑 (SK03)、谷地形を利用した粘土を精製して貯蔵するための施設 (SX01)、階段遺構 (SX03) 7段のステップを検出することができた。以下それぞれの遺構について概要を記す。

2. 窯前施設

(1) 粘土溜土坑 (SK03)

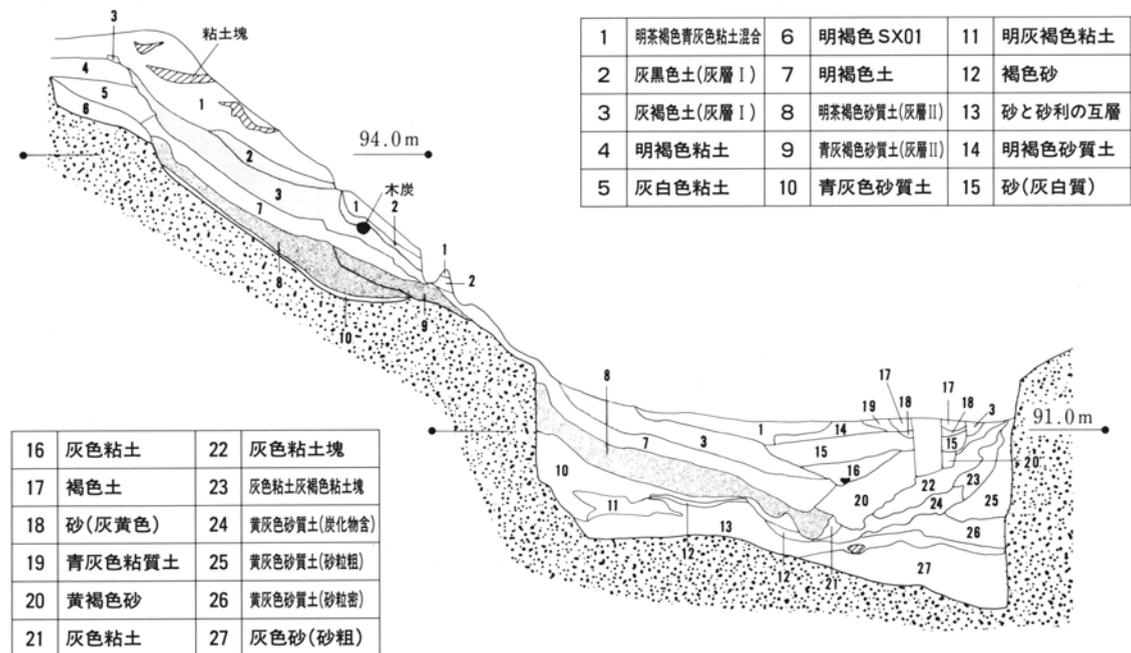
窯体から13m下位で検出した長辺2.1m、短辺0.9m、深さ0.7mの土坑である。灰白色粘土層の下に厚さ0.05m程の砂層があり、底面には薄い小礫層が確認された。粒径の大きい順に堆積していることから、粘土溜土坑として設置されたと考えられる。

(2) SX01

SX01はSK03の東側下方の谷底で検出した一辺5mの大規模な方形土坑である。床面は平坦で、径0.6m程の灰白色の粘土塊がいくつも見つかった。さらに、平坦な床面の西側部分には赤褐色粘土が2～3cmの厚さで貼られていた。窯体近くの谷の崖面に認められる厚さ約5cmの粘土層から粘土を採掘し、貯蔵しておくために造られた施設として機能していたものと思われる。

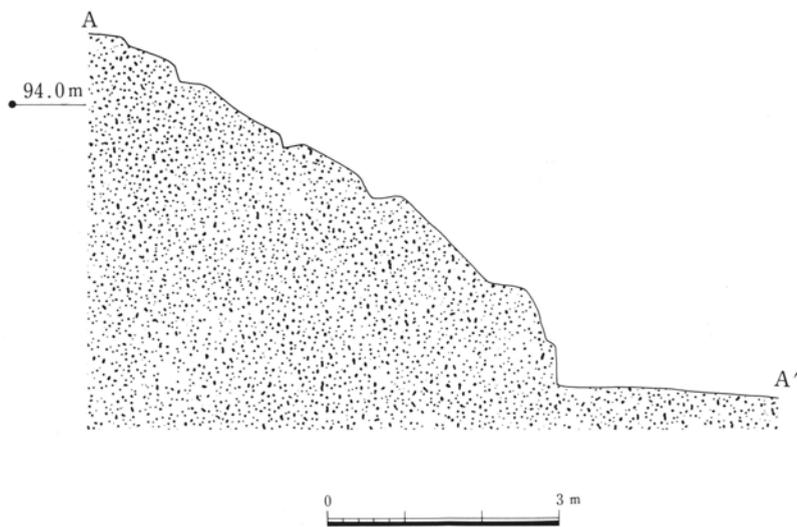
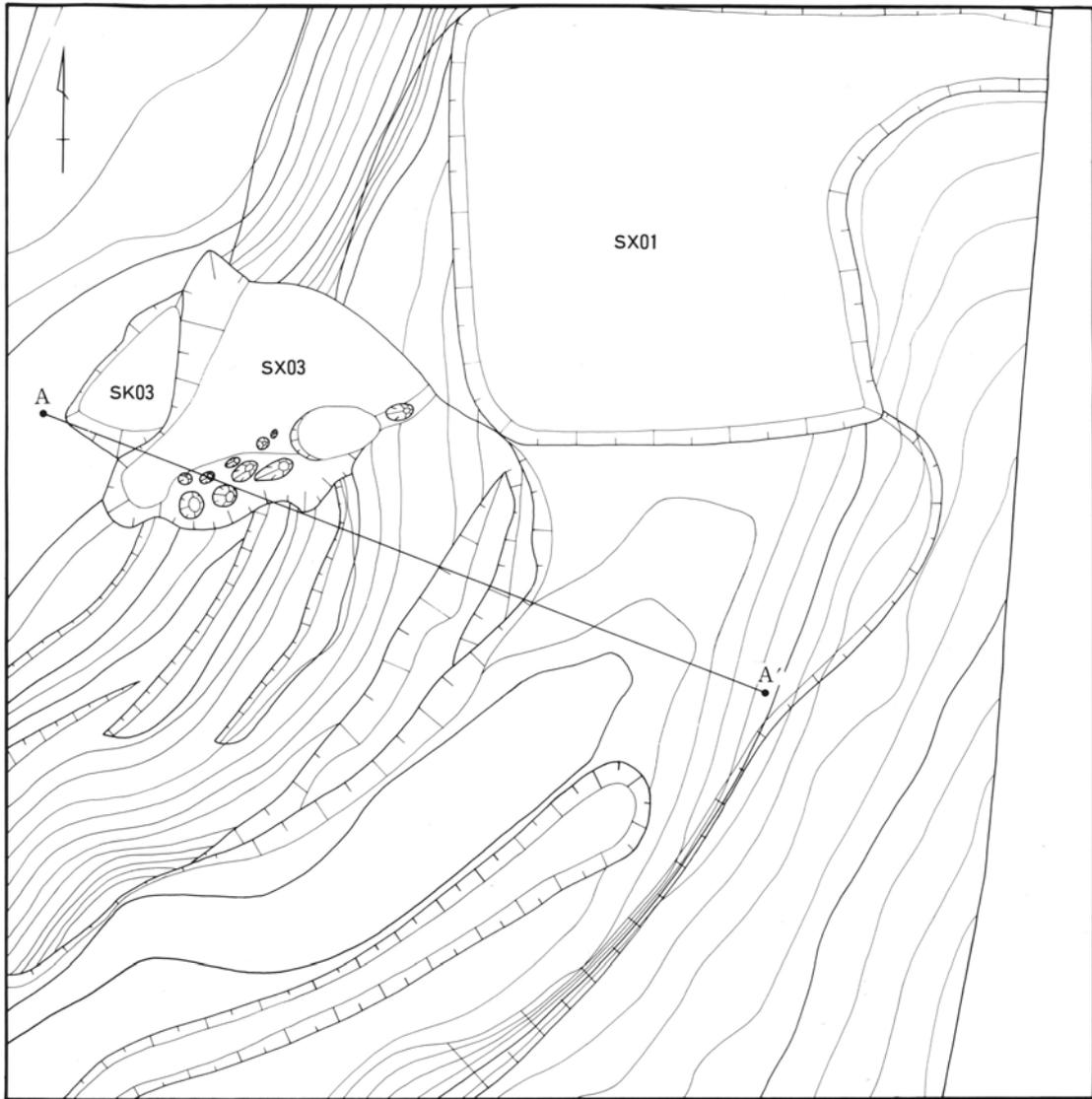
(3) 階段遺構 (SX03)

最大幅3.5mの三角形状を呈した窪みと7段のステップからなる。さらに、そこから南へ斜面上をほぼ水平に延びる幅0.5mの細長いテラスを5段確認することができた。これらの施設はSX01内に蓄えた粘土を、SK03まで運びあげるためのものと考えられる。SX01・SK03と関連する施設と捉えてよいと思われる。



第11図 谷部分土層セクション図 (1:80)





第12図 SX01・SX03・SK03平面図及び断面図 (1:100)

第3章 遺物

第1節 概要

1.種類

遺物は山茶椀(類)に限定され、その大半は窯体内及び灰原から出土した。遺物量としては、27ℓ入コンテナ約300箱を数えた。山茶椀(類)は古代猿投窯を中心とした灰釉陶器生産の系譜を引く無釉の陶器で、瓷器系陶器第II類に分類されるものである。

器種としては、椀、皿がほとんどで、他に陶丸、用途不明の特殊遺物が、僅かに出土した。

2.椀・皿の形態分類

胎土から見れば、大きく次の2群に分けることができる。

I群 胎土が粗で砂粒や小礫を多く含み、長石

分の吹き出しが多く見られるもの。

II群 胎土に若干の砂粒や小礫が含まれるが、泥質で長石分の吹き出しが余り見られず、濃い灰色の色調を持つもの。

I、II群とも、東海地方南部系の山茶椀に分類される。本窯出土の椀・皿は、I群の胎土を持つものがほとんどで、II群は、破片を含め数点にすぎない。

椀

I、II群の胎土の違いに加え、さらに形態に基づいて細分化を行った。

椀A 比較的薄い体部を持ち、特に底部は6mm前後、またはそれ以下。

A1 体部が直線的で、稜線が目で追える程ははっきりしている。口縁端部にかけての外反も小さい。

A2 体部に丸みがあり、ナデ調整も丹念である。口縁端部にかけての外反が明瞭となる。

椀B 比較的厚い体部を持ち、特に底部は10mm以上のものもある。

B1 体部が直線的で、稜線がはっきりしている。

B2 体部に丸みがあり、ナデ調整も丹念であるが、口縁端部にかけての外反は小さい。

分類(1) 椀

胎土	厚さ	体部	様 高 指 数	口縁	窯内	前庭部	SK	灰原	計			
I	A	1	面	7	3		1	11				
			丸		3			7	10	22		
			他					1	1			
		面	4	4	1	3	12					
		丸	1	3			2	6	18	62		
		他						0				
		面	6	7			1	14				
		丸	5	2			1	8	22			
		他						0				
		面	6	5	14	4	29			47		
	丸	2	4	6	12							
	他	3			3	6						
	面		6	1	3	10						
	丸	2	4	2	3	11			23	85		
	他		1	1		2						
	面		2	3	1	1	7					
丸	3	3			6			15				
他	1	1			2							
B	1	面						0				
		丸					0		0			
		他					0					
	面					0						
	丸					0			0			
	他					0						
	面					0						
	丸					0			0			
	他					0						
	面			1		1	2					
丸					1	1	4					
他			1		1							
面					0							
丸					0			1				
他					1	1						
面			3	1		4						
丸					0			4				
他					0							
II	B	1	32.9	面				1	1	1	1	
計					40	52	26	39	157			

分類(2) 皿

胎土	高台	口縁	窯内	前庭部	SK	SD	灰原	計	
I	A	1	30	2	1		14	47	53
		2	3			1	2	6	
	B	1	11	4				5	20
		2						1	1
計			44	6	1	1	22	74	

第1表 椀・皿分類集計表

皿

皿は、胎土の違いに加え、以下の4類型に分類した。

皿A 無高台のもの。または糸切り後、底部を調整したのみ。

A 1 口縁部が厚く、その端部に面取りがみられる。

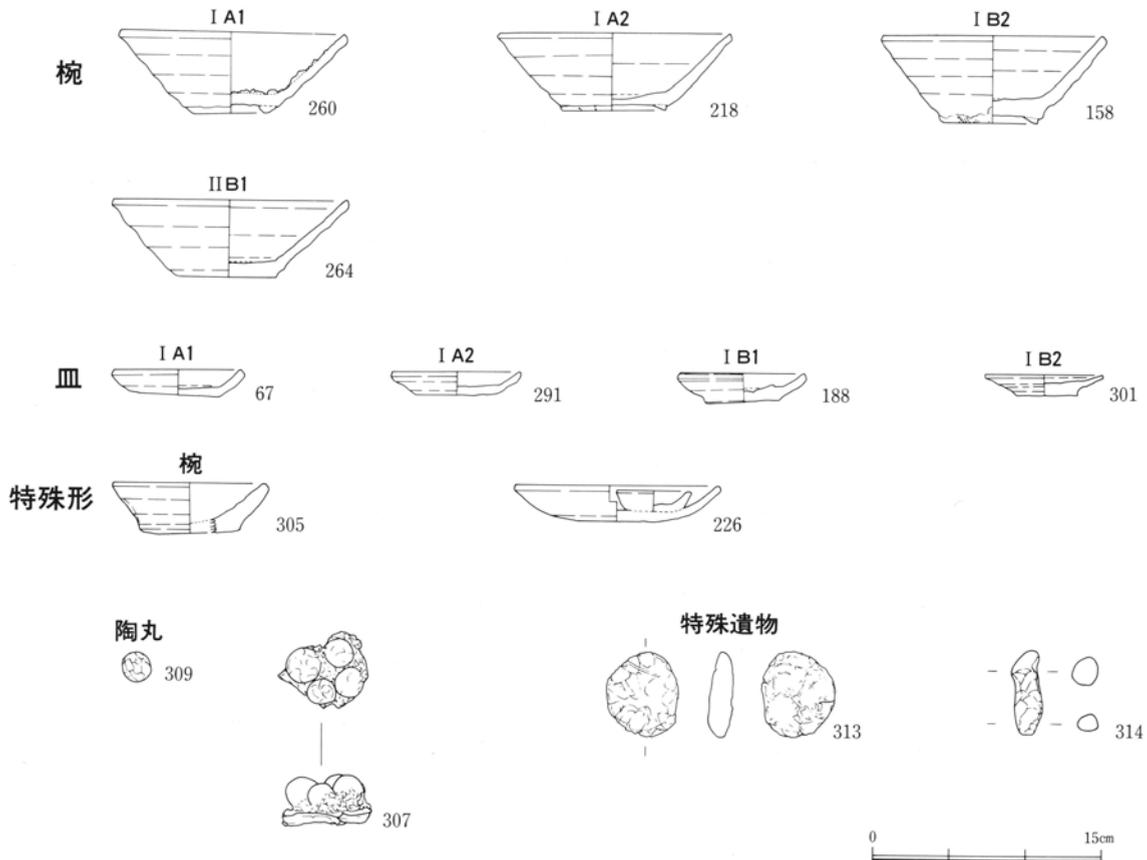
A 2 口縁部が薄く、その端部の調整が雑である。

皿B 無高台で、底部が突出する形態。

B 1 口縁部が厚く、その端部に面取りがみられる。

B 2 口縁部が薄く、その端部の調整が雑である。

椀については、それぞれの分類したタイプの傾向を示すため、径高指数と口縁端部の調整に従って集計し、第1表に示した。径高指数の36.0未満、36.0以上~38.0未満、38.0以上という3グループは、窯内出土の椀の径高指数の分布に加え、前庭部出土のものが38.0~40.0に集中すること、SK01のものモードが34.0~36.0に来ることから設定したものである(第14図)。口縁は、面取りのもの、丸く調整してあるもの、その他、鋭角につまみ上げたような形態のものや体部が薄いために調整跡が明瞭でないものを含む。



第13図 器種分類 (1:5)

第2節 出土遺物

1. 窯体内出土遺物（図版3～7）

窯体内では、焼成室・燃焼室からまとまって出土している。本窯では、2回操業した跡が見られ、窯体内の遺物は、出土状況から見て殆どが、最終焼成時のものと考えられる。

出土遺物には、椀・皿の他、焼台、陶丸、用途不明の特殊遺物がある。窯体内の遺物総点数約1,285点の内、器形の50%以上が残っている椀と皿は約150点出土している。

椀は、焼けひずみにより殆どが変形している。口径の大きさは、13.0cm～15.0cmに集中し、特に14.0cmのものが多い。器高は、4.5cm～5.9cmで、5.0cmのものが多い。径高指数では、33.0～34.0と38.0～39.0に2つのモードが見られる。底部の厚さは、4mm～6mm（内底面に押圧痕があるものを除く）、口縁は、4mm～5mmのものが多い。容積は、320～330cm³のものが多い。全て付け高台であり、形状は基本的には三角高台であるが、潰れた形のものも多い。また、靱跡が残っているものが多い点も特徴の一つである。形態分類では、IA1とIA2のみで、両者の比率は、10：7の割合である。内底面に押圧痕が見られるものが約66%あり、中には外底面がそれに合わせて湾曲したものも数点ある。外底面には、回転糸切り痕の様にも見える半円形の条線と、板状のもので整形した痕跡が見られる。ロクロ回転は、砂粒の動きから見て、全て右回転であり、高台付近には、体部と逆回転の砂粒の動きも見られる。自然釉のため融着した重ね焼も数点見つかかり、最高枚数は、焼成室出土の17枚であった。また、火熱のため、重ね焼の上の個体ほど、口径が広がる傾向を示している。

皿は、椀と同じ様に、稜線がはっきりし、底部の厚さが5mm前後、口縁端部も5mm前後のものが主体を占める。口縁端部を面取りしたものが約93%を占め、分類上では、IA1が約68%を占める。外底面の調整等は、椀と同様である。

焼台（図版5・6）の実測図は、椀を受ける部分を水平にして、上面図－正面図－断面図2により表現したものである。断面図のうち、縦割りの断面図を基に、床面に接する底径と斜辺の比高差を出し、角度（ $\sin\theta$ ）を加えたものが、図版5・6下方の表である。角度は18°～34°の範囲にあり、平均角度は25°である。また正面には、右手の拳を押しつけた押圧痕が明瞭に見られる。陶丸は、燃焼室から4個体出土しており、全て手捏ねにより整形されている。胎土には長石などの砂粒が殆どなく、色調も白色である。用途不明の特殊遺物が燃焼室から2個体出土している。手捏ねによる整形であり、胎土も陶丸と同じである。

2. 前庭部出土遺物（図版7～10）

窯前施設である前庭部からは、椀・皿・焼台が出土している。器形の50%以上が残っている椀と皿は約300点数える。

椀は、窯内出土のものより変形が少なく、口径14.0cm、器高5.0cm前後にモードが来るが、径高指数は、38.0～40.0に集中している。容積は、窯内出土例とほぼ同じく380～350cm³のものが多い。底部の厚さは、6mm前後のものから8mm位までである。中には、10mm以上の厚みを持つものも僅かながら出土している。口縁端部は、5～6mmで、外反が明瞭となる。形態分類では、IA1、IA2、IB2とに分かれ、IA1とIA2で90%を占める。

皿は窯内に比べ出土点数が少ないが、B類形態の割合が多くなる。焼台は、数点出土している。窯内出土のものと同様に、椀を受ける部分に十分な火熱が届かず、生焼けとなっている。特に194には、植物繊維や炭化せずに残った藁の痕跡が見られる。

①SK01出土遺物 前庭部に掘られたSK01からは、椀・皿等器形の残存率50%以上のものが、約170点出土している。椀は、変形が比較的少なく、ナデ調整も丁寧である。口径は14.0cm～15.0cm、器高は5.0～5.3cmのものが多くなり、窯体内の椀よりも、やや大振りとなる。それに伴い容積も360～370cm³のものが多くなる。底部の厚さは、4mm～6mm（内底面に指頭による押圧痕のあるものを除く）のものが多く、中には10mmを越えるものも数点ある。口縁端部は4～5mmの厚さを持ち、外反が比較的明瞭となる。径高指数は、34.0～36.0に集中している。形態分類では、IA2にまとめられるが、IA1とIB2の椀も僅かに見られる。椀の胎土は、窯体内出土のものに比べ砂粒が少なく、長石分の吹き出しも少なくなる。重ね焼資料のうちに、今回出土した最も多い枚数の26枚(224)を数えるものが1点確認された。さらに、口径13.1cmのやや大振りの小皿の中にミニチュアの皿が入れている、いわゆる子持ち小皿(226)が1点出土している。

②SK02・03、SD01・02出土遺物 前庭部のその他の土坑から、椀・皿・焼台・陶丸が出土している。SK02からは椀・皿の器形残存率50%のものが約20点、SK03からは数点、SD01、SD02からは器形残存率50%以上のものが、それぞれ3点と1点出土した。

3. 灰原出土遺物（図版11～12）

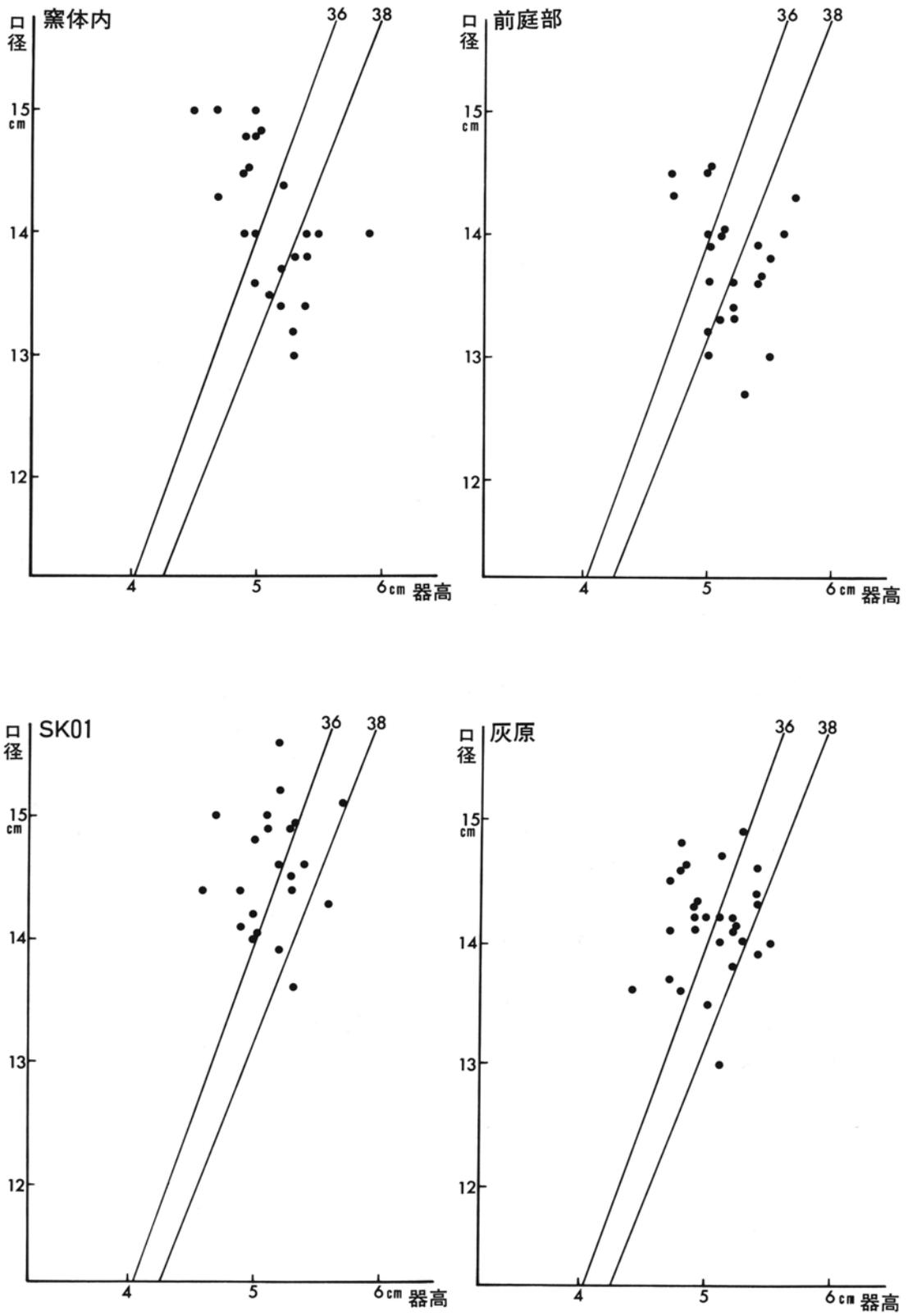
前庭部を除く窯前から谷部分までの灰原から、器形の残存率50%以上の椀・皿が約230点出土している。口径は、14.0～14.4cm、器高は、4.7～5.4cmに集中している。径高指数は、32.0～38.0に分布し、容積も270～360cm³辺りに集中している。形態分類では、IA1、IA2、IB2、IIB1の4種があり、92%をIA1、IA2が占める。IIB1の1点(264)は、無高台であり、本古窯跡では唯一のものである。焼台が付いた1点(281)は、全面に自然釉が掛り、火熱のため変形が著しい。また厚手で小振りの椀(305)は、口径4.9cm、容積約20cm³を測り、1点のみ出土の特殊例である。皿も多数出土しており、底部が突出するB類のものが約30%を占める。陶丸が34個まとめて椀に入れられた状態で出土していた。306は、出土状況を復元したものである。307、308、309の様に、椀の内底面に付着した状態で出土したものもあるが、306は一度焼成したものを集めて椀に入れた可能性も考えられる。椀に入れて焼成した例では、瀬戸市南山口町の南山9-B号窯で1点見つ⁽¹⁾かっている。その他の遺物としては、焼台が数点、用途不明な特殊遺物が3点(313、314、315)見つ⁽¹⁾かっている。全て手捏ねで、胎土も砂粒・長石分の吹き出しが少なく、色調も白色である。K-G-2号古窯跡の操業年代に一括できない遺物として、三叉トチン(316)が出土している。

以上から、K-G-2号古窯跡⁽²⁾の遺物は、藤澤編年の第7形式に並行するものと考えられる。

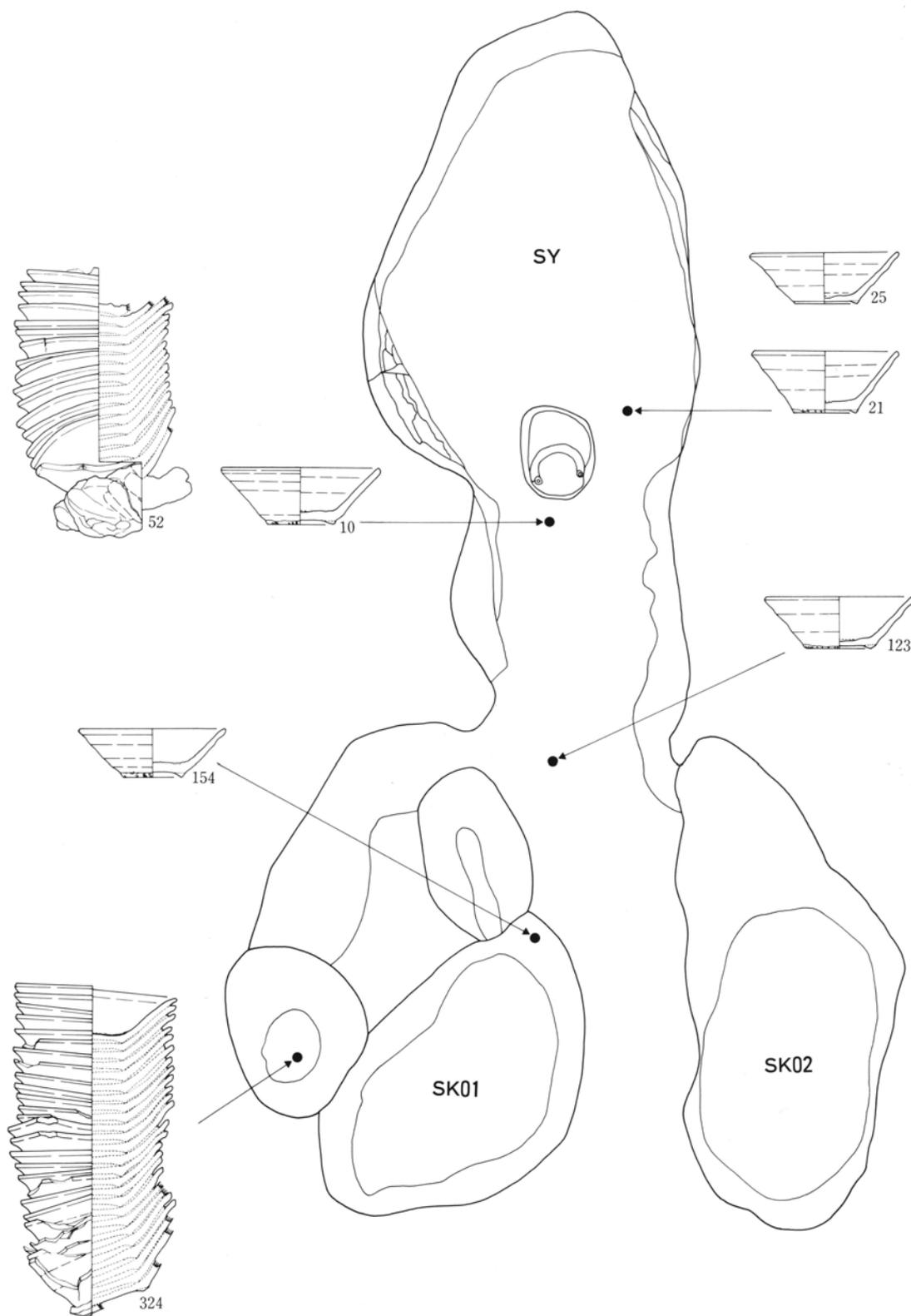
註

(1) 『南山8号・9-A～D号窯発掘調査報告』 1991 愛知県陶磁資料館

(2) 藤澤良祐 「瀬戸古窯址群」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要I』 1982 瀬戸市歴史民俗資料館



第14図 碗の遺構別器高一口径法量分布図



第15図 SY・SK01主要遺物出土状況 (1:6)

第4章 科学分析

黒笹G 2号古窯跡の考古地磁気測定

富山大学理学部地球科学教室

広岡公夫、黒原秀夫、田中彰子

1. はじめに

古窯跡の窯体を造っている土の中に含まれている磁性鉱物は、焼成中に、その時に作用している地球磁場（地磁気）によって磁化され、地磁気の方向と一致した向きの熱残留磁化を獲得する。この磁化は非常に安定で、再び加熱されることがなければ、何万年経ってもその磁化方向と強度を保ち続ける。地球磁場の方向は、偏角 (Declination)、伏角 (Inclination) とともに、数十年、百年という年数の間に少しずつ変わっていく永年変化をしているので、窯の使用された年代が異なれば、残留磁化の方向も異なる。即ち、使用された年代に特有の磁化方向を持っており、その方向の違いを利用すれば、焼土遺構の年代を推定することが出来る。このような方法を考古地磁気年代推定法という。

日本では、弥生時代中期中頃以降の西南日本各地の遺跡に残る焼土の考古地磁気測定によって、過去2000年間にわたる考古地磁気永年変化が明らかにされており (Hirooka, 1971; 広岡, 1977)、測定によって得た窯跡の磁化方向をこの考古地磁気永年変化曲線と照合することによって、古窯跡など焼土遺構の年代推定が可能となっている。愛知県内では、これまでに、多くの古窯跡について考古地磁気測定の結果が報告されている。例えば、知多半島の福住古窯跡群 (広岡・藤沢, 1978) や上芳池古窯跡群 (広岡・吉村, 1990)、大砂古窯跡群 (広岡・黒原, 1993b)、名古屋市の鳴海古窯跡群 (広岡他, 1986; 広岡・黒原, 1993a)、猿投山西麓の古窯跡群 (Hirooka, 1971; 広岡, 1979; 広岡・佐々木, 1984; 広岡他, 1988)、瀬戸市内の古窯跡 (広岡, 1981; 広岡・岡田, 1986; 広岡他, 1990; 広岡他, 1991a, b; 広岡他, 1992a, b; 広岡他, 1993 a, b, c, d) などがある。

地球磁場の変動の様子や残留磁化獲得の機構、試料の採取法・測定法、測定結果の統計処理などの詳細については、広岡他 (印刷中) の報告に詳しく述べたので、それを参照されたい。

2. 試料の採取と磁化測定の結果

黒笹G 2号古窯では、窯の床面から石膏で固めた定方位試料を12個採取した。この窯の後部は削られて無くなっていたので、試料は分焰柱の後ろ、焼成室の前半部から得た。試料番号はCT1931~1942である。

まず、これらの試料の自然残留磁化 (Natural Remanent Magnetization、略してNRM) を測定して、磁化方向のまとめり具合や磁化強度を知った後、不安定な磁化成分を除去するために、50Oeで交流消磁を行い、再度、磁化測定を行う。NRMの測定結果は、第2表に、50Oe消磁後の結果は第3表に示されている。NRMおよび50Oe消磁後ともに、磁化方向が他の試料から外れた4個の試料 (CT1932, 1933, 1936, 1939)を除けば、偏角はNRMでは西偏 6.3° ~東偏 6.8° 、50Oe消磁後では西偏 7.0° ~東偏 7.2° となり、伏角はそれぞれ 53.8° ~ 63.2° 、 54.5° ~ 63.5° の範囲にあり、割合によくまとまった磁化方向を

示している。これらの磁化方向のデータから、フィッシャーの統計法 (Fisher, 1953) を用いて計算した平均磁化方向 (平均偏角および、平均伏角) およびフィッシャーの信頼角、フィッシャーの精度係数は第4表のようになる。磁化方向が外れている上記の2個の試料は、この平均磁化方向を求める統計計算の際には除外してある。交流消磁を行った後の方が、磁化方向のまとまりは若干よくなる。フィッシャーの95%レベルの信頼角 (α_{95}) については、消磁の前は2.87°であったものが、消磁後には2.80°になり、少しではあるが改善が認められる。フィッシャーの精度係数 (K) も372.8から391.9へと増加している。しかし、消磁によっても、平均偏角、平均伏角の変化は殆ど認められない。 α_{95} の値は大きくなく、Kも小さくはない値をとっているため、磁化方向のまとまりはかなりよい。

磁化方向のまとまりがよい500e消磁後の結果を、考古地磁気データとして採用する。

3. 考古地磁気推定年代

第4表の考古地磁気データのうち、消磁後の結果を、西南日本の考古地磁気永年変化曲線 (広岡, 1977) に記入したのが第16図である。白丸が50年毎の地磁気方向を表している。今回得られた黒笹G2号古窯跡の平均磁化方向は黒丸印で表わされており、黒丸を囲む円が α_{95} の範囲を示している。永年変化曲線の、黒丸に最も近い部分の年代が、考古地磁気学的に推定される年代である。推定年代値の年代編は、 α_{95} の円が覆う永年変化曲線の線分の長さで与えられる。しかし、今回の結果では、平均磁化方向の伏角が深く、永年変化曲線の上に乗っていない。したがって、推定年代値の確かさは少し落ちる。

第16図の考古地磁気永年変化曲線が正しく過去の地磁気の変化を表しているという前提で、この図から黒笹G2号古窯跡の考古地磁気年代を推定すると、

A.D. 1210年 ± 35年

となろう。

東海地方の中世の考古地磁気データには、伏角が深くて上述の西南日本の考古地磁気永年変化曲線から外れるものがよく見られる。これは当時の地磁気の地方差を反映しているものと考えられる。このような地磁気地域差は、古代では北陸地方と畿内では伏角が5°近く違っているという事実が指摘されており (広岡, 1989)、江戸初期では、九州北部と近畿・東海・関東で偏角が5°ほど異なることが報告されている (広岡, 1993) ので、中世も有り得る現象で、今後詳しく検討し、解明しなければならない課題である。

引用文献

- Fisher, R. A. (1953) Dispersion on a sphere, Proc. Roy. Soc. London, A, vol. 217, 295-305.
- Hirooka, K. (1971) Archaeomagnetic study for the past 2,000 years in southwest Japan, Mem. Fac. Sci., Kyoto Univ., Ser. Geol. Mineral., vol. 38, 167-207.
- 広岡公夫 (1977) 考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向、第四紀研究、vol. 15, 200-203.
- 広岡公夫 (1979) 熱残留磁気による古窯の年代、「世界陶磁全集」第2巻 (日本古代)、檜崎彰一編、小学館、293-295.
- 広岡公夫 (1981) 考古地磁気学と年代決定、「瀬戸市史、陶磁史編2」、瀬戸市史編纂委員会、335-339.
- 広岡公夫 (1989) 古代手工業生産遺跡の自然科学的考察、—考古地磁気学、古地磁気学の立場から—、「北陸の古代手工業生産」、北陸古代手工業生産史研究会編、真陽社、225-284.
- 広岡公夫 (1993) 年代推定的手法、季刊考古学 (特集・須恵器の編年とその時代)、第42号、75-77.

- 広岡公夫、藤沢真澄（1978）福住古窯址群の考古地磁気学的研究、「福住古窯址群」、新巽ヶ丘団地関係遺跡発掘調査報告、新巽ヶ丘団地関係遺跡発掘調査団、105-108.
- 広岡公夫、佐々木政幸（1984）岩崎24・25・26号窯の考古地磁気測定、「愛知県日進町、株山地区埋蔵文化財発掘調査報告書」、日進町教育委員会、127-131.
- 広岡公夫、岡田宗（1986）小金山、月山窯の考古地磁気測定、「瀬戸市歴史民俗資料館紀要V」、瀬戸市歴史民俗資料館、293-299.
- 広岡公夫、吉村勝之（1990）考古地磁気測定、「上芳池古窯址群調査報告書」、愛知県知多郡阿久比町教育委員会、45-50.
- 広岡公夫、黒原秀夫（1993a）荒池須恵器窯跡の考古地磁気測定、「NN288号窯・NN289号窯発掘調査報告書」、名古屋市教育委員会、82-87.
- 広岡公夫、黒原秀夫（1993b）考古地磁気測定、「大砂古窯址群調査報告」、愛知県知多郡阿久比町教育委員会、69-79.
- 広岡公夫、山本恭子、岡田宗（1986）NN286古窯の考古地磁気測定、「NN-286号古窯跡発掘調査報告書」、名古屋市教育委員会、7-11.
- 広岡公夫、坂本道恵、吉村勝之（1988）黒笹G-20・23・84号窯の考古地磁気測定年代、「愛知大学用地内埋蔵文化財発掘調査報告書」、三好教育委員会、115-118.
- 広岡公夫、岡田宗、吉村勝之、味喜大介（1990）尾呂古窯跡群および半ノ木E窯跡の考古地磁気、「尾呂、一愛知県瀬戸市定光寺カントリークラブ増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告一」、本文編、瀬戸市教育委員会、415-429.
- 広岡公夫、味喜大介、塩浜修一（1991a）考古地磁気測定、「穴田第11号墳・種成第4号窯跡、一愛知県瀬戸市穴田町地内上水道事業に伴う発掘調査報告一」、瀬戸市教育委員会、71-74.
- 広岡公夫、味喜大介、塩浜修一（1991b）考古地磁気測定、「穴田第6号窯跡、一愛知県瀬戸市穴田町地内における埋蔵文化財発掘調査報告一」、瀬戸市教育委員会、33-36.
- 広岡公夫、味喜大介、森定尚（1992a）吉田奥遺跡の考古地磁気測定、「上之山、一愛知県瀬戸市吉田・吉田奥遺跡群、広久手古窯跡群発掘調査報告書一」、瀬戸市教育委員会、543-548.
- 広岡公夫、塩浜修一、森定尚、畑中豊一（1992b）小田妻古窯跡群の考古地磁気測定、「小田妻古窯跡群」、愛知県埋蔵文化財センター調査報告書、第35集、財団法人愛知県埋蔵文化財センター、62-70.
- 広岡公夫、黒原秀夫、森定尚（1993a）東権現A窯跡の考古地磁気測定、「東権現A窯跡」、財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告、第1集、瀬戸市教育委員会・（財）瀬戸市埋蔵文化財センター、28-34.
- 広岡公夫、黒原秀夫、森定尚（1993b）仏供田窯跡の考古地磁気、「仏供田窯跡」、財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告、第2集、愛知県瀬戸市教育委員会・（財）瀬戸市埋蔵文化財センター、80-87.
- 広岡公夫、中村延子、森定尚（1993c）窯元A 1・2・3窯跡の考古地磁気測定、「窯元A窯跡」、財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告、第3集、愛知県瀬戸市教育委員会・（財）瀬戸市埋蔵文化財センター、109-114.
- 広岡公夫、中村延子、森定尚（1993d）西窯A 1・A 2窯跡の考古地磁気測定、「西窯A窯跡I」、財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告、第4集、愛知県瀬戸市教育委員会・（財）瀬戸市埋蔵文化財センター、119-125.
- 広岡公夫、黒原秀夫、田中彰子（印刷中）室遺跡火葬施設の考古地磁気、「室遺跡」、愛知県埋蔵文化財センター調査報告書、第49集。

第2表 黒笹G 2号古窯のNRMの磁化測定結果

試料番号	偏角 (°E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
CT 1931	1.3	53.8	1.41
* 1932	-5.9	54.2	1.18
* 1933	-22.9	67.8	1.36
1934	2.9	55.7	1.05
1935	-4.7	62.6	0.78
* 1936	-15.3	49.6	0.507
1937	1.6	60.0	0.853
1938	-6.3	59.5	1.19
* 1939	-51.5	56.8	0.519
1940	6.4	63.0	11.5
1941	6.8	63.2	12.1
1942	4.1	61.4	3.99

*：統計計算の際に除外したもの。

第3表 黒笹G 2号古窯の50Oe消磁後の磁化測定結果

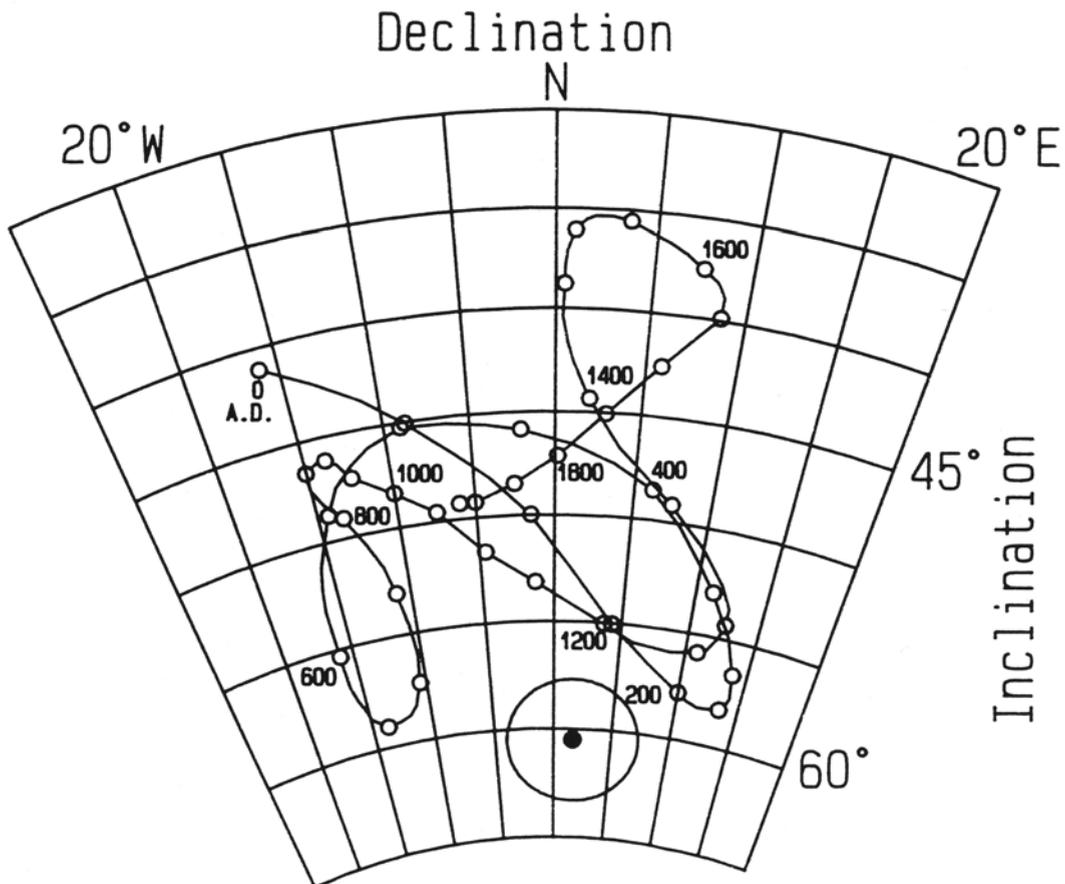
試料番号	偏角 (°E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
CT 1931	2.6	54.5	1.34
* 1932	-6.7	53.4	1.14
* 1933	-24.4	68.9	1.30
1934	3.0	56.0	0.988
1935	-3.3	63.3	0.731
* 1936	-17.1	45.0	0.478
1937	1.8	60.5	0.784
1938	-7.0	61.1	1.12
* 1939	-52.0	56.8	0.481
1940	6.5	62.9	11.4
1941	7.2	63.5	11.9
1942	3.4	61.7	3.94

*：統計計算の際に除外したもの。

第4表 黒笹G 2号古窯の考古地磁気測定結果

遺構名	N	D (°E)	I (°)	α_{95} (°)	K	平均磁化強度 ($\times 10^{-4}$ emu/g)
黒笹G 2号古窯 (NRM)	8	1.4	60.0	2.87	372.8	4.11
黒笹G 2号古窯 (50Oe)	8	1.7	60.5	2.80	391.9	4.03

N：試料個数、D：平均偏角、I：平均伏角、 α_{95} ：ファッシャーの信頼角、
K：フィッシャーの精度パラメーター。
()は年代推定のため考古地磁気データとして採用しなかったものを示す。



第16図 過去2000年の西南日本の考古地磁気永年変化 (広岡、1977) と黒笹G 2号古窯の考古地磁気測定結果
Declination：偏角、Inclination：伏角

第5章 考察

第1節 食器としての山茶碗—民俗資料からの製作過程復元—

第3章までで、遺物実測図などを中心にして事実報告を試みたが、ここではこれらの事実を基に山茶碗製作過程の復元を中心にして考察を試みたい。

1. 山茶碗製作過程の復元

採土

K-G-2号古窯跡では、粘土を採掘した痕跡は調査区内では発見できなかったが、近くで粘土を採掘し、まずSX01(一辺5mの方形土坑)に貯蔵したものと思われる。このSX01から径60cmほどの灰白色の粘土塊が多数見つかったことは、先のことを証明している。

製土

土は単味で使用せず、土あわせを行ったものと考えられる⁽¹⁾。土あわせの状況は、江戸後期『尾張名所図会』に依れば、槌で小塊に砕き、他の土とよく混ぜ合わせる工程をとった。次に混ぜた土に水を打って暫時ねかせ、土が均一になり水分を含んだ頃合いを見て足で踏む⁽²⁾。これらは、当時の作業工程を予想したもので、これと全く同じであったとは断定できないが、このような工程で製土していたものと想像できる。こうして作られたと予想される土をSK03に溜めておき、必要な分量だけ取り出して、成形して行ったものと思われる。この製土の過程を今一度段階的に見てみると、まず、採掘した粘土をSX01に貯蔵する。SX01はいわゆる「もろ(室)」の役割を果たしていたものであろう。続いてこの「もろ」から必要な量だけの粘土をSX03の階段状遺構を使ってSK03のあるフラットな部分まで運び上げ、そこで土あわせを行いSK03に貯蔵し、成形工程に回していったものと思われる。

成形

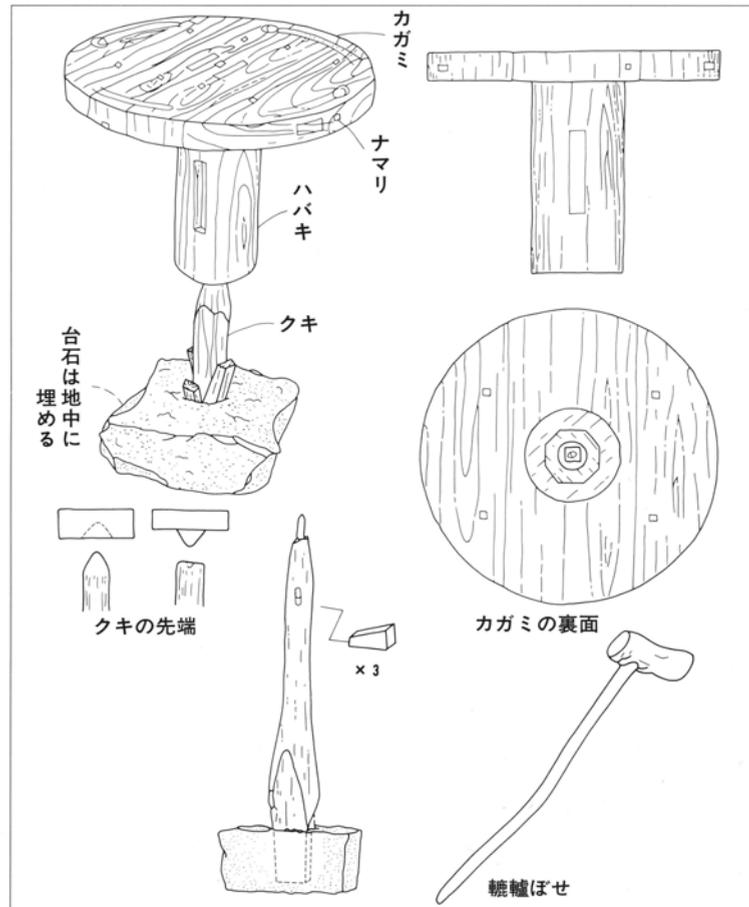
SK03に貯蔵された土は、成形される前に練られる。瀬戸の民俗事例によれば、練りには3種の段階⁽³⁾がある。第1段階は、土を15~19kgの塊とし、両手で揉み砕くようにして捏練する「おお練り」段階。次に、おお練りをした土を3等分ぐらいの小土塊にし、掌で強く押圧しながら前に押し出し、返す時は指先を用いて手前に引く「まき押し」段階。さらに気泡を抜くために「ねじ押し」段階を組み込むこともある。そしてこの動作を繰り返しながら土をなじませていく。

こうして、土ができ上がり、手轆轤を使って成形していったと思われる。瀬戸で使用されていた手轆轤については、瀬戸市歴史民俗資料館『研究紀要IX』に宮石宗弘氏の報文⁽⁴⁾がある。それに準拠し、記述をしたい。

手轆轤は大きく3つの部分に分けられる。厚いけやきの板で作ったかがみ(円板)と、かがみの下に付けられた円筒型のはばきと、これを支える檜の茎(=支柱)とである。

かがみは径約57cmの円板で、けやきの厚い(約5cm)板を接ぎ合わせているのが多い。一枚板を使っているものもある。かがみの上面には、外縁部に沿って4つの穴(径約2cm・深さ約1cm)が開けられていて、回転を与える時に轆轤ほせをあてる。かがみの裏の中心に、檜の約1.5cm角の材が埋め込まれ、

その中心が窪んだり突起した轆轤があって茎の先端に乗り、少ない摩擦でかがみの回転をスムーズにする。はばきは、外径約16cm・長さ約40cm、下端の内側を八角形に彫り、そこに密着するように八角で中心が丸孔になった槐製の杵が嵌められている。杵の中心の丸孔は、茎の太さに合わせられていて、かがみが回転する時の振れを止めている。茎は回転部分全体を支える柱である。このようなロクロで成形されたであろうと思われる山茶碗は、窯業最後の段階である「焼成」に向けて窯の近くのフラットな部分で天日干された後、窯詰めされ焼成された。



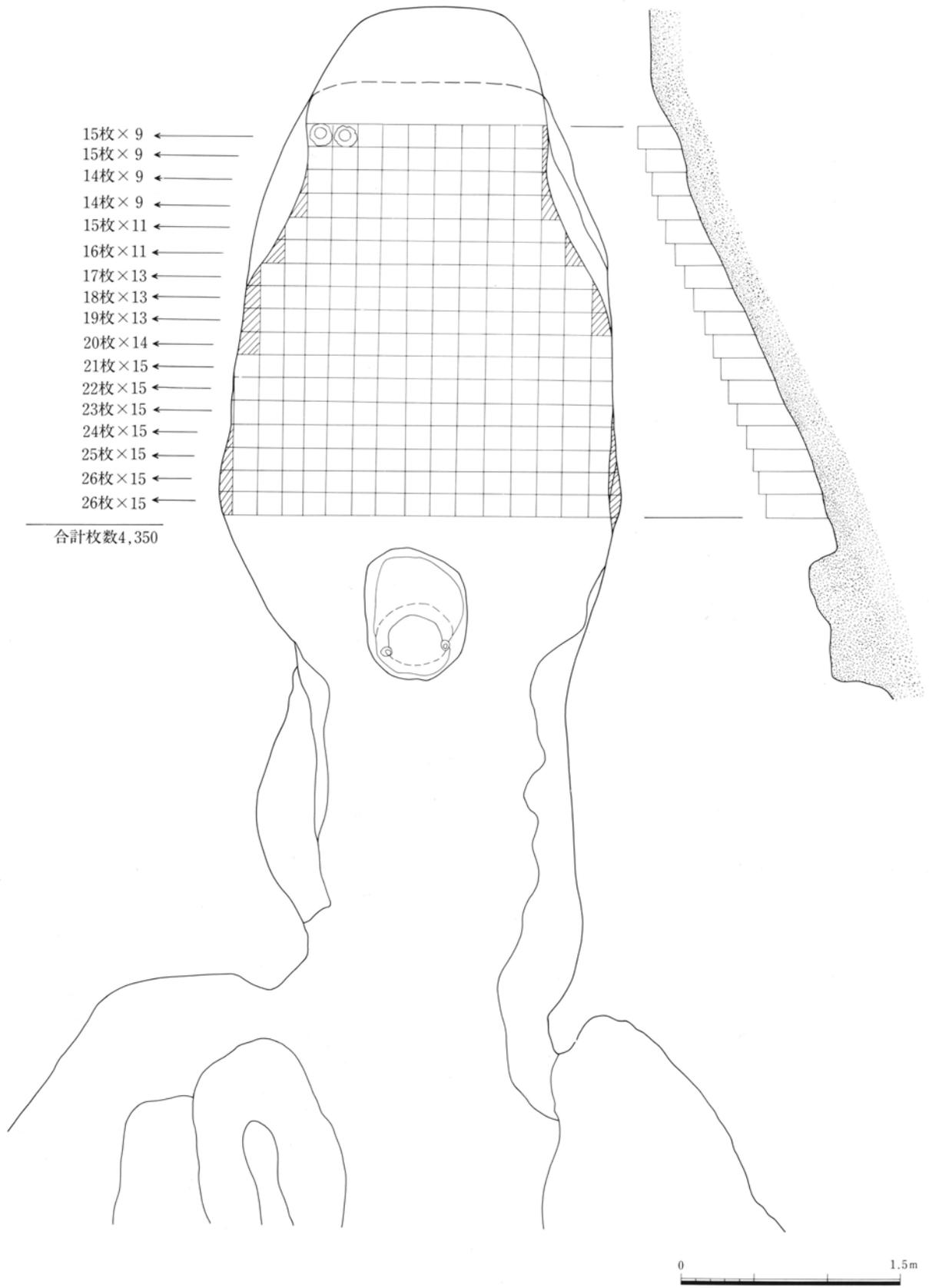
第17図 手轆轤（『尾張瀬戸の窯業民俗』より転載）

焼成

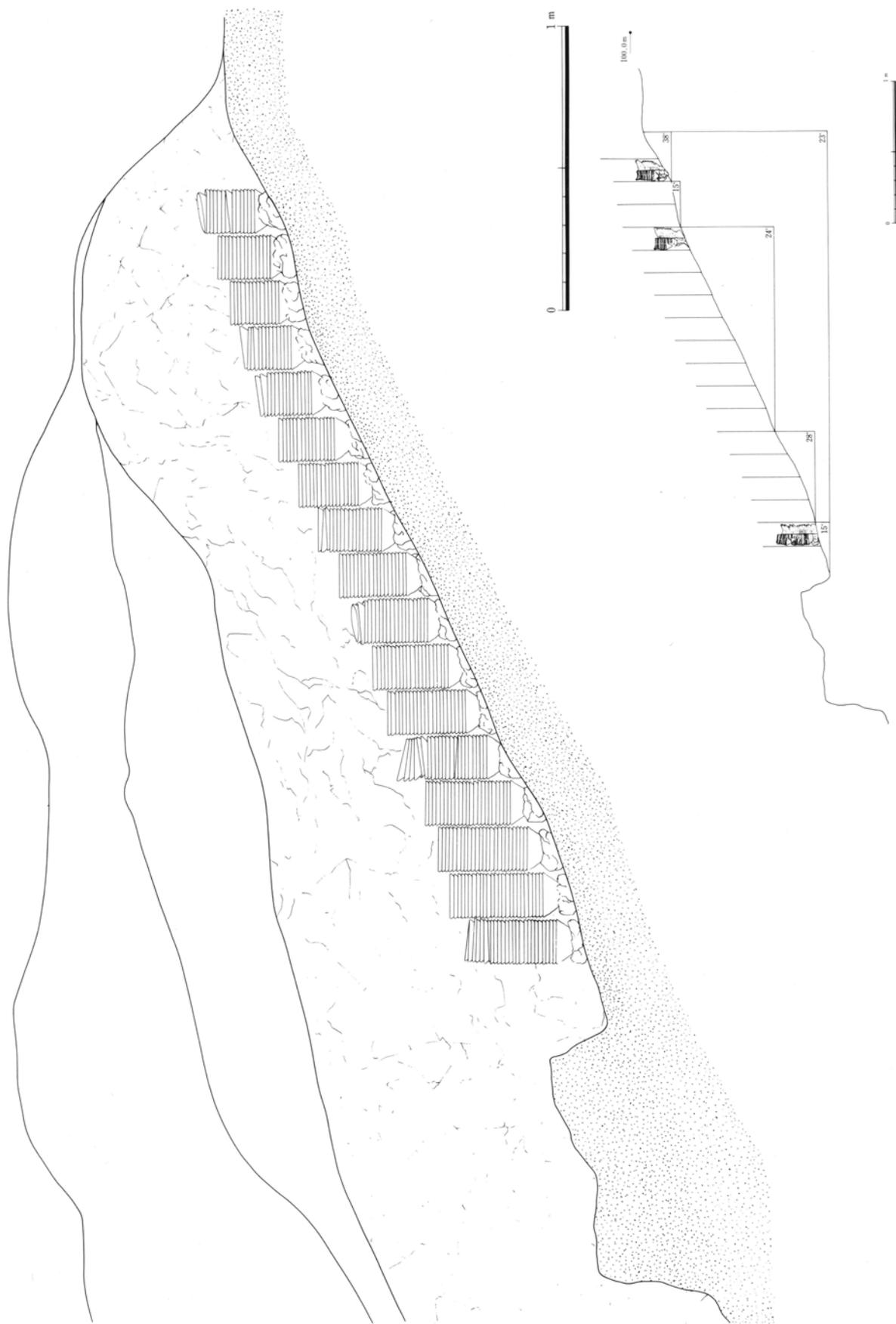
K-G-2号古窯は窖窯で、分焰柱付近の傾斜角度は15°、最大傾斜角度は煙道部付近の38°である。最大幅は2.6mで、人が一人、中にひざまずく格好で作業せざるを得ない作業スペースである。このような狭い空間で、まず焼台を煙道部に近いところから床面に置き（径約16cmの円形の塊）、そこにまず、山茶碗1枚を焼台の上に載せ、底部をしっかりと抑える。そして、その上に1枚ずつ重ねて載せていく。載せ終わったところで、右手の拳で、焼台の前面を押え製品が真直ぐ立つように工夫している。こうした、作業を繰り返しながら、分焰柱の近くまで後退りして来る。焼台に載せる製品の枚数は、床面の傾斜角度によって異なっているようである。図18・19に示したように最小で14枚、最大で26枚を数えることができた。この考え方に基づいて、1回の焼成枚数を概算すると、おおよそ4,500枚前後であろうと推測できる。

2. 山茶碗の利用目的

山茶碗は、食器としての機能を果たしていたものと想像できる。そして、広く一般庶民にまで及んだものと思われる。当地方の主要な日常の食器と考えてよい。しかし、この日常的な食器が姿を消す時が来る。この後に山茶碗に変わる日常的な食器として何が考えられるのかを次節で考えてみたい。



第18図 焼台配置想定図 (1:40)



第19図 床面傾斜角度及び重ね焼想定図 (1:20)

第2節 容積からみた山茶碗

1. 本窯出土碗の容積

山茶碗が、当地方の日常的な食器であり、広く庶民にまで浸透していたという前段までの仮定を踏まえ、庶民の食生活の状況を復元してみたい。その際、茶碗の機能を容積という観点に絞って考察を加えたい。

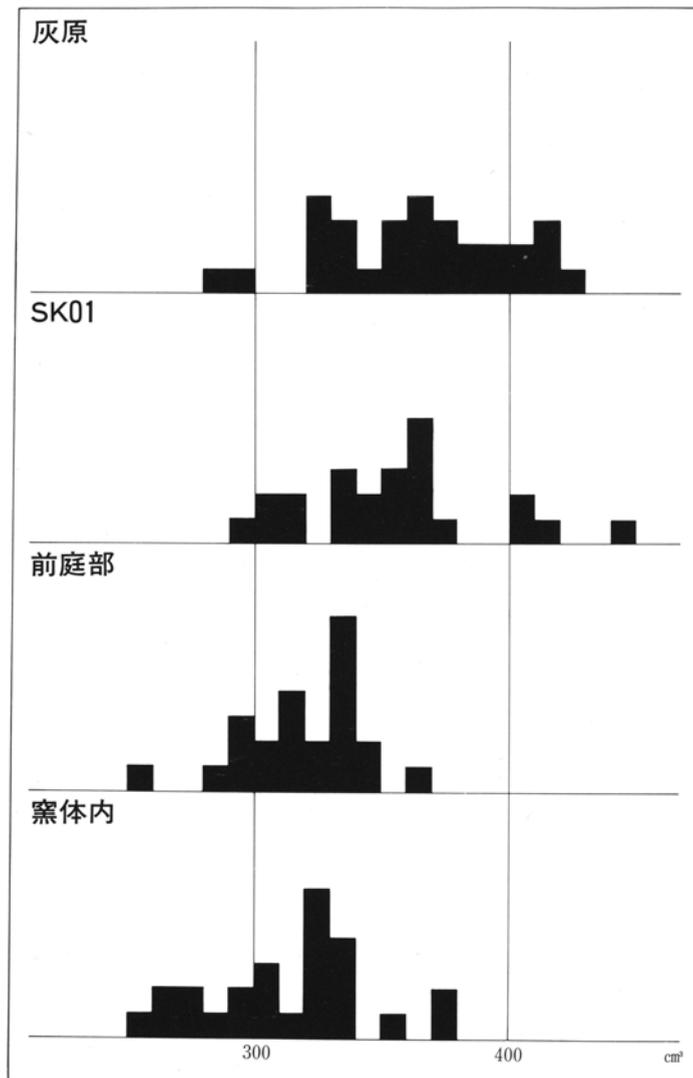
本窯出土品のように、完形品ではなく、口縁の変形が著しい碗の容積を計測することは困難なので、計算（積分）により近似値を出し、それを容積の値とした。以下の数値は全て計算値であることをあらかじめ断っておく。計算値の有効性については、次項で詳しく触れる。

第5表は、本窯の遺構別出土碗の容積を表したものである。窯体内・前庭部のモードが、320～340 cm^3 に来るのに対して、SK01出土碗の容積はやや大きく、360～370 cm^3 にモードが来る。ちなみに現代の味噌汁碗の一つをメスシリンダーで測ったところ、350 cm^3 という数値であった。つまり、感覚的には、我々が日常使っている味噌汁碗と同じくらいの容量を持っているといえる。

次に径高指数から見た形状と比較すると、第14図遺構別器高—口径法量分布図の窯体内出土例の径高指数が、36以下、38以上の両極に分かれるのに対し、容積は平均値の319 cm^3 に近い320～330 cm^3 にモードが来る山形の分布図となる。これらのことから形状にばらつきがあっても、容積はまとまった数値をとることがわかる。

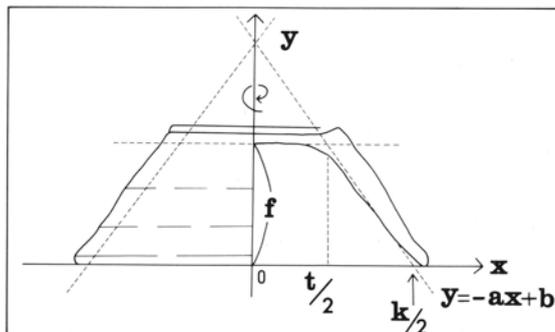
器種分類との関連を見ると、I A 2 に画一的に分類されるSK01出土碗の容積が大きいことが挙げられる。これは、SK01に限らず、I A 2 や I B 2 形態のように体部が曲線を帯びているもの、藤澤編年型式でいえば、5・6型式に近い形の碗の方が、容積が大きくなる傾向にあるといえる。

次に、この根拠となった計算式について触れておきたい。



第5表 遺構別出土碗容積

2. 計算式



第20図 積分計算による容積

今回使用した計算式は、左図のように座標軸を落とし、求めたものである。

- ① 誤差の少ないように、口径(k)、内底径(t)、深さ(f)を決める。
- ② 内面胴部に接する直線を $y = -ax + b$ として、それをy軸を中心に回転させた時の0～fまでを積分して求める。
- ③ 回転体の積分の公式は、

$$V = \pi \int_0^f x^2 dy \quad (V \text{は体積})$$

- ④ ②の式に $(k/2, 0)$ と $(t/2, f)$ を代入して

$$a = \frac{2f}{k-t}, \quad b = \frac{fk}{k-t}$$

- ⑤ ②の式を変形して

$$x = \frac{b-y}{a}$$

- ⑥ ⑤の式に④のa, bを代入する。

$$x = \left(\frac{kf}{k-t} - y \right) \bigg/ \frac{2f}{k-t}$$

- ⑦ ⑥の式を③の公式に代入する。

$$V = \pi \int_0^f \left\{ \left(\frac{fk}{k-t} - y \right) \bigg/ \frac{2f}{k-t} \right\}^2 dy$$

- ⑦の式を整理して

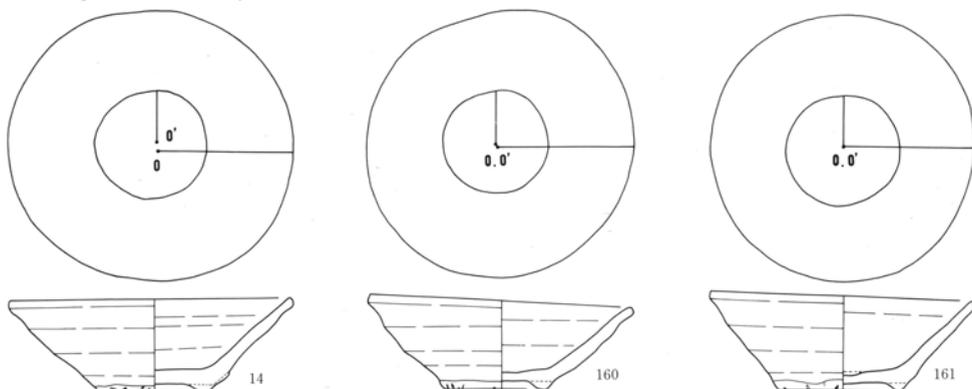
$$V = \pi f \left\{ \frac{(k+t)^2 - kt}{12} \right\} \quad \dots\dots\dots \text{式 I}$$

同様に、内面胴部に接する放物線を回転させた時

$$V = \pi f \left\{ \frac{(k+t)^2 - 2kt}{8} \right\} \quad \dots\dots\dots \text{式 II}$$

内面胴部に接する円を回転させた時、

$$V = \pi f \left\{ \frac{(k+t)^2 - 2kt}{8} + \frac{1}{6}f^2 \right\} \quad \dots\dots\dots \text{式 III}$$



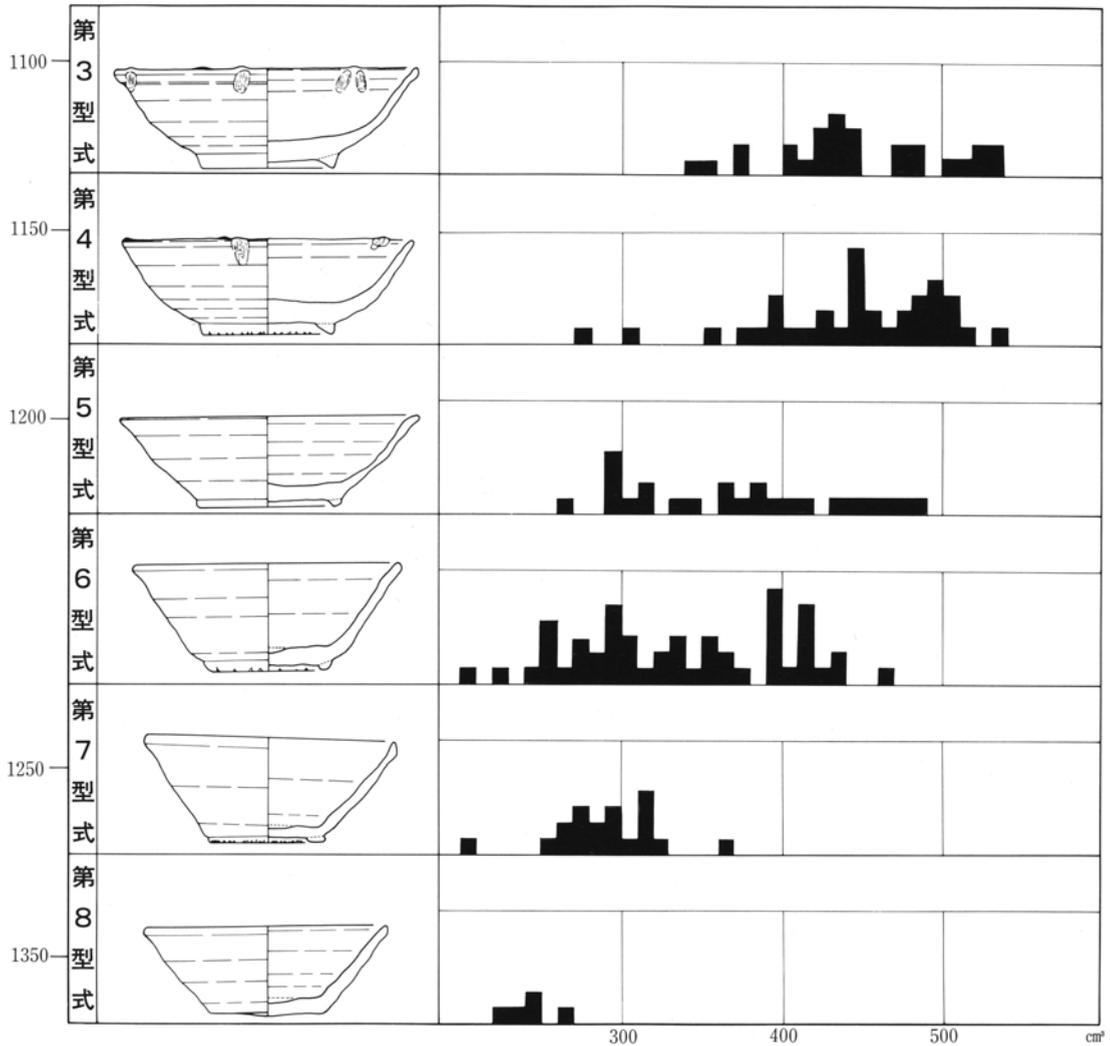
法量cm	k=14.4, t=5.6, f=3.8	k=14.0, t=5.5, f=3.8	k=14.0, t=5.7, f=4.4
計算値	318 cm³	302 cm³	355 cm³
計測値	330 cm³	275 cm³	350 cm³
誤差%	3.8 %	8.9 %	1.4 %

第6表 計算値と計測値との誤差 (遺物1:4)

式IIは、藤澤編年の第3～5型式の山茶碗に当てはまり、式IIIは、木地碗に多く当てはまる。式Iの誤差は、第6表の通りである。計測値は、メスシリンダーによるもので、点Oは口径の中心点、O'は内底径の中心点である。

3. 容積の変化

藤澤編年における猿投古窯跡群と瀬戸古窯跡群の代表的なものから出土している山茶碗の容積の変化は、下表の通りである。



第7表 猿投古窯跡群出土碗容積の変化

斎藤孝正、「中世猿投窯の研究」『名古屋大学文学部研究論集C I』1988に基づいて作成をした。

第3型式：H（東山）-G-55, H-G-79

第4型式：K（黒笹）-G-42, K-G-5, K-G-6

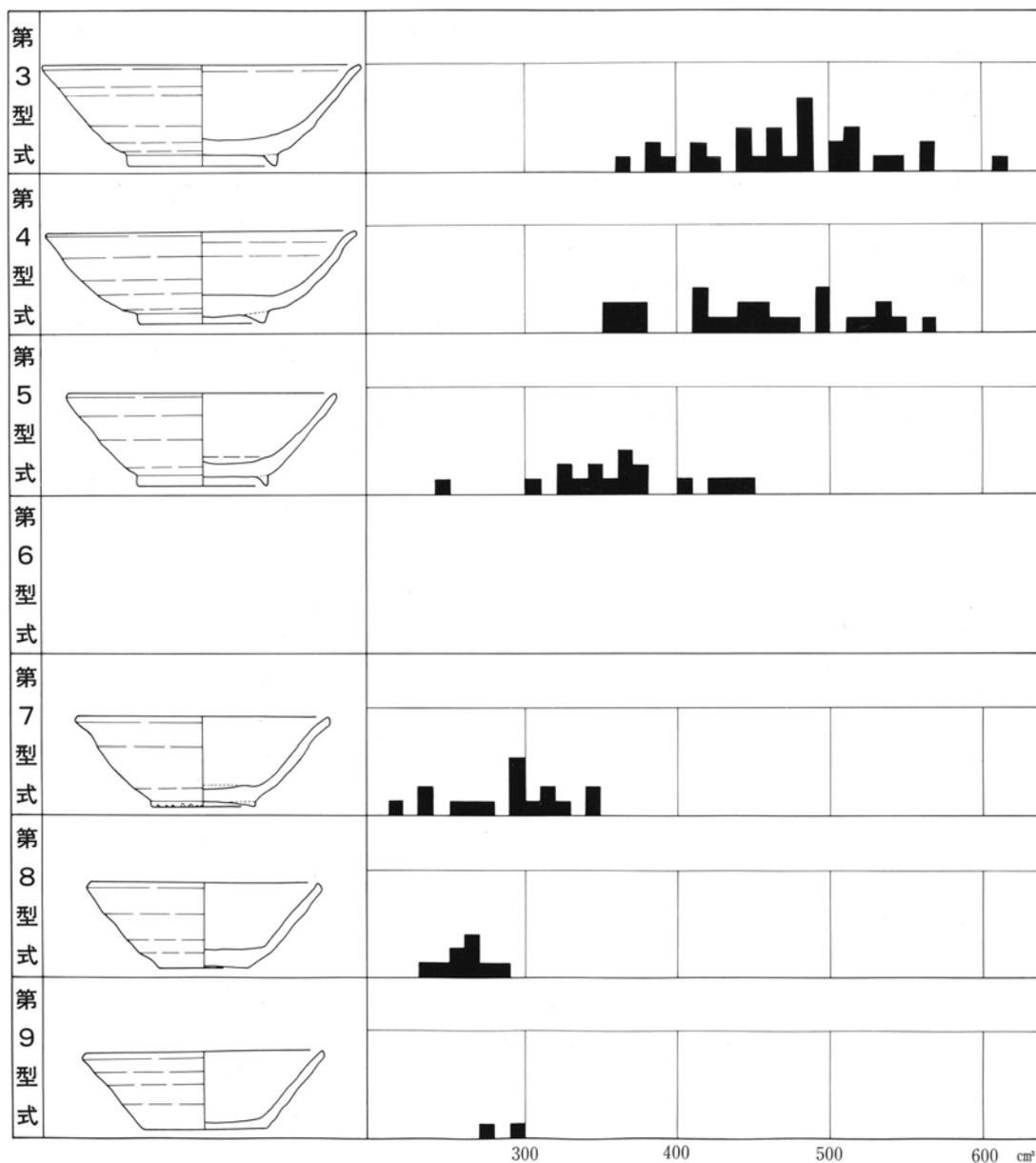
H-G-61, O（折戸）-G-1, NN（鳴海）-G-30

第5型式：H-G-101, NN-G-28

第6型式：K-G-20, K-G-23, K-G-84

第7型式：K-G-85, K-G-29

第8型式：K-G-13



第8表 瀬戸古窯跡群出土碗容積の変化

藤澤良祐 「瀬戸古窯址群 I」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要 I』1982に基づいて作成。

第3型式：南山8，旭浄水場，城山東，金城1

第4型式：南山5，旭5，旭精機1，旭精機2，南原

第5型式：南山6，大草4

第7型式：南山11，広久手3，広久手8

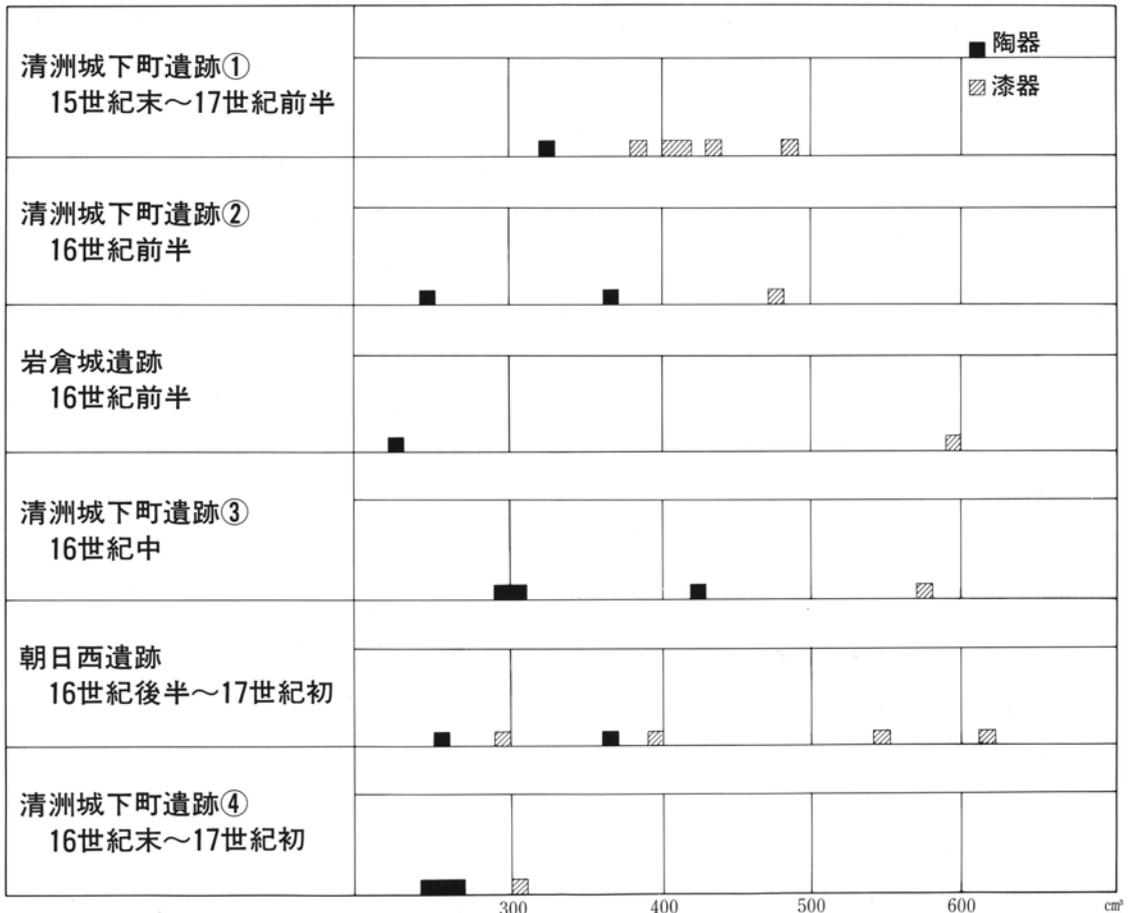
第8型式：大草6

第9型式：南山14

第7・8表を見ると、猿投、瀬戸両地域とも、時代が下がるにつれて、容積が著しく減少してくることが読み取れる。大きな椀なら、「大は小を兼ねる」的な使い方もできたかもしれないが、第7・8型式の山茶椀では、大振りの山茶椀が果たしていた機能を代用することはできないように思われる。勿論、少量の食物に余り大きな椀を使用するのは、不便で仕方がないが、第3・4型式の椀と一緒に焼かれた小椀の容積が、90～150cm³前後であることを併せて考えると、12世紀には、少量の物から500cm³前後の食物を入れる場合には、全て山茶椀で補うことができる。それが小振りになるに従って小椀もなくなってしまふ。それまで使っていたような、大振りの器が必要な時どうしていたのかという疑問が残る。

そこで、それを木地椀で代用するようになったとしたら、熱い雑炊や汁物等には、熱伝導率から言っ、て、山茶椀より使い勝手が良かったにちがいないと想像できる。山茶椀が、小型化かつ無高台化してからは、一層その傾向が強まっていったと想像できる。

下表は、15世紀～17世紀前半の木地椀の容積と共伴した陶器椀の容積である。木地椀は全て漆塗の丸椀で、漆の塗っていない椀はあまり例がなく、清洲城下町遺跡で1点(479cm³、16世紀前半)⁽⁵⁾報告例がある。また陶器椀の12個体中8個体までが、いわゆる天目茶椀であることを付記しておく。



第9表 陶器・漆器椀容積の比較⁽⁶⁾

第3節 木地椀製作に関する民俗学的分析

前節において、山茶椀消失後東海地方の椀の主体は木地椀に移行するのではないかと暗示的に述べた。山茶椀製作以降現代まで、飯茶椀は陶器椀・磁器椀へと変わってきたのであるが、実際には15・16世紀は不鮮明なものとなっている。ここから、前記の想定が生ずるわけであるが、具体的・実証的資料に欠ける側面を多々持っている。そこで、本節では、主として三河山間部を取り上げて、民俗学的観点から木地椀製作について分析を進めてみたいと思う。

1. 三河山間地における木地師集落の出現

ハレの時に使う漆椀が各地方の旧家に購入されていくのは江戸時代後期以降、庶民層に広がっていくのは明治中期から大正期にかけてであるとされている⁽⁷⁾。これ以前の庶民層に流通していたのは、薄く塗りをかけたものか、柿渋を塗っただけの粗末なものを使用していた。勿論、この状況が即中世にまで遡るものとは考えていないが、山茶椀と重層的に流通していたことは十分に想定できる。この考えに基づき三河山間地に存在した木地師にスポットをあてて、動向を分析してみたい。

滋賀県愛知郡小椋郷の筒井公文所の氏子狩帳によれば、寛文10年(1670)に三河の名が出ており明治13年(1880)まで北設楽郡を中心に三河木地師の記録がある⁽⁸⁾。特に大入川地区に多く、矢作川地区・寒狭川地区・振草川地区にも木地師が存在していたとある。木地師の墓は北設楽郡東栄町下粟代に多く、字細田にある菊紋入りの石碑は宝暦6年(1756)27日「□□□童女」と記されている。北設楽郡内には、ロクロヤシキ・ロクロガイツ・木地屋・木地屋敷などという地名が多く残っている。滋賀県の筒井八幡宮の神主を務める大岩氏の祖に明応年間(1492～1501)、小倉三河守某があり、また、その系譜に「吉休助太郎、三州板山に住す⁽⁹⁾」とある。さらに南設楽郡鳳来町の旧島田村筒井与次郎右衛門の系図によると、応永27年(1420)に大和国高取城主某の家臣筒井与次郎右衛門実晴が牢人し、従者5人を連れてこの地で木地屋を営んで集落を作り、島田村と称した。初めて小屋を造ったところは轆轤貝津と呼ばれている。田峯の天正18年(1590)の太閤検地の控元帳にも轆轤貝津の地名が見られる。北設楽郡内の木地師一族は、大蔵・小椋の姓に限られていた。

また、このような木地師の集落では、椽・桂・榎・栗・榛の木・しおじ・松などを材料にして広蓋・はんぼ(鉢)・チャツ(茶盆)・椀類を造っていた。これらの木地師とは別に稲武町稲橋井山の木地師が存在した。

このようにして、椀などの「木地挽き物」を生業とし、日常の生活道具を手に、一家挙げて良質の木材を求めながら山から山へ渡り歩いた木地師たちは、奥三河の山間地にも材料を求め移住をしてきた。そして、奥三河地域に木地師の地名を残し、さらに菊水紋の墓標をいくつか残したのである。

2. 木地椀の製作工程

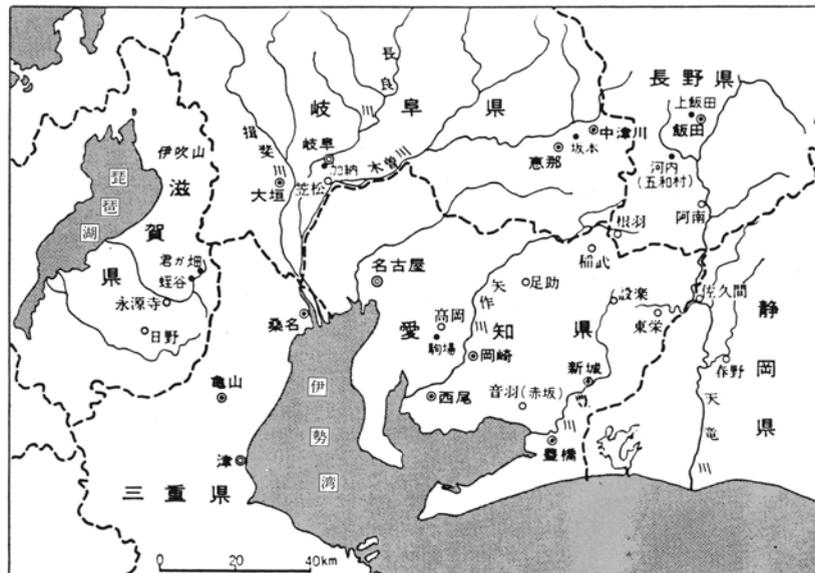
木地椀の製作工程は、大きくアラガタとりと轆轤挽きの2工程⁽¹⁰⁾に分けられる。轆轤挽きの前段階として、カタブチとナカホリという作業がある。カタブチは、山どりしたアラガタをチョウナで整形する作業で、ナカホリは、椀の中をくり抜く作業を指している。

次に轆轤挽きの工程がある。轆轤挽きは、夫婦一組で呼吸を合わせてやるといいものができたという。妻が綱を取って轆轤を回し、主人がカンナを握って椀を挽く。この様な光景が想像できる。

こうして出来上がった椀は、元締めなどと呼ばれる雇主を通して売りさばかれた。

3. 木地師集落の分布

木地師はこの愛知・三重・岐阜・長野県の4県に濃厚に分布している。時期的な確定は困難ではあるが、こうした動きのなかで木地椀が庶民の食生活の中に入り込んで来たであろうことは容易に想像ができる。これが、山茶椀との交代だと断定はできないが、緩やかな動きで徐々に変化していったものと思われる。



- 木地師集落の形成された地域
木地師関係の道具などが残されている。
- 検地帳・古文書・伝承による木地屋地名

第21図 奥三河の木地屋関係地図 (文化庁文化財保護部編『木地師の習俗2』)
(民俗資料叢書10 1969年 平凡社より転載)

第4節 小結

以上、本章で述べてきた事柄をまとめてみよう。

第1点は焼台に残されていた工人たちの指の跡及び焼台底部角度の問題である。原位置を失った焼台底部の角度を見ることによって、焼成室のどの位置に置かれたかが明確になり、さらには、一回の焼成枚数も融着した重ね焼き資料に基づき復元可能になった。

第2点としては、中世各時期の椀の容積変化の問題点である。椀の容積については第2節で述べたので重複は避けるが、容積の変化を探っていくことによって、12世紀ころまでは、比較的大振りな山茶椀が多かったのに対し、13世紀に入ると、徐々にではあるが、小振りになっていく現象が実証できたと考える。13世紀中葉から14世紀中葉になると、12世紀のころの山茶椀と比べて、およそ容積が半分近くにまで小型化していく。この現象は何か。解明すべき課題である。

こうして、本章では木地椀との関連を想定したのであるが、実際には木地師の動向については、資料不足で不十分な点が多い。とりわけ時間の観念を導入する時、その問題は一層大きくなる。今後は考古資料と民俗資料との接点を求めて、より厳密に掘り下げていく必要がある。ここでは、批判を恐れず敢えて仮説を提示しておきたい。それは、木地師が中世より三河山間地に移住を開始していたとすると、木地椀の消費地への移入も同時期に展開していたものとする考えである。

註

- (1) 宮石宗弘 「尾張瀬戸の窯業民俗」『研究紀要IX』 1990 瀬戸市歴史民俗資料館
- (2)、(3)、(4)は(1)に同じ
- (5) 「清洲城下町遺跡」『年報平成2年度』 1991 (財)愛知県埋蔵文化財センター
- (6) それぞれの遺跡の遺構は、以下の通り。

清洲城下町遺跡①SD66	『清洲城下町遺跡II』	1992	(財)愛知県埋蔵文化財センター
" ②SD111	『清洲城下町遺跡』	1990	(財)愛知県埋蔵文化財センター
岩倉城遺跡 SD01	『岩倉城遺跡』	1992	(財)愛知県埋蔵文化財センター
清洲城下町遺跡③SD101	『清洲城下町遺跡II』	1992	(財)愛知県埋蔵文化財センター
朝日西遺跡 SD177	『朝日西遺跡』	1992	(財)愛知県埋蔵文化財センター
清洲城下町遺跡④SD137	『清洲城下町遺跡』	1990	(財)愛知県埋蔵文化財センター
- (7) 須藤護『暮らしの木器』 1982 ぎょうせい
- (8)、(9) 磯貝勇・津田豊彦 『日本の民俗愛知』 1973 第一法規
- (10) 『技術と民俗(上)』P164・165 1985 小学館

第6章 まとめ

第1節 調査結果

今回のK-G-2号古窯跡調査の中からいくつかの特筆すべき結果を得ることができた。それらを列挙すると同時に、今後の課題を記すことで、まとめにかえたい。

1. 窯体について

今回検出された窯体は1基であった。これは、子持古窯跡群の中に記されているK-G-2号古窯跡にあたるものである。窯体規模は前庭部を除く残存長が7m弱、最大幅が3m前後と比較的幅の広いものである。窯体の平面プランは、分焰柱の手前が一番狭く、焼成部の分焰柱に近い部分が一番広く膨らむ形を呈している。

窯体床面の傾斜角度は、分焰柱上端から1m上方までが約15°、それ以上の部分では約23°を測る。焼台の傾斜角度を見ると、最大傾斜角度41°から21°とかなりの幅を持って出土している。これは、焼成の段階でどの部分に置いて焼成したかを確認する好材料となっている。その根拠となったものとして、第19図を挙げることができる。

分焰柱の平面形は、基底部で長軸0.9m、短軸0.75mの不整円形を呈する。残存高は0.54mのみであった。分焰柱は補修されており、最初は、南と北に径0.05mの杭を土留めとして利用し、その周りに灰白色の砂礫混じりの粘質土を貼って造っている。2度目は、最初の分焰柱の周りに重ね焼した山茶碗を伏せた状態で柱状に並べ、粘質土を貼って補強している。

2. 前庭部土坑について

焚き口の前方を平坦に削平して前庭部としている。前庭部の規模は、東西4.9m、南北5.4mで、等高線に沿って横長に広がっている。窯体に向かって右側の方が広い形状を呈している。床はほぼ水平で、焚き口の左右2カ所に土坑が見られた。SK01は長軸3.3m、短軸2.1mのやや長方形に近い形を呈する。床面からの深さは0.4m程度である。埋土中には、炭化物や山茶碗等の遺物がかなりの量、含まれていた。出土状況から見て、最終焼成時の不良品が一括投棄されたものと思われる。SK02は、長軸4.9m、短軸2.2mの不整楕円形を呈する。床面からの深さは0.48m程度で、埋土中には炭化物や山茶碗等が多量に含まれていた。SK01と同様に最終焼成時の不良品が一括投棄されたものと思われる。

3. 排水溝について

前庭部南側より北東の攪乱部分に向かって走る溝(SD01)が1条確認された。また、窯体と平行して走る溝(SD02)も1条検出できた。SD01は、残存長9m、幅0.3m、深さ0.15mを測る。排水溝と見られるが、両端とも消失していて、全形は窺えない。SD02は、全長11m、幅0.2m、深さ0.1mを測る。98.0mの等高線に沿う形で掘られている。この溝の南側から、溝と平行して径0.15m程のピットが0.8m間隔で16基掘られている。時期不明であるが、土留め用のピット列と排水溝と考えられる。

4. 粘土精製のために利用されたと思われる施設について

粘土精製のために利用されたものとして、SX01、SX03、SK03を挙げることができる。SX01はSK03

の東側下方の谷底で検出した一辺5mの大規模な方形土坑である。床面は平坦で、径0.6m程の灰白色の粘土塊がいくつも見つかった。さらに、平坦な床面の西側部分には赤褐色粘土が2～3cmの厚さで貼られていた。窯体近くの谷の崖面に認められる厚さ約5cmの粘土層から粘土を採掘し、貯蔵しておくために造られた施設と考えられる。SX03は最大幅3.5mの三角形を呈した窪みと7段のステップからなる。さらに、そこから南へ斜面上をほぼ水平に延びる幅0.5mの細長いテラスを5段確認することができた。この施設はSX01内に蓄えた粘土を、SK03まで運び上げるための施設と考えられる。SK03は長辺2.1m、短辺0.9m、深さ0.7mの土坑である。状況から見て、粘土溜土坑として利用されていたと思われる。

5. 遺物について

遺物の中で、椀・皿についてはそれぞれ4類型に分類をした。詳細については、第3章第2節で述べているので、重複は避けたい。ただ、同一時期の窯1基の中で比較的良好な資料を提供できたことと、特殊遺物（このように表現してよいかどうか疑問が残る）として、図番号109、110、313、314、315の用途不明遺物が挙げられる。これらは、手捏ねによる整形で、胎土も陶丸、山茶椀と同じである。また、いわゆる子持ち皿（図番号226）が1点、陶丸が34個まとめて椀に入れられた状態で出土したことも今後の窯業生産体系を考える上で重要な資料であると思われる。

6. 科学分析について

考古地磁気年代は、A.D.1210年±35年という結果であった。この結果は、K-G-2号古窯跡の遺物編年からすると、少し時期が上るように思われるが、今後窯業生産を考えていく上で、多くの熱残留磁気測定データの取り入れ、操業年代を推定していくことが必要と思われる。また、遺物の編年をより確実なものにしていくためにも、科学分析の結果を参考にしていかなければいけないと考える。

第2節 今後の課題

今回の調査では遺構の中で興味深い事柄が見つかった。これは、調査区の範囲を窯体部分に止めることなく広い範囲に設定し、関連施設の検出を心がけたことによるものと思われる。特に谷部分の調査は、類例を探る上でも調査を必ず心がけたいものである。また、今回の報告書の中でも幾つかの新しい試みをしてみたが、まだ十分に熟している状態ではない。今後、窯業生産遺跡として、総合的な調査研究を進めていく必要があると思われる。特に、物と人とのかかわりをもっと鮮明に描き出す努力をしていかなければいけないと考える。

付 表

遺構一覧表

窯体 (SY)

窯体名	長さ(m)				最大幅(m)			傾斜			方向	前庭部	備考	登録番号
	全長	煙道部	焼成部	燃焼部	煙道部	焼成部	燃焼部	煙道部	焼成部	燃焼部				
SY	(6.7)	(0.3)	3.4	2.1	1.3	2.9	1.5	0°	23°	0°	S-74-W	土坑2基	煙道部一部削平	SY

溝 (SD)

遺構番号	規模(m)		方向	底部の傾斜	備考	登録番号
	幅	深さ				
SD01	1.5	0.15	N-46°-E	W>E		SD01
SD02	0.25	0.1	N-73°-W	W>E		SD02

土坑 (SK)

遺構番号	規模(m)			備考	登録番号
	長径	短径	深さ		
SK01	3.3	2.1	0.4	SY前庭部	SK01
SK02	4.9	2.2	0.48	SY前庭部	SK02
SK03	2.3	1.2	1.4	粘土溜土坑	SK03

その他 (SX)

遺構番号	規模(m)			備考	登録番号
	長径	短径	深さ		
SX01	5.9	5.0	2.4	粘土溜施設	SX01
SX02	8.8	4.1	0.7		SX02
SX03	4.1	3.3	2.0	階段遺構	SX03

遺物観察表

()内の数値は推定値

図版番号		遺構・層位	種類		法 量						内底部 押圧痕	高台痕	備 考	登録番号
実測図	写真図版		器種	分類	器高	口径	深さ	底径	径高指数	容積				
1		燃焼室	椀	I A 1	(5.6)	(14.0)	(4.9)	(6.5)	(40.0)		○	○	内面一部自然釉・外底部糸切痕	E-1
2		燃焼室	椀	I A 2	(6.1)	(15.2)	(5.3)	(6.3)	(40.1)		○	○	内面口縁一部自然釉・外底部糸切痕	E-2
3		燃焼室	椀	I A 2	(4.8)	(13.8)	(4.1)	(5.9)	(34.8)		○	○		E-4
4		燃焼室	椀	I A 1	5.1	13.5	4.2	6.6	37.8	326	○	○		E-5
5		燃焼室	椀	I A 2	5.6	(14.7)	4.4	6.7	(38.1)			○	口縁一部自然釉	E-10
6		燃焼室	椀	I A 2	5.0	(14.0)	4.6	6.6	(35.7)		○		内面自然釉	E-11
7		燃焼室	椀	I A 2	(5.5)	(13.6)	(4.1)	6.7	(40.4)		○	○	内面口縁・外面口縁一部自然釉	E-21
													外底部調整痕	
8		燃焼室	椀	I A 1	5.0	14.8	4.2	6.0	33.8	371	○	○	口縁一部自然釉	E-22
													外底部調整痕	
9	18	燃焼室	椀	I A 1	(5.0)	14.4	3.9	7.0	(34.7)	339			外底部調整痕	E-27
10	18	燃焼室	椀	I A 1	5.4	(14.6)	4.2	6.1	(37.0)		○	○	外底部調整痕	E-28
11	18	燃焼室	椀	I A 2	4.9	14.5	4.2	6.2	33.8	329	○	○		E-29
12		燃焼室	椀	I A 2	4.7	14.3	3.7	5.8	32.9	267	○	○	外面口縁一部自然釉	E-30
13		燃焼室	椀	I A 2	5.4	(14.6)	4.1	5.5	(37.0)			○	内面一部・外面全体に自然釉	E-34
													外底部調整痕	
14	18	燃焼室	椀	I A 1	4.9	14.8	3.8	5.7	33.1	320		○	外底部調整痕	E-35
15	18	燃焼室	椀	I A 1	5.0	14.8	4.0	6.7	33.8	350	○	○	内面全体・外面口縁一部自然釉	E-36
16		分焰柱付近	椀	I A 1	5.3	13.8	4.4	5.6	38.4	339	○	○	外底部調整痕	E-41
17		窯内床面	椀	I A 1	5.4	13.4	(4.7)	7.0	40.3	336	○	○		E-7
18		窯内床面	椀	I A 1	5.3	13.2	(4.6)	6.3	40.2	309	○	○		E-8
19	18	窯内床面	椀	I A 1	5.1	(13.5)	4.1	6.2	(37.8)		○	○	口縁一部自然釉	E-9
20		窯内床面	椀	I A 1	(4.8)	13.4	4.4	6.6	(35.8)		○		口縁一部自然釉	E-12
21	18	窯内	椀	I A 1	5.9	14.0	4.9	6.5	42.1	353	○	○	内面全体・外面口縁一部自然釉	E-43
													外底部糸切痕	
22		窯内	椀	I A 1	5.0	13.6	4.1	6.3	36.8	260	○	○		E-45
23		窯内	椀	I A 2	5.0	15.0	3.9	6.0	33.3	271	○		内面一部自然釉	E-44
24		窯内	椀	I A 2	4.9	(15.0)	4.0	6.5	(32.7)		○	○	内面自然釉・外底部糸切痕	E-46
25		窯内	椀	I A 1	4.9	14.0	4.4	6.0	35.0	299	○		口縁一部自然釉	E-47
													外底部糸切痕	
26	18	窯内	椀	I A 1	5.3	13.0	4.4	6.2	40.8	296	○	○	外面口縁一部自然釉	E-53
27		窯内	椀	I A 1	5.2	13.7	4.5	5.9	38.0	321	○		内面全体・外面口縁一部自然釉	E-54
28		窯内	椀	I A 1	4.7	15.0	3.8	6.5	31.3	323		○	内面全体・外面口縁部自然釉	E-50
29		窯内	椀	I A 1	5.0	14.0	4.3	6.5	35.7	307	○		内面一部自然釉	E-48
30		窯内	椀	I A 2	4.9	14.5	4.0	6.0	33.8	283	○		内面一部自然釉・外底部調整痕	E-51
31		窯内	椀	I A 2	5.2	14.4	4.5	5.8	36.1	331	○	○	内面一部自然釉・外底部糸切痕	E-49
32		窯内	椀	I A 2	5.4	14.0	4.7	6.0	38.6	334	○		内面口縁部自然釉・外底部調整痕	E-52
33		窯内	椀	I A 1	6.1	(14.0)	5.2	(6.0)	(43.6)		○	○	外面口縁一部自然釉・外底部調整痕	E-57
34	18	窯内	椀	I A 2	5.4	13.8	4.7	5.9	39.1	371	○	○	内面・外面共に一部自然釉・外底部調整痕	E-58
35		窯内	椀	I A 1	5.2	13.4	(4.4)	(5.9)	38.8	322	○	○	外底部調整痕	E-59
36		窯内	椀	I A 2	5.1	(15.0)	5.8	4.5	(34.0)		○	○	内面口縁一部自然釉・外底部調整痕	E-60
37		窯内	椀	I A 2	5.5	14.0	4.4	6.1	39.3	317	○	○	外底部調整痕	E-19
38		窯内	椀	I A 1	(5.5)	(14.0)	(4.4)	6.0	(39.3)		○		内面口縁自然釉・外底部調整痕	E-17
39		窯内	椀	I A 2	4.5	15.0	3.7	5.6	30.0	309	○	○	内面一部・外面全体に自然釉	E-20
40		燃焼室	椀	I	4.4	14.5	(3.7)	6.3				○	内面全体・外面口縁部自然釉	E-31
													重ね焼2枚	
41	18	燃焼室	椀	I	5.3	12.9	(4.5)	6.1			○	○	口縁一部自然釉	E-23
													外底部調整痕・重ね焼2枚	
42		燃焼室	椀	I	5.0	14.3	(4.2)	5.7				○	重ね焼2枚	E-61
43	18	燃焼室	椀	I	5.6	13.4	(4.6)	6.1			○	○	内面・外面共に自然釉	E-37
													外底部調整痕・重ね焼2枚	
44		燃焼室	椀	I A 1	5.1	13.8	(4.1)	5.9	37.0		○		内面・外面共に一部自然釉	E-64
													重ね焼2枚	
45		窯内	椀	I	5.6	14.0	(4.5)	5.9	(40.0)		○	○	外底部糸切痕・重ね焼2枚	E-16

黒笹G 2号古窯跡

図版番号		遺構・層位	種類		法 量					内底部 押圧痕	高台根痕	備 考	登録番号
実測図	写真図版		器種	分類	器高	口径	深さ	底径	径高指数				
46		窯内	椀	I	5.6	13.4	(4.2)	6.0			○	内面口縁一部自然釉・外底部糸切痕 重ね焼2枚	E-18
47	23	燃焼室	椀	I	5.2	14.4	(4.9)	6.0			○	外面一部自然釉・重ね焼3枚	E-33
48		燃焼室	椀	I	5.5	13.8	(4.1)	6.0			○	口縁一部自然釉 重ね焼3枚	E-62
49		燃焼室	椀	I	4.9	(14.2)	(3.9)	5.7			○	外底部調整痕・重ね焼5枚	E-38
50	23	燃焼室	椀	I	5.0	13.9	(4.3)	6.6			○	内面一部・外面口縁自然釉 重ね焼7枚	E-32
51		燃焼室	椀・焼台	I		14.4						内面自然釉、焼台付重ね焼15枚	E-63
52		燃焼室	椀・焼台	I		14.5						内面口縁部・外面口縁から胴部一部 自然釉、焼台付重ね焼17枚	E-65
53	23	分焰柱	椀	I	4.0	14.4		6.5				内面・外面共に自然釉、重ね焼16枚	E-66
54		障焰壁	椀・焼台	I		15.5						内面・外面共に自然釉 焼台付重ね焼14枚	E-67
55		燃焼室	焼台			(9.2)						指圧痕	E-68
56		燃焼室	焼台			(6.5)						指圧痕、高台の一部付着	E-69
57	25	焼成室	焼台			(10.1)						指圧痕	E-70
58	25	分焰柱付近	焼台			(8.2)						指圧痕	E-71
59	25	窯内	焼台			(11.2)						指圧痕、靱痕	E-72
60	25	窯内	焼台			(8.5)						指圧痕	E-73
61	25	窯内	焼台			(9.7)						指圧痕、高台の一部付着	E-74
62		窯内	焼台			(7.6)						指圧痕	E-75
63		燃焼室	皿	I A 1	2.0	8.1	1.1	4.7			○		E-3
64		燃焼室	皿	I A 2	1.6	8.0	1.0	5.2			○	外底部調整痕	E-6
65		燃焼室	皿	I A 2	1.7	7.9	1.0	4.1			○	外面全体に自然釉	E-76
66		燃焼室	皿	I B 1	2.0	8.0	1.5	4.7			○	内面一部・外面口縁部に自然釉 外底部調整痕	E-77
67		燃焼室	皿	I A 1	1.7	8.3	1.3	5.3			○	内面・外面共に一部自然釉 外底部調整痕	E-78
68		燃焼室	皿	I A 1	1.9	8.2	1.3	5.6			○	内面一部自然釉・外底部調整痕	E-79
69		燃焼室	皿	I B 1	2.0	8.1	1.5	5.6			○	内面自然釉・外底部調整痕	E-80
70		燃焼室	皿	I A 1	1.9	8.0	1.5	4.3			○	外底部調整痕	E-81
71		燃焼室	皿	I A 1	1.8	7.9	1.5	5.1			○	内面全体・外面口縁一部自然釉 外底部調整痕	E-82
72		燃焼室	皿	I B 1	1.5	8.0	0.6	5.0				内面全体・外面口縁一部自然釉 外底部調整痕	E-83
73		燃焼室	皿	I A 1	1.6	7.7	1.2	5.0				内面全体・外面口縁一部自然釉 外底部調整痕	E-84
74	24	燃焼室	皿	I A 1	1.6	8.4	0.9	5.3			○	内面全体自然釉、外底部調整痕	E-24
75	24	燃焼室	皿	I A 1	1.5	8.3	0.8	5.3			○	外面全体自然釉、外底部糸切痕	E-25
76		燃焼室	皿	I B 1	1.7	7.9	1.1	4.8			○	外底部調整痕	E-85
77		燃焼室	皿	I A 1	1.7	7.9	1.2	4.8			○	外底部調整痕	E-86
78		燃焼室	皿	I A 1	1.6	8.1	1.0	5.0			○	外底部調整痕	E-87
79		燃焼室	皿	I B 1	1.7	7.8	1.1	4.8			○	外底部調整痕	E-88
80		燃焼室	皿	I A 1	1.8	7.7	1.3	4.9			○	外底部調整痕	E-89
81		燃焼室	皿	I A 1	1.5	7.7	0.7	(5.1)				外面全体に自然釉	E-90
82		燃焼室	皿	I A 1	(1.7)	(7.3)	(1.0)	(4.7)			○	外底部調整痕	E-91
83		燃焼室	皿	I B 1	(1.9)	(8.0)	(1.1)	(4.9)			○	外底部調整痕	E-95
84		燃焼室	皿	I B 1	(1.4)	(7.7)		(4.9)			○	外面全体に自然釉	E-96
85		燃焼室	皿	I A 2	(1.2)	(8.8)		(6.0)			○	内面口縁から胴部に自然釉 外底部調整痕	E-97
86		燃焼室	皿	I A 1	(1.4)	(7.7)	(1.0)	4.8			○	外底部調整痕	E-103
87		分焰柱付近	皿	I B 1	1.7	7.6	1.2	4.9			○	外底部調整痕	E-39
88	24	分焰柱付近	皿	I A 1	1.6	7.8	1.0	4.7			○	外底部調整痕	E-42

図版番号		遺構・層位	種類		法 量						内底部 押圧痕	高台痕	備 考	登録番号	
実測図	写真図版		器種	分類	器高	口径	深さ	底径	径高指数	容積					
89	24	分焰柱付近	皿	I A 1	1.7	8.3	1.0	5.4				○		外面口縁部から内面へ一部 自然釉、外底部糸切痕	E-40
90	24	窯内床面	皿	I A 1	1.8	7.7	0.8	4.0				○		内面全体・外面口縁一部自然釉 外底部糸切痕	E-13
91	24	窯内床面	皿	I B 1	1.9	7.8	1.3	5.2						内面全体・外面口縁一部自然釉 外底部調整痕	E-14
92		窯内床面	皿	I A 1	1.8	8.2	1.1	5.4				○		内面全体・外面口縁一部自然釉 外底部調整痕	E-15
93		窯内床面	皿	I A 1	(1.6)	(8.6)	(1.1)	(5.6)				○		外面口縁端部自然釉 外底部調整痕	E-93
94		窯内床面	皿	I A 1	(1.6)	(8.6)		(5.9)							E-94
95	24	窯内床面	皿	I A 1	1.7	7.5	0.8	4.7				○		内面口縁一部自然釉 外底部調整痕	E-98
96	24	窯内床面	皿	I A 1	1.8	8.0	1.0	4.8				○		内面全体・外面口縁一部自然釉 外底部糸切痕	E-99
97	24	窯内床面	皿	I B 1	1.8	8.0	1.1	5.1				○		外面口縁一部自然釉 外底部調整痕	E-100
98		窯内床面	皿	I A 1	1.9	8.0	1.2	5.3				○		口縁部に自然釉 外底部調整痕	E-101
99	24	窯内床面	皿	I A 2	1.9	(8.0)	1.1	5.2				○		口縁一部に自然釉 外底部調整痕、重ね焼2枚	E-102
100		窯内床面	皿	I A 1	1.8	8.1	1.3	4.7				○		口縁一部に自然釉 外底部調整痕	E-104
101		窯内床面	皿	I B 1	2.0	8.2	1.4	4.8				○		外面口縁一部自然釉 外底部調整痕	E-105
102		窯内床面	皿	I A 1	1.8	8.1	1.2	4.8				○		内面・外面共に口縁一部自然釉 外底部調整痕	E-106
103		窯内床面	皿	I A 2	1.7	8.0	1.2	4.9						口縁から内部へ自然釉 外底部調整痕	E-108
104		窯内	皿	I A 1	1.7	7.9	1.2	5.2				○		内面自然釉、外底部糸切痕	E-55
105		窯内	皿	I A 1	(1.6)	(7.4)	(1.0)	(5.2)				○			E-92
106		窯内	皿	I A 1	1.6	8.0	1.2	5.6				○		内面口縁一部自然釉 外底部調整痕	E-107
107	26	燃焼室	陶丸		2.1	2.2								一部自然釉	E-110
108		窯内	陶丸		1.7	1.9								自然釉	E-56
109	26	燃焼室	特殊遺物		(2.2)									片面に自然釉、指圧痕	E-26
110	26	燃焼室	特殊遺物		1.9	6.8								片面に自然釉、指圧痕	E-109
111	19	前庭部	椀	I A 2	5.1	(14.0)	4.5	6.5	(36.4)			○	○	内面一部自然釉	E-111
112	19	前庭部	椀	I A 2	5.1	(14.0)	4.5	5.7	(36.4)			○	○	内面一部自然釉	E-112
113		前庭部	椀	I A 2	5.1	(14.5)	4.1	6.5	(35.2)				○	内面一部・外面全体自然釉 外底部調整痕	E-113
114	19	前庭部	椀	I A 2	5.8	(14.0)	5.0	6.5	(41.4)			○	○		E-114
115		前庭部	椀	I A 1	(5.3)	(14.0)	(5.0)	(6.5)	(37.9)			○	○	内面・外面共に口縁から胴部に 自然釉、外底部糸切痕	E-117
116		前庭部	椀	I A 2	(5.2)	(14.2)	(4.2)	6.0	(36.6)			○	○	内面・外面共に口縁から胴部に 自然釉、外底部調整痕	E-118
117		前庭部	椀	I A 2	(5.2)	(14.6)	(4.0)	(5.7)	(35.6)			○	○		E-119
118	19	前庭部	椀	I A 1	5.5	13.0	4.5	5.8	42.3	318		○	○	外底部調整痕	E-121
119	19	前庭部	椀	I A 1	4.7	14.3	3.9	6.8	32.9	317		○	○	口縁一部自然釉 外底部調整痕	E-122
120	19	前庭部	椀	I A 2	5.4	13.6	4.8	6.7	39.7	333		○	○	内面全体・外面口縁に自然釉 外底部調整痕	E-123
121	19	前庭部	椀	I A 2	5.0	14.0	4.1	5.7	35.7	331		○	○	口縁に自然釉	E-124

図版番号		遺構・層位	種類		法 量						内底部 押圧痕	高台痕	備 考	登録番号
実測図	写真図版		器種	分類	器高	口径	深さ	底径	径高指数	容積				
122		前庭部	椀	I A 1	5.0	13.0	4.6	6.2	38.5	258	○		内面一部自然釉 外底部調整痕	E-115
123		前庭部	椀	I A 1	(4.9)	(13.8)	(4.2)	(6.0)	(35.5)		○	○	内面・外面共に一部自然釉	E-127
124		前庭部	椀	I A 2	(5.2)	(14.0)	(4.4)	(5.8)	(37.1)		○	○		E-129
125		前庭部	椀	I A 1	5.1	(14.0)	(4.6)	(6.0)	(36.4)		○	○	外面口縁一部自然釉 外底部糸切痕	E-130
126		前庭部	椀	I A 2	(5.1)	(13.0)	(4.2)	(5.7)	(39.2)		○	○	内面口縁から胴部・外面口縁一部 自然釉、外底部糸切痕	E-131
127		前庭部	椀	I A 1	5.2	13.3	4.3	5.0	39.1	300	○	○	外底部調整痕	E-132
128		前庭部	椀	I A 2	(5.2)	(14.0)	(4.4)	(6.2)	(37.1)		○	○		E-133
129	19	前庭部	椀	I A 2	(5.8)	(12.7)	(5.2)	6.0	(45.7)		○	○	外底部調整痕	E-134
130	19	前庭部	椀	I A 1	5.1	13.3	4.5	6.1	38.3	306	○	○	内面一部・外面口縁一部自然釉 外底部調整痕	E-137
131	19	前庭部	椀	I A 1	5.0	14.5	4.2	6.8	34.5	335	○		内面・外面共に一部自然釉	E-138
132		前庭部	椀	I A 2	5.1	(14.0)	4.4	6.0	36.4	327	○	○	内面一部・外面口縁一部自然釉	E-139
133	20	前庭部	椀	I A 2	4.7	(14.5)	4.0	6.0	32.4	315	○	○	内面一部・外面口縁一部自然釉 外底部調整痕	E-140
134		前庭部	椀	I A 1	5.0	(14.5)	4.2	6.0	34.5	340	○	○	外底部調整痕	E-141
135		前庭部	椀	I A 2	5.1	(14.0)	3.8	5.7	(36.4)		○	○	外面全体に自然釉	E-142
136	20	前庭部	椀	I A 1	5.0	(14.0)	4.3	6.5	(35.7)		○	○	内面一部自然釉 外底部調整痕	E-143
137	20	前庭部	椀	I A 1	5.0	13.6	4.2	5.6	36.8	293	○	○	内面一部自然釉 外底部調整痕	E-144
138		前庭部	椀	I A 2	5.0	13.9	4.3	6.0	36.0	292	○	○	内面一部・外面口縁一部 自然釉、外底部調整痕	E-145
139		前庭部	椀	I A 1	5.6	(13.7)	5.0	5.2	(40.9)		○	○	外面口縁一部自然釉 外底部調整痕	E-147
140		前庭部	椀	I A 1	5.5	(14.0)	4.5	5.0	(39.3)		○	○	外底部調整痕	E-148
141		前庭部	椀	I A 1	5.4	13.6	4.7	6.4	39.7	332	○	○	外底部調整痕	E-151
142	20	前庭部	椀	I A 1	5.3	12.7	4.4	6.0	41.7	282	○	○	外面口縁一部自然釉 外底部調整痕	E-156
143		前庭部	椀	I A 2	5.4	(14.3)	4.8	(5.4)	(37.8)		○	○		E-158
144		前庭部	椀	I A 2	4.6	(13.5)	4.1	(5.0)	(34.1)		○	○	外底部調整痕	E-159
145		前庭部	椀	I A 1	4.6	(14.0)	3.9	(5.6)	(32.9)		○	○	内面一部・外面口縁一部自然釉 外底部調整痕	E-160
146		前庭部	椀	I A 2	5.4	13.9	4.9	6.9	38.8	368	○	○		E-161
147		前庭部	椀	I A 2	5.4	(13.4)	4.7	(6.3)	(40.3)		○			E-162
148		前庭部	椀	I A 2	5.3	(14.2)	4.6	5.4	(37.3)		○	○		E-163
149	20	前庭部	椀	I B 2	5.6	14.0	4.3	5.3	40.0	331	○	○		E-164
150		前庭部	椀	I A 1	5.0	13.2	4.1	6.0	37.9	295	○	○	内面・外面共に自然釉	E-165
151		前庭部	椀	I A 2	5.2	13.4	4.1	6.0	38.8	324		○	内面口縁一部・外面約1/2に 自然釉、外底部調整痕	E-166
152	20	前庭部	椀	I A 2	5.2	13.6	4.2	5.9	38.2	319	○	○	内面約1/2・外面口縁部に 自然釉、外底部調整痕	E-167
153		前庭部	椀	I A 1	(5.0)	(13.4)	(4.5)	(6.1)	(37.3)		○	○	口縁一部自然釉	E-168
154		前庭部	椀	I B 2	(4.6)	(13.6)	(3.2)	(5.4)	(33.8)			○	内面全体・外面口縁一部自然釉 外底部調整痕	E-172
155		前庭部	椀	I A 2	(5.2)	(14.6)	(4.4)	(6.8)	(35.6)		○		外底部調整痕	E-174
156		前庭部	椀	I A 1	5.5	13.8	4.5	6.0	39.9	341	○	○	外面口縁一部自然釉 外底部調整痕	E-175
157		前庭部	椀	I B 2	(5.6)	(14.6)	(4.3)	(6.6)	(38.4)			○	内面・外面共に一部自然釉	E-176
158	20	前庭部	椀	I B 2	5.7	14.3	4.2	6.1	39.9	344	○	○	内面・外面共に一部自然釉 外底部調整痕	E-177

図版番号		遺構・層位	種類		法 量						内底部 押圧痕	高台痕	備 考	登録番号
実測図	写真図版		器種	分類	器高	口径	深さ	底径	径高指数	容積				
159		前庭部	椀	I B 2	(4.8)	(14.3)	(3.7)	6.0	(33.6)		○	○	口縁一部自然釉 外底部糸切痕	E-178
160	20	前庭部	椀	I A 2	4.7	(14.0)	3.8	5.5	(33.6)			○	内面全体に自然釉	E-180
161	20	前庭部	椀	I A 1	5.1	14.0	4.4	6.4	36.4	355	○	○	外底部調整痕	E-181
162		前庭部	椀	I A 1	5.3	(14.0)		5.7			○	○	内面一部自然釉、重ね焼2枚	E-184
163		前庭部	椀	I A 1	5.1	(14.5)		6.8			○	○	内面一部自然釉、重ね焼2枚	E-185
164		前庭部	椀	I A 1	4.7	(14.0)		5.9			○	○	内面一部自然釉、重ね焼2枚	E-186
165		前庭部	椀	I	(5.0)	(13.8)	(4.2)	6.1			○	○	内面・外面共に一部自然釉 外底部調整痕、重ね焼2枚	E-135
166		前庭部	椀	I	(5.3)	(15.0)	(4.6)	(6.4)			○		内面・外面共に口縁から胴部へ 一部自然釉、重ね焼2枚	E-120
167		前庭部	椀	I	5.5	13.2	(4.5)	5.8			○	○	口縁一部自然釉 外底部調整痕、重ね焼2枚	E-152
168		前庭部	椀	I	4.9	13.5	(4.2)	(6.3)			○	○	内面・外面共に一部自然釉 外底部調整痕、重ね焼3枚	E-136
169		前庭部	椀	I	4.7	13.2		6.5			○	○	内面・外面共に一部自然釉 重ね焼3枚	E-183
170	20	前庭部	椀	I	5.3	13.3		5.7			○	○	内面一部・外面口縁一部自然釉 重ね焼3枚	E-182
171	20	前庭部	椀	I	(5.5)	(14.0)		6.0			○	○	口縁一部自然釉 重ね焼3枚	E-189
172		前庭部	椀	I	4.9	14.3	(4.0)	5.6			○	○	内面・外面共に1/2に自然釉 外底部調整痕、重ね焼3枚	E-157
173		前庭部	椀	I	5.0	(13.1)	(4.5)	5.7			○	○	内面全体・外面一部自然釉 重ね焼3枚	E-126
174		前庭部	椀	I	5.0	14.0					○	○	外面口縁一部自然釉 外底部調整痕、重ね焼4枚	E-146
175	20	前庭部	椀	I	5.6	13.0	(4.5)	6.0				○	内面・外面共に一部自然釉 外底部糸切痕、重ね焼2枚	E-169
176		前庭部	椀	I A 1	(4.6)	(14.4)	(3.5)	(5.4)			○	○	内面・外面共に一部自然釉 外底部調整痕、重ね焼2枚	E-171
177		前庭部	椀	I	5.4	14.7	(4.4)	(6.2)					内面・外面共に一部自然釉 外底部調整痕、重ね焼3枚	E-170
178		前庭部	椀	I				5.3			○	○	外底部調整痕、重ね焼5枚	E-190
179		前庭部	椀	I	5.4	13.6	(4.5)	5.7			○	○	外底部調整痕、重ね焼4枚	E-191
180		前庭部	椀	I	(4.9)	13.3	(3.8)	5.8			○	○	内面全体・外面口縁部自然釉 外底部糸切痕、重ね焼6枚	E-179
181		前庭部	椀	I	5.1	12.4	(4.0)	5.3			○	○	内面・外面共に一部自然釉 外底部調整痕、重ね焼6枚	E-173
182	23	前庭部	椀	I				6.0				○	外面口縁から胴部へ一部自然釉 重ね焼11枚	E-192
183		前庭部	椀	I	5.7	13.5	(4.8)	6.0			○		口縁一部自然釉 外底部調整痕、重ね焼7枚	E-150
184	23	前庭部	椀	I		14.0					○	○	外面一部自然釉、重ね焼8枚	E-188
185	23	前庭部	椀	I	5.1	13.1	(4.4)	(6.4)			○	○	外面一部自然釉、重ね焼11枚	E-128
186	23	前庭部	椀	I		13.5						○	内面・外面一部自然釉 重ね焼14枚	E-187
187	23	前庭部	椀・焼台	I									重ね焼24枚	E-193
188	24	前庭部	皿	I B 1	1.9	7.9	1.2	4.7			○		外底部調整痕	E-125
189		前庭部	皿	I A 1	1.8	7.7	1.0	5.0			○		内面全体に自然釉、外底部糸切痕	E-155
190		前庭部	皿	I B 1	1.6	8.1	1.0	4.8			○		内面1/2に自然釉	E-149
191		前庭部	皿	I B 1	1.7	8.0	1.0	5.0			○		外面全体に自然釉、外底部糸切痕	E-153
192		前庭部	皿	I A 1	1.8	8.1	1.2	5.1			○		内面全体に自然釉、外底部糸切痕	E-154
193	24	前庭部	皿	I B 1	1.2	7.6	1.0	5.1					内面全体・外面一部自然釉	E-116

黒笹G2号古窯跡

図版番号		遺構・層位	種類		法 量						内底部 押圧痕	高台痕	備 考	登録番号	
実測図	写真図版		器種	分類	器高	口径	深さ	底径	径高指数	容積					
														重ね焼2枚	
194	25	前庭部	焼台		(11.0)									指圧痕、内部植物繊維痕	E-194
195	25	前庭部	焼台		(9.9)									指圧痕、椀高台の一部付着	E-195
196		SK01(上層)	椀	I A 1	5.7	15.1	4.5	5.2	37.7	444	○	○		外底部調整痕	E-198
197	21	SK01(上層)	椀	I A 2	(5.0)	(14.1)	(4.1)	6.3	(35.5)		○	○		内面口縁から胴部へ外面口縁部	E-201
														自然釉、外底部調整痕	
198		SK01(上層)	椀	I A 2	5.1	15.0	4.1	6.3	34.0	379	○	○		内面口縁の一部・外面口縁から	E-205
														胴部へ自然釉	
199		SK01(上層)	椀	I	5.1	15.4	(3.9)	5.6				○		内面・外面共に一部自然釉	E-196
														外底部調整痕、重ね焼3枚	
200	21	SK01(下層)	椀	I A 2	5.0	14.2	4.1	6.2	35.2	358	○	○		口縁部自然釉	E-199
														外底部糸切痕	
201	21	SK01(下層)	椀	I A 2	5.3	14.5	4.1	6.2	36.6	363	○	○		内面全体・外面口縁部自然釉	E-200
202		SK01(下層)	椀	I A 2	5.0	14.8	4.3	6.0	33.8	368	○	○		内面全体・外面口縁部自然釉	E-202
														外底部調整痕	
203		SK01(下層)	椀	I A 2	4.9	14.1	4.0	5.5	34.8	303	○	○		内面全体・外面口縁部自然釉	E-203
204	21	SK01(下層)	椀	I A 2	(5.2)	15.4	4.4	(6.5)	(33.8)	409	○			外底部調整痕	E-208
205	21	SK01(下層)	椀	I A 2	4.6	14.4	3.7	5.9	31.9	330	○	○		口縁から内面・外面へ一部	E-209
														自然釉、外底部調整痕	
206	21	SK01(下層)	椀	I A 2	5.3	14.9	4.5	6.3	35.6	410	○	○		口縁から内面・外面へ一部	E-211
														自然釉、外底部調整痕	
207	21	SK01(下層)	椀	I A 2	5.2	13.9	4.2	6.5	37.4	344	○	○		口縁部自然釉、外底部調整痕	E-214
208	21	SK01(下層)	椀	I A 2	4.9	14.4	3.7	6.5	34.0	298		○		外底部調整痕	E-215
209	21	SK01(下層)	椀	I A 2	5.6	14.3	4.4	6.0	39.2	367		○		外底部調整痕	E-216
210	21	SK01(下層)	椀	I B 2	5.3	13.6	4.0	(5.7)	39.0	309	○	○		内面全体・外面口縁一部自然釉	E-217
211		SK01(下層)	椀	I A 2	5.1	14.9	4.2	6.2	34.2	351	○	○		口縁から内面・外面へ一部	E-218
														自然釉、外底部調整痕	
212		SK01(下層)	椀	I A 2	5.0	14.0	4.2	6.1	35.7	315	○	○		内面全体・外面口縁自然釉	E-219
														外底部糸切痕	
213	21	SK01(下層)	椀	I A 2	5.2	15.2	4.3	7.3	34.2	360		○		外底部調整痕	E-221
214		SK01(下層)	椀	I A 2	5.3	14.4	4.4	6.5	36.8	331		○			E-222
215		SK01(下層)	椀	I B 2	5.4	14.6	4.1	6.5	37.0	345		○			E-223
216		SK01(下層)	椀	I A 2	5.2	14.6	4.4	6.5	35.6	358				内面一部自然釉、外底部調整痕	E-224
217		SK01(下層)	椀	I A 2	4.7	15.0	4.1	6.4	31.3	331	○	○		口縁一部自然釉	E-225
218	21	SK01(下層)	椀	I A 2	5.2	(15.0)	4.4	6.7	(34.7)	368	○	○		内面全体・外面口縁一部自然釉	E-226
219	22	SK01(下層)	椀	I A 2	5.3	14.9	4.1	6.1	35.6	409		○		口縁から内面・外面へ一部自然釉	E-204
														外底部調整痕	
220	22	SK01(下層)	椀	I A 2	5.2	15.6	4.3	6.0	33.3		○	○		口縁から内面へ自然釉	E-229
221	22	SK01(下層)	椀	I	5.1	14.9	(4.1)	5.6				○		口縁から内面全体・外面一部	E-197
														自然釉、外底部調整痕、重ね焼2枚	
222		SK01(下層)	椀	I	5.2	14.1	(4.3)	6.3			○	○		内面全体・外面口縁部自然釉	E-212
														外底部調整痕、重ね焼2枚	
223		SK01	椀・焼台	I		(14.1)					○			内面・外面共に全体に自然釉	E-228
														焼台付重ね焼12枚	
224	23	SK01(付属坑)	椀	I										内面全体・外面口縁自然釉	E-220
														重ね焼26枚	
225		SK01(下層)	皿	I A 1	1.9	8.3	1.0	5.0						外底部調整痕	E-210
226	26	SK01(上層)	皿	I	2.3	(13.1)	1.6	(5.2)						大きい皿、内面全体に自然釉	E-213
					1.3	(4.6)	0.9	(3.0)						小さい皿、内面全体に自然釉	
														大きい皿の中に小さい皿が くっついたままである。	
227		SK02	椀	I A 2	5.0	(14.0)	4.1	5.9	(35.7)	317	○	○		内面全体・外面口縁一部自然釉	E-227
														外底部調整痕	
228		SK03	椀	I A 2	(5.2)	(13.8)	(4.3)	6.0	(37.7)		○			口縁部から内面へ自然釉	E-233
														外底部調整痕	

図版番号		遺構・層位	種類		法 量						内底部 押圧痕	高台 痕	備 考	登録番号	
実測図	写真図版		器種	分類	器高	口径	深さ	底径	径高指数	容積					
229		SD01	椀	I		14.6	3.3	(5.3)						外面一部自然釉、重ね焼2枚	E-207
230		SD01	椀	I	4.7	14.1	(3.8)	5.5				○		内面一部自然釉、外底部調整痕 重ね焼3枚	E-206
231		SD01	皿	I A 2	1.7	8.9	1.2	5.6				○		口縁から内面へ一部自然釉 外底部糸切痕	E-231
232		SD01	焼台			(9.0)								指圧痕	E-234
233		SD02(下層)	椀	I A 2	(4.7)	(12.8)	(3.6)	5.5				○	○	口縁の一部自然釉	E-232
234		SD02(下層)	陶丸		1.8	2.1								一部自然釉、靱痕有り	E-230
235	22	灰層上面	椀	I A 1	5.2	13.8	4.2	5.8	37.7	314		○	○	口縁一部自然釉、外底部調整痕	E-238
236		灰層上面	椀	I A 2	5.2	14.1	4.0	5.6	36.9	274		○	○	口縁部自然釉、外底部調整痕	E-242
237	22	灰層 I (上層)	椀	I A 1	4.6	12.8	3.8	5.0	35.9	240			○	内面全体・外面口縁自然釉 外底部調整痕	E-248
238		灰層 I (上層)	椀	I A 1	4.7	14.5	3.3	5.7	32.4	288		○	○	内面全体・外面口縁自然釉	E-250
239	22	灰層 I (下層)	椀	I A 1	4.9	14.2	3.7	5.4	34.5	310		○	○	口縁一部自然釉、外底部調整痕	E-247
240	22	灰層 I	椀	I A 2	4.6	(14.3)	3.7	5.6	(32.2)			○	○	口縁一部自然釉	E-237
241		灰層 I	椀	I A 2	(5.2)	(14.2)	(4.0)	5.8	36.6	307		○	○		E-254
242	22	灰層 I	椀	I A 2	4.9	14.3	3.8	6.0	34.3	272		○	○	口縁部自然釉	E-256
243		灰層 I	椀	I A 1	(5.5)	(14.0)	(4.2)	6.0	39.3	350		○	○		E-257
244		灰層 I	椀	I A 2	4.9	14.1	3.9	6.2	34.8	307		○	○	内面約1/2、口縁一部自然釉 外底部調整痕	E-259
245		灰層 I	椀	I A 1	(4.8)	(14.6)	(3.7)	5.2	(32.9)			○	○	口縁部自然釉、外底部調整痕	E-260
246		灰層II(ベルト)	椀	I A 1	5.4	14.3	4.2	5.5	37.8	362		○	○	口縁一部自然釉、外底部調整痕	E-261
247		灰層 I	椀	I A 1	(5.1)	13.0	4.0	(6.0)	39.2	283				口縁一部自然釉、外底部糸切痕	E-262
248		灰層 I	椀	I A 2	5.4	13.9	4.5	6.4	38.8	366		○	○	口縁部から内面胴部へ自然釉	E-266
249		灰層 I	椀	I A 2	4.7	13.7	3.7	5.7	34.3	279		○	○	内面底部を除く約1/2と 外面口縁一部に自然釉	E-245
250		灰層 I	椀	I A 1	(4.9)	14.3	3.8		34.3	309		○	○		E-243
251		灰層 I	椀	I A 1	(4.7)	(14.1)	(3.8)	(5.4)	(33.3)			○	○	口縁部から内面胴部へ自然釉 外底部調整痕	E-272
252	22	灰層 I	椀	I B 2	5.3	14.9	4.1	6.0	35.6	378		○	○	口縁一部自然釉、外底部調整痕	E-274
253		灰層 I	椀	I A 2	5.1	14.2	3.8	5.8	35.9	279		○	○		E-276
254		灰層 I	椀	I A 2	5.0	14.2	4.0	5.9	35.2	320		○	○	口縁から内面全体に自然釉 外底部調整痕	E-280
255		灰層 I	椀	I A 2	4.7	(14.2)	3.7	5.6	(33.1)			○	○	底部を除いた内面と口縁部に 自然釉、外底部調整痕	E-284
256		灰層 II	椀	I A 2	(5.2)	(14.1)	(3.9)	5.0	36.9	316		○	○	口縁部自然釉、重ね焼2枚	E-286
257		灰層II(ベルト)	椀	I A 2	(4.7)	(14.1)	(3.4)	5.9	33.3	313		○	○	外底部調整痕	E-253
258		灰層 II	椀	I A 1	(5.4)	(14.4)	(4.2)	5.8	37.5	356		○	○	外底部調整痕	E-263
259		灰層II(ベルト)	椀	I A 2	5.3	14.0	4.5	(6.4)	37.9	334		○	○	内面口縁一部自然釉	E-267
260		灰層II(ベルト)	椀	I A 1	(5.4)	14.6	(4.0)	(4.8)	37.0	347		○	○	内面全体、外面口縁部自然釉	E-246
261		灰層II(ベルト)	椀	I A 2	5.0	(14.6)	3.7	5.7	(34.2)			○	○	口縁部自然釉、外底部調整痕	E-251
262		灰層II(ベルト)	椀	I A 1	(4.4)	(13.6)	(3.3)	5.2	32.4	234		○	○	内面口縁から胴部、外面全体自然釉	E-239
263		灰層II(ベルト)	椀	I A 2	4.8	13.6	3.8	5.8	35.3	274		○	○	内面口縁一部自然釉 外底部糸切痕	E-240
264	22	灰層 II	椀	II B 1	5.1	(15.5)	4.2	6.4	(32.9)			○	○	外底部糸切痕、内面布目跡 無高台	E-291
265	22	灰層II(ベルト)	椀	I A 1	4.8	14.6	3.9	(6.0)	32.9	360		○	○	内面全体自然釉、外底部調整痕	E-270
266		灰層II(ベルト)	椀	I B 2	(5.1)	14.7	3.9	(6.2)	34.7	342		○	○	外底部糸切痕	E-271
267		トレンチ内	椀	I A 1	4.8	14.8	3.6	5.9	32.4	323		○	○	口縁部自然釉	E-236
268		トレンチ内	椀	I A 2	5.2	14.5	4.4	6.4	35.9			○	○		E-277
269		トレンチ内	椀	I A 2	4.6	14.4	3.5	5.8	31.9			○	○	口縁部自然釉	E-282
270		トレンチ内	椀	I A 2	5.0	13.5	3.9	6.1	37.0	286		○	○	内面口縁一部、外面口縁部自然釉	E-283
271		トレンチ内	椀	I A 2	5.3	(14.3)	4.3	(5.6)	(37.1)			○	○	内面口縁一部自然釉 外底部調整痕	E-285

黒笹G 2号古窯跡

図版番号		遺構・層位	種類		法 量					内底部 押圧痕	高台板痕	備 考	登録番号
実測図	写真図版		器種	分類	器高	口径	深さ	底径	径高指数				
272		谷底	椀	I A 1	4.8	14.6	3.6	(5.5)	37.9	293	○	内面全体、外面口縁部自然釉 外底部糸切痕	E-269
273		灰層 I	椀	I A 1	4.6	12.8	(3.7)	5.1			○	口縁から内面胴部へ自然釉 外底部調整痕、重ね焼 2 枚	E-235
274		灰層 I	椀	I	5.0	14.5	(3.9)	6.3			○	口縁から内面胴部へ自然釉 外底部調整痕、重ね焼 2 枚	E-264
275		灰層 I	椀	I	5.0		(4.0)	5.8			○	底面を除いた内面と口縁部に 自然釉、外底部調整痕、重ね焼 3 枚	E-252
276		トレンチ内	椀	I	5.0	14.2	(3.9)	6.1			○	口縁一部に自然釉、重ね焼 3 枚	E-287
277		谷底	椀	I	5.0	13.8	(4.0)	5.3			○	内面全体と口縁部に自然釉 重ね焼 3 枚	E-275
278		谷	椀	I	5.0	(13.6)	(4.0)	5.7			○	内面全体、外面口縁から胴部に 自然釉、外底部糸切痕、重ね焼 4 枚	E-292
279		灰層 I	椀	I	(4.8)	(14.8)	(3.8)	6.0			○	内面全体、外面口縁から胴部に 自然釉、重ね焼 6 枚	E-293
280		灰層 I	椀	I				6.8			○	内面、外面全体に自然釉 外底部調整痕、重ね焼 9 枚	E-294
281	23	灰層 I	椀・焼台	I								内面、外面全体に自然釉 重ね焼 21 枚	E-297
282		灰層 I 上面	皿	I A 1	1.8	7.8	1.0	5.1			○	外底部調整痕	E-265
283	24	灰層 I 上面	皿	I A 1	1.4	8.2	0.8	5.9				内面全体にうすく自然釉 外底部調整痕	E-268
284	24	灰層 I 上面	皿	I A 2	1.5	8.0	0.9	5.2				外面口縁一部自然釉 外底部調整痕	E-298
285	24	灰層 I 上面	皿	I B 1	1.6	7.9	1.0	5.1				口縁から内面へ自然釉 外底部調整痕	E-302
286	24	灰層 I	皿	I A 1	1.8	8.0	1.2	4.9			○	口縁から内面へ自然釉 外底部調整痕	E-304
287		灰層 I	皿	I A 1	1.7	8.3	1.0	4.9			○	内面全体、外面口縁部自然釉 外底部調整痕	E-255
288		灰層 I	皿	I A 1	1.7	7.2	1.1	4.2			○	口縁部から内面胴部へ一部 自然釉、外底部調整痕	E-258
289		灰層 I	皿	I A 1	1.6	8.5	1.1	5.6				外底部調整痕	E-301
290		灰層 I	皿	I B 1	1.8	8.3	1.1	5.4				口縁から内面全体へ自然釉 外底部調整痕	E-307
291		灰層 I	皿	I A 2	1.6	8.3	1.0	5.1				外面口縁一部自然釉 外底部調整痕	E-308
292		灰層 I	皿	I A 1	1.5	8.7	0.9	5.3				口縁から内面へ自然釉 外底部糸切痕	E-309
293		灰層 I	皿	I A 1	1.7	8.3	1.2	5.7			○	外面口縁一部自然釉 外底部糸切痕	E-241
294		灰層 I	皿	I A 1	1.8	(8.0)	1.1	(5.6)				外底部糸切痕	E-313
295		灰層 I	皿	I A 1	1.6	8.8	0.9	5.7				口縁一部自然釉、外底部糸切痕	E-312
296		灰層 I	皿	I B 1	1.5	(7.6)	0.9	(4.7)			○	内面全体、外面口縁部自然釉 外底部調整痕	E-314
297		灰層 I	皿	I A 1	1.7	(7.9)	1.1	(5.2)			○	内面全体、外面口縁部自然釉 外底部調整痕	E-315
298		灰層 I	皿	I A 1	(2.0)	(7.8)	(1.4)	4.8				外底部調整痕	E-288
299		灰層 I	皿	I A 1	1.5	7.9	0.9	4.7				内面全体、外面口縁部自然釉 外底部調整痕	E-289
300		灰層 I	皿	I B 1	2.0		1.1	4.6			○	内面口縁部自然釉、外底部糸切痕	E-310
301	24	谷	皿	I B 2	1.4	7.8	0.6	4.0			○	内面胴部 1/2 自然釉 外底部調整痕	E-244
302	24	灰層 I	皿	I B 1	1.8	7.4	(1.1)	4.5				内面全体、外面口縁部自然釉 外底部調整痕、重ね焼 2 枚	E-249

図版番号		遺構・層位	種類		法 量						内底部 押圧痕	高台榫痕	備 考	登録番号
実測図	写真図版		器種	分類	器高	口径	深さ	底径	径高指数	容積				
303		灰層 I	皿	I A 1	1.7	8.4	(1.1)	5.6			○		内面全体、外面口縁一部自然釉 外底部調整痕、重ね焼 2 枚	E-273
304	24	灰層 I	椀	I				(5.4)					口縁から内面胴部へ自然釉 外底部調整痕	E-290
			皿	I		7.5	0.9				○		口縁から内面胴部、外面口縁部 自然釉	
305	26	灰層 I	椀? (原図か?)	I	3.3	4.9	(2.7)	6.5	67.3	20			内面全体、外面口縁一部自然釉 外底部調整痕	E-295
306	26	灰層 I	椀 陶丸	I A 2	5.1	14.0	4.8	6.9	36.4	337	○	○	内面口縁一部自然釉 陶丸34個入り	E-296
307	26	灰層 I	椀 陶丸	I	3.4								椀の内底部に陶丸が付着 したままのもの	E-299
308		灰層 I	椀 陶丸 1 陶丸 2	I		1.9 2.1	2.0 1.9						外面自然釉 一部自然釉 一部自然釉	E-303
309		谷	椀 陶丸	I		1.8							口縁部のみ残存、自然釉 下部を除いて自然釉	E-311
310		灰層 I	陶丸			1.9	2.0						一部自然釉	E-300
311		トレンチ内	陶丸			2.0	1.9						全体に自然釉	E-306
312		灰層 I	焼台			8.3							指圧痕、高台の一部付着	E-316
313	26	灰層 I	特殊遺物			1.7							片面自然釉、靱痕 植物繊維痕	E-279
314	26	灰層 I	特殊遺物			5.6							一部自然釉、指頭圧痕	E-281
315	26	灰層 I	特殊遺物			2.2							全体に自然釉、指頭圧痕	E-278
316	26	トレンチ内	トチン			1.8							末端上下以外全体に自然釉 押圧痕	E-305

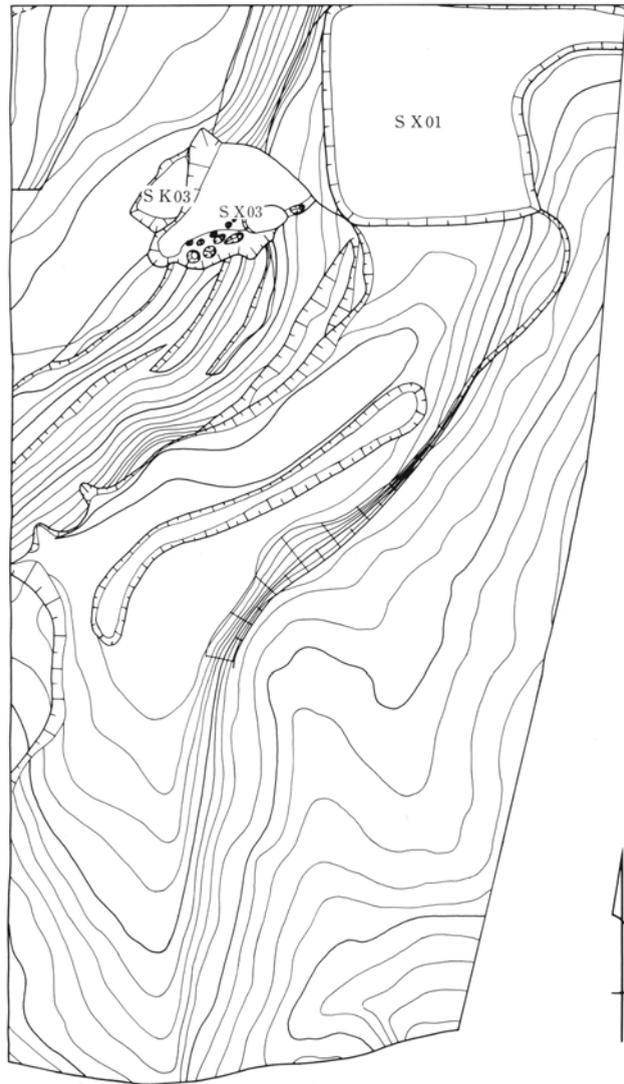
図 版

図版1 遺構実測図(1)



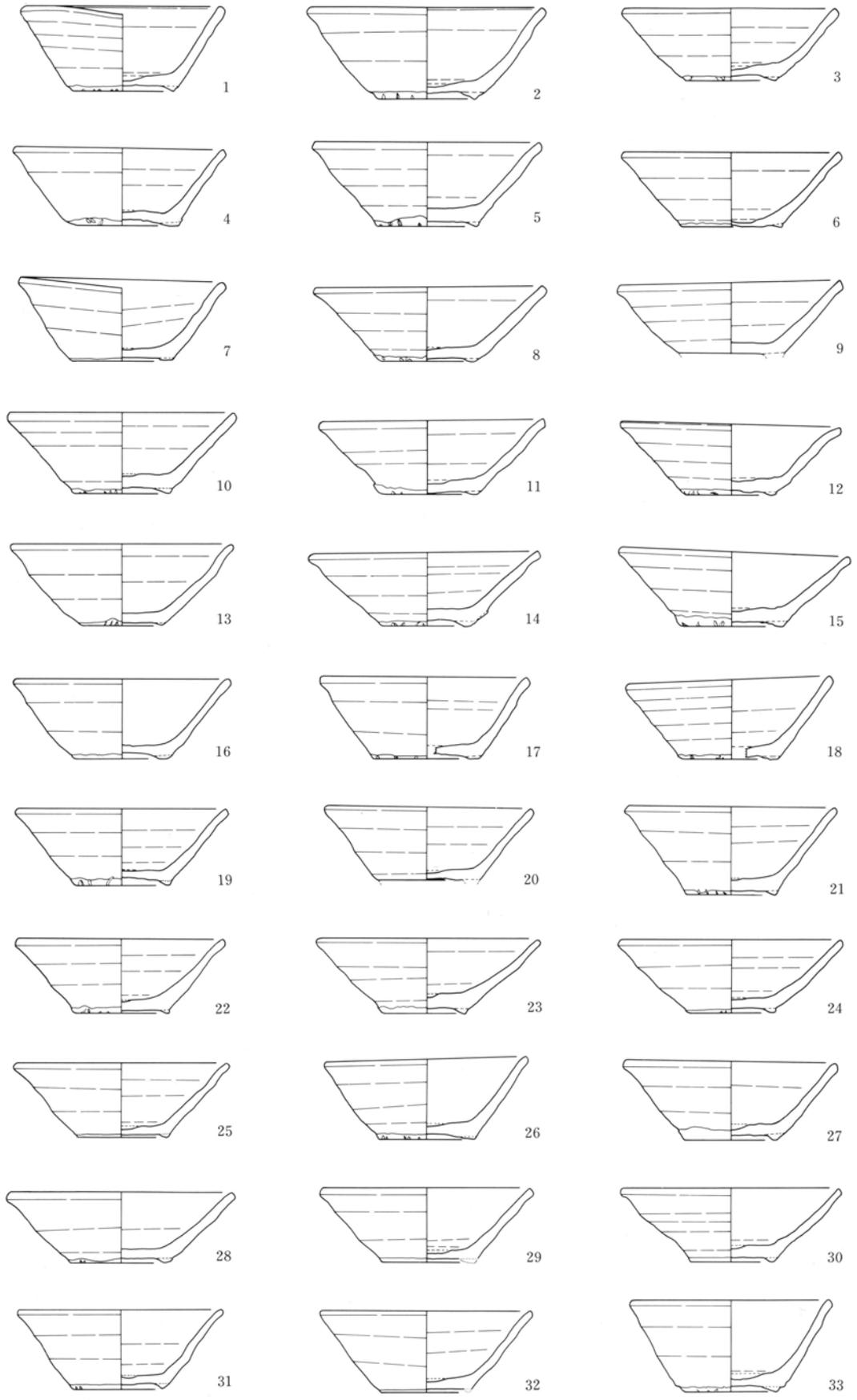
0 10m

遺構実測図(1) (窯体含) (1 : 200)



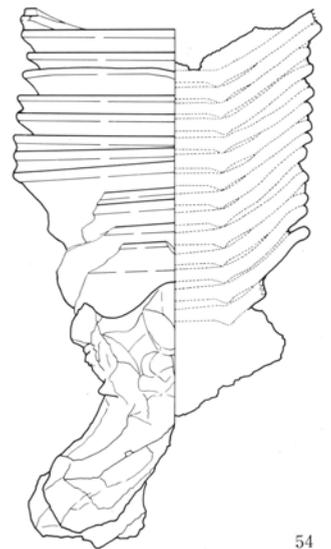
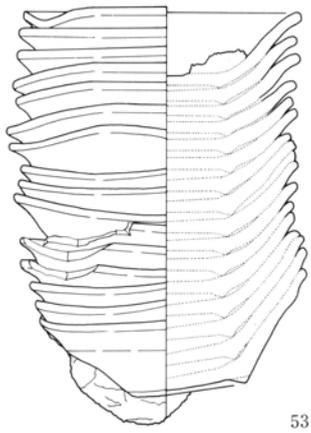
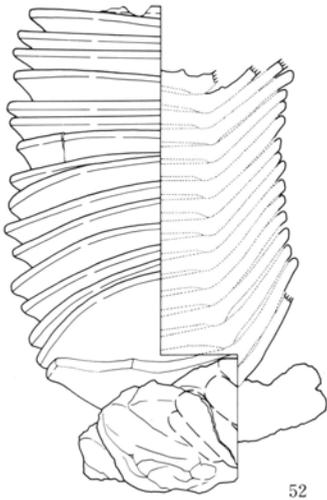
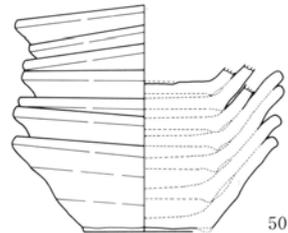
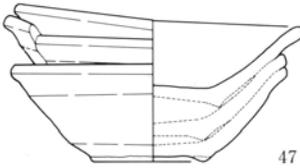
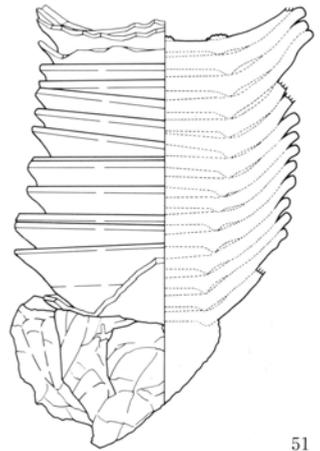
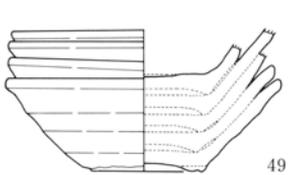
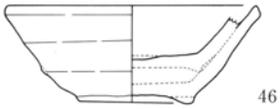
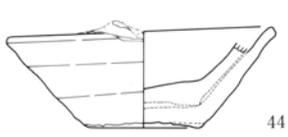
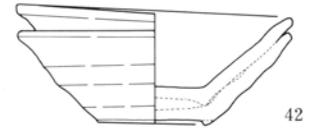
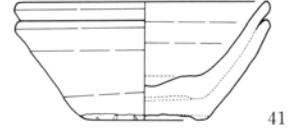
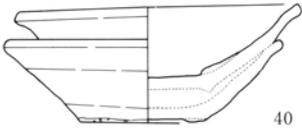
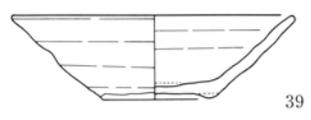
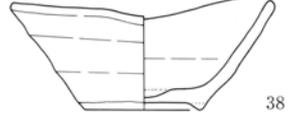
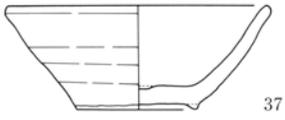
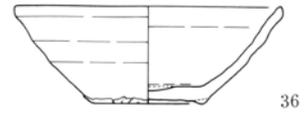
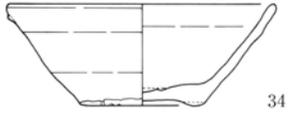
遺構実測図 (2) (1 : 200)

图版3 遗物实测图(1)



S Y

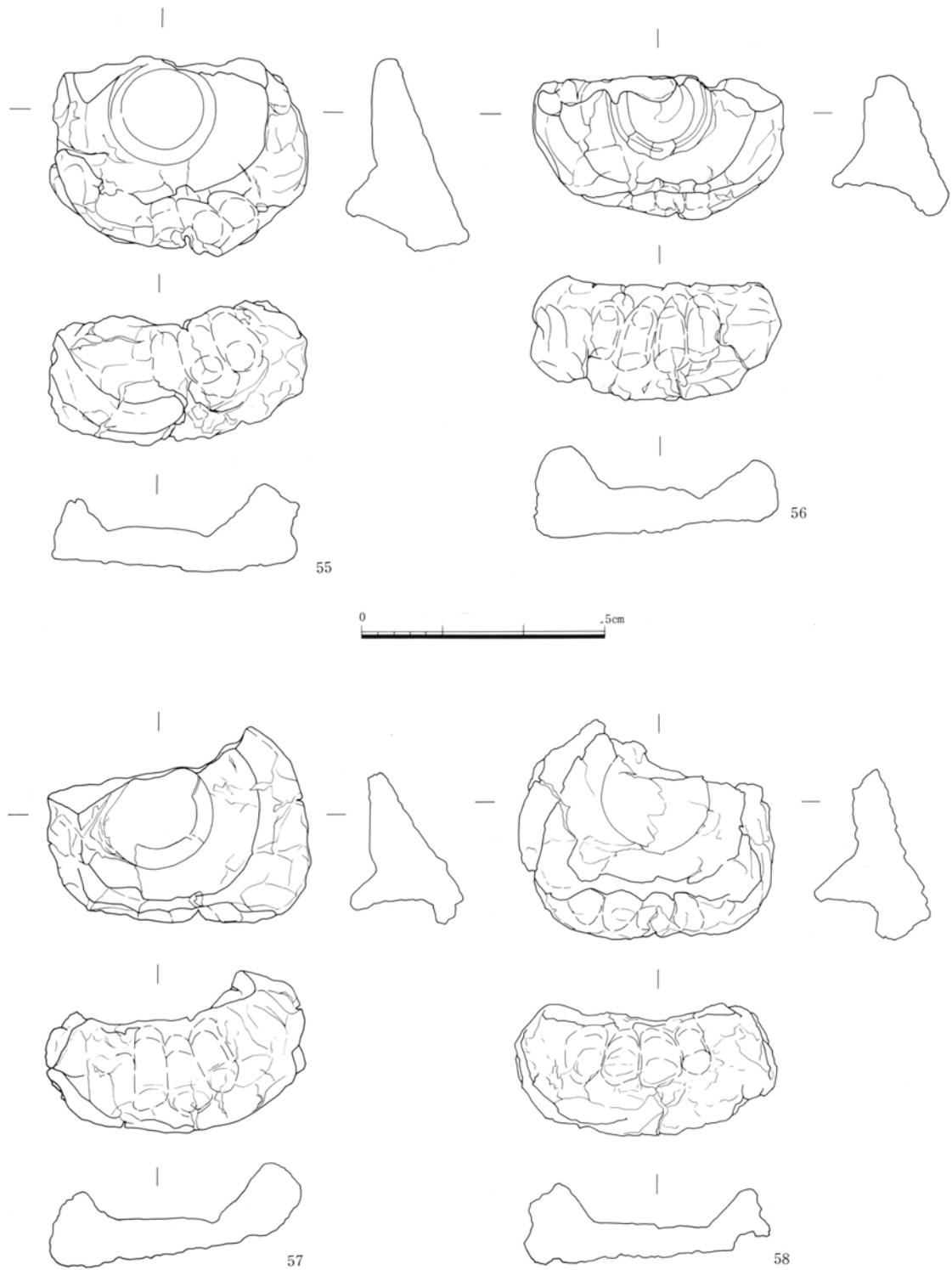
0 15cm



S Y

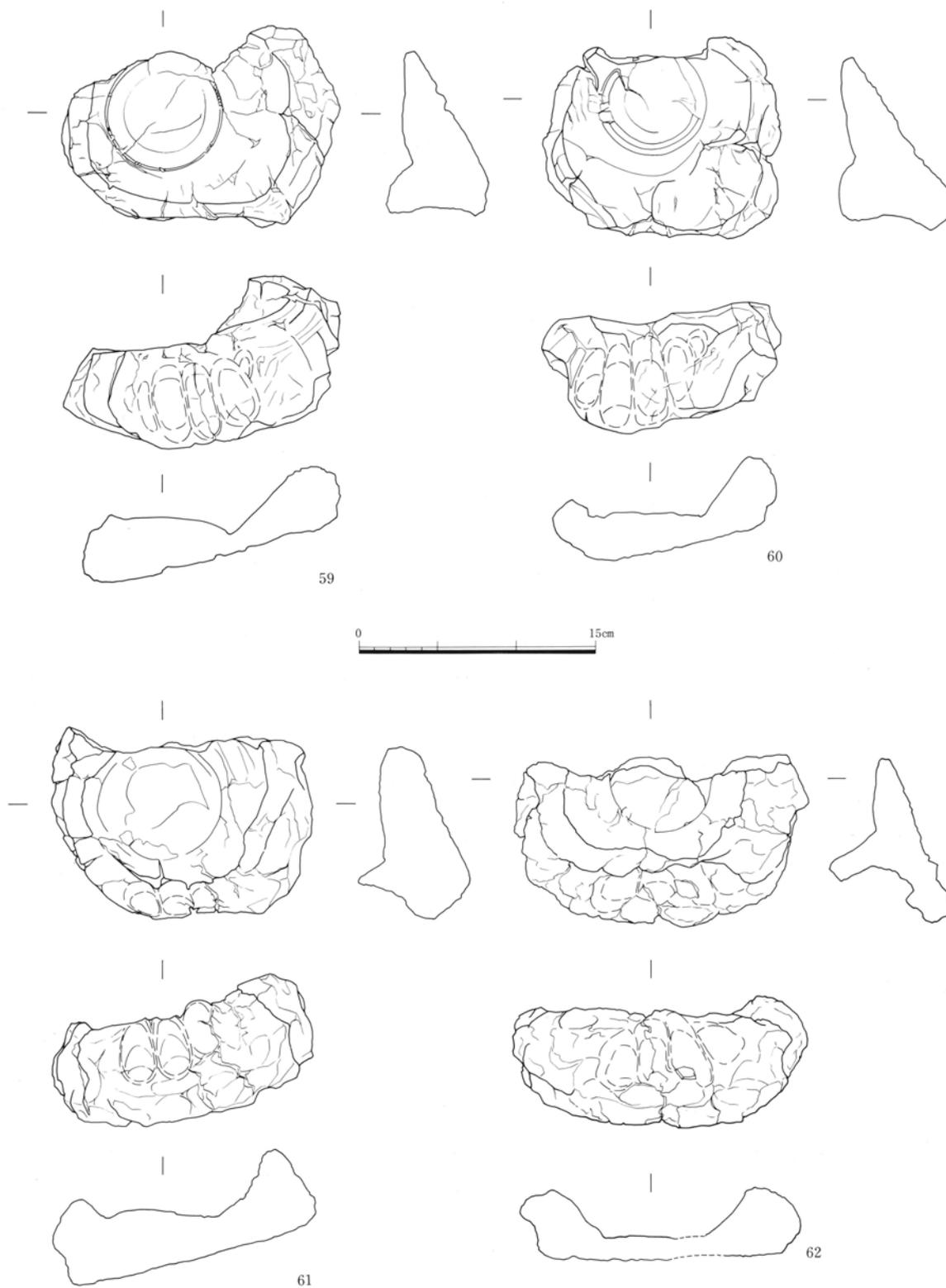
0 15cm

图版5 遗物实测图 (3)



图版番号	底径 X	比高差 Y	$Y/X = \sin\theta$	θ	備考	图版番号	底径 X	比高差 Y	$Y/X = \sin\theta$	θ	備考
55	11.6cm	4.9cm	0.4224	25°		56	7.2cm	2.6cm	0.3611	21°	
57	9.0cm	5.0cm	0.5556	34°		58	9.4cm	2.9cm	0.3085	18°	

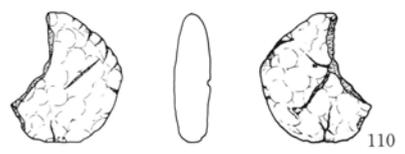
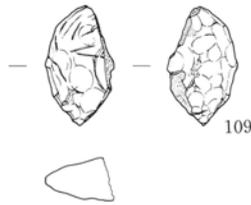
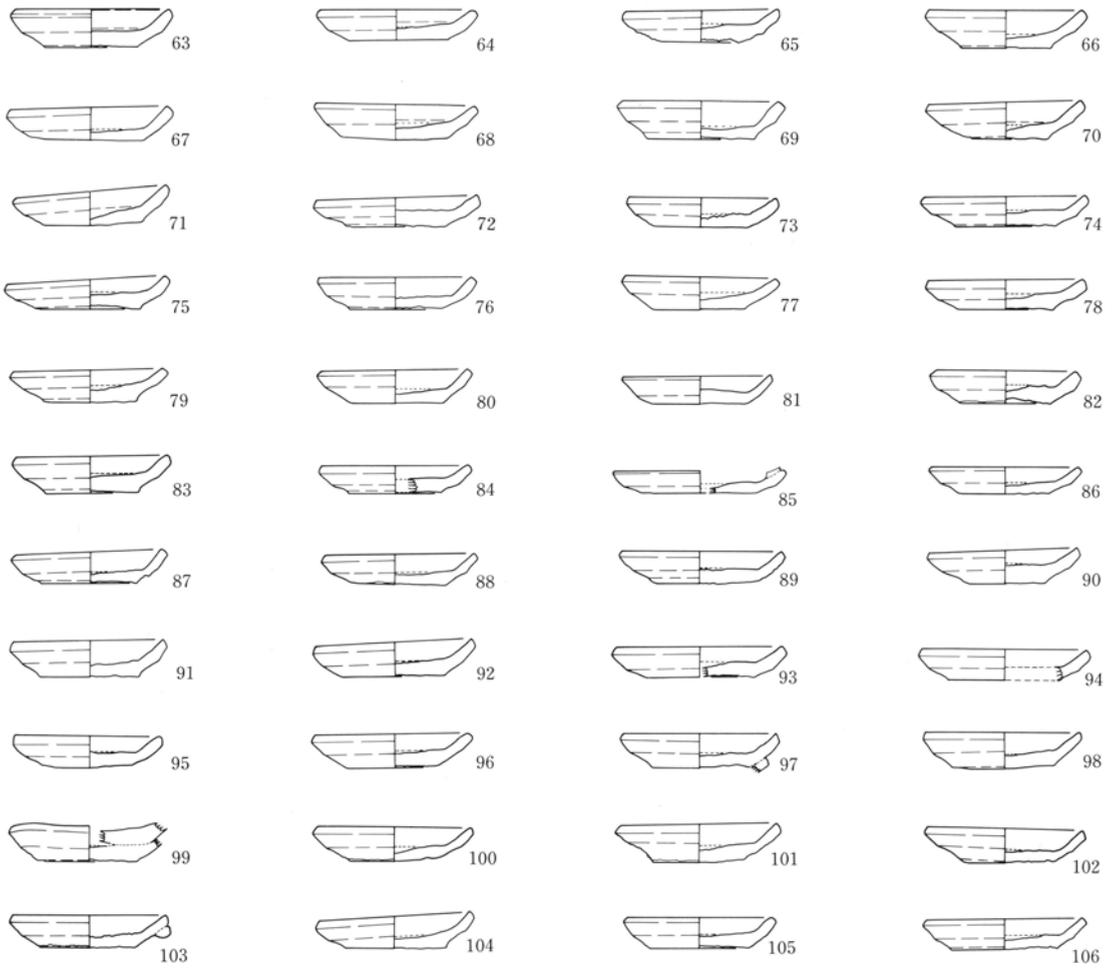
SY・烧台



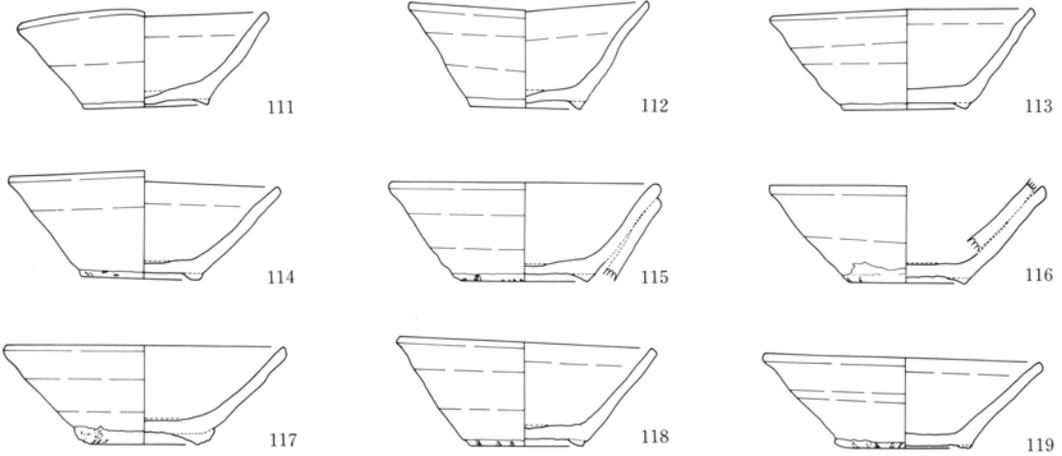
図版番号	底径 X	比高差 Y	$Y/X = \sin\theta$	θ	備考	図版番号	底径 X	比高差 Y	$Y/X = \sin\theta$	θ	備考
59	9.4cm	4.0cm	0.4255	25°	靱跡	60	11.0cm	5.0cm	0.4545	27°	
61	8.2cm	3.3cm	0.4024	24°		62	9.4cm	4.1cm	0.4362	26°	

SY・焼台

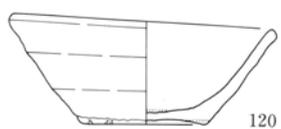
图版7 遗物实测图 (5)



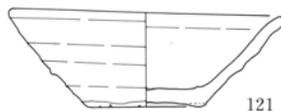
前庭部



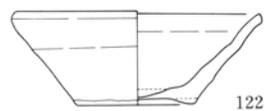
S Y · 前庭部



120



121



122



123



124



125



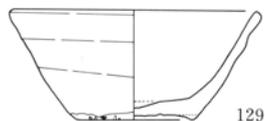
126



127



128



129



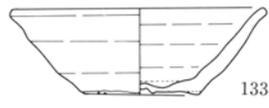
130



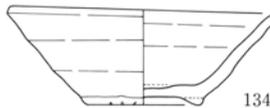
131



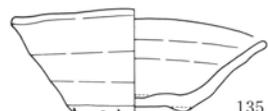
132



133



134



135



136



137



138



139



140



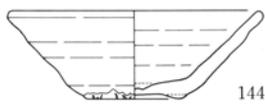
141



142



143



144



145



146



147



148



149



150



151



152

前庭部



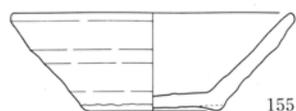
图版9 遗物实测图(7)



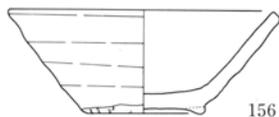
153



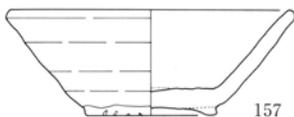
154



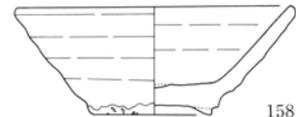
155



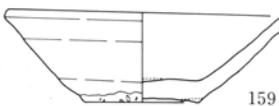
156



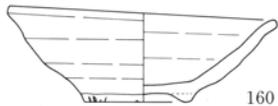
157



158



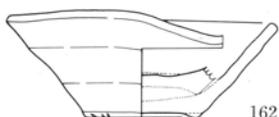
159



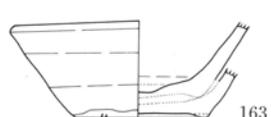
160



161



162



163



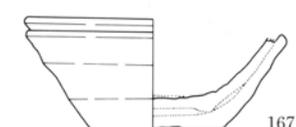
164



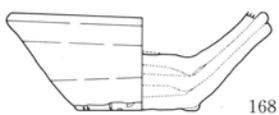
165



166



167



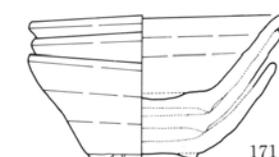
168



169



170



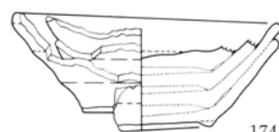
171



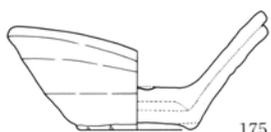
172



173



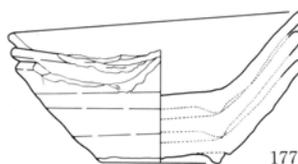
174



175



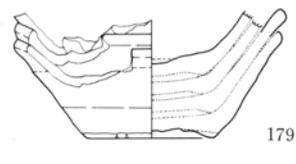
176



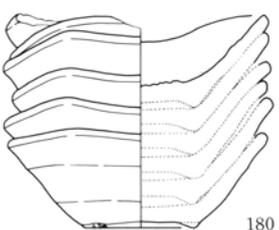
177



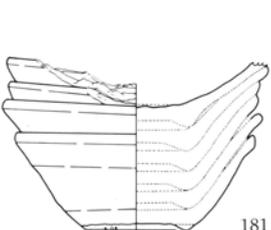
178



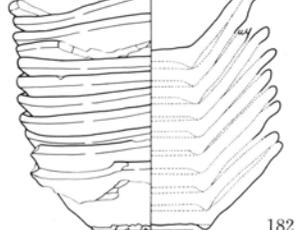
179



180



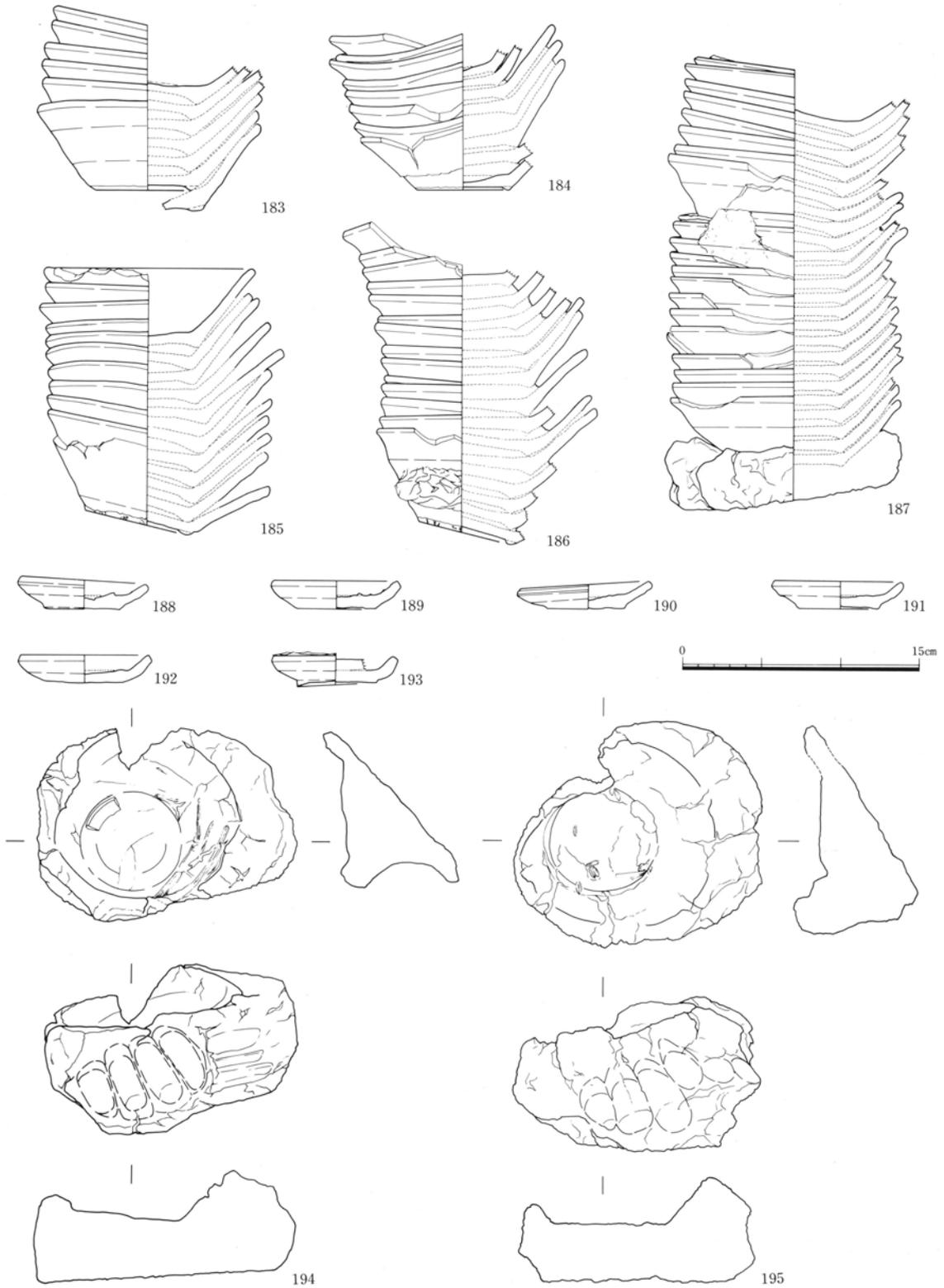
181



182

前庭部

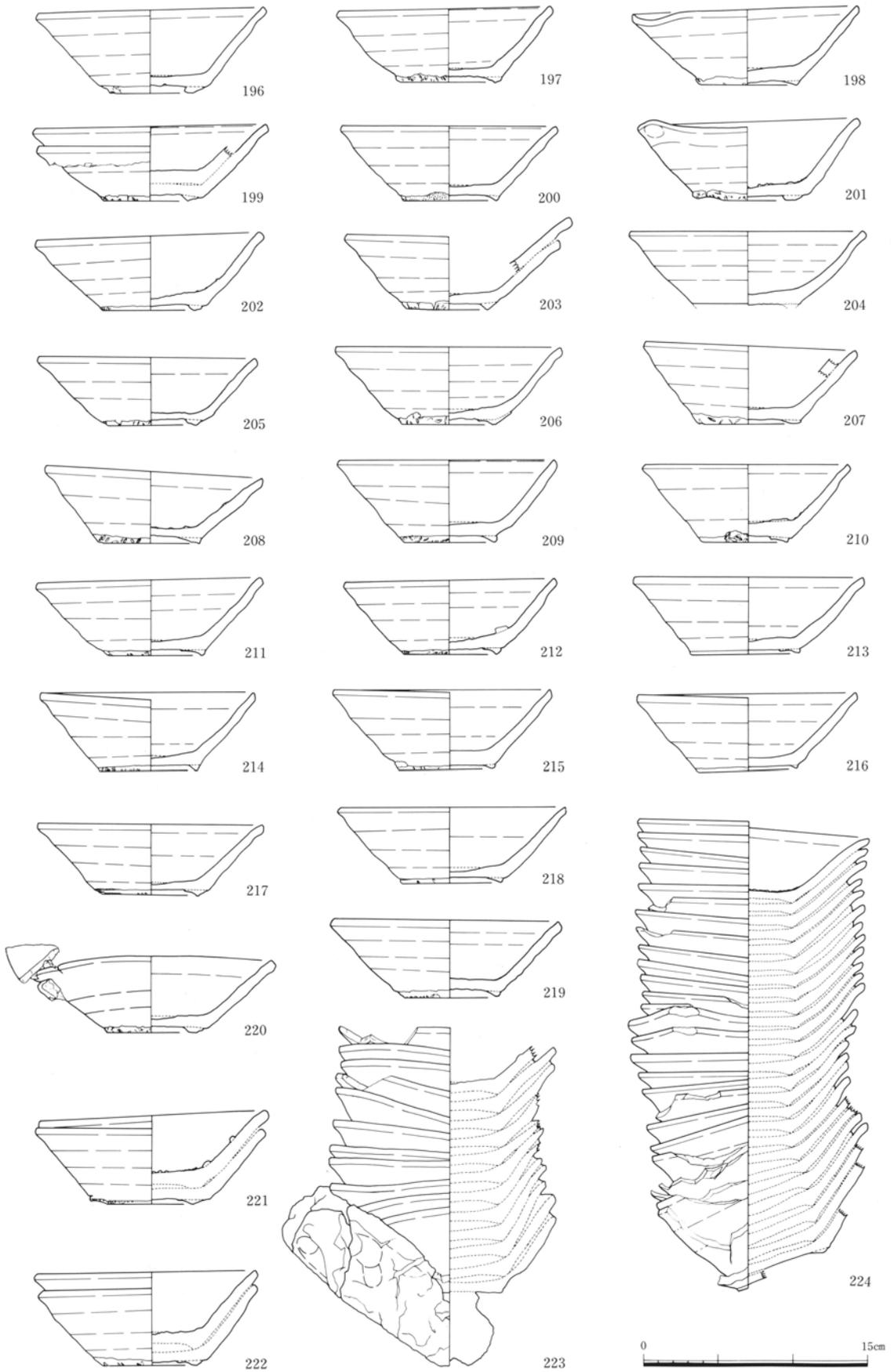




图版番号	底径 X	比高差 Y	$Y/X = \sin\theta$	θ	備考	图版番号	底径 X	比高差 Y	$Y/X = \sin\theta$	θ	備考
194	11.2cm	7.3cm	0.6518	47°	植物纖維	195	12.2cm	6.6cm	0.5410	33°	靱跡

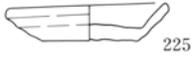
前庭部

图版11 遗物实测图 (9)

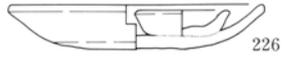


S K01

S K01



225



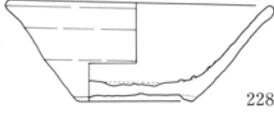
226

S K02

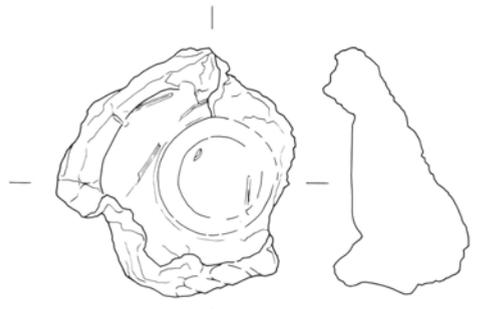


227

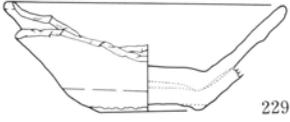
S K03



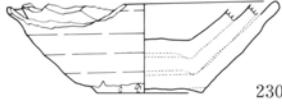
228



S D01



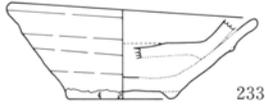
229



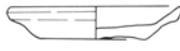
230



S D02



233



231



234

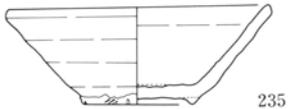


232

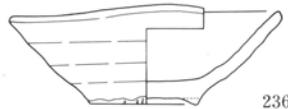


図版番号	底径 X	比高差 Y	$Y/X = \sin \theta$	θ	備考
232	10.0cm	4.7cm	0.47	28°	靱跡

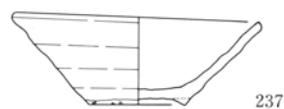
灰原



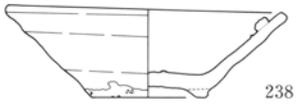
235



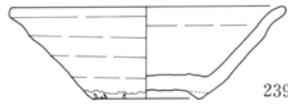
236



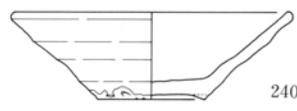
237



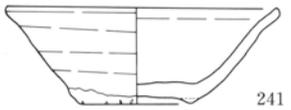
238



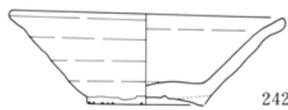
239



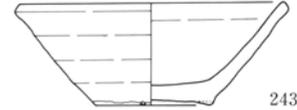
240



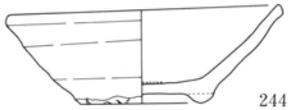
241



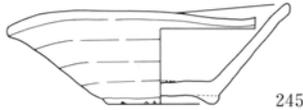
242



243



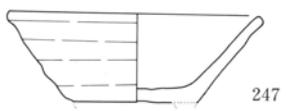
244



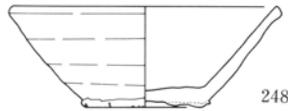
245



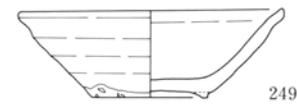
246



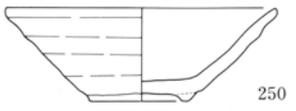
247



248



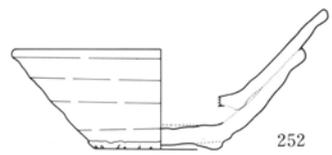
249



250



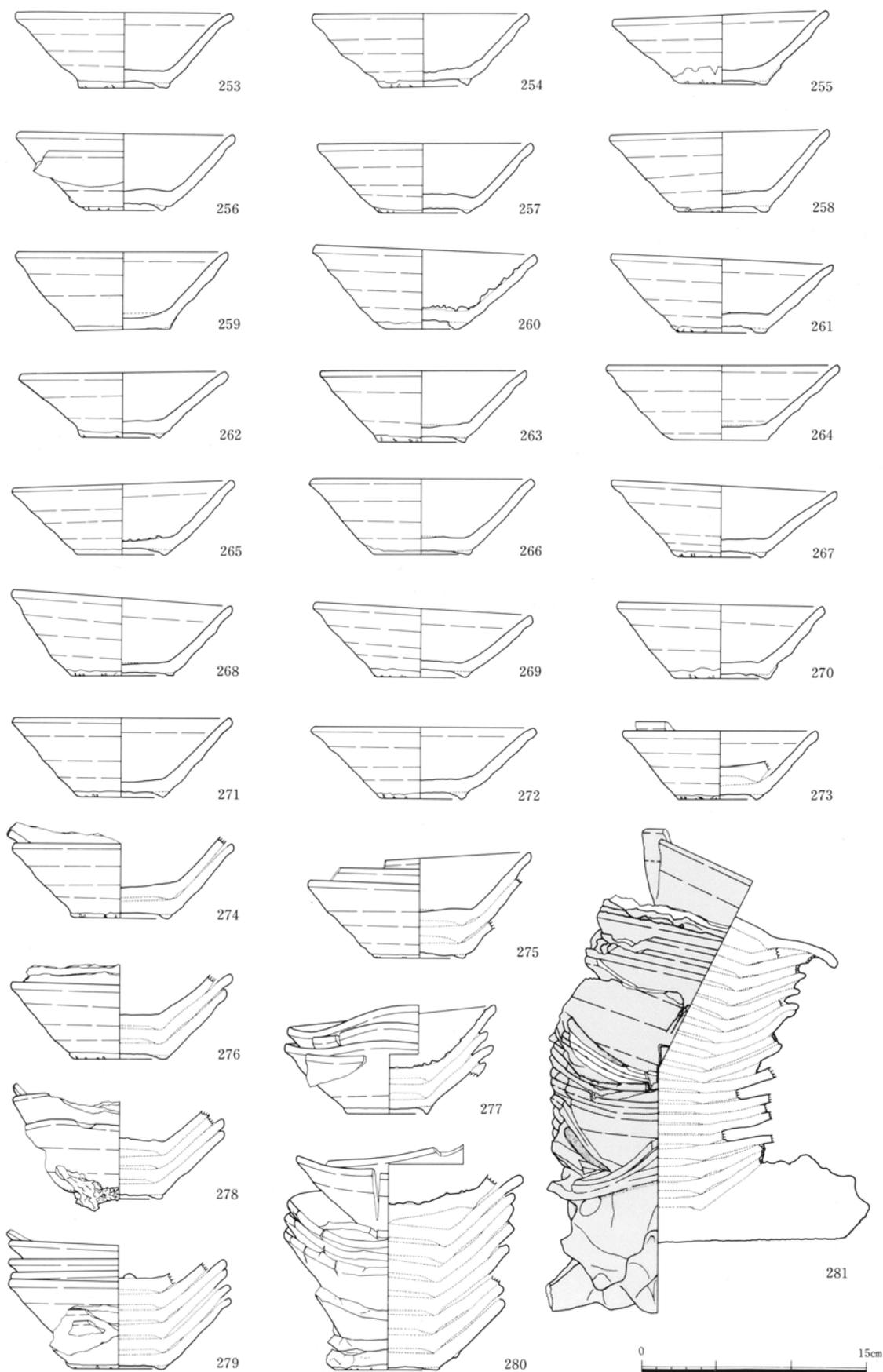
251



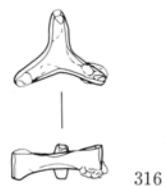
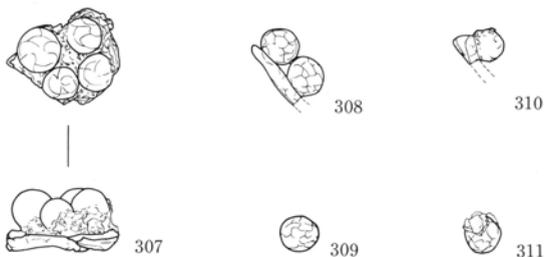
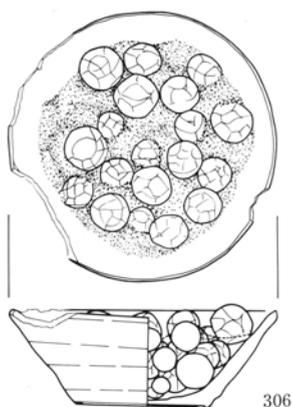
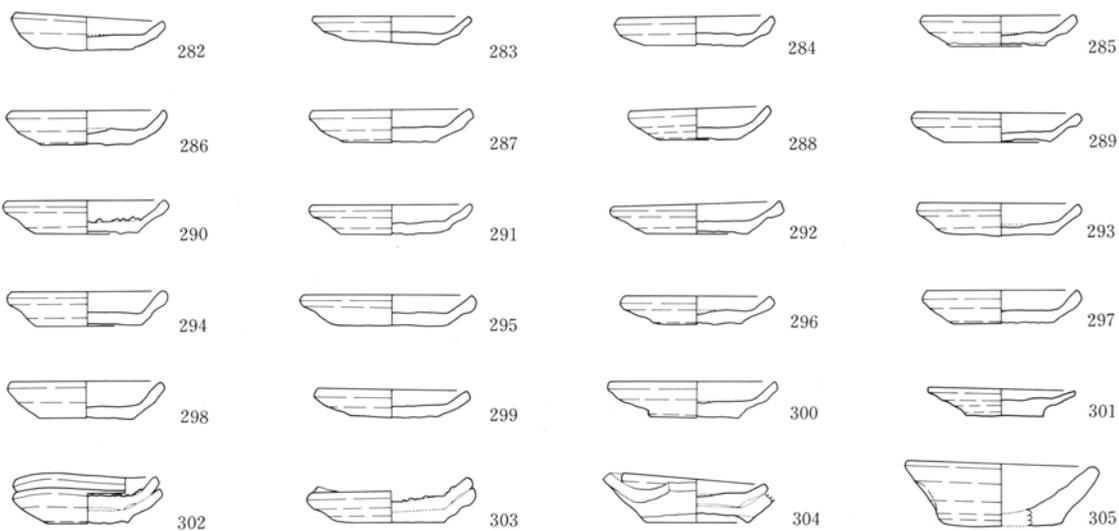
252

S K01 · S K02 · S K03 · S D01 · S D02 · 灰原

图版13 遗物实测图 (11)



灰原



図版番号	底径 X	比高差 Y	$Y/X = \sin\theta$	θ	備考
312	8.1cm	5.0cm	0.6173	38°	

灰原





2. SY(東より)



3. SYと周囲(東より)



4. SY断ち割り(東より)



5. 焚き口セクション(東より)



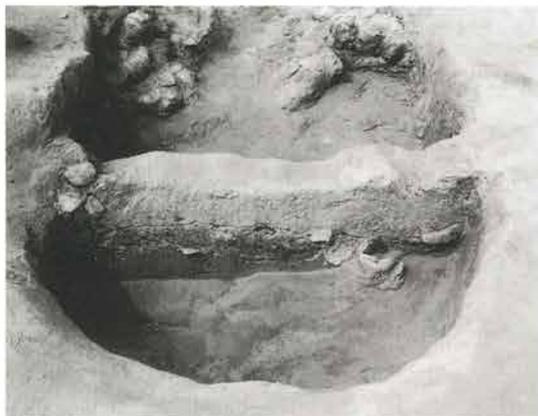
6. SY壁面セクション(東より)



7. S K01(東より)



8. S K01セクション(東より)



9. S K02セクション(東より)



10. S K03セクション(南東より)



11. S D01(東より)



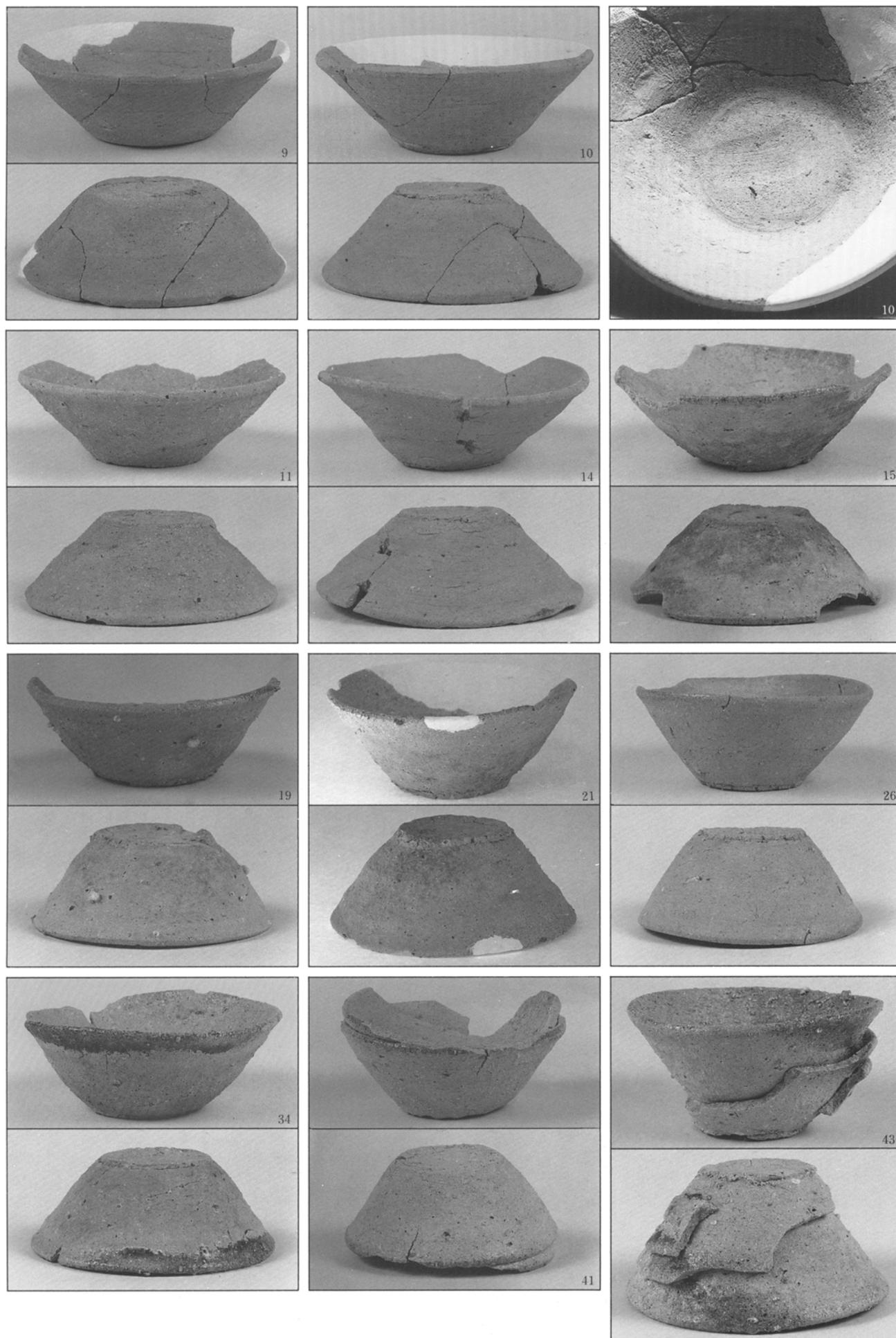
12. S X01旧流路(南より)

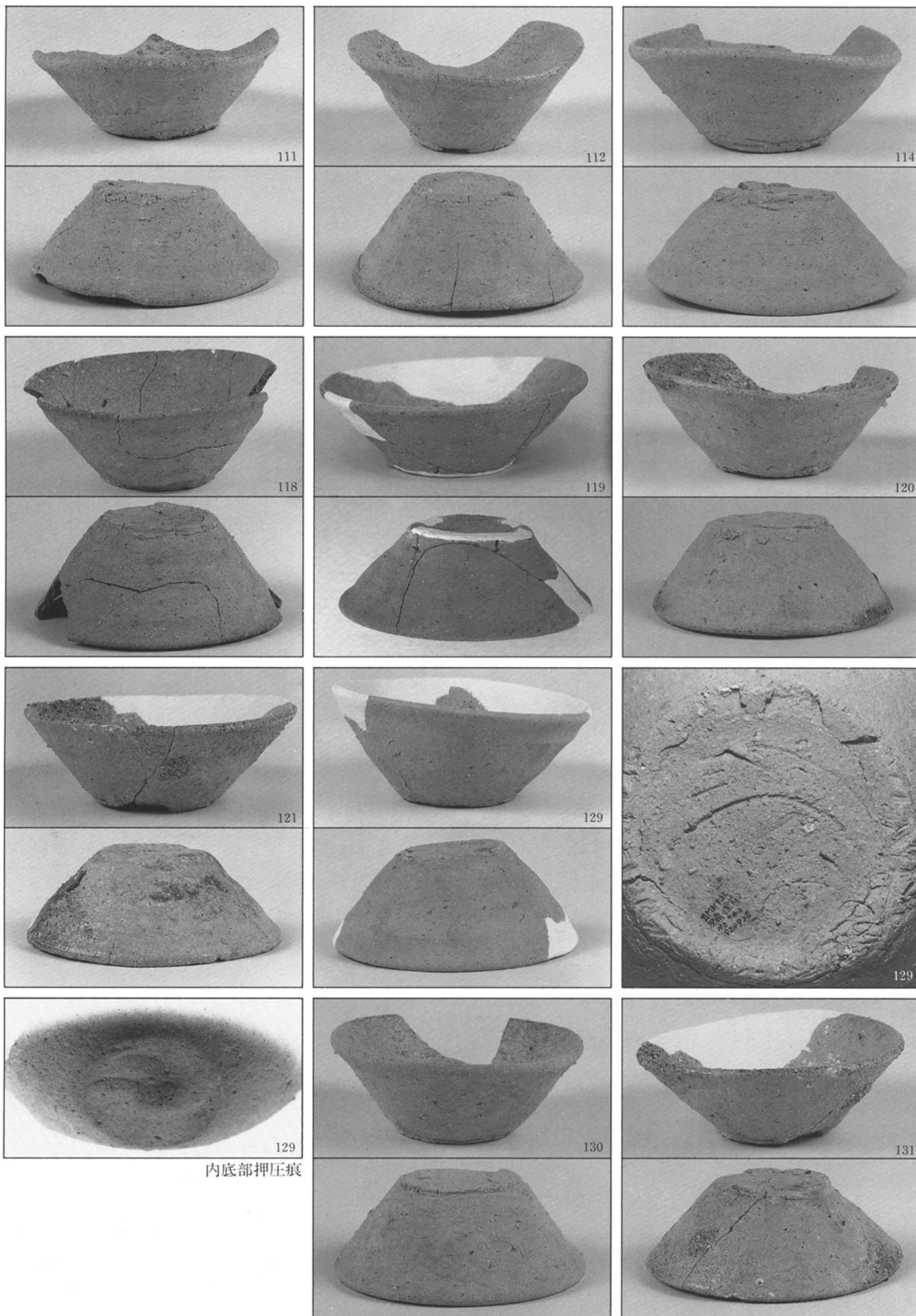


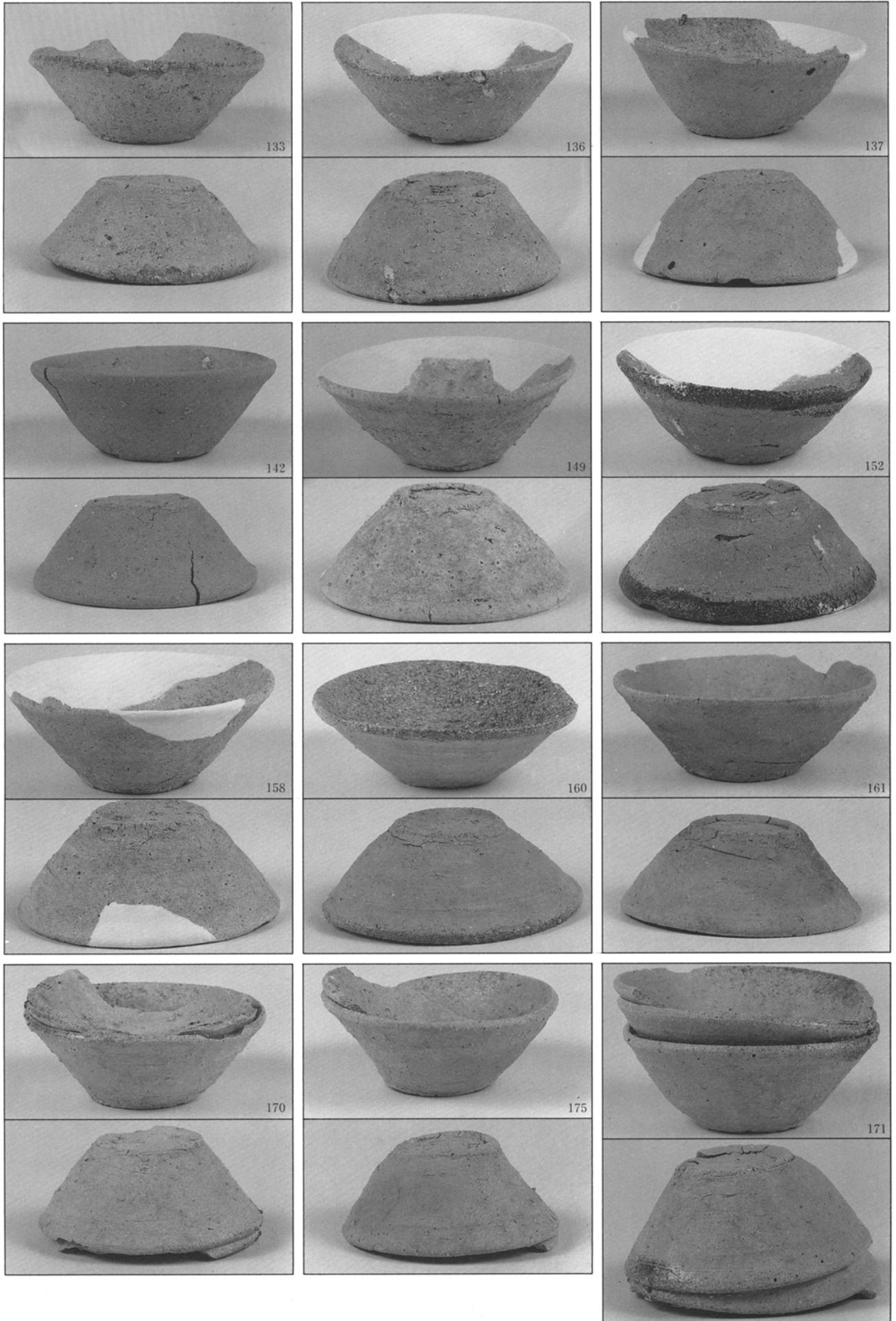
13. S X01(北東より)

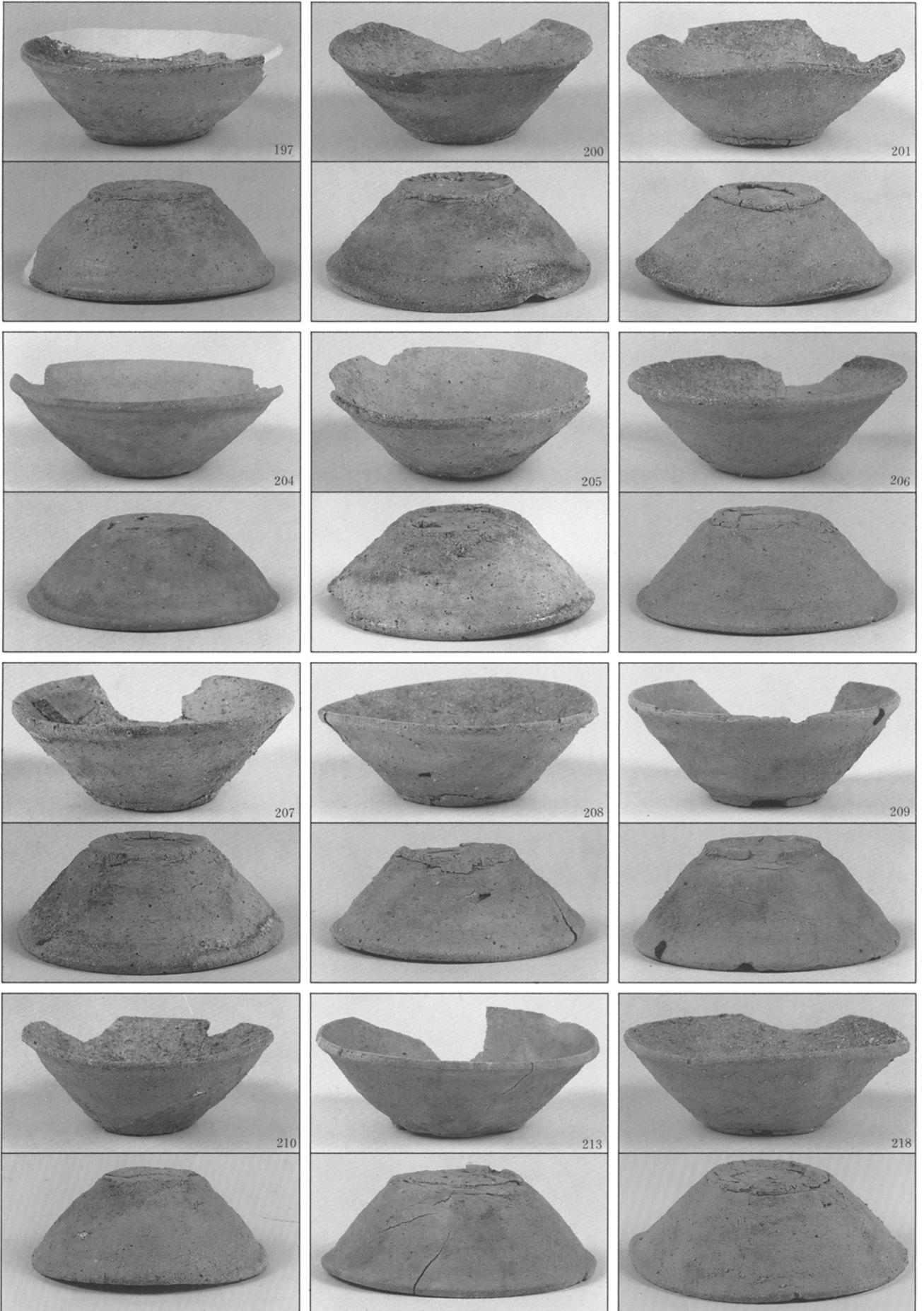


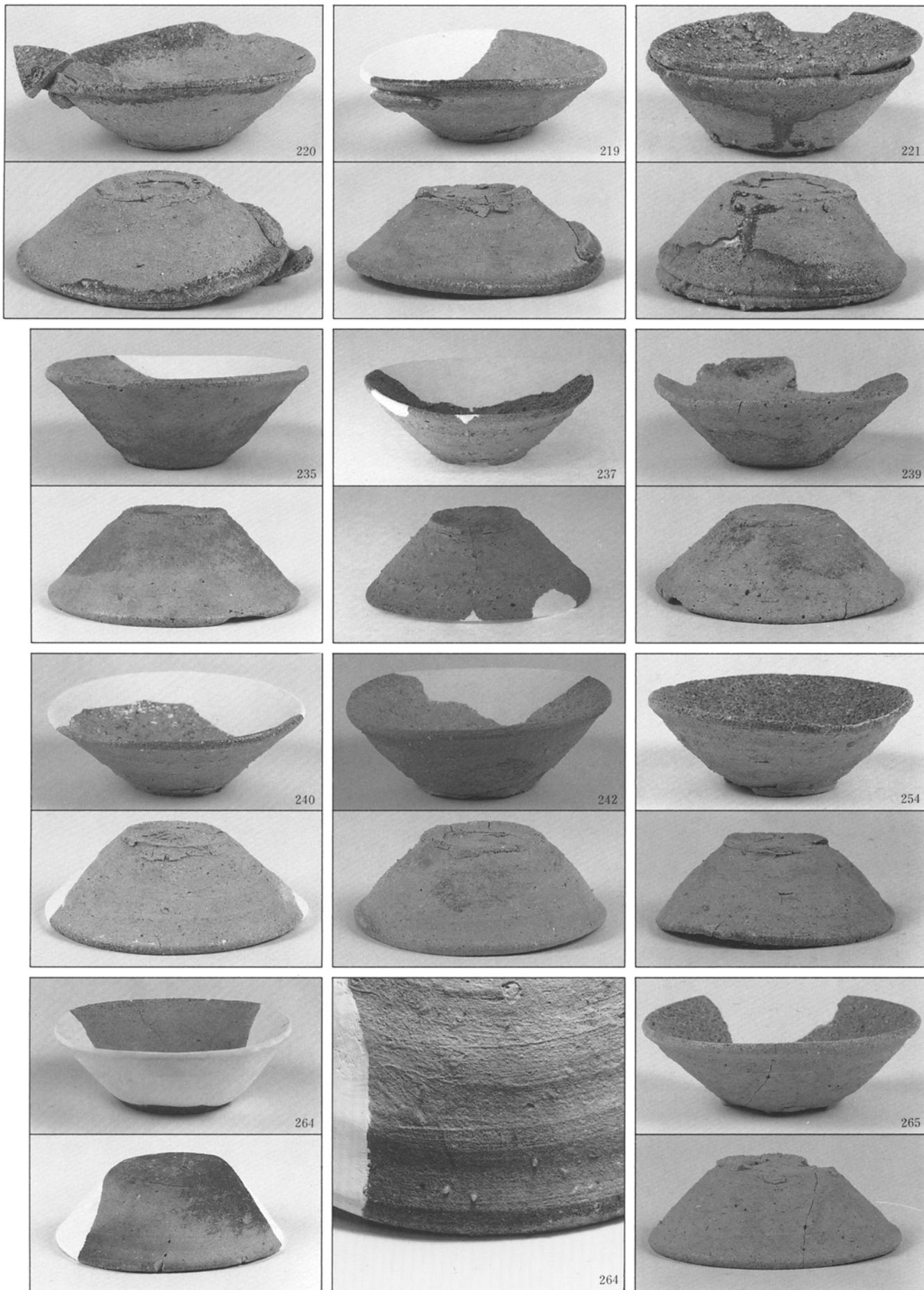
14. S X03(東南より)

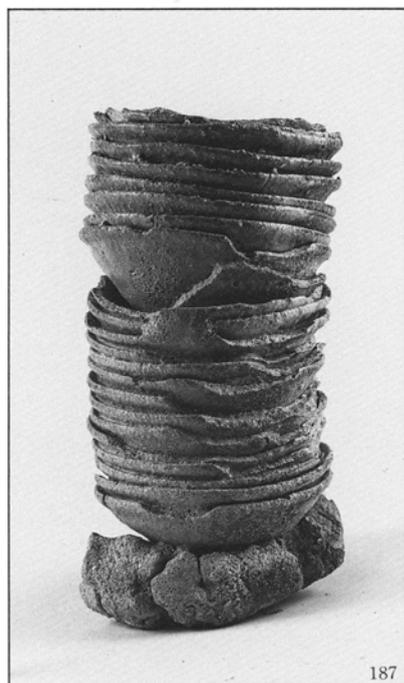
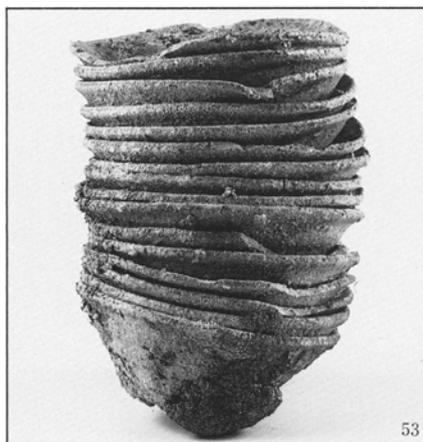
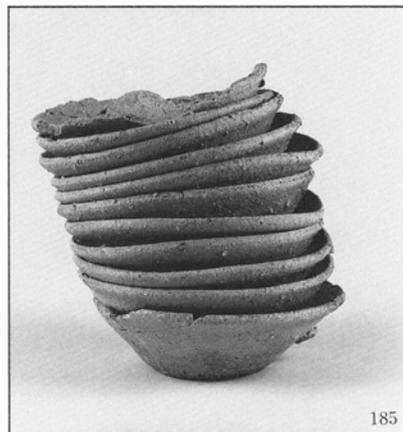


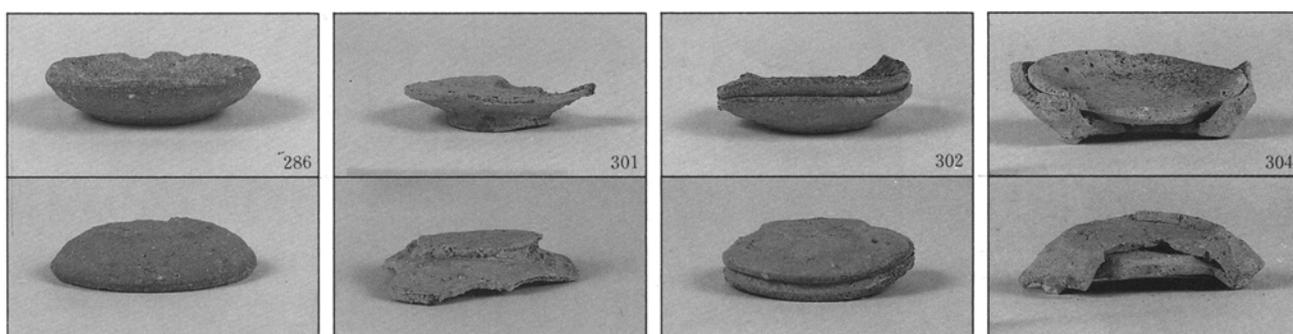
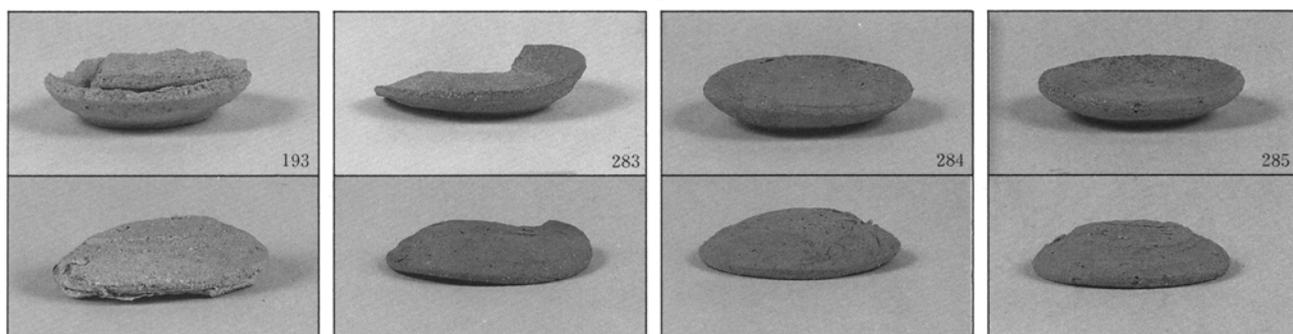
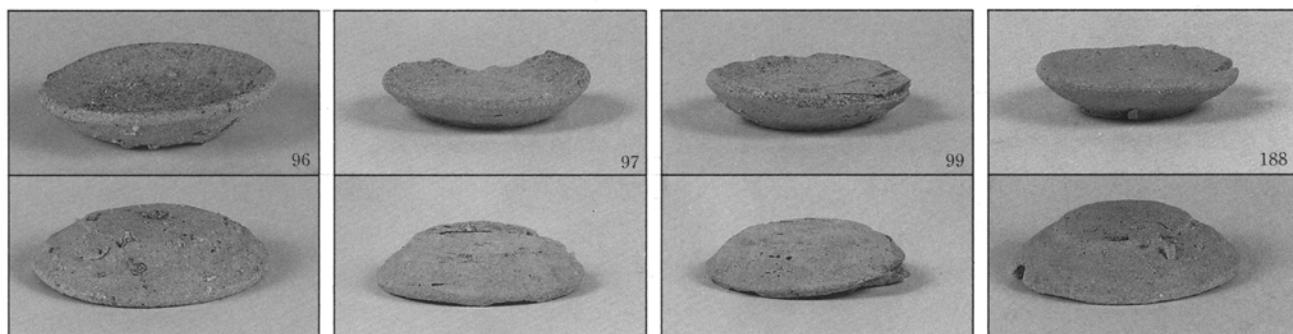
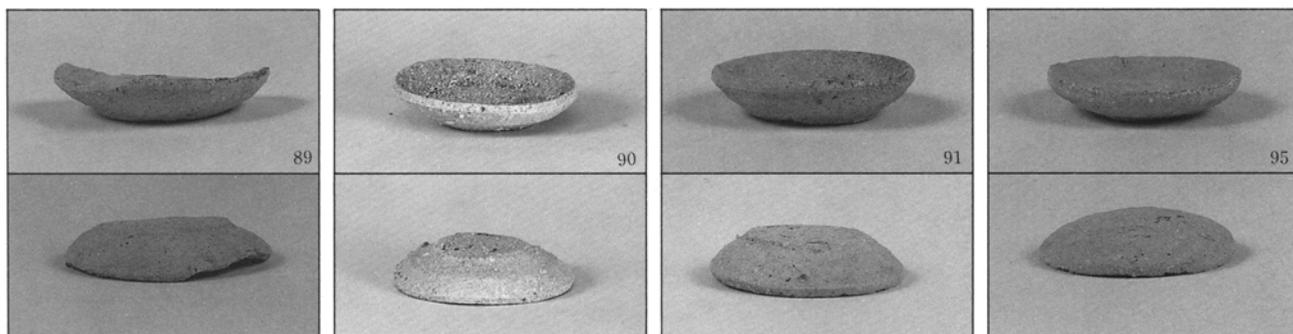
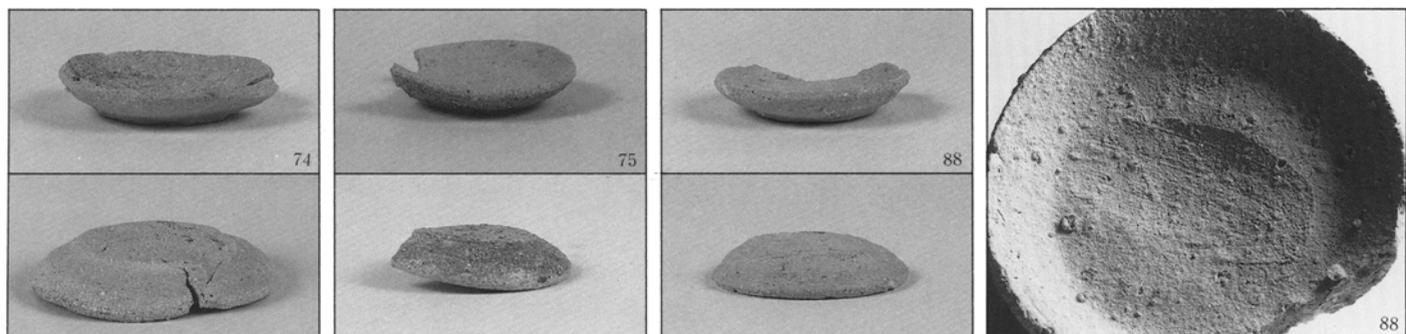














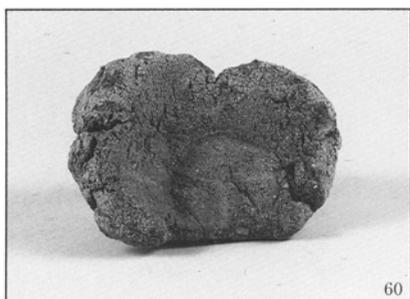
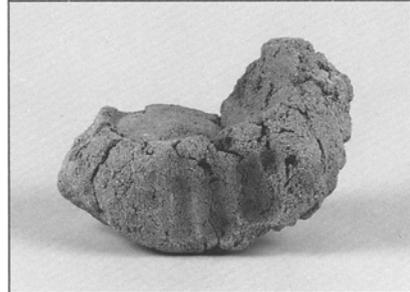
57



58



59



60

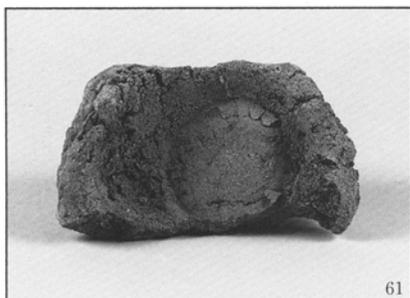
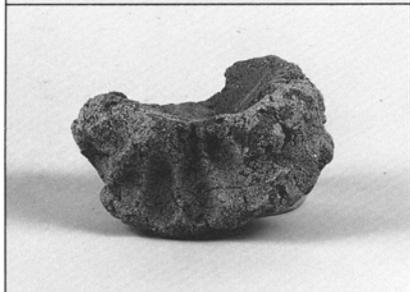


194



194

植物纖維痕



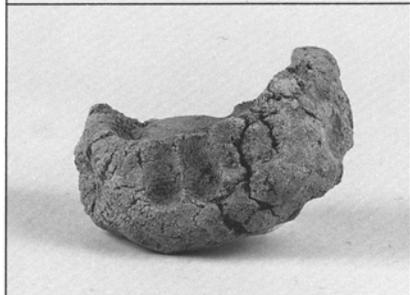
61

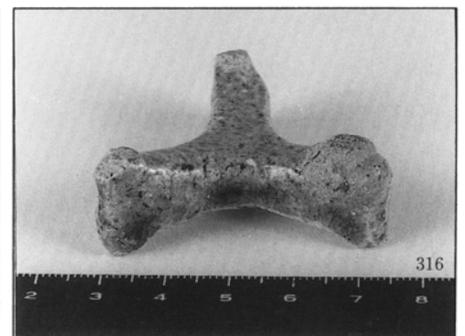
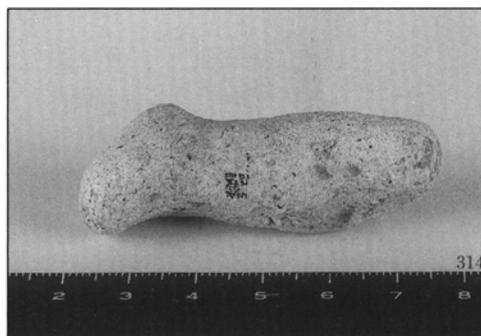
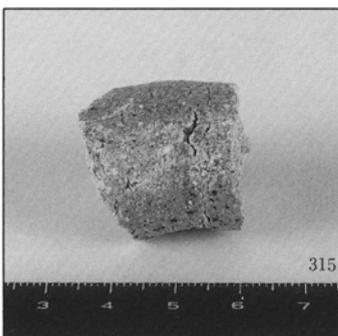
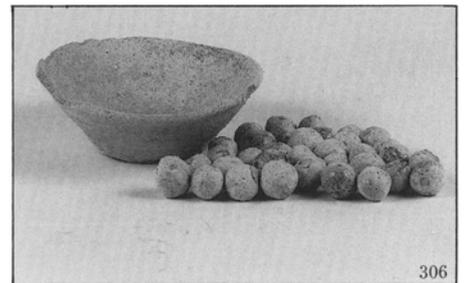
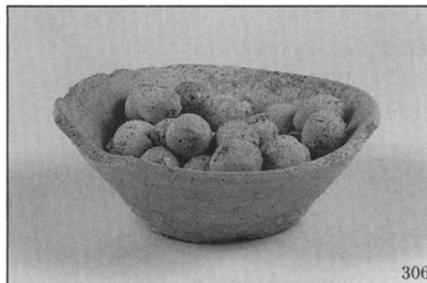
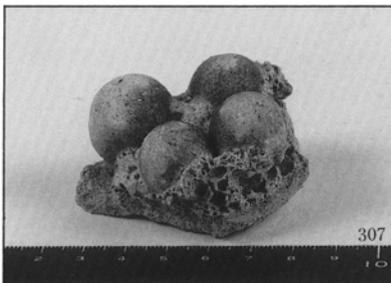
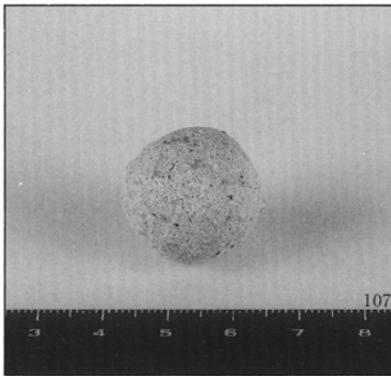
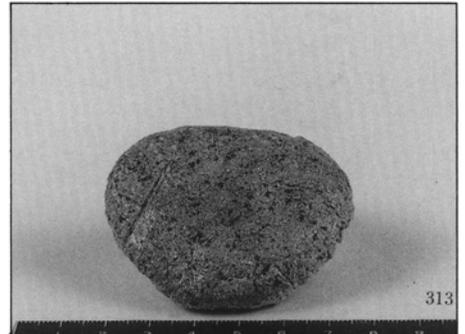
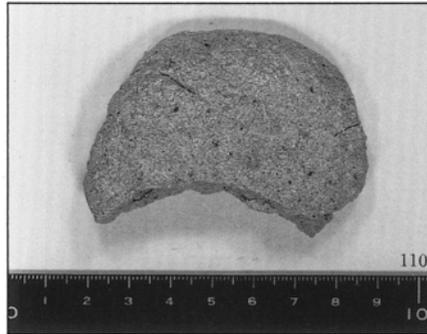
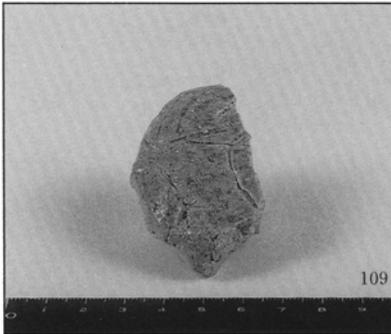
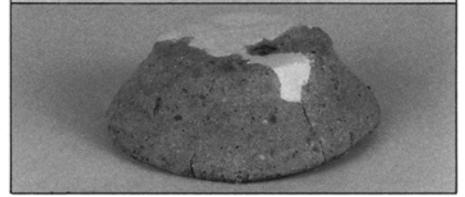
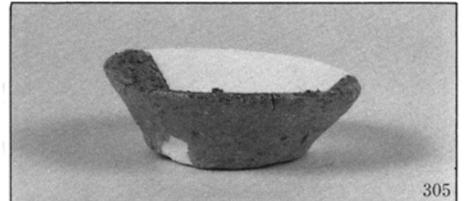
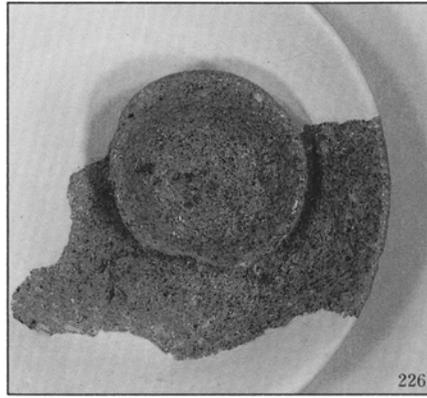
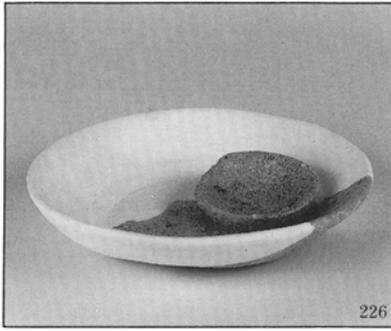


195



杓跡 195





(226左, 305, 306左 1 : 3)

たち 楠 古 窯 跡
立 楠 古 窯 跡

1994

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

例 言

1. 本書は、愛知県知多郡美浜町大字布土に所在する立楠古窯跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、知多中央道（南知多道路）の拡幅にともない、愛知県教育委員会をつうじて愛知県道路公社からの依頼をうけ、財団法人愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間は平成5（1993）年1月から3月までである。
4. 調査に際しては、次の各機関の御指導・御協力をえた。
愛知県教育委員会文化財課・愛知県埋蔵文化財調査センター・愛知県道路公社・常滑市教育委員会・常滑市民俗資料館・知多カントリー倶楽部スギー産業
5. 発掘調査は、鷺見 豊（調査課主査、現・西春町立西春小学校教諭）・樋上 昇（調査研究員）が担当した。なお、測量調査等には城ヶ谷和宏（調査課課長補佐）・大竹正吾・松原隆治（以上、調査研究員）が加わった。
6. 発掘調査にあたっては次の方々の参加・御協力をえた。
小西恵子（発掘調査補助員）・小泉浩二・斎藤良夫・鈴木 恵・藺田宜紀・福田誠治（以上、日本福祉大学学生）・跡部廣子・伊賀健一・岩村 章・小郷とみ・加藤やよ・蟹江和子・北島万紀・小出さゆり・小玉 寛・後藤容子・竹内郁夫・田嶋茂明・仲川信子・野田郁子・濱嶋英津子・廣垣澄枝・細野 明・堀場美子・水谷真理・水谷淑子・水野拡子・宮石千津子・森田明子（以上、発掘作業員）
7. 遺物の実測図作成は池本正明（調査研究員）がおこない、遺物・遺構図の整理、製図などについては次の方々の御協力をえた。なお、遺物の写真撮影については深川 進氏の手をわずらわせた。
岩崎繁子・小島洋子・後藤美子・日栄智子（南山大学学生）
8. 本書の編集・執筆は樋上 昇がおこなった。
9. 現地調査ならびに報告書作成については、常滑市教育委員会 中野晴久氏の御教示・御協力をえた。
10. 調査区の座標は建設省告示の平面直角座標第Ⅶ座標系に準拠した。
11. 出土遺物および調査記録などの資料は、愛知県埋蔵文化財調査センターに保管している。

目次

第1章 概要	2
1 調査にいたる経緯と調査の経過	2
2 位置と環境	4
第2章 遺構	6
灰層の分布と堆積状況	6
第3章 遺物	12
1 II層出土遺物	12
2 III層出土遺物	12
3 IV層出土遺物	18
4 V層出土遺物	18
5 VI層・谷部出土遺物	21
第4章 まとめ	24
付表	25

挿図目次

図1	昭和39年（上）・昭和62年（下）の地形測量図と調査区	3
図2	遺跡位置図	4
図3	立楠古窯跡と周辺の遺跡	5
図4	調査前地形測量図	7
図5	灰層掘削後地形測量図および灰層分布図	8
図6	灰層堆積状況土層断面図	9・10
図7	II層出土遺物実測図(1)	13
図8	II層出土遺物実測図(2)	14
図9	III層出土遺物実測図(1)	15
図10	III層出土遺物実測図(2)	16
図11	III層出土遺物実測図(3)	17
図12	IV層出土遺物実測図(1)	19
図13	IV層出土遺物実測図(2)	20
図14	IV層出土遺物実測図(3)	21
図15	V層出土遺物実測図	22
図16	VI層・谷部出土遺物実測図	23

図版目次

図版1	調査区全景（南東から） 調査区全景（南から）
図版2	調査区東半部 E—E'ベルト北側（南西から） 調査区東半部 E—E'ベルト南側（北西から） 調査区西半部（南西から）
図版3	調査区東半部 谷部（南西から） 調査区東半部 谷部（東から）
図版4	調査区東半部 北壁（D—D'） 土層断面（南から） 調査区東半部 E—E'ベルト北側 V層上面（北西から） 調査区東半部 C—C'ベルト 土層断面（南西から）
図版5	調査区東半部 B—B'ベルト北半 土層断面（東から） 調査区東半部 B—B'ベルト・E—E'ベルト 土層断面（南東から） 調査区東半部 B—B'ベルト南半 土層断面（北東から）
図版6	調査区東半部 A—A'ベルト北半 土層断面（南東から） 調査区東半部 A—A'ベルト南半 土層断面（南東から）
図版7	出土遺物（1）
図版8	出土遺物（2）
図版9	出土遺物（3）
図版10	出土遺物（4）

第1章 概要

1. 調査にいたる経緯と調査の経過

立楠古窯跡は愛知県知多郡美浜町大字布土に所在している。遺跡は知多半島の中央を南北にのびる丘陵部から西に派生する尾根の南斜面に位置している。調査区のすぐ東には知多カントリー倶楽部のゴルフ場がひろがっており、西には知多中央道（南知多道路）が南北に半島をつらぬいている。右頁の昭和39年（上）と昭和62年（下）の地形図をくらべると、道路建設にはじまるさまざまな開発により、旧地形が大きくそこなわれていることがわかる（図1）。

今回の調査はこの知多中央道の拡幅工事にともない、愛知県道路公社から愛知県教育委員会をつうじて委託をうけた財団法人愛知県埋蔵文化財センターが事前調査としておこなった。

『愛知県遺跡分布地図（II） 知多・西三河』（1988）によると（図3）、常滑市・武豊町・美浜町の3市町の境界にまたがる今回の調査対象地域内に、常滑市域にかつて立楠A古窯（遺跡番号42124）と立楠B古窯（同42125）の2つの古窯跡が存在したことが記載されている。両古窯跡ともすでに滅失しているが、うち立楠B古窯は昭和42年、知多中央道の建設にともない、釜山第2地点の第5号窯として調査されている⁽¹⁾。今回の調査にさきだつて付近を踏査した際に、知多中央道の上にかかる坂井跨道橋の北側には窯の存在をしめす痕跡はなく、南側の知多中央道の法面に灰層と灰釉系陶器片の分布を確認したのみであった。そのため、今回はこの坂井跨道橋の南側にひろがる斜面上に発掘区を設定した。調査面積は600㎡で、調査期間は平成5（1993）年1月から3月までである。

発掘調査は、重機による樹木の伐採、表土はぎののち、人力で灰層の掘削をおこなった。その結果、窯体そのものはすでに知多中央道の建設やゴルフ場造成の際の地形改変のために破壊されており、調査区内には遺存していないことが判明した。また灰層はこの付近の地山にあたる明黄褐色砂質土を幾重にも間層としてはさんで、現在の地表面から3m以上もの深さにまで堆積していることがわかった。そのため、南北2本、東西1本の土層観察用の大ベルトを残したうえで、上層灰原を掘削して平板測量をおこなったのち、再度重機による表土はぎをし、中層・下層の灰原を掘り下げて最後に地山面で航空測量をした。大ベルトは土層断面図作成ののち、細かく分層して遺物の取りあげをおこなった。第3章で掲載する遺物実測図はすべてこのベルト出土の資料である。

調査の結果、灰層の堆積状況からみて、滅失した窯体は少なくとも3基は存在し、時期幅は12世紀末から13世紀初頭の間におさまることがわかった。遺物は椀と小皿が主体であり、片口鉢も少量出土しているが、それ以外の器種はない。出土量はコンテナ約300箱におよぶ。

註)

1. 杉崎 章ほか 1968 「釜山第2地点」『知多半島道路 県道半田南知多公園線関係 埋蔵文化財調査報告』 愛知県

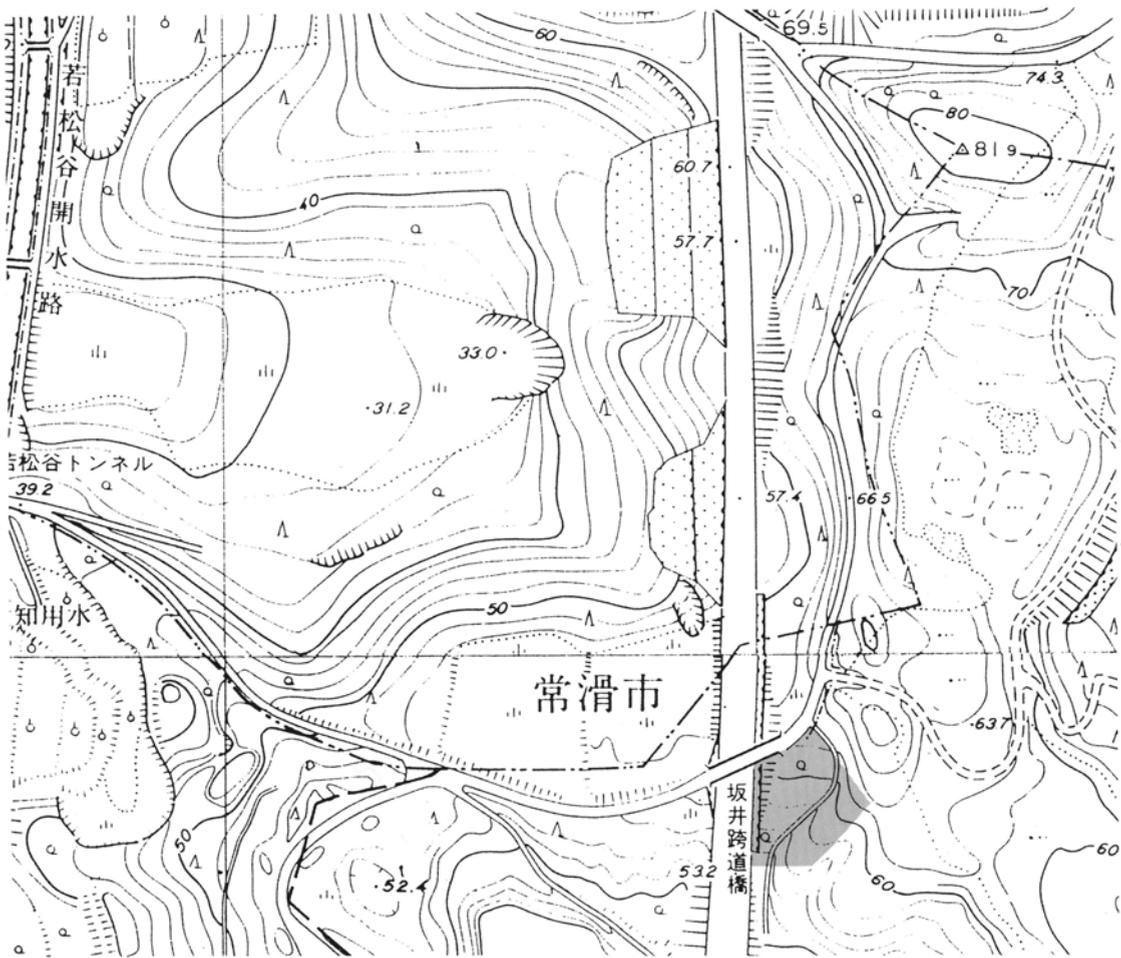


図1 昭和39年(上)・昭和62年(下)の地形測量図と調査区 (1:2,500)

2. 位置と環境

知多半島は愛知県西部、名古屋市の南東に位置している(図2)。わずかに「く」の字に屈曲しつつ太平洋につきでてその東西を三河湾と伊勢湾にわけている。半島の中央部を南北に低丘陵がつらぬいており、そこから東西に派生する小尾根には中世以来、知多古窯跡群とよばれる3000基以上の灰釉系陶器(山茶碗)窯が築かれてきた。良質で豊富な陶土と燃料の薪にめぐまれ、海上輸送の便がよいことから、生産された壺・甕は全国にひろく普及し、近世には常滑焼という名称でその地位を確立していった。



図2 遺跡位置図

立楠古窯跡は知多半島の南半部、美浜町と武豊町の境界付近の西側に派生する尾根上にあり、知多古窯跡群のほぼ南端近くに位置している(図3)。本古窯跡北西側の武豊町域には別曾池古窯跡群があり、その南支群にあたる下別曾古窯址群は知多カントリー倶楽部増設工事にともない事前調査がおこなわれている⁽¹⁾。さらにその東には「正見(元)元年」の銘をもつ硯が出土したことで著名な中田池古窯跡群⁽²⁾がある。また、本古窯跡の南、鶴の繁殖地として国の天然記念物に指定されている美浜町の鶴の山・鶴の池周辺にも鶴の池古窯跡群⁽³⁾がひろがっている。

註)

1. 武豊町教育委員会 1987 『下別曾古窯址群』武豊町文化財調査報告書第7集
2. 武豊町教育委員会ほか 1990 『中田池古窯跡址群 その1』武豊町文化財調査報告書第8集
武豊町教育委員会ほか 1992 『中田池古窯跡址群 その2』武豊町文化財調査報告書第9集
3. 愛知県教育委員会 1988 『愛知県遺跡分布地図(II) 知多・西三河』

1 立楠A古窯跡	16 孫太郎遺跡	31 鶴の池E古窯跡	46 吉田B古窯跡群	61 カル田B古窯跡
2 立楠B古窯跡	17 岡ノ前古墓	32 鶴の池F古窯跡群	47 十二谷A古窯跡群	62 中田池A古窯跡
3 石畑遺跡	18 大種木古墓	33 鶴の池G古窯跡群	48 十二谷B古窯跡	63 中田池B古窯跡群
4 石亀遺跡	19 池田口古窯跡	34 鶴の池H古窯跡	49 姥八反古窯跡	64 中田池C古窯跡群
5 奥田庵寺跡	20 畔大明A古窯跡群	35 鶴の池I古窯跡群	50 小坂古窯跡	65 中田池D古窯跡群
6 奥田瓦窯跡	21 畔大明B古窯跡群	36 鶴の池K古窯跡群	51 中山平井古窯跡	66 中田池E古窯跡群
7 田上遺跡	22 畔大明C古窯跡	37 豆池古窯跡群	52 青山池古窯	67 中田池F古窯跡群
8 相模谷遺跡	23 明星谷古窯跡	38 菅池古窯跡	53 大廻間古窯跡	68 中田池G古窯跡群
9 坪山遺跡	24 蛭谷古窯跡	39 一向山古窯跡	54 水戸狭間遺跡	69 中田池H古窯跡群
10 深廻間古窯跡群	25 曾山古窯跡	40 砂下古窯跡	55 城塚遺跡	70 中田池I古窯跡群
11 小原池古窯跡群	26 滝谷古窯跡	41 菅刈古窯跡	56 亀塚池E古窯跡群	71 自然公園A古窯跡群
12 奥田前古窯跡群	27 鶴の池A古窯跡	42 井柳A古窯跡	57 猿喰古窯跡	72 自然公園B古窯跡
13 会下前古窯跡群	28 鶴の池B古窯跡	43 井柳B古窯跡群	58 細谷古窯跡群	73 久原池古窯跡
14 廻間田古窯跡群	29 鶴の池C古窯跡	44 山鼻古窯跡群	59 ピンガメ古窯跡群	74 下別曾古窯跡群
15 西五入道遺跡	30 鶴の池D古窯跡	45 吉田A古窯跡群	60 カル田A古窯跡群	75 兔池古窯跡群



図3 立楠古窯跡之周辺の遺跡 (1:25,000)

第2章 遺 構

灰層の分布と堆積状況

地形 調査前の地形測量図(図4)によると調査区内の最高所は標高63mをはかる。等高線を見ると地形は北東から南西に向かって傾斜しており、中央部が谷状に若干くぼんでいる。大きくみれば、知多半島の中央を南北につらぬく丘陵から西側に派生する尾根のつけ根にあたる南側の谷筋である。

概要 次に調査の過程と灰層(原)の堆積状況について述べる(図5・6)。調査区内の樹木を抜根したのち、重機で表土を除去し、灰原の検出をおこなった。調査区中央に南北方向の土層観察用ベルトをのこし(B—B'ベルト)、このベルトに沿ってトレンチをあけた。その結果、上層灰原(I層・II層)と中層灰原(III～V層)があり、そのあいだに地山状の淡黄褐色砂層が厚く堆積しているのを確認した。上層灰原を除去して東西南北の各トレンチを掘りさげていく過程において、調査区北壁(D—D'セクション)のIII層より下で、当初地山と考えていた淡黄褐色砂層のさらに下にも灰層(IV・VI層)があることを確認した。これがB—B'ベルトの南半部では厚さ5m以上におよんでいることが判明したために、再度重機を投入してこの間層を除去することとした。

上層灰原 I・II層のひろがりはD—D'セクションで調査区東側にある南北ベルト(C—C'ベルト)付近からゆるやかに弧を描いてB—B'ベルトの中央やや北よりを通っている。ただし、I層は炭化物・焼土ブロックを多くふくみ、一気に埋めたてられた状況をしめすため、道路建設あるいはゴルフ場造成時の攪乱にともなう再堆積層と考えている。II層(暗茶褐色砂礫層)はD—D'セクションでは攪乱が深くおよんでいるため確認できないが、B—B'ベルトと東西方向中央ベルト(E—E'ベルト)で確認でき、炭・焼土が縞状の堆積をしていることからプライマリーな灰層の堆積と認識している。そこで、II層をもって上層の灰原とする。

中層灰原 III～V層はE—E'ベルト以北では上層灰原に接しているが、これ以南は厚さ0.7m以上の淡黄褐色砂層の間層をはさんで堆積している。III層は褐色～赤褐色の砂質土層で、厚さ0.1～0.5cmずつ数次にわたって堆積しており、A—A'・B—B'セクションをみると、間層をはさんで1.5m以上の厚さにおよんでいる。平面分布では調査区北東隅から南西隅まで最も広範にひろがっていることがわかる。IV層は黒褐色の砂礫層で、III層直下に厚さ0.1～1.1mにわたって堆積している。A—A'セクションでは南半部のくぼみに厚く堆積し、B—B'ベルトでは北端部が最も厚い。東西方向のD—D'・E—E'セクションでは東にいくほど薄く、またIII層との間にも間層の堆積がみられる。平面的にはB—B'ベルトとC—C'ベルトのほぼ中間地点から調査区南西隅にいたる分布をしめす。V層は明橙色で粘質の特徴的な土層で厚さは0.7mあり、平面的にはほぼ半円形に、断面はレンズ状に堆積している。IV層との境に間層をはさまない。窠体掘削時の排土をマウンド状に盛りあげて窠の前庭部とした層と考えられる。各セクションでみるかぎりIII～V層はまとまった堆積状況をしめしていることから、こ

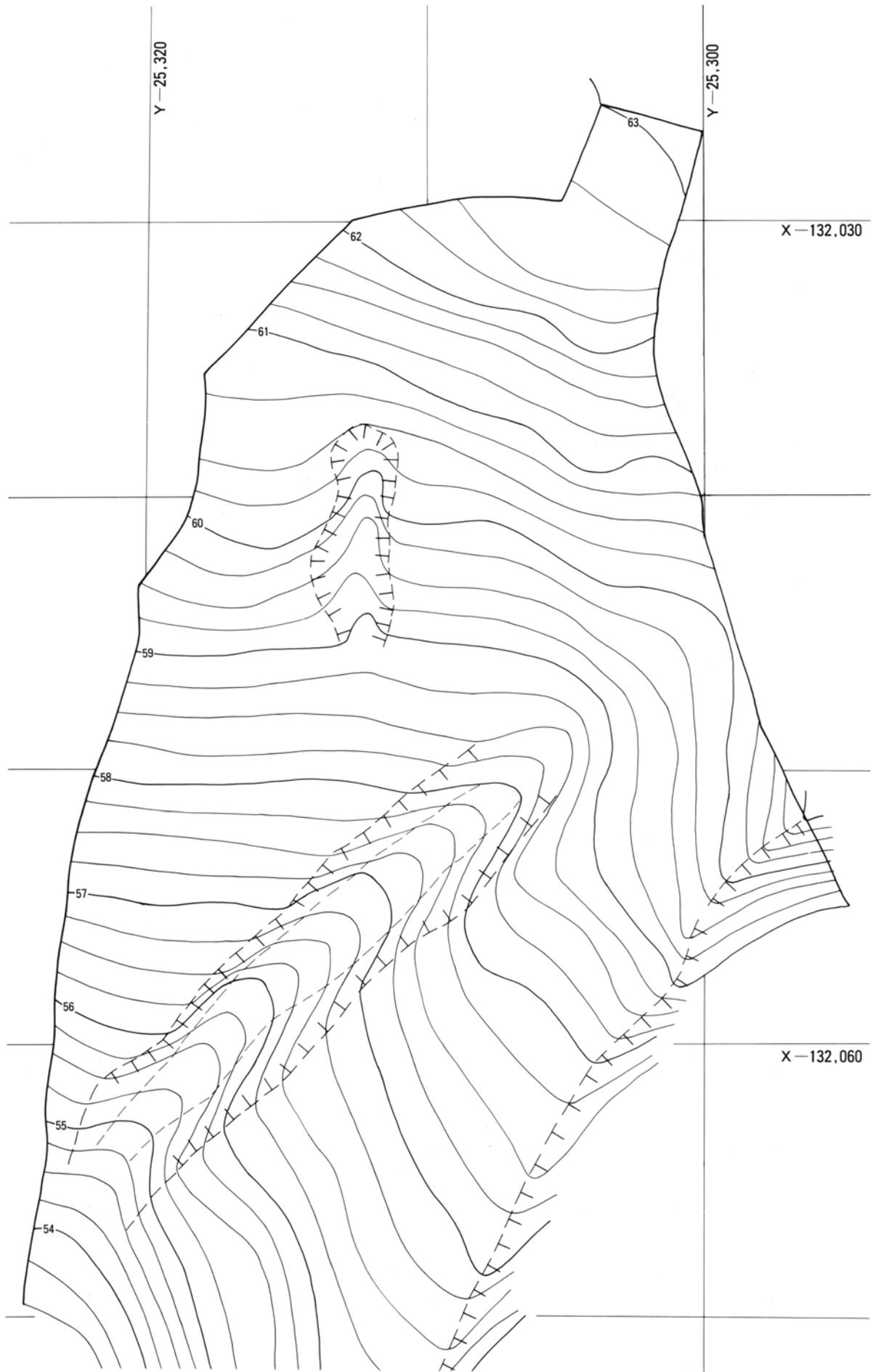


图4 调查前地形测量图 (1:200)

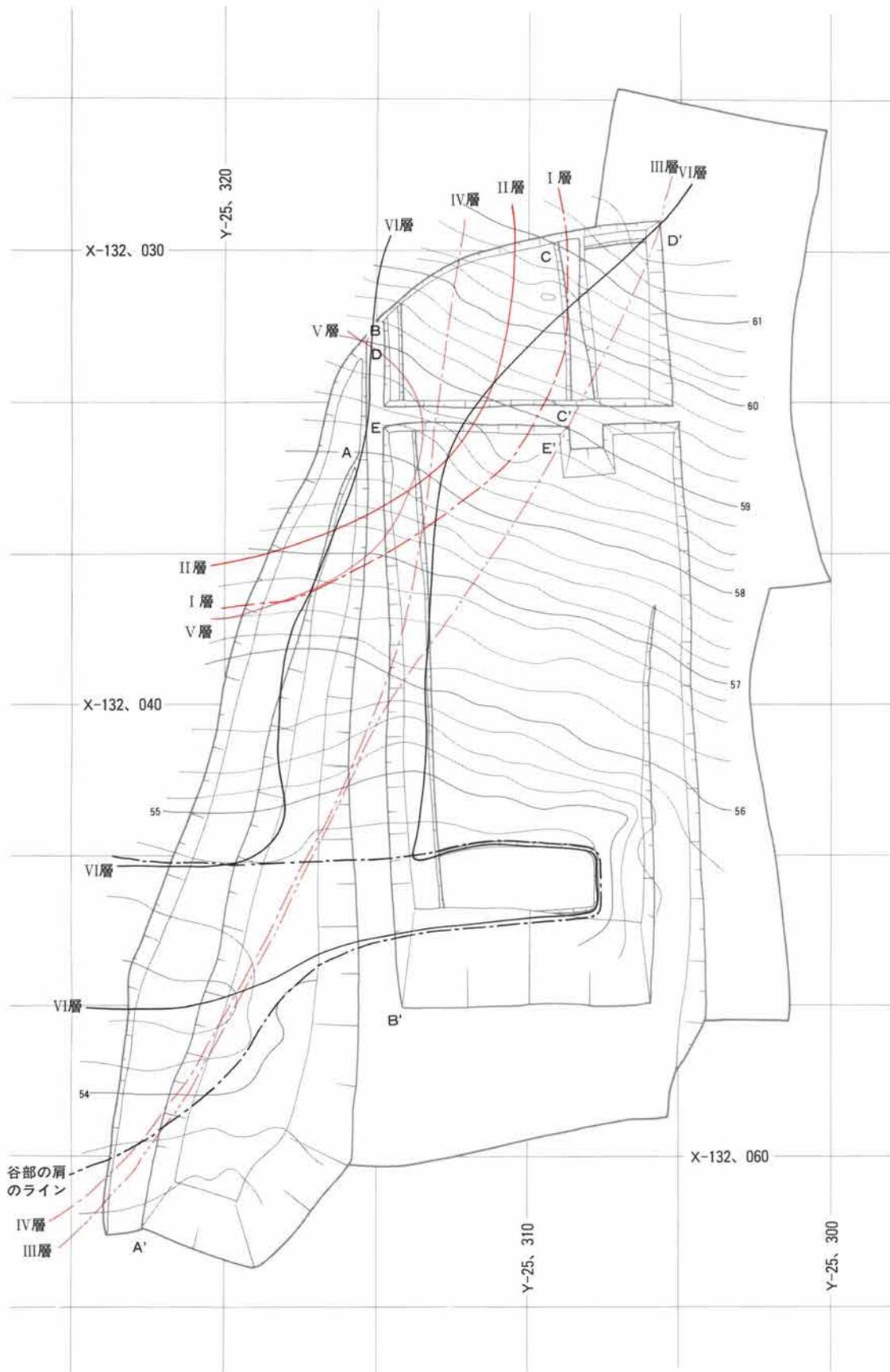


図5 灰層掘削後地形測量図及び灰層分布範囲 (1:200)

れらを中層灰原として一体のものとしてあつかう。

下層灰原 VI層は、灰褐色の砂質土の堆積がほぼ0.1～0.5mの厚さで調査区北端から南端にまでおよんでいる。A—A'・B—B'セクションでは、調査区南端付近に東西方向の谷状の落ち込みがみられ、これをVI層で埋めたるように堆積している。D—D'セクションではほぼ東端から西端までひろがるが、A—A'セクションでは北端部と谷の北側の一部で層のときれる部分がある。これを平面分布におきかえると、ほぼ北から南にかけて幅3.5～5mの帯状にのびて谷から逆L字状に東に折れ、さらに続いている状況が復元できる。この灰層はIII～V層とはあきらかに異なる分布範囲をしめしていることから、中層灰原と区別して下層灰原とよぶこととする。B—B'ベルトをみるとVI層にも明黄褐色砂層の間層が入り込んでおり、谷にいたる傾斜変換点の地山面からVI層最上部までは約2mにおよぶ堆積がある。

灰層の堆積過程と窯体の推定位置 最後に、上中下層灰原の堆積過程をみたうえで、それぞれの灰原にともなう窯体の推定位置を復元してみたい。

灰層完掘時における地山面での地形測量図によると、南北丘陵から西に派生する尾根の南側のつけ根にあたる点は前述のとおりである。ただ、谷の入り込む方向が南西—北東方向ではなく、ほぼ東西方向であり、かつ谷の最奥部が急激に深い落ち込みになっていた。また、B—B'付近にも南北方向に浅い溝状のくぼみが走っている。VI層はこれらのくぼみを埋めるように北から南に向かって流れ込み、谷に沿って東西方向に屈曲する。VI層堆積中に調査区南半部の急斜面では土砂くずれによるかとおもわれる黄褐色砂層が分厚く入り込んで徐々に地形をゆるやかな斜面に変えている。VI層に対応する窯は調査区のほぼ真北にあったものと考えている。

この窯の廃絶後、調査区西半部では間層が堆積するまもなく新たな窯が築かれる。窯体を掘削した土でマウンドをつくって前庭部とし（V層）、その上にこの窯の操業時にかきだされた灰・焼台・破損品などが大きく2層にわたって堆積する（IV・III層）。このうち、IV層は調査区西端部付近が最も厚く、III層はそれよりやや東よりに厚く堆積しているが、その分布範囲はほぼ重なっている。IV層には間層をはさむ部分はないが、III層は灰層の末端にいくほど間層が分厚く入り込み、最も厚いところでは約2mにおよんでいる。この時期の窯体は灰層の分布範囲からみて調査区の北西方向とみられ、すでに道路建設時に破壊されたものと考えている。

この窯が廃絶したのち、調査区東側ではまた間層の堆積があり、上層灰原（II層）にともなう窯が築かれる。II層はB—B'ベルトで長さ5.5m、厚さ0.5mを検出したにすぎないため、灰原の末端がわずかにかかった程度と考えてよかろう。窯体は調査区より北東方向のかなり上方にあったものと推定しておく。その後、道路建設やゴルフ場造成などのたび重なる開発により、調査区北方の斜面は削られ、それぞれの灰原にともなう窯体は消滅していったのであろう。

第3章 遺物

第2章で述べたとおり、立楠古窯跡の灰原は谷部の埋土とⅠ～Ⅵ層におよぶ灰層からなっている。本章では、再堆積とおもわれるⅠ層を除き、Ⅱ層から順に南北・東西のメインベルトを分層してとりあげた遺物のみを掲載し、記述をすすめていくこととする。

1. Ⅱ層出土遺物 (図7・8)

1～38は椀である。1は体部が半球状にふくらんでたちあがり、口縁部が強く外反する。見込み部に殺しを施し、体部内面にくぼみをもつ。高台接地面に離れ砂の痕跡をとどめる(以下、砂高台とする)。2は見込み部に殺し・ぬたぬぐいをおこない、口縁部は逆「ハ」字状にひろがって端部は肥厚しつつ外反する。3～6は見込み部にぬたぬぐいを施し、体部内面には浅いくぼみがめぐる。口縁部はほぼ直線的にのび、端部は肥厚して強く外反する。7は見込み部に殺しを施す。8～14は見込み部に殺しやぬたぬぐいをおこなわず、体部内面にくぼみがめぐる。体部下半がやや丸みをおび、口縁端部は強く外反する。15～17は殺し・ぬたぬぐいがなく、体部内面にくぼみがめぐる。体部下半が強く屈曲して口縁部は直線的にのびる。端部は肥厚する。なお、2～17は高台にモミ痕がつく(以下、モミ高台とする)。18～20は口縁部の破片。21～38は底部の破片である。21～24は見込み部に殺しを施し、22～35はぬたぬぐいをおこなう。いずれも体部内面に浅いくぼみがめぐる。体部下半に丸みをおびる。36～38は見込み部には特に調整をおこなわず、体部内面に浅いくぼみがめぐる。37・38は口縁部が直線的にのびる。

39～52は小皿。39～44は見込み部に殺しを施す一群である。39は深い椀形の器形。40～44は浅く、直線的に口縁部がのびる。45～52は見込み部に殺しをおこなわない一群で、51は見込み部にぬたぬぐいを施す。45・46は底部を高台状に突出させる。いずれも口縁端部は丸みをおびる。

2. Ⅲ層出土遺物 (図9～11)

53～55は東西ベルト3層(Ⅱ層とⅢ層の間層)からの出土遺物である。53・54は椀。53はモミ高台で体部下半に丸みをもち、口縁部が大きくひらいて端部が外反する。54もモミ高台で体部下半に丸みをおび、口縁部はゆるやかに外反する。53・54とも見込み部に殺しをおこなわず、周囲にくぼみがめぐる。55は小皿で、底部が口縁部に比して大きく偏平な器形である。自然釉が厚く、見込み部の調整は不明。

56～58は東西ベルトⅢ—4・5層からの出土遺物で、南北ベルトⅢ—36層より上層にあたる。56は砂高台で、器高が低い。体部下半から口縁部にかけて大きくひろがり、端部は外反する。57・58はモミ高台。57は見込み部に殺しを施し、体部下半から口縁部にかけて直線的にのびる。口縁端部には締めナデをおこなう。58は底径が大きく、体部下半にふくらみをもつ。口縁端部はゆるやかに外反する。56～58とも見込み部周囲にくぼみがめぐる。

59～61は南北ベルト17層からの出土で、Ⅲ—36層の上の間の間層である。59はモミ高台で体部下半

にふくらみをもち、口縁端部は外反する。見込み部周囲にくぼみがめぐる。60・61は小皿で、いずれも見込み部に殺しを施し、口縁端部は強く外反する。

62～64は東西ベルトIII—6・10層からの出土遺物で、南北ベルトのIII—36層に対応する。62・63はモミ高台で、いずれも体部下半に丸みをおび、口縁部は外反する。見込み部の周囲にはくぼみがめぐり、62には殺しを施す。64は底径が大きく、口縁部は強く外反する。器高は低い。

65～85は南北ベルトIII—36層出土遺物である。65～76は椀で、いずれもモミ高台。65は比較的大形で、見込み部に殺しを施し、周囲に段がつく。口縁部は強く外反し、体部との境に稜をもつ。端部外面にコテあとをとどめ、内面に段がつく。66は底径が小さく、体部下半にふくらみをもちつつゆるやかにひろがり、端部は締めナデにより外反する。見込み部にぬたぬぐいをほどこす。67は底部から口縁部にかけて直線的にのび、端部は肥厚して外反する。68は口縁が著しくひずむ。端部は外形面をもち、とがる。72～76は底部の破片。69～71は見込み部に殺しを、70～76はぬたぬぐいをおこなう。

II—2層 (1)

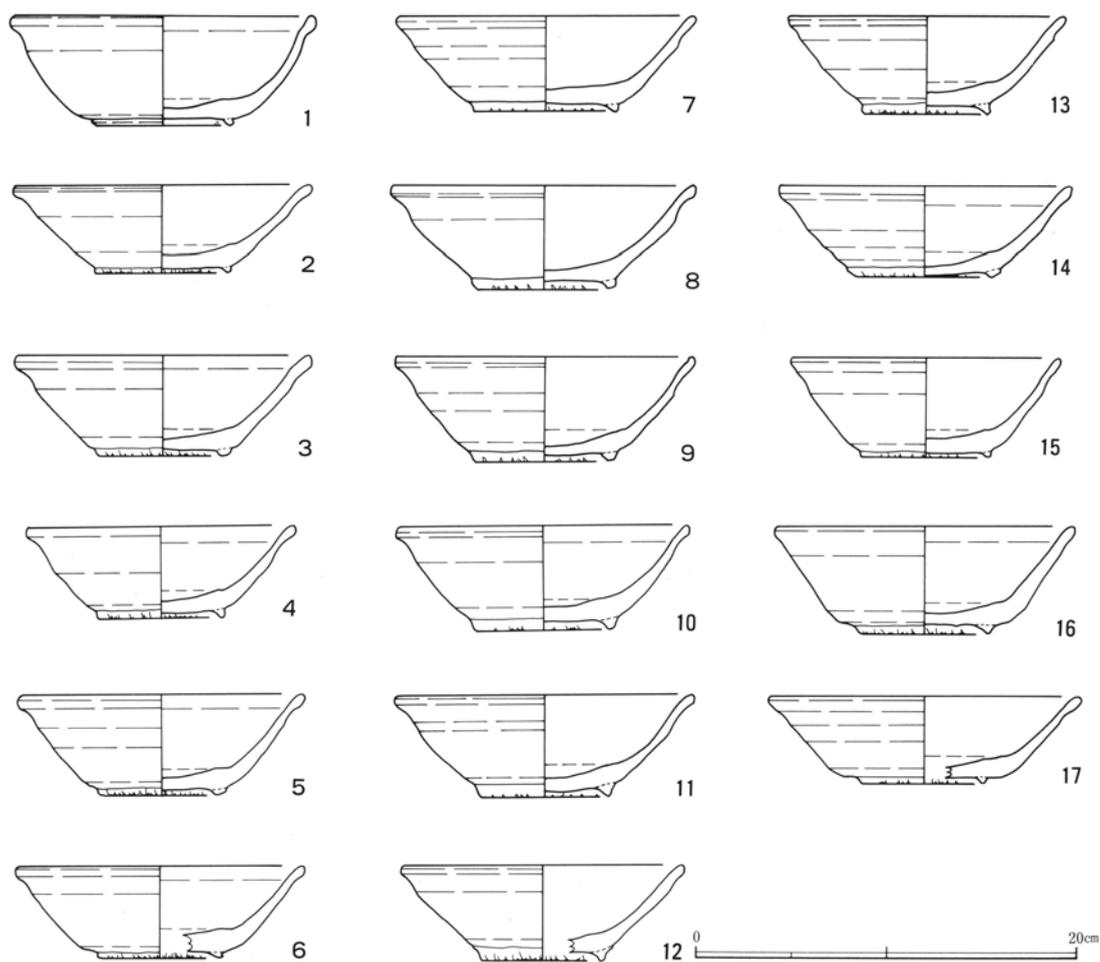


図7 II層出土遺物実測図 (1)

II—2層 (2)

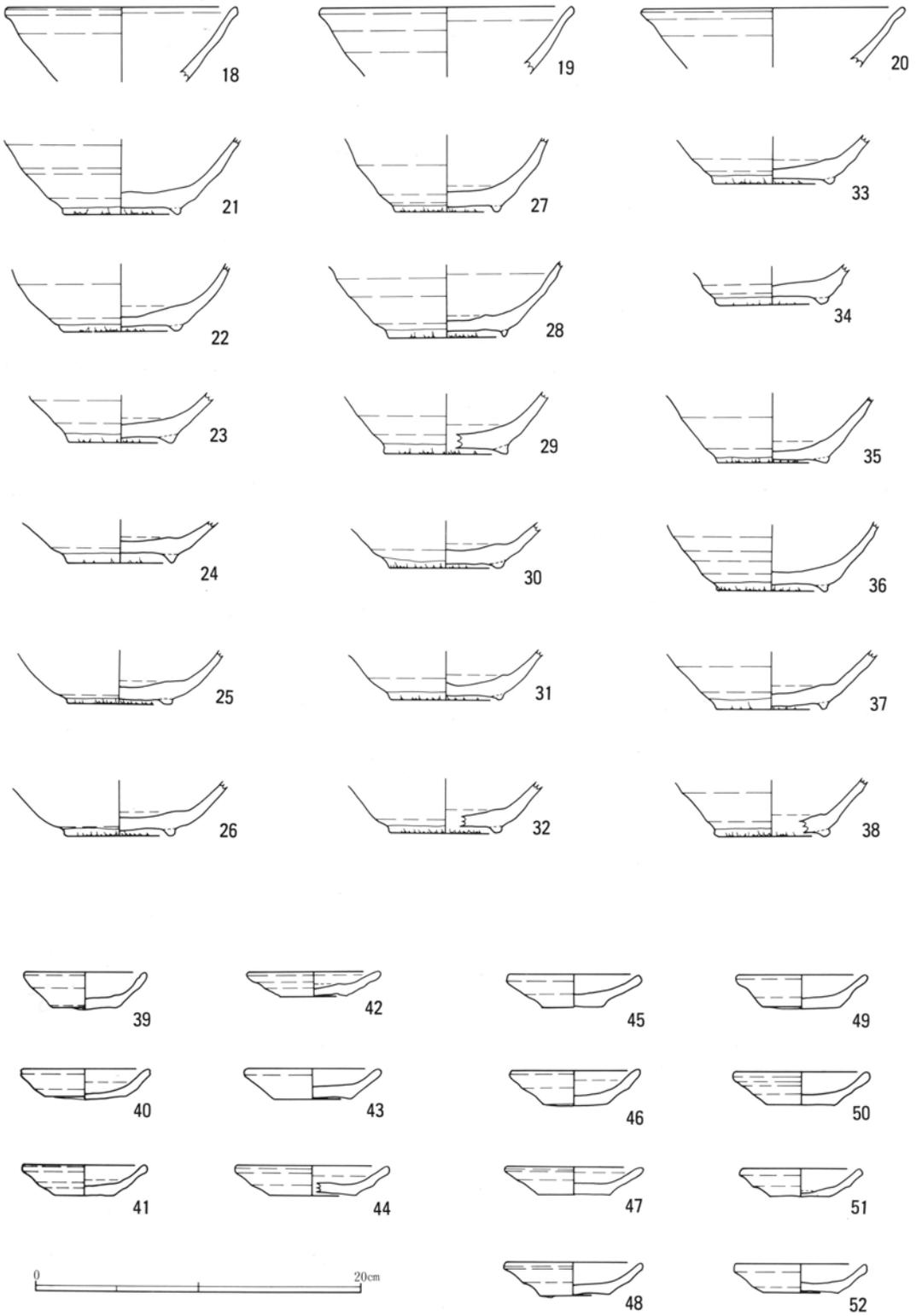


图8 II層出土遺物实测图 (2)

77～84は小皿である。77～82は見込み部に殺しを施す。77は底部を高台状につくりだす。79～81・83は扁平。82は著しく内彎する。

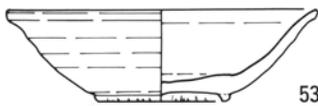
86～103は南北ベルトIII—5層からの出土で、86～97はモミ高台の椀、98～103は小皿である。83～89は砂高台で、86・87は見込み部に殺しとぬたぬぐい、88・89はぬたぬぐいのみを施す。いずれも周囲に浅いくぼみがめぐる。口縁部は直線的にひらき、端部はわずかに外反する。90～97はモミ高台で、見込み部にぬたぬぐいをおこない、周囲にくぼみがめぐる。90・91とも口縁部は直線的にひらき、端部はわずかに外反する。94・97には見込み部に「く」字状のナデを施す。98～101は見込み部にぬたぬぐいを施す。98・99は底部を高台状につくりだす。いずれも深手の器形である。

104～111は南北ベルトIII—3層からの出土である。椀はすべてモミ高台である。104～107は見込み部に殺しを施す。104・106は深手の器形で、104には口縁端部に締めナデをおこなう。105は口縁端部をつまみあげる。107は口縁端部に締めナデを施す。108・109は体部下半に丸みを持ち、口縁部が強く外反する。110・111は底部が大きく、浅い器形の皿である。110は見込み部に殺しを施す。

112～119は南北ベルトIII—3・4層からの出土遺物である。112は底径が大きく、器高が低い。口縁部は直線的にひろがり、端部は肥厚しつつ外反する。113は見込み部に殺しをおこなう。114～116は見込み部にぬたぬぐいを施す。115・116は体部に丸みをおびる。117には見込み部に「く」字状のナデを施す。なお、椀はすべてモミ高台である。119は底径が大きく、器高が低い。口縁部は直線的にひろがる。

120～122は南北ベルトIII—4層からの出土である。120はモミ高台で、底径が大きく、器高がきわ

II層とIII層の間層
(東西ベルト3層)



53



54



55

東西ベルトIII—4.5層

(III—36層上)



56



57



58

南北ベルト17層

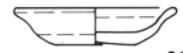
(III—36層上間層)



59



60

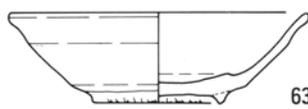


61

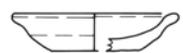
東西ベルトIII—6・10層



62



63

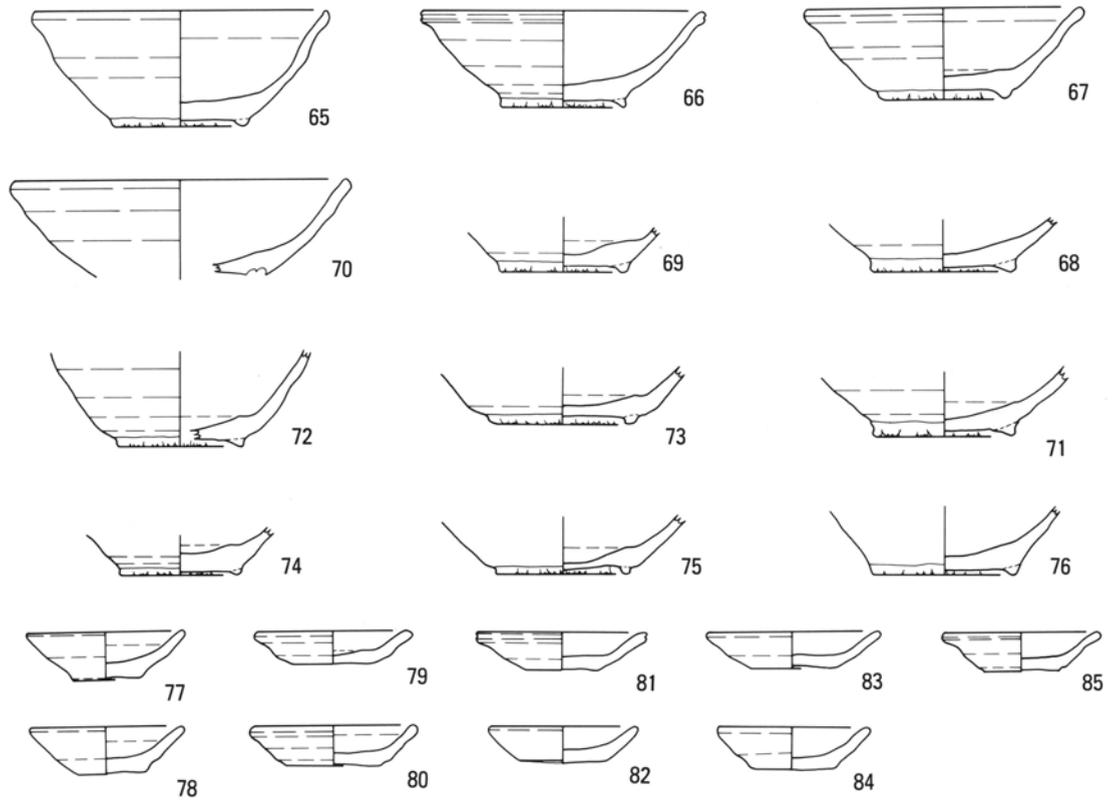


64



図9 III層出土遺物実測図(1)

南北ベルトIII-36層



南北ベルトIII-5層

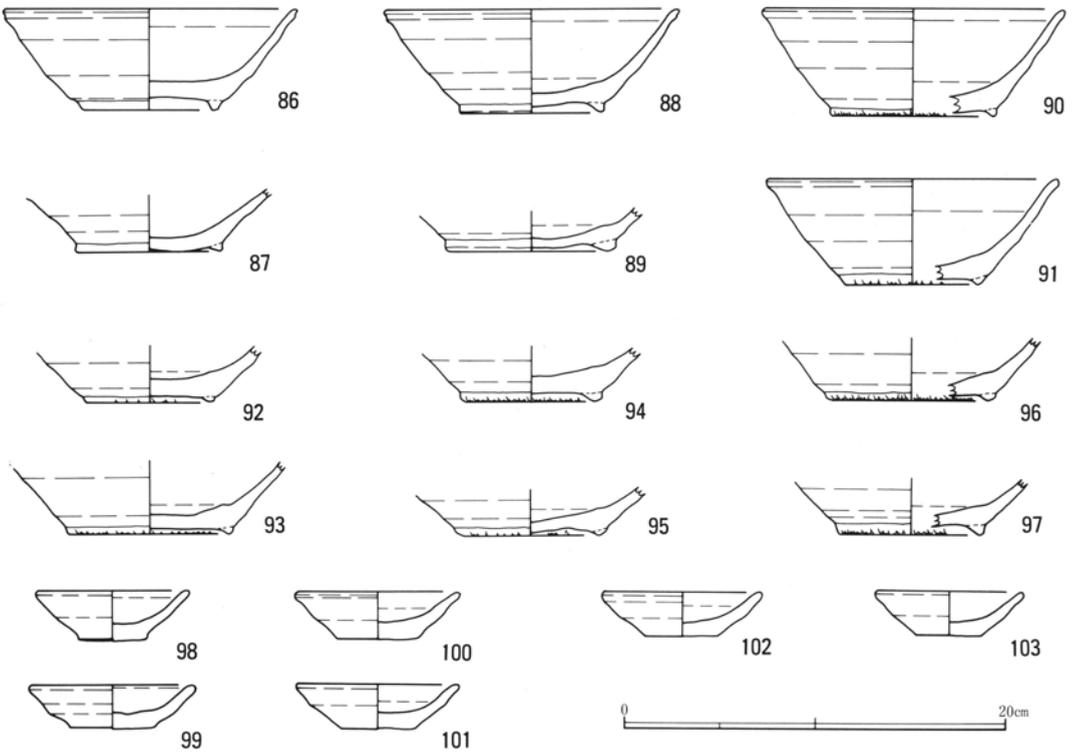


図10 III層出土遺物実測図(2)

南北ベルトⅢ-3層



104



106



108



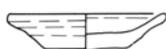
105



107



109



110



111

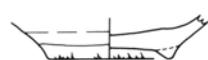
南北ベルトⅢ-3・4層



112



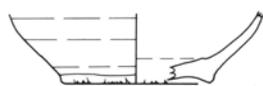
113



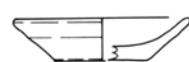
118



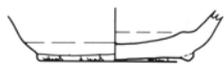
114



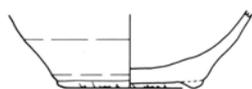
116



119



115



117



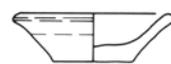
南北ベルトⅢ-4層



120



121



122

南北ベルト24層(Ⅲ層とⅣ層の間層)



123



124



125

図11 Ⅲ層出土遺物実測図(3)

めて低い。口縁は逆「ハ」字状に端部まで直線的にのびる。小皿は121・122とも深手の器形で見込み部に殺しを施す。121は底部を高台状につくりだし、122は口縁部が直線的にのびる。

123～125は南北ベルト24層（Ⅲ層とⅣ層の間層）からの出土である。123はモミ高台で、体部に丸みをおび、見込み部の周囲にくぼみがめぐる。124は底径が大きく、器高は低い。見込み部に殺しをほどこし、口縁部は直線的にのびる。125は丸みをおびる大きな底部に、やや外反する口縁部がつく。

3. Ⅳ層出土遺物（図12～14）

126～202は南北ベルトⅣ—6層（東西ベルトⅣ—14層）からの出土遺物である。126～179は椀で、126～140は砂高台、142～148・152～179はモミ高台である。126～135・137・138は底部から口縁部が直線的にひらく形態で、136・139～140は体部下半に丸みをもつ器形である。126・127は口縁端部に締めナデ、129～131・139は見込み部に殺しを、126・128・132・134・137・140はやはり見込み部にぬたぬぐいを施す。127・128・131・137～140は見込み部の周囲にくぼみもち、129・134は段がつく。133・134は釉着資料で、133が上である。142・143は底部から口縁部が直線的にのびるタイプで、144～147は体部下半に丸みをおびるタイプである。142・143・146は口縁端部に締めナデをおこない、142・143・146・147・152～159は見込み部に殺しを、144・160～163はぬたぬぐいを施す。142・146・147・152～158・161～170・172～179は見込み部の周囲にくぼみが、143・146・159・160・171は段がめぐる。162・163は見込み部中央でぬたが盛りあがっている。141は高台をもたない椀である。見込み部にぬたぬぐいを施し、口縁は内彎して端部がとがっている。180～200は小皿である。186・187・192は口縁端部に締めナデをおこない、180～191は見込み部に殺しを、192～194はぬたぬぐいを施す。180～182・195～198は深手の器形で、底部を高台状につくりだす。185・189・192・193・199・200は浅い器形である。201・202は鉢で、体部下半にヘラケズリを施し、201は底部外面には粗面を残す。202は高台にモミ痕をとどめる。

203～205は南北ベルトⅣ—7層からの出土である。203・204は砂高台で、203は見込み部に殺しを施し、204は見込み部の周囲に段をもつ。205はモミ高台で、底径が小さい。3点とも体部下半にややふくらみをもつが、ほぼ直線的にのびる口縁部である。

206・207は南北ベルトⅣ—8層からの出土。206は高台が剥離している。底径が大きく、口縁部は直線的にひろがり、端部には締めナデを施す。207は砂高台で、見込み部中央にぬたが盛りあがる。

208・209は南北ベルトⅣ—9層から出土している。208は砂高台で、底径が大きい。体部下半はゆるやかにふくらみ、口縁部は外反する。見込み部に殺しを施し、周囲にくぼみがめぐる。209はモミ高台である。口縁部は直線的に逆「ハ」字状にひろがり、端部は肥厚しつつ外反する。見込み部周囲に段がつく。

4. Ⅴ層出土遺物（図15）

210～232は南北ベルトⅤ—11層および東西ベルトⅤ—15層からの出土遺物である。210はⅣ—6層出土の141と同じく無高台の椀である。口縁はゆるやかに内彎しつつ大きくひろき、端部は肥厚しながら外反する。見込み部の周囲にくぼみがめぐる。211・212は砂高台の椀で、いずれも口縁部はわずかに

南北ベルトIV-6層(1)(東西ベルトIV-14層)

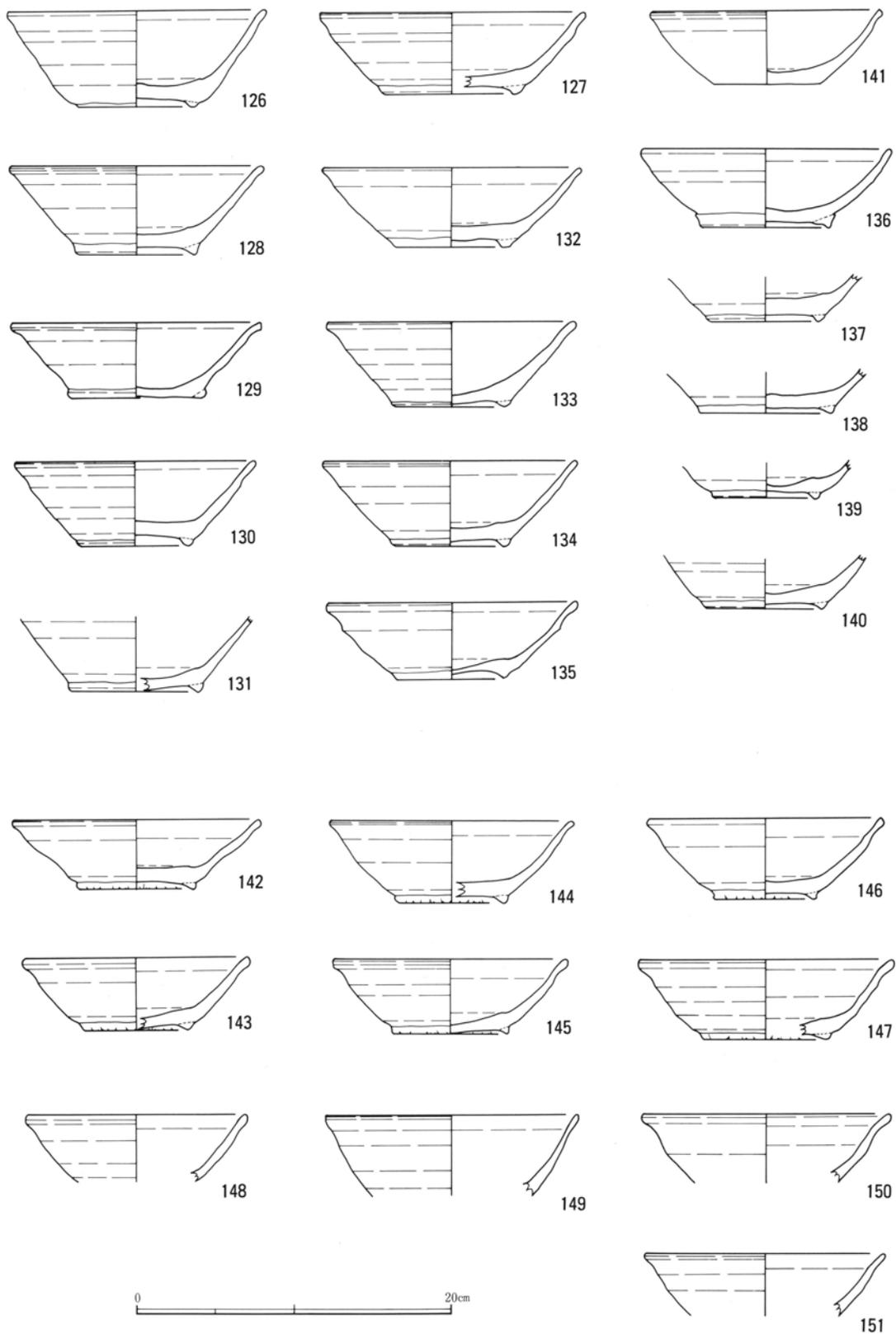


図12 IV層出土遺物実測図(1)

南北ベルトIV-6層(2)(東西ベルトIV-14層)

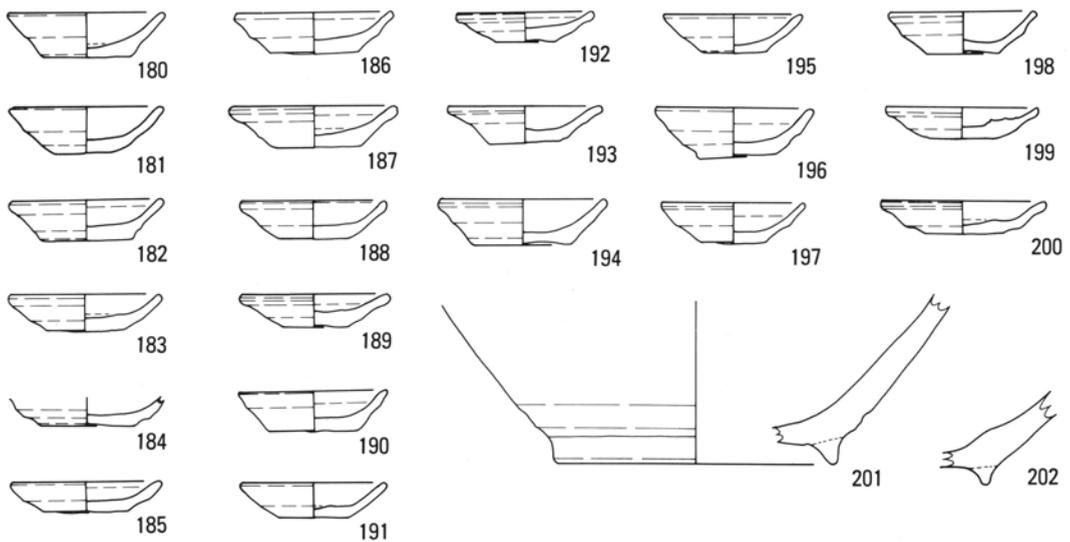
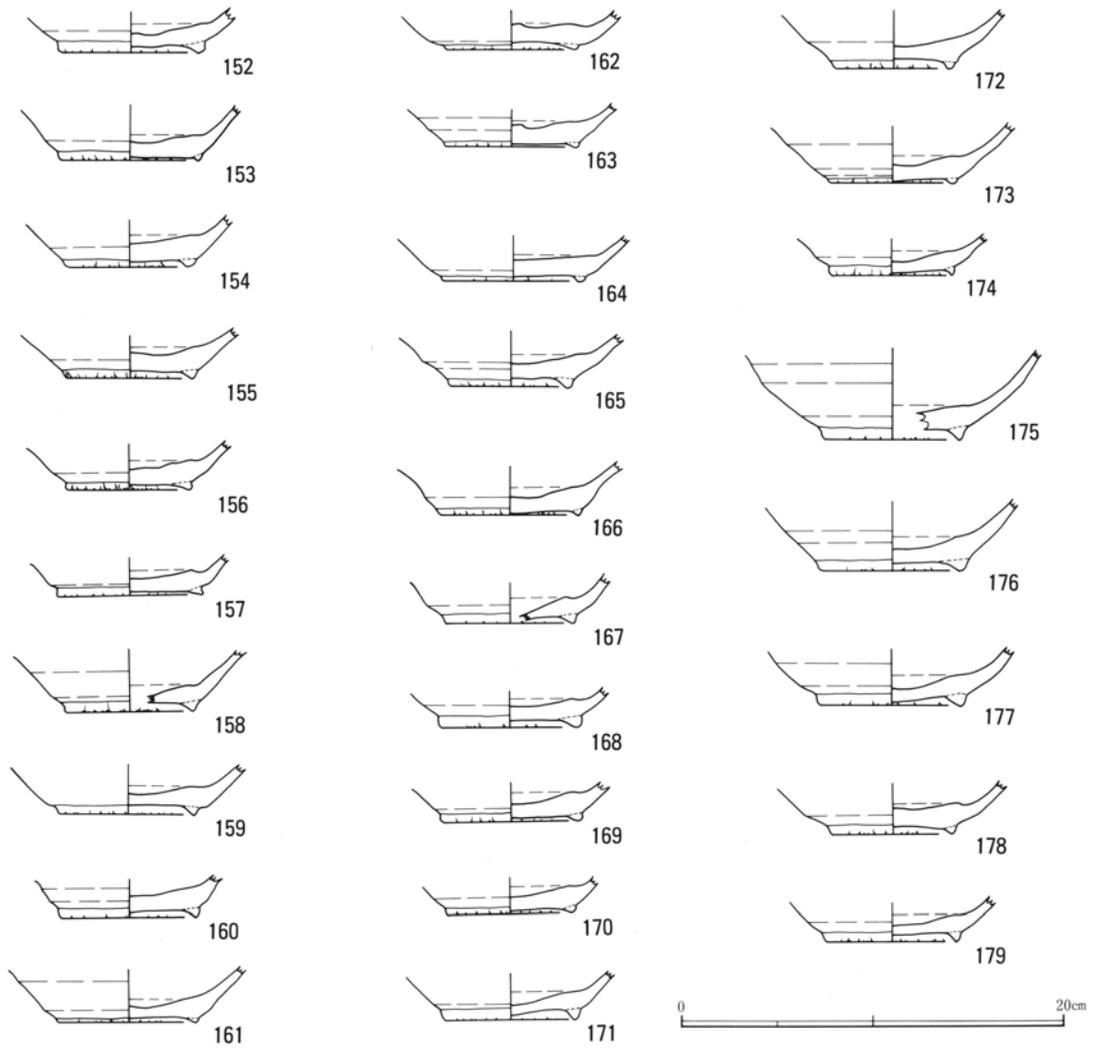
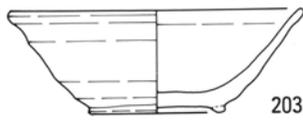


図13 IV層出土遺物実測図(2)

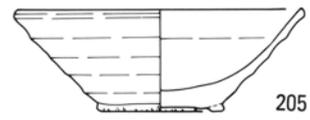
南北ベルトIV—7層



203

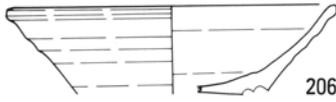


204



205

南北ベルトIV—8層



206

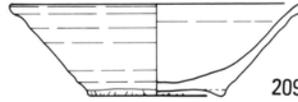


207

南北ベルトIV—9層



208



209



図14 IV層出土遺物実測図(3)

内彎気味にたちあがり、端部は肥厚しない。211は見込み部の周囲にくぼみがめぐる。213~230はモミ高台の椀である。うち、213~217は見込み部に殺しが入る。いずれも口縁部はわずかに内彎しつつもほぼ直線的にひらいて、端部付近で外反する。213~215・217は見込み部の周囲にくぼみが、216は段がめぐる。217は口縁部のたちあがりがかかなり直立気味である。218~225・230は見込み部に殺しをもたず、周囲にくぼみがめぐる。うち、218~223はわずかに内彎気味にひらく口縁部と外反する端部をもつ。224・225は底径が大きく、直線的にたちあがる口縁部で、端部がわずかに外反する。226~228は見込み部に殺しをもたず、周囲に段がつく。口縁部はわずかに内彎しつつ大きく逆「ハ」字状にひらき、端部は外反する。229は内彎気味にひらく口縁部をもつ。

231・232は小皿である。231は底径が小さく、232は大きい。

5. VI層・谷部出土遺物(図16)

233~236は南北ベルトVI—21・22層から出土した遺物である。233~236は砂高台。うち、233~235には見込み部に殺しが入る。233・234は底径が大きく口縁部は直線的にたちあがる。233は器高が高く、口縁端部は強く外反する。235は体部下半から口縁部にかけて内彎気味にたちあがり、口縁端部付近で強く外反する。236は器高が低く、口縁部はゆるやかに内彎する。234~236は見込み部周囲にくぼみがめぐる。237はモミ高台で、口縁部は内彎し、端部でわずかに外反する。

238~240は南北ベルトVI—25・26層からの出土。238・239はモミ高台の椀で、見込み部に殺しが入る。口縁部はいずれもゆるやかに内彎し、238は端部付近で強く外反する。238は器高が高く、239は底径が大きく器高は低い。240は鉢の底部の破片である。体部にヘラケズリを施す。

241~243は南北ベルトVI—12・13層である。いずれもモミ高台の椀で、見込み部の周囲にくぼみがめぐる。口縁部は内彎気味で、端部付近でわずかに外反する。241は器高が高く、243は低い。

244~249は谷部の埋土からの出土で、本古窯跡の灰層中で最下層にあたる。244~248はいずれも砂

南北ベルトV-11層（東西ベルトV-15層）

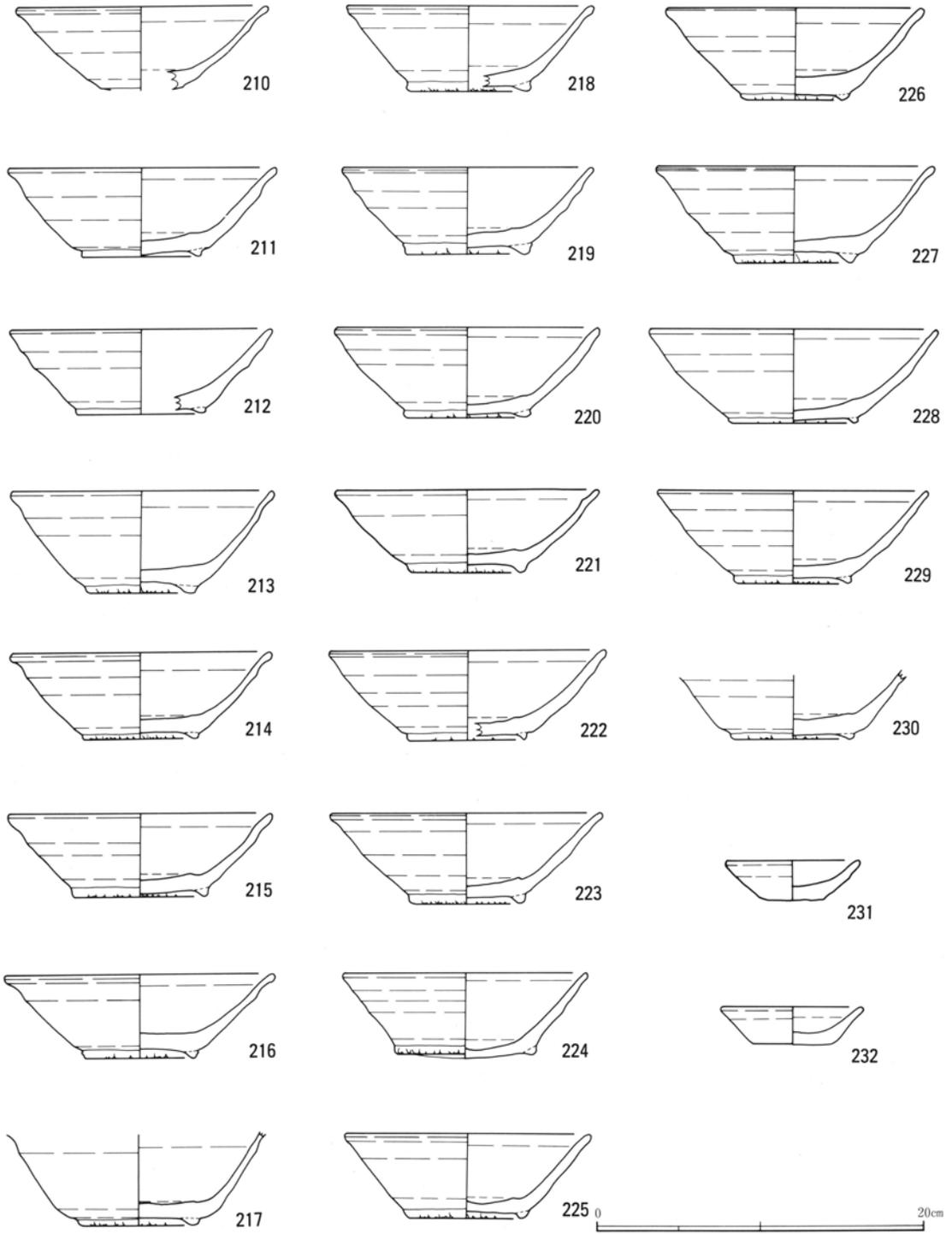
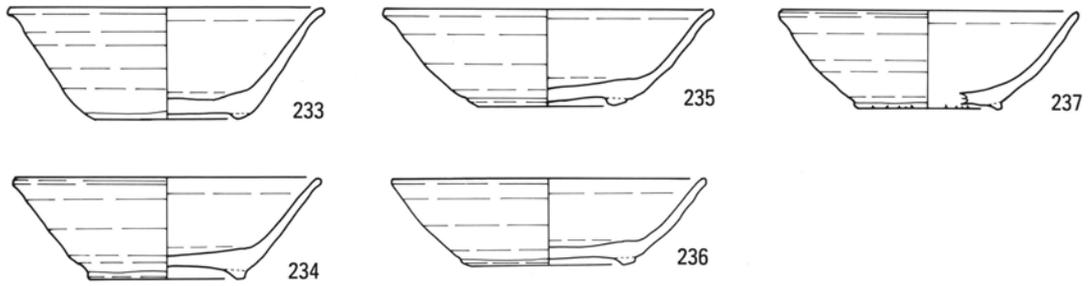


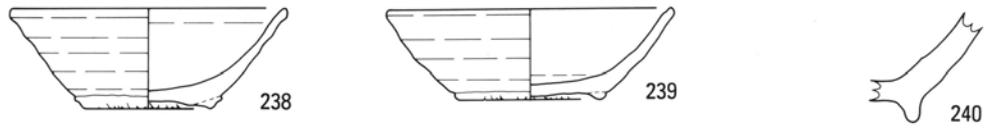
図15 V層出土遺物実測図

高台の椀である。244・245は見込み部に殺しが入る。口縁部は直線的にひらき、端部は外反する。
 246・247はわずかに内彎気味の口縁部で、端部付近が外反する。248は口縁部がゆるやかに内彎する。
 244～248とも見込み部の周囲にくぼみがめぐる。249は小皿。底径が大きく、器高が高い。

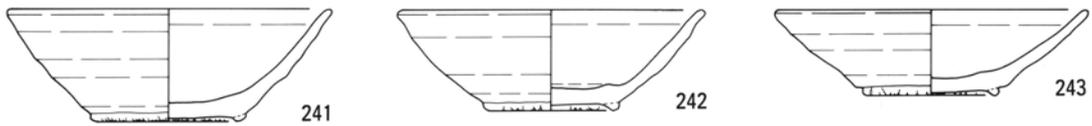
南北ベルトVI-21・22層



南北ベルトVI-25・26層



南北ベルトVI-12・13層



谷部埋土

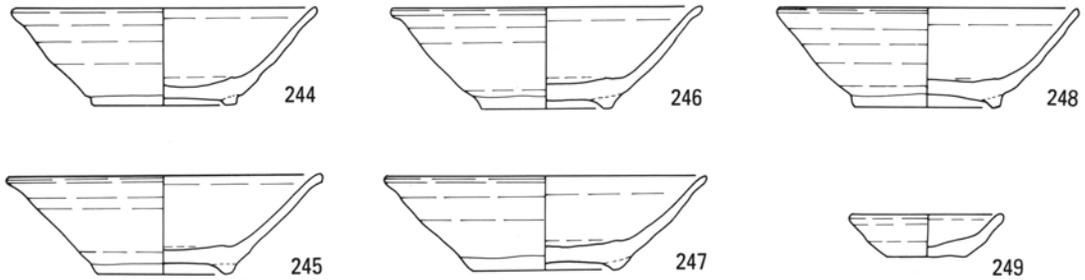


図16 VI層・谷部出土遺物実測図

第4章 まとめ

立楠古窯跡の調査は、ゴルフ場造成や知多中央道の建設などの、たび重なる開発により、すでに窯体が滅失していたため、残念ながら灰原のみの調査となった。しかしながら、少なくとも3基以上の窯によって形成された灰層が幾重もの間層をはさみつつ、厚さ4 m以上にもわたって堆積していることがあきらかとなった。

現在、知多古窯跡群における最も新しい成果のひとつである『中田池古窯址群(その2)』に掲載された奥川弘成氏の編年案に照らしあわせると、下層の谷部埋土やVI層から出土した椀は全体に薄手で丁寧なつくりがなされており、底径が大きく、砂高台の割合が高いことなどから、第2型式の初頭ないし前葉に属するとみてよかろう。中層にあたるIII～V層は器形がかなりバラエティーに富むが、下層の一群と比較すると、厚手で口縁端部が肥厚しつつ外反する椀がめだち、高台はモミ高台が多くなり、底部のより内側につくようになる。小皿は扁平化して底径が大きくなるなどの特徴がみられることから、第2型式の後葉ないし末葉に属するとみてよい。ただし、V層に関しては、窯体掘削時の排土と想定していることから、出土遺物は下層の窯にともなうものと考えるべきであろう。上層にあたるII層出土の遺物でもほぼ中層と同様の特徴をもっている。

これらの時期を実年代にあてはめると、下層灰原は12世紀後半～末頃、中層・上層灰原は13世紀初頭～前半頃に相当する。下層から上層までの時期幅を最大限見積っても50年程度であり、この短期間に地形が一変してしまうほどの土砂(灰層もふくめて)が堆積し、3基以上もの窯がほぼ同じ位置で築き直されていることが判明したのである。ただ、各灰層をわける明黄褐色砂による間層の成因については人為的なものとは考えにくく、たびかさなる土砂くずれによるとしておくほかに明快な解答をもたないが、III層のように窯の操業中にも堆積している点はやや理解にくるしむ。

今回の調査は、なにぶんにもすでに窯体の失われた灰層のみの発掘であり、資料不足の点から、生産構造の問題にまで言及できなかつたことはまことに残念である。

註)

1. 奥川弘成 1992 「中田池古窯址群とその周辺地域の編年」『中田池古窯址群(その2)』武豊町文化財調査報告書第9集

このほかにも次の資料を参照した。

- 中野晴久 1992 「常滑窯」(大戸窯検討のための「会津シンポジウム」発表要旨)『東日本における古代・中世窯業の諸問題』大戸窯跡群検討会・会津若松市教育委員会

付 表

立楠古窯跡出土遺物観察表

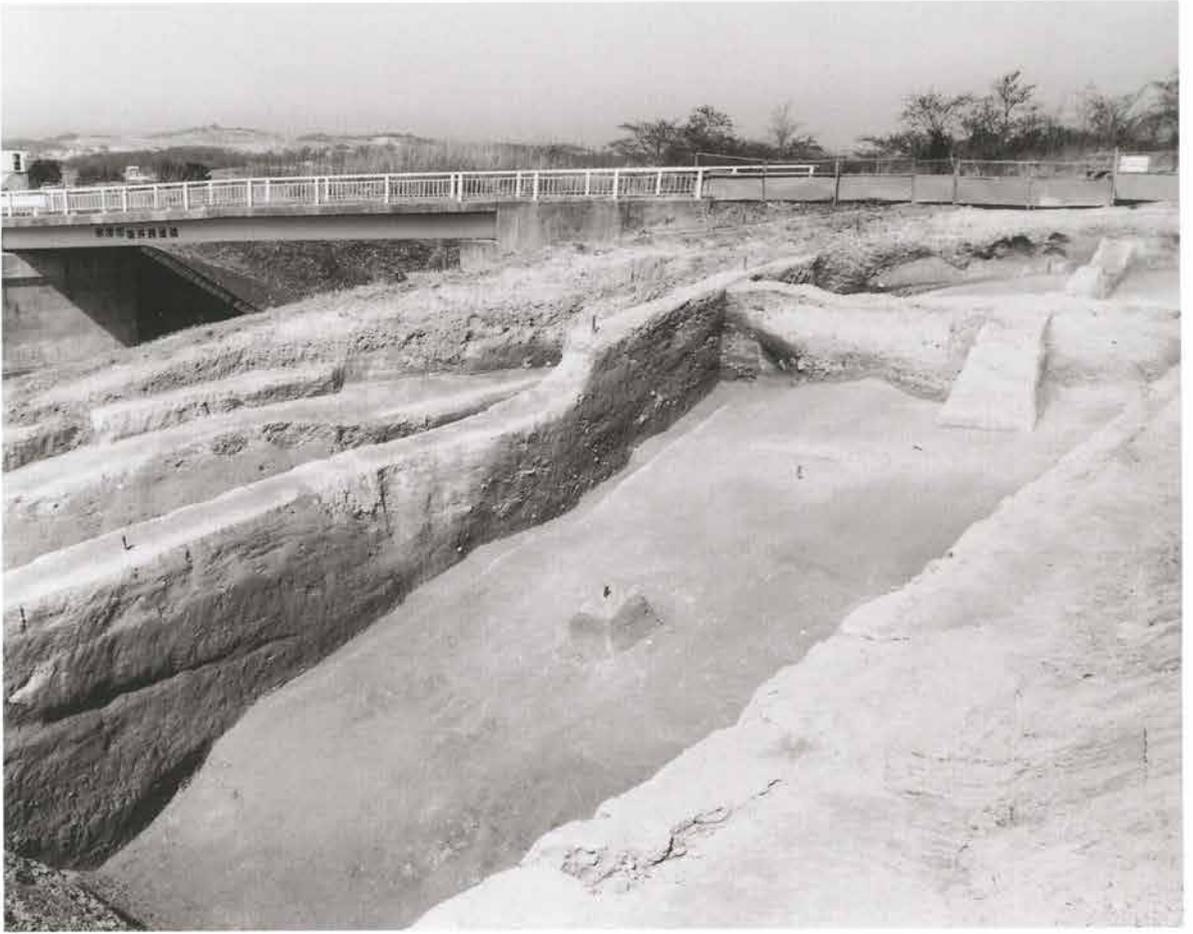
土器番号	登録番号	ヘルト名	出土層位	口径 ()	底径 ()	器高 ()	殺し	ぬたぬぐい	くぼみ	モミ高台	砂高台	胎土	焼成				備考
													堅緻	良好	やや軟	軟	
1	1	東西	II-2	16.0	7.4	5.7	○		○		○	良好			○		
2	2	南北	II-2	15.8	7.2	4.7	○	○	○	○		やや粗		○			
3	3	南北	II-2	15.6	7.0	5.3		○	○浅			やや粗		○			
4	4	南北	II-2	14.1	6.7	4.9		○	○	○		やや粗		○			
5	5	南北	II-2	15.1	6.7	5.3		○	○浅	○		やや粗		○			
6	6	南北	II-2	15.2	6.7	4.9		○	○浅	○		良好		○			
7	7	東西	II-2	15.7	7.6	5.1	○			○		やや粗		○			
8	8	東西	II-2	16.0	7.5	5.5			○	○		良好			○		縮めまで
9	9	東西	II-2	15.8	7.4	5.5			○	○		良好			○		
10	10	南北	II-2	15.5	7.3	5.6			○	○		良好		○			
11	11	東西	II-2	15.7	7.0	5.4			○	○		良好		○			
12	12	南北	II-2	15.0	6.5	5.0				○		やや粗		○			
13	13	東西	II-2	14.6	6.8	5.2			○	○		良好		○			
14	14	南北	II-2	15.4	8.1	4.9			○	○		良好		○			
15	15	南北	II-2	14.3	6.8	5.3			○	○		良好		○			
16	16	南北	II-2	15.9	7.0	5.8			○	○		良好			○		
17	17	南北	II-2	16.5	6.6	4.7			○	○		良好		○			
18	18	南北	II-2	14.4	—	(4.6)						良好		○			
19	19	南北	II-2	15.7	—	(4.2)						良好			○		
20	20	南北	II-2	16.2	—	(3.7)						良好		○			
21	21	南北	II-2	—	7.3	(4.7)	○		○	○		良好		○			
22	22	南北	II-2	—	7.5	(4.2)	○	○	○	○		良好		○			
23	23	南北	II-2	—	6.7	(3.0)	○	○	○	○		良好		○			
24	24	南北	II-2	—	6.7	(2.7)	○	○	○			やや粗		○			
25	25	南北	II-2	—	6.6	(3.4)		○	○浅			やや粗		○			
26	26	南北	II-2	—	6.8	(2.5)		○	○浅			良好		○			
27	27	南北	II-2	—	6.6	4.8		○	○浅			良好		○			
28	28	南北	II-2	—	7.2	(4.6)	○	○	○	○		やや粗		○			
29	29	南北	II-2	—	7.6	(3.8)		○	○			良好		○			
30	30	南北	II-2	—	7.0	(2.9)		○	○	○		良好		○			
31	31	南北	II-2	—	6.9	(3.1)		○	○	○		良好		○			
32	32	南北	II-2	—	6.6	(3.4)		○	○浅			良好		○			
33	33	南北	II-2	—	7.4	(3.0)		○	○			良好		○			
34	34	南北	II-2	—	6.9	(2.4)		○		○		良好			○		
35	35	南北	II-2	—	6.9	(4.4)		○	○	○		やや粗		○			
36	36	南北	II-2	—	6.9	(4.1)			○	○		良好		○			
37	37	南北	II-2	—	6.7	(3.6)			○浅	○		やや粗		○			
38	38	南北	II-2	—	7.1	(3.5)			○	○		やや粗		○			
39	39	南北	II-2	7.7	4.0	2.4	○					良好		○			
40	40	南北	II-2	8.0	5.1	1.9	○					良好		○			
41	41	南北	II-2	7.7	3.6	1.9	○					良好		○			
42	42	南北	II-2	8.3	4.2	1.5	○					良好		○			
43	43	南北	II-2	8.5	4.8	1.9	○					良好		○			
44	44	南北	II-2	9.6	5.4	1.9	○					やや粗		○			
45	45	東西	II-2	8.4	3.7	2.0						良好		○			
46	46	東西	II-2	8.1	3.9	2.2						良好		○			
47	47	南北	II-2	8.6	4.4	1.7						良好		○			
48	48	南北	II-2	8.6	4.3	2.0						良好		○			
49	49	南北	II-2	8.1	4.9	2.1						良好		○			
50	50	南北	II-2	8.5	4.0	2.1						良好		○			
51	51	南北	II-2	7.6	3.8	1.8		○				やや粗		○			
52	52	南北	II-2	8.2	4.8	1.8						やや粗		○			
53	53	東西	3	16.4	7.1	4.9			○	○		良好		○			
54	54	東西	3	15.5	6.8	4.8			○	○		良好		○			
55	55	東西	3	8.9	4.7	1.9						良好		○			
56	56	東西	III-4・5	16.4	7.7	4.6					○	良好		○			
57	57	東西	III-4・5	15.5	7.3	5.1	○		○	○		良好		○			縮めまで
58	58	東西	III-4・5	15.8	8.0	5.3			○	○		良好		○			
59	59	南北	17	15.1	7.8	5.5			○	○		良好		○			

土器番号	登録番号	ベルト名	出土層位	口径 ()	底径 ()	器高 ()	殺し	ぬた ぬぐい	くぼみ	モミ 高台	砂 高台	胎 土	焼 成				備 考
													堅緻	良好	やや軟	軟	
60	60	南北	17	8.3	3.0	2.3	○					良好		○			
61	61	南北	17	8.7	4.0	2.0	○					良好		○			
62	62	東西	III-6・10	16.2	7.7	5.2	○		○	○		良好		○			
63	63	東西	III-6・10	15.8	6.9	4.8			○	○		良好		○			
64	64	東西	III-6・10	8.7	4.7	2.0						良好		○			
65	65	南北	III-36	15.7	7.2	6.2	○			○		良好			○		
66	66	南北	III-36	15.0	6.6	5.1		○		○		やや粗		○			
67	67	南北	III-36	14.8	7.0	4.9				○		良好		○			
68	68	南北	III-36	(17.9)	—	(5.0)						良好		○			
69	69	南北	III-36	—	6.7	(2.5)	○			○		良好		○			
70	70	南北	III-36	—	7.7	(2.8)	○	○		○		良好			○		
71	71	南北	III-36	—	7.5	(3.4)	○	○	○	○		良好		○			
72	72	南北	III-36	—	6.7	(5.1)		○	○	○		良好				○	
73	73	南北	III-36	—	7.8	(3.0)		○	○	○		やや粗		○			
74	74	南北	III-36	—	6.4	(2.1)		○	○	○		良好		○			
75	75	南北	III-36	—	7.0	(3.1)		○	○	○		やや粗		○			
76	76	南北	III-36	—	7.5	(3.7)		○	○	○		良好			○		
77	77	南北	III-36	8.4	3.5	2.5	○	○				良好		○			
78	78	南北	III-36	8.2	3.5	2.5	○	○				やや粗		○			
79	79	南北	III-36	8.4	4.4	1.8	○					やや粗		○			
80	80	南北	III-36	8.9	5.1	2.1	○					良好			○		
81	81	南北	III-36	9.0	4.4	1.8	○					やや粗		○			
82	82	南北	III-36	8.0	4.6	2.0	○					やや粗		○			
83	83	南北	III-36	9.2	4.4	1.9						良好		○			
84	84	南北	III-36	8.1	4.2	2.3						良好		○			
85	85	南北	III-36	8.3	3.9	2.0						良好		○			
86	86	南北	III-5	15.5	7.2	5.4	○	○	○浅		○	良好		○			
87	87	南北	III-5	—	7.8	(3.1)	○	○	○浅		○	良好		○			
88	88	南北	III-5	15.5	7.6	5.5		○	○	○		良好		○			
89	89	南北	III-5	—	9.0	(2.1)		○	○	○		良好		○			
90	90	南北	III-5	16.0	8.7	5.7		○	○	○		良好		○			
91	91	南北	III-5	15.4	7.0	5.6			○	○		良好				○	
92	92	南北	III-5	—	6.6	(3.0)	○		○			やや粗				○	
93	93	南北	III-5	—	8.7	(4.0)	○	○	○	○		良好		○			
94	94	南北	III-5	—	7.4	(3.0)		○		○		良好		○			
95	95	南北	III-5	—	7.9	(2.5)		○	○			良好				○	
96	96	南北	III-5	—	8.8	(3.3)		○	○	○		良好			○		
97	97	南北	III-5	—	7.6	(3.0)		○	○	○		良好		○			
98	98	南北	III-5	8.1	3.7	2.7		○				やや粗		○			
99	99	南北	III-5	8.8	4.5	2.3		○				良好			○		
100	100	南北	III-5	8.7	4.4	2.6		○				良好			○		
101	101	南北	III-5	8.6	3.9	2.4		○				良好			○		
102	102	南北	III-5	8.4	3.9	2.4						良好		○			
103	103	南北	III-5	7.9	3.5	2.3						良好		○			
104	104	南北	III-3	16.3	7.1	6.7	○		○	○		良好			○		縮めなで
105	105	南北	III-3	15.9	7.4	6.0	○					良好		○			
106	106	南北	III-3	16.1	7.1	6.2	○			○		良好		○			
107	107	南北	III-3	15.2	7.3	5.0			○	○		良好			○		縮めなで
108	108	南北	III-3	15.1	6.7	5.7			○	○		良好			○		縮めなで
109	109	南北	III-3	16.1	6.6	5.3			○			良好		○			
110	110	南北	III-3	8.4	4.3	2.0	○					良好		○			
111	111	南北	III-3	8.2	4.6	1.8	○					良好		○			
112	112	南北	III-3・4	15.9	8.0	4.8			○	○		良好				○	
113	113	南北	III-3・4	—	8.6	(2.4)	○		○			良好		○			
114	114	南北	III-3・4	—	7.6	(2.4)		○	○	○		やや粗				○	
115	115	南北	III-3・4	—	8.2	(2.7)		○	○	○		やや粗		○			
116	116	南北	III-3・4	—	8.0	(3.7)		○	○	○		やや粗		○			
117	117	南北	III-3・4	—	7.6	(3.9)		○	○	○		良好			○		
118	118	南北	III-3・4	—	6.6	(2.2)			○	○		やや粗		○			
119	119	南北	III-3・4	9.4	4.8	2.2						やや粗			○		
120	120	南北	III-4	15.8	8.2	4.6					○	良好		○			
121	121	南北	III-4	8.0	3.8	2.6	○					良好			○		
122	122	南北	III-4	8.5	4.2	2.5	○					良好		○			
123	123	南北	24	14.8	7.2	5.5			○	○		良好		○			
124	124	南北	24	8.1	4.1	1.9	○					良好		○			
125	125	南北	24	8.6	4.8	2.3						良好		○			

土器番号	登録番号	ベルト名	出土層位	口径 ()	底径 ()	器高 ()	殺し	ぬた ぬぐい	くぼみ	モミ 高台	砂 高台	胎 土	焼 成				備 考
													堅緻	良好	やや軟	軟	
126	126	南北	IV-6	(16.6)	(7.5)	(6.2)		○			○	良好			○		縮めなで
127	127	南北	IV-6	16.9	8.9	5.3			○		○	良好		○			縮めなで
128	128	南北	IV-6	16.2	7.8	5.8		○	○		○	良好		○			
129	129	東西	IV-14	16.0	8.9	4.8	○				○	良好		○			
130	130	南北	IV-6	15.4	7.3	5.5	○				○	密		○			
131	131	南北	IV-6	—	8.4	(4.8)	○		○		○	良好			○		
132	132	南北	IV-6	16.6	7.3	5.1		○			○	やや粗		○			
133	133	南北	IV-6	15.9	7.5	5.5					○	良好		○			
134	134	南北	IV-6	16.3	7.5	5.5		○			○	良好		○			
135	135	南北	IV-6	(16.0)	7.0	5.0					○	良好		○			
136	136	南北	IV-6	16.0	8.4	5.0					○	良好		○			
137	137	南北	IV-6	—	7.2	(2.9)		○	○		○	やや粗		○			
138	138	南北	IV-6	—	8.3	(3.0)			○		○	やや粗		○			
139	139	南北	IV-6	—	6.6	(2.4)	○		○		○	良好					
140	140	南北	IV-6	—	7.6	(3.3)		○	○		○	やや粗			○		
141	141	南北	IV-6	14.8	6.7	4.8		○				良好		○			
142	142	南北	IV-6	15.9	7.6	4.5	○		○	○		やや粗		○			縮めなで
143	143	南北	IV-6	14.7	6.8	4.7				○		やや粗		○			縮めなで
144	144	南北	IV-6	15.6	7.2	5.3		○				やや粗		○			
145	145	南北	IV-6	15.0	7.5	4.9				○		良好		○			縮めなで
146	146	南北	IV-6	15.1	6.6	5.2	○		○			良好		○			
147	147	南北	IV-6	16.3	8.0	5.2			○	○		良好		○			
148	148	南北	IV-6	14.2	—	(4.4)						良好		○			
149	149	南北	IV-6	16.2	—	(5.2)						良好		○			
150	150	南北	IV-6	15.9	—	(4.4)						良好		○			
151	151	南北	IV-6	15.4	—	(4.0)						やや粗		○			
152	152	南北	IV-6	—	7.4	(2.2)	○		○	○		良好		○			
153	153	南北	IV-6	—	7.4	(3.0)	○		○	○		良好			○		
154	154	南北	IV-6	—	6.5	(2.6)	○		○	○		良好					
155	155	南北	IV-6	—	6.6	(2.5)	○		○	○		良好		○			
156	156	南北	IV-6	—	6.5	(2.5)	○		○	○		良好		○			
157	157	南北	IV-6	—	7.6	(2.1)	○		○	○		良好		○			
158	158	南北	IV-6	—	6.7	(3.4)	○		○	○		良好		○			
159	159	南北	IV-6	—	7.1	(2.7)	○			○		良好		○			
160	160	南北	IV-6	—	7.1	(2.1)		○				やや粗		○			
161	161	南北	IV-6	—	7.3	(2.8)		○	○	○		良好		○			
162	162	南北	IV-6	—	6.8	(2.1)			○	○		良好		○			
163	163	南北	IV-6	—	7.0	(2.0)	○		○	○		良好		○			
164	164	南北	IV-6	—	7.4	(2.5)			○	○		やや粗		○			
165	165	南北	IV-6	—	6.2	(3.0)				○		良好		○			
166	166	南北	IV-6	—	7.4	(2.6)			○	○		良好		○			
167	167	南北	IV-6	—	6.8	(2.2)			○	○		良好		○			
168	168	南北	IV-6	—	7.2	(2.0)				○		良好		○			
169	169	南北	IV-6	—	7.3	(2.1)			○	○		やや粗		○			
170	170	南北	IV-6	—	6.6	(2.0)			○	○		良好		○			
171	171	南北	IV-6	—	7.0	(2.5)				○		良好		○			
172	172	南北	IV-6	—	6.2	(3.2)			○	○		良好		○			
173	173	南北	IV-6	—	6.5	(3.1)			○	○		良好		○			
174	174	南北	IV-6	—	6.5	(2.0)			○	○		やや粗		○			
175	175	南北	IV-6	—	7.2	(5.0)			○	○		良好		○			
176	176	南北	IV-6	—	7.4	(3.8)			○	○		やや粗		○			
177	177	南北	IV-6	—	7.6	(3.0)			○	○		良好		○			
178	178	南北	IV-6	—	6.5	(2.5)			○	○		良好		○			
179	179	南北	IV-6	—	7.0	(2.1)			○	○		良好		○			
180	180	南北	IV-6	8.4	4.5	2.5	○					やや粗			○		
181	181	東西	IV-14	8.1	3.0	2.5	○					良好		○			
182	182	南北	IV-6	8.2	4.7	2.2	○					やや粗			○		
183	183	南北	IV-6	8.1	4.0	2.0	○					良好					
184	184	南北	IV-6	—	4.8	(1.6)	○					良好		○			
185	185	南北	IV-6	8.0	4.4	1.7	○					良好		○			
186	186	南北	IV-6	8.4	4.5	2.2	○					やや粗		○			縮めなで
187	187	南北	IV-6	8.9	4.4	2.2	○					良好		○			縮めなで
188	188	南北	IV-6	7.8	3.5	2.0	○					良好			○		
189	189	南北	IV-6	8.0	3.0	1.8	○					良好		○			
190	190	南北	IV-6	8.0	4.6	2.2	○					良好		○			
191	191	南北	IV-6	7.8	3.6	1.9	○					良好		○			

土器番号	登録番号	ベルト名	出土層位	口径 ()	底径 ()	器高 ()	殺し	ぬた ぬぐい	くぼみ	モミ 高台	砂 高台	胎 土	焼 成				備 考
													堅緻	良好	やや軟	軟	
192	192	南北	IV-6	7.3	3.0	1.6		○				やや粗		○			締めなで
193	193	南北	IV-6	8.2	3.7	2.0		○				やや粗		○			
194	194	南北	IV-6	8.9	5.0	2.5		○				良好		○			
195	195	南北	IV-6	7.4	2.9	2.1						良好			○		
196	196	南北	IV-6	8.4	3.9	2.6						良好		○			
197	197	南北	IV-6	7.6	3.5	2.2						良好		○			
198	198	南北	IV-6	7.8	3.8	2.2						良好		○			
199	199	南北	IV-6	8.0	3.4	1.7						良好		○			
200	200	南北	IV-6	8.7	4.0	1.8						良好		○			
201	201	南北	IV-6	—	15.0	(8.7)						密		○			
202	202	南北	IV-6	—	(2.5)	—				○		良好		○			
203	203	南北	IV-7	15.6	7.2	5.5	○				○	良好		○			
204	204	南北	IV-7	16.1	7.7	5.0					○	良好		○			
205	205	南北	IV-7	15.4	6.7	5.4				○		良好		○			
206	206	南北	IV-8	17.3	—	(4.6)						良好		○			締めなで
207	207	南北	IV-8	—	7.7	(1.9)					○	良好		○			
208	208	南北	IV-9	15.0	8.1	5.6	○		○		○	良好		○			
209	209	南北	IV-9	15.5	7.2	4.9				○		良好		○			
210	210	南北	V-11	15.6	5.0	5.1			○			良好			○		
211	211	南北	V-11	16.5	7.4	5.5			○		○	良好		○			
212	212	南北	V-11	16.2	8.0	5.2					○	良好		○			
213	213	南北	V-11	16.2	6.8	6.4			○	○		良好			○		
214	214	南北	V-11	16.1	7.0	5.3	○		○	○		良好		○			
215	215	南北	V-11	16.3	8.3	5.2	○		○	○		良好		○			
216	216	南北	V-11	16.7	6.8	5.2	○			○		良好		○			
217	217	南北	V-11	—	7.4	(5.7)	○		○	○		良好		○			
218	218	南北	V-11	15.2	7.7	5.3				○		良好		○			
219	219	南北	V-11	15.5	7.5	5.3			○	○		良好		○			
220	220	南北	V-11	16.3	7.8	5.6			○	○		良好				○	
221	221	東西	V-15	16.1	7.2	5.1			○	○		良好		○			
222	222	南北	V-11	17.1	7.4	5.5			○	○		良好			○		
223	223	南北	V-11	16.7	7.0	5.7			○	○		良好				○	
224	224	南北	V-11	15.1	8.7	5.3			○	○		良好		○			
225	225	南北	V-11	15.2	7.1	5.2			○	○		良好		○			
226	226	南北	V-11	16.0	6.7	5.7				○		良好				○	
227	227	南北	V-11	17.1	7.3	6.0				○		良好		○			
228	228	南北	V-11	17.8	8.0	5.8				○		良好				○	
229	229	南北	V-11	16.7	7.8	5.8				○		良好			○		
230	230	南北	V-11	—	7.6	(4.0)			○	○		良好		○			
231	231	東西	V-15	8.3	3.5	2.4						良好		○			
232	232	南北	V-11	8.9	4.9	2.4						良好		○			
233	233	南北	VI-21-22	16.6	7.4	5.9	○				○	良好		○			
234	234	南北	VI-21-22	16.2	8.2	5.4	○		○		○	良好			○		
235	235	南北	VI-21-22	17.4	8.4	5.2	○		○		○	良好		○			
236	236	南北	VI-21-22	16.6	9.1	4.7			○		○	良好		○			
237	237	南北	VI-21-22	15.9	7.8	5.2				○		良好		○			
238	238	南北	VI-25-26	14.6	7.0	5.3	○				○	良好		○			
239	239	南北	VI-25-26	15.2	7.9	4.8	○			○		良好		○			
240	240	南北	VI-25-26	—	(2.8)	(5.8)						良好		○			
241	241	南北	VI-12-13	17.1	8.2	6.0			○	○		良好			○		
242	242	南北	VI-12-13	16.2	7.1	5.3			○	○		良好			○		
243	243	南北	VI-12-13	16.5	7.2	4.6			○ ^浅	○		良好		○			
244	244		谷部埋土	16.1	7.6	5.2	○		○		○	良好				○	
245	245		谷部埋土	16.6	7.0	5.2	○		○		○	良好				○	
246	246		谷部埋土	16.4	6.7	5.5			○		○	良好				○	
247	247		谷部埋土	16.9	7.9	5.0			○		○	良好				○	
248	248		谷部埋土	15.9	7.7	5.3			○		○	良好				○	
249	249		谷部埋土	8.2	4.2	2.3						良好		○			

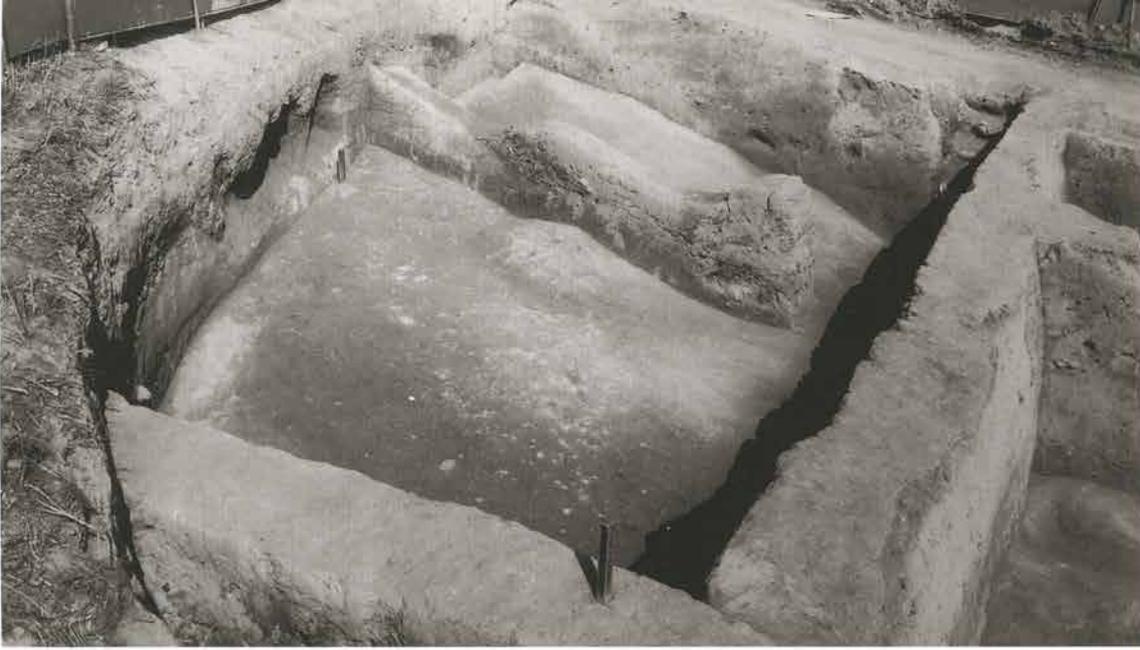
※口径・底径の()は歪みが大い復元径、器高の()は残存高をあらわす。



調査区全景 南東から



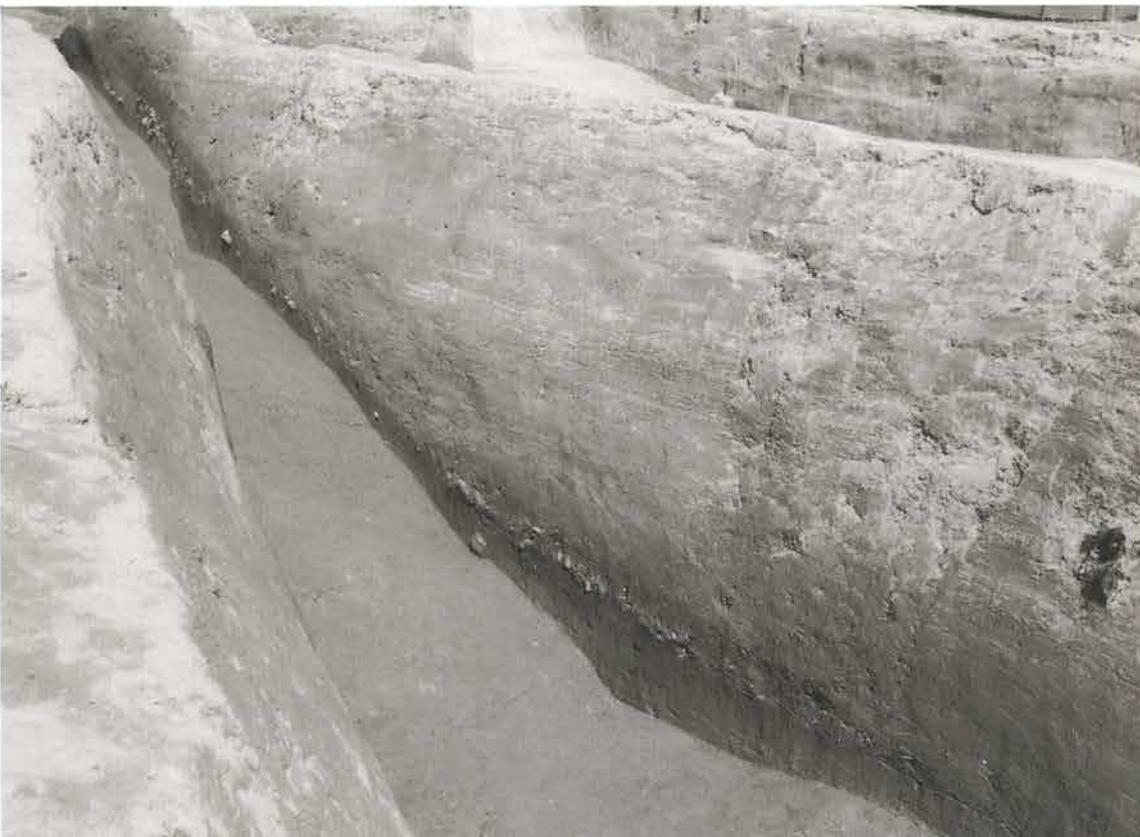
調査区全景 南から



調査区東半部
E-E'ベルト北側
南西から



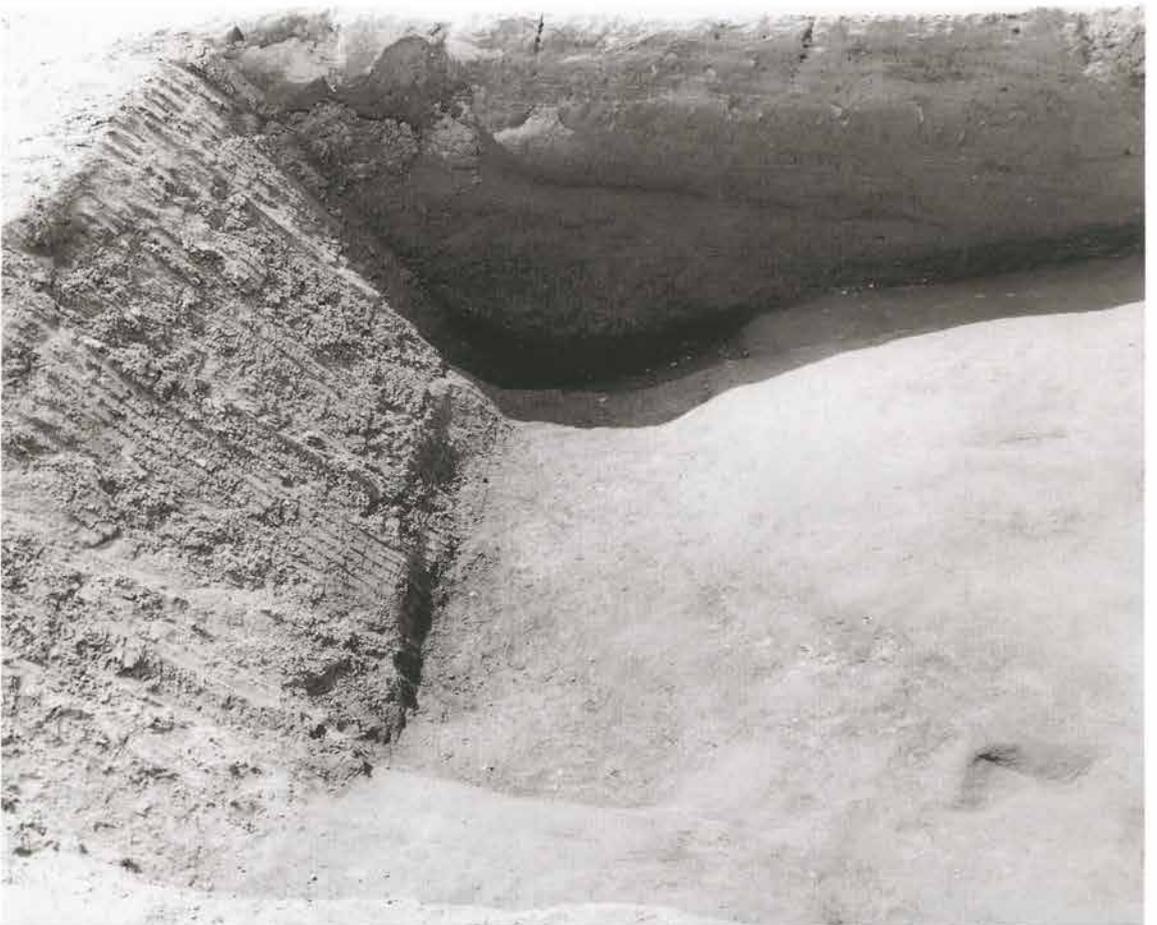
調査区東半部
E-E'ベルト南側
北西から



調査区西半部
南西から



調査区東半部 谷部 南西から

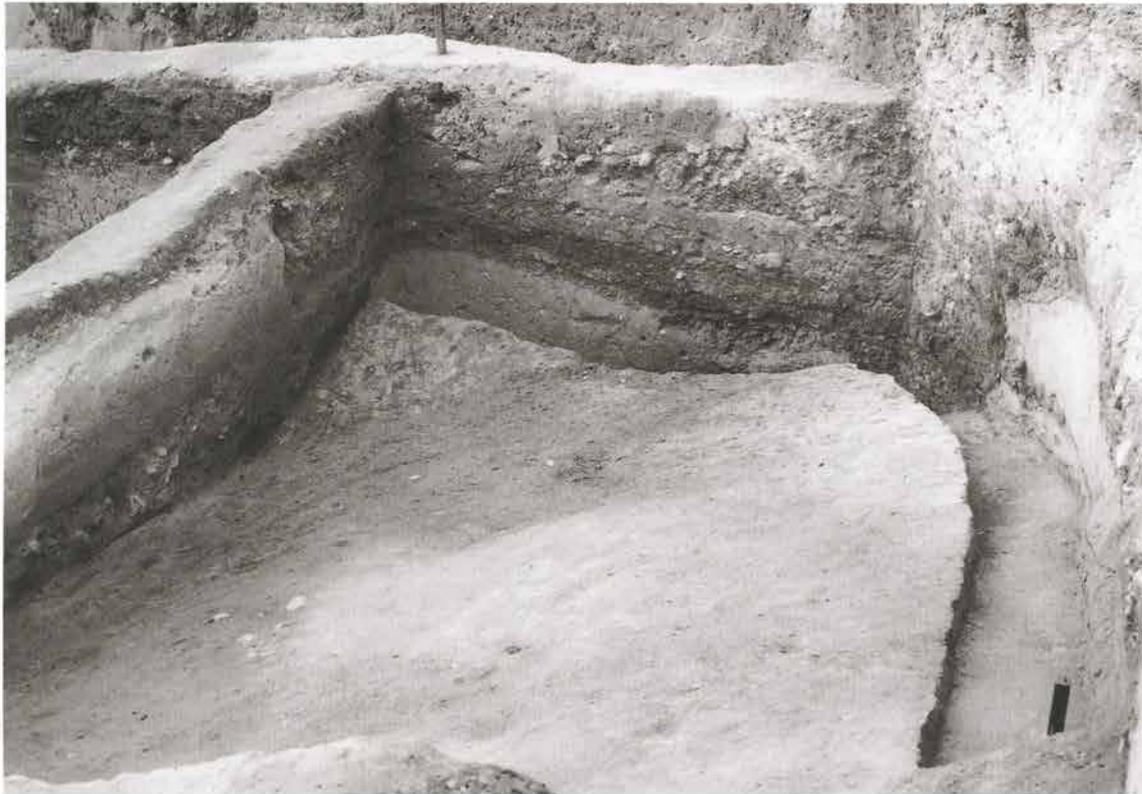


調査区東半部 谷部 東から



図版 4

調査区東半部
北壁(D-D')土層断面
南から



調査区東半部
E-E'ベルト北側
V層上面
北東から

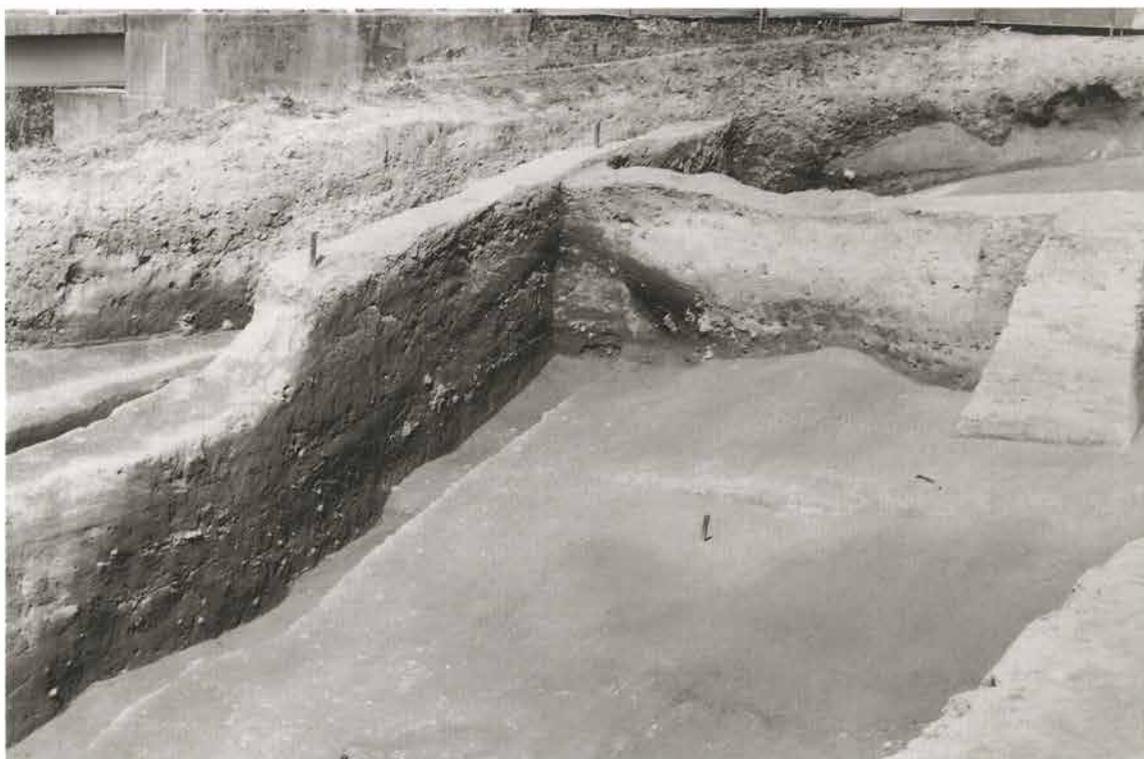


調査区東半部
C-C'ベルト
土層断面
南西から

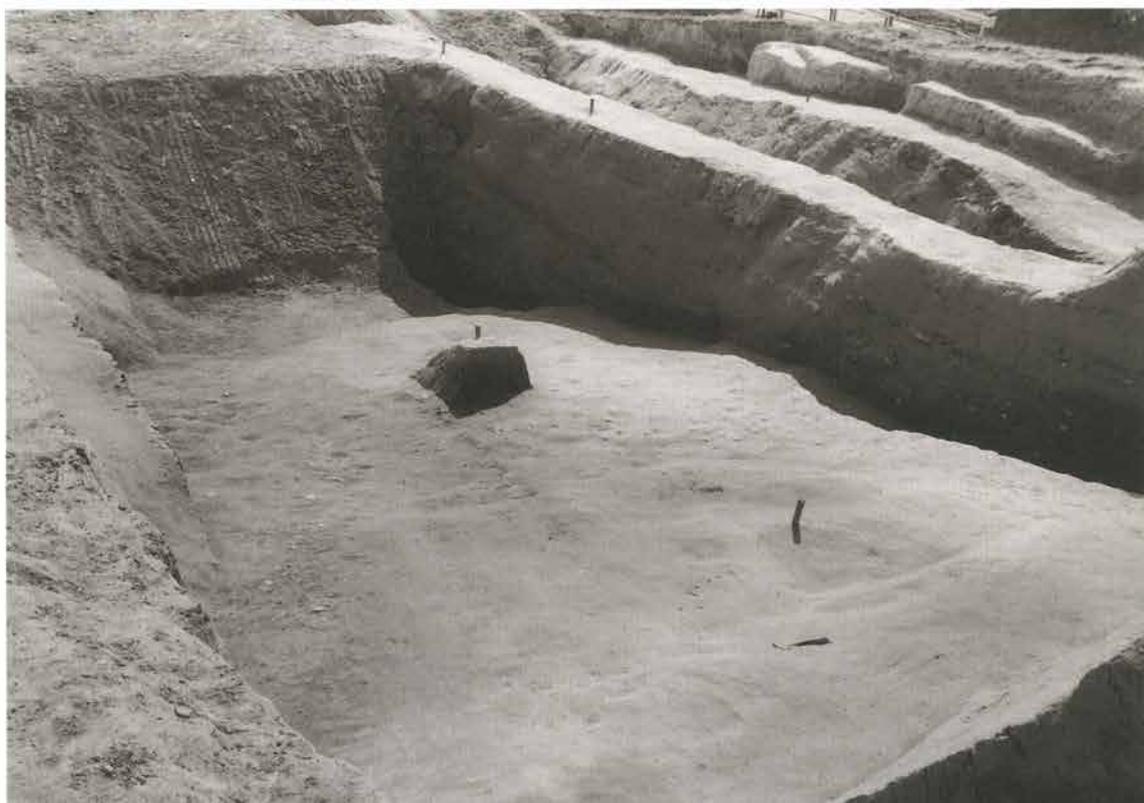
図版5



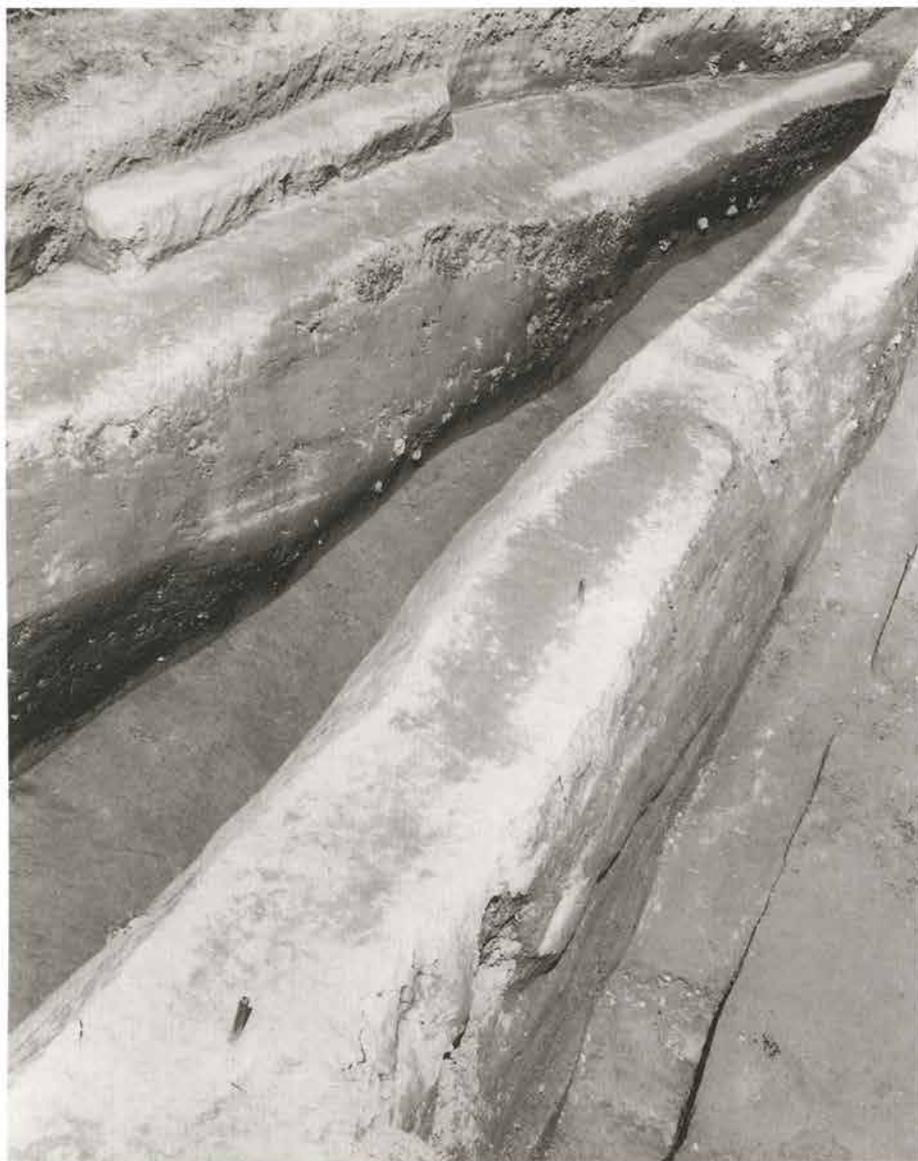
調査区東半部
B—B'ベルト北半
土層断面
東から



調査区東半部
B—B'ベルト
E—E'ベルト
土層断面
南東から



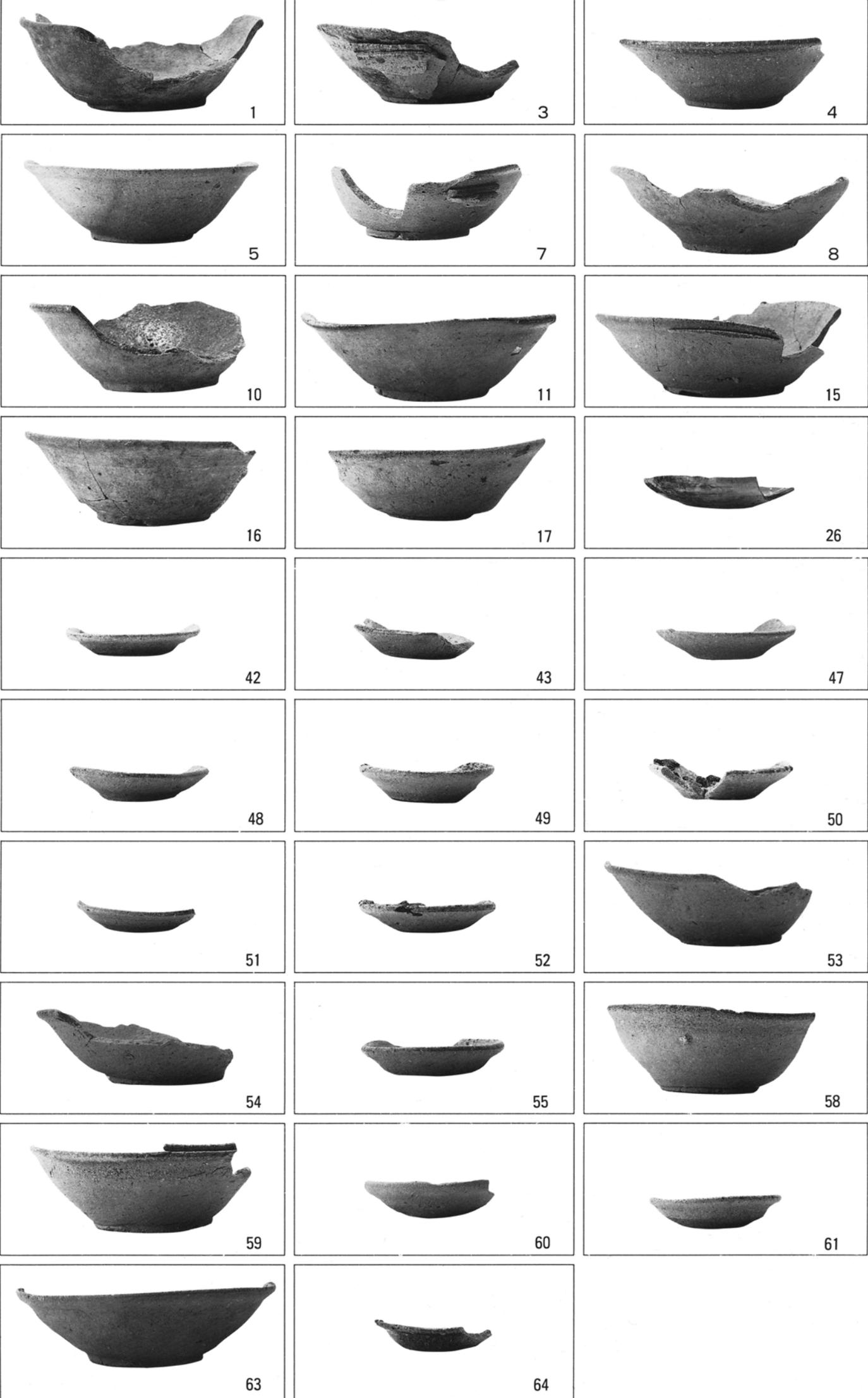
調査区東半部
B—B'ベルト南半
土層断面
北東から

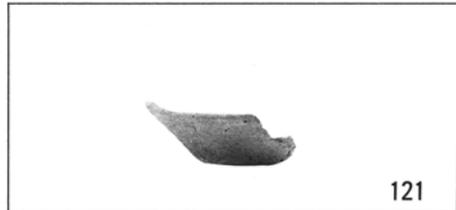
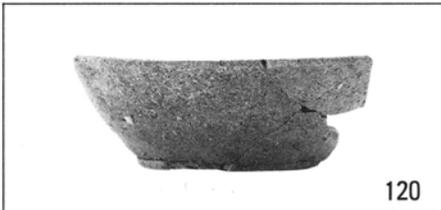
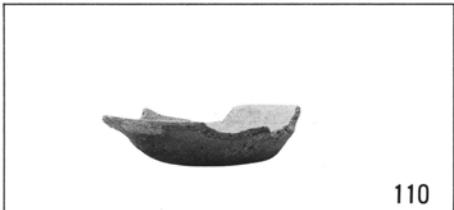
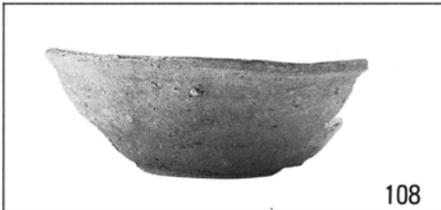
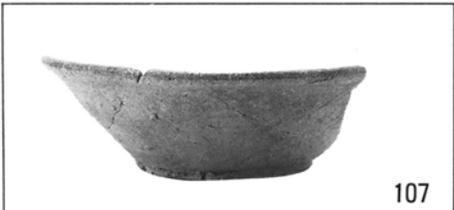
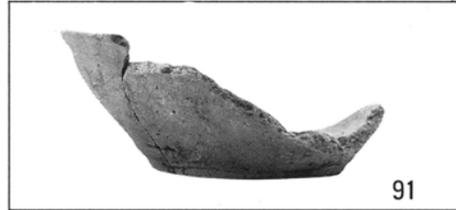
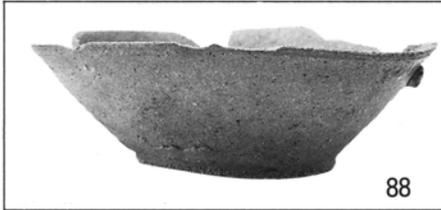
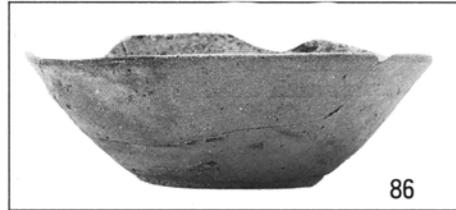
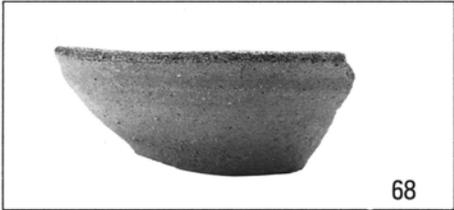


調査区西半部
A-A'ベルト北半
土層断面
南東から



調査区西半部
A-A'ベルト南半
土層断面
南東から



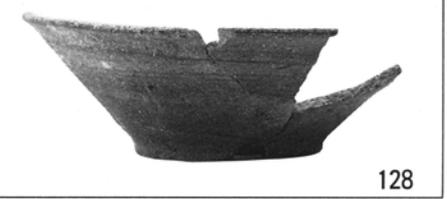




126



127



128



129



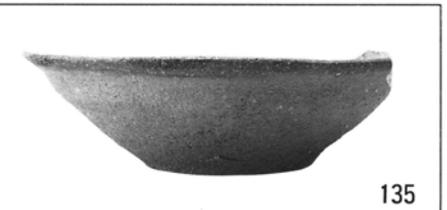
130



133



134



135



136



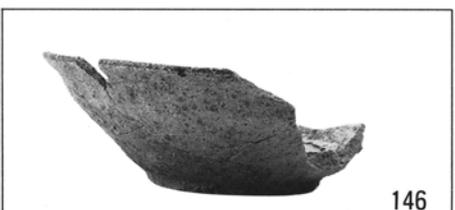
141



142



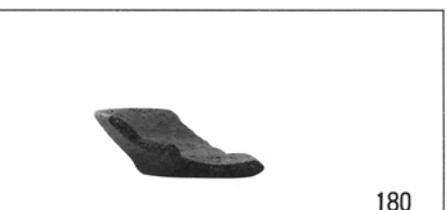
145



146



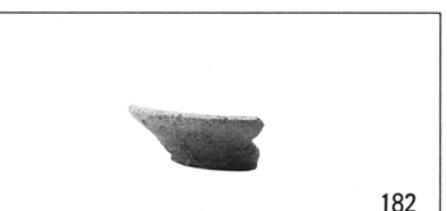
164



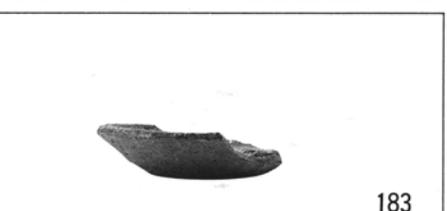
180



181



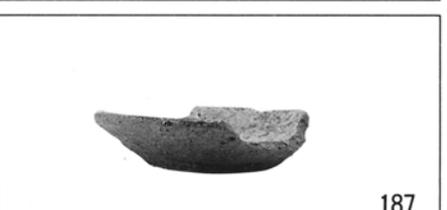
182



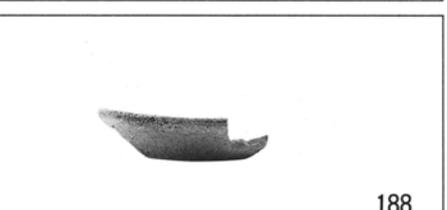
183



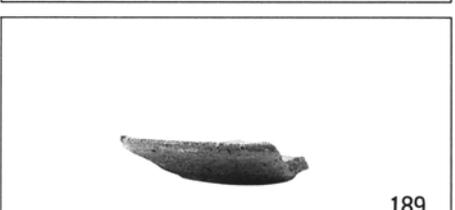
186



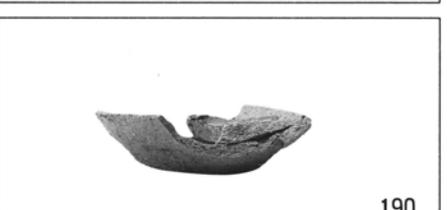
187



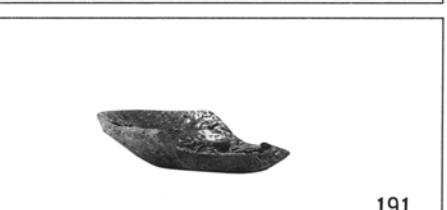
188



189



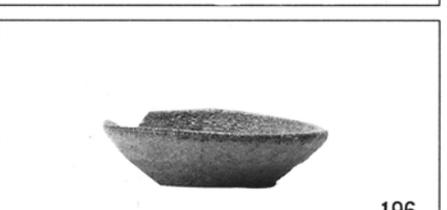
190



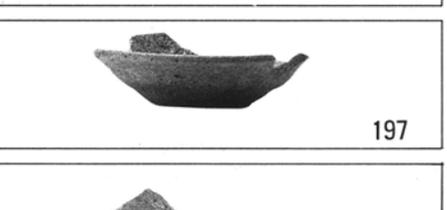
191



192



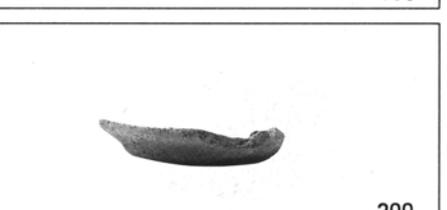
196



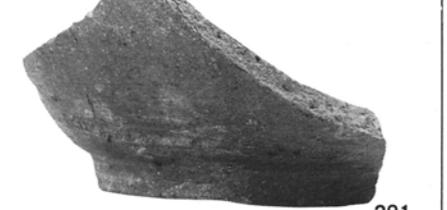
197



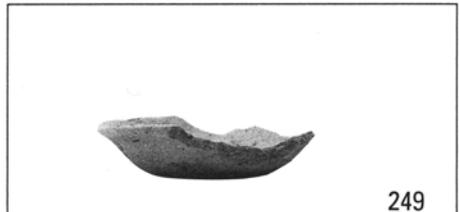
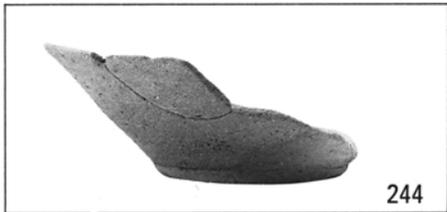
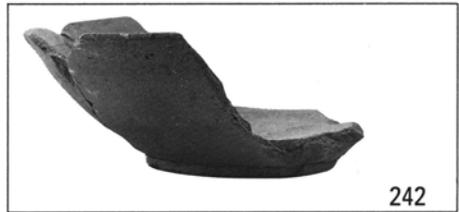
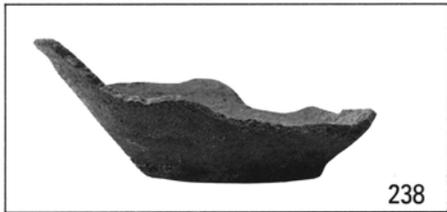
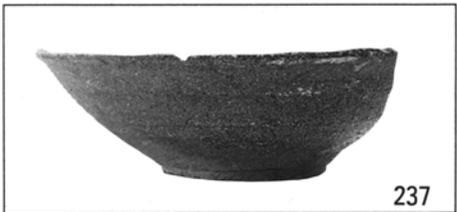
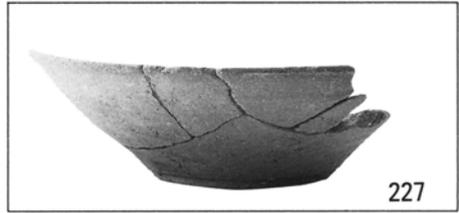
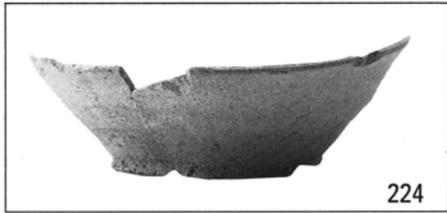
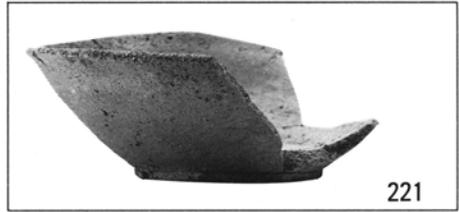
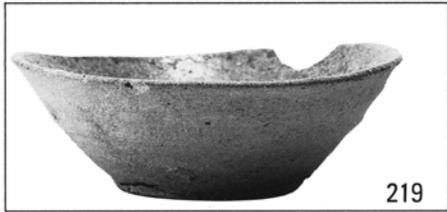
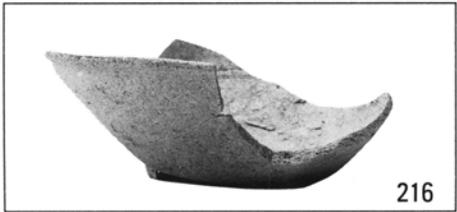
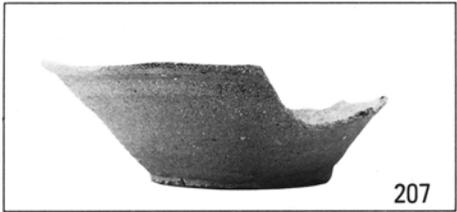
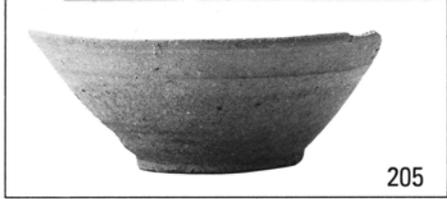
198



200



201



報告書抄録

フリガナ	クロザサ40・89ゴウコヨウセキ クロザサG2ゴウコヨウセキ タチクスコヨウセキ
書名	黒笹40・89号古窯跡 黒笹G2号古窯跡 立楠古窯跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第56集
編著者名	野本欽也・小澤一弘・樋上昇・鬼頭剛・奥村勝信・広岡公夫・黒原秀夫・田中彰子
編集機関	財団法人愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802-24
発行年	西暦1994年3月30日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ゴウコヨウセキ K-40号古窯跡	ニシカモゲンミヨシチヨウオオアザ 西加茂郡三好町大字 クロザサアザネウラ 黒笹字根浦	23521	64032	35°6'31"	137°5'25"	19921014 19930122	2,100	道路建設
ゴウコヨウセキ K-89号古窯跡	"	"	64071	36°6'32"	137°5'25"	19921014 19930122		"
ゴウコヨウセキ K-G-2号古窯跡	ニシカモゲンミヨシチヨウオオアザ 西加茂郡三好町大字 クロザサアザマルネ 黒笹字丸根124-1	"	64085	35°7'46"	137°6'20"	19920601 19921030	1,300	内陸用地造成
タチクスコヨウセキ 立楠古窯跡	チタダンミハマチヨウオオアザフツ 知多郡美浜町大字布土	23446	42124 42125	34°48'12"	136°53'7"	1993107 1993312	600	道路拡幅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
K-40号古窯跡	古窯跡	奈良 平安	窯体1	須恵器	
K-89号古窯跡	"	平安	"	灰釉陶器 緑釉陶器：素地	
K-G-2号古窯跡	"	鎌倉	"	灰釉系陶器	粘土溜施設
立楠古窯跡	"	"		"	灰原のみ

(財)愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第56集

黒笹40・89号古窯跡

黒笹G 2号古窯跡

立楠古窯跡

1994年3月30日

編集・発行 財団法人愛知県埋蔵文化財センター

印刷 日本印刷株式会社
